

裏窓

あぶちっく忠臣蔵特集



新年特大号

裏窓

1

定価150円
IBM 1807



裏窓臨時増刊号をお買い洩しの方はぜひこの機会に!!

最新刊目下発売中!!

ムード

増刊号 第4集

我が「性」に追われる少女達……高橋鉄
性の健康相談室……(回答) 神田駿一
避妊に失敗しない法青木尚雄・夫婦のプレイは飯田初男

情炎五人女(物語テスト)
雪肌武者巴御前 村松昌久良
妖夢御殿(千姫) 堀垣史生
もどかしい夜おはん 狭山 温
蒼い天井(奥村五百子) 笹本 寅
身を灼く女(山田順子) 原 比露志

男性不感症……神田駿一
丸の内ガールの秘密 五 島 勉
おもて 下 着 案 内 うらべまこと
セマリ派女優を裸にする 編集部
— グラマーぶりを拝見 —

よるもひるも

増刊号 第1集

東京の秘密クラブ……五 島 勉
テストされるあなたのSEX……高橋 鉄
女人多淫のメカニズム……神田駿一

現代人の性医学
録音 東京のヘソの穴には……編集部

女性に果して不感症か……竹内兵衛
短小に悩む青年たち……西 島 実
インポテンツの治療法……金子栄寿
早漏はここから起る……寺田文次郎
自宅で行なえる
性力増強法……橋爪横櫛子

座談会裏話カツラ漫談

(出席者) 岡田甫・平井利市・谷村六介

ちよつと変った家庭薬……愛山 久
こんなアンチヨクな家庭薬が手近にあるのを御存知ですか
ロマグレ 養生訓……椿 八郎
一剣を磨くに汲々として武力の誇りをなぞりにする勿れ
四十代の青信号……橋爪横櫛子
メ・ハ・マの順を追って来る老化現象は病気の一種です
女盛りは四十から……目白俊夫
豊かな愛情に包まれた新しい夫婦生活は更年期から始まる
中年夫婦・円満カタログ……宮津節也
尻軽夫婦達に爪のアカでも磨いて飲みたい理想のカップル

よるとひる

増刊号 第2集

ある不感症の
愛情とクリトリス
妻との対話……西島 実
不感症はある……神田駿一
感 夫 婦 の 感 覚 を
解剖する……編集部

現代女のナキドコロ
ここが魅力の急所……野高一作
男が女に求めるものは
うらべ まこと

現代 千人斬り紳士録……谷 作蔵
男と女とそしてわたし 志波葉子
性の健康相談室
(回答) 金子栄寿 太田典礼

ムード

増刊号 第3集

リポート 熱すぎる妻……編集部
性を奪われた婦人科医……広畑省二
昼のなかった夫の話……長野数馬
姦通された夫の慰謝料……河合憲一
炎に憑かれた情痴……三浦真吾
情人を麻薬で腐にした女……別府秋彦

千人斬り女豪列伝……谷 作蔵
性的傾向テスト……編集部
女であることの悩み……杉靖三郎

オナニーは無害か?……松岡克衛
性の特効薬はどこにあるか……阿那 茂利男
— 特効薬の種類 —
阿那 茂利男
定価 一三〇円
送料(各冊) 一八円



東京都中野区江古田1の2302
発行所 久保書店 振替・東京10756

上記以外のマンガ・グラビア等満載



不意打ち

(外誌より)

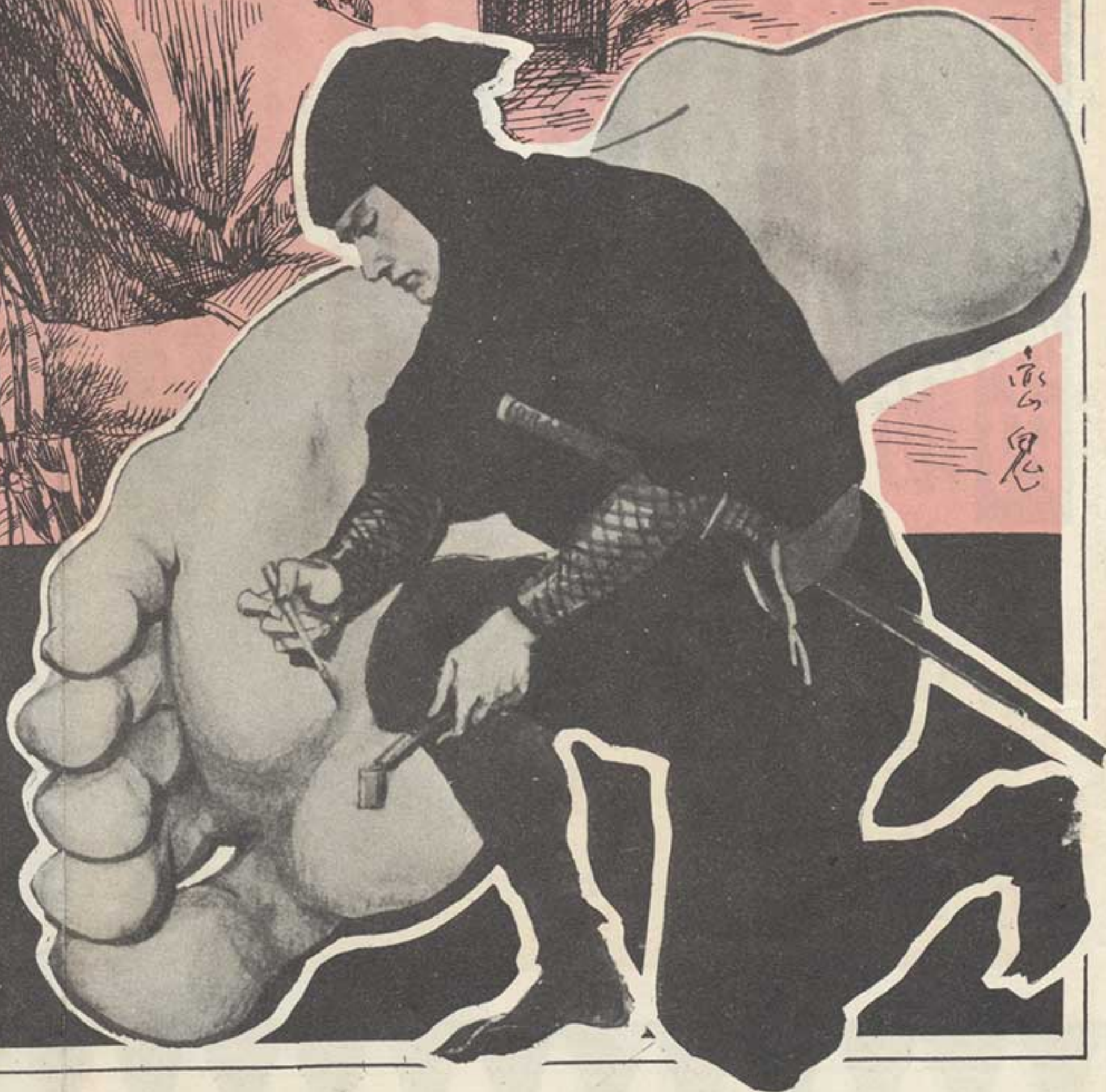
妖説絵図まんじ



病い故に同志にも加われず世を捨てた労咳浪人。
よそながらの恋人を邪恋の嵐に奪われて悪鬼と
なった一夜、年増女の情熱は火となって……
(本文97頁)

あしのうら源内

夜着からはみ出た白い小さな足の裏をねぶり回
し吸い尽くした揚句、黒々と筆を走らせて闇に
消えて行く奇妙な盗賊は、ある夜……
(本文 340頁)





裏窓・新年特大号・目次

表紙	中島喜美	表紙裏	(不意打ち) 外誌より
口絵	妖説女忠臣蔵	文・楨 剣吾	(11)
絵物語		画・中島喜美	

色頁	阿撫的赤穂囃子	法界寺	嘉
	美しき奴隷ジェリスナア	海部陽三	(275)(19)

あぶちっく忠臣蔵特集

闇に生さる義士	島本春雄	(28)
元禄一筋道	橋爪彦七	(46)
黄泉路の影	宇治川 龍	(70)
投籠燈秘聞	松井籟子	(82)
妖説絵図まんじ	窪村 弘	(97)
大不忠者	鷹野二十三	(125)
元禄匍匐妄曆	真野 麗	(134)
雪嵐お美代さんげ	伊能 孝	(160)
血まみれ観音像	飯田豊吉	(172)
吉良の贗首	稲垣史生	(222)
元禄乱れ小袖	黒木 忍	(246)
二人の内蔵助	小山竜太郎	(290)
あしのうら源内	岬 洋之助	(340)

あぶ・さ すべんす	こんばんわ	ア	鳴海玄吉	(59)	
探訪記者	墓	屋	敷	神行京一	(112)
ノート					
連載	狐	(きつねび)	灯	松井籟子	(148)
リラス					
あぶ・さ すべんす	白	芋	虫	否笠一郎	(213)
すべんす					
SS秘密クラブ					
SS秘密クラブ					
横山正克					
夜話					

逢魔娘

島本春雄

(196)

(264)

(213)

(148)

(112)

(59)

隠密覚書	逢魔娘	島本春雄	(196)
------	-----	------	-------

実話	仕掛銃	ワトスン・独田	(234)
愛欲	パチンコ地獄	大河内常平	(280)
海秘	リユカ大王の宝庫	藤 琴也	(304)
無頼	痴情佛心	山田重義	(328)
多恨	浪の記	伏見和夫	(320)
青年	放浪の記	阿部すけはる	(354)
あぶ・さ	音響魔		

連戦時代	刺青弁天	中林節三	(372)
------	------	------	-------

リュカ大王の宝庫

満帆に風を受けてひた走るパワ号は、突如海賊船に襲われた。彼らの狙う獲物は金銀宝玉だけではなく。白昼の甲板に引き出された貴婦人達はどうなる？（本文 304頁）



吉良邸に囚われたおつやと女掬摸お高の運命は？

藏臣忠女説妖

榎 剣吾
画 中島花美



①「フン、これが吉良の邸か、おたいそうな構えをしてやがって、どうせ強欲つばりの上野介がどえらく賄賂を取った金で造りかえたんだらう。同じひとの物を取るんだって、こちとらと違って身分を利用し、さんざっぱら厭味をいって向うから出させて高慢チキに取上げたんだ。そういえば浅野家は気の毒だと評判だ。こう寒くなつては家中の人の中には路頭に迷うものも居るだらうよ。ベッ」

今にも白いものが落ちて来そうな夕方、本所松坂町の吉良邸の豪壮な門を見つめて、こういつて唾を吐いた女が居る。

女掬摸のお高だ。浅野に肩を持つのではない。弱い者に肩を持ちたくなるお高は江戸の女だった。

その時――

門から武士が四五人出て来た。ジロリとお高をウロン奥そうに見つめて行き過ぎた。

「フン、賄賂に飼われている単侍め！お高さんを見た目はまるで色気違いだ。どうせ酒を呑むか女を買いに行くんだらう。どれ、一つお高さんがチュツと単泣きして懷を抜いて驚かしてやるか」

お高はニヤリとすると、侍達の後をつけた。

と、侍達の歩く先に、一人の娘が急ぎ足で通り過ぎた。

「おや、あれは邸に出入りしているつやではないか。恰度いい、連れてって酒の酌でもさせようではないか」



② 急ぎ足で行く娘を呼び止めようとした侍を一人が制していった。

「待て！ あの女には不審があるのだ。ともかくつけて見よう！」

つやはそんなことはしらず先を急いだ。吉良邸に稲荷ずしや菓子屋に出入りして、吉良邸の内部の様子を探っていたのだ。上野介を討とうとする赤穂浪人に強制されたのではなく、つやは恋の為に命を投げ出していた稲荷社がある。そこにつやは駆け込んだ。



③ つやは後を振り向かず鳥居をくぐった。と、社の蔭から男が姿を現した。町人姿だが目が鋭い男だった。
「お前さん、これ！」 つやは懐から出した物を男に手渡した
「有難い、まさかあやしまれることはなかったろうな」
「大丈夫ですよ。吉良家のお侍達はこの頃は飽きて、邸の中でお酒を吞んだりバクチを打ったりしてるんです」「あつ」
その二人をぐるりと、吉良家の侍達が取り巻いた。
「フン、この寒いのに逢曳か」
つやは、男の腰に手を廻して、わな／＼とふるえだした。
そのつやの手をはなし、抜打ちの白刃を躲して、だつと円陣を崩した男は、素早い動作で侍達のうしろにかくれていたお高の前に躍り出した。お高は娘の危難を見て逃げる男に怒りを感じてその男に体当りを喰わせた。途端にお高の指は、男の懐からつやから受取ったものを握り取っていた。



④ 男は吃驚したが、立直ると、そのままつやを取り巻いている侍達をチラと振り返って姿を消した。

お高も、吉良家の侍達に捕っては面倒と思つて、男と違った方角へ駆け抜けた。
「逃がしたな。しかしこの娘を窮命すればあの男の素姓もしれよう」

侍達はふるえているつやを中に歩き出した。



⑤侍達はつやを拉致して行く。行先は近くの料理屋だった。

女中が酒の支度を置くと、男達の気負った様子に、チラと真中に坐らせられているつやを盗み見て座敷を出ていった。

「おい、何を男に渡したのだ」

つやは顔も上げずに俯つ向いていた。すでに恐怖で顔色はなかった。

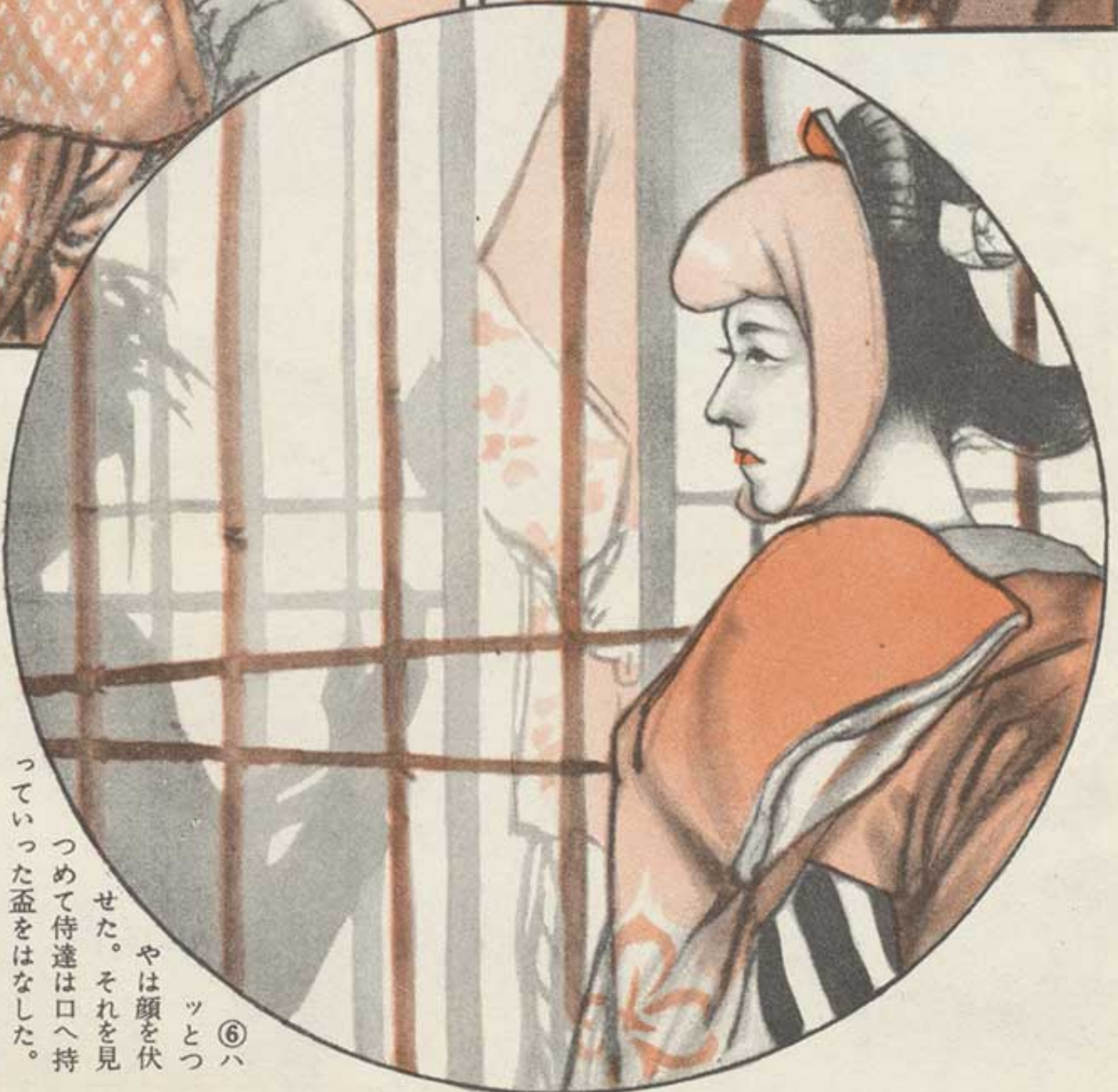
「色文を渡したのか」

一人が、ニヤリと好色な目でつやを見て揶揄するようにいった。

「そ、そうです」

つやがチラと顔を上げていった。

「そうではあるまい。そちは密かに邸の様子を探つてあの男に知らせたのだろう。それを頼んだ男は誰だ。赤穂の浪人だろう。白状せい。すればそちは許してやる」



「尊公はこのつやがお邸の様子を赤穂の浪人に通じていたと申すのだな」

「フ、貴公は何やら女の肩を持つとうとしているが、女に惚れたのか。女がただの物売りの目的でお邸へお出入していたかどうかはこの女の様子を見ればわかるだろう。そんなふやけた貴公達だからそちらの殿が特に上杉家の者を呼んで万一に備えさせるのだ——フフ、女、どうだ、白状したくなるように素っ裸にして酒の肴にしてくれよう」

丸窓から中を覗いていたお高は、思わず目を反むけた。

⑥ハ

ツとつ

やは顔を伏

せた。それを見

つめて侍達は口へ持

っていった盃をはなした。



⑦翌日、お高はまた吉良邸の近くをうろくした。と、岡っ引の仁造がツと寄って来て袖を捕らえた。
「おいお高。昨夜男から掏り取った物を出せ」
仁造はそれを取戻したら吉良家から五兩貰える筈だった。お高は仁造を軽蔑したように笑った。

⑧「女のつけ文なんか手に入れてどうしようってんだい。どうせ吉良から頼まれたんだろうが」
「女からの付文だって？」仁造は驚いた顔をした
「フン、仁造親分の目も狂ったね。いやさ臍腑も腐ったんだろう。もしもだよ。あの娘があの男に渡した物が大事なものだとして、それを盗み、それを盗んだ物に頼まれたからって吉良家の為にと取戻そうとこんな寒い晩に網を張ってるなんざあ気のきいた江戸っ子のするもんじやアないやね」
「——成程、それもそうだ」
「親分。感心ついでにこれを頼まれておくれでないか。付文だよ。これを持って行ってどうせ邸で白状せいか何とか苛められている娘さんを救ってやってくれないか。女掏摸から取上げた物でとのぼせているお侍に渡してくればいい」



⑨ 仁造と別れて、お高はギクリとした。男の目がじっと睨んでいるのだ。お高はチエツと歩き出した。男の影がスーッと寄って来た。昨夜お高から掏られた男だ。
「おい、昨夜の品を返して貰おう、お前には用のない品だ」真剣な目の色だった。
「赤穂のご浪人さんなんですか？」
ギョツとしたように身構えた。
「ホホホホ、吃驚したところを見ると図星なんです。ご心配は御無用。人様の懐を掏ってもお高は江戸っ子なんです。江戸っ子は皆んな赤穂のご浪人が吉良様を討ち取って恨らみを呑んでご切腹した殿様の仇を取るのを望んでいるんです」



⑩「かたじけない。では返してくれるのだな
「ご浪人さん。お礼をいわれて文句をつくのは変だけどいいますよ。お高もご浪人さん達には同情はしていますのさ。しかし、昨夜のあなたの卑怯ぶりは厭なんです。どうせ大事の為には娘の一人や二人と思ってるんでしょがね。何故あの娘さんを吉良の侍に捕まらしたままお一人で逃げました。何故娘さんを助けようとしなかったんです。それがお高には気に喰わないんだ。そうじゃアないか」
「お高どの。しかし我々亡君の仇を討つ前には何事も堪え忍ばねばならぬのだ。拙者の心中もとくと察して昨夜の品返して下さらぬか

「厭だ、お断りしましょう。あの娘は亡君もへチマもありやアしないんだ。どっちから手を出したか口説いたか知らないが、あの娘さんはお前さんに惚れたんだ。惚れた男の為には見つければ殺されるのを覚悟で吉良郎を探ったんじやアないか。それを利用するだけ利用して置いて、何事も堪え忍ばねばならぬのだ、なんて済ましていられる男があたしや憎らしいんだ」
「お高どの！」
「ご浪人さん、これは返しましょう。お前さんの気持もわかる。しかしねお高は女なんだあの娘を救い出すといっておくんなさい」



⑪その頃、つやはつれ込まれた吉良郎の一室で、男達に責め立てられていた「男に渡したのは何でもない文だとい張るのだな。まあそのうち仁造がその文を持ってくればそちのいうことが本当かどうかわかるのだ。もしそれが御郎の様子を書き留めたものだったら容赦はせぬぞ。その時は裸に剥いで庭木に縛りつけて寒気に曝してやる」つやは後手に括られた体を俯向けた。

そこへ仁造が顔を出した。「へい、お高のやつから取り戻しました。お改め下さいまし」一人が受取った。無言でそれを開いて読み下した。その間、仁造は畏つて後手に縛られているつやを気の毒そうに見つめて息を殺していた。「たわけ！これはあの女掏摸が細工をしたのだ。騙される俺だと思ふか！」仁造はハッと首をちぢめた。

⑫その晩は寒いも道理、白いものが夜空を舞っていた。仁造の家ではお高が神妙に坐っていた。

「親分さん、とうく大雪になりましたよ。まさかおつやさんは裸にされてこの雪に庭木へ括られてはいないでしょうねえ」
「しかし吉良の侍達は気負っていたからな。子供騙しをしやがってといきり立ったから恐れ」仁造はまさかと思うが、つやの身を考えると無口になって冷酒を茶碗で呷った。

「ね、親分、これもあたしが余計なことをしたからなんです。このお高を縛って吉良家へ突き出しておくんなさい」

「何だって？　そうしてどうするんだ？」

「考えたって始まらないや。ね。とにかくお高を突き出しておくんなさい。まさかすぐ殺しやアしないでしょう。そしたら何とかまたあのおつやさんを助ける工夫がありやアしないかと思うんです」

「お高、おめえいつそんな立派な女になった？」

「親分さん。その言葉だけでお高は嬉しいんです。幸いうまくいった時はお高はきつと……」

「お高、おめえは……」

「親分さん、親分さんはいつもお高を立派な女にしたいと人様の懐を狙うあたしを暖い目で見ていてくれました。お高は嬉しいんです。いつかきつとこの恩返しはしようと、それにおつやさんの話をきくとお高も一生でいっぺん男の情が欲しくなったんです」
「よしお高、おつやさんを救ったら夫婦になるぜ」



⑬仁造はお高を吉良邸へ引っ立てていった。

「へい、これがあの時の女拘摸でございます。やっと捕えましてんでつれて来ました」
「ほう、なか／＼の美人だな。よし、我々を白痴扱いにした女だ。存分に愉しみながら詮議してやろう」

「あつしはこれで」

仁造はお高を見て俯向いたまま立上った。

「おい、女拘摸、顔を上げろ」
お高は不敵に顔を上げた。
「フン、いい面魂だ。我々を白痴扱いにした酬いは覚悟しているんだろうな」

「何を託を並べるんだい。何をされたって音を上げるお高さんじゃアないんだよ。揃いも揃って唐変木が揃ってる」

「図に乗って音を上げるな。つやを赤穂の間者と見抜いているのだ。そのつやを偽筆の文で救い出そうとした貴様も赤穂の犬だろ。素直に白状せぬと痛い目を見るぞ」
「フン、遠慮なく音を出さしたらいい！」

「こいつ、今夜は邸に茶会があるから遠慮するが、明日はつやと一緒に雪責めにしてくれる。それまで括ってつやと並べておけ」

⑭ お高は柱につやといっしょに後手に縛られていた。二人は着物を脱がされて長襦袢一枚にされていた。「明日は素っ裸にしてやるが今夜はその恰好で寒さに堪えて見るのだな」と外は白い雪が舞っているというのにそんな辛い恰好にされたのだった。

そのうち、男達は酒に酔い痴れ、一人寝に立ち二人立ち去って、がらんとした火の消えた部屋の柱にお高とつやは括られていた。二人は暖を取るためにひしと後手の体を寄せ合っていた。つやは長くそうされていたのか、気を失ったようにがっくりと弱っていた。お高は縄を解こうとしたが無駄だった。お高は絶望に負けそうだった。「救えない！ どうしよう——」



⑮ 夜明けに近いのか、二人は寒気に凍えそうだった。邸内が騒がしくなった

「火事だ！ おつやさん！」

お高は、火事だという叫び声を聞いて、ぐったりしているつやの体に後手の体をぶっつけた。つやはハッとそれで目を開くと、パッと今迄ぐったり寒気に死にそうだった体を生々とさせた。火事ではないらしいが、騒ぎは愈々ひどくなり、白刃のぶつかる音がその中に混っていた。

「ああ——とうく——お高さん！」

つやは歓喜に不自由な体をひしとお高に寄せた。「そうか、赤穂のご浪人達の討入りなんですわね」「あつ、あなたは本望なんだ。でもここから逃さなくては——ああ誰か、誰か来て下さい！」



「赤穂の浪人、亡君の仇を報じに討入ったり！我と思わん者はお出合いなさい！」

その声と一緒にお高とつやが居る部屋の襖が蹴倒されてぬつと槍を構えて入って来た男。

「ああ、助けて下さい！」

お高は絶叫した。あの男だ！ あの男だ！槍を構えて、じつと見凝めた男は、ブツリ、とお高とつやの縄を切った。わっとなつやは泣き出した。その耳に恋しい男は声を投げつけた。

「女子供は怪我のないよう避けておれ！」

お高は泣き伏すつやをひしと抱きしめた。やがて誰か吹鳴すのか呼子が響いて来た。(完)



犬の檻に投げ込まれた女

犬目明しのために犬檻の中に投げこまれた悲運の娘は果してどうなる？本文28頁「闇に生きる義士」参照



奈落から見た――

★あぶちつく・ちゅうしんぐら★

阿撫的赤穂囃子

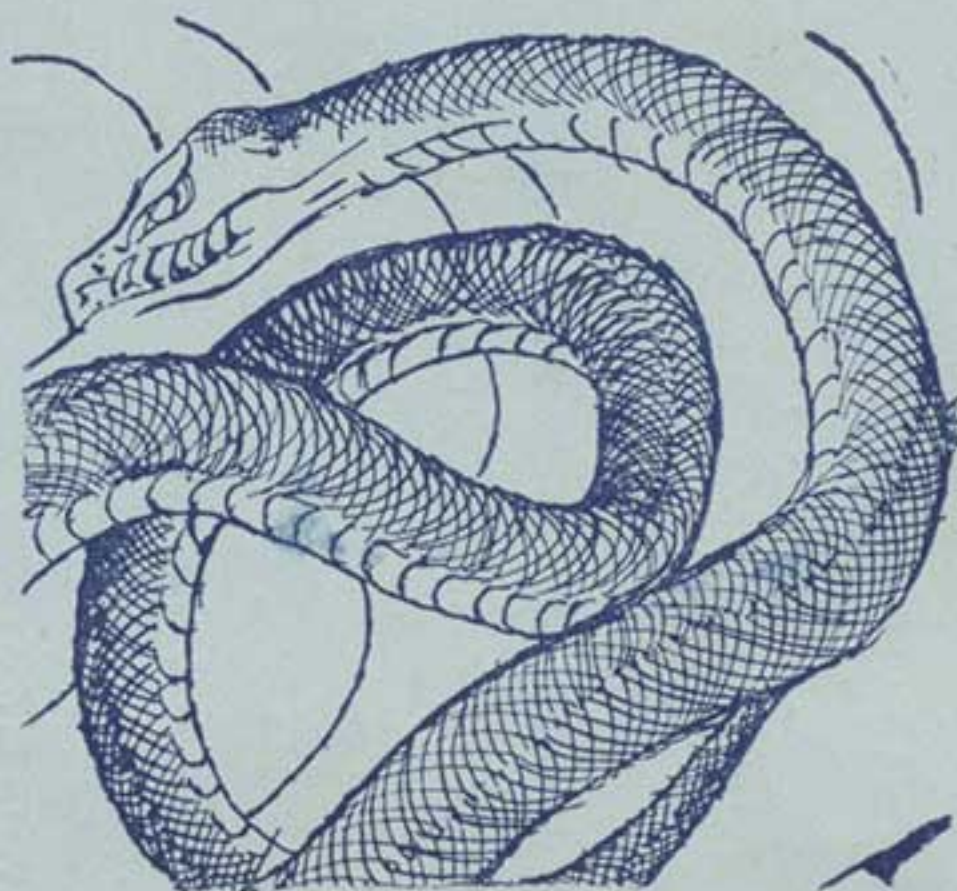
法界寺 嘉

昔の錦絵にこんな絵がある。

白地に荒いべんけい縞の浴衣を着た中年増が、長い髪を一つにたばねた結び髪でひさしの髪は豊かに短く波打ち、びんの毛は顔にかかり、それを一と筋口にくわえて目を半眼に見開いて苦悶の表情を表している。その肩さきから乳のあたりまでざっくりと割れて血がふき出しながら倒れもやらず立ったまま、両手で虚空をつかんで悶えて

いるのだ。その上背中から鉄砲で打ちぬかれ、白地の浴衣は真赤に血に染まって紅蓮の地獄のようにもみえる。まさに落入る寸前で、口からもたららと血がしたたって、凄惨な図柄は責め絵以上だ。

これは河竹黙阿弥の「女定九郎」の最期をえがいたものだが、今はあまりやらない。明治時代に沢村源之助が方々の小芝居でよく演じている。



勿論、黙阿弥の作だから、元禄とはほど遠い、慶応元年の作で「忠臣蔵後日建前」という題である。

これは「仮名手本忠臣蔵」の五段目の趣向を生かしたもので、鶴屋南北の草双紙を脚色して特に二幕つけ加えたものらしい。

斧定九郎の女房のお市というのが主人公でこれが女定九郎というわけ。まむしのお市と異名がある毒婦の芝



居を忠臣蔵の人物にひっかけて作ったともいえるだろう。幕末、こうした毒婦ものがはやつたらしいが、あまりすごい毒婦ではなく、「悪に強きは善にもと……」という形である。

最後に肩に一太刀うけた上に、自ら鉄砲の引金を足で引いて死ぬのである。大体赤穂浪士の討入りを芝居にしたものは百以上もあるし、講談や小説を加えたらたいした数だろう。

一番早くこの事件を取り入れたのは元禄十六年二月十六日から、江戸中村座でやった「曙會我夜討」だという。

何しろ義士が諸侯に預けられて切腹したのが十六年二月四日で、それから僅か十二日で舞台にかけたのだから、現在のジャーナリ屋さん顔まけといったところだ。

この狂言は曾我の夜討にカムフラージュして赤穂浪士を扱ったのだが、僅か三日で中止したのは、これも又現在と同じく、その筋とやらが、神経を病む人が多かったものとみえる。

次にあらわれたのは、近松門左衛門

の「碁盤太平記」で、これがまずまず、赤穂義士事件を脚色した最初のもといえるのだろう。

しかしどうも討入などというものはオイロケに乏しいのか、この浄瑠璃も袴に袴といった感じのかたいもので、山科に閑居している大星由良之助が、下男岡平を吉良方へ入れて邸内の模様をさぐらせ、碁にことよせて、その白黒の石で敵の邸内の模様を会得するといった筋である。

これはいまだに芝居として上演されることもある。

何しろこれが皮切りで、爾来昭和の今日まで、大抵の作家が手がけているのは、よっぽど大衆に気に入られる要素を持っているらしい。近松門左衛門からはじまって、紀海音、竹田出雲、近松半二、並木五瓶、桜田治助、鶴屋南北、瀬川如皐、河竹黙阿弥、福地桜痴等、昔の狂言作者は一度は書いているし、黙阿弥のものだけでも七つ以上ある。

題が又、雑誌の編集者以上の苦心だ

ったろうと思うが、一つ一つ違っているのだからたいしたものだ。

「粧武者いろは合戦」というのがあるかと思うと、「大矢数四十七本」「通矢四十七本」「扇矢数四十七本」などとややこしい。

「いろは」という字のついている外題もなかなか多く、「泰平いろは行列」「紅楓いろは文庫」「新舞台いろは書初」「東駅いろは日記」……まだまだあるがやめておこう。

義士の数が四十七人だったことが、いろはの仮名の数と同じだったからもあるが、この仮名を、「いろはにはへと」で区切って、次の行へ「ちりぬるをわか」とつづけ、又次の行へ「よたれそつねな」と、七字ずつ行をかえて書いていくと、その一番下の字が「と」なくてしす」となる。

つまり、「科なくて死す」という訳で偶然の一致にしては面白い。

まさかはじめからそれをあてこんで大石内蔵之助が四十七人えらんだわけでもないだろうし、大勢の浪士の中か



ら丁度四十七人残ったわけだが、中には「いや、それだから大石が四十七人を選び、あとは第二陣においておいたのだ」という新学説をとなえる人もいる。

○
こうして百以上の狂言があるのに、赤穂義士の芝居といえば「忠臣蔵」といわれるのは、「仮名手本忠臣蔵」が名作だったからだろう。

現在でも、どんなに芝居が不入りでも、これさえ出せば当たるといわれる位だが、もともと人形浄瑠璃の為に書きおろされたものである。

寛延元年八月に大阪の道頓堀座で初演したもので、竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作となっている。

「仮名手本」という名も「いろは」から来たものだが、時代の背景は足利時代になっていて、かたい所とやわらかい所が適度に混り合っていて、つまりデパートの食堂のように、甘党にも辛党にもむくわけだ。

全体が十一段に構成されていて、ま

ず兜改めからはじめられる。

ここで浅野内匠頭は塩谷判官として鎌倉の足利家の大名ということになり内匠頭の奥方は顔世御前として登場する。

○
顔世御前が塩谷判官に嫁ぐ前、新田義貞に仕えていたので、義貞の兜の目ききによび出され、八幡宮の社前で、居並ぶ大小名の前へしずしずと出てくるのである。

そこで数多い兜の中から、蘭奢待の香のする龍頭の兜を義貞のものとえらび出すので、足利直義はじめ諸大名はその兜を神前へ奉納する為退出したあとで、吉良上野介の高師直につけ文をされる。

そして師直がくどくのでこまっていた所を桃井若狭助が救いに出るのだが一説には、顔世御前が塩谷判官に嫁ぐ前、すでに義貞に体を許していたので師直もつけ文したのだという。つまり、それ程かたい女ではなかったという解釈がある。

「顔世が馴れし義貞の兜にてござ候」

という言葉があるのは、本ものの兜だけではなしに、もっと馴れたものがあり、それだからこそ、兜の目ききも出来るというものらしい。

○
二段目は大星力弥——つまり内蔵之助の息子が、桃井若狭之助の館へ上使にくる場面だが、ここには力弥の許嫁の加古川本蔵の娘小浪がいる。

力弥は殿のお使いでくるのだが、応対に出た小浪は力弥の顔ばかり見てそわそわして、女の方から体をよせていく。現代でも、おつとめに行く御主人は、早く行かないと電車が混むし、遅刻しそうだ、と、気がせいっているのに、若い奥さんが「忘れもの」なんて云って唇を出すのに似ていて、女は仕事より愛撫をさきにしてもらいたいらしい人形でやっても、小浪と力弥の色模様は男の方が冷たい。

「しからばお暇申し上げん。ナニお取次の女中御苦勞」と、しずしず立って見向きもせず衣紋繕い立帰……ってしまうのである。多分、男の虚勢なのだ



ろう。

これにつづいて加古川本蔵松切りの段で、これはからい方の場面。

次が天下馬先進物の段で、お城の前で加古川本蔵が高師直に進物をして主人若狭之助へお手やわらかに頼む所。

師直の手の裏かえす笑顔が面白い。それから腰元おかる文使いの段になりおかるが奥方の文使いをかこつけて勘平に会いにくる。

「サアその首尾ついでにな、ちょっとちょっと」勘平の手をとって、物かげへつれて行こうとする。

ここも女の方が能動的だ。

「マア待ちやいの」

と勘平がいうのに、

「なにいわんすやら、なんの待つことがあるぞいなア。もうやがて夜があけるわいな、是非に是非に」

とお軽がせがむ。

「下地は好きなり御意は善し」

と浄瑠璃が語る。

この言葉、いまだに巷間によく用い

られる。

そこで、

「松根に倚って腰をすれば」

「イザ腰掛で」

と、手を引き合って去って行くのである。

宮城前広場の先駆者といえるだろうそれから松の間殿中刃傷の段になり四段目が花籠の段、石堂右馬之丞上使の段、塩谷判官切腹の段、霞ヶ関城明渡しの段とつづく。

五段目、山崎街道出会いの段の次、二ツ玉の段が、定九郎の死ぬ所で、今でこそ歌舞伎でやっても観客の喜ぶ場面になっているが、昔はお弁当を食べる時間だったらしい。

というのが、この定九郎は斧九太夫つまり大野九郎兵衛の息子で、浪々の身で山賊していることになっているので、この山崎街道へ出てくるのでも、鬚だらけで綿入のどてらといういでたちだった。

この役をやる役者もあまり二枚目と

いうわけにもいかなかったのが、たまにたま明和三年、中村仲蔵という役者にこの役が当たった。

仲蔵は工夫して、たとえ尾羽打枯らしたとはいえ元老の息子であるから、どてら姿はおかしいと思い、黒羽二重の紋付で、顔も白ぬりで演じた。

一説には此村大吉の姿を真似したともいわれている。

そして、黒の着付に白い胸がはだけてみえ、それへ真赤な血のりがつくのが印象的で、仲蔵の出世役ともなったが、それ以後は誰がやってもこの形をとるようになり、勘平と同じように重要な役になったのである。

しかし歌舞伎でやる時は、稲むらの前に休んでいる与市兵衛へ、稲越しに拔身でぐっとえぐって、白い手を、与市兵衛のふところへ入れて財布を引き出すようになっていたが、人形でやるこの与市兵衛殺しはもっとむごたらしい。

与市兵衛の胸もとへ拔身をぐっとつきつけて、与市兵衛が助けてくれとわ



けを語るのに、へらず口をたたいて容赦もなくグッと突く。

与市兵衛は、

「うんと手足の七転八倒、のたくり廻るを脚にて蹴返し」

と浄瑠璃にあるように苦悶するのを「オオいとしや、痛かろうけれどもおれに恨みはないぞや。金がありやこそ殺せ、金がなければなんのいの。金が敵じゃいとほしや。南無阿弥陀、南無妙法蓮華経、どちらへなりと失せろ」と、いう。

その間、胸へ刀を突ったてたまま、与市兵衛は転がってうごめいているのを、さらに刀のつかに手をかけてえぐり殺し、足で蹴って谷底へ落してしまふのである。

このあとで勘平が猪と間違えて定九郎を打つ。

そして、手さぐりで縄をかけて引こうとして、定九郎の足に縄がかけられるので白い足がニュウツと上る。やがて打ったのが猪ではなくて人と知り、ふところを探っているうちに財布に手

がふれ、それをとろうとすると、紐が定九郎の首にかかっているの、財布と一緒に定九郎の首が上ってくるのは見ていて一寸無気味だ。

この陰惨な感じは次の六段目、勘平の切腹につづき、勘平が腹を切る時手に血がついたのをそのままに、息たえだえに云い訳をするのだが、「色にふけたばっかりに」と後悔する時、自分の手を頬にあてるので、頬に血が指のあとに赤くつく。

その上、原郷右衛門が同志の連判状に血判させようとする、立ち割った腹から臓腑をつかんで押すのである。

そして最後にもう一度血刀をとって一度、二度とつき損じながら、三度目にのどをつき通し、血だらけの手で合掌して息がたえる。

芝居だからこそ見ていられるのだが何ともいえないむごたらしい感じがする。

この次が七段目で、がらりと変って

派手な舞台で、観客がほつと肩のしこりをおろすように出来ている。

ここで小軽が合せ鏡で大星由良之助の手紙を見たあとで、九ツ梯子でおりの所は客のくすぐったい笑いを誘うような文句が作られている。

小屋根にかけた梯子にお軽が危なげると、大星がいう。

「大事な、大事な。危いこわいは昔の事、三間ずつまたげても赤膏薬もいらぬ年ばい」

「阿呆いわんすな、船にのったようでこわいわいな」

「道理で舟玉様がみえる」

「のぞかすないな」

「洞庭の秋の月様を拝み奉るじゃ」

「イヤもうそんなら下りやせぬぞえ」

「下りざ下ろしてやろう」

「アレまた悪いことを」

「やかましいやかましい生娘かなんぞのように、逆縁ながら」

と後よりじっと、抱きしめ抱きおろし——というのである。

この「逆縁ながら」というのは後か



ら抱くことをいうのだそうだ。

最近歌舞伎ではエロ御法度でこの所をさらさらとやることもあるが、人形では床本通りやるから、くすぐったいようなしのび笑いが客席からもれる。

この場でおかるが兄の平右衛門から勘平切腹のことを聞き、シヤクをおこす所があるが、このシヤクをおこす時の声がなかなかいい。

私は先年、ラジオでこの七段目を聞いてはっとしたことがある。

仕草を見ないでこの声を女形のしゃがれたような調子で聞くと実に色っぽい。娘義太夫などが、かんざしを振ってこの「エエッ、アアーッ」とシヤクをおこすのは喜ばれた筈だと思った。

「どうしよう、どうしよう、どうしようぞいなあ」と泣くのが、きつと現代の若人がジャズに感動するように、昔の若人に一種の感激を与えたのではないかと思う。

さて、お軽のくだりがすむと、大星が縁の下の大太夫を上からぐつと突きさす所がある。

「下知より早く平右衛門、朱に染んだ身体をば無二無三に引ずり出し、ヒヤア九太夫めハテよい気味と引立て目通りへ投付ければ、起立たせもせず由良之助、鬚つかんでぐつと引寄せ」

と、さすがの大星も恨み言を云って怒り、土にすりつけ捻じつけて苛んだ上、「加茂川で、水雑炊を食わせい」という。

大星がするのだから誰も文句を云わずに喝采を送るが、なかなかむごい仕打ちである。

七段目の次に八段目を道行旅路の嫁入、九段目山科閑居十段目天川屋、十一段目討入とつづくが、割愛しよう。

○

さて、こんな風に義士をもとにした芝居は甘いからいを云っても、もともとやわらかい芝居にはなりっこないし獵奇的なものもない。

「酒忠臣蔵酔段目」などというザレ本もあって「塩谷判官二日酔によって」などと語り出して大星由良之助を大呑とシャレた古い浄瑠璃本もあるが妖奇

には遠い。

赤穂の浪士が登場する芝居で、一番妖奇の名にふさわしいのは、鶴屋南北の「東海道四谷怪談」だろう。

赤穂浪士の佐藤与茂七の女房お袖が事件後のどさくさでお互に行方知れずとなり、淫売宿で身を売るのを、それと知らずに与茂七がくる所からはじまる。すると、このお袖にふられたのが直助権兵衛で、その意趣ばらしに与茂七を殺してしまう。

この殺し場は残忍で、殺した上に顔の皮をはぎとってしまうのである。

ところが、与茂七だとばかり思っていたのに、実は同じ赤穂の浪人奥田庄三郎が、与茂七と身なりをかえていたので、この庄三郎は直助にとっては旧主人なのだ。

それにお岩の夫の伊右衛門も、もとは赤穂の家臣ということになっている又、伊右衛門の家の場では、下男の小仏小平が旧主小汐田又之丞の難病をなおそうと思つて、伊右衛門の家にある薬を盗み、それが見つかつて折檻され



る。

それが無理無体に縛りあげられて、小鬢の毛を引き抜かれ、指を一本ずつ折られる。その上、息もたえだえな身を押入れへおしこめられ、あげくのはては殺されて、お岩と一つ戸板の裏表へくくりつけられて川へ流される。

サジズムの極致といってもいい。

大体四谷怪談は登場人物に赤穂の浪人という経歴が一寸出てくる位で、直接義士劇に関係はないが、お岩の死から亡霊となつての活躍にサジズムの匂いの濃い芝居としては横綱格だろう。

場面場面にエログロが交錯する。

作者の南北の血の中に、多少異常なものがあるような気がする。

だから数多い義士劇の中で、一番妖奇的なのは、南北の「菊宴月白浪」である。

これは忠臣蔵の後日譚で、悪人の斧九太夫を後詰めの人数の一人で実は表だけ不忠を装おつたことにして、その息子の定九郎も家の宝を詮議の為に盗

賊になることにして、二人を善人にしたてている。

そして、定九郎の女房の加古川が父の所の小者と与五郎にぶらぶら病いの看病をされながら、行方の知れぬ定九郎に会いたがっている。

ところがこの与五郎は高師直の落胤なので、塩谷方の宝物である短刀を盗もうとして、加古川を出刃庵丁で斬殺してしまふ。

この殺し場も、はじめ出刃でさし、加古川が苦しむのを、短刀で切り倒しとどめをさして、ふとんでくるむ。

折から家主がやってくるので、死骸に枕をさせて、わざわざ話かけたりして眠っているように見せかける。

一寸現代の犯罪に似通っているものがある。

ところが、家主が与五郎のとめるのをふり切つて病人を見舞えば、すでに斬殺されているからびっくりすると、与五郎は出刃庵丁でおどかして、着物をぬがせ、自分がその着物に着かえて家主を後手に縛り上げ、猿ぐつわまで

かけるのである。

そして、血のしたたっている死骸を横抱きにかかえて、川へ流しに行く。

一方定九郎が旅のさこ寝で顔も見ずに通じた女がいて、後の証拠にと笄を半分に割つてとりかわしているが、これがおかるといって、帯に錠をかけて女だての姿で登場する。

そしてこのおかるの父親も又、加古川を殺した与五郎に殺され、同じ時、塩谷判官の弟の縫之助の子供をお腹に宿している浮橋が兄権兵衛の手によつて殺される。

権兵衛は妹の浮橋を殺し、縫之助の肩先にも切りつけるが、縫之助は川へ落ちて命は助かる。

それにしても、同じ舞台で重ねて殺人が行われるのは、「四谷怪談」の第二場で、直助が庄三郎を殺し、伊右衛門が女房の親の四谷左門を殺すのと同じで、ダブル殺人事件である。

そして、この殺人が南北独特の暗い陰惨なもので、おかるの父親は与五郎に荒縄で首を縊られて死ぬのだが、そ



の時与五郎の小指をかみ切ったりするのである。

ところが浮橋を殺した権兵衛は高師直の家臣を父としていたので、妹浮橋が敵方の塩谷縫之助のタネを宿している為に殺さなければならなくなり、それを高家方に誓う為、小指をおとしてゐる。そこでおかるに父の仇と疑われ、真犯人の出るまでおかると夫婦になるのである。

誠に奇妙な話だが、夫婦でいれば逃げかくれ出来ないというわけで、昼間だけの夫婦で、夜は別々に寝るわけは大時代的であることが、反って近代的な匂いを感じさせるから面白い。

そのうちこの権兵衛とおかるが表向き夫婦生活をしている家へ、星五郎と名を変えた斧定九郎がやってくる。

これは定九郎が女房の加古川の亡霊に導かれてくるので、この家に塩谷家の重宝の短刀がかくされているのである。すると、斧定九郎は塩谷方だし、権兵衛は高家方だから、二人が太刀を

抜き会うことになる。

おかるにとっては一方はざこ寝の折に契った男、つまり枕かわせし夫だし片方は肌はふれないが夫と呼んでくらしした人、両方にけががあつてはいけな

いと、中へとめに入る。

すると定九郎は「エエ面倒な」とばかり、おかるを縄で縛ってしまふ。縛られたままおかるは尙も二人の間に

とめに入るが、二人から当身をくらつて「ウーン」と倒れてしまふのである。やがて権兵衛は定九郎に突かれて深傷を負い、苦しい息の下から、自分が定九郎にとっては兄に当り、小さい時に高家の家来にもらわれて、敵味方の板ばさみになつていたことを告げて死んで行く。

ここは仮名手本忠臣蔵の九段目山科閑居の場で、加古川本蔵が恩愛の板ばさみで、自ら力弥に討たれる趣向をとり入れたのだらう。

総体にこの菊宴月白浪という芝居は仮名手本忠臣蔵を変つた姿で写し出し

ていくのがねらいで、十幕に大切を入れて十一幕になつていて、各幕毎に順序不同に忠臣蔵をもじっているが、あまりに変わった味わいに走つた為に、再演されない芝居になつてしまつたらしい。

とにかく、忠臣蔵がミュージカル化される現代である。南北以上の妖奇的脚色は今後の本誌をたのしみにするより他仕方ないのではないかと思いつつ筆をおく次第である。

名作鑑 風流艶色寄席

正岡容・著

色道はなやかなりし大江戸に咲き乱れた濃艶な毒婦妖婦が織りなす情緒纏綿の愛欲絵巻。高座では聞けない珍らしいはなしばかりです。

あまとりあ社刊・定価100円・送料24円

裏

窓

あぶちっく・忠臣蔵特集

新年特大号



第三卷・第一号

藏臣忠容集特

闇に生きる

義士

島本春雄

中島喜美・画

一、犬を殺す男

どきり。

何やら重量感のある物が、枕元の青畳の上に投げ出され、同時にプーンと嫌な臭気が鼻を襲った。

「——!？」

ギョッとなって夜具の中から鎌首をもたげたのは、柳沢越前守吉里である。

「あっ！」

驚いた。顔色が蒼白となり、眼が吊り上った。

——無理もない。

枕元に転がったのは、犬の死骸である。それも——首。

鮮血にまみれた、愛犬——鬼若——の首であった。

大族保護の令から、続いて生類憐みの令が出されている。

桐の間番士永井主水は、下城の途中野犬に吠え掛けられ、供の若党に命じて木刀で追払わせたというだけで、若党は死罪、主水は八丈島に流罪となった。また、御小納戸若藤奎右衛門は馬の毛を切っただけで家断絶、さらには中奥小姓秋田季久の家来で十八歳の茶坊主は、吹矢で雀を射殺したというので斬罪……

数え立てたらきりが無い。

將軍家は、人間より犬を大事にした犬公方の五代綱吉である。

その犬公方から賜った猛犬鬼若の首を撥ねて、枕元に抛り投げた奴があるのだ。

「なに奴？」

ガバと起き直ると、——フフフ……含み笑いの声があつて、枕屏風の蔭からヌツと黒い影が現れた。

影。

まこと、影のように総身黒ずくめの、ふわりと重量感のない男である。

「騒ぐな。声を立てれば、こいつが飛ぶぞ」

右手に八方手裏剣を握っている。

冷たい眼。

刺すような、鋭い眼光に射すくめられて、越前守吉里は身じろぎ一

つ出来なかった。

(無念)——唇を噛んでいる。

老中上席で五万三千石、側用人を兼ねる綱吉の寵臣柳沢美濃守吉保——、越前守吉里はその子で老中次席であった。

二十四歳。

——が、諸大名を顎であしらう吉里であり、しかし、今、得体の知れぬ影男に威圧されて手も足も出ないのだ。ムクムクと憤怒が盛り上って来た。

「——どれ、今宵は、これを頂戴して参りやしようかな」

吉里の顔色には頓着なく、影男は、のそりと床の間に近寄って、刀架けの脇差しを手にとった。

銘は延寿。

これもまた、元禄四年の昔、四月二十二日に犬公方綱吉から賜った物である。

それから半刻——

夜は次第にふけ、そして越前守吉里は、おのれの寝所で、至極異形な姿に



★華麗な元禄の大江戸を裏から裏へ躍る義士達の、それよりも秘かな足取りで夜を縫う男！

なっていた。

犬の首、——鬼若の血まみれの首を、後生大事に胸に下げて、自身は天井から縛り吊りになっている。

顔の上に、ペタリと貼紙があった。

この犬、罪なき人士六人の命を奪う。依って斬首。飼主監督不行届なり、依って宙吊りの刑とす。更に科料として延寿の脇差収納せり。まずは依ってくだんの如し。

文珠 太郎

墨黒々と書いてある。家人が発見して大騒ぎになったのは、さらに半刻の後であった。

文珠 太郎

この不敵な男は、生類憐みの令が発せられると、間もなく江戸の地に現れて、神出鬼没——元禄七年四月、大久保の幕府犬小屋の野犬百四十四匹、続いて翌八年九月、中野の犬小屋の犬二百六十匹を毒害したのを手始めに、江戸府民に危害を加えた犬のみを狙って、これを殺し続け、綱吉の暴令に反逆している俠盗であった。

俠盗。

つまり、このやつは、諸人の迷惑になる犬を殺すだけでなく、奸臣、奸商を狙って賊も働き、必ず文珠太郎としるした書つけを残して消えている。そして——

町奉行、犬奉行配下の同心、手先が必死の探索も、しかしこの男の正体をあきらかにする事が出来ずにいる。

文珠太郎とは、こういう男であった。

二、吠えられ小町

「ちっ！」

舌打ちして立止った男がある。五分月代で浪人侍とわかるが、身なりは悪くなかった。

堀部安兵衛武庸である。

ワンワン。

犬が吠えて、同時に、女の悲鳴らしいものが聞こえた。——安兵衛が舌打ちして足をとめたのは、このためであった。

「ほってもおけまい」

呟やいて安兵衛が角地を曲ると、角曲鬚の娘が、野犬に吠え掛けられて立ち竦んでいる。

犬は二匹。

娘は美しく、しかし蒼白で、逃げる事も出来ず、板塀に背をついて、ふるえていた。

深夜だ。

辺りに人影はないが、安兵衛は大望のある身であり、迂濶に犬を害して娘を救うこともなりかねた。

水をぶっかけようか——。が、見廻しても近くに水の用意はなかった。

「うーむ」

困惑して思わず唸った……その時である。

キャウーン。

グワウーン。

二匹の犬が、突然奇声を発して、よたよたと倒れたのであった。

「——？」

駆けよると安兵衛は、手を振った。

「娘御、長居は無用だ」

「はい」

「夜中の女の一人歩きは、慎しむがよい」

「はい。でも母さまが急病で、お医者者を……」

「そうか。ならば、早く！」

「はい」

一礼して娘は、右手の闇に消えた。

「まずはよし」

呟やいて、犬の死骸をあらためる。——見ると、二匹とも、急所に

深々と一撃を食っていた。

十文字の鉄のツブテである。

「八方手裏剣!？」

安兵衛が、かがめた腰をのぼした時に、背後に黒い人影が、音もなく近づいていた。

振り返る。

「や!？」

と、これは安兵衛で、黒い影は、フフフと笑った。

「おぬし……」

「そうだ。鮫鞘高兵衛さ。久し振りだな」

「うむ。おぬし、やったのか、これを？」

「フフフ」

鮫鞘高兵衛と名乗った男は、否定も肯定もせず、いきなり妙な事を

言いだした。

「安さん。知っているか？」

「何を？」

「浅野家再興の望みは、全く絶えたぜ」

「え!？」

「大学様閉門御免、本家安芸守様へ妻子共に引取るべし。——と断が
下ったのだ」

「まことか?」

「うん。夜が明ければ、安さんの耳にも入るだろうよ」

「しかし、おぬしどうして、そんな事を？」

「フフフ……」

高兵衛は、笑って笑えなかった。かわりに——

「いけねえ。もうそろそろ、犬同心の見廻りが来る頃だ。

係りあっちゃ大変だぜ。安さんまたあおう」

言うなり、懷から紙片れを二枚抜くと、犬の死骸にペタ

ペタ貼りつけて、ツと音もなく左手の闇に溶けた。

嫌応なく安兵衛も急ぎ足でこの場を立退いたが、その
時、チラリと紙片の文字を読取っていた。それには——

邪犬二匹成敗仕り候、文珠太郎

——と書いてあった。夜眼にもそれとわかる達筆であ
り、急ぎながら安兵衛の顔は、自然と微笑笑になっ
ていた。

(あいつが、文珠太郎……フ、フ、フ)

特集★裏窓忠臣藏

久しく会わぬ。

安兵衛が、まだ堀部の養子婿にならぬ浪人時代の奇友だった。

裏長屋に隣り合せて住み、安兵衛は朱鞘、高兵衛は鯨鞘——共に喧嘩の仲裁で酒をくらったり、葬式の振舞酒を狙ったりして、——喧嘩安に葬式高兵衛と並び唄われた仲である。

それが——

高田馬場の一件以来、堀部弥兵衛と安兵衛の間に交渉が出来ると、煙のように長屋から姿を消して、再び安兵衛の前に現れなくなった。以来、はじめての再会であった。

（——羽黒高兵衛。フフ、あいつが、文珠太郎であったとはな——前から只者でないとは思っておったが……不敵な奴め……フフ）

安兵衛は、本所林町の浪宅に着いた。元禄十五年七月十八日の夜である。

浅野内匠頭長矩の切腹は、元禄十四年三月十四日。——すでに一年四ヶ月経っている。

三、犬目明し

「お品ちゃんも可哀相にな」

「全くだ。犬兵衛の奴に引ッ立てられちゃ、ロクな事アねえよ」

「証拠はなんにもねえんだろ。犬の死骸の上をや、文珠太郎の貼紙があったんだ。それなのに、どうしてお品小町が引ッ張られたんだい？」

「無茶な話さ。あの晩、お品ちゃんが、犬に吠えられて悲鳴をあげた。その声を耳にした野郎だか女郎だか知らねえが、とにかく、そっ



と犬兵衛に告げ口した奴がいやがるのよ」

「なるほど。それで犬兵衛め、血眼になって嗅ぎ廻っても、文珠太郎をあげる事が出来ねえもんだから、腹いせで、お品小町を引ッ捕えたという寸法だな」

「フム。それもある。しかし、本当のところは、あの犬兵衛の奴、前からお品小町を狙っていたのさ。名代の助平十手だ。——が、お品さんの方じゃ、犬兵衛なんぞ相手にしねえ。何しろ今は逼塞したが、昔は高家筆頭吉良上野介様の家来で、二本差した侍の娘だというから、犬目明しに口説かれたからって、おいそれと肌身を許す訳アねえ。——で、野郎め、何か落度があったらと、猫が鼠を狙うみてえに見張っておった。そこへ今度の一件だ。ヘン、これ幸いと、犬兵衛め、何をやらかしやがるか知れたもんじゃねえよ」

「フム。すると、あの野郎、いよいよ思いを遂げるてえ訳か」

「畜生！ 可哀相にな。父親が死んで半年になるやならずで、今度は

母親の葬式だ。その葬式が済むと、お次は犬目明しの餌食になって、あの綺麗な玉の肌を、泥まみれにされる……くそったれめ！」

長屋の連中が寄り集って、ワイワイ、ガヤガヤやっている。

通りかかった男が立ち止って、じつと耳をすませ、やがてニヤリと笑うと、音もなく立去ったのを、誰一人気づいた者はいなかった。

地紙売母に逢のも垣根越

尻持に和尚を持て地紙売

と、川柳にある扇の地紙売りで、しかし、勘当息子のような、ヘナヘナしたところは微塵も見られない、なんとなく凄味のある眼の、影のように動く男であった。

フン。

暫くして、地紙売りの男は、犬奉行支配で一万五千石米倉丹後守の直属の密偵である犬目明し吉兵衛の家の前に立って、鼻を鳴らした。

（——フン。世も末だな。米倉丹後守は、犬小屋取立ての功により六千石の加増、側衆から若年寄に出世した犬年寄。それに繋がる吉兵衛は、犬目明しの十手を振廻して小町娘をいたぶる犬兵衛……フン）

にがにがしく胸のうちで呟やいて、この男は影のように、フツと裏へ消えた。

「おい。知らねえとは言わせねえぜ」

犬兵衛のドス黒い声が聞こえる。

ガン。

と板を叩く十手の音が続いて聞こえた。

「どうだ？」

と、犬兵衛は胡坐をかいて、茶碗酒を引っかけながら、板敷の上に引き据えたお品を睨んでいる。

崩れた花。

そんな形で、お品は、板敷に突っ伏していた。

「何とかいわねえかッ」

犬兵衛の十手が、ツとのびて、お品の襟首をねじった。

「あッ」

と顔を上げる。十八の娘盛りで、匂うように美しく、乱れた胸元が、大きく息づいている……

その顔を、胸を、肢体を——犬兵衛の淫らにギタギタ光る眼が、舐めるように見詰めてはなれなかった。

「お前の声を聞いたという生証人が、ちゃんとあるんだ。さ、文珠太郎はどこにいる。どんな顔の男だ……正体は？ 強情張らずに申し述べろッ」

「知りません」

「けっッ」

犬兵衛は舌打ちすると、ゆらり——立ち立った。口尻が歪んで、それでもこれは、笑い——の一種であろう。

「フフフフ」

いやアな含み笑いの濁声が、歪んだ口尻から洩れて出た。



蜘蛛の巣にかかった蝶である。

毒を持った醜怪な蜘蛛は、ネバっこい糸で色彩も美しい女蝶を金縛りにして、おのれの思うまま、翻弄し、冒瀆し、しやぶり尽して抜け殻を打ち捨ててゐるのだ。

お品は女蝶。

犬兵衛は毒蜘蛛であつた。——その毒蜘蛛犬兵衛が、今、次の行動に移ろうとしている。

四、犬責め

檻。

そうだ。これは犬小屋でなく犬檻であつたし、太い格子組の、見ようによっては罪囚を抛り込む格子牢とも言えなくはなからう。

犬兵衛の家の庭の一面を区切って、大きな木格子の犬小屋があり、今、お品はこの犬小屋に抛り込まれて、ヒシと組格子にしがみついていた。

ウー、ウー。

ワン、ワン。

犬兵衛の飼犬——黒法師と名づけたのが、名の通り総身漆黒で、不気味な敵意も物凄く唸り、吠え……その眼はお品を凝視している。

「法師！」

檻の外から、犬兵衛の叱咤が飛んだ。

と——

ひと声、神経を引裂くように吠えて、跳躍した。

「ひーっ！」

お品小町の悲鳴……しかし、仔牛ほどもある黒法師が、その鋭い歯に引っかけたのは、帯——であつた。

ギ、ギ、ギ。

布の裂ける音がして、お品の帯が、千切れ解けて、同時に、木格子にしがみついた左指の力が、黒法師の力に屈したのか、ドタンと犬檻の床に崩れた。

こういう訓練が出来ていると見える。

はじめのうち、黒法師は、お品の肉体に直接攻撃を加えなかった。

お品小町は、恐怖と嫌悪と絶望に凍んで、はじめから抵抗の意志を持っていないもののように、ヒシと顔をおおい、時折り悲鳴をあげるのみである。

帯。

ついで、元禄の丸袖、裾、褌——と、黒法師の攻撃が続き、噛み千切り、引裂き、阿修羅のように荒れ狂い、やがてして、お品の着物を剥ぎ取っていた。

それは、奇異な、猥褻な、しかし正視するにたえぬ眺めであり、その癖、一度目にすれば、魅入られて視線を外すことの出来ぬ、一種異様な眺めでもあつた。

犬と美女。

この一と組が繰り広げる光景を、ここに一人、妖美——と感じて悦に入っている男がある。

犬兵衛だ。

黒法師の攻撃はお品の下着に移り、腰紐を食い千切り、湯文字を裂いた。

腕が肩が、乳房が、腹が、足が——すでに犬兵衛の眼に犯される状

藏臣忠窓裏集特

態だった。

「お品。……この黒法師の奴は、妙な犬でな……フフ、女の肌が何よりの好物でやがる。どうだ、一つ、そのポッチャリとした肉を黒法師にくれてやろうか？」

お品を半裸体にして、さて、次の攻撃にかかる準備であろうか、一旦、檻の隅にしりぞいた黒法師を見ながら、犬兵衛が言った。

黒法師は低く唸っている。

「どうだッ」

「——」

お品は、本能的に、裸にされた乳房を両の手で隠した。

「フフフ……それとも、おれの言うなりになるか。魚心あれば水心、お犬様殺しや文珠太郎の事は忘れてやってもいいぜ」

がくり。

お品は首うなだれた。——それを承知と見たのか犬兵衛が、アバタ面を奇妙に歪めて、のっそり檻に近づくと、

「犬ッ」

ピシリ、一言、侮蔑と嫌悪をこめた冷たい声がお品の口から飛んで出た。

「なんだとッ」

「品は武士の娘、犬目明しの自由にはなりません」

「言ったな。ようし……」

「近寄れば舌を噛みます」

「フ、噛みたきや噛むがいい。息が絶えてもお品はお品だ。散々おもちやにして、揚句の果てに、皮を剥いで、犬

檻の屋根に張ってやるぜ」

「……」

「フフフ、どうした噛まねえか？」

お品は進退きわまった。自害——それは覚悟が出来ている。しかし、骸の凌辱、それも途方もない邪悪な凌辱と聞いては、死ぬにも死ねなかった。

元禄の武士の娘は、死骸の清浄を第一義に尊重する。けだものに勝る汚辱を受けるなれば、生身のこの軀で、目をつぶって……

「ふふ。やっと思案がついたと見えるな。よしよし、イヤじゃイヤじやと言うている間に何時のまにやら男が恋しうなる。それが女というものだて……」

犬兵衛は檻の錠に手をやった。

と——

ピシッ。突然、鋭く風を切る音がし、犬兵衛の手が檻格子に縫いつけられていた。

血ッ

犬兵衛の手甲から血が飛び、流れ、見ると四ッ股の八方手裏剣が、手を貫いて、格子木に深々と突っ立っているのだ。

「フフフ」

背後で低く笑う声があった。地紙売りの男が音もなく姿を現している。

と見て、お品はフワリと気が遠くなった。

五、壁に耳

浅野大学、芸州お預けの儀が決定して、ここに浅野家再興の望みは全く絶えた。

よって討入決定。

旧赤穂五万三千石、浅野内匠頭長矩家来——それも盟約の同志一党、俄かにその往来が頻繁になりはじめた。

「この際、どうしても手に入れなくてはならぬ物が二つある」

本所林町の杉野十平次隠宅に、堀部安兵衛、磯貝十郎左衛門、奥田孫太夫、赤埴源蔵、大高源五の六人が集ると、まず、安兵衛が、こんな風に話を切り出した。

「それは？」

と十平次が尋ねる。

「上野介は、先年十二月十三日に、本所松坂町に屋敷を賜って以来、兩三度内々の改築を行っている。噂によれば、かなり複雑な絡繰り建てを施したと言う。すれば、無闇と討入しても、肝心の上野介を発見出来ぬうちに、お上の手が廻るおそれがある訳だ」

「なるほど。その懸念は充分だな。吉良には上杉の智慧家老千坂兵部がついていて、蔭で種々采配を揮っているとか。清水一角、小林平八郎をはじめ、腕立つ家人が、先頃吉良邸の長屋入りしたのも兵部の揮金であろう。きやつらと闘っている間に時機を失しては一大事だ」と、これは磯貝十郎左衛門である。

「故に、一つ——絵図面。これが入用になって来る。吉良邸の絵図面が欲しい」

「ふーむ」

と同一は腕を組んだ。絵図面入手——これは難中の難題である。
「間者！」

ポツリと大高源五が言った。一応だれでも考えることである。
が——

「ベケ」

と杉野十平次が一言ではねつけた。

「ベケ？」

「いかにも。吉良邸は神経質なぐらい厳戒しておる。間者の入り込む隙など毛ほどもない。上野介は女好きと聞いたから、美女一人、腰元侍女に差出して……と考えた事もあるが、身許調べがえらくうるさいと言う事で沙汰止みと相成った」

「それに——」と安兵衛が言う。

「これは早急の事ではないが。上野介の在邸を確める事。これも肝要だ。あるじのおらぬ日に討入っては、世の物笑いになるばかり」

「フーム」

と一同の波面が、いよいよ深くなった。

「神崎与五郎は、吉良邸の近くに米屋を開業して、岡野金右衛門、勝田新左衛門、矢頭右衛門七を用人となし、折吉良邸の様子を探っている。その方から、何ぞ情報が入るかもしれぬ」

と、これは楽天家の赤埴源蔵であった。

「仲々、それが思うようには参らぬようだ」

今まで黙して語らなかつた奥田孫太夫が、渋い声で言った。

と——

この時である。表の格子障子と内襖を突き抜けて、グサ

特集 裏窓忠臣蔵

リ——同の前の破れ畳に八方手裏剣が突き刺ったのは……。

「や!？」

と赤垣源蔵が立ち上るのを、

「待った」

と安兵衛が制して、八方手裏剣を抜きとった。

「結び文がある」

壁に耳あり障子に眼あり、青痣の屑屋は千坂兵部の密偵、心せられよ。せくな、あせるな、待てば海路の日和あり。

文 珠 太 郎

結び文の文言は、こうであった。

「青痣の屑屋! しまった。きやつは、隣家の男だ」

十平次が叫んだ。しかし、この屑屋は、幸いこの日不在であった。

六、駆落者

「どうじゃ、小林、その後変った事はないか?」

尋ねたのは、どっしりと重みのある躰に似ず、眼の細い、剃刀のような感じの男であった。

千坂兵部である。

「ござりませぬ」

答えたのは、二の腕が丸太のように太い、苦み走った男で、節くれだった手の竹刀ダコ、歴然たる面擦れを見れば、剣一流に秀でた者と一目でわかる。

小林平八郎である。

「出入りの商人はどうじゃ?」

「一人変りましたるまま、以来ずっと……」

「ふむ。眼を放さずにいるであろうな」

「抜かりは、ござりませぬ。しかし、あの男が、寺坂吉右衛門と相わかりましたる時は、いささか驚きました。身許をたくみに秘し偽わり、それに所持の赤穂浪人人相書にも洩れておりましたので、うかうか新規出入りの門鑑を下げ渡しましたが……」

「よいよい。寺坂は結句よい囃じゃ。かの者の動静を見ておれば、赤穂浪人共の動きも逐一知れる。飛んで火に入る夏の虫じゃ」

「はあ」

「しかし、奥向きの女中は、迂濶に変えられぬぞ。人数も増してはならぬ。やむを得ず新規を入れる際は、とことんまで身許を洗い立てるのじゃ」

「心得ております」

こうして、上杉家老千坂兵部と吉良邸付人頭小林平八郎は、連絡を密にしていたが、守るは難く攻むるは易し——古今の鉄則の前には頭を下げざるを得ない事になってしまった。

この日。

吉良邸から二人の人間が消えたのである。

男と女。

女——は、吉良邸奥御湯殿垢すり女中のお須賀であり、男——は、

吉良邸中間の半三郎であった。

お須賀は、半日のお暇を頂戴して親許へ帰るべく屋敷を出たまま行方知れず、半三郎は吉良邸付人清水一角の書状を持って研師刀屋藤月



齊のもとに使いに立ったまま、その行方を断った。

翌朝。

十三四の乞食小僧が、半三郎に頼まれたと言って、一通の書面を門番に届け出ている。

その書面には、金釘流で、お須賀との不義の一件をしたため、江戸を逐転して、両国に落ち、二人で世帯を持つ——と、無恥厚顔、つら

あてがましく書き並べてあった。

吉良家の家臣は苦笑を禁じ得なかった。

「おかめ——ひよつとこ……フフ、さぞ二人は似合いの夫婦になるだろうて」

が——

この小事件に、妖しい影のあった事を、ついに誰一人知らずに終ったのは、不覚と言われても仕方のないところである。

逐転するにしては、いささか奇妙な節がある。つまり、半三郎は、おのれの居間に、稼ぎ溜めた給金十三両もの大金を、置きっ放しにしてあったのだ。

お末の女とはいえ、女中が一人減った。

そして——

この欠員はすぐに補充された。幸いに、新規奉公を願ひ出る者があり、身許を出入りの目明しに洗わせると、これがもと吉良家の家臣で、御用取次を勤めた相原孫七郎の娘と知れた。孫七郎は十年前、茶器紛失の責を責めて浪人した事になっているが、事實は主君上野介が、孫七郎の妻千春に懸想し、獻妻を命じたのを撥ねつけて浪人した——と言う、妙ないきさつまでわかってしまった。

旧上野介家臣の娘なら問題はなかった。こうして、おかめ面の湯殿女中お須賀に替ってピカピカ輝くような美貌の垢すり女が新規登場となったのである。

名は——お品と言う／＼

七、湯殿女中

「うーむ、良い気持ちじゃ」

いい加減にあたたまって、吉良上野介は湯舟を出た。

骨細で華奢だが、美食遊情に脂切って、すでに老境の者とは思えぬ肌のツヤであった。

しかし——

その背中に、内匠頭遺恨の刀傷が、今もくつきりと残っていた。御台所御用人梶川与三兵衛頼照に組みとめられる寸前、切りつけた額の傷は、今はもう跡形もなく消え去っている。

どかり、——湯殿床几に尻を落ちつけると垢磨りを持った湯殿女中のお品が近寄った。

紅紐を纏にして丸袖をたくしあげ、裾をはしよって、吉良家好みの緋の湯文字を覗かせている。

すんなりと白い足。

白く清潔な二の腕。

上野介の背を逆にすりあげると、グイッ、左の手首を掴まれた。

「あれ／＼」

「騒ぐでない。愛い奴じゃ。まるで千春の再来のように、よう似ておる」

こういう事には馴れていると見える。握った手をそのままに、くると向き直ると、素早く右手が、湯文字の中へのびた。

「アレ……喪、喪中でござります」

「——？」

「母様の……」

「ほう。すると何か、喪がすめば、わしの意に従うてよいと申すのか？」

と、しかしまだ悪戯な手は引っこめずにいる。

「……はい」

とお品は、消え入るような声で答えた。

「そうか。喪はいつあけるな」

「新春に」

「フム、初春にな。フフフ、ならばもう間もない。フフ、元禄十六年の新春は、楽しみな年明けとなるわい」

お品の美貌と、屋敷女にはない新鮮さと、一



種独特の甘い声は、上野介をとろかすに充分であった。

その夜からお品は、上野介の侍女に昇格したのである。

そして、五日……十日……二十日……二十六日……夜。

お品の姿が、ふわりと裏庭に現れた。夜泣きうどんの当り屋が、塀の外を流している。

次第に近づいた。

と見てお品は、懷中から取り出した紙つきれを裏庭の小石に包み、フワリと塀外へ投げた。

足音が止った。

やがて——いや、ほんのす刻、また当り屋が歩きはじめた。

(——よかった……)

お品も安堵の面持ちで奥殿へ引返した。

これを見ていた奴がある。

それは厠に立った小林平八郎で、月明の庭の品の行動に不審を感じ、石つづての連絡を見てとると、そっと裏の潜り戸から外に出た。

「うむ」

当り屋の屋台行灯は、まだ近くに見えている。

「おい、うどんをくれ」

何気ない風に歩み寄った。

「へい」

答えて、釜下をバタバタはじめたのは、手拭を頬被りにした三十五六の男で、千坂兵部が百方手を廻して作成した赤穂浪人の人相絵には無い顔だった。

しかし——

この時、赤穂浪人の復仇必至——と推定は成っていたものの、もちろん、連判状を入手した訳でなく、盟約の同志が、大石良雄以下何人であり、しかも誰と誰であるか——と言った詳しい事情がわかっていたのでなかった。

だから、集めた人相書にない男であっても油断は出来ぬ。とにかく見ている。

お品が庭の小石に紙片を包み、塀外に投げた相手は、この夜泣きうどんの男に相違ないのだ。

「どうだ、景気は？」

食いたくもないウドンをすすりながら平八郎が尋ねると、

「へえ、もうさっぱりで……この分だと、今年の暮れは越しかねます。正月を前にして一家心中でもやらかすか……それとも夜逃げでも……」

語尾を濁して、水っぱなをすすりあげた。

(——フム。赤穂訛りはないようだ。すると、浅野浪人とすれば、江戸詰の者と言う事になる……)

「時にウドン屋、おぬしが受取った紙片れを貰おうか」

平八郎、今度はズバリと言って見た。

「へ？」

「とほけても駄目だ。わしはちゃんと見ておったぞ」

「なるほど」

とたんに、ウドン屋台がガタンとぶつかって来た。

「おのれっ」

危なく避けて引っ捕えんとしたが、相手はすでに十間も向うに飛び

退いていた。

「待てっ」

追わんとして踏み込む足に、異様な感触があり、流石は小林平八郎、危険を予覚して、大きく右へ跳躍した。

「うーむ」

足もとに撒かれたのは忍者の用いるヒシであった。

丹州菱。

それが、丹州忍者独特の丹州菱とわかったのは、平八郎から千坂兵部に報告し、千坂兵部から老中柳沢美濃守吉保の手を通じて権現様以来の幕府伊賀衆に鑑定させた後である。

八、身許調べ

赤穂浪士の間に飛報が交錯した。

大石内蔵助が山科の閑居を引払い鎌倉に入ったのである。

五日滞在。

続いて、鎌倉を発し、神奈川在の農家に落ちついた。――すでに大

石主税は江戸入りをして、石町に浪宅を構えている。

変名垣見喜内である。

また、その他の同志も続々江戸に集結しつつあった。

が――

肝心の吉良邸絵図は、まだ手に入らず、内蔵助良雄は、自重して神奈川在から動かなかった。

「四千石の吉良一家のみなれば、いかにも怖るるに足りぬ。いつ夜討ちを仕掛けてもだいじなكارう。しかし、上野介には大藩上杉家が後

楯についておる。上杉弾正大弼は吉良義央の嫡子であり、しかも、家老千坂兵部は聞こえた智者だ。絵図面もなく無闇に動いては敵の思うツボにはまるばかり、ご一統にも今少し自重されるようお伝えが願いたい」

事態の遅々として進まぬのに業をにやして強引に討入断行を願ひ出て来た堀部安兵衛に大石内蔵助は、このように答えている。

寒い日であった。

本所林町の浪宅から、わざわざ神奈川在までやって来て追い帰された安兵衛は、

「ちっ上野介め！」

と松坂町の辺りを睨んだが、この時上野介は、のんびりと奥湯殿の湯舟につかって、甚だ穏やかならざる思索をめぐらしていた。

つまり――

（とてももの事、年明けまでは待てぬわい。今宵こそ、無理矢理にも、この場でねじり伏せて、お品のあの口、あの胸乳、あの統肌を思うさま弄んでくれようぞ）

――と、まあこんな事を考えていた訳だ。

そのお品は、しかし、この時すでに吉良邸にはいなかった。

上野介が湯殿に立つと、小林平八郎の申し入れで、義央の息在兵衛が、老女に命じてお品を引ッ立てさせ、隠密に行動して、千坂兵部の屋敷へ連れ去ったのである。

「石ツブテの一件以来、奥の者に命じて、それとなくお品の行動を看視させましたが、以来一向に異なる挙措もござ

藏臣忠容集特

りませぬ。この上は責め問いに致し、泥を吐かせるほか良策はないと存じますが」

と、これは小林平八郎が、千坂兵部に対する報告である。

「うむ。存分にするがよい」

兵部は事もなげに答えた。これでお品の運命は決したのである。

ピシリ。

ピシリ。

ピシリ。

馬鞭と青竹と細引——三種の責め道具が、交互に裸の肉を打つ、激しい打音が聞こえる。

兵部屋敷中間部屋である。

「どうだ？」

平八郎が顔を見せると、髭面の中間の一人が、うんざりした声で答えた。

「旦那、こんなしぶといアマはありやせんぜ——どんなに責めても、一言も口を聞かねえんでさア」

「うむ」

お品は、湯文字一枚で板敷の上に崩れていた。

無惨！

その白い背肌の上に縦横無数の血筋が走り、皮が破れ、点々と鮮血が散っている。

「やい。面アあげろ！」

別の一人が、海藻のように乱れたお品の黒髪を握って、ぐいと引き起した。

「解せぬ女子だな。おぬし身許に偽りはない……すれば、吉良家の家

来筋ではないか。何の為に、敵浅野の走狗となって間者なぞ働くのだ」

「浅野とは何のかかわりもござりませぬ」

「然らば申せ。誰のために、何をしたのだ。あの紙のつぶてには、何と書いてあったのじゃ」

「存じませぬ」

「はて、わからぬ奴だ。おぬし吉良が憎いのか？」

「はい！」

「なんと!？」

「上野介さまは、わたしの母様に懸想なされて、意に従わぬと見ると、ある事ない事難癖つけて父上様を苦しめ、果ては放逐なされた憎いお方。その為、父上様も母様も、浪々困窮のうちに果てなされた。憎い！」

「フン。それで、浅野の間者となり、旧主を裏切ったか」

「違います！」

「ほう」

「女は、恋するお方の為に命を捨つるもの。かねがね母様のお言葉でござりました」

「そうか、なるほど。では聞こう。その方の恋する者とは何者じゃ」

「……」

「言えぬか。恋する……フン、ぬけぬけと申しおったな……その恋する女の心が、どれほどに強いを試してくれるわ」

平八郎の眼が不気味に光った。

「御家老様から、存分にせいとの御言葉があった。このような小便臭い小娘一匹にコケにされてなろうか。弥八！」

声もまた、鋭く、底気味の悪いものになった。

「へい」

と、馬鞭の中間が答える。

「道具小屋に参って、滑車を持って参れ」

「へい」

「忠七！」

「はア」

と、これは竹笞の中間である。

「この女、湯文字を剃ぎ、手足重ねて前にくくし上げる」

「ふへへ」

「六蔵！」

「へっ」

こいつは、細引でお品を引っぱたい奴だ。

「囲炉裏に、どんと炭を入れろ」

「へえ？」

一体、平八郎は、何をはじめようと言うのであろう。

九、火あぶり肌

暗い中間部屋の空間に、白い肉塊が、鞠のように揺れた。

くくし人形。

いや、それは蠟人形のように美しいお品小町であり、しかし、中間部屋の天井から、滑車綱で吊りさげられて、鞠のように、丸くなった姿であった。

直下に炉。

山積みになった炭が、赤熱して、天井から吊り下ったお品の白い素肌に耐え難い熱気を送る。

パシッ。

時折り異様な音を発するのは、熱気に苦悶して総身脂汗になった——そのお品の汗が滴下して、赤熱の炭火に触れる音であった。

「女、尻から焼けて行くぞ。——が、殺しはせぬ。腰から下、赤剃け、ただれ、腐肉の痛……ふた目と見られぬ化物腰にしてくれるのじや。フフ、恋する男に逢うても、最早、枕を交す事もなるまいて。——いや、相手が顔をそむけて逃げ出す事必定……百年の恋も一朝に覚め果てる」

一流の剣士も、ときに鬼となる。平八郎の心奥にも、女人嗜虐の願望がなかったとは言えぬのだ。

「弥八！」

「へい」

「少々引けっ。この儘では殺してしまう。水を掛けて、やり直した」

「へっ」

お品はすでに、悶える気力も、呻く気力も失なっていた。暫く火から遠ざける。

水を浴びせかけた。

そしてまた、炭火地獄の責めがはじめられる。

「ち、ち、ち……チッ……あちッ」

炭火の上で、くくし裸形のお品が、再び苦悶にもだえ、揺れ、噛みしめた歯の間から、悲鳴が、唸りが、呻き声が洩れはじめた。

「あちっ、あちち、ひいーっ！」

「へへへ、たまらねえ。何てえ眼の保養だろ」

弥八が相好を崩し、下劣な声を発した。

「女がいいだけに、フエッ、こたえられねえやな」

と忠七が言え、

「声だ。声、いい声じゃねえか。女っ、もっと、それ、叫べ、泣け、喚け！」

六蔵も負けずに、お互い下司の証拠を見せ合っている。

さすがに平八郎は無言であり、じっと見詰めて、お品の精神状態を推しはかっていた。

が――

悶えつつ、呻きつつ、しかしお品に屈服の気配は微塵もなかった。

（――これほど、我慢強い女があらうか……）

小林平八郎は、おのれの敗北を感じた。

妙！

平八郎の眼が――否、六感が……と言うべきであらうか。フと、お品の苦悶の表情の中に、一瞬、喜悦――とも見られる、矛盾した信じ難い蔭を感取したのである。

（虐責を悦ぶ女であらうか――？）

「ばかなッ」

心に浮かんだ奇妙な考えを吹ッ飛ばすように吐き捨てると、

「止める！ その女はお前たちにくれてやるぞ」

叫ぶように言って、外へ飛び出した。

この時である。

門内が俄かに騒がしくなった。ワン、ワンワン……ワン、ワン……一匹や二匹や三匹ではない。少くとも二、三十匹は下るまいと思われ、犬群が、兵部屋敷に侵入したのである。

狂ったように四方へ散った。

「打つなッ」

「水だ。水で追っ払えッ」

門脇の隅に難を避けて、平八郎が下知した。

苦笑ものである。

一剣の達人も、犬には抗し難かった。生類憐みの令が出されている。迂濶に犬を傷つけては、切腹、斬罪はおろか、まかり間違うと上杉の家にまで累が及ぶのである。

夜。

暗い。進退が不自由である。

こうして、兵部屋敷は、ときならぬ犬群の侵入に、大混乱をまねがれなかった。

この混乱の間に、お品の姿が、煙のように兵部屋敷から消えた。

女人一人頂戴仕り候

文 珠 太 郎

墨黒々と一札、中間部屋に残されていたことからすれば、お品の消失も犬群の侵入も、もはや疑うべくもなく文珠太郎の仕事に相違なかった。

翌朝。

お品は、薄暗い、天井の異様に低い、狭い部屋で昏睡からさめた。

「ひどい目にあつたな」

「あ……あなたは……」

枕元で、あの、鮫鞘高兵衛――そしてまた地紙売りの男――である文珠太郎が笑っていた。お須賀、半三郎を誘拐したのもこの奴だった

が……

「凜とした美丈夫である。」

「女心は不思議なもの……。」

犬兵衛の犬檻から救われて、羞かしく、しかし、熱病の罹患にも似て、ゾクリと奪われた女心……。

「お品は文珠太郎を恋したのだ。」

「案ずるな。大したキズも残るまい」

「あの……あの……絵図は……？」

「うむ、手に入れた。お品さんのツブテの紙片——あれに書かれた絵図面の隠し場所……礼を言うぜ。場所さえわかれば訳アない。あくる夜、忍びをかけて、難なく頂戴に及んだよ……さ、お品さん、今少し眠るがよい。ここはわしの隠れ家で、案ずるには及ばぬのだ」

「はい」

ニコリ、しかし、やつれた痛々しい美貌のお品が、熱っぽい眼を閉じると、文珠太郎は音もなく滑るように姿を消した。

「安兵衛。いい物をやろう」

弥兵衛金丸と連れ立って、石町の大石主税の隠宅から帰路についた堀部安兵衛が、ポンと肩を叩かれたのは、それから一刻余りあとの事である。

「あ、高兵衛！」

無理矢理押しつけられた風呂敷包を手にして安兵衛が呼び止めたとき、文珠太郎はすでに人ごみの中にその姿を没していた。

煙のような男である。

「はて？」

堀部弥兵衛が首をかしげた。

「え？」

「今の男……」

「あれは、羽黒高兵衛と言って……」

「いや、久須十郎太。そうだ、確かに十郎太だ」

「——？」

「丹州の産で、丹州流忍法をよくする男。おぬしは知るまいが、以前亡き殿の寵愛を受けた浅野の臣だ」

「ほう！」

「もう十年の昔になる。暴犬を殺し、犬族保護の令に触れる所、殿のお情けで、表向き手討ちというていにして、その実、不浄門から解き放たれた男だ。剣もよくし、学もあり、忍者育ちにしては、出来過ぎた惜しい奴だったな」

「ふーむ」

複雑な気持で、風呂敷包を解くと、中から現れたのは、吉良邸の絵図面であった。

「や、絵図！」

「ふーむ」

今度は、弥兵衛が唸った。

さて——

この年十二月十四日、赤穂浪士四十七人、吉良邸討入の挙は、周知の通りである。

〔完〕

元

祿

二

筋

道

橋爪彦七

野崎耕作・画

噂ばなし

『おい……』

と、低声だが、かなりせわしく、となりの男に顎をしやくった。しやくられた方の男は、飲みかけた湯呑を置いて、急に、その方へ眼をやった。

『なるほど』

と、瞳に、かるいおどろきの色をながして、こちらへ、声だけで、

『たいした女だ。——が、あれア？』

『三ツ股のお藤よ』

『船渡頭の？』

『そうよな、あれでお前、鎧の渡しからこっち、あの女の息のかからね



藏臣忠容集特



え者は居ない——豪勢な姐御だぜ

『ふむ——』

と、小首をひねる。それも道理でいま、この葎簀張りの水茶屋に腰掛けて、箱崎稲荷の御神前に背をむけている三四人——遊び人らしいのが、ゆうべの博奕場かなにかの高声の話をぴたりと止めた。美しい女の姿が、つい眼の前の往来を、紅い蹴出しをちらつかせて通ってゆくからだだった。

『今日は——』

社頭の桜が散って、早咲きの山桜が、ひと片ふた片、どこからか風に乗ってくる午刻さがり、箱崎川の水面がよどんで、のどかな春のひとつときである。

片側町の網屋の店先を通りながら、お藤姐さん、水髪のしつとりとした頭をあげる『おや、姐さん、寄ってらっしゃいよ』と、女房が如才なく、

『どちらへ?』

『ほほ、いいところ』

『あらまあ……』

笑いをこぼして、薄化粧のときめきを匂わせる後姿が、土堤の往来を行く。

『なアるほどなア』

息をつめて、眺めていた男たち、急に、ほッとしたように顔を向けあって、
『まったくいい女だ、凄——ッてところだね』

『そうだよ、船頭頭にア惜しいというわけだが、どうして、あれで、界隈の女どもを、び

ッたりおさえているんだからねえ』

『どうだい御利益の方は?』

『ふ、ふ、ま、拝んでおくだけだね。俺たちじゃ、てんで齒がたたねえ』

『そ、そんなか?』

『そうとも、あれでお冠りかなにかで、あたしア三ツ股のお藤だよってなことになって、ずばッと肌脱ぎになどなってみな、背中にこう蟒蛇が狙っているなンぞ、凄よりお前、ぶるッと寒気がするぜ』

『ほ、ほんとかえ』

『嘘なものか』

『へーえ』

などと、噂ばなしに花が咲く。

眼にしむ娘

そのお藤が、箱崎橋を渡りかけたところで橋袂から声をかけられた。

『もし、姐さん——』

振りかえって、声の主へ、

『あたし?』

と、見ると、

生娘の本能は行手に何があるか知っていた。茶室造りの地下蔵に閉込められたお加代!

『ああ、ちょっと聞いてお貰い申したいことがある』

声の調子が角張っているが、結城縞の町人姿だ。お藤、さぐるような眼つきで、

『なんのお話しでしょう？』

『ぶしつけだが、あの娘のために、頼まれてくれませんか』

『……？』

『この川へ身投げをしようとしていたのを、通りすがりに危なく抱きとめ、わけを聞いても泣くばかりで、とんと手を焼いていたところですよ』

『それはまあ……』

お藤も、おどろいた様子で、きりッとした町人姿の若い男と、その男の云う橋袂で泣き伏している小娘とを、見くらべるように眺めたが、

『どうしたンでしょうね、若いのに？』

と、からだを捻じむけてきた。

顔を蔽った娘の肩が、こまかくふるえてしやくり泣いているのである。洗いさらしの縞の袴、よこれた帯の皺を見ても、娘の家が、生活が、すぐにお藤に読みとれた。

『どうしたツてのでしょうか？ 話は、ここじやなんですから、そうね、あたしとこへい

らしたら？ あたしが一人、ほかに誰も居ませんから、いいえ、悪くはしませんわよ。

口幅ったい云いかたですけど、この辺じゃちつと知られている三ッ股のお藤ですよ』

男は、お——という風にうなずいて、

『お藤姐さん……話にア聞いていたが、これアいいひとに会った。姐さんになら、安心してお願いが出来る』

と、会釈を投げて、

『それじゃ私は、これで消えさせてもらいましよう』

行きかけるのへ、

『あ、ちょっと——』

と、とめたお藤が、

『待って下さいな。なんでしたら御一緒に、むさくるしいンですけど、ほほほほ、それにあなたも、根ッからのお商人でもいらつしやらぬ御様子……』

『はッ、はッ、御眼が高い……が、そうしていられない私だ、というのは、身状を話さないとおわかりねがえないが、実はね……』

と、あたりを見廻して、

『私は闇の男、いそがしいからだです。そちらでお藤と云われたから、名を明かすのがほんとうだが、もとは士分で——』

『待って』

と、お藤が遮って、

『で、お屋敷は？』

『そいつア勘弁して貰いたい、主人の恥だ』

『ほほ、うれしいじゃありませんか、その心意気——それじゃあたしが云いましょう。お上屋敷は鉄砲洲』

『えッ』

『去年の春、江戸大城松の廊下で御刃傷、五万三千石をふいにし殿様らしい意地をとおした浅野さま』

『……』

『その御家中で伊賀流の達者、羽生剛蔵とおつしやるお方——』

『はッ、はッ、はッ、お藤姐さん、あんたア知っていなすったか？』

『ありよう云えばあたしの姉が、御殿づとめをしていましたねえ、ですがあたしはごらんのとお、親姉弟に反いた罰で、流れ渡世の船饅頭。いいじゃありませんか、ついそこが家なんですもの』

『これアおどろいた。その剛蔵と知られたの

特集 裏窓忠臣蔵

では、いっそ御厄介になるとしようが、主家断絶から宗旨を変え、からだにつけた伊賀流で夜の渡世、闇の世界をのし歩いているのだが、ふッ、ふッ、ふッ、とんだところで御白洲が立ったものだ』

『ほッ、ほッ、いいでしょう』

と、お藤が、剛蔵を眼でうながして、軽く娘の肩へ手をやった。

『ね、いらっしやいよ。もう親船に乗った気で』

『は、はい……』

と、娘が、ようやく涙をおさめていた。

剛蔵、妙に、この娘の動作が、眼にしみるように痛かった。いつかそれが、自分の身に受けとめる痛さとなるのも知らずに。

ひとのなさけ

それから、ものの一刻（二時間）も経ったろうか——

船艀頭のお藤は、箱崎橋から身投げをしかけたという娘と向きあって、しずかに話を聞いている。

さっき、一緒に立ち寄った羽生剛蔵の姿はもう見えなかった。

かすかに、風が運んでくる潮の香のする部

屋で、こうも、しみりと話を聞いているお藤は、これが、夜をひさぐ女達に君臨している女性かと疑えるほど、まじめで、真剣なものだった。

『へえ……。お前さんたちまで、そういうものかねえ？』

と、ばかに、感心している様子だった。

『お加代ちゃん——お加代ちゃんだったわね？』すると、お屋敷奉公がいやというのでなく、松坂町の吉良さまだから行きたくない——こういうわけだったのね』

『はい』

と、お加代は顔を伏せた。

聞けば、両親がすでに亡く、伯母の手元に引取られていて、その伯母から吉良家へ屋敷奉公を強いられたのだという。

——吉良様ッて、誰でも悪いお方だと云いますから——

これが、お加代が身投げをしようとした原因だった。

去年、浅野内匠頭が、吉良上野介に刃傷に及んだ殿中での珍事——この兇変が、内匠頭切腹、赤穂一藩取り潰しの運命を招いたものであったが、それから満一ケ年、高家肝煎りの職をしりぞいた相手の上野介が、何んと人

気の悪いことか。

むろん、お藤だとして、世の評判を聞かぬではなかったが、こんな生娘——まだ十六七のうら若い女性までが嫌っているとは、ちよつと想像もつかなかったのである。

上野介は、従四位上左近衛少将という高い身分で、柳営での席も上位だった。公儀への出仕四十九年、たいがいの人間の寿命ほどもつとめてきた彼——傲岸で、卑屈で、狡猾な性格が、鋭く研ぎすまされてきた老人に対して、内匠頭は、あまりに若かった。

しかも潔癖が、身の禍となった。勅使、院使の饗応——接伴委員として相役の伊達左京亮が上野介へ丁重な音物を贈ったのに対して浅野家からは、ほんの型ばかりの挨拶にすぎなかった。

これが、自然と、晴れの日指南役としての上野介が、左京亮へ心添えが濃密となり、内匠頭へ冷淡となり、そして最後のギリギリにきて、内匠頭の家を忘れ身を忘れた刃傷——しかも即日切腹、家名断絶の処分を受け、相手の上野介にはお構いなし——とあっては世の同情が、内匠頭にあつまるのは当然だったのである。

これが庶民に——女子供にまでおよんでい

たとしても、別にたいした不思議ではなかった。

お藤は、あらためて、お加代によって、世の中の風潮を見直した。

『こうしよう、ね、お前さんとうぶん家に居たら？ そのうち、折を見て、あたしが伯母さんに謝ってあげるとして——』

『あの、あたし、こちらさまに置いていただけます？』

『いいともさ、何かの御縁だろうし、それに羽生さんてお方との約束もあるしね』

『ほんとうに、そうしていただけるのでしたら……』

お加代の、その救われた嬉しさの表情は、世の中の裏の裏まで知っているお藤に、はつきりとわかるのだった。

（この娘、かなり伯母にこッ酷くされている——）

そして、一種の激しい同情と、こうした社会により見られない美しい人情とで、お加代を、まるで妹のように見るお藤だった。

刎頸の友

二三日過ぎて、例の羽生剛蔵が、両国橋を渡って、本所の堅川の通りを歩いていた。

『羽生じゃないか』

と、呼ばれて、眼をやると、もとの赤穂の家中だ。

『お、毛利か』

『久しいの、どうしている？』

『どうと云って、御覧のとおりだ』

『ぴったりと、板についた商人——というところ、羨ましいぞ』

『それアこつちで云う科白だ。おぬし達、例ので一本槍らしいな』

『うむ』

『太夫は御息災か、去冬、ちらと御見受けしたと思うが』

『うむ……』

『どうしたのだ、おぬし顔色が悪いが？』

『羽生、今さら愚痴めくが、貴公が同志だったとつくづく思うぞ』

『ほう……？』

剛蔵は、友の毛利小平太をつくづく見た。

（瘦せたなア）

と、思う。

自分は、赤穂の家中でも、ずッと江戸詰だったし、それに考えるとところがあつて復讐の血盟には加わらなかった。

君恩——それを思わぬでもなかったが、所

詮は、武士というものに、その階級に、見きりをつけていた剛蔵だった。

主家が亡びる！

晴天の霹靂にちがいがなかった。——が、その一事が、將軍家の意志というよりも、むしろ將軍家側近の柳沢出羽守吉保の建言が、多分に混っていたのではないか……？

無いこととは云わせぬのである。

（よし、そちらがそうなら、あッという目にあわせてやろう！）

そして彼は、最高の権力者に挑む肚をきめたのだった。

捨て鉢——かも知れぬが、なアに、人間こうと思ひ立って、やれぬことがあるものか、同盟して、大石内蔵助を盟主にして、吉良を狙うのもいい、……が、俺は、そうした行動で主君の怨みをはらそうとはしない。一本立ちで、もっと大きなところを、高いところを狙ってやろう——いや、彼等がこしらえている社会を、その組織を、裏から廻って粉碎してくれよう！

それには自分を消すことだ。どんな社会の階級にも、自分というものを置かぬことだ。つまり、自分を闇の人間にする！

御主君とともに、自分も亡びる——自分も

屍となりおおせる！

これだったのである。

いまでも、小平太の痩せた姿を見ると、
（どうだ、いっしょにやらないか？）

とも、云いたい気持だった。むろん、小平太が、知るはずもない行動だし、それに、相手が、武士とか、家名とかに、重大な意義を感じている場合、こちらから明かすことなど、以てのほかだということも、ちゃんと計算に入れて、羽生剛蔵だった。

『なア、察してくれよ羽生、太夫はというと百何十里もの上方だし、貴公だから云えるのだが、いつ一挙を行うことが出来るか……』
『わかる——が、大勢でやる仕事だ、あせるのは禁物じゃないか』

『それを思つて、堪えるのだが、相手には上杉という後楯がある、万一、米沢にでも移されたらと、その懸念もあるしの』

『毛利、その心配はいらん』

『え？』

『吉良では、新しく土蔵の普請をしているぞ』

『土蔵を？』

小平太が、はッとなった顔つきだった。

『上杉が引取つて、米沢へ連れてゆくなら、

なんで、土蔵など新たに作るものか』

『……？』

『諸君がだ、復讐をするものと見て、屋敷うちに、鉄壁の備えをする——これだぞ毛利』

『そ、そうか、それアいいことを教え

てくれた。羽生、どうだろう、

相生町——ついそこだ、

前原が米屋をやつ

ている店が

ある。

寄つて行つてくれんか、もちろん、同志という意味でなく——』

小平太は、剛蔵の顔色をうかがうようにし



て云った。

剋頸の友だったのである。事実、小平太ほど、剛蔵の知能を知る者はなかった。考えれば考えるほど、一挙には、剛蔵を加えたいのである。

（今からでもおそくない！）

毛利小平太の胸には、こうしたときめきが湧いてきているのだった。

——が、剛蔵は、いやと首を振って、自分とはもともと異分子だからとことわってから、『しかしなア、参考に話すが、吉良では、しきりに美人をさがしているぞ。これアどうしたものかな？ うむ？ 土蔵のことは別として、吉良の美人さがし——だ、考えてみる必要があるはせんか、とは云え、これアそちらの領分だ。主家退転の町人、羽生剛蔵には用のない話』

『羽生、近いうちに会ってくれんか』

『貴公にならだ。そう、柳島の妙見堂へ来てもらおう』

『妙見堂？』

『来ればわかるよ』

云いきると、剛蔵、さッと歩き出していたまるで、風のような男なのである。

柳沢吉保の脈

これは、珍しいことである。

松坂町の屋敷を出た駕籠が、神田橋内の柳沢吉保の屋敷の門をくぐった。

乗っていたのは、云うまでもなく上野介である。

彼が、柳沢の屋敷を訪れることは、稀なので、多くは、用人の松原多仲が、使者として来ていた。

浅野との一件で、世上の噂がかんばしくないために、御役御免をねがって、隠居をしたのだったが、養子の佐兵衛佐の家督相続は、まだ許しが出ていなかった。

しぜん、その催促をかねたのもあったが上野介の今日の訪れは、さらに、別の用向きもあったからなのであった。

客間に通されて待つほどもなく、吉保が出て来た。

『よく来せられた』

会釈をくれて、無難作に坐る吉保は、公儀の権力を掌に握る人とも思えぬ和やかさだった。

老人の癖と、日頃の追従とで、上野介は、かなり言葉数が多く、その都度また、いろいろ

ろと表情が変化した。だが、吉保は、絶えず微笑をふくんで、うむうむとうなずくのだった。

どんなときにも感情をあらわさぬ吉保だったし、だから、その微笑の蔭にかくされている彼の意思は、たいいていの場合、相手に、はつきり読み取れぬのが、あたりまえなのである。

だが、老獺な上野介はそうでない。

（機嫌がいいな！）

と、見て取ると、

『実は、……手前身寄りの者の娘でござりますが、こちらさまでお召しつかいいただければと存じまして、御意見を伺いにまいった次第でござります……』

と、云い出したのだった。

『ほほう……』

吉保は、顔だけで笑った。つまり、女を贈るという意味なのである。そうと知ってか吉保は、暫くだまっていたが、

『それは、儂にでなく、権太夫に話してはどうか』

と、答えた。

『は、御用人の？』

『うむ』

藏臣忠容集傳

と、吉保の声が洩い。

(真ッ向から女のことなど、何を途惑ってこの老人が——)

そういう気持が、口吻にまであらわれるのだった。

かねて、漁色の自分を、吉保自身でみとめてはいるが、こう無様に申し出られると、かなり不快をおぼえるのが人情だった。

肚では、上野介ほどの者が云うのだから、おそらく均齊のとれた美女だろうと思えるの

だったが、それは、吉保のころの下草を崩やすだけで、じかに、返事の出来るものではない。

上野介は、狼狽した。

その狼狽を蔽うために、また口数をきく老人を、吉保の眼が、さげすんで見ていることも見のがせなかった。

やがて上野介が、

『御多用中を……』

と、すこし座をさがって云い出した。

『や、よろしいではないか』

『いえ、また、そのうち伺いまする』

『左様か……』

吉保は、手を打って近侍を呼んだ。上野介が、襖の外に出ようとしたとき、

『いまのことは、なおよく、権太夫に話しておかれるがよろう』

と、気をもたせるように云うのを忘れなかった。

『は』

上野介は、振り向いて、もう一度おじぎをした。

(脈がある……)

と、うなずいて、帰りの駕籠でゆられながら松坂町の屋敷にとどめてある女たちを、あれかこれかと、はやくも考えはじめていた。

若い剛蔵

昼は、蟬時雨が、降るように聞こえていたが、夕陽がかけると、ぱったり止んで、上げ潮の匂いがただよっていた。

さっきまであった風がやんだせい、肌にしっとり汗が、かなりの暑さである。

小網町の横丁を、少し行ったところ——そこまですたすたやってきた剛蔵が、

『あらッ』

と、馳け出しそうにして声をかけたお加代

を見て、ああそこだったなと、お藤の家の前に立ちどまった。

『どうぞ……おはいり下さいまし』

羞かみのとれた、優しいほほえみで、お加代が云った。

『や……』

と、云ったが、剛蔵、おもわず、眼を見張った。

これはたいした変化だと云えるのである。

幾月——と、まだ指折るほどの間に、なんとお加代の綺麗になったことか。

あのとき、身を投げようとして、押えた腕のなかで、身もだえをしていた娘が、これほどの美しさとは、どう考えても記憶になかった。

人は——ことに若い娘は、生活環境のかわりようで、実にのびのびと見ちがえるほどになるものだった。

『ね、こちらへ……』

お加代は、臆病らしく、だが、うれしそうに重ねて云った。

『では、ごめんをこうむるとして、お藤姐さんは？』

『お出かけですの、でも、あの……』

『……』

剛蔵は、黙って、草履を脱いだ。

『いつも、姐さんと、お噂をしていますの、
どうしていらっしゃるのだろうって……』

『は、は、お藤姐さん、ひどい奴だと云って
やしませんか、あんたを、抛りこみッぱなし
にして』

『いいえ』

と、お加代は、振りかえって顔を染めた。

冷たい水で、手拭を絞ってきて、そっと差
出す手元が、細かくふるえているのである。

『どうぞ……』

『や、これはありがたい』

剛蔵は、顔から首筋まで、ていねいに拭い
ながら、薄暮の明るみで、いっそう美しく見
えるお加代の姿を——顔を、ぬすむように眺
めた。

それからずつと二刻の余も、剛蔵は、お
藤を待った。——が、夜をかせぎのその人は
どうやら帰らぬあんばいだった。

『おねがいがあるのだが——』

剛蔵が、不意にそう云った。

『え?』

どきりとなった様子で、だが、いささかも
悪意のない眼で、

『あたしにですの?』

と、お加代が、ききかえした。

『そうなんだ。これアお藤姐さんに話してか
らと思つていたのだが、お加代さん、どうだ
ろう、お前さんひとつ思いきって、松坂町の
吉良様へ奉公にあがつてくれませんか。いや
無理を承知での話、簾から棒に、こう云った
だけではわからないだろうが、すこし私に
考えのあることなのだ。是非、うんと云って
貰いたいのだがね』

一気に云って、剛蔵は、烈しい眼で、お加
代を見た。

『はい』

と、お加代は素直に、しかもおどろいたこ
とには、

『あの……あなた様のおいつけでございま
すなら……』

ちらと、こちらを見て、伏せた面の、なん
といじらしかったことか。それは、女が、身
も心も捧げようとするときの、あの複雑な表
情を、一瞬の間に、相手に知らせようとする
差らいの努力だったのである。

剛蔵は、ガッしとそれを受けとめねばなら
なかった。いや、思いもかけず、心臓をひと
突きにされた苦しさで、ぐら……と心がよろ
めいた。

それほど、羽生剛蔵も、二十五という齡に
にしては、その道に若かったのである。こと
にその翌る日、柳島の妙見堂の傍で、易者に
化けている蓍簪の下で、捜しあてられたお藤
姐さんに、

『罰ですよ剛蔵さん。御都合しだいで、自分
の用にだけ使つて、あの娘の想いも叶えてや
らないなんて、なさけ知らずちやありやし
ない』

叱られても、

『いやア、そいつアどうも……いやア……』

と、柄にもなく、襟くびを叩く剛蔵だった
のである。

老猿の手

松坂町の吉良の屋敷とは、手をのばせばと
どきそうな相生町の米屋——その奥で、五兵
衛と変名している主人の前原伊助と、これも
美作屋善兵衛と名乗っている行商人の神崎与
五郎と、それに浪人木原武右衛門と称してい
る毛利小平太とが、額をあつめて密談のとき
をきざんでいたが、

『どうも腑におちないな、それほど絵図々々
とさわぐなら、屋敷のうちへ入ってみればい
いのだ』



小平太が、こう云った。

『屋敷うちへ?』

与五郎が、眼を見張った。

『そうだろう、夜という調法なときがあるのだ、誰か塀を乗り越えて……そうだ、誰彼というよりおれが行く、なアに吉良の屋敷がどれほど広いッて』

『まあ待て、無謀だそれア』

と、伊助が止めて、

『この間、おれがさんざん酷い目に遭ってきたのだ。米を届けに行っただぜ。十人の余も居たか、上杉の附人にちがいないのだが、夜だって交替で、見張っているらしいのだ』
『そこを探ってくるのだ、空店へ踏んこむの』

とちがうぐらいは心得ている』

『まあまあ、そう荒っぽい考えはよしたがい』

『そうかなア、おれは最初から、それがいちばん早手廻しだと思っているのだが……』

『はッ、はッ、手廻しにもよりけりさ』

『……』

小平太は、そこで口をつぐんだが、さて、夜になると、どこからか梯子を見つけてきた彼が、吉良の屋敷の裏手の塀へ、そっとそれを立てかけている姿が見受けられた。

ちようどその頃——吉良の屋敷では。

左近衛少将上野介が、用人の松原多仲から何か耳うちをされて、

『そうか、では鈴を鳴らすまで——』

『は、手前は暫時……』

『うむ、退ってよい、大儀々々』

にやりと笑うと、居室につづく寢所に入った。そして、床の間の壁の一端に手をやるとすーッと微かな軋りをたてて壁が開いてゆく仕掛け普請、むろん、その奥に、地下へくだる坑道が、黒く、ぱっくりと口を開いているのだった。

上野介は、しずかに階段を降った。足数ならば三十歩ほどの忍びの路——いく度か歩き

馴れたと見えて、立ち停ったところで、彼が
手捜りにどこかを押した。

すると、釣車戸ががらりと開いて、裡から
ささッと光りが流れてきた。部屋なのである
さらにおどろくのは、地下のこの部屋が、地
上の屋造りとすこしも変らぬ造りになってい
ること、畳、襖、壁そのほか、すべてが利
休ごのみの茶室——といった按配なのだ。

それはいい、だが、もう一つ眼を臨るのは
この部屋の一隅に、腰のもの一重の裸身の女
が、後手にいましめられて、かがみこんでい
たことだった。

上野介の顔に、みだらな微笑がうくと、一
歩々々、その裸身に近づいた。

百目蠟燭のあかあかとした明りがそれを照
らして、見ようによつては上野介の瘦軀が、
地獄の幽鬼のそれのようでもある。

『どうじゃ女、思いかえして儂に抱かれて見
ぬか?』

『……』

『じらすものではないぞ、この年寄をな』

『……』

裸身の女は、無言だった。じつとからだを
固くしている傍へ、むずと坐った上野介が、
そつと女の肌に触った。

『痛かろうにの、このように結えられて……
ふ、ふ、ふ、多仲め、また思いきつて縛った
ものじゃて』

手を廻して、背筋を撫でる。

そのときだった、女がさつと顔をあげた。

あ! お加代……

断じて、錯覚でないことは、

『帰して!』

と、叫んだその声が、たしかに彼女に相違
ない。

『ふふふふ……帰しましょう。が——それよ
りも、儂の自由になった上で、そちには結構
な玉の輿が待っているのじゃ。それ、柳沢様
といつての、天下の諸侯ののど首をおさえて
おいやる殿様に、いやというほど可愛がられ
る福運が向いてきている。どうじゃ、この上
のことはなからうかの……』

そして、老猿のそれよりも怖ろしい上野介
の手が、指が、統のようなお加代の肌に、無
惨な触覚をたのしんでゆく……。

揺れる大地

一方。

地上では、いま、小平太が、猿づたいに梯
子をよじて、忍び返しの一隅をもぎ取ると、

ぱつと塀のうちへ飛び降りた。

おりから、雲が割れて月——

自分の影法師が、長く地に這つ

て、高家吉良殿の屋敷の棟々が、

明暗にくっきりとえがかれた。

『お、おれだな——』

鞘造りの母屋と見える建物へ、

ツツ……と小平太の影が走る。

その途端に、長屋つづきの雨戸

が開いて、

『曲者!』

と、声が走った。

南無三!

小平太、踵をかえして、建物の

蔭へ——すぐ、その背後に、たた

たた……と足音がひびく。

こんな場合、窮地にあると、人は、不思議

な意力がはたらく、小平太は、月影にくらい

建物の縁の下へ颯のような素早さでもぐりこ

んだ。

その行動のすぐ後で、三四人のいそぎ足が

通り過ぎるのが見えた。

『しずかに……』

と、云って行く声がした。

(何で?)

特集★裏窓忠臣藏

小平太がいぶかるまでもなく、これは、あの
の小心な老少将——主人上野介をおどろかせ
まい心づかいであったのだ。

(なるほど……)

気づくと、小平太は、あぶない中で、くす
りと苦笑をもらした。

だが、この大胆な彼の余裕を、微塵に叩き
こわすものがあつた。

むんず！

闇の縁の下で、彼は、襟首をおさえられた
のだった。

あッ……

危なく、あげようとした声をおさえた小平
太が、必死のものがきに移ろうとしたとき、

『動くな！』

と、低いが鋭い声。

『……？』

『足音を聴くのだ。逃げ道はないのだぞ！』

そして、ずるッ……と、三尺ばかりも奥へ
引きこまれた。

はッとなつて、さすがの小平太が、その怪
力と行動の烈しさに、思わず愕伏して、

『だ、だれか？ あんたは？』

『おれだ、わからぬか』

『あ、羽生……』

『そうだ、剛蔵だ』

答えてから、剛蔵が、

『猶余はならぬ、足音の消えているうち、あ
の裏門まで走るのだ』

ふくみ声で、だが激しく、そろ——と、か
らだをずらせてきた。

『今だ！』

駆け出した——いや、まさに駆け出す態勢
に移る瞬間だった。

むく！ と二人のからだを持ち上る感じの
次に、ど、ど、ど、ど——と全身におそろし
い衝撃をうけて、建物が、いや大地そのもの
が、船のように揺れ動いた。

地震！

咄嗟に感じると、いまは、隠れている場合
でない。

『地震だ——ッ』

わざと大声をあげて、剛蔵が走り出してい
た。小平太が、これも、おなじく剛蔵になら
っていた。

眩しいお加代

こちらは、地下の密室——

いま、しどけなく膝のくずれたお加代の全
身へ、枯骨のような上野介が、火のように燃

える獸心だけで、蔽いかぶさろうとした刹那

『うわッ！』

と、枯骨が、飛びあがった。

むろん、地震とすぐ感じると、もう獸心ど
ころのさわぎでない。

彼だとして、生命の危険はなにものにも替え
られなかった。

襖仕立ての扉を押すと、もう一つの隠し通
路がぽか——と暗い口を開けた。

『そ、そちも来るのだ！』

わななきながら、好意とも未練ともつかぬ
意志で、背中にむすんだお加代のいましめを
解いた。

『さ、ここから……上は土蔵じゃ』

ふッ……蠟燭を吹き消すと、這いあがる斜
めの階段を、お加代もつづいた。

上では、多仲の声として、

『お、お、お上ッ、お上が……』

と、うろたえる叫び声がする。

無論、土蔵の扉が飛び散っていて、もうッ
と捲き起っている土煙り、

『灯、灯を消してッ、灯を消して——ッ』

叫び声があがる。

『火のもとを』

とも喚く。

そして、建物の外へ、人、人、人——が転がり出るなかへ、緋の腰巻だけの妙齡のお加代が、土まみれの裸身のままでよろけ出た。

そこへ——月の光りの明滅を縫って、ああ剛蔵が、

『お加代さんかッ』
と、馳け寄った。

『あ、あ、あ……』

夢か——と、お加代は、眼もあやに、まだ揺りかえす天変地妖のなかで、ひしと、力強い手にすがりついたのだった。

地震も熄んで——翌朝。

三ッ肢の洲の先を、大川の河心へ、しずかに流してゆく船が一艘。

しばらく漕いで苦をはねると、舳に立った人影がある。

羽生剛蔵、颯爽と、

『お藤姐さん、出てみませんか、昨夜の地震にひきかえて、ごらんなさい、日本晴れのいいお天気だ』

『ほほ……』

と、お藤も笑ってきて、

『お加代さんにも、なんとかおっしやい。あなたのお蔭で、すんでのこと、あったら珠を

きずものにするところだったンでしょう』

『いやア謝まる。剛蔵この度は一生に一度の大縮尻、まさか柳沢に贈るまで、あの老猿が手をつけようとは考えなかったのです』

『ほッ、ほッ、無事で柳沢さまに贈られたにしても、このあんばいじゃあぶないものでしたわね』

『いや、そうなれば、剛蔵ここに大悲願を起すもくろみがあったのです。いや本当のはなし、断じて、柳沢輩の餌食にさせるものですか』

『なんとか……ほッ、ほッ、ほッ、お加代ちゃん、これに懲りて、もう羽生さんの云う通りになっちゃいけないよ』

『はい』

と、お加代が顔を見せた。

『でも……でもねえ……』

そして、剛蔵の方へ、まぶしそうに視線を流すお加代を見て、

『あ、あれだもの、ほッ、ほッ、ほッ、もう知らないからあたし——』

お藤、あかるく笑いながら、
『惜しいわね、この船に毛利さんが居ないのが……』

船は行く——洲崎の沖へ。

その船影を、御船手組の御番所の前から、じっと見送っている毛利小平太の姿を、船の三人は気づかなかった。

そのことあって暫らく後——
小平太も、いつか恋を得て、盟約に背く人となってしまうた。(おわり)



絵

をお送り下さい!!

◎新らしいセンスを持つ画家の登場すべき時代になりました。裏窓の誌面を、より以上飾るためにも、今こそ好機です。

◎皆様の中で、こんな場面を……と云う御希望もあると思いますが、そのような場面の挿絵をお送り下さっても結構です。

◎裏面に住所氏名明記のこと。採用の作品には謝礼を送ります。

裏窓編集部

あぶちっく
さすへんす

こんばんわア



★彼女は自分の顔にあきると、すぐ新しい顔ととりかえに行つた。そのたびに新しい人生が始まるのだつた。

鳴海玄吉

都築峰子・画

1

千文（ちふみ）は生れたとき、まるまるとふとって、とても可愛い女の子だった。はじめての女の子だったし、とりあげの助産婦をはじめ、千文をみたまねりの人たちが、「とてもいいお子さんですね。美人になりますよ」

とか、

「二姫二太郎と言って、理想的ですね」

そうかと思うと、

「大きくなったら、映画女優になるといいのだ。御両親は、そうなったら左うちわだ」

などと、口々にほめそやすので、

「どうして、どうして。なかなか……」

と、口さきではけんそんな見せるもの

腹の中では、

「ひよつとすると、この子はひろいものかも知れない」

と思うのだった。

上の二人が男の子で、女の子は千文がはじめてだった。父親の達三は郵便の集配夫だったが、すがり気をよくして、

「ほんとにうちは、一姫二太郎だな」

「でも、一姫二太郎っていうのは、いちばん上が女の子で、あと二人が男の子のときを言うのでしょ。あなた」

「順番なんかどうだっていい。女一人に男二人なら一姫二太郎じゃないか」

「それはそうだけど……」

名前をつける時、達三は凝りに凝って、七日のあいだというもの、食事をするあいださえ、そのことを考えて、ろくろく御飯がのどに通らない様子だった。自分が集配する郵便物の宛名や差出人の名前も、いままでにない注意をはらって、むさぼるように読んだ。

ある日、

「おい。出来たよ。名前が……」

いきおいこんで外から帰ってくると、産褥にいる妻にむかって、

「ちふみ、千の文だ。千のラブレターがくる

ほどすばらしい女になるという意味もあるし俺の職業も匂わしてあるのだ。どうだ。いいだろう。」

「郵便屋の娘だから千文なの。変って、おもしろいことは面白いけど……」

彼女のつもりでは、何子、と言った平凡なところを考えていたらしい。しかし、床の中で、

「ちふみ、ちふみ」

とくり返して見て、

「そうね。悪くないわ」

やっと気に入ったらしく、かたわらに添い寝している赤ん坊をかえりみて、さっそく、

「ちふみ、ちゃん」

と呼びかけたりしている。おかしなものでそうなると、その女の子は、生れる前からちふみと名づけられる宿命にあったように、いかにちふみらしく見えるのだった。ところが、はじめの誕生日をむかえるところから両親たちが、

「おや？」

と思うような、容貌の変化が、徐々にちふみの上にあらわれはじめた。

「どうしたのかしら。こんな顔って、あたしの系統には誰もいないわ。誰かに似てそうなものだけ……」

「俺の系統にだっていないよ。例の、突然変異ってやつかな」

「冗談いつてる場合じゃないわ。女の子だけに可哀そうよ」

「そうかと言って、持って生まれたきりようだから仕方があるまい。なあに、赤ん坊のうちには、顔がいろいろ変わるんだ。としごろになれば、けっこうよくなるよ」

「そうかしら。そうだといいいけれど……」

なるほど、二つになり、三つになるにつれて、ちふみの顔は、いくらかずつ変っていった。

「おや、今度はこんな風になってきたぞ」

達三たちは、まるで植物の変種をでも見るように、その変り方を、あるいは喜び、そうかと思うとがっかりしたりしながら見まもっていたが、ちふみが四歳になるころには、両親とも、彼女の容貌ということに対して、しだいに期待を失っていった。変えることは変るので、

「もしや」

と思わせるのだが。ちふみの容貌のなかに

ある、或る悪い要素はもう固定してしまっているばかりか、むしろだんだん助長されてゆくようにさえ見えた。

「鬼ッ子ね。親に似ぬ子だから」

「そんなことを言うもんじゃない。せつかうまれた子じゃないか。それに、顔かたちだけがすべてじゃない。教養で、ある程度、顔だって変わってくるのだよ」

庭先であそんでいるちふみを見ながら、父と母は、そつとそんな話をしていた。ちふみという、どこかみやびたひびきをもつその名前が、いまでは浮きあがってしまっていて、むしろ逆に、皮肉な効果をもたらししていた。

しかし、ともかく、ちふみは育つことだけは順調に育っていった。そして、高校二年になっていった。

「年ごろになれば……」

という、両親の期待も、この時はすでに裏切られていた。高校生の頃までは、目立たない、くすんだような存在だった女の子が、社会に出て、一人前になったとたんに急に花が咲いたように美しく変貌する実例がよくあった。おしやれをし、自分の個性を発見すること、ねむっていた美の可能性が引き出されるのだ。だが、そうなるためには、美に変質

する可能性のある、未完成の要素がなければならなかった。ちふみには、かなしいかな、それがなかった。すべてが悪く固定してしまっていて、飛躍する可能性の入りこむ余地がなかった。全身の均整でもとれていれば、顔の欠点がかなり補われたにちがいないのだが彼女は、それにさえめぐまれていなかった。すなおな、むしろおろかしいほどすなおな性質だけが、たった一つのとりえだった。それと、救いは、ちふみ自身が、まだそれほど自分の容貌というものを、気にしていないことだった。ところが、高校二年のころから、無理やりに、そのことを彼女に意識させるような、いろんなできごとが、次々と起つたのである。

3

美しくない生徒は、先生やそれから級友たちになさえ、もてることが少いだった。二年生の秋の運動会の時だった。百メートル競争で彼女がびりになって走っていると、校庭がどッと湧いた。

尻をふりふり、ビリを走っている彼女の様子が、いかにもおかしかったので、ぶえんりよな観客たちは、世にもおもしろいショウを

でも見るように、笑い声を立てたのだ。それがどんなに、少女の心を傷つけるかを知らずに……。

また、ある旅行の時だった。列車の中で思いの席を占め、はしやぎまわったり、たべ物を交換し合っている級友たちからはなれて、ちふみは一人、別な席にすわっていた。そこにはもう一人の級友が座っていたのだが「ちよつと、たのむわ」

そう言つて、ほかの席へ遊びに行つてしまった。そして、向うのほうがおもしろいと思えてもう三十分以上も、帰つて来なかった。いちど、水筒をとりがちふみの席にかえつてきたその級友は言つた。

「もし誰か乗つて来て、ここに座るんだつたら、座らしてもいいわ。あたし、向うに席があるの」

その級友が行つてしまうと、ちふみは、見知らない中年の男と二人だけで、膝をつき合せる恰好になった。その男は、濃い色ガラスの眼鏡をかけた請負師風の男だったが、だいぶ前から、窓の外のをしきを見るような風をして、チラチラとちふみに視線をながしていた。その視線は、ちふみの顔にむけられていくかと思うと、そこをすべつて、制服のスカ

トの膝小僧のあたりに落ちてゆき、ながいこと、そこに止っていた。窓の外けしきに視線が向けられている時でも、心はけしきを見ているではなかった。その証拠には、その視線はすぐちふみのところに戻ってきて、胸や、膝小僧や、脚のあたりに、しつこくつきまといっているのだった。

「この娘は、仲間はずれにされて一人ぼっちだ。可哀そうに——、しかし、まずい顔をしているもんだな」

男の顔が、そう言っていた。しかし、同情しているのではなかった。一人ぼっちにされて淋しがつている、その心のウツロにつけこんで、自分の淫らな関心を満足させようとしていたのである。

男は、新聞をひろげて読みはじめた。が、新聞を読んでいるのではなかった。上眼づかいに、蛇のようなしつような視線で、ちふみの様子をうかがっていた。

ちふみは、ねむたくなった。とんとん、とつとんとん、と単調なリズムをききむ列車の轍の音をきいているうち、いつか、うなだれてコックリコックリとやりはじめた。下半身に、無数の虫がはうような異様な感じをおぼえて、ちふみははッと目をさました。新聞を

ひろげた下で、男の手が膝のところを這っていた。醒めたちふみの目を見て、男がニヤリとわらった。

ちふみは、はじめたようにおどろいて、わなわなふるえる手で、しずかに男の手をおしのけようとした。しかし、その手にはおかしいほど力があつたし、全身がしびれたように硬直して、自分のからだのくせに、自分でどうにもならなかった。男は逆に、もう一方の手で、ちふみの手をにぎってきた。

「おじさん。やめて……」

言おうとしたが、のどがひつついて、うまく言葉にならなかった。乾いた唇がこまかくけいれんし、顔は酔ったように赤くなっていた。

もし、その時、教官がみんなの様子を見に廻って来なかったら、男のいたずらは、もつと執拗に、もつと露骨になっていたかもしれない。が、ちょうどその時、教官が、

「誰か、ぐあいの悪い人はいないか」

と言つて、廻ってきたので、さすがのその男も、手をひっこまして、何喰わぬ顔で新聞を読みはじめた。そうしながら、色眼鏡の下から、おそろしい眼で、ちふみの様子をうかがった。

「この娘っ子、先生に言いつけるかな」と、いうように——。

が、ちふみは黙っていたし、席を変らしてくれと教官に言い出す気配もなかった。

しかし、教官はちふみの様子をふと目にとめて、

「前川さんどうした。ぐあいでも悪いの？」

「いえ、なんでもないんです」

それだけいうのが、やっとなつた。泣き出しそうになつて、窓外へ目をそらせた。教官は、

「おかしいなあ」

というような顔をしていたが、「どれ。先生もここで少しおしゃべりをしていくかな」

ちふみの横の、空いている席へ、腰を下した。通路を距てた向う側の席ににぎやかな四人組の連中も、いっせいにこっちを向いておしゃべりをはじめた。それには、さすがの中年男も、いたたまれなかったと見えて次の駅で、コソコソと下車してしまったのである。しかし、ちふみの心は、暗く閉ざれて、先生や級友たちのおしゃべりの中へも入ってゆけなかった。

「美しいからいたずらされたのではない。み

にくいから、辱かしめられたのだ」

彼女は、漠然とではあるが、そのことに気づいていたのである。そしてこのころから、

「ああ、美しくなりたい」

という願望が、おそろしいほどの執拗さと烈しさで、彼女の心に巣喰いはじめていた。

4

ちふみが高校を卒業にした年、母親がガンで亡くなった。ついで、父親の達三が、郵便の集配に従事中、消防自動車にはねられ、そのショックで失聴し、廃人同然になってしまった。近所では、「ちふみさんは鬼ッ子だ。一家につきつぎと災難を呼びこんでいる」

などと、蔭口をきく者もあった。

父親は退職して家にひっこんでしまった。

恩給や災害扶助金があったし、ちふみの二人の

兄たちは兄たちで、それぞれ勤めていたので一家の生計は、そう困ることもなかった。しかし、父親はあの事故いらい、一度に二十も年をとったように老いこんでしまったし、失聴のほかに、頭脳にもいくらか変調がきて、もはや完全な廃人だった。中心を失った感じで家の中にはしだいに陰気な影がひろがりは

じめた。兄たちは兄たちで、自分たちのことだけに忙しかったし、てんでんばらばらだった。そんな中で、ちふみは職安を通じて、ようやく就職することができた。同じ級友たちの中には、さらに上級の学校に進学する者もあったし、デパートとか、一流の会社に就職したものもあった。しかしちふみの場合は、



そんな夢はもてなかった。

なんともなんとも就職に失敗したあげく、江東のはての、ちいさな螺子工場に、やつのこと入ることができたのである。

工員が三十人ばかりいたし、事務所には職員が五人ほどいた。女は、ちふみのほかに、艶子という先輩がいた。

先輩といっても、ちふみと同じ年である。

もう、二年も、この工場につとめていた。

高校も卒業していなかったらしいが、ソロバンがうまく、人との応待もてきばきとしていて、たんに古いというだけではなく、いろんな点で、ちふみを圧倒していた。第一容貌の点で……。

そこへ入って、四ヵ月たったころ、ちょうど決算期をむかえていたので、帳簿の整理がいそがしかった。ある日、艶子が休み、ちふみは、相沢という経理の男と二人で居残った。相沢は四十五六になるが、四五年前に妻と別れてから、ずっと独身でいる男だった。「ああ、もう九時だな。そろそろしまいか」相沢は時計を見ながら言った。それから、ふたりでつれだつて外へ出た。街へ出ると相沢は、

「御苦労さんだったね。お腹がすいたろう。」

ギョーザを喰つていこう。うまい家があるんだ」

と言って、一人で先に立って、トコトコ歩いてゆく。

ちふみは、そんな風にして、男から誘われたり親切にされたりしたことはなかったためずらしかった。それに、相沢は年輩の男だから、信頼しきっていた。

相沢がつれていったギョーザ屋というのは妙な家だった。一階は普通の椅子席だが、横手に階段があつて、靴を脱いで二階に上るようになっていて。二階には、三畳くらいに仕切った小間が、四つほどあつた。

そこへ、ギョーザとビールがはこばれた。

酔がまわつてトロンとしてきた相沢は、唇をペロペロなめながら、

「俺はずっと、あんたを見てたんだ。一生けんめいやれば悪いようにはしない。社長は若いから、俺のいうことは、なんでもきいてくれる。金の出し入れだつて俺はすっかり委されてるのだ。だから、一生けんめい、やんなさいよ」

おかしい論理だが、相沢の論理を要約すれば、俺は実権者だから、俺のいうことさえきいていけば、悪いようにはしない、ということ

とらしい。相沢のいう「一生けんめいやる」ということは、いったいどういうことなのかとにかく相沢の気に入られさえすれば、悪い結果にはなるまい、と、ちふみはあまり冴えない頭で判断した。そして、大人の世界というものは、なるほどそんなものかと感心もしたし、相沢にこうしてギョーザをおごられてゐるのは、自分も大人の仲間入りをしたということなのだ、と思った。

相沢に無理やりにいっぱいだけ吞まされたビールの酔で、頭がぼーつとなつていた。いつもの、容貌についての劣等感が消失しておおらかな気持だった。

そのとき、相沢が、さりげなく手をにぎりにきて、

「可愛い手をしているね」

それから、じつと出方を窺っていたが、「俺は艶子よりあんたが好きなんだ。あんたが入ってきた時からそうなんだ。この子は、仕込めば、いい社員になって……」

言いながら、不意に抱きよせて接吻した。ちふみの頭は、酔と惑乱がいっしょになつて、まとまった思考力を失っていた。

「艶子さんより私が好き……きつと、いい社員になる、一生けんめいやる……」

そんなきれぎれのことを考えながら、からだはしだいに抵抗力を失っていった。しかしそうした意識の中でも、「私は艶子さんに勝っているんだわ。私でも勝つことができるんだわ」という自負のようなものが、快よく彼女をゆすりつづけていた。

5

相沢は事務所ではケロリとしていた。そして給料日には、相変らずもってもらしい顔をして、給料袋を渡してよこした。そのくせ、一定の周期をおいて、帰りを待合せては、「ギョーザを喰いにゆこう」と誘うのだ。はじめてギョーザ屋の二階に行った時、あんなことがあったので、

「ギョーザを喰いに行こう」

というのが、ひとつはあのことの隠語のようになつていた。ギョーザも喰わなかったわけではない。いつも、例の二階の小部屋でギョーザを喰べ、口のまわりをニトニトにしてから、口説にかかるのである。相沢がここを気に入っているのは、ギョーザを好きならばかりでなく、ひとつはどこよりも安直なためであつた。相沢は、そういうケチン坊だつた

のである。

ちふみは、相沢に表面では従順だったが、内心では少しずつ反撥していた。しかし相沢によつて女にされ、多少は女のよろこびが判るようになってからというものの、いままでなかった、妙な自信のようなものが出来かけていた。神は醜女にも平等に女のよろこびをあたえ給うたのだ。ちふみは、相沢をのりこえて前進しようとしていた。しかし、そのためには、もっと美しいことが必要なのだ。うつくしいものに対する憎しみと憧憬は、かえつてちふみの心のなかで、烈しくなつていた。じつは彼女は、最初の給料をもらった時から整形手術を受けるための金を、少しずつ貯めはじめていたのである。

金が貯まったので、彼女はまず隆鼻術の手術を受けた。手術の結果は、あまり上乘なものではなかったらしい。しかし、とにかくほとんど陥没していた小鼻のあたりから尖端にかけて、たのもしもりのあがりが生じていた。そして驚いたことには、その鼻のために、顔全体の印象が、まったく変つてしまったことである。彼女は、別人のような鏡の中の顔をみながら、

「よし。今度お金が貯ったら、二重瞼の手術

だわ」

と思つた。男ならボディ・ビルで肉体の改造ができる世の中である。美空ひばりを見よ！人工美の極致にかがやいているではないか。

ちふみは、徹底的に自分を改造しようと思つた。

ちふみの隆鼻術は、事務所でもちよつとしたセンチションを起した。家では、大して関心を持たなかつた。夜も朝も時間がかけちがつてしみじみ顔が合わないせいが、兄たちは四日も五日も、そのことに気がつかなかつたもともと、この、そう美しくない妹に、関心なんか持つていなかった。六日目の朝だかに二番目の兄がやつと気がついて、ネクタイを結びながら、ちふみをジロリと流し目に見て、「なんだ。隆鼻術か。しゃれてるじゃねえか少し小づかい貸せよ」と、言つただけだつた。

相沢は相沢で、例の、

「ギョーザ喰いに行こうや」

で、ちふみを誘つたが、ギョーザ屋の二階で立膝のままデレデレとちふみの横顔にみいるながら、

「これがちふみちゃんかな。えらく勝手がち

がうぜ。しかし、いい女になったな」

いまにもっといい女になるわ、そしたら相沢さんなんか相手にしない、というように、ちふみはわざとツンとした横顔を見せていたのである。

それから二ヶ月ほどして、ちふみは今度は予定通りに二重瞼の手術をうけたが、これは失敗して、もう一度やり直した。どうも、手術運はあんまりよくないらしい。

そして、二重瞼の手術をしたころから、螺



子工場にもなんとなく通うのが、おっくうになっていた。相沢との関係も、救いのないものになっていたし、第一、この連中がちふみが手術をほどこす前の、ほんとうの顔を知っているということが、ちふみにとっては面白くなかった。初対面から、あたらしいマスクで接したいのだ。それやこれやで、ちふみは螺子工場をやめてしまった。

6

無駄づかいをしないで、せっせと貯めこんでいたので、金はかなりの額になっていた。

このころからちふみは、手術魔とも言いにくい、手術熱にとりつかれ、整形手術をするところを、あちこちと評判をききつたえては、たずねていった。大げさに言うと、東京で、この種の整形術を行っているところで、ちふみのたずねてゆかなかったところはなかったと言っている。ちいさな木造ビルの屋根うら部屋で、モグリのような形でこっそり「色の白くなるクスリ」を売っていたり、「二重瞼器」を売っていたりするとところまで情報をききつたえては、たずねていった。ある医師は、ちふみに整形手術の相談をかけられ、その顔をみておどろいて言った。

「こりや、メスの痕だらけだ。この顔はいじくられすぎている。これ以上いじるのは無理ですよ。お嬢さん！」

しかし、そんなのは良心的なほうで、いかがわしいのになると、金さえもらえばお客さんとはかり、かんたんに手術にに応じてしまうのである。

一方ではちふみは、全身美容というのをやっていた。文字通りに脂汗をしぼるようなはげしい錬磨の連続だったが、彼女は歯を喰いしばって、それに耐えた。そして、苦しめば苦しむほど、自分が美しくなるのだという、合理を通りこした、迷信的な錯覚の中に陥ちこんでいった。顔にしてもそうである。チャチな手術でやつつけてしまうので、すぐ欠陥が出てきたし、倦きるのも早かった。彼女は自分の新しい顔にあきると、すぐ顔を「とりかえ」たくなった。そして、それをなんべんも繰返すことが、美へちかくことだと思っていたのである。

その間、彼女はちょっと勤めたり、またやめたり、そうかと思うと、飲み屋のようなところにもちょっと手伝いに出たりしていた。だんだん男ズレがしてきていたし、その相手の男も、何人か変っていた。はやい話が顔をつ

くりかえるたびに、勤めがかわり、相手の男が変っていると言ってもよかった。たとえば前にいっぺん関係のあった男と、街でばったり会ったりする。彼女のほうでは、すぐそれとわかって、

「今日わア」

とちかずいてゆくのだが、顔が変わっているのに、男のほうでは、それがちふみであるとはすぐには気がつかず、

「はて、誰だっけ？」

と、しばらくのあいだぼかんとしている、といったぐあいである。そうして、やっとなふみだと気がついて、

「なんだ、君か。変っちゃっているから、誰かと思ったよ」

「そう。そう言えばそうね。あたし、あなたとおつきあいしている時は、どの顔だったかしら」

といったぐあいである。

そのころ、彼女にはあたらしい恋人ができていた。民夫といった。いままで交渉のあったどの青年よりも、彼女はこの民夫が気に入っていた。そこで、彼女はある重大な決心をした。

「そうだ。民夫さんのために、あたしの顔を

もう一度つくり変えよう。いままでのような小細工じゃなくて、今度は徹底的にやりなおすんだわ」

そしてそのために、一定の期間、民夫と逢わないことを決心した。今度逢うときは、まったく生れ変わった、あたらしい女として彼の前に立ってやろう。そして、民夫を驚かしてやろう。そのために彼女は、それまで貯めこんだ金の大部分をつぎこんでしまうつもりでいた。

手術を受けた。結果は失敗だった。顔はひつれて、いままでよりかえって、醜くなっていた。彼女は泣いて医師を詰問した。医者

は恐縮しながら、彼女に言った。

「最初から無理だと言ったではありませんか。失敗の可能性があるかも知れないということ、あらかじめお断りしたではありませんか。それを、あなたが失敗してもいいとおっしゃるから、私も異例の措置としてお引受けしたのです。しかし、全力はつくしました。その結果がこれです。でも、そのひつつれさえなくなれば、大体はあなたの注文通りになっているのですよ。クリーニング屋だって、アイロンのしわ一つぐらいは、残すことはある」

「クリーニングと整形美容はちがうわ！ たった一つしかないあたしの顔よ」

「不始末は重々お詫びします。手術料はいただきます。何でしたら、一月くらいたったら、もう一度修正手術をやってみましょう。」

「間に合わないわ！ 民夫さんと約束した日まで、あと一週間しかない！」

彼女は半狂乱で、医師の手から手術料をひったくるようにしてとび出した。

あと一週間のうちに、ちやんとした顔を取り戻さなければならない。しかし、こうなつては、引受けてくれる整形外科医は、まづいかなかった。その結果、彼女はとうとう、医師の資格も何も持っていない、非合法の施術師を探しあててことに成功した。

「あと五日間ですね。その人に逢うまでに、間に合えばいいんですね。よろしいですよ。お嬢さん！」

こういう暗黒の施術師は外国映画などにはよく出てくるが、日本にもいるとは思わなかった。が、このときのちふみには、この男がキリストのように有難くも神々しくも見えたのだった。

手術は終わった。そして、繃帯はとり除かれ

た。その手術は、いままでに経験したことのない怪奇な過程と方式を持っていたし、おしまい、奇妙な注射を打ったことも、今までとは変っていた。しかし、繃帯の下から現れた新しい顔は、大体において満足すべきものだった。その男は言った。

「さあ、これでOKです。どうか、あなたの恋人と、幸福な時間を持って下さい。大丈夫もつはずです。では御機嫌よろしゅう」

「もつ？」

彼女は心の中で反問した。もつとは、いったいどういう意味だろう。しかし、民夫に逢うのはもう今晚に迫っている。そのよろこびの前には、かすかな疑いも掻き消えてしまった。

そのころ彼女は家族から独立してアパートの部屋を借りていた。それで、アパートに帰ると、何度も自分の顔を鏡でたしかめ、ようやく安心して、夕方までぐっすりねむった。

夕方から土砂降りの雨になっていた。が、雨など問題ではなかった。起きたした彼女は鏡の前で入念に化粧した。手術直後とは、いくらか顔が変わっているように感じられたが、それは寝起きのせいかも知れない。このころから、顔の皮膚いっさいに、面でもかぶった

ような、へんな硬直感の起っているのが、気になったが……。

土砂降りの中を、彼女はレインコートを着フードをかぶって出かけていった。時間がないのでタクシーをとばした。車の中で、コンパクトを忘れて来たのに気がついたが、もうとりに帰っているヒマはない。車が民夫のいるアパートの前に止り、タクシー代を払う時運転手がおどろいたように彼女の顔を見た。

「手術のせいだわ。きつと……」

と、彼女は思った。

「美しくなるためなら、なんでもない」

階段を駆け上って、民夫の部屋のドアの前に立ち、ノックする。ドアがあいて、民夫が顔を出した。ちふみは一種の感動をもって、

「こんばんわア！」

という、民夫の胸に抱きつこうとした。が、どうしたことだ。民夫は脅えたように一歩、二歩——と後退するではないか。それに迫るように、部屋の中にじりじりと入っていた時、民夫が慌てて横に身をかわしたので

民夫の背後になった、洋服ダンスの鏡が現われた。ちふみは、鏡の中の自分と対決した。そこには、名状すべからざる、一個のバケモノが誕生していた！

その夜ふけ、豪雨の街で、タクシーにはね

られた女があった。重傷というより、瀕死だった。救急車のくるのも待たず息をひきとったが、その奇怪にふくれあがった相貌に、目撃者たちはおどろいた。ところが、息をひきとった直後から、そのバケモノじみた顔が次第にまた変化しはじめた。生体が機能を止め

た瞬間、皮膚の中で吹き荒れていた薬効もまたその猛威をふるうことを止めたのだった。そして、雨にうたれながらしだいに変化してゆく死顔は、何時の間にか、みにくくはあるがバケモノではない、あの以前のちふみの顔を、とり戻していた。



編集部より

ます。

○愛読者カードに詳しく御記入下さいまして有難うございました。一つ一つ御指摘下さいましたことや、御希望、お好みのあり方等を集計致しまして、今後とも出来得ます限り御満足のゆく雑誌に行きたいと思つて居ります。より以上の御鞭達を願ひ上げます。

○当方の誤植で、十二月号の地方売価が百三円になつて居りましたが、百二十三円の誤りでございました。お詫びと共に謹んで訂正致します。

○雑誌の直接購読、書籍の御注文等の折に、御住所を楷書でハッキリとお書き下さいますようお願い

致します。地方の地名や町名には

ちよつと判断出来ないような所も

ございました、誤配や遅配の事故

が起きますと、お互いに困ります

ので、何卒、その点をよろしく御

配慮下さいますよう(営業発送係)

○代金引換払にて御注文になる方

がありますが、代引は当社では取

扱っておりませんので、何卒、他

の方法(現金書留、小為替、振替

等)で御注文いただきますようお願い

願ひ申し上げます。(営業部)

○次号二月号の発売は十二月二十

三日の予定ですが、それと相前後

して、「裏窓増刊号」を発売いた

すことになりました。今までの増

刊は小型本でしたが、今回は、本

誌と同じA判で、内容も今までの

増刊とは違ったものです。エロチ

シズム、サスペンス、ミステリー、

アブノーマル、等が渾然一体とな

った編集で、御期待にそむかない

雑誌を作り上げるべく努力いたし

ております。

○別頁にもおしらせいたしました

が本誌三十二年三月号以前は在庫

ありませんので、御注文くださら

ないようお願い致します。

○本誌に対しまして、御気づきの

点、ならびに御要望等あります節

は、御遠慮なく、ハガキでも結

構でございますからお知らせ下さ

いますよう、お待ち申し上げます。

○本年度も、何卒よろしく。

○毎号一方ならぬ御支援を賜りまして有難うございます。

○本号もお買い上げ戴きましてありがとうございます。次号も何卒、お買い洩れなきよう、早い目に御予約下さいますと幸でございます。

黄^よ泉^み路^じの影^{かげ}



東 宇 治 川 龍
啓 三 郎 ・ 画

江戸へ出たおはる

暮れなずむ茜色の空をみあげ、一つ目橋のほとりで、おはるはホッと大きく溜息をついた。思案にあぐねてしまったからだ。考えてみれば、少し無鉄砲すぎた。江戸は赤穂とちがって、こうも広いものかと、おはるは今さらながら呆れてしまった。

一人旅で二十日近く、夫恋しさのあまり江戸までやってきたおはるだった。半年前、思ひ出したように「江戸にいる、心配はいらない、もう半年もしたら戻る」と、それだけの便りがおはるの元へ届いた。

「ひどい方」

おはるは恨めしげに口の中で呟いた。茅野三平との仲はほんの一月ほどの契りにおわってしまった。せっかく一緒に晴れて夫婦になったと喜んだのも束の間、夫の三平は江戸詰めになった。そしてあの騒動。早打ちで五日



た。

その時
だけさすが
の三平も、おはる
をいじらしく思ったの
か、そっと抱いてこういっ

儀助の姿もみえなくなった。おはるは兄の儀助が大野と一緒に逐電したものと信じていたので、それが遠因となって、三平が自分をすてたものだと思いこんでしまった。

ところが、泣きはらした顔を、化粧直ししようとして鏡を手にとった、鏡篭の中に、一通の書置が残されていた。三平の手だった。

三平はこう書き残していた。大学様を擁立してお家再興を願うため、同志のものと江戸へ出る。一年ほどは帰れぬだろう。儀助のこ

とは何とも思っていない。気を永くして吉報を待つように、そしてお前のことは片時も忘れないと書いてある文を、おはるは抱きしめてしばらく畳に顔を伏せて泣いた。

逢いたくなかった男

暮れなずむ茜色の空を再びみあげ、おはるはホッとまた大きく溜め息をついた。三平の文には（江戸の本所にて）とただそれだけ記してあった。矢も楯もたまらず、お

江戸から三平が刃傷を赤穂へもたらした。おはるにしてみれば、内匠頭の刃傷が、そのときは嬉しかった位だった。というのは、これで自分、自分は夫と一緒に暮せると思ったからだった。

だが、それも夢。城内で毎日毎日評定につぐ評定。やみ呆けたように疲れて帰ってくる三平は、案じ顔で尋ねるおはるの問いにも答えず、すぐ横になって眠ってしまった。

町の噂におはるは聞き耳を立てた。受城使を迎えて一戦交え、城を枕に侍たちが討死にし、亡君に殉じるというような噂が立ったときおはるは三平の胸にとりすがって泣いた。

飲まされた仕込酒に自由を奪われて、おはるは帯にかけられた手をふり払う力も失せていた

特集+裏窓忠臣蔵

はるは江戸の本所をたずねれば、夫の三平にあえるものと思つて江戸へ出てきた。しかし本所だけでは全く雲をつかむと同然だった。今日で二日目。その二日目も暮れようとしているが、三平の所在は全く分らない。

「おはる殿ではないか？」

背後から自分の名を呼ばれ、はっとしておはるはうしろを向いた。

「ああ、やっぱりおはる殿！」

相手の顔をみて、おはるは心持挨拶するよゝに面を伏せたが、心はおだやかでなかった。いやな人に逢ってしまった。それがおはるのいつわらざる気持だった。

「いつ参られたな」

おはるの顔をまじまじとみつめ、生島源之丞は、こいつ、ますます美しくなったわいと心の中で舌をまき、三平の奴と、腹の底でのしつた。

生島は、大野九郎兵衛の仲の小太郎の朋輩。だからよく大野家へ出入りし、儀助に金をやって、おはるの兄を薬籠中のものにしてしまった。

「どうだ、おはる。生島様がお前を嫁にとおっしゃっていらっしゃるのだが」

おはるは一ぺんに首を横にふった。おはる

はもうそのとき、三平と夫婦の約束を交わしていた。

「お前がお重役の生島様の御子息の嫁になってくれれば、この俺もお取り立てにあずかつて——」

「いやです。あんな人、きらい」

生島源之丞は、儀助の口から、おはるが嫌いといったといわれ顔を真赤にして怒った。

「たしかにそう申したのだな。この源之丞の左足が少々短かいので、それで馬鹿にしたのだな、おはるは」

子供のとき、柿の実をとろうと木にのぼりおちて足をくじいてから、源之丞はびっこになってしまった。大小を左にたばさむので、余計びっこが目立つ。それが源之丞を暗い男にしてしまった。しかし、源之丞は負けん気の質だったので、人にまけまいと、据物斬りに精を凝め、据物斬りの第一人者と目されるところまで、腕を上げた。

「おはる殿、全く神のおひき合せというもの。そなたの兄、儀助も江戸におるのだ」

えっと思わず驚きが声となって口から迸し

った。

「兄さんが、江戸に——」

てきた。

「兄さんは、本当に、江戸におるのでございますか」

源之丞は、まぶしそうにおはるの顔をみつめて、すぐに返事をしなかったが、はっと我にかえると、

「いる。それも、すぐそこだ。逢いたくないか？」

わざとはぐらかすような口調で、源之丞はおはるの気をひいた。

「逢わせてくださいまし」

「よし、ついてくるがいい」

先に立つて、源之丞は、ひよこひよこ歩き出した。そして、悪知恵の働く源之丞は、肚の中で、素早く次から次へと段取りを立てはじめていた。

闇の兇刃

綿打ち直します、と書いた紙が、半分剝がれかかって夕風に揺れている。本所の棟割長屋。そこが前原伊助の仮りの住い。行燈をかこんで額をよせている男が三人いた。一人はいうまでもなく、前原伊助。扇子折りに身をやつしているのが神崎与五郎。魚屋の棒手ふりが茅野三平。秋風が破れ障子のすきから吹

特集 蔵臣忠窓裏

きこんできて、行燈の灯を時々消しそうにする。

三人は、先刻からじっと身動きもせず、灯をかこんで腕組みしたまま考えこんでいる。

やがて、伊助がかんではき出すように、ぶつりといった。

「分らん、わたしを前原と知って斬ってきたのかどうか、それが分らんのだ」

三平が顔を上げた。

「後を、つけてきたのだというのか、前原？」

伊助はちょっと空をみつめていたが、

「つけられていたような気もする何しろ闇夜だった。わたしは、手むかいをせず、相手の正体をみてとうろと思つたのだが——逃げられた」

今度、口をひらいたのは神崎与五郎だった。

「今年になってから、これで七人目になるところだったのだな、前原」

「そうだ。須貝、猪上、豊池に穂積親子。千早、そうしてわたしが

七人目になるところだったんだ」

「相手は一人か、二人か？」

こう尋ねたのは茅野三平。

「それも分らん。とにかく相当使える奴だ。

うまくかわしたので、腕の代りに片袖を斬りおとされたが、おそろしい太刀筋だ」

再び三人はおし黙って、考えこみはじめた。

正体のしれぬ敵に、赤穂浪士が狙われはじめたのは、今年の二月からだ。最初の犠牲者は、須貝源三郎。須貝は、かつぎ蕎麦屋を業として、吉良邸の様子を探っていた。

空っ風の吹きすさぶ二月十三日の深更。荷のそばに肩を切られて死んでいた須貝の死体が発見された。辻斬りが時々夜闇にまぎれ、新刀だめしをするという噂が立っていたところだったので、須貝の死は辻斬りの犠牲として忘れ去られてしまった。むろん、茅野たちも、はじめはそう信じ、かげながら同志の冥福を祈った。

だが月をこえて三月。猪上徳兵衛と豊池三左衛門が中一日おいて、正体のしれぬ兇刃に仆れると、赤穂の人々は首をかしげた。辻斬りかもしれない。しかし、辻斬りとだけ言い切れぬしこりが胸に残った。

そして五月。親子して甘酒売りに身をやつていた穂積昌六、孫七が、一夜同時に兇刃に見舞われて仆れたのを聞くと浪士は急遽ひそかに会合し、互いに意見を交わした。意見は百出したが、何一つ結論は出なかった。ただ、大多数の意見としては、ひよっとすると上杉の手のが、浪士の先手をうって、浪士を抹殺しにかかっているのではないかと、十人のうち八人までが信じてしまった。といって、兇刃に仆れたものは一様に即死しているので、相手が何者ともしれぬから、これとて憶測の域を一步も出ない説。とにかく、用心にしくはなし。もし、影のような相手に出逢ったら、何とでもして相手の正体を捕らえ、同志に報告して、改めて対策をねろうということに決った。

ところが、兇刃は、そんな同志の打ちあわせを壁の耳のようにこっそり聞きとってしまつたのか、それ以来三月ほど浪士を誰一人狙わなくなってしまった。

これで、みな赤穂の人々は、やっぱりあれは只の辻斬りで、上杉の手と思つたのは自分たちの思いすごしであつたのだと、気をゆるめた。

そのすきを縫うように、今度は前原伊助が

すんでのことに兇刃に仆されかけるといふ事件が勃発した。

悪待二人

兄の儀助がいるといわれ、おはるが案内された処は、ある武家屋敷内の長屋の一軒だった。

「おい帰ったぞ」

生島源之丞が外から声をかけると「おう」と答える男の声。

「珍しい客を案内した。茅野のお内儀、おはるさんだ」

「何だと」

戸をあけて姿をみせたのは、兄の儀助ではない別人。どこかでみた顔だと、おはるが軽く礼をして、心の中で誰だったかと思ひあぐんでいると、その男の方から答えた。

「久しぶりだな、おはる殿、大野の小太郎だ」

おはるは吃驚してしまった。又、いやな奴が一人ふえたと、後悔の臍をかんだが、顔にはそれと見せず、小声で生島に、

「あの、兄は？」

おはるに背をむけていた源之丞は、おはるに気どられぬよう、ちらと大野小太郎に目く

ばせしてから、

「大野、儀助は、まだ戻らんのか？」

「ああ、うん、お、おっつけ帰る頃だ」

「そうか。では、おはるさん、中へ入って待っていたらよろう」

「は、はい」

多少の懸念もあったが、生島一人でなく、大野がいたので、おはるは少し安心した。この大野小太郎とて、信用のおける人間ではない。前からの評判はよくなかった。お城勤めも碌にせず、酒と賭博に日を送っている道楽息子。おそらく、親の九郎兵衛の片棒をかじりだ、藩札のごまかしで懷中を肥した一人にちがいない。

「のオ、大野、全く天の助けさ。はなしを聞くまでもない。このおはる殿は、いとしい三平君を慕って、わざわざ赤穂から御出府さ、はっはっは」

まるでからかうような口ぶりで笑う生島源之丞。

「それはよかった。茅野にもしばらく逢わん。さぞ逢いたいであろうな、おはる殿」

小太郎にまでこういわれ、おはるは答えようもなく頬をそめて顔を伏せたが、はっとして、

「大野様、あの茅野の只今のお住居を御存知なのでございましょうか？」

大野小太郎は、まるで答えていいかというように、生島源之丞の顔をみた。源之丞はのみこみ顔にうなずくと、

「知っておる。明日御案内しよう。そのうち儀助も戻ってくるはず。今夜はゆっくり旅のつかれを休めてな。儀助と物語して夜をあかそうと、それはお手前の勝手だが」

こういうと源之丞は立ち上がり、おはるを次の間に案内した。

「ここが今夜のおはるさんの部屋だ。夕食はあとでここへ運ばせよう。今、婆さんが風呂へ行っているので、少々時刻はおくれるが——」

いいすてると立って行った。

そのまま、生島源之丞は、和野小太郎を手招くと外へ出た。

「生島、どうするつもりだ。いもしない儀助が戻ると、口から出まかせをいったりして」

なじるように小太郎が小声でいうと、

「そこは何とでもいいくるめるさ。それよりも茅野だ」

「茅野がどうだと？」

「知れたこと。儀助などはほんの刺身のつま

三平で釣っておいて、おはるを引きとめる、一石二鳥だ」

「分らん。何が一石二鳥なのか？」

「いやしい笑いが、源之丞の口元にうかんだ
「小太郎、おぬし、吉原の誰袖に近頃大分御執心と聞いた。どうだ、今夜あたり誰袖に逢いに行つては」

小太郎は、ほんと小膝を叩いた。

「なるほど、俺がいては邪魔だというのだな。そりゃア誰袖にも逢いたい。だが、近頃とんと水の手が切れたでな」

「いうには及ぶ」

源之丞は内ぶところに手をいれて、一寸さぐっていたが、小判を三枚、小太郎の手に握らせた。

「おぬし、このごろ大分金まわりがよいな。

浪々の身にしては金まわりがよすぎる」

もらった小判をふところへねじこみ、小太郎が誰袖の顔を思い出したような目つきになったところへ、

「おや、お二方、お出かけですか」

風呂へ行っていた飯炊き婆さんが戻ってきた。

「出かけるのは大野一人だ。客がある。すぐ飯だ。そうそう酒はまだ少し残っていたな」

「はいはい、まだ五合ほど」

「よし、じゃア大野、誰袖によろしく伝えてくれ」

口寄せ変化

巫女が、絳弓をびい
んびいんと引き出すと、
神崎与五郎は、茅野三
平の顔をみて、苦しそ
うに顔を歪めた。与五
郎は、すんでのことで
吹きだすところだった
からだ。巫女の「口寄
せ」など、実理派の与
五郎は、てんから相手
にしていなかった。し
かし、どうでもと三平
がさそうので、面白半
分に後に従ってきた。
巫女は七十近い老婆
だった。

「死霊だな？名は？」
「猪上徳兵衛と申し



ます」

三平が巫女にこう答えたとき、与五郎は思わず三平の顔をみた。

巫女はうなずくと梓弓をとり上げた。

部屋の中には、人魂のもえるような燈芯のあかりが一つだけ、ほんやり灯っている。

梓弓は相変らず、びいんびいんと鳴りつづける。

しばらくは、誰の声もなかった。

しかし、そのうち、地の底からの声のようなものが低く聞こえはじめた。

「誰だ？ わたしを呼んでいるのは？」

巫女が口を動かしているのは確かだが、声は女の声と思えない。

「猪上か？ 徳兵衛だな？」

「そうだ。誰だ？ わたしを呼ぶ者は？」

三平は我しらず膝をのりだしていた。

「三平だ？ 茅野だ！ 猪上、さぞ無念だったろうな？」

与五郎は、ふんと吐の中でせせら笑った。

無念だろうなと聞けば、相手は無念だと答えるに決っていたからだだった。たしかに与五郎的は外れなかった。声は答えた。

「無念！」

三平も、与五郎も、その声を聞いてどきり

とした。声の調子が、とたんにすっかり変ってしまったからだだった。はじめは男の声で、それも年のころ四十近い声だったのが、急にうら若い、女の声に変わってしまったからだだった。

「猪上ッ！ 徳兵衛だな？」

声は女の声で答えた。

「ちがいます、私です」

「私？ 誰だッ！」

三平が思わず大声を出した。

「恨めしい、三平様！」

三平の身体が、がたがたと震えた。

「お、おはる！」

与五郎も、思わず坐り直した。

「あなたをお慕いして参ったのに、お目にかかれず、先へ参るのが、無念で——」

「はる、先へ参ると？ どこへ行くのだ？」

答えはなかった。

たたみこんで三平が訊く。

「はる、どこへ行くというのだ。はる！！」

声は、今度はかすかだった。

「待っております。きつと来て下さいますものね、あなた」

ばかりと梓弓が畳におちた。後を追うように、巫女も畳の上に、音を立てて倒れた。口

寄せは、それまでだった。

「馬鹿馬鹿しい。茅野、いい加減にしろ。もっとも私も、声が変わったときは、一寸ぎよつとしたが、あんなことは信じられん。嘘だ、芝居だ」

帰る道で、与五郎が、うなだれて何か考えこんでいる三平の肩を叩いて、励ますようにこういった。しかし、三平の胸は重かった。

「いけません、そばへよれば、舌をかみます」

そのころ、おはるは必死になって身を守ろうとしていた。だが、無理にすすめて口に入れられた酒の中に、何か薬が仕込まれていたらしく、身体が自由が利かない。生島源之丞は、もうおはるの帯を解きはじめていた。

「噛むと、ふん、噛めるものなら噛むがいい」おはるは組みしかれながら、何度も舌を噛もうとしたが、顎に力が入らない。

「何も、そうこの源之丞を嫌うことはないさ。好い夢をみさせてやる。それに、はじめから

蔵臣忠窓裏集特

お前は、この源之丞の妻になるさだめだったのだ」

源之丞が触れた。おはるはもう声も出なくなっていた。声がかれたのではなく、心が死んでしまったからだ。ただ、その生きている身体を。

密談

「入ってもよいか」

外から声がかかった。誰袖は下へおり、大野小太郎は絹蒲団にくるまって、腹ばいで煙管をふかしていた。

「誰だ？」

障子をあけて、ぬっと姿をみせた男をみて小太郎は床の上におき上った。

「これは小林さん」

小林と呼ばれた男は、びしやりと障子を立て切った。

「こら、小林と呼ぶなど、あれほどいっておいたじゃないか。俺は、大森だ」

小太郎は苦が笑いをすると、頭に手をやって、照れたように詫びた。

「いや、失念失念、失念申した、大森氏」

「氏呼ばわりもよせ。女は？」

「当分上っては来まい。話か？」

「そうだ」

「よく俺がいると分ったな」

「蛇の道はへびだ。しかし、この間はしくじったよ。始めてだ。もう一太刀と思ったが、人の気配がしたので止めにした。まずかったかな？」

「前原に、姿をみられなかったろうな？」

「それは大事ない。あの男も使える男か？」

「伊助は、金奉行だ。金勘定はうまいが、腕はどうかな？」

「お主と同じにか、はっはっは」

「止めてくれ」

小太郎は腐ったように、ぼんぼんと煙管を吐月峯に叩きつけた。

「冗談はおけ。話とは何だ？」

小林とはじめ呼ばれ、あとで大森といい直させた男は、声をひそめた。

「京から便りはあったか？」

「あったよ、親爺から——」

「何と？」

じろりと小太郎は相手の顔をみると、右手を袖に引っこめ、ふところから突き出して、掌をひろげた。相手はいやな顔をした。

「又、金か？」

小太郎はうなずくと、

「前の仲間を売るのも金ゆえさ。前原たちの仇は人間だが、俺の仇は山吹色の小判だ」

「今はない。拙者も武士。後でやる。はなせ」

「大丈夫だろうな？」

憎たらし小太郎は念をおすと、

「大石は、島原で馬鹿さわぎをしている。だが、これはうわべだけの策略だ。まちがいない。月に一度か二度、二三人江戸から大石に連絡をつけているそうだ」

「やっぱりな」

小林は一人で合点した。そして小太郎の耳へ口をつけると、

「他言するな、大野。俺も近々、吉良家へおさしまわしになる様子だ」

「何だと？」

「しっ」

小太郎の声がいきなり大きくなったので、小林が手で制した。そして、そっと障子をあけて、廊下の気配をうかがう。

その袖をぐいと引いて、小太郎は畳みかけるように、

「と、すると、吉良家のつけ人になるというわけか？」

「そうだ。そうになると、今までのように、辻斬りに出るわけに行かなくなる。今までは、

特集 蔵臣忠窓裏

この小林平八郎の一存の辻斬りで済む。しかし、俺が吉良家のつけ人になり、赤穂の浪士を斬ったとわかれれば、事は面倒

「そうだな」

大野小太郎、腕組みをして考え込んだ。

「どうだ、大森氏。そうなるまでに、もう二三人殺る気はないか」

「殺ってもいいが、おい、大野。」

お主はどうして俺にそう斬らせたがるのだ」

「前にもいったじゃないか。俺は大石たちの仲間が憎いのだ。亡君の仇を討ってどうだというのだ。」

家来のことも考えず、自分が口惜しいということだけで吉良殿に斬ってかかり、三百余人の侍を扶持からはなれさせた殿が俺は恨めしい。だが、殿は責を負ってお腹をめされた。これでいいじゃないか。何もその殿の仇をどうのということはない。俺の親爺のいった通り、幕府に恭順の意を表し、家来の仕官を願ひ出るのが大石の役目じゃないか。その役目を忘れ、何が仇討だ。うまく討てるかもしれない。だが、吉良様の方はそれじゃアどうな

さる気だ。又、仇を討つ、そして、仇討の仇討では、全く際限がなくなる。だから俺は、お主に頼んで猪上達を斬ってもらった。自分たちの仲間が、誰に斬られたかおぼろ気にも分れば、前原たちだって少しは考えるだろうと俺は思っているからだ」

小林平八郎はうなずいた。

「それも一理だ。平地に乱をおこすのはよくない。まして徒党を組んでの仇討は、上をおそれざる所業だ。大野、いいとも。吉良様のところへさしまわされるまで、あと何人でも斬れるだけ斬ってやる。斬って、暴拳をいましてやるぞ」

小林平八郎は、どうやら自分で自分の言葉に酔ってしまったようだった。

奇遇

大野小太郎が戻らないのをいい幸いに、昼はおはるに猿ぐつわをはめて柱にしばらくつけた生島源之丞。飯炊きの婆さんには、縁者の狂人だと嘘をつき、婆さんが帰ってしまうとおはるを責めた。

おはるは、もう狂っていた。髪は乱れ、襟も裾もはだけ、眼はあらぬ形をうつろにみているだけなのだ。

面白くもない。源之丞は二日目の晩、そんなおはるを猿ぐつわはめず、畳に寝ころがし、そのそばで酒をあおっている。

拒まれてこそ意地も力も出てくるし、身内に赤い血が湧きさわぐ。なのに、まるで夜鷹のように、こっちのなすがままになるおはるに、もう興味を失いはじめた源之丞だった。

「どうだ、おはる、酒でものめ」

茶碗酒を口元へもって行くと、おはるのまなじりから、つうと露玉のような涙が一つ、桜色の耳朶をつたわって畳にころがった。

「ふん、気が狂ったのでは仕方がない」

がぶりと酒を呷ると、縁のところまで立って行った源之丞は、べっと唾を吐き、廁へ入った。

つまらん。女はどれも同じだ。手に入れるまでの面白味でしかない。あの女の始末をどうしよう。そんな風に考え考え廁を出て戻った源之丞は、思わず、あつと大声をあげた。いない。表の戸があいている。狂って、判断力を失ったと思った安心が不覚だった。猿ぐつわもせず、柱にしばらくしておかなかった僅かの隙に、おはるは逃げ出してしまったらしい。

「遠くへは行くまい」

たった今まで、もう用もないと思っていた女だったが、手元から逃げられると、妙な未練がわき、後を追って源之丞は夜の闇へよろめき出て行った。

「駕籠屋、待て」

「へい」

先へかけていた小林平八郎がのっていた駕籠がとまったので、後を追っていた大野小太郎の駕籠も止った。

みると、常夜燈のかげに、まるで灯にまといつくように、若い女が一人立っていた。それが夜鷹なら、何も小林は駕籠をとめたりするはずはない。

「大野、見たか」

声をかけられ、指さされて大野小太郎、思わず声をあげた。髪はさんばら、着物もしどけなかったが、顔は見覚えていた。

「おはるどのだ」

平八郎は、うしろをふりむいて妙な顔をした。

「何だ、大野、知っているのか、あの女」

「知っている。赤穂から出てきた、茅野三平の女房だ」

「しかし、妙だぞ、あの目つき！」

それに答えず、何をみておどろいたのか、駕籠のたれをばたりとおとした大野小太郎。小声で駕籠屋に、
「もう少し先の、暗いところへ駕籠を下ろせ」
かつがせて小林の駕籠のそばを通りぬける
とき、小太郎は駕籠の中から小林に声をかけた。

「垂れをおろして、後から来い」

平八郎が駕籠のたれを下ろしたとき、そのそばを、荷をかついだ魚屋の棒手ふりがすれちがって行った。

駕籠があがって動き出した時、平八郎は、

「三平さま」という女の声の背後に聞いた。

三平は、いきなり声をかけられて、ぎくりとして足をとめた。こんな夜、自分を三平と



呼ぶ女の声。立ちすくんだとみえたが、三平の荷がそろそろと地に下ろされた。そして、

三平は荷の中へ手を入れると出刃庖丁をつかみ出し、逆手に握った。

「三平さま」

又、声がした。

逆手に握った庖丁をきつと後へかくしながら、三平はゆっくりうしろへふりむいた。

女が一人、目をすえて、ふらふら倒れそうな恰好で立っていた。はじめは、それが誰だか、とっさに三平には判断できなかった。

半ば目を伏せるようにして、油断なく三平は、「お人ちがいではございませんでしょうか」と女にいった。

その返事を耳にすると、女はふらふらと三平に近よってきた。

「三平さま、三平さま、はるでございます、三平さま」

三平の手から、ぱたりと庖丁がおちた。

「おはる？ どうしてこんな処に」

狂ったおはるでも、三平の顔だけは見覚えていたのだった。それでいながら、三平の問いに返事はできない。ただ、三平の目の先きにつつ立って、何度も何度も、三平さま三平さまと繰り返してばかりいるおはる。

遠ざかる影

小林平八郎は、黒頭巾でもう面をおおっていた。目釘をしめすと、かたわらの生島源之丞にいいなというようにうなずいた。

三平は、おはるの手をとろうとした。だがおはるはまるでおそれでもするように、身を引いた。

「いやです。舌を噛みます。そんなことをするなら、舌を噛みます」

「おはる。何をいうのだ。三平だ。三平だ。人ちがいするな、おはる」

三平が一步進めば、おはるは一步うしろへ身をひく。全く人がみたら妙な光景だった。

もう少しで、三平がおはるの肩をつかもうとした瞬間、闇に一闪、白刃、三平は左肩を斬りこまれた。

「し、しまった」

それでも三平はひるまなかった。

「誰だッ」

むろん小林平八郎の返事は二の太刀だった。今度は横にはらって胴斬り。三平は、ぼったり倒れて呻いた。

小林平八郎の背後から、ぬっと大野小太郎が姿をあらわした。手をついて、それでもお

き上ろうとしている茅野三平を上から見下して、

「茅野、しばらくだったな。大野の小太郎だ。はっはっは。馬鹿め。三途の川をわたって先君のもとに行くがいい。止めは小太郎が刺してやる」

ぎらりと抜いて三平の上にまたがり、切っさきをのどに当てた。

「冥途の土産に聞かしてやるか、おい茅野。おはる殿はな、生島源之丞のものになったのだ」

こういつて、切っ先でのど深くえぐろうとした刹那、闇の中から石つぶてが、小太郎のうなじを打った。

それで小太郎は手元が狂い、前によろよるとよろけた。

小林平八郎は、まるでその石つぶてが合図でもあったように、きつと闇の中に姿を消してしまった。

小太郎は、立ち直ると、刀をかまえ、あたりをすかした。

「誰だ！」

答えがあった。

「誰でもない、我々だ」

左右から小太郎をはさむようにじりじりと

迫ってきたのは、神崎与五郎に前原伊助。しかも、二人の手に握られているのは、太刀でも小刀でもなく、刺身庖丁に出刃庖丁。これは三平が放り出した荷から抜いたもの。

それをみて源之丞、鼻で笑った。

「そんなもので、武士が斬れると思うか」

与五郎が冷たく答える。

「武士は斬れない。だが、武士でない男なら、こんな庖丁で充分だ」

小太郎は心の中で、小林平八郎が手をかしてくるものと計算していた。

だが、その平八郎は、さわぎにおどろいて逃げた駕籠屋が、おきざりにした駕籠に腰を下ろし、少しはなれたところで見物していた。

「同胞相食む、また楽しからずや」

平八郎は刀をぬぐうと、こう口の中で呟いた。

小太郎は、伊助組し易しとばかり、伊助に斬ってかかった。だが、小太郎は、まだ死に切っていない茅野三平の存在をすっかり忘れていた。

「あっ！」

斬りかかる小太郎の足を、下から三平が両手でつかんで引いた。

「むっ！」

★愛読者の皆様へ!★ バックナンバー 残り少なくなりました

- バックナンバーの詳しい御案内は二六八頁～二七一頁にございます。
- 三月号までは売り切れましたので、お申し込みください。いませんようお願い申し上げます。
- 九月号まで定価百円・送料十二円。
- 十月号より定価百二十円。送料十二円。
- 臨時増刊は定価百三十円。送料八円。
- ただし、三冊以上まとめて御注文の方には送料は当社で負担いたします。
- 御注文には振替御利用が最も確實簡便でございます

東京都中野区江古田1の2302

振替口座・東京10756番

株式会社 久保書店

前のめりになるところを、与五郎の出刃で脇腹をえぐられ、刀をもった手を、伊助の刺身庖丁で斬られたのが、小太郎の最後だった。「三平、とどめだ」

与五郎と伊助は、三平を抱きおこし、出刃をそのふるえる手に握らせ、小太郎のとどめを刺させる。同時に三平もがくりとなった。

「三平さま」

与五郎も伊助も、すっかりおはるのことを忘れていた。みると哀れやおはる。髪をふり乱し、雲をふむように、みえぬ影を追うよう

に闇の中へ吸いこまれて行った。「おい、伊助。もう一人、黒覆面がいたぞ。どこへ行った。あいつこそ——」

与五郎が、平八郎の去ったと思う方向に目をむけた。だが、平八郎は、もうそのとき、小半丁先きを悠々と歩いていった。

元禄十五年九月十五日の深更。

これから三月たって、伊助や与五郎は、吉良邸で小林平八郎と刃を交えたが、そのときですら、あの黒覆面が、吉良家のつけ人、小林平八郎だったとは気づかなかった。

投^{なげ}籠^{かご}燈^{とう}秘^ひ聞^{もん} 松井^{まつい}頼子^{よりこ} 画^え商^{しょう}柳雅春^{りゅうがしゅん}



★娘は眞赤に焼けた鰻をかざして庄造の二の腕に迫った。

★もがくほどに縄は食い込んで額に脂汗がにじむ……

白いうなじ

「あの……」

と、お千代が近づいて来た時、清七は道でも迷った娘かと思ったほどだ。

髪に手拭をかけて、ふきながしにしてはいたが、黒袴のかかった袖の着物を裾短かにきつちりと着て、白粉の匂いもない。貧しいらしいことは、様子に見えるが、身を崩したことの無い清潔さが、夜目にもはつきりうかがえた。

「何か、私で役に立つことが……？」

藏臣忠窓裏集特



清七が真面目に問いかけると、娘はパツと頬に紅を散らした。

「あの……」

と、云いよどんでいる。

顔を赧らめたのがわかるほど、白い肌だった。

深川門前仲町の得意先へ集金に行つての帰りだった。

清七の店は日本橋小網町にある。

金を持つての夜道は危かったが、得意先の旦那のさる若の相手に思わず時間をとり、急ぎ足で佐賀町まで来たところをよびとめられたのだ。

油問屋の多いこのあたりは、昼間にくらべて暗くしんとしている。

しかしお店もの相手の夜たかそばが荷をとめていることもあり、全然人通りがないという道でもない。

見知らぬ人でも若い娘との立ち話に、清七は何となく背

中のあたりに、薄いまくを一枚かぶったような気がしたのも、二十三というその年まで、女を知らずに通したからかもしれない。

「あの……あなた……おあそびになりませんか」

「え？」

思いがけないことなので、清七はその意味を解しかねたが、娘は云い出した勢いにかられるように、

「私の家はすぐそこです。一緒に来てくださ

いまし。お代はいくらでも結構です。どういうふうにおたのみしていいのか、私、よくわからないんです。でも……あの……私の体を買ってくださいませんか」

云うと娘は思いつめた目で清七の顔を見た。

上気した頬が美しかった。

娘以上に清七は赧くなって、

「私は、まだ……」

女を知らないと言いかけて、のみこんだ。はじめて会った娘に、そんなことを云うすじのものではない。

「おねがいします。私を助けてください」

娘はたしきかけて哀願した。

「うちはどこです？」

行くとも行かないとも云わず清七は聞いた。

娘はほっと安心したように顔の緊張をとくと、

「黒江町なんです」

という。

日本橋へ帰る清七は、黒江町なら今来た道へ戻ることになる。

清七は踵をかえすと、無言で歩き出した。

娘は恥しそうに下を向くと清七に一步おくれについて来た。

黒江町まではほんの僅かな道のりだが、清七は背中へびっしより汗をかく思いだった。

いっそ逃げて帰ろうかと何度か思い、いや、行くだけ行って事情を聞いてからでもいいと思いとまった。

女を知らないと言つても、朋輩衆の口の端から商売女の話も聞いている。今日のような集金や届け物の途中で、夜鷹に声をかけられたこともある。

しかし、この娘がそうした商売の女で、うぶを装っているとはどうしても思えなかった。

(何かさししまった事情があるのだろう。自分のような、女を知らない男はだまされやすいとしても、この娘が私をだます……いいや、そんなことはない……。よし、だまされたとしても……)

清七はそつと娘の横顔を見た。

はじめて会った女に、これほど心が惹かれるものなのかと、彼はなにか自分の心にあきれながら、娘の細いうなじを見ていた。

娘がふと顔をあげた。

娘の視線が清七の視線にぶつかった。

二人ともあわてて目をそらしたが、清七の今まで知らなかった奇妙な鬨のようなものがふつと湧いて、ふつと消えた。

娘がさきに立って、導くように歩き出した。

もう黒江町だった。

ひかげ娘

「お殿様の名はかんにんしてください。ある事情で父が禄を離れ、こうした裏店へ住まうようになりました。当座に頂いた金子も使いはたし、おまけに母の長わづらいで、私のする賃仕事ぐらいでは、たつきの道がたたなくなつたのです。その上兄は無頼の人達とのつきあいで、身をもち崩し、うちのものを持ち出しては金にかえ、それでも足りないのか、お茶屋や、お酒屋から、私の所へ勘定をとりにくるのです。それを払えずにおことわりするのが、私にはとてもつらくて……。兄はたまに帰つて来ると、『お前がいちいち払わなくても、兄はここにいない、私は知りません』とはねつけてくれればいいのだ」と申します。でも、私、小さい時から几帳面に育てられて、ついぞ借金の云い訳をしたこともなく、身を切られるようにつらいのです。いっそ、自分の身を売った方がましだと思ふほど、かけとりに来られる度に、厭で厭でしやうがありません。でも、どうやって身を売っていいのやら、その方法もわからずに、ただ賃仕事をしてくらしてきました。私ひとりなら、それでもすむのですが、母のわづらいから引きつづき借金からぬけられません。思い切つてこの身を金にかえる決心をしたのですがくるわとやらへ行くすべも知りませんし、こもをかかえて身をひさぐ人のあることを、前にお芝居で見たことがあるので、永代橋のあたりに立ってみたのです。でも、何といつて呼びかけていいのかわかりませんし、仲間や小者風の人にかからかわれると、足がすくんでしまつて

特集★裏窓忠臣藏

……昨日も、一昨日も、ただ無駄な時間をすごしてしまいました。今日も夜になると、家に落ちついていられず、出て来てはみたのですがただ、もう、気が隠して……。佐賀町まで戻って来た所であなたに目にかかったのです。あたりに人影もなかったし、おやさしそうな方ですし、思い切って声をかけました」

娘は清七にそう打ちあけた。

まんざら嘘とは思えない様子だった。

「では、あなたはお侍のお嬢さんで……？」

「まあ、お嬢さんだなんて……いや……」

娘はたもとで顔をかくして笑った。

清七もつりこまれて笑った。

「私の父は侍ですが、母は町家の者です。父の家は播州赤穂で……という、云わないつもりのお殿様の名を申上げるのと同じことになりましたが……赤穂には父の奥様がいらっしゃいます。江戸詰の間にひよんなことから母と一緒に、兄と私が出来ました。兄は侍を嫌って父とは仲も悪く、父もおくにの奥様に気がねなされたのか、子として届けてもないようで、それも兄には気に入らないのでしょうか。でも母は、死ぬまでそれを苦にしていました」

「ではお母さんは亡くなって？」

「はい、半年ほどわずらったあげく、帰らぬ人になってしまいました」

「そして、お父さんは……？」

「お殿様の大変の折、ちょうど江戸におりましたが、母の所へいくらかお金やら、金目のものやら置いて、『私の命はないものと思ってくれ』と云ったまま、播州へ旅立ってしまいました。そのうち、母が病

いに倒れ、悪いことは重なるもので、近所の失火で家も焼け、ここへ移ってしまったまま、父の生死も知れません。便りをするにも、お城はもうお殿様のものではないし、赤穂の家もたたんだようで、それきり、消息もわかりません。でも、お殿様のあとを追って殉死したという話もききませんし、敵討ちがあるの、ないと、江戸でも噂にのぼるだけで、敵討ちをしたという話も聞きませんから、どこかで生きているのでしょうか。母はせめて兄に、侍の子らしく、敵討の時には父を助けさせたいと気をもんでいましたが、兄はどう思っているのか、相変らず、酒を飲んで毎日のような喧嘩沙汰です」

「そうですか、あなたも気の毒な……」

「いいえ、こんな話を聞いていただいただけでも、胸のつかえがおりたような気がします。誰に云えることでもありませんし、母が日蔭の身で一生を送り、私も日蔭の子です。でも、兄は男なのですから、父の子として、せめて敵討のお役に立ったら、たとえ斬り死にしても生れた甲斐がありはしないかと……私……」

と、娘は唇をかんだ。

清七はふところから財布をとり出すと、今集金して来た中から、少しばかり金を分けて紙に包んだ。

「これは少しですが、使ってください」

と、娘の前へ出すと、

「いいえ、こんなことを……」

と、娘はおしかえした。

清七は笑って、

「だって、あなたは身を売ろうと思ったんでしょ？」
と、いうと、

「では、これで？」

と、娘は急におびえたように清七の顔を見た。

「何もこれで、あなたを貰おうというのじゃありません。袖すり合うも他生の縁と申します。それに私の店は……といっても伯父の店ですが……小網町でろうそくを商っています。鉄砲洲のお屋敷へろうそくをおさめに行ったこともございます。その浅野様の御家臣に血のつながる方というの何かの因縁でございましょう。今日は集金の帰りで気がせきます。お邪魔でなかったらまた来ます。これはおさめておいてください」

「そんならあなたは浅野様へ御出入りのお店の方でございますか？」

悪いことは出来ないものです。そうとも知らず……恥しい……」

と、娘は顔をかくした。

清七がどきつとするような女の色気がこぼれる。

「では、あたしはこれで……」

と、清七はそそくさと立ち上った。

そして、無理やり娘の手に金を渡すと、悪いことをした人のように後も見ずに逃げ出してきたのだった。

女知らず

清七は店へ帰っても、娘の顔が忘れられなかった。

八丁堀あたりへ使いに行っても、橋一つ越せば娘に会えると思うと足が永代の方へ向いてしまう。

しかし、金をおいて来ているだけに、恩にからんで娘の体をねらっている、思われるのも厭だと思って、一日、二日と我慢していた。

人のうわさも七十五日、前の年の三月十四日、殿中松の廊下で行われた刃傷事件も、ようやく人の噂から遠くなっている。

それでも浅野の浪人が、敵討をするかしないか、賭をしている江戸ッ子もあって、世人の頭から忘れ去られてしまったわけでもない。

清七は娘が浅野の家臣を父とすると聞いただけで、父の姓も、娘の名さえ聞いていなかったが、浅野家へ出入りしただけでさえ情がうつるものを、ましてその家臣を夫よ父よと呼んだのなら、兄を敵討に加わらせたいと思う母や娘の気持は無理ないと思われた。

これといった道楽のない清七は、伯父からもう小遣いも大分貯っていた。

集金した金の中から娘にやった分も、自分の貯めた金で埋めておくことが出来たし、まだまだゆとりがある。娘にやったら喜ぶだろうと思うと、じっとしていられなかった。

いなり祭で店を早じまいにしたのを幸い、黒江町まで行ってみることにした。

金を出して買った菓子や、わざわざ半紙につつまかえて、貰いものように見せかけたのも、娘をたずねるてれくささをこまかす算段だった。

この前は夜だったので、露地の入口で少し迷ったが、すぐにわかった。

それでも、一度会ったきりで、娘が覚えているかどうかと心配だった。

「ごめんください」

と、格子先で案内を乞うと、たすきのまま出て来た娘は、「あら」

と、みるみる顔を輝かした。

(来てよかった)

と、清七も安堵と喜びの入り交った気持で「深川までついであつたものですから、どうしていらっしゃるかと思つて……」
と、云い訳した。

「どうぞ上ってくださいまし。本当にいつぞやは……」

娘の声がはずんでいる。

座敷……といっても二間か三間のせまい家だが、それでも奥の座敷には仮床をしつらえて、細い茶掛がかかっている。

「これは父が大切にしていたものなので、先日のお金で、これだけ真っ先に出して参りました。本当に、母もきつと喜んでいると思います」

掛物に目をやっている清七に娘は云った。

多分質屋へでも入っていたのだろう。この家で、目ぼしいものといえ、この掛物だけなのかもしれない。

清七は持つて来た菓子を出し、娘は茶の仕度をする。

何だかんだと時が立って、いつ

か外が暗くなった。

「あの、何にもありませんが……」

と、夕食の仕度に立つ娘に、清七は金を渡し、
「では、これで……」

という。

無遠慮とか、失礼とかいう言葉を使わないでもすむ暗黙の了解が二



人の間に感じられた。

帰りたくない、帰したくないという気持ちがさきになれば、初対面だろうが、二度目だろうが、言葉は簡単ですむ。

娘は外へ出て行ったが、深川の色街も近いせいか、仕出し屋もあるらしく、夕餉のおかずをみつくりつて戻って来た。お酒まで用意したのは、父がいける口だったのか、母の出が、町家というものの、やわらかい職業だったのか、甲斐々々しく気がきいて、清七はますます娘に心を惹かれた。

早い目に表の戸もしめて、清七と娘はさし向いの膳に向った。すると、

「ドンドン、ドンドン」

と、表をたたく音がする。

「どなたですか？」

娘が声をかけると、

「俺だ。お千代、お俺だ、庄造だ」

「あっ！」

と、娘はあわてて、

「兄が来ました。こんな所を見られると、どんなふうにも邪推されるかわかりません。どうせお金の無心でございましょう。ちよつとの間、かくれていてくださいませんか」

と、奥のふすまをあけて、酒肴をお膳ごと運ぶと、

「せまい納戸で御窮屈でしょうが、今、表へ出ると兄とぶつかりますし、面倒がおこるといけませんから……」

という。

清七は云われた通り奥の部屋へ移って襖をしめた。

藏臣忠窓懷集特

兄いもうと

「今、あけます」

娘は座敷を見まわすと、わきへかたづけであつた縫いものを、わざと真中へおき、針箱のふたをあけてから、表の戸をあけた。

「随分早くから閉めるんだな」

と、庄造は上つて来たが、

「お千代たのみがあるんだ」と、膝をそろえて坐った。

「また、お金でしょう？」

娘がいう。

「今度の金は飲んだり、遊んだりする金じゃない。もっと役に立つことに使う金なんだ」

「では、兄さんは……？」

「おっと、気を廻さないでくれよ。ねえ、何にも云わずに出来ないか。何に使うか聞かずにくれ。そのかわり、もう、これっきり云つて来ない」

「お金はないけれど、あの掛ものを持って行ってください。目のきく人に売れば、随分な金高のものだと聞いています。そのかわり、私の頼みも聞いておくれ」

「お前の頼みって、どんなことだい？」

「私も兄さんが何に使うのか聞かないから、兄さんもそれを聞かずに私のいうとおりにさせると云ってください」

「命をくれというんじゃないんだろう？」

「まさか……ただ、私のしたいことをさせてくれればいいんです」

「坊主にするのとも違うね？」

「ええ、違う。そのかわり、あの掛物の他に私の持っているお金もあげましょう。ただおとなしくいうとおりになってください」

清七は奥の部屋からその言葉を聞いて、そっと襖に近づいた。

何を云い出すつもりなのか、娘の云い方が解せなかった。

「よし、俺も男だ。お前に体を預けるよ」

「じゃあ、こっちへ来てちょうだい」

「どこへつれていくんだ？」

「この柱を背にして坐って、手をうしろにまわすんです」

「俺を縛ろうというのか、俺を縛ってどうするんだ」

「妹に折檻されるのが恐いんですか？」

「フン、恐いもんか。俺に何のうらみがあるのか知らないが、俺を折檻してお前の気がすむのなら、何も縛らなくなつて、打つたと蹴るなとしたらいいじゃないか」

「まだ折檻するともしないと云っていません。云われる通りにする約束でしょう」

「まあ、いいや、どうにでもしてくれ」

娘は庄造の手を後手に柱へ廻して、柱の後で手首を一つに縛った。

清七は襖のすき間から、思いがけないその場の仕儀に目をみはって息をのんだ。

娘は土間へおりと、隅の釘にかかっていた麻縄をとって来て、庄造の膝をぐるぐるとまき、そのさきを柱にかけて、胸へもお腹へもまわした。

「体を動かしてごらんさい」

娘は云った。

「動けるものか。侍は縄目の恥といって、こんなふうに縛られたら気も顛倒するだろう。幸い、俺は町人だから、男一匹、素直におとなしくしていてやるよ」

「兄さんはどうでも侍が厭なんですか？」

「ああ、厭だね」

「なさない人……。でもいいんです。私は私の思う通りにします」
お千代は裁縫箱の引き出しから、鋏を出すと火鉢の灰にうずめた。

「何をやるんだ？」

庄造のいうのを聞かないふりで、

「声をたてられると困るから、兄さん、ちょっとの間、辛抱してください」

と、庄造の後にまわり、庄造の口へ手拭をかけてぐつと引いた。
庄造はもがいたが、すでに体中に縄をかけられているから、僅かに首を動かすくらいで、お千代の手をどけるわけにはいかなかった。

「あっ、あっ！」

と、声を立てようとしたので、かえって手拭は口の間へ割りこんで舌を押さえつけた。

お千代は庄造の袖をまくり、二の腕をあらわにする。

緋牡丹の彫物がしてあった。

「兄さんがまともになれないのは、この彫物のせいなんだと、お母さんが云っていました。お母さんにかわって、私がこれを消してあげます」

庄造はようやく妹のしようとするのがのみこめたのか、体を動か

し、顔を真赤にして、縄をとこうともがいたが、女の力とはいふものの、ぐるぐるまきに柱へ縛りつけた縄はかえって庄造の体をしめつけるばかりだった。

「よせ、よせ！」

猿ぐつわの下から押し殺したような声が洩れる。

お千代はかまわず火鉢から焼けた鏝を出すと、兄の腕の彫物の上へ押しあてた。

「あーッ！」

猿ぐつわの下から悲鳴が洩れた。

皮膚の焼ける臭気が漂った。

お千代が鏝をはなすと、

「ううッ——！」

と、庄造はうなりながら、荒い息をついた。

お千代は再び鏝を火鉢に入れようとしたが、思い直して、火箸でよくおこった火をつかむと、それをそのまま庄造の腕につけた。

「ああ——ッ！」

庄造の額に油汗が浮き出す。

顔をのけぞるようにして、口の手拭を噛みしめる庄造の顔は悪鬼のようだった。

緋牡丹がくしゃくしゃに爛れた。

お千代は焼けた皮膚に髪油をつけて、甲斐々々しく布で繃帯をする
と、

「兄さん、かんにんしてください。こうしたら悪いお友達衆に、まさか妹に手ごめにあったとはいえないでしょう。自分で消したことになるです。そうしたら、兄さんはそうした方達から白い眼で見られるで

しょう。どうぞここで考え直して、お父さまの行方をたずね、敵討のお仲間に入ってください。兄さんがどんなにお父さまを憎んでも、嫌っても、血を分けた親子です。お父さまからもらった命を、親の為、お殿様の為にすててこそ、死花が咲くというものではありませんか。随分むごいことをする妹と、お憎しみになるのはわかっています。でもお願いです。私の頼みをきいてください。そのかわり、路用のお金に、私の持っているものは何でもあげます。もし、これほど云っても頼みを聞いてくださらないのなら、その縄をときません。私も気を強くして、兄さんが柱と心中なさっても知らん顔で放っておきます。一日でも二日でも柱を抱いていてください。……なんて、兄さん、私がこれ以上心を鬼にしなくても、私の頼みを聞いてくださいますね、ね、ね」

お千代が云うと、庄造は大きくうなずいた。

そして、柱からとかれた庄造は、何にも云わず掛物を押しいただくようにして手にとると、出て行ってしまった。

男 同 志

兄を見送ると、お千代ははりつめていた気がゆるんだのか、清七の傍へかけよって、ものも云わずに清七の膝へ泣き伏した。

清七はだまってお千代の背に手をおいた。

異常な事のあとには、人の体も心も妙にたかぶるものだった。

その晩、清七とお千代は割ない仲になってしまった。

そして、一と月、二た月と日がすぎていった。

元禄十五年の春も暮れ、内匠頭の一週忌には、浅野浪人の敵討があ



るかもしれないとの取沙汰も、空しく流れて梅雨もあけた。

ある晩、清七がお千代の家から帰りかけると、

「もし、清七さん」

と、声をかける人がある。

見れば自分より一つ二つ上か、まだ若い男だったが、どこで会った人か、よく覚えがなかった。

「清七さん、お目にかかるのははじめてだが、私はお千代の兄です」
云われて、はっと思い当った。向うははじめてのつもりでも、こっちは襖のすき間から見たあの時の男に違いない。

あれっきりお千代の所へ来ないと聞いていたが、それとなく、妹の様子をさぐっていたのだろう。清七という名まで知っている以上は、自分とお千代の関係も知っているのだろうと、清七はわざと悪びれず
「これはお兄さんでしたか、とんと失礼しております」
と挨拶した。

「突然で申訳ないが、あなたにちっと、お頼みしたいことがあるのです」

「どんなことか知りませんが、私に出来ることでしたら……」

と、清七は、金の無心なら恋人の兄のことだから、少しのことならきいてもいいと思った。

すると、

「人にきかれるとまずい話なんです。幸い、私は舟を操れますから、夜づりといって、舟で沖へ出て、話をきいてくれませんか」

と、庄造は云った。

（まさか沖へ出て、妹と通じるなんて不埒なことで、命をとられることもあるまい。もしかしたら、浅野様の浪人衆に頼まれごとでもされ

たのではないか)

清七はそう思った。

「よろしゅうございます。今日はもうおそいし、家へことわって参りませんでしたから、明日の晩、店をしまつてからお供をします」

「そんなら明日の晩に……」

と、二人は約束して別れた。

そして、次の日、庄造の操る船で、洲崎の沖へ出た。

「私やお千代の父が浅野侯に仕えたことは、妹から聞いていることと思います。父の名は聞かなくてください。実はお千代に云われる前から、どうかして、侍の子らしくお役に立ちたいと思っていたんですが腕に彫物までして、喧嘩沙汰で、日をくらす身では、同志の方達の信用どころか、父さえ本気にとりあげてはくれません。それでせめて、敵討の軍資金なりと、どなたかその志の方に渡したいと思って、妹の所へ金の工面を頼みに行ったら、これ、こんなに、腕の彫物を鋸で焼いての強意見だったのです。それから三月、父の行方を探し歩いて、やっとめぐり会い、この腕を見せて、死に花を咲かせてくれと頼みました。父はお腹の中で喜んでくれたようでしたが、敵討などもっての他だということです。みんなそれぞれ仕官の道を探している。父も遠からずある大名に抱えられることになっている。ついては仕官の手土産に、江戸のろうそくを持って行きたい。それも先方の御城代は偉い軍学者と聞いている。治にいて乱を忘れずというたとえもあるから、ろうそくも普通のろうそくではなく、小田宮流の投籠燈の中に使うろうそくが欲しい。それはこうこういったもので……と、父がいうのだ。清七さん。お前さんはろうそく問屋の甥と聞いている。こんなろうそくを手に入れるか、作らせるかしてくれないか、数も三百ほど

欲しいのだが、なんとか都合つけてもらえないだろうか」

「はい、それは頼んで頼めないこともございませんが、伯父の昔話にその小田宮流の投籠燈とやらしいものは、夜討か、泥棒の道具と聞いています。今は御法度の品と……」

「清七さん、だからこそ船を出したのじゃないか」

「は、はい」

「父の頼みなのだ。私が使うのじゃない。浅野の浪人の、父が仕官の手土産なんだ。お千代との仲も聞いている。お千代の父はお前さんにも父……といつてもいいのじゃないか」

「はい、わかりました。清七が命にかえて、御調達申上げましょう」

「引きうけてくれるか、ありがたい」

「お千代さんにはだまっていますよう」

「その方がいい。もし、万一、そんなこともないだろうが、誰かにとがめられたら、俺の名をつけて、父のことは金輪際だまっていください。俺はこういう身だから、泥棒に入るしのび道具に使うのに頼んだといえ、俺ひとりの身でことがすむ。お前さんは何にも知らなかったことにして、御法度の品だということも、知らなかったことに……な、たのみましたよ」

「大丈夫。うまくやります」

庄造と清七の約束はこうしてひそかに結ばれたのだった。

法 度 の 品

ろうそくは、今でこそ機械で大量生産され、動物性や鉱物性の油脂を原料とする西洋ローソクが多いが、昔の日本ローソクは木蠟を撚合

せた紙捻を中心に巻き上げた手工業的なものだった。

清七は人に頼むより自分で作ろうと思った。

出来るだけ早く調達してくれと庄造は云ったが、急いで外へ洩れるより何とか自分の力で作りあげようと思ったのだ。

清七はお千代の家からそれほど遠くない越中島にこわれかかった空家を買って仕事場にすることにした。

昔の商人は商人といっても扱う商品の作り方ぐらいは心得ている。

傘を商えば、傘の柄に籐を巻くぐらいのことは出来なければいけなかった。

ろうそく屋の清七が、自分でろうそくを作るのはそれほど困難なことではなかったのだ。

しかし、三日にあげず会いに来ていたお千代の家から足が遠くなる。

いっそ、これこれと、お千代に打ちあければよかったのだ。

しかし、手柄顔の出来ない清七は、お千代の兄に頼まれたことだけに、お千代に云いにくかった。

云えばお千代も喜び、感謝するだろう。それがわかっていると、よけいに口に出せない清七だった。

お千代はそんなこととは知らないから、清七が忙しい忙しいと云うのをはじめは真にうけていたが、だんだん疑い出した。

清七が心変りしたのかと思ったのだ。

嫉妬は女の心を鬼にも蛇にもするのである。

清七をつかまえて、

「私が嫌いになったのなら、はっきり云っておくれ」

と、かきくどいても、清七は、

「そんなことがあってたまるものか」

というだけで、相変らず足が遠い。

たまに来て、ぐったり疲れていて、お千代を申訳のように愛撫するだけだ。

たまりかねたお千代は仕立物の仲立ちをしてくれるかみさんに打ちあけた。

「そんなら、うちの亭主が遊んでいるから、清七さんがお店の用事で忙しいのか、それとも、他に新しい人でも出来たのか、探ってみてもらってあげよう」

と、おかみさんは親切づくで引きうけた。

このおかみさんの御亭主は松吉といっている腕をもった大工だったが、ばくちが好きで、手つけの金をばくちですってしまつては仕事がおくれるので、出入先を何軒かしくじって、家でぶらぶらしていたのだ。

松吉は、この話を聞いて、いくらかでも、ばくちの元手が出来ると思んだ。

話の様子では、どうも清七に、他にイロが出来たらしい。その新イロの住居をつきとめれば、新イロが清七に惚れているなら金をくれるだろうし、さもなければ、清七からいくらかとれる。どっちにしても金になる。

たいして悪い男ではなかったが、金の為なら何でもするといったふうだった。

松吉は清七の仕事場を発見するのに、さほど困難もなかった。

それでもまだ、戸閉りした中で、ろうそくを作っている

特集★裏窓忠臣藏

とは思わない。女とあいびきするにしては、おそろしく汚い家だなと思つた。

松吉は椽の下から入って、床板をはずした。
大工だから、こういうことはわけがない。

ひそかに中の様子をうかがうと、女どころか、清七はろうそく造りに一生懸命だ。

蠟の煮える匂いが、ムーッと鼻をつく。

(ろうそく屋がろうそく作りか、ラチもない)
と、松吉は思つた。

しかし、

(いや、待てよ)

と、考えた。

それだけのことなら、お千代に秘密にすることはないのだ。お千代に手伝わせた方がいいわけじゃないか。

(何かある……)

松吉はかんぐつたのだ。

清七ろうそく

「清七さん」

不意に声をかけられて、

「あっ！」

と、清七はとび上るように驚いた。そして本能的にろうそくをかくそうとした。普通のろうそくにしては形が違っている。

「何をしているんだ」

松吉は清七の手をむんずとつかんだ。

「あつ、放してください」

「いや、放さねえ、おい、清七さん、俺にも一枚のらせてくれ」

「あなたは誰です？」

「誰でもいいじゃないか。どうやら、これは内緒の仕事らしい。もうけをひとりじめにしないで、ちっと分けてくれないか」

「いいえ、そんなものではありません」

「馬鹿にかくすじゃないか。まあ、少しの間大人しくしている、相談はそれからだ」

松吉は清七の手を後にまわすと、清七の帯をといて、後手に縛ってしまった。

「何をするんです？」

「何にもしないよ、こうするだけだ」

松吉は清七を後手に縛ると、余った帯を足首にかけて一とまきすると、手と足をつないでしまった。

清七は横坐りに坐ったまま、不安定な形で動けなくなってしまう。

松吉は出来ているろうそくを手にとると、

「これは何に使うのだ？」

と、清七に聞いた。

清七はただかたく口を結んでいる。

「おい、何に使うんだと聞いているんだよ」

それでもだままっているので、松吉は癪癪を立てた。

「云わねえな」

と、足で清七を蹴った。

「あっ！」

と、清七は前へ倒れたが、手と足を一つにつながれているので起き上がることが出来ない。

足の裏を宙に浮かして倒れているのを、

「よし、云わなきやお手のもののろうそくで足の裏をくすぐってやろう。さあ、どうだ」

と、松吉は出来上っているろうそくに火をつけて、その焰で足の裏を撫でるようにした。清七の足の裏に熱い蠟がたれて、くすぐったいような、熱いような感触に、清七は呻いた。

「おい、何に使うのか云わねえんなら、云わねえでもいい、俺にも一口のせてくれ。俺はお千代さんをよく知っている男だ。口はかてえつもりだ。銭になればいい。相当なもうけ仕事と俺はふんだんだ」

「いいえ、これは私の道楽で、お金になる仕事じゃありません」

「まだ、そんなことぬかすのか、いまましい。もう頼まねえ。そんならこれこれとおかみに訴えるぞ」

「訴えるなら訴えてもかまいません。これは私が自分でやってみてい

ること、一文のもうけにもなりはしないことなんですから……」

「本当だな、おい、嘘をいうと承知しないぞ」

「本当です」

「よし、本当なら何をされたって白状しようもないだろう。どうだ、嘘なら嘘だと云った方がいいぞ。そして俺に一口のせろ、さあ、どうだ」

松吉は清七の着物をはぎとるようにぬがせると、肩から胸をろうそくの焰で焼いた。

黄色い木蠟が、清七の白い肌に点々と溶け落ちて、鱗のように層を作っていく。人間の肌が、動物の肌のようにこわばって、色どられて

いくと、無気味な生きものが出来上っていくのだ。

顔も、背中も、蠟でこわばった。

びんの毛はシリシリと焼かれ、眉毛もまつ毛も玉にちぢれる。

「強情な奴！」

松吉は舌うちしながら、一本のろうそくが燃えつきると、また、別のろうそくに火をうつし、飽くことを知らないように責めあげた。

清七は縛られた体を床に転がして、荒い息をつく。指さきはしびれて感覚がなかったが手も足も、筋肉がつれそうに痛い。

「こんなにされてもまだ云わねえか？」

「云うにも云わぬにも……これは……私の……道楽で……」

清七は息をはすませながらそう答えるより仕方がなかった。

松吉は清七の強情さに癪を立てて、金になろうがなるまいが、清七を苛めつけることに心が一杯になってしまったらしい。

「よし、云わねえとあらば、云うまで遊んでやらあ」

まず一服と、腰から煙草入をとり出すと、きせるに煙草をつめて一口吸ったが、ほんと清七の肩へ火のついた煙草をすえた。

「熱う……」

と、清七は体を動かす。

火の玉はころろと清七の背を這って、腰の辺にかたまっている着物の中へ落ちていく。

「フン、こいつは面白え」

松吉はまた、煙草に火をつけてボンとすてる。

「熱う……。もう、かんべんして……かんべんしてください」

清七はうつたえる。

「そんなら一口のせるか？」

「のせるにものせないにも、そんな仕事では……」

「ええ、まだそんなことぬかしやがって……」

松吉は持っていたキセルをふりおろした。

「ああっ！」

清七が呻くのもおかまいなしに、肩といわず、背といわず、キセルで打った。

清七は転げ廻って苦しんだ。

どう転げても、松吉の手をのがれるわけにはいかない。

松吉はキセルをふりおろすのに疲れると、

「どうだ？ こたえるか？」

と、清七の肌に穴があきそうに突き廻した。

ろうそくで責められ、煙草の火で責められ、今またキセルの管の下で、清七の意識が時々遠くなっていく。

その時、どこか遠くで、

「火事だー」

という声がした。

松吉はやつと憑いていたものが落ちたようにハツとすると、清七の縄をとき、何やらぶつくさ口の中でつぶやきながら外へ駆け出して行ってしまった。

火事を知らせる太鼓の音が遠く聞えていたが、松吉は再び現れなかった。

松吉がおかみさんに話したのか、お千代が又聞きで、清七の仕事場へ来たのはそれから二三日後だった。

清七は自ら縊れて死んでいた。

出来上ったろうそくは庄造のもとに届けられたのか、一本もなかった。

たが、はたしてその禁制のろうそくは、誰から誰の手に渡ったのか……

その年の師走十四日夜半、寒風について本所松坂町の吉良邸に討ち入った浅野の遺臣たちの中に、六十八歳の老軀をひつさげて乱刃の邸内の要所々に、小田宮流投龜燈のあかりをつけて歩く、間喜兵衛光延の姿があった。

阿鼻叫喚の巷の中に、老人とも思えぬ動作で打ちつける投龜燈の照明が、どれほど義士たちの行動を楽にしたであろうか。

喜兵衛の眼には、宿願を達せられる喜びのためか、蠟涙のしたたりのためか、チカリと光るものが宿っていた。

その蠟燭が、清七の作ったものであったかどうかは詳かにされてはいないのだが……。 (終)



玲子・画

時代伝奇小説

次号
予告
お
小
夜
嵐

高 月大三

妖説絵図まんじ

窪村 弘
碧川 新・画
依頼の絵図面



恋鬼面

常ならば、豊かな双頬に仄かに紅さして、比類もなく初々しく可憐に見えるのだが、今宵のお艶の顔は、はげしい緊張のため冴えて蒼白い。

引き寄せた行燈のかたわらで、細長い文机に向って、お艶は緊張の手を微かに震わせながらも、丹念に筆を動かしていた。

恋文？

あらず。

彼女は一生懸命に、絵図面を模写しているのだ。

叔父、大工の棟梁藤兵衛が一月ほど前、漸く完成を見たという吉良邸改修のため作事方の特別の指示の許にひいた、秘密の絵図面を、お艶はさらに模写しているの

☆恋しい男の爲に吉良邸の絵図を秘かに写す娘……その背後に恐ろしい魔手が！

特集 裏窓忠臣蔵

である。

お艶の時々紙を動かす音がするだけで、あとはコソたる物音もない。

それほどうずか。

筆持つ彼女の掌は、ベツトリと汗ばんでいた。

叔父藤兵衛が帰って来ぬ間に、完全に模写を終えてしまわねばならないお艶であった。

万一、此の絵図面を持出した事が知れたら決して唯では済まないだろう。

他の絵図面は全部、床ノ間の絵図面箱に入れて置くのに、吉良邸の絵図面だけは、ソツと簞笥の奥にしまい込んでおいた藤兵衛なのだ。

以前にも、吉良邸お長屋の補修を受持つて図面をひいたが、その絵図面は、町家の建築図面と同様に、桐の絵図面箱に入れたままになっている。

しかるに、今度の本邸改修にあたつての絵図面だけは、仕事の終了後、なおも簞笥の奥深く藏しておいたのだ。それがどれほど重要なものなのか、十七娘のお艶にはわからなかった。

近しい大工仲間が尋ねてきても、藤兵衛は他の絵図面は惜しげもなく見せたが、吉良邸

の図面だけは決して見せなかった。

それを昨日の夕暮刻、

「お艶さん、御覧のように今日は店に誰も居りません。私も退屈して困って居りますが、よろしかったら、二階へ上つて絵双紙でも御覧になりませんか！」

金右衛門に誘われるまま、嬉しさと羞しさを胸に弾ませて、後をついて二階へ上つたお艶であった。

三四カ月ばかり前、吉良邸門前に開業した男ばかりの中どころの酒屋。

うまい安い世間の評判につられて、叔父藤兵衛の寝酒を買いに出かけた折に、帳場に坐っていた番頭の金右衛門の、女に見まほしいほどの美貌に心を捉えられたお艶が、近所の子供のお守りにかずけて、明け暮れ通う数日後、初めてかけられた言葉がそれであった。恋は思案のほか。

誰も居ないたそがれの二階の一部屋に、恋しい男と膝を接せんばかりに坐つた彼女の胸は、激しい感動におののいて、間に置いた唯一冊の絵双紙は、いたずらに網膜の表面にかすんでいた。

「お艶さん、実は折入つて頼みがあるのですが――」

金右衛門の改まった言葉に、ハツとその顔を振仰ぐと、

「あなたの叔父さんは、大工の棟梁だそうですネ？」

「はい」

「お父さんやお母さんは、どうなさつたんですか？」

それとなく尋ねられて――。

父母はすでに亡く、今はやもめ暮しの叔父藤兵衛の許で、頼みの綱を掴んでいると、お艶は隠さなかった。

「そうでしたか。ところで折入つてのお願いと云うのは他でもありません。私の父は、あなたの叔父さん同様の大工なのですが、どう云うものか、自分一人では絵図面がひけないのです。仕事を請負つても、人様のひいた図面を頼りにしているような、情ない状態ですが、その父が、一度でいい、どこかお大名のお邸の絵図面を見たい見たいと口癖のようにいつて居ります。父に反いて、酒屋に奉公した私がせめてもの親孝行の真似事に、何とかしてそのお大名邸の絵図面を見せてやりたくてなりません。きけばあなたの叔父さんは吉良様へお出入りの棟梁だという事です。それに最近、その吉良様のお邸のお仕事をなさ

特集 裏窓忠臣藏

「ったとか——。お艶さん、お願いだ、僅か一日か二日で結構です、なんとかして、その絵図面を私に貸して頂けないでしょうか？」

ソッとお艶の手を取った金右衛門の面に、懇願の影が濃く浮かび上っていた。

「そうですか。でも、ほかの絵図面と違って——」

叔父藤兵衛が、ごく近い仲間の者にさえ見せる事をこぼんでいる絵図面。

お艶の躊躇はそこにあった。

しかし。

今一度云おう。

恋は思案のほか。恋は人の心に

強弱二面の力を宿す。

——ここで断ったなら、きっとこの人は、情知らずの女と、私をさげすむだろう。

と、想えばきつい言葉もでない

悲しい心。

恋には弱いお艶だった。

かなえてやりたい金右衛門さんの親孝行のために——いや、自分の夢に、暗い曇りを投げかけないために——。

お艶の心は決ってきた。

「確かに吉良様お邸の絵図面があります。でも叔父さんは、たとえどなたがお見えになっても、それだけは決して見せた事ありません。どうしてそれほど大切にしているのか、私にはわかりませんが、どうせ私がお願いしたところで、きいてくれないと思います。でも、私がかならず何んとか致します」

「叔父さんには内証でいい。貸して頂けますか？　そうして頂けたら、どんなに父が悦ぶか——」

「ええ、きっと何とかしてお渡し致します」

「ありがとうございます、お艶さん！」

金右衛門の面に、明るい悦びが溢れて、握った手に、熱い力が加わった。

酒屋の番頭金右衛門——その実、赤穂の城主浅野長矩の臣岡野金右衛門が、主君の怨敵吉良義央を討たんがために、同志神崎与五郎等の智策を受けて、打った芝居とは夢にも知らぬお艶。

「でも、今夜すぐと云う訳にはゆきません。明後日の晩、四ツの鐘を合図に、家の裏口の所へ来て下さい。かならずお渡し致します」

「お礼はどんな事でもします、お艶さん」

「お礼なぞと——いや、私。金右衛門さんがそんなつもりでいるんですたら——」

漸く馴れた甘える眼差しを、金右衛門はさけて、まぶしそうに瞬いた。

死の反抗

大工仲間の会合があるとかで、藤兵衛が出かけた留守を狙って、簞笥の中から吉良邸の絵図面を盗みだしたお艶だが——。

乙女心ほど、微妙なものはない。己の部屋でその絵図面に見入っているうち、お艶の心に猜疑とも、嫉妬ともつかぬ不思議な感情がきざしたのだった。

金右衛門さんはあのように良い男前、好きな女は他にありはしないだろうか？

唯、この絵図面が欲しいばかりに、あの時ことさらあのような思わせぶりの態度を示したのではないだろうか？

万一そうであったとしたら、私は一体どうしたらいいのだろう。

疑えば、さらにその層は厚くなってくる。

しかも、吉良邸改修に当って、叔父藤兵衛が五、六日の徹宵を重ねてひいた貴重な絵図である、このままソックリ金右衛門さんに渡してしまった後、万一事が発覚したら、どのような責めが待っているか。

娘盛りを美しくなってくればくるだけ、や

もめ藤兵衛の眼の中に、異常なものを体で感じてお艶である。淫らなものを意識すればするだけ、叔父藤兵衛の怒りに触れる行為を、極力避けようと努めてきた彼女なのだ。

まして金右衛門の父親が、業^{なりわい}質にせかれて、大名邸の絵図を見たいと願っているのなら、ソックリそのままの絵図面を貸し与えなくとも、ある部分を模写し、ある部分を自分勝手にこしらえ上げて、それが参考にならないはずはない訳である。そうすれば叔父の激怒に触れることも少いだろうし、例え金右衛門が、方便以外に何の好意ももっていないかたとしても、偽絵図を渡したことによって鬱憤は晴れるだろう。

そうだ、そうだと一人胸に問い、胸に答えてお艶が、こうして灯火の許、不安と焦燥と昂奮にさいなまれながら、必死に絵図の模写に筆を運んでいるのである。

しかし、一線一画に到るまで、藤兵衛のひいた絵図の如く、精巧を極めた物に仕上げるのは、簡単な事ではなかった。

焦れば線がくねり、金右衛門の面影を臉に描き、邪推を廻せば、指がふるえて筆が紙面に落ちつかなかった。

焦らずに、しかも出来得る限り速かに――

自分に云いきかせながら、最初、微かな物音にも、もしや叔父が帰ってきたのではないかと脅えた心が、次第に今の仕事に集中されてきた。

今まで、絵図面の構成などには、全然関心のなかったお艶にとって、全体の模写と違って、自分の創意を加えることは、かなりの難事であった。

もう五ツ半に間もないであろう。

筆持つ右の親指を前歯で噛んで、漸く仕上がった偽絵図を、じっと見守っていたお艶は、突然、フツと背後に人の気配を感じて振向いた。

「あッ、叔父さん！」

「お艶、大分熱心の様子だが、おめえ一体なにをしているんだ？」

いつ戻ってきたのか、藤兵衛の不興の目がお艶の目を射すくませるように凝視した。

「いえ、なんでもありません！」

狼狽したお艶は、急いで文机の上の絵図を胸にかき寄せる。

「お艶、おめえ、その絵図面を、一体どうしようって云うんだ？」

「――」

「おまけにそいつア、吉良様お邸の絵図面じ

ヤアねえか。そいつをどこから盗みだしたんだ？」

「――」

「お艶、なんとか云ったらどうだ。なぜ黙っていやアがるんだ！」

日頃にもなく怒りに震える藤兵衛の手が、お艶の肩をグツと掴んだ。

「堪忍して、叔父さん！」

「そいつをこっちへ寄せ！」

「お願い。僅か一日か二日で結構です。叔父さんに迷惑はかけません。何も云わずに私に貸して――」

「やかましいやい！ こともあろうに吉良様お邸の絵図面などを持ち出しヤアがって、飛んでもねえ阿魔だ。よこせと云ったら――」
荒々しい藤兵衛の力に引かれて、お艶は裾を乱して仰のけさまに転倒した。

囁りを食って、グラツと大きく揺れた行燈の灯が、次の瞬間、明るさを加えて燃えたつと、露出したお艶の真ッ白な脛を、蹴出しの赤さを、惨み込ませるように藤兵衛の目に映しださせた。

「いえお艶！ そいつをどうするんだ？」

お艶の胸にのしかかるように、両手で押えつけた藤兵衛の声はかすれていた。

「云います。いうからこの手を離して——」
下半身を横に転じて、お艶は泣くように叫んだ。

「云え！ 云うまでは離さねえ」

「叔父さんに相談しなくて悪かったんですけど、これを貸す約束をしたんです」

「誰にだ？ どこのだいつにだ？」

「吉良様御門前の酒屋さんの番頭さんで、金右衛門と云う人です。明日の晩、四ツを合図に裏口へ受取りにくる約束になっているんです」

「何ッ、酒屋の番頭の金右衛門だと。いつそんな約束をしたんだ？」

「昨日です」

「どこでしたんだ？」

「あそこのお二階です」

「わりやア、俺の目を盗んで、そんなだらしのねえ真似をしたのか。おめえの婿はこの俺が見つくて、このままソックリこの家を継がせてやろうと思っていたのに——畜生！ なんてえ恩知らずの真似をしゃアがるんだ。俺ア堪弁できねえ。我慢できねえ」

自分の言葉に、ますます昂奮の血を湧きたてられた藤兵衛は、お艶の黒髪を片手掴みに掴んだ。



密鬼

ここ数年の間、やもめ暮らしの佗しさを、豊饒たる体にかこつてきた藤兵衛は、今宵の会合で飲んだ酒の酔に、ことさら煩惱をかきた

たせられたのだが、契るを許されぬ肉親関係を思うと、無性に彼女が憎くなってきたのだ。

「てめえのような恩知らずたア、俺ア今日まで知らなかった。くたばっちまえ！畜生、どうしたら一体腹の虫が納まるんだ！」

藤兵衛はお艶の髪を掴んで、ズルズルと力まかせに引摺った。

「アアッ！許して叔父さん。堪忍して！」

しびれるほどの疼痛に、お艶は泣くように叫ぶ。立上って藤兵衛にしがみつこうと上げかけた腰も、忽ち引摺り倒されて、犬のように四ツん這いに畳を這った。

「泣きやアがれ！わめきやアがれ！てめえのような犬畜生は、叩き殺したってあきたりやアしねえ！」

藤兵衛の狂態は、恐ろしい嫉妬からくるものだった。

お艶は悲鳴を上げて引摺り廻されながらも丸めて左手に握った二枚の絵図面は離さなかった。

藤兵衛は大きく喘ぎながら、部屋の中をふたまわり三まわりとお艶を引摺り廻したが、不意に髪から手を離して、彼女の体を仰のけに突倒したのだ。

「アアッ！許して、堪忍して！」

お艶も夢中だった。絵図面を握った左手の拳で、藤兵衛の顔面をしたたかに突上げたの

だ。

「アッ、痛ッ！」

思いがけない奇襲に、顔を押えて藤兵衛がのけぞるような恰好で腰をつく隙に、お艶は必死に跳ね起きた。

「叔父さんの馬鹿！気違い！馬鹿！馬鹿々々！」

泣くように叫んで駆けだしたお艶の足へ、

「畜生！」
呻くような声と一緒に、藤兵衛の両手が絡んだ。

「アッ！」

出足を掬われてのめったお艶、すがろうと延ばした手を誤って虚空に泳がせ、激しく額を柱の角に打つけると、悲痛な叫びを上げて一転、畳ほこりを舞わせて倒れた。

「アッ、お艶！」

ザクロのような額の裂傷から、蒼白な顔面を染めて流れ出している濃い血潮を見ると、鉄槌の一撃を食ったような驚愕と一緒に、体内を駆けめぐっていた昂奮の熱血が、逆落しに氷の如く冷えていった。

お艶はもはや言葉もなかった。震える唇の奥で、カチカチと歯が鳴って、握りしめた手がワナワナと小刻みにおののいている。

「お艶！お艶！しっかりしてくれ！」

抱え起してゆすぶって、初めて藤兵衛の眼に、堰を切った奔流のように、ドッと泪が湧き上ってきたのだ。

「堪弁してくれ！お艶、叔父さんが馬鹿だった！悪かった！堪弁してくれ！」

「――」

彼女の唇が物云う如く微かに動いた。が、やがて、ガックリと頭を落した。血潮はお艶の胸から、藤兵衛の膝へ滴った。

「お艶、死んじゃアいけねえ。死んじゃアならねえぞ！」

だが、今となって、生ける術がどこにあるう。

藤兵衛は、わめき、呟く。

「畜生！こんな事になったのも、みんな金右衛門とか云う野郎のお蔭だ。誰があんな野郎に、お艶を、絵図面を渡すもんか――」

藤兵衛はお艶の死骸を横たえると、彼女の手から、絵図面を取上げた。倅い血潮にも汚れぬ、唯しわになっただけの二枚の絵図面。

特集+裏窓忠臣蔵

その絵図面を拡げて、涙の目でじっと見比べた藤兵衛だ。

「違っている。ここん所が、俺のひいた図面と違っている！ お艶、おめえ、自分でひいて、偽の絵図面をそいつに渡してやるつもりだったんか。そうか、そうだったのか。渡してやるとも、渡してやるぜ。おめえがひいたこの絵図面を、間違はなくあの野郎に渡してやらア。その代り、こっちの本物は、おめえの肌に着けて持たせてやるぜ。いつまでもなア、離さねえでしっかり抱いていてくれよ！」

× ×

その人影は、先ほどから雨戸の外に立ってじっと動かなかった。

お艶の必死の懇願の叫びを、藤兵衛の怒りの声を、物音を、そして最後の藤兵衛の呟きを、その人影は聞いていた。

やがてソロツとそこを離れて、通りの方へ歩を運んだ。

色あせた紋服の着流し。頬骨の尖った、蒼白く痩せ細った幽鬼のような姿だ。

その侍は力ない歩を止めて、不意に、ゴホッ、と激しく咳入った。

「お艶が、お艶が岡野に思いをかけていた！」

岡野がお艶から、吉良邸の絵図面を手に入れたようと画策した！」

彼は小さく呟く。

坂原惣十郎の胸の病は、主家浅野家断絶後の浪々から、急激に悪化していったのだ。

その病が故に、仇討ちの快挙を企つ人数の中に加えられず、市井にあって、大石等の動きに心を配っていた彼惣十郎。

もはや癒ゆる事のない絶望の病の中にあつて、しばしば見かける大工の棟梁田島屋藤兵衛の姪お艶に、本能のうずきを押え難くも感じた惣十郎なのだ。

煩惱の犬と笑わば笑うがいい！

病の菌よりも根強く深く、胸の中に食い込んだお艶の可憐な映像だった。

神崎与五郎、前原伊助、茅野和助、岡野金右衛門の四人の壮士が、わざわざ吉良の門前で酒屋を開業したからには、何か意図するものがあるのだらうと、ひそかに気は配っていたものの、その金右衛門に、心の映像お艶が思慕を寄せていようとは――。

困縁事。

宿業。そして輪廻。

憐れお艶は、今宵ここに息絶えたのだ。もはや久遠に、美しい笑顔を望見する事もでき

なくなつたのだ。

誰がために花の命を散らせたのか？

金右衛門と云う、偽の酒屋の番頭のために。彼、岡野金右衛門が、吉良邸の絵図面を求めなかったら、お艶の身の上に、かかる悲惨事は招来されなかったであろう。

彼等が吉良邸の絵図面を求めるからには、やがて大事を目論む証左ともなり、それが亡君長矩への忠義とはなっても、それはそれ、一個人の夢をこわした憎悪は、死すまで消えはすまい。

昼は遠見にお艶の姿を望み、夜は藤兵衛の家の廻りを徘徊して、彼女の明るい声を聞く事を唯一の楽しみにしていた惣十郎である。病が故に、彼等壮士の仲間に加えられなかったにしても、忠義の二字は忘れてはいない。しかし、その心よりも、今の惣十郎の胸に燃えた煩惱の炎は激しく強かったのだ。

さはあれ。金右衛門に思慕をよせるお艶が、なぜ、にせの絵図面を渡そうと試みたのか？惣十郎には解けない謎である。

「岡野め、受取るがいい、偽の絵図面を手にして、勝誇った笑いを笑うがいい！」

惣十郎の唇許を歪めて、泣くような笑いが揺れ過ぎた。

恋の凱歌

もう二十日は過ぎて、いるのであろう。かなり欠けた蒼白い月の面を、濃灰色の断雲が南へ向って慌ただしく流れてゆく。

雨にでもなるのであろうか、なま温い風が鬱蒼たる櫟の大樹にヒョウヒョウと聞えていた。

男は必死だ。その顔を一見すれば、それと知れるように、額には玉のような汗が浮かんでいる。

藤兵衛は振っている。必死に必死に、鍬を振っている。

まだ盛りたての柔い黒土は、見る見るうちに藤兵衛の手に躍る鍬の先に掘り返される。

高見に吠える風音をのぞけば、あとは無音の死の墓場だ。

色彩も香もない、妖暗の石塔の乱立の中に微かに漂ってくるのは、藤兵衛の横に投げ出されてある新しい墓標の、松の香でもあろう。

その墓標には、静妙艶信女と読める。

お艶が死んだ後、急に気が狂ったとか――

世間の噂を是認するかのようには、藤兵衛は僅かのうちに瘦せてしまった。

その藤兵衛が、必死に、お艶を埋めた墓土

を掘り返しているのだ。瘦せた胸が、波のよう大きく起伏している。

やがて鍬の先で、コツンと鈍い音がした。

藤兵衛は忙しく鍬を動かして土を掬い上げると、その鍬を傍へ投げだして、腹這いになって穴の中を覗き込んだ。

真ッ黒な穴の中に、ポツカリと白い板の一部が浮き上って見える。

藤兵衛は、まるでノメリ込むように上半身を穴の中へ落とし込むと、両手で土を掻き寄せ、おいて、懷から鑿を取り出した。板の合せ目を指先で探って、鑿の先を差込むと、三度四度と振る。ギギッという釘のぬける音と共に、板が五分ばかり持上った。

雲を離れた月の光が、揺れる櫟の梢を映して、穴の中へ流れこむ。

藤兵衛は板の隙へ手をかけると、バリッと力まかせに引きはがした。

続けて他の板も――。

中は女の死体だ。衣裳のあでやかな色彩に胸から下を埋めて、俯いている横顔は、白蠟のように白い。額からこめかみへかけての、白布の繃帯は、無残、死へ導いた額の裂傷を結えたものであろう。お艶は合掌したまま、音もなく眠っている。化粧をほどこされた顔

を、ゾツとする位の美しさに見せて。

「お、お艶！」

藤兵衛は彼女の頬を両手ではさんで、自分の顔を押しつけた。

「お艶、苦しかったろう、淋しかったろう。

今出してやるぜ。離すもんか。俺アおめえを離しやアしねえ！」

憐れ藤兵衛は狂っている。涙もなく血走った眼。

藤兵衛はお艶の死体に手をかけて、グツと引立たせた。恐ろしい力だ。常人には思いも及ばぬ、執念の恐ろしい力であった。

「お艶！ お艶！」

藤兵衛は口の中で呟きながら、片足を棺のふちへかけて、とうとうお艶の体を穴の外へ運び出した。

自分の帯をといて、漸くのことでお艶の死体を背にくくりつけると、よろよろよろめきながら歩きだした。

五歩。六歩――フツと立止まったと思うとブツブツと口の中で何か呟く。また、歩きだす。

と――。

不意に、藤兵衛は肩先を突かれて、危く倒れそうに、傍の磨きのかかった大きな石塔の

特集★裏窓忠臣藏

所までよろめいていった。

「見たぞ藤兵衛、墓あばきを——」

月光を背に負って、その鼻ッ先にヌツと立ちふさがった瘦せた人影！

ゴホホッ！ と軽く咳入ってから、ソロツと前へ二三歩でた。坂原惣十郎の、病みほおけた陰気な姿だ。

「藤兵衛、貴様は悪魔か、犬畜生か。貴様は美しいお艶を、とうとう殺したな！ 世間にはあやまちで死んだように通っても、俺は知

っている。恥を知れ藤兵衛！」

「アッ、鬼だ！ 鬼が、鬼がお艶を殺した！ 鬼め、鬼め！」

藤兵衛は指を上げて真ッすぐ惣十郎をさしながら、フラフラッと近よってくる。

「金右衛門の鬼め！ お艶を騙して絵図面を取ろうとしやアがつた。お艶を殺して、絵図面を盗りやアがつた。絵図面、絵図面——偽の絵図面を手にして、金右衛門の野郎め、大悦びで行きやアがつた。イッヒヒ」

心は狂いに狂っても、頭にこびりついた絵図面の事は忘れないと

みえる。

四ツを合図にソツと忍んで来た金右衛門に藤兵衛は自分で、お艶のひいた偽絵図面を渡してやったのだ。

金右衛門は、感謝の眼をうるませて帰って行ったが、藤兵衛には、それがせめてもの復讐のように思えたのだ。

本物の吉良邸の絵図面は、藤兵衛がひそかにお艶の懷に抱かせてやった。

「お艶、失くしちやアならねえぞ。大事な絵図面だ、しっかり懷を押えているよ。金右衛門なんか、滅多に渡しちやアならねえぞ」藤兵衛は、フラフラッと惣十郎の脇を通り抜けようとした。

「待て！ 動くな藤兵衛！ お艶をどこへ連れて行こうと云うのだ？ 下せ。貴様の如き獣に、お艶を自由にさせてはおけぬ！」

怒りに震える惣十郎の手に、光鋭なために鞘走った。

「ワッッ！」

藤兵衛の絶叫がしじまに尾を引いて、彼の体は、両の手で空間を探りながら前のめりに倒れた。

お艶を背負った帯が、一緒に斬りたたれてお艶は藤兵衛の背を離れて横ざまに転がっ

た。

突如、惣十郎が激しく咳入った。一刀を投げだして、両の手で口を覆う。

ゴホホッと、背を丸め苦しそうに咳入る。掌には、真ッ赤な血潮がベツトリと付着している。

もはや、永らえぬ生命！

惣十郎は自己の命を知り切っていた。しかし、生きたい。大石を初め、同士の者達が、怨敵吉良義央を倒す日まで。

病が故に、連判状に名を連ねる事を許されなかった惣十郎には、いかに自分だけの心は固くとも、彼等の確かな動きはしらされていないのだ。

唯、彼等の行動を探り、壮拳の方法や日を推断するよりはかはない辛い立場の惣十郎であった。

その惣十郎が、より以上、強い激しい心で恋に悶える奴となったのだ。

「お艶！」

惣十郎は苦悶をこらえて、お艶の死体を抱え起した。

月の光を受けて、妖しいまでに美しい彼女の顔。

「お艶！」

惣十郎の目に、ポツツと涙が浮かんだ。冷たい氷のようなお艶の唇へ、惣十郎は自分の唇をソツと押しつけた。

彼女の生ある時は、遠見に笑顔を眺め、窓下に忍んで笑い声を聞くだけだった惣十郎が初めて彼女の体を抱き、唇を求めたのだ。

「勝った。とうとう岡野に勝った！ お艶は俺の妻だ！」

惣十郎の心の声がそう叫ぶ。

今となつては、どう金右衛門に添うべくもない彼女が、この冒瀆に近い行為を、悦んで許してくれるだろう。

惣十郎はソツとお艶の懷へ手を差入れた。

藤兵衛がウワ言のように口走った言葉によると、吉良邸の絵図面は彼女の懷にあるという。

お艶が自分のものになったと思うと、金右衛門への憎悪は急に薄らいできたばかりか、偽の絵図面を偽とも知らず、成功の悦びにひたっている彼等を想い浮かべて、惣十郎は悲しい憐れみを覚えるのだ。

彼等が、何事かを決行する日まで、生き永らえる事ができるなら、あくまでこの絵図は自分の掌中におさめておくのが、亡きお艶への手向けの心でもあろうが、それまで自分の

生命がもたぬとなれば、一ツ時も早く、彼等の許へ届けねばならぬのだ。

惣十郎は片手にお艶を抱いたまま、彼女の懷から取出した紙片を、片手で振りひろげると月の光にかざした。

絵図の片隅に、吉良邸絵図面と、小さい文字が見える。

惣十郎は絵図面を畳むと、自分の懷中深くしまい込んだ。そして、お艶の肌の移り香を懷しむように、暫くじっと目をとじた。

雲の流れが、揺れる梢の影が、彼とお艶の顔へ、慌ただしい明暗を投げかける。

やがて惣十郎は、投げ捨てて置いた一刀を拾って鞘におさめると、

お艶をかかえて歩一歩、力強く足を踏みしめて、藤兵衛が掘り返した墓穴の所へ歩んできた。

「お艶、やがては俺も、お前の傍へ行く。そして語ろう。その時はお前も、かならずこの惣十郎を良人と呼んでくれるだろう」

惣十郎は静かに静か

に、お艶の体を棺の中へ滑り込ませた。そして蓋をとじ、藤兵衛が投げ捨てて置いたその鍬で、土をかけはじめた。咳入っては手を休め、また、土を掻く。

幸い誰にも気づかれず、長い事かかって土を盛り、墓標をたてた。

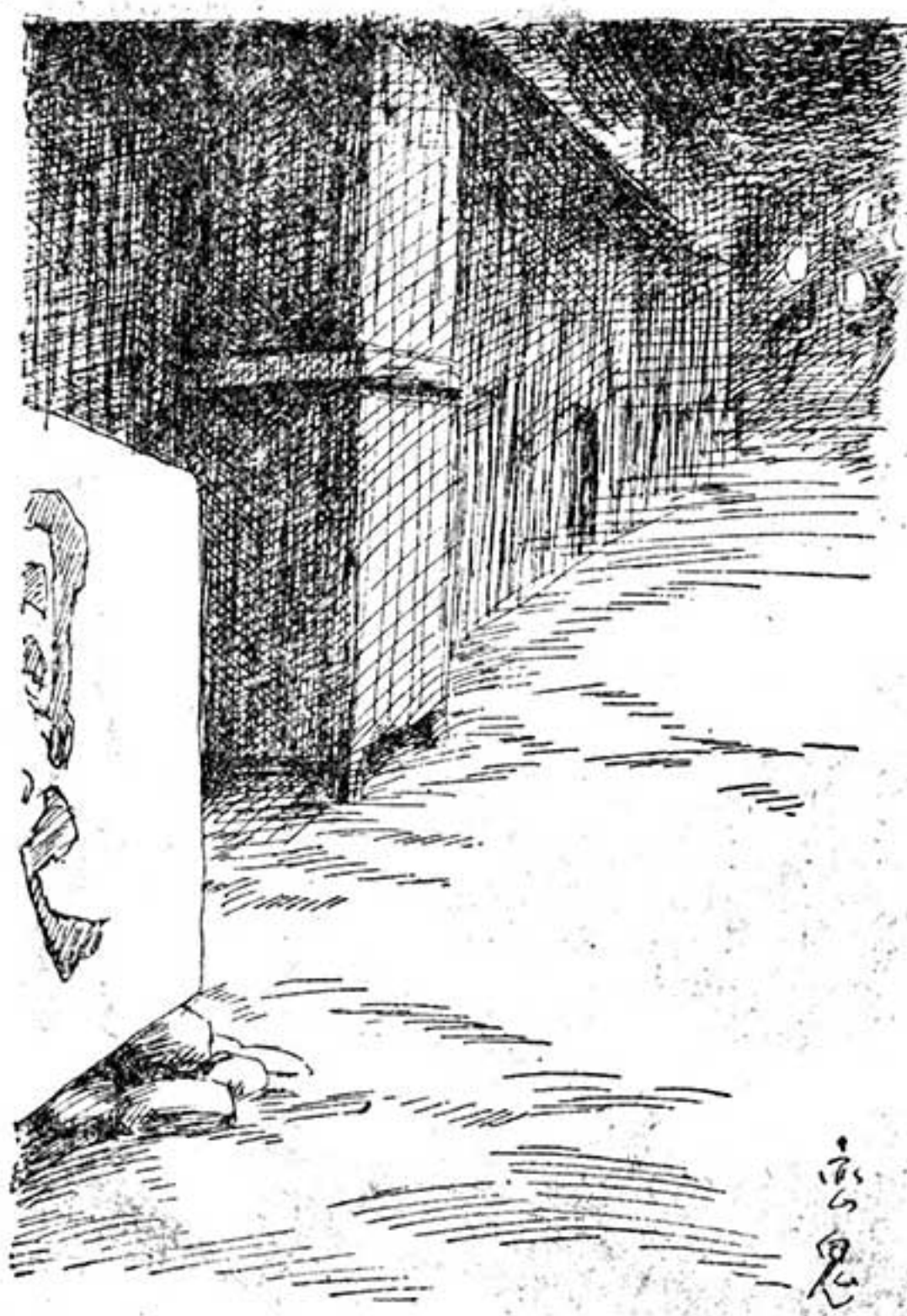
腰の印籠を取って、墓標の前に捧げた。

「南無！」

惣十郎は合掌したまま、暫く動かなかった。

暗黒の途

坂原惣十郎は、一ツ目の裏長屋の一棟で、ウツウツと眠っていた。



昨夜、回向院の墓地から、この陋屋へ辿りついたまでは覚えてはいるが、土間へのめり込んだまま後は全くわからなくなってしまった。

もう昼近い刻限でもあろうか。まばゆい陽光の光が障子の破れから斜めに、薄よこれた畳の上へ差込んでいる。

先ほどまで、土間ともお勝手ともつかぬ、じめじめとした所で、食事の用意を整えていたらしい女が、仕事が一段落したと見えて、ソッと来て惣十郎の枕許へ坐った。

名はおちか。年は二十八だと云うが、せいぜい二十三四位にしか見えない濃艶な年増である。

まだ十六という若い頃、故郷の武州から江戸へとんで、男の事で苦い蹉跎に転んで以来十数年。

男を向うに廻す鉄火場で、あられもない肌は見せても、男への思慕はフツツリとたった彼女。

だが。

ここにも因縁の小車は廻る。

世間の目を嫌って、この裏長屋に居を構えた彼女の隣へ移り住んできた不遇の浪士坂原惣十郎。しかも、敗残の病魔にむしばまれて

いる憐れな姿を見るにつけ、俠気なおちかの心へ、同情が生んだ愛慕が、はしなくも湧いて来た。

唯一人の弟をみとるような、年増女の持つ特殊な感情だった。愛しいと思う心の中へ、恋の一文字が融け入った感情――。

おちかは枕許に坐して、瘦せて蒼白な惣十郎の寝顔をじっと見つめていた。

と、突然、惣十郎が何かにうなされたように、体を動かしたと思うと、

「お艶！ お艶！」

乾いた唇を突いて出た女の名前。惣十郎の言葉は唯それだけで、後は唇を二三度動かしたが、言葉にはならず、



再びウツウツたる眠りにはいつてしまった。

（お艶？ お艶って、一体誰だろう？）

おちかは布団をなおしてやりながら、お艶と呼ばれる女へ思いを走らせたが、

（お艶って、まさか、三日ほど前、自分の過ちで死んだという、棟梁田島屋藤兵衛さんの所、あのお艶さんじゃアないだろうか）

同じ町内に住むお艶の事は、おちかも良く知っていた。

まさか、この人とお艶さんが——と思い直していても、他人にはかり知る事のできないのが、若い男女の心の中。

惣十郎が夢うつつの中に名を呼び、面影を偲ぶとすれば、美人で評判の高い、あのお艶以外に誰があらう。

おちかの心は急に暗くとざされた。

嫉妬！ そうだ、彼女の達観しきったと自ら信じてやまなかつた心の裡に、本来の女心の弱さが潜んでいたのだ。

しかし、今はすでに亡きお艶。いかに惣十郎が夢を追ひ、うつつに幻を偲ぼうと、所詮すべなき問題ではないか。惜しまれ、慕われながらも、早くこの世を去る者より、生ある者の誠の強さ。

それがこの私なのだと、おちかが我に問い

我に答えて、ホッと小さく吐息を洩らした時、

「御免よ」

声がして、油障子をあけてヌツと土間へはいつてきたのは、縁町に住む岡ッ引で、通称鬼権と呼ばれている酷薄な男だった。

「おや、親分——」

おちかは、いやな気持で立っていった。

「居るかい、坂原さんは——？」

「御覧のように、いま静かに寝ています」

「おめえさんの物好きにも呆れけるぜ。え、世間じゃア大分評判しているが、おめえの情人にしちゃア、ちと年が違いすぎるし、おまけに半病人と来やアがっちゃアなあ、ハッハハハ」

「御用はなんでしよう、親分？」

「なアに、ゆうべ回向院で、この間死んだお艶坊の墓を掘り返した野郎がいるんだ。おまけに棟梁の藤兵衛さんを、バツサリと一太刀——随分むげえ事をする野郎もあつたもんだが——それがよ、そのお艶坊の墓の所に、こいつが落ちていたんだ」

権六は袂の中から、一箇の印籠を取出して左の掌の上で二三度躍らせて見せた。

「まア、本当ですか親分？」

「嘘じゃアねえよ。おめえこいつに見覚えは

ねえかい？」

間違いない、常日頃、惣十郎の腰にあった印籠——そう云われてみると、昨夜惣十郎を漸くの事で床へ運んで横たえた時、その印籠は見当らなかつたような気がする——と思うと、おちかの胸は激しく騒いできた。

鉄火場で数人の男を相手に、屁とも思わぬ糞度胸も、ここでは不思議な位弱かった。

「ここでは、あの人が目醒まします。ちよつとそとへ——」

おちかは急いで権六を表へ連れだした。「おめえも苦労性だぜ。あんな瘦浪人のどこがよくって惚れたんだい？」

「親分、くわしく話して下さい——でも、ここでは——」

「いいとも。——そうだなア、そうだ、この向うの松源へ行こう。そこでゆっくり話そうじゃアねえか」

権六の頬へ、淫らな笑いが淀んだ。

松源——それは決して評判の良い小料理屋ではなかつたが、それを怖れるおちかではなかつた。

昨夜、お艶の墓が何者かにあばかれたばかりか、藤兵衛が斬殺されたと云う。その傍に坂原惣十郎の印籠。それが故の嫌疑！

それが誠、彼惣十郎のなせる仕業であつたとしても、その事情などは知りたくないおちかだ。すべてお艶の事に関する限り、耳に入れたくない今の彼女の心境であつた。

唯々、惣十郎を嫌疑の枠から除外させたい気持で、ソソクサと仕度をする、権六に伴われて、松源の奥座敷へ通つた。

「え、おちかさん、さっきも云つた通り、この印籠は間違いなく坂原惣十郎さんの物だぜ。たとえばだ、墓あばきや藤兵衛殺しに、坂原さんが関係ねえとしても、こいつがあそこに落ちていたんじゃア疑いはまず逃がれっこねえ。暫くの間、白黒の決るまで、御牢内暮らしをして貰わなけりやアならねえだらうぜ」

「親分、あの人に限つて、そんな事をする訳がない。なんかの間違いに決つています」

「そう俺も願いてえ所だが、ただ、それだけじゃア坂原さんの潔白を証拠だてるものにならねえよ」

「どうしたらいいんでしょう、親分？」

日頃鉄火なおちかが、小娘のように意気地がなかった。

「どう——って、まア早え話が、この印籠せえなけりやア、まず坂原さんのような病人に

嫌疑のかかる訳がねえ」

「お願い親分、その印籠をどうにかならないでしようか？」

「さアネ、どうにかならねえ事もねえが、——え、おちかさん——」

権六は、取寄せた簡単な酒肴の膳から、注ぎさしの盃を取つて、グツと息にあげると不意におちかの手を掴んだ。

何をするんだよ！ と、思わず迸りてようとした言葉を、辛くもぐつと呑み込んだおちか。

弱い立場にあると、その心も弱くなる。

(この印籠さえ取上げてしまえば——)

権六の眼の色から日頃の彼の素行から、その魂胆はわかり切つていた。

屈辱を屈辱と思わず、一時の遊戯と思つて我慢すれば、惣十郎は嫌疑の外に置かれるのだ。

とは云え、その屈辱にも、おのずと限界はあろうが——。

「気がききませんでしたねえ、お酌もしないで——」

おちかは右手を握られた儘、片手に銚子を取上げた。

「さすがに話がわかるぜ、おめえさんは——」

早飲み二杯の盃の底を見せた権六は、突然、狂つたようにおちかの腕を引いて、その体を抱え込んだ。恐ろしい力だった。

度胸と啖呵で争うのなら、権六如きは物の数ではあるまいが、男の煩惱の力の前には、やはりおちかは非力の女でしかなかったのだ。

つい口から出ようとする激しい言葉を、喉の奥に呑み込んで、おちかは無言のまま、権六の胸をついた。

板のように厚く固い権六の胸には、少しの影響もないのか、権六も無言、己の行動によつて、なおもせかされた熱い血を、グラグラツと頭を感じながら、体重と力でおちかの体を押し倒した。

膳が蹴飛ばされ、徳利が倒れる。彼女の裾が極度に乱れて、白い、そして豊かな股が露出する。

「アッ！」

本能的に体を引いたおちか。次の瞬間、右手を延ばしさま、権六の顔の肉にちぎれよとばかり爪をたてたが、その一本の指が、権六の右眼をかき下したのだ。

「ウッ！」

さすがにその激痛に耐えかねて、権六が体

を反らして顔を押える隙に、おちかは咄嗟にはね起ると、座布団の脇に置いてあった印籠を掴んで、脱兎のように走りだしていた。権六のわめく声と、足音を背後にきいて――。

おちかは走る。坂原惣十郎の浪宅へ。

すべてが無に帰したのだ。耐え得る屈辱なら、耐え忍ぶつもりだったが、煩惱の犬に肉を食い荒される屈辱は、耐え得る事のできないおちかだ。

「坂原さん、は、早く逃げて！」

「何ッ？」

惣十郎は布団の上へ起き上って、黙念と目を閉じていた所だったが、けたたましく走り込んできたおちかを見ると、布団の脇へ横たえておいた太刀を手早く掴んだ。

「さ、この印籠はお返しします。何も云わずに早く逃げて下さい。もう間近く手が廻ります」

――いかに気がたっていたからとは云え、昨夜の藤兵衛斬殺は、大きな誤りだった。だがすでに遅い。

どうせ近く病に倒れる体ならば、獄舎で果てようと、いとおしくはないが、今すぐに捕縛されて世間から隔絶されとなれば、その前になさねばならぬ仕事がある。

誰かの手へ――いや、岡野金右衛門の手へ本物の吉良邸の絵図面を渡さねばならぬ重要な仕事だ。

「おちかさん、随分と世話になった。健在でなア」

惣十郎は懐深く手を差入れて、絵図の在否を確かめると、よろめきながら外へ走り去った。「待って、坂原さん。私もゆく。私も連れてって――」おちかは追いつがった。

「いかん。この腐れはてた心の惣十郎の巻き添えを食ってなんとなる。離せ！」

「いやです。その体でどこまで行けるつもりなんです。私アついてゆく。坂原さんが行くのならどこまでだって――」

おちかは惣十郎の片腕を肩へ取って、白日の下を走り出した。

惣十郎は幾度か激しく咳入って血を吐いた。松坂町の吉良門前の酒屋、万屋まで辿りつ

いた時には、早くも手が廻ったのか、あたりの気配は物々しかった。

「岡野、これが腐れはてた拙者の、せめてもの働きだ。受取ってくれ！」

何事だろうと立ってきた金右衛門へ、惣十郎は絵図面を投げつけると、気力尽きたように、崩れ折れてしまった。

「坂原さん、しっかりして！ 坂原さん」

「おちかさん、済まぬ！」

惣十郎は最後の力を振りしぼった。

ここで倒れて、同志の者に迷惑を及ぼしてどうなるろう。おちかの肩を頼りに惣十郎は立上ると、逃がれるように外へ転び去った。

金右衛門はハッと顔をこわばらせながら、惣十郎が投げた紙片を手早く拾って拵げた。

（おッ、吉良邸の絵図！）

かつての夜、裏口へ忍んで、藤兵衛から受取った絵図面は、偽の絵図！ と神崎与五郎が観破したが、これこそまさしく本物。

どうして坂原惣十郎の手に――？

金右衛門は急いで表へ走り出た。

前方を見やれば、すでに遠く、もつれゆく男女の影。そして、その背後から、物々しい捕方の数人が、砂ほこりを巻き上げて追い迫って行くのだ。

彼惣十郎の手に、どうして本物の吉良邸の絵図面が――？ その疑問の氷解は、やがての日を待つよりほかはあるまい。いたずらに言葉をかける事を許されぬ今の身の上である。金右衛門は、惣十郎、おちかの走りゆく後姿へ向って目を閉じ、いつまでも、いつまでも、心の中で合掌していた。

○大石内蔵助良雄 家老 千五百石 四十四歳
 ○大石主税良金 十五歳
 ○片岡源五衛門高房 内証用人兼児小姓頭 三百五十石 三十六歳
 ○原惣右衛門元辰 足輕頭 三百石 五十五歳
 ○堀部弥兵衛金丸 元江戸留守居 三百石 七十六歳
 ○近松勘六行重 馬廻 二百五十石 三十三歳
 ○吉田忠左衛門兼亮 足輕頭兼郡代 二百石 六十二歳
 ○吉田沢右衛門兼貞 間瀬久太夫正明 大目付 二百石 六十二歳
 ○間瀬孫九郎正辰 堀部安兵衛門武庸 馬廻 二百石 三十三歳
 ○潮田又之丞高教 馬廻兼凶絵奉行 二百石 三十四歳
 ○富森助右衛門正因 馬廻兼使役 二百石 三十三歳
 ○赤埴源蔵重賢 馬廻 二百石 三十四歳
 ○不破数右衛門正積 元馬廻 二百石 三十三歳
 ○岡野金右衛門秀包 亡父物頭並 二百石 二十三歳
 ○小野寺十内秀和 京都留守居 百五十石 六十歳

○小野寺幸右衛門秀富 二十七歳
 ○奥田孫太夫重盛 馬廻兼武具奉行 百五十石 五十六歳
 ○奥田貞右衛門行高 大石瀬左衛門信清 馬廻 百五十石 二十六歳
 ○木村岡右衛門貞行 馬廻 百五十石 四十五歳
 ○矢田五郎右衛門助武 馬廻 百五十石 二十八歳
 ○早水藤左衛門満堯 馬廻 百五十石 三十九歳

當時の義士の身分と年令

○磯貝十郎左衛門正久 物頭並 百五十石 二十四歳
 ○間喜兵衛光延 馬廻 百石 六十八歳
 ○間十次郎光興 馬廻 百石 四十三歳
 ○間新六光風 馬廻 百石 四十四歳
 ○中村勘助正辰 馬廻 百石 四十三歳
 ○菅谷半之丞政利 馬廻 百石 四十三歳
 ○千葉三郎兵衛光忠 馬廻 百石 五十歳

○村松喜兵衛秀直 中小姓兼扶持奉行 二十五石五人扶持 六十一歳
 ○村松三太夫高直 勘定方 二十石五人扶持 二十六歳
 ○岡島八十右衛門常樹 中小姓兼 奉行腰物方二十石五人扶持 三十一歳
 ○大高源五忠雄 中小姓兼膳番元方金 倉橋伝介武幸 中小姓 二十石五人扶持 三十三歳
 ○矢頭右衛門七教兼 児小姓 二十石五人扶持 十七歳
 ○勝田新左衛門武堯 中小姓 十五石三人扶持 二十三歳
 ○前原伊助定房 中小姓兼金奉行 十石三人扶持 三十九歳
 ○貝賀弥左衛門友信 中小姓兼蔵奉行 金十兩米二石三人扶持 五十三歳
 ○武林唯七隆重 中小姓 金十兩三人扶持 三十二歳
 ○杉野十平次次房 中小姓 金八兩三人扶持 二十七歳
 ○神崎与五郎則休 横目 金五兩三人扶持 三十七歳
 ○茅野和助常成 横目 金五兩三人扶持 三十六歳
 ○横川勘平宗利 步行 金五兩三人扶持 三十六歳
 ○三村次郎左衛門包常 台所役 七石二人扶持 三十六歳
 ○寺坂幸右衛門信行 足輕 三十八歳



龐大な加藤の遺品、——メモ、日記、記録、写真切抜、その他百種百様の蒐集品、資料——の中に、一篇の原稿がある。百枚余りのもので、題は「墓屋敷」作者は、五代継男となっている。

加藤のメモによると、この原稿は、新聞小説の懸賞募集に応募したもので、予選で簡単に落選とある。

没原稿は、屑籠から塵埃焼却炉へ直行するのが常道で、この墓屋敷も無論例外ではなく、すんでの事に一片の煙と灰に化けてしまうところであった。

ここに加藤太郎がいた。異常なもの、この世の常ならぬもの——には、偏執的な直感と執着を持つ男である。偶然この原稿を一読するや、たちまち活動を開始して、かれの蒐集——人生裏面史に、奇異な一挿話を加える結果となった。

1 応募原稿

まず切り抜きから引用する。これは加藤の新聞社、——京都新報社の新聞小説懸賞募集広告である。

懸賞小説募集

- 一、題材自由。時代現代を問わず。但し明朗、健康、建設的意欲のあるものに限る。
- 一、未発表の創作たるべきこと。

墓屋敷

この世の幸にそむかれた佝僂男の飢えた牙に
美しい獲物は斃される！ 荒れ朽ちた旧家に
呪わしい父祖の血が繰り展げる妄執図絵！

神行京一 画・山田彬弘

- 一、四百字詰原稿用紙百枚前後。
- 一、当選作一篇賞金十万円。
- 一、猶作品は本紙日曜特集版に十回連載、従って一回十枚の予定で構成されたし。
- 一、応募原稿は一切返却せず。必要な方はコピーを取って置かれたし。
- 一、宛先は本社学芸部、懸賞小説応募原稿と朱書する事。——以下、略——



応募原稿は、三百二十六篇あった。予選は学芸部の四人の記者が担当したが、その一人片岡という中年の、新刊紹介欄担当の記者が突然奇声を発して、今読み終ったばかりの原稿をピシャッと叩いた。

「フエッ、こりやどうじゃ！」

「どうした。いいのがあったのか？」

ちょうど学芸部に顔を出していた加藤がたずねた。

「ウンニャ」

「うんにゃ？」

「フフ、新聞小説としては、ちとどうかと思われるがね……しかし、これア相当なものだよ。内容がいかにも凄い。カーさんなんか、眼の色変えて飛びつきそうなシロモノだぜ」

「創作なんぞにや興味はねえよ。おれの求めるのはすべて事実だ」

加藤太郎の異常蒐集癖は、社内だれ一人知らぬ者はなかった。

「なるほど、——それじゃあ、こいつも屑籠だ」

片岡記者が笑って、不採用の大きな屑箱に放り込むと、加藤の太い腕がヌツとのびた。

「待った。どんなものか、読むだけ読んでみるのも悪くはないな」

気が変わったと見えて、その原稿を拾い上げたのである。そして——

一読。

再読。

いきなり、ウームと唸り出したのだ。しばらく腕を組んで、天井裏を睨んでいる。

何か気になる事があるらしい。それは、直感——とでも言うべきもので、明確な疑惑、——根拠のある推理ではなかったが、やがてチツと舌打ちすると、卓上の受話器をとりあげた。

「福知山通信部を呼んでくれ」

たばこ一服。

「もしもし、こちら福知山通信部、吉峯です」

——フフ、送るような記事はねえぜ」

「ひでえサムライだな。昼間っからパイ一やってるのかい。そんな事でよくブン屋が勤まるな。ヘッ、呆れたものだ」

「や、その声はカーさんだな。何だよ、今時分……？」

どうも語尾が怪しい。加藤の推察通り、福知山通信部の吉峯記者は、昼日中からアルコールをきこし召しているのであった。

「ちょっと聞きたい事がある」

「OK」

「そちらに通称^{せうし}佝僂屋敷、またはお捨館——と言うのがあるかい？」

「……ほーん」

「ほーん、じゃわからねえよ。天田郡中六人部落だ」

「——ある」

「ある！」

「妙な物に眼をつけやがったな。佝僂屋敷というのは、この辺じゃ有名な……と言うほどでもないが、まあちょっと因縁のある屋敷だ」

「当主は？」

「牟礼五左衛門」

「フーム。で、その男佝僂なんだろう？」

「どうして、そんな事知ってるんだい。佝僂屋敷だから、当然住人は佝僂だろう——なんてなコジツケは大記者加藤太郎のとらぬところだ。おい、白状しろよ。何かあったのかい……？」

「いや、そういう訳じゃない。調べて見んことには、何とも言えないんだ。電話じゃないから、おれ、そっちへ行くぜ」

「よし来た。お待ち申し奉るよ」

吉峯記者は、何か、事件——を感じたとみえる。

2 佝僂屋敷

福知山通信部。

ガランとして殺風景の標本である。机が一つ——退屈紛れに小刀や鉛筆でいたずらすると見え、落書が一杯でキズだらけで、墨やインクの汚れがしみついている。——その上に卓上電話があり、ガタ椅子が二脚、机の下に二級酒の一升瓶——まだ三分の一ばかり入っている。——机のひき出しに湯呑茶碗が二つするめの焼いたのが半枚……。

「まず一杯」

トクトクと湯呑について、

「田舎廻りは情けねえ。早いとこ本社へ帰りたいよ。なあア……」

と、吉峯記者、愛称ヨツちんが慨嘆した。

「早速だが」

と、加藤の顔には感傷の力の字もなかった——むかしは、本社の探訪記者として、共に鳴らした仲で、しかし吉峯は、酒が崇って大失態を演じ、田舎の通信部遍歴を、もう三年近く続けている。

「——佝僂屋敷、別称お捨館というのは天保五年の建立で、現在の当主は五代目だと言う事だが……」

「相変らず忙しい男だな」

「性分だ」

「けっ」

「ところで、今の話……」

「わかったよ。カーさんの言う通りだ。しかしそんな事をどこで調べて来た？ 史実にはない話だぜ。こちらの寺の記録に片々と遺っている程度だと承知している」

「フーム」

と加藤が唸る。

「実はな。おれはこういう物を持って来た」
社名入りの大封筒から取り出した物は、例の応募原稿——、墓屋敷——であった。

「まあ、この、これ——チェックしてある個所を読んで見ろよ」

（原稿の一部だ。私の手許にある原稿、——加藤の手で、赤鉛筆の印が、いまでもクッキリと残っている）

おれの住んでいる屋敷は、寺と背中合せになっている。——妙法寺だ。境の塀が崩れておれの家の庭と寺の墓地が、くっついてしまった。これじゃアとんと墓屋敷だ。——が、世間の奴等は、遠慮会釈もなしに、佝僂屋敷——だって言やあがる。昔は、お捨館とも呼

んだそう。この屋敷が出来たのは、徳川時代、十一代將軍家斉の天保五年四月二日である。丁度色狂いの家斉がクタバル三年前と言う事になる。間違いはない。——おれは、代遺されている記録に拠って書いているんだからな。夢々疑うなかれ、てんだ。

「へえエ、何だいこれや？」

吉峯記者が、原稿から眼を放して、疑がわしそうに言った。

「五代継男作『墓屋敷』の一節——て訳だ」
と加藤が苦笑しながら答える。

「五代継男？」

「ペンネームだ。本名は牟礼五左衛門」

「ほう！」

「まあ、その次のチェックの個所を読んで見ろよ。——ホラ、ここだ」

ひでえモンだ。この屋敷が出来てから、おれで五代目、代々一人の例外もなく佝僂の子が生れやがる。——と書けば、近頃掃いて捨てるほどいる医学博士どもは、首をかしげやがるだろう。ヘン、勝手にかしげろ。誰が何と言ったって、事実なんだから仕方がねえ。——と言ってもだ、おれは何も佝僂の話をし

ようという訳じゃないのさ、題を見たらう？
墓屋敷……てんだぜ。フフ、そうさ、いかにも墓屋敷だ。怖ろしい、不気味な、ゾーッと
なるような物語り……否、実録だ。確かな記録と、そして、おれの経験に拠る実話を書こうという訳である。へへへ、——である。なんて言うのと、まるで演説でもしているようだな。フフ、逃げえねエ、最後にして最初の演説……死を待つ間の、退屈しのぎの演説……驚くな。おれは、あと一時間もしたら、死ぬんだぜ。へッ、さまア見やがれ！

「おいおい、これア正氣の人間が書いた物かい？ 確かに佝僂屋敷の五左衛門が書いたものかい？」

吉峯記者が、またまたぐずりはじめた。

「正氣かどうか、その所の受けあいかねるが、牟礼五左衛門の書いた物である事だけは間違いないさそうだ。ところで、その五左衛門だが、一体現在の年は幾歳なんだ？」

「ウム、確か二十六か七だと思ったが……」

「なるなど、妙な名前だが、代々嫡男はそう名乗る事になっていると見える」

「いや、嫡男というがね。牟礼家は、代々男の子が一人しか生れていない、……そう聞い

ている」

「フフフ、それがとんだ大間違いだ」

「え？」

「まあ、次のチェックの個所を読んで見ろ。凄いぜ」

3 初代死女を抱く

氣ちがい。そうだ……おれの家は、この牟礼家は、代々佝僂で氣違いの筋だ。牟礼家初代の五左衛門が書き遺した物で見ると、福知山藩主朽木近江守綱張の隠し子……膳所藩主本多兵部大輔康禎の二男で、朽木家へ養子に入つた彦太郎時代、侍女のお縫という女を犯して生ませた子、——それが、初代の五左衛門である。そいつが——ヘン、おれの曾々祖父に当る奴だが、そいつ——で結構だ。で、そいつが、佝僂だった。彦太郎は、天保五年十二月十六日叙爵して河内守、のち近江守綱張となり、天保七年七月二十九日、朽木城主となりアがつたが、佝僂ゆえに五左衛門は、家系からはずされ、現在の地に屋敷を建て、牟礼姓を貰って住む事になった。これ即ち、佝僂屋敷のはじまりなり——てえ訳だ。

ところで、驚くなよ。

初代五左衛門、佝僂でスガ眼で、まるで化

けものみたいな男だったが、何て言つたつて御領主様の隠し子だ。百姓べえなんぞ頭があらるもんか。——フフ、村の娘で、さしずめ早苗小町てえ別嬪を、無理矢理女房にしちまつた。

可愛がつたに逃げえねえや。

次々子供が生まれたな。男、女、男——と続けてな。ところが、みんな生れながらの佝僂だ……。

それで、どうしたと思う？

殺つたよ。殺つたとも！ 牟礼家を継ぐ者は、男子一人でよい。余の者は、必ず殺すべし、予の血を継ぐ者、必ず必ずこの家訓守れかし、——と言う訳だ。ヘン、代々みんなこの家訓を守つていやがる。記録——門外不出の記録で、チャンとわかるんだ。

初代五左衛門、こんな風に書き遺しているぜ。つまり——

予、呪われて誕生す。然り、生れながらにして佝僂なり。予の子、亦佝僂、佝僂佝僂……呪われたる血なり、毒血なり。

予の母縫、張公（綱張）を嫌う。一夕、手籠めにされ、石の如く冷たく接して予を妊みたるか——抱接の悦びなく、張公を呪いつつ犯され、呪念毒血と化して、佝僂の予

生れたるなり。その怨霊、血に血を伝う、予の血統従いて、すべてこれ畸型ならん。嫡男一人のみ継がしめ、余の息、女——即ちこれを葬るべし。これ家訓とす。子々孫孫固く遵守せよ。

こういう訳だ。世間の奴等ア知りやしねえ……牟礼家は、男一人しか生れねエものだと、思つてやがる。へへんだ。フフンだ。

殺した子供は、どうしたと思う？

初代五左衛門は、地下蔵を掘らせたんだ。

そうしてよ、その地下の穴蔵に、殺した子供の棺桶を並べて置いたんだな。

つまり、地下墓という奴だ。変な事を考えたものさ。もうその時分から狂つてやがったに違いねえ。

証拠がある。

初代五左衛門、よっぽど女房に惚れ込んでいたんだな。早苗小町、——名前は、お京と言う。美人だったに違いねえ。それが、三人目の子を生むと間もなく死んだ。五左衛門、悲嘆やる方なしでエところだよ、なアお立合……へへへ。

泣いて、かなしんで、さてどうしたと思う？

本来なら葬式をやつてよ、有難くもねエ坊主のお経をあげてさ、幸い寺は裏隣りだ、ナムアミダブツと、埋葬して石塔を建てるところだ。
が——

そうしなかった。オッ死んだ事をだれにも言わねえフフ、気をつけろ、これから凄げえ事になりやがるんだ。

物言わぬ口、動かぬ瞳、汚点一つない白蠟の肌……ひんやりと冷たい体……、もう五左衛門が、どんな乱暴をしようと、どんな下劣



な愛撫をしようと、お京は抵抗もせず、嫌悪の表情も見せず、透き通るような美貌に、凍りついたような微かな微笑を浮かべて、受け入れてくれる。

ヘン。

五左衛門は嫌われていたのさ。お京が生きている間は、五左衛門に抱かれることに、地獄の思いがした事だろうよ。何しろ、無理矢理強奪された花嫁だ。五左衛門の舐めずるような、いやらしい愛撫……逃げもならず、眉をひそめ、唇を噛み、憎悪と絶望と呪詛に歪めた顔で、冷たく石のように愛される。

どんなに五左衛門がベタ惚れにホレていたって、これじゃつまらねえやな。

しかし――

死んだ女には、感情がない。天女のように美しく、されるがままだ。

「へへへ……へへ……フフフ」

ゾツとなるような含み笑いが、病室の襖越しに、夜となく昼となく聞こえて来たことだろう。

「わしの物だ。この……眼も、口も、鼻も、耳も、乳も、手も、足も、……へへへ、みんなわしの物だ」

が、そのわしの物も、いつまでも、そのま

まではないない。日がたてば、腐って来る。汚点一つない白蠟の死肌にも、きたない死斑が現われはじめた。固く強直し、やがて、フヨフヨにゆるんで、ふくれあがって来た。瞳は混濁し相貌も変わり、もはや凍りついた微笑もない。

「――お京、お京……」

呼んだとて、叫んだとて、どうにもならぬのだ。諦めて五左衛門は、お京の死骸を、地下墓に移した。二人の子供の棺に並べて……小さい死棺が二つ。大きい死棺が一つ。

今でもあるぞ。佝僂屋敷の地下部屋の墓所に。朽ち腐れて、奥の方から、一つ――二つ――三つ……

地下墓の死棺はこれだけか？

馬鹿野郎！ あるんだ。あるとも！もっともつとあるぞ！ 牟礼家五代、死棺は無闇にふえて行ったんだ。必要以上に多くの棺――それが何を意味するかわかるかってんだ。フン。

わかるめえ、アタ棒だ。わかってたまるか。それを今、これからおれが書こうと言うんだ。

そうだな。先に、我が家の地下墓場にある

死棺の数だけ教えておいてやろうか。

二十三棺。

わかったか。二十三の死棺が、屋敷の地下に横たわっているんだ。ヘッ、墓屋敷――びったりだろう。

「いよいよこいつは気違いだ。いや……フフッ！ おいおいおどかさなよ。これア応募原稿、つまり創作じゃないか。お前の態度が妙なんですっかり引ッ込まれちゃったよ」

吉峯記者が、いきなり抗議するようにベチヤクチャ始めた。

「そう思うかい」

と、加藤は落ち着いている。

「エ？ そう思うかいって……そうなんだろう？」

「フフ、まあいい。もう少し先を読んで見ろよ。創作と思うなら、そのつもりでもいい。さ、今度はここだ。このチェックから先の原稿だ」

言われて、しぶしぶ再び原稿に眼を落す吉峯記者……昼間からきこしめしていた二級酒の酔いも、あらかたさめてしまっている。

4 地下の墓所

(引用続き——)

腐れたお京を諦めて、初代五左衛門は、暫く虚脱したように、ボンヤリ日を送った。

——と、ある日……そうだ、ある日だ。切代の書き遺した物にや、何月何日と、はっきり書いてない。だから、ある日なんだ。ヘッおあいにく様だ。

ある日、裏の妙法寺で葬式があった。いや——村の娘が死んで、妙法寺の墓地へ埋葬されたんだ。聞いて見ると、お藤という水呑百姓の娘だが、容色抜群、生前はお京と二人、どっちが菖蒲、かきつばたといわれた女である。

初代も見かけて知っている。

——で、どうなったと思う。その夜、お藤の墓があばかれたんだ。月があったという。

すれば、月光に蒼白く照らされて、佝僂、スガ眼の怪奇な男が、卒塔婆を抜き、土を掘り棺の蓋をはらって、経帷子の死美女を抱きあげ、踰躑と姿を消す物凄いその光景を、見ようと思えば見られた訳だ。

死美女を屋敷に連れ戻って、初代は何をしたか——。知れたこと……フフ。

死女は抵抗せぬ。嫌悪も憎悪も侮蔑も呪詛もない。ただされるがままである。初代五左

衛門の、領主様の隠し子という権力と金力をもつてすれば、生身の女をいくらでも拉致出来るはずで、しかし初代はすでに生きた女に対する興味を失なっていたのだろう。

これア常人にはわかるまい。が、おれにはわかる。フフフ……

やがてお藤も腐っていく。といつてすぐまたおあつらえ向きに女の葬式があるもんじゃアねえ。

だから初代は考えやがった。美女の死体になけりや作ろうじゃないかとね。

死女をつくる。何でもない事さね。おれなんざ苦労したが、初代の頃は、チョン髻時代だ。朽木領から外へ出ると、チト面倒だが、領内なら勝手放題と言つてよい。

出歩いて、娘を物色して、拉致して来て、殺して、そして……と言う段取りだ。ヘン、こうして、地下墓の死棺が次々とその数を増して行つたという寸法である。

魔性の血は続く、毒血は簡単に消えやしねえ。

二代五左衛門。こいつも佝僂でスガ眼で、やっぱ死女を愛した奴だ。考えると、二代の方が、初代より凄いいぜ。

なぜか——

つまりだな。二代は女房に嫡男を生ませると、もう用はねエてんで、早速殺してしまつたんだ。記録によると、明治七年の事だ。

王政復古、薩長の天下で、朽木藩もすでない。初代のように無茶は出来ないはずだが二代は巧みに隠れて、次々と死女を拵らえ、棺の数を加えて行つた。

そして、三代、四代、五代……おれが五代五左衛門だ。

呪われた牟礼家五代。五代限りで牟礼家は消える。おれが消すのだ。大学に学んだおれですらが解き得ない牟礼家の呪い、おそろしい遺伝、理性を超越して、行動する陰血の恐ろしさ……。

そうだ。

おれもまた例外ではない。死女を愛す、否死女のみを愛する男なのだ。来て見るがいい——佝僂屋敷の地下墓場に、まだ新しい女の死体がつつある。棺にも入れず、腐り土の上に青白く横たえられている。

フフフ。

勇気があるか。あるなら来い。来い……来い……来い……

それとも、このおれの記録をしまいまで読んでからにするか。フフフ、これからが、お

れの話になる。初代以来のカビのはえた記録に頼って書いた前半と違って、これから、生々しいおれの告白だ。つまり、遺書だ。

はじめに言って置こう。

おれの愛しい三人の死女は、すなわち、渡辺美津子、近江良江、加奈絵津子なんだ。

「やっ!」

突然、吉峯記者が奇声を発した。

「どうした?」

と、加藤太郎。

「こ、これ! この三人の女……これア君、最近この福知山地区で行方不明になり、大騒ぎしている女達の名前だぜ」

「だから、どうだと言うんだ」

「行つて見よう。もし、これが事実なら、大特種になる。さア」

と今度は、吉峯が張り切りだした。

もう立ち上っている。

「嘘っぱちだとしても、別に損はない。五代五左衛門の奴が、しゃアしゃアしてやがったら、お気の毒さま、お前さんの原稿は予選で落選、焼却炉行きだ——ヘン、と言ってやりやアいいよ」

5 死女と棺列

新聞記事切り抜き。——その一。

アベック襲わる!!

昨夜十一時頃、市内目抜通一丁目五の洋服商津村伍一さん(二二)と恋仲の同二丁目七の洋服店みどり屋店員、渡辺美津子さん(一九)の二人が、福知山映劇最終を見ての帰途、由良川沿いの通称松藪地内に立入り、愛の語らいに夢中になっている最中背後より怪漢が忍び寄り、伍一さんの頭部を棍棒様の兇器で殴打昏倒せしめ逃走した。同時に美津子さんも行方不明となり当局では誘拐されたものと見て、犯人厳探中である。

新聞記事切り抜き。——その二。

娘さん、螢狩りに出て帰らず!!

昨夜十時頃、天田郡六人部村農業近江良蔵氏長女良江さん(二〇)は、同村内の螢川に螢狩りに出掛け、その儘帰宅せず、良蔵氏から捜査願が提出された。当局の捜査の結果、螢川上流川岸の草叢の中から、良江さんの下駄片一方と、持って出た団扇が発見された。——以下、略——

新聞記事切り抜き。——その三。

高校女生徒誘拐さる!

昨夕十一時頃、福知山市内の友人宅を訪問して帰途についた、天田郡百人村農業加奈弥太郎氏二女絵津子さん——福知山高校三年生——が、そのまま帰宅せず、心配した家人が調べた所、自宅より約五〇〇メートル離れた道路脇に、絵津子さんが乗って出た女用自転車放置してあり、友人から借りて来た書籍が散乱しているのを発見、驚いて届出た。当局では、先の渡辺事件(本紙既報)近江事件(本紙既報)も同一犯人の犯行と見て、誘拐魔特捜班を編成、捜査に一段と力を入れる模様である。

「フーム、これが何處屋敷か……」

加藤太郎は、妙法寺裏の屋敷の前に立って唸った。

天保五年建立というだけあって、なるほど古い——土塀がムチャクチャに崩壊しているばかりでなく、中の建物も、あらかた腐朽して使用に耐えない様子である。

「この通りだ。屋敷は広いが、屋根は穴だらけ、床はあちこち腐り抜けて、もう長い間放置されている。使用しているのは、近年建て

増した離れで、それでも階下四間、二階三間ある」

と吉峯記者が説明した。

「五代五左衛門は、この屋敷に独りで住んでいたわけだな」

「そうだ。五左衛門が京都の大学を出るまでは、留守番の夫婦が住んでいたんだが、それも五左衛門が戻ると解雇されてね。

……母親は五左衛門が生れるとすぐ死んだというし、父親、つまり四代目五左衛門も、五代目が大学二回生の時死んでいる」
「なるほど。では、入って見るか」

五代目の姿は、どこにも見当らなかった。使用している新築の離れも、埃の状態から察すると、少なくとも一週間は、掃除された形跡がない。

「おい。カーさん。これアいいいよ本物だぜ……。しかし、地下蔵てえのは、どこから入るんだろ。どこかに入口がなきゃいけない訳だが……」

と吉峯記者はうろろする。

「それは無論、天保五年製の母屋のどこかだ



よ。なあに、探せばすぐわかるだろう」

二人は、幽霊屋敷のような母屋に足を踏み入れた。ここは当然平屋で、しかし部屋数は十三あった。

十三の部屋。

ヤソ流に言えば、不吉な数の十三も、当時としては、かえって吉兆の数であったのかも知れぬ。

崩れた屋根。

抜けた床板。

腐ってブヨブヨにふくれ上った畳。埃と湿気と蜘蛛の巣……廃屋の幽気、あるいは鬼気と言うのか、そういった不気味なモノが、ごくそくと二人に迫る。

「見ろ！ ヨッちゃん！」

突然、加藤が吉峯記者の注意をうながした手が部屋の一角を指している。見ると、長い間の埃の堆積の中に、一個所乱れがある。

足跡だ。

離れから庭をよぎって縁側を上り、腐った床の間に続く足跡が、埃の上にクッキリと残っていた。

「——つまり、あの床の間が動く仕掛けだろう」

加藤がボソリと言った。その推定に誤りはなかった。床の間が動く……と、その下は石畳の段々で、降りるとそこは、かなり広い地下部屋であった。

いや、むしろ地下広間と言った方が適切かも知れぬ。

「ウーム」

吉峯が唸った。二人の懐中電灯の光りが、この不気味な地下墓場のたたずまいを、次々と照らし出したのである。

吐き気を催すような異臭。——その中に、全裸の女の死体と、浴衣姿の男の死体があった。

女の死体は三つ。

そして、その向う……は、整然と並ぶ死棺の列であった。

よく見ると、棺が腐朽して、中から白骨や髑髏が覗いているのや、ここで乱闘があったとみえて、押しへしゃげられ、棺の割れ目か

ら白骨の手や足が、ヌツと突き出ているものがある。

「おれは吐きたくなかったよ」

吉峯が顔をそむけた。女の三死体、それはもう腐敗が進行して、物凄い悪臭を放ち、虫がわいている。

浴衣の男——何れの五代五左衛門は、死後約一週間と思われたが、うつ伏せに倒れて、左の手が、傍の一番新しい女の死体——加奈絵津子と推定される——の、左の乳房を、ガツキと掴んでいた。

「青酸カリだ」

加藤が呟やいた。五左衛門の死体の右方に青酸カリの小瓶が転がっている。

「ゲーツ」

とうとう吉峯は胃の物を吐きはじめた。

「おい、おれア一足先に失礼するぜ。外で待ってるよ」

「だらしがねエぞ。しっかりしろやい」

「いけねえ、いけねえ……もういけねえ。これ以上のおつきあいにはごめんだ」

「それじゃア、カメラを置いて行ってくれ。おれは写真を撮っておく」

「頼む」

ほうほうの態で逃げ出した吉峯を見送って

加藤は閃光電球を、パツ——パツ——とやりはじめた。

牟礼家五代にわたる地獄の欲情……その結果がもたらした地下墓場……。

写真撮影が終っても、加藤はこの地獄墓場に突ッ立って動こうともしない。かれの、異常なもの、この世の常ならぬもの——を悦ぶ癖が、異常性格が——今、この男に妖しい満足感を与えているのだ。

瞳が輝いている。

口許には微笑があった。

こうした時の加藤を見たら、恐らく一番の親友でも、シッポを巻いて逃げ出してしまうことであろう。

今、加藤は何も見していない。かれの脳裡を五代五左衛門の原稿の一部が、次から次に現れては消えて行く……。

6 復讐

何れのおれにも青春はあった。地獄の青春だ……片想いの連続、むくわれぬ青春……氷の青春、失望の青春、涙の青春……呪詛と狂気の青春なんだ。畜生ッ！

呪われた血、呪われた家系、呪われた遺伝の牟礼五左衛門——くそッ。くそッ。——勝

手にしやがれッ!

(——考えて見れば、かわいそうな奴だな。

……加藤の視線が、死女の乳房を握って放さぬ五代五左衛門の死体に注がれた……)

それでもおれは淋しく諦めていた。佝僂でスガ眼、女には縁がない。ならば一つ、学問で名を上げてやろう。勉強したぜ。秀才と言われたもんだ。

専門は薬学。

ノーベル賞学者になってやる。本気で考えていたんだ。が、卒業の年、ついに悪魔の破壊がやって来やがった。おれは恋をしたんだ……それも今までのような、淡い恋ではなく火のように燃える恋だ。

相手は学友の橘美沙子である。

美人じゃアない。眼鏡をかけて、冷たくとり澄まして、馬みたいに長いツラの女だ。そのかわり、美沙子は秀才だった。薬学部で、常におれと首席を争った。

フフフ。

そうだ、もちろんおれが負けるはずがない。

首席はいつもおれのモノだった。

そして、ある夜、橘美沙子が、おれの下宿へ転げ込んで来た。

「どうしたんです?」

びっくりして、おれがたずねると、

「浜田さんに誘惑されたの。お酒を吞まされて、そして、そして……暴力であたしを……夢中で、あたし逃げて来たの」

と、彼女は、あえぎあえぎ言った。なるほど酒気をおびている。珍らしく化粧していておれには素敵に美しく見えた。

「浜田が……?」

浜田は学友で、美男子で、女たらしだ。

「あたし浜田さんのような、頭のカラッポな人大嫌い。あたしの好きなのは、それは、尊敬出来る人、才能があつて、将来人類の為に何かしら大きな貢献の出来る人……あたしより賢い人……腕力でなく、頭であたしを負かす人……」

美沙子はおれの膝にすがって言った。

「え!」

「牟礼さん、あたし、貴方を……」

「エ!」

心臓がドキンと躍った。本当だ。今でも忘れねえ。

「ぼくは、佝僂でスガ眼で……」

「そんな、肉体的条件なんか、問題じゃありませんわ」

「それじゃア、美沙子さん!」

「ええ」

彼女は唇を寄せて来た。俺はもう無我夢中だった。ヘン、だらしねえ——なんて言わさねえぜ。だれにだって言わせるもんか。

この夜から、おれに相愛の恋人が出来た。佝僂男のこのおれに恋人が出来やがった。フフフフ。

へへへへ。

おれが、どんなに有頂天になったか、だれにもわかるめえ。おれは幸福だった。夢見るような毎日だった。

が——

この幸福は、長くは続かなかった。夢——そうだ、一夜の夢みたいなものだったのだ。

畜生!

美沙子の奴は、おれをからかっていやアがつたんだ。暫く後のある夜、おれは、甘い囁きや接吻だけではあきたらず、肉体的にも、しっかりと二人の仲を結びつけてやろうと決心したのだ。丸山公園の奥深く、時刻も場所も絶好の条件だった。が——、ピシヤッ。

美沙子はおれの横っツラを張りどばし、憎憎しそうにホザきやがった。

「馬鹿っ。間抜けっ。だれがあんたのような

化けものを、本気で愛したりするもんですか。佝僂男のくせに、ヘンに秀才ぶっているから、ちょっとからかって見ただけじゃないの。ホホホ……そしたら夢中になって、今度は大変な色男気取りね。滑稽だわ……漫画……フフ、蔭でみんな大笑いしてたのよ。あんと接吻したあと、あたし百ペンも嗽いして、アルコールで何度も何度も、唇を消毒しなきゃ、気持が悪くて御飯も食べられなかったんですよ。ブルブル、ぞーっとするわよ。思い出しただけでも虫ズが走る。佝僂男は佝僂男らしく、田舎へ帰って百姓でもおやんなさい」おれはグウの音も出なかった。体中の血が全部頭へ逆流した。この時からおれは狂ったんだ。

くそっ！

飛びかかって、おれは、ひと締めで美沙子の首を締めていた。締めて、締めて……フン気がついたらもう死んでやがった。

美沙子は抵抗せぬ。悪罵もない。されるがままだ。フン……それから――。

ひと晩かかって穴を掘り、死体を埋めて、また翌日から、何喰わぬ顔で学校へ出はじめた。

美沙子の失踪。

少々面倒な事もあったが、しかし、結局死体が出ず、おれは無事に学校を卒業した。

が――

学問への情熱を失なったおれは、廃人のようになつて佝僂屋敷に帰つて来た。

暫くは何事もなかった。

廃屋で廃人の生活……そして、次は、俺が牟礼家代々の秘記録を、朽ち落ちた天井裏から発見するという段取りになる。ヘン、うまく出来てやがる。

この記録を読むと同時に、意識の底にあった欲望が、猛然と頭をもたげて来やがった。美沙子の死体を愛撫したあの時の異常な悦び……そいつが、おれの体中を疼かせ始めたんだ。

――で、もうわかったらう。おれは、次々と三人の女を襲った。渡辺美津子……近江良江……加奈絵津子――三人の女は、おれの異常な、地獄の悦楽を充分に満足させてくれた。しかしだ。おれは馬鹿じゃない。同一犯行を繰り返せば、いずれはバレるにきまつている。ここらが潮時だ。ヘン。毒をくらつて、この呪われた牟礼家の血統を断ち切る事にするとしようか……。

「――おい、カーさん、いい加減に出て来いよー」

吉峯記者が、石段から首を突き出して声をかけた。その声で、加藤の冥想もフツと消えた。

次から次へ――加藤の脳裡に現れては消えて行つた応募原稿「墓屋敷」の最終の部分に当る一節……作者は、今眼の前に死体となつて転がっている。執念の手で、死女の乳房を握りながら……。

しかし、ここに一つ疑問がある。

橘美沙子はなぜ、あのような手段で以て、牟礼五左衛門を嘲弄したのか？ 原稿の美沙子の放言……秀才ヅラが憎かった――だけでは動機不充分である。

が――、これも加藤の調査で分明した。その年の大学首席卒業生には、かなり贅沢な条件で、全費用向う持ちの留学招待が米国から来ていたのだ。美沙子はこれを狙った。五左衛門を失恋の闇に突き落して、勉学への意欲を失なわせ、その隙に、首席の位置を占めんとしたのであったらう。

その計画が、思わぬ結果、おのれの死をまねいてしまった。――と考えてよさそうだ。

(終)



大不忠者

良助は、はっと息をのんだ。
次の間にお嬢さんのお里さんの
あられもない姿が――

鷹野二十三

東 啓三郎・絵

女の首

同心、油井源一郎は、馬喰町で赤穂浪士たちに追いついた。
その朝のさわぎに逸早く床をけって表へとびだした一人であった。
役目柄、素足に寝巻といった見苦しい真似はしていなかった。ちゃん
と身仕度をととのえていた。

元禄十五年十二月十五日の朝である。

「どけどけ」

昨日から降りだした雪はやんで、からりと晴れた上天気になってい
たが、足もとほぐちゃぐちゃに溶けていた。源一郎は群集をわけて、

特集+裏窓忠臣藏

浪士たちを眼の前にとりまわすところまで出た。

——ふむ、これは俺たちが手出しする筋合ではないわい。

一眼で、こう判断した。五人十人と一かたまりになって歩いてきたが、それなりに全部が一隊になっていて、あきらかに外部からの邪魔を許さぬ気構えが感じられた。返り血をあびている者などは、一見ぎょつとする形相だったが、ほんとの重傷者は一人もいないらしかった。

「卒爾ながら、おたずね致すが」源一郎は、おとなしそうな一人をえらんで声をかけた。

「拙者は、八丁堀同心油井源一郎と申す者。

御身らは、これより、どこへ？」

「おう、それは御役目ごころう千万」

播州赤穂浪士、小野寺十内と襟に記した武士は答えた。

「われらは、これより芝高輪泉岳寺にまいり、亡君の墓前に吉良殿の御しるしを供え、しかるべき公儀の御処置を待つ所存」

「かたじけない」

源一郎は一礼し、すぐに八丁堀の役所へ報告に行こうと思った。そして、ちょっと立止まったとき、ふと妙なものが眼についた。

——はてな？

小首をひねって、また歩きだした。

前を通りすぎる十人ばかりの団のなかに異様な者がいた。異様といっても、ふつうの町人態の男だったが、まわりの浪士たちが揃いの装束をしていたので、そのあいだにチラホラする唐棧の縞羽織が同心の注意をひいたのであった。

その男は、なんとなく浪士たちの蔭にかくれるようにし——何か箱のような物を背負っている——まわりの者も彼をかばうようにしていた。

源一郎は、じいっとその男を注視しながら一隊と並んで進んだ。もつとよく見ようとして近づいた。

「……………」

手槍をもった一人の浪士が、彼をささげるようにして横向きになって睨みつけた。武林唯七——という文字が眼に残ったが、その眼光のするどさに圧されて、顔をそらし、足にぶらせた。

本石町の角へ来たとき、源一郎は、びくんとした。一同が歩をゆるめ、れいの町人風の男と別れる気配である。彼は、しきりに頭をべこべこ下げて、どうやら向う側へ曲って行ってしまいうのである。

あわてて、源一郎は、一団のうしろを横切って反対側へ出た。

「では、良助、さらばじゃ」

「は、はい」

一人だけ列から離れて町人と名残をおしむ浪士があった。

「行け」

「はい」

べこんと頭を下げると、町人は、荷物を背負ったまま、とっとと神田方面に向って足早に行く。その後姿を、じつと見送っていた浪士は、ふと我にかえたように一行に追いついた。

——神崎与五郎。

いまの浪士の襟文字を呟きながら源一郎は町人のあとを追った。

——いた。

あやうく見失うところだった。はるか前方を、れいの男がすたすたと歩いている。同心は小走りした。背中の箱はかなり重いものにちがいない。やや前かがみになって、脇眼もふらずに歩いて行く。

——なにかある。

源一郎の頭に職業柄のカンがひらめいていた。男は、今川橋を渡り、連雀町の一角に入

った。ある横町を曲ると——源一郎は走った、同じ横町を曲った、が男の姿はなかった。

——ばかな。

彼は自分を苦笑した。足もとの雪に、はつきりと男の足跡がついているではないか。

足跡は、ついその小さなお寺の門をくぐっていた。最光院と読めた。同心は、警戒の眼を光らせながら足跡をたどり、寺の裏手へまわった。

朝日に照らされた雪の朝の墓場だった。と、ふいに右手の向うから誰かのすすり泣きが聞えた。

笠に美しく雪をいただいた石塔の前に、れいの男が大地にぬかずき、肩を波うたせて嗚咽していた——生首を供えて。

——女の首！

どきッとした。鬘がくずれ、髪もおどろの、見るも無残な女の生首であった。

同心は、そっと男の背後に近寄り、ぴたりと肩に十手をあてた。

「神妙にいたせ」

三代の恩

「おまき、喜べ、もう遊び人ではないぞ」

「またそんなことを言って懽喜びをさせ、あ

たしから小遣いでも絞ろうというんだらう」

「ちがう、はつきり決まったのだ」

「ふん、その手には乗らないよ」

「拙者は昨日から本所松坂町の吉良さまのお邸にいる」



「えッ、それやほんとかい？」

「ほんとでなくてどうする。このとおり、前金で御手当を」

佐久間兵馬は、ふところから財布をとりだしてボンとたたいた。三十がらみの蒼い顔の浪人である。

「じゃ、お前さんは、吉良さまに仕官？」

「ばか言うねえ。ただの用心棒だ」

「用心棒？」

「拙者のような浪人者が十何人と雇い入れられたのだ」

「なんでまた、そのような？」

「ははは、色と欲にかけては、えらくカンがいい女だが、そのほかのこととなるとさっぱりだ。何のために拙者らが雇われたか？」彼は声をひくめた。「赤穂のやつらに備えるためだ。いよいよ、俺たちも運が向いて来たぞ。いいか、おまき」

何事かほそぼそと女の耳にささやいた。

「それじゃ、お前さん、うちの旦那が——」

「しッ」

口をふさいだ男の手を女がきッと噛んだ。

「あいてエ、こいつ」

「ふふふ」

女は含み笑いをしながら男の胸にくずれた。

た。

大石以下四十六人の者が吉良邸へ討入りをするより何カ月も前のことであった。そこは下谷の池の端にある粹な待合とも宿屋ともつかね離れ座敷。いわゆる出合茶屋と呼ばれる人目を忍ぶ男女の逢引き場所だった。一面に蓮の花が浮いている不忍池にのぞんで点々と同じような家が並んでいた。

女は眉のあとも青い、男とはほぼ同じ年くらいな年増。町家の内儀らしいが、ばかに垢抜けがして、はつきり前身を物語っていた。そのはずである。いまは池の端とは目と鼻の先の黒門町の中西屋の内儀だが、すこし以前までは両国の水茶屋のおまき姐さんと呼ばれていた女だった。さらに、その前は、大胆にもまッ昼間から密会している相手の間夫、佐久間兵馬と一緒に暮していた。

「だからよオ、ここで一つ手柄を立てりゃ、それこそ本式に仕官すること間違いなし。上杉家の家臣にとりたててやるとのことだ。そして、どうせ、あんな病人の旦那くんさ早いとこくたばるだろ、中西屋の身代ともお前と晴れて一緒になれる」

ぎゅッと女を抱きしめた。

「どんな手柄を立てるのかえ？」

「それが、どうしてよいかわからんのだ。だが、ひよっと思いついたのは、お前の旦那、中西屋長兵衛だ。中西屋は、三代も前から浅野家の御用をつとめている」

「よく知っているねエ」

「ちゃんとわかっているんだ。吉良さまのほうでは何から何まで調べてあるんだ。そこで、もし赤穂の浪人どもが何かやるとしたら中西屋も一役買うにちがいない。どうだ？」

「そうかねエ」

「と睨んだ俺の眼に狂いがなけりゃ、出世の鯉の滝のぼりという次第さ」

佐久間は旗本の次男坊で、どうにも浮び上れない身分だった。おきまりのように二十すぎると放蕩三昧に身をもち崩し、家にも帰れず、市井のゴロン棒になり下っていた。言葉なども侍だか博徒だかわからない。一時、水茶屋にいたおまきと暮して食わせてもらっていたが、中西屋長兵衛がおまきに参って内儀にという段になったとき、莫大な手切金をせしめてあっさり身をひいた。しかし、女とは密約があった。女も長兵衛が好きで一緒になったわけではなく、目的は金であった。だから、月に何度か、こっそりあいびきしては男に金を貢いでいたのであった。

特集 裏窓忠臣藏

その兵馬が、とにかく吉良家に雇われたのだ。しかも、ときどきするような話をして、おまきを驚かせたり嬉しがらせたりした。

「なんでも、家老の大石ってやつは、京の祇園で遊びまわっているそうさ。とても仇討なんかすまいということだが、裏でどんなことを企んでいるかも知れないという話だ。お前の旦那はどうだ？」

「ずっと寝たきり」

「怪しいやつは出入りしないか？」

「べつに」

「店は誰が宰配してるんだ？」

「それや番頭の良助さ」

「おやッ、良助と言ったお前の顔が嬉しそうだぜ」

「あたり前さ、惚れてるんだもの。いちど浮気してみたいと口説いてみたがフラれちゃった。そうなるもムキになるのがあたしのクセだ。でも本心はお前さんにあるさ。浮気と本心は別。怒った？」

「エ」

「わかってるよ」

「あッ、そうさ、このごろ良助のところへよく来る侍、旦那にも会うことがある。あいつ赤穂の浪人じゃないかしら？」

「なんて言うやつだ、そいつは？」

「神崎さまとかいうお侍」

色と慾

三ヶ月ばかりたったある日、ふいに多勢の捕手が中西屋に押しよせた。

「長兵衛はおるか？」

与力大川仙蔵が番頭良助に呼ばわった。

「は、はい、奥で臥っております」

「それッ」

下知とともに、どやどやと踏みこんだ。そして、半年前から病臥していた主の長兵衛と内儀おまき、それに番頭の良助を引っ立てて行った。そのあと、家中を天井から床の下まで探し、倉の中にあつた夥しい器具や衣類を押収して引上げた。

夕刻には独り娘のお里がしょつ引かれた。

「この槍は？」

「伊達さまにお納めする品で」

「この膳部は？」

「は、お旗本酒井六四郎さまのお誂えで」

「この装束は？」

「それは」

「言え、早く」

胸を患って瘦せきつて蒼い長兵衛は、ときどき咳をしながらも割合に毅然として答えた。

「この黒装束は何様に納める品なのだ？」

大川与力の下調べは烈しかった。

「しばらく休ませて下さりませ。苦しくて」

「ふむ、よからう。だが、のう中西屋、偽りを申しても無益だぞ。お上では、ちゃんとわかっておるのだし、その方の申立ても、それぞれ注文先や仕入先を調べれば、まことかどうか忽ち明白になることだ。ありていに申しのべれば、拙者よりも御奉行によしなに言上し、本裁きに慈悲があらうというもの」

「おそれながら——」

「なんだ？」

「私は、いかなる罪で引かれたのでございましょうか？」

「たわけたことを申すな。そちの胸に聞けば一番よくわかるではないか」

「それが、一向に解せませぬので——」

「さすがは中西屋、病を種によつとボけたのう。それなら何のために数ヶ月前から多くの刀や槍を集めたり、怪しげな黒装束などを調

達したのだ？　もしそれが大名旗本の注文なら、何で早く納めないのか？　この十七本の槍など三ヶ月も前から倉に入れたままではないか」

「それは――」

「ひかえろッ！　お上を盲だと思ふのかッ」

長兵衛は、もういけないと覚悟をきめた。

それにしても、何故、どこから洩れたのだろう？　知っているのは番頭の良助が一人きりなのだが。女房も娘さえ知らないはずだ。

「そのほうは唯の諸大名御用の商人じゃ。これらの品々の注文先が明かになりさえすれば何の咎もあらうはずはない。しかし、それが分明いたさぬ晩は、夜盗押込みに類する道具を集め隠した罪はのがれぬぞ」

「おそれいりました。一々申し開きをいたしますによって、罪咎もない家内や娘や番頭はお許しのほどを」

「そのほうが白状いたせば当り前のことだ。さっそく申してみい」

「しかと御約束していただけますか？」

「くだい」

長兵衛は、しばらく思案していたが、やがて、きつと蒼い顔をあげた。

「明日までお待ちくださりませ」

その夜、長兵衛は、牢内で舌を噛みきったが、死にきれず、大声をあげて壁に頭を打ちつけ、はげしく咯血をつづけて、とうとう暁方に命を引きとった。

妻女おまきと娘のお里は、かんたんに調べられて帰宅を許されたが、番頭の良助は一月も牢にとどめられた。彼は、すらすらと武器装束の仕入先は答えたが――事実調べてみるとその通りであった――肝心の納入先については主人だけが知っていたと言いはり、どうも本当らしかった。

「神崎という浪人を存じておるだろうな？」

「存じております」

「何者だ？」

「旦那さまに無心に来



る浪人でございます」

「赤穂の浪人ではないか？」

「存じません。おとなしい方で、私を通じて何がしかを渡していました。ほんの御鳥目でございます」

「長兵衛との関係は？」

「一向に」

大川は腕を組んだ。この人は廉直一方の武士だった。法には忠実で融通がきかなかったかわりに、罪人にならない者には公正であった。良助は釈放された。

「けッ、すっかりドジを踏んだじゃないか」

佐久間は、胸糞が悪そうに情婦をにらんだ。

「だって、あたしや、お前さんの言いつけどおりにしたまでだよ。でも手柄じゃないか、あんな品物があることを嗅ぎつけたり、旦那を往生させたりしたんだから」

「良助は知っているにちがいはあるまいが？」

「どうかねエ？」

「このまま引っこんじゃ何にもならねエ。こうするんだ、おまき」

第一の天野屋

「おそいのねエ、良助、かれこれ二た時も待

ちましたよ」

柳橋の小料屋の二階で、いきなり、おまきは良助の顔を見るとスネて見せた。主人という感じは全然みられなかった。

「どうしたのさ、そんな野暮な顔をして。さ、一杯おあがり」

「おかみさま、わざわざ、ここへ呼んで、いったい、どんな御用でござりますか？」

「ほほほ、わかつていいるじゃないか。今夜はギリギリの返事を聞かせて欲しいんだよ」

「あ、あのことなら、あなたさまこそおわかりのはず、これで失礼させていただきます」

「おまち良助、あれをごらん」

声に応じて、さッと襖が開いた。そして、

良助は、次の部屋を見てあッと思をのんだ。

お嬢さんのお里さんが、腰巻一つ、猿ぐつわをはめられて転がされ、そのそばに人相の悪い浪人者が二人立っていた。

「どうだ良助、お前の惚れてる娘、お前の見ている前で一人前の女にしてやろうか？」

ぱッと飛び出した良助は、どんと蹴とばされて尻餅をついた。

「ははは、それとも、あの品の注文主を言うか、それとも神崎という浪人者の正体をあかすか？」

「わ、私は、何も存じません」

「本来なら、もっと手荒なことをしてすぐに泥をはかせるのだが、お内儀の頼みもあって寛大にしてやっているのだ。言え」

「えい、図太い奴だ。これでもか？」

ぐッと娘を引き起して、あッという間に裸にしてしまった。良助は眼をそむけた。

「良助」おまきがやさしく手をかけた。

「お前の損になることじゃないではないか。あの神崎という浪人のいるところは？」

「存じません」

「うぬ、こやつ」兵馬は唸った。

「それ、遠慮は無用、早く」

仲間の侍をうながした。

「ま、まって下さりませ」

「なら、神崎は？」

「ここにおる」

太い声が出て、階段を二人の武士が上ってきた。

「あ、神崎さま」

さッと兵馬たちは刀を抜いたが、一も二もなく神崎の連れの男に追いつめられ、一人は窓から屋根、一人は階段を落ちるように逃げてしまった。

おまきの姿も消えていた。

「良助」神崎はお里のいましめを解いて、呼んだ。「そのほうたちは暫く姿をかくせ。お気の毒だが中西屋も終りになった」

「覚悟いたしております」

「そのことで、今夜こっそりたずねたのだが、さいわい、ここをたずねあててよかった、のう堀部氏」

「神崎は顔を知られているからまずい。拙者と共に来るがよい」

堀部安兵衛は、二人を急がせた。

「やっぱり、あの内儀の密訴のためだったわい。長兵衛がつかまったのは」

「仕方がない」

良助は孤児だった。十二のときから中西屋に拾われて、赤穂浪士のためというより主人の恩のために動いていた。

一方、大石は、江戸の失敗を聞いてもおどろかなかった。彼は、討入用の武器や装束を中西屋に準備させたのだが、万一の場合、第二の準備をしていた。その第二の準備を引受けていたのが天野屋利兵衛である。もし、中西屋の件が露見しなかったなら、赤穂義士の討入姿は、すこし別のものになっていたろう。

長兵衛は、事があらわれるのを怖れ、牢内

で自殺した。しかし、番頭と娘の出奔によって、さしもの老舗中西屋も一朝にして潰れ、いや内儀のおまきが潰してしまい、おまきは、本所松坂町の吉良邸の近くに一軒かまえて、情夫の佐久間を引き入れては痴戯にふけていた。向う五年や七年、ぜいたく三昧をして暮して行くだけの中西屋の財産があった。

「ま、ま、うまく行ったほうだ」

「あの良助を逃がしたのが口惜しくて口惜しくて」

「執念ぶかい女だなア」

兵馬は悦に入っていたが、おまきは残念でたまらなかった。

町人の忠義

「あの太鼓は？」

「おおかた寒参りかなんぞだよ。ええ、じれったい、寒いじゃないか。もっと、こっちへ」

「まてまて」

佐久間兵馬は、がばと起き上って雨戸をあけた。さつと雪が吹きこんでくる。

「や、や、これや一大事」

すぐ向うに見える吉良邸の屋根の上に一つ

二つ提灯の灯が見える。ただならぬ気配だ。

——赤穂浪士の討入り。

あわてて着物を着なおし、しきりにすがる女をふり切って表へ駆けだした。

「ちえッ、男って何てばかなんだらう」

舌打ちして部屋に戻ってきたとき、すうつと黒い影が廊下の隅に立上った。

「だ、だれ、そこにいるのは？」

「私です」

「あッ、お前は？」

「……………」

良助は、それきりだまったまま、じりじりと部屋の中に入ってきた。手に光るものを握っている。

「お前、まさか」

「思い知れッ！」

さつと突きだしたが、あやうく外れた。

「このとおり、良助、このとおりだよ。かんにんしておくれ。みんな、お前と一緒にいたくてしたことなんだよ。ゆるして——」

短刀を両手で抱くようにおさえた。

「うるせえやい」

ぱつと払った。指が二本、ぼろりと落ちて、ぎやアという悲鳴。

「旦那さまの仇だア！」

突きに突きまくった。そして、やっこのこととで首を切りはなし、血糊を洗って、茶器が入れてあった箱入に入れた。

良助が、吉良邸に駆けつけたときには、もう浪士たちは出立の勢ぞろいをしていた。

「おお、良助、どうしてここへ？」

神崎が、びっくりして近寄ってきた。

「てつきり今夜だと思って、かねて狙っていた仇を私も討ちました」

箱をたたいた。

「誰だ、それは？ あの浪人なら、すぐその門内で斬られているが」

「おかみさんです」

「ふーむ」

神崎は何と言ってよいかわからなかった。

「あっぱれなやつだ、町人にしては。主の仇を討ったのだ。良助、えらいぞ」

「は、はい」

堀部にはめられて良助は泣いた。しかし、

神崎は、ほそりと一言いった。

「良助、そちは、それまでにしないでもよかったのだ。あの娘御が可哀そうだ」

浪士たちの処分がきまり、江戸中、いや日本中が忠臣義士の話で湧いていた頃、良助は、与力大川仙蔵の下調べを受けていた。

「たわけ者め、それで主人に忠義を全うしたと思っておるのか？ 下郎は下郎、町人が武士の真似をするとは何事だ」

「とは申せ」

同心油井源一郎は口を入れた。

「あの者は忠義一途の正直者、赤穂浪士の忠臣ぶりが讃えられております折柄、そのよう

な——」

「貴殿は控えておられい。たといどのような事由があっても武士と町人を同断することは

できん。良助、そのほうは、かりそめにも旧

主の妻女を忠義と思って殺めた、正に主殺しの大罪を犯した者じゃ。たとい、どのような

妻女であったにせよ、己が妻の首を供えられ

て何で地下の仏が喜ぼう。武士の真似などい

たさず旧主の娘と仲よく暮してこそ主に忠と

いうものじゃ。この大不忠者めが！」

源一郎は、さんざ奔走して良助の助命を請

うたが、すべて空しく、二ヶ月後に千住で獄

門にかけられた。

(了)

集 募 稿 原

★三月号は、愛読者の皆様の御要望に依えて、裏窓毒婦伝を

特集する予定で居りますが、本誌に適する原稿をお寄せく

ださいますよう、お待ち申し上げます。

★枚数は四百字詰原稿用紙三十枚〜四十枚まで。

★締切りは十二月二十日まで。

★原稿末尾には、必ず御住所、御芳名をハッキリとお書き添

えくください。

原稿送り先

東京都中野区江古田一の二三〇二 久保書店内

裏窓編集部

元禄^{げんろく}甫^ほ妄^も曆^{ごよみ}

眞野麗

木原三樹・画



(一) うきさん

「おいッ、毛利！ こらッ」
揺りおこされて、毛利小平太は、ふーッと
目を覚めた。

傍らの寢床から、岡野金右衛門が、腕を伸
ばして、小平太の肩を掴んでいる。

「しきりにうなされていたゾ。……武林の駈

と両方でせめられたのでは、うるさくて眠れぬワ」

云って、金右衛門は左へ腮をしゃくった。そこには、武林唯七がごうごうと鼾声をあげている。

「すみませぬ」

夢遊裡のこととはいえ、二十石三人扶持という小身者のかなしさ、一応こう詫びの言葉を云って、小平太は、ふたたび目を閉じた。

——うーん。

小平太は、腹の底で深い溜息をついた。

——夢の中で、おれは瀬川竹之丞を抱きしめた。その歓喜が現の声となったらしい。

そうわかると、小平太は、思わず顔の火照るのを覚えた。

——不思議だ。

腹の中で小平太は呟いた。

いままで、このような感情——男が男にたいする愛の感情を、ほとんどいっていいほど感じたことのない自分が、こんど、そのおもいに、これほど強く心を動かされていることに、不思議でならないのだ。

「瀬川竹之丞……」

小平太は、おのが心を揺さぶり、騒がしたものの名を、声にならぬ声で、そつと呼んでみる。

七日前の京での情景が、彷彿として、かれの脳裡に浮んで来た。……

その二日前の八月十五日、小平太は、本所松坂町の吉良邸へ上野介の嬖妾となつて住込んでいた妹の絹から、大事な情報がはいったので、それを大石内蔵助へ注進すべく、京へ早駕籠を飛ばした。

当時、内蔵助は山科に居を構えていたのだが、ほとんど家には寄りつかず、祇園島原、墨染撞木町と、毎夜のごとく遊びあるいていることを、小平太は聞き知っていたので、真ッ直ぐに京へと来たわけだ。

果して、内蔵助は、その夜、祇園の妓楼桔梗屋の座敷で酔っていた。

傍らには、内蔵助氣にいりの扇太夫という遊女が、頭のものや襷袢を銀燭に燦然と耀かせながら、侍っていた。

その二人の周りを、おおせいの芸妓幫間が

わいわいととりまいていた。

飲みちらされ、喰いちらされた台の物。

「おう、毛利氏か……」

内蔵助は、仲居にみちびかれて座敷にはいつて来た小平太を、もうろうたる酔眼で見上げた。

「早駕籠で来られたそうじゃが、さぞ疲れたでござろう。まず一杯、喉をうるおしなされ」

自ら盃をとって、小平太にさしだした。

小平太は、自分のような身分違いの小身者を、このようにいんぎん丁重にとりもつ内蔵助に、抵抗のようなものを感じながら、

「ご城代、いつもながら……」
と型通りの挨拶をのべようとしたとき、

「もし、お客はん」と扇太夫が口を挟んだ。「うきさんは、今宵瀬川竹之丞さんが来られないので、きつうご機嫌が悪いので……。そんな堅苦しい挨拶はぬきにして、

御城代の心を蕩ろかす魔性の者！と思いつめた武辺者の眼にもなまめく若衆姿だった。

藏臣忠窓裏集特

早う盃をおうけなさらぬと、とぼっちりがこ
っちへ来ますよ」

「何んの、つまらぬことを……」

と内蔵助は、やり場のない盃をぶらぶらさ
せながら、

「このように執心している太夫を、なんでわ
しが咎めることがあるものか」

「それは竹之丞さんへおっしゃるセリフでは
ありませんかえ」

扇太夫は織手をのばして、内蔵助の腿のあ
たりを抓った。

「痛たたた……」

大仰に顔を顰める内蔵助。

——いい気なものじゃ。

と思ひながら、小平太は内蔵助の顔を窺っ
た。

——このひとはシンから遊び呆けているの
だ。楽しんでるのだ。

小平太はハッキリとそう読んだ。かれは、
入費の心配なしに、日夜大尽遊びをつづけて
いられる内蔵助に、羨望をかんじた。嫉妬を
かんじた。反抗をかんじた。

そのあと、小平太は、人払いをしてもらっ
た後、妹からはいった吉良邸の情報を内蔵助
に伝えると、すぐその場を去った。

戸外に出て、定め宿へと歩いていく途
中、小平太は、通りすがりの人の口から、ま
た、内蔵助と瀬川竹之丞との噂を耳にした。

竹之丞は京でも評判の歌舞伎の若女形で、
それに内蔵助がひどく熱をあげているとい
う、扇太夫の言のとおり噂だった。

「大石ではなうて軽石が、竹之丞にはもうグ
ニャグニャなのじゃ」

「水母侍の名を恥かしめずか」

そんな風に、その通行人は話しあいながら
過ぎていった。

先刻は、内蔵助の放蕩に反感を覚えた小平
太だったが、他人の口から、自分が恩誼をう
けた人の罵言をきくと、いい気もちはしな
かった。

小平太は、みずからの顔に泥をぶつけられ
たような気がした。

——斬ってしまったおう、その瀬川竹之丞とか
いう役者を。

突嗟に、かれはそう心をきめた。

——その男さえ亡きものにしてしまえば、
大石殿の行跡も、すこしはあらたまるかも知
れぬ。

——亡君の復讐をとげるために、皆、骨身
を削り、辛酸を嘗めているのじゃ。大石殿だ

けが、あんな風でいいわけがない。おれの妹
を見る。まだ十八の若さで、六十老爺の、し
かも怨敵上野介のメカケにまでなつて、皆の
助けになるために、苦勞しているのじゃ。皺
だらけの手で、柔肌を弄られながら……軟か
い双乳を……

「ちくしょうッ」

小平太はだんだんと興奮し、おもわず怒号
の声をあげた。

(二) あいそめの

かくて、小平太は、翌る日から、瀬川竹之
丞のようすをさぐりはじめた。中一日おいた
日の夜、小平太は、大石が、木屋町の旗亭に
竹之丞を聘んだことをたしかめた。

小平太は、四条河原に竹之丞の帰りを待ち
伏せた。

河原には、茶屋が軒を並べていた。夜芝
居、辻講釈なども掛っていた。その間を涼を
もとめる人々が、ゾロゾロと群れ歩いてい
る。

小平太は、待つ間の暇つぶしに、一軒の茶
店で、宇治丸の蒲焼を肴に、二三本の銚子を
傾けた。

夜も更けるにしたがい、納涼客もちりちり

にいくへか去り、茶店の灯も落ちた。

二タ刻程も待ったところだろうか、木屋町の方から、一挺の駕籠が飛ぶように駆って来た。

——来たナ。あれらしいゾ。
小平太は、刀の鯉口切って構えた。

と、小平太がちかよるより速く、茶店のかげから、侍らしい二つの人影が、抜刀のままバラバラととびだして、その駕籠の前に立ち塞がった。

「待て！」

侍の一人がどなった。

駕籠舁は、ドスンと駕籠をおろすと、早々と逃げ去った。

「出ろ！」

他の一人が、刀の切尖を駕籠の垂れに突きさしながら云った。

垂れがしずかに捲くりあげられて、夜目にも著き白面の美童が、スラリと立ち現れた。
「瀬川竹之丞でござりますが、何んぞご用でござりましょうか」

凜然とした語気であった。

特集★裏窓忠臣藏

「待ちうけていた」

「今宵、大石から絞りあげた金子、残らずおいてゆけ」

二人の侍は、芝居の割台詞でも云いあうように、こもこもに云った。

ものの一間とも離れていないところから、憑かれたものののように、じっと竹之丞の顔を凝視している小平太には、このとき、竹之丞の眼に微かに笑いの色が浮んだように思えた。

「それはお考え違いではございせんか、大石様と私とは、念約の仲。一文半銭の金子たりともあの御方から頂いてはおひらせぬ」

「云いのがれを申すナ。論より証拠、ソレ……」

侍二人は、目顔で合図しあうと、さっと竹之丞の懷に手をいれようとしたが……

このときすでに、その背後に走りよった小平太、抜打に一人の侍の肩先に斬りつけていた。

はッとしたように、他の一人が振返った。
小平太の返す刃が、飛鳥のように飛んで、その胴を薙った。

絶叫をあげて、どッと倒れた二人。が、その軀に血糊は見えなかった。峯打をくれたの

である。

「お礼の申しようがござりませぬ」

竹之丞の声を現ともなく小平太は聞いた。

かれは、魚のように光る刀身をブラリとぶらさげたまま、目ばたきもせず竹之丞を見据えていた。激しい、そして快い衝撃に戦く足を、懸命に踏みしめていた。

「……どうぞ、お名前をお教えくださいませ」

二度目の竹之丞の言葉に、小平太は、はっとわれにかえた。

「毛利。……小平太……」

云うや、逃げるようにその場を駆け去った。
それから、三日経った八月二十日、小平太は、内蔵助に呼びだされた。今日、赤穂から岡野金右衛門と武林唯七が到着するから、二人に同行して江戸へ下れというのであった。

四条河原での事は、竹之丞の口から聞いていたのだろうが、内蔵助は、その事について小平太に何も云わなかった。

……いくたびか、溜息を吐きながら、小平太は回想をおわった。

かれは、あらためて、あのときはじめて見た竹之丞のおもかげを、胸内に刻みこませてでもおくように、ふたたび思い浮べる。

色こそ透きとおるような白晳の面だったが、凜々しい眉目、緊った口もと、——女形というから、さぞグニャグニャしたなめっこい感じの若者だろうと考えていた小平太の想像を裏切って、じつに品格高く、凜然とした美少年。荒い縞の白地のきものに無紋の浅黄袴が、よけいにかれをスツキリと見せていた。

——妻のお民とはじめて逢ったときだつて、……イヤ、いままでどんな美しい女を見たときだつて、あの竹之丞を見たときのような、激しい気もちは起らなかったのに……何ンとしても、不思議だ。

女という女が、竹之丞の前には、ひどく影が薄くなつて来るように、小平太には思えて来た。

早立の客でもあるのか、階下の勝手元のあたりで、ゴトゴトと人の動く音が聞えはじめた。

——いよいよ今日は江戸だ。江戸へ着けば忽々に公私繁多になる。すこしでも眠っておこう。

小平太はむりに布団を引被った。

(三) おおかがみ

その夕刻、江戸に着いた小平太は、直ぐに、本所林町三丁目の堀部安兵衛の借宅に入った。

安兵衛は、江戸派の幹部として、連日他の幹部同志を訪ねては、謀議の打合せなどに忙しく、不在がちだった。かれは、人目を晦ましたために、越後新発田の浪人長江長左衛門と称し、その浪宅には、つねに浪人者——じつは同志——が出入りしていた。

間もなく、一味徒党全部を江戸に下した内蔵助が、最後に東下りして来た。

——念約の契を交わしたという瀬川竹之丞とも、ついに袂別されて来たのだナ。

と、小平太は思った。そして大石殿去った後、竹之丞はどうしたろう、大石殿と入れ違いに、すぐにも京に上つて竹之丞に逢いたいなどとも思った。

一方また、小平太の江戸での活動には、目ざましいものがあつた。狂氣したような目ざましさがあつた。

「のう、毛利」

と、ある日、安兵衛が、小平太に云った。

「おぬし、懸命に働いてくれるのは有難いが、人間タマには油を注すことも大切じゃゾ。時には色町へでも気晴らしに出掛けたら

どうじゃ。おたがい今日明日の生命じゃ、生身のうちに、せいせい保養しておいたがよいゾ」

「ですが、堀部殿、拙者ちかごろ女に興味がなくなりました」

「何、女に興味がない？　——といって、その若さで、その方の気がなくなったわけではあるまい。……では、陰間買いででもしてみたらどうだ？　なかなかよいゾ、稚子というやつは」

こう安兵衛に云われて、小平太は、

——そうだ、江戸には陰間というのがあつたのだ。

と気がついた。

——竹之丞々々と、ただそれだけを思い詰めていて、他にも美童のいることに考え及ばなかった。

と自らの融通なさを嗤いもした。

「それは面白そうですナ」

と小平太は答えた。

「だが、その陰間茶屋の場所を、拙者一向不案内ですし、遊びのさとりというようなことも心得ておりませんで」

「そうか、じゃあ……」

と安兵衛は手を伸ばして、自分の手文庫を

ひきよせると、蓋をはねて、内から、同じような形の数冊の冊子と二枚の紙片をとりだした。

「これを読んでみるがよい。紙べらの方は江戸の陰間の細見と評判記だし、冊子の方は衆道の物語を集めたものだ。何かの話の種にもなるだろう」

こう云って、小平太の前に投げだした。

その夜、小平太は、安兵衛の貸してくれたものを開いて見た。

細見には、江戸市中の陰間茶屋の場所、抱え屋、揚屋の店名や揚代金等が、手にとるように紹介されてあった。

また、評判記には、陰間の名、年令、その容姿、得意の芸事などが面白おかしく書かれてあった。

冊子は、「男色大鑑」と読まれた。第一巻開巻第一丁に、作者西鶴の自序で、

「日本紀愚眼にのぞけば、天地はじめてなれる時一つの物なれり、形草芽の如し、是則神となる、国常立尊とまをす、それより三代は陽の道ひとりなして衆道の根元を顕わせり、天神四代よりして陰陽みだりに交はりて男女の神いでき給ひ、なんぞ下髪のみかし、当流の投島田、梅花の油くさき浮世風に撓へる柳

の腰、紅の湯具あたらし眼を汚しぬ、是等は

美少人のなき国の事欠、隠居の親仁の

翫びのたくひなるべし、血氣壯の時

詞を交はすべきものにもあらず、

総て衆道の有難き門に入る事

おそし」

云々とあった。

小平太は、うーん

と唸り、丁と小膝

を叩いた。

——わが

意を得た

り。



わしの云いたいことを、この作者すっかり云
つてくれている。

(四) い る こ

細見や評判記を充分に読み、研究した後、
翌る夜、小平太は湯島天神境内へ出かけた。
境内には、陰間茶屋——抱え屋、揚屋が軒
を連ねていた。その一つの津国屋という揚屋
に、小平太は登楼した。

「花村藤之助を聘んでくれ」

小平太はその道の通らしい顔で、取廻しの
男に云つた。誂えた酒肴が運ばれた。チビリ
チビリ盃を傾けていると、間もなく、花村藤
之助が、金剛（陰間に附添って万事を世話す
る供男）につきそわれて、座敷にはいつて来
た。

紫の額帽子を載き、紫の振袖を着流した藤
之助、小平太の前に三つ指ついて、頭をさげ
た。

「お客はん、これからごひいきにして、可愛
がっておくれやす」

顔をあげると同時に、藤之助は、もう跳び
つくように、小平太の傍に寄り添って、コン
なことを甘えるような調子で云っていた。

評判記に十五歳と記されているだけに、ま

だ稚な気の多分に残った、そして茶目らしい
顔である。

「そなた、京の者か？」

小平太は、あいての顔を覗きこむようにし
ながら、訊ねた。

「いいえ、もっと南の方。だけど、京言葉遣
うように教えられているのどす。……さあ、
お酌しましょう」

藤之助は銚子をとりあげた。小平太は盃を
うけながら、

「もっと南とはどこだの？」

「播州赤穂どす」

「何、赤穂？……して赤穂はどこにいた？」
畳みかけて聞く小平太を、藤之助は敏そう
な眼でチラリと見返しながら、

「お客はん、赤穂のお侍さんどすナ。では、
皆お話してしましましょう。浅野様のお屋敷
で茶坊主しておりましたのどす。ところが、
御家断絶といっしょにお払い箱になって……」

「その先を云うナ、愁歎場はききたくない。
……わしも、そなたの祭しのとおり、赤穂の
浪人じゃ。同郷とは懐しいのう」

小平太は、いじらしげに、藤之助の子ども
子どもした顔をながめやった。

二タ刻の遊びの後、小平太は藤之助と別れ

て、津国屋を出た。

それから二三日後、小平太は再
会をかえした。そして数日後に三
会目と、こうして、小平太は藤之
助の許に通いつめるようになった。

小平太にとって、瀬川竹之丞に
たいする愛情は、恋といってもよ
いものだが、藤之助への愛情は大
分異っていた。一口に云って、そ
れは弟にたいするような親愛であ
った。

だから、小平太は、藤之助との
初会以来、ただの一度も、あいて
の肌をもとめることはしなかつ
た。藤之助は最初それを不審がって、ときど
きたずねることがあったが、小平太は、兄弟
のようにつきあいたいからだと笑うのみであ
った。

藤之助にたいしてのみでなく、竹之丞にた
いしてでも、小平太はあいての肉体に欲望を
かんじたことはない。心と心だけの愛の繋
りこそ、衆道の真髓だと、小平太は考えるの
だ。

ある夜——

特集+裏窓忠臣藏

小平太は、湯島の藤之助の許へ行くべく、家を出ようとしたとき、横川勘平に呼びとめられた。

「どこへ出かけるのじゃ？ 毛利」

「どこでもよいではないか。おぬしの関係したことはない」

「いいや、そうではない。今はたがいに大事の身体だ。行先ぐらいは告げていくものじゃ」

それには答えず、小平太は玄関口へ降りようとした。

「待て。おぬしに云っておきたいことがある」

勘平は小平太の肩を掴んで、むりにひきとめると、

「自分の行先を自分で云えぬなら、わしから云ってやろう。湯島の野郎茶屋じゃ。……どうじゃ？ なぜ、わしがそれを知っているか、それも話してやる。ちかごろ、おぬしが急に夜分の外出が繁くなったし、ときどき家を空けもするので、心配なので或るとき後を尾けてみたのじゃ」

「卑しいことをするナ、同志にたいして。黙って外出したとて、疼しいことをする拙者ではない」

「イヤ、そんな疑いからではない。もっと善意の懸念からじゃ。……だが、毛利、おぬしが夢中になっている花村藤之助とかいう陰間、あれにはよけいなこと喋べらぬよう気を付けたがよいゾ」

「何ッ、なぜじゃ？」

「あの藤之助をえらくひいきにしている客に、上杉家の家中の者がおるのじゃ」

「えッ、それはほんとか？」

小平太はびっくりして問い質した。

無理はない。上杉家は吉良家の姻戚であり、その後楯となつてゐる十五万石の大名なのだ。

「勿論。拙者自分で調べ上げたのじゃから間違いないつもりじゃ」

勘平はこう云った。

——いぢいぢよけいなことをする奴じゃ。と小平太は思う。だが、それらがすべて、この自分にたいするかれの好意からしたことでとよく分るだけに、そんな勘平を真ッ向から怒れないのだ。

「そうか」と小平太は頷いた。

「とにかく、出掛けてまいる」

「湯島か？」

「いや、津輕家の大石無人殿の許じゃ」

答えて、小平太は玄関に降りた。

戸外に出ると、極月真近い冷たい夜気が、夙くもかれの襟元へ無遠慮に忍びこんで来た。

両国橋の方に向つて歩きながら、小平太は、いま、横川勘平の云ったことを、もいちど口の内で反芻してみる。

——藤之助をえらくひいきにしている客に、上杉家の家中の者がおるのじゃ。……とすると、おれという男は、妹の絹といい、花村藤之助といい、愛する者を、どうしてこう妙な奴にばかり汚される境遇におかれてしまふのだらう。

つくづくとこう感慨し、忿るよりも情なくなつて来る。又、

——もしや、その上杉家の家臣という男は藤之助が浅野家の茶坊主をしていたという前身を知つていて、そんな藤之助を自由にしていることに、優越感を味わつてゐるのではあるまいか。

などと思うと、むらむらと憤りが燃え上つて来る。が、この憤りをどうすればいいのだ。

勘平からこのことをきいたときも、直ぐにも湯島へ飛んでいって、藤之助を問い質してやろうと思つたのだが、その裏から、そんな

ことしたとてどうなるものか、との考えが起り、それが湯島行を止めさせたわけであった。

あれこれと思いめぐらしているうちに、両国橋際の津軽越中守の屋敷へ来た。

屋敷内の大石無人の許に、妹の絹から、吉良邸の情報が齎されてあった。

(五) みうけ

翌日、石町三丁目の内蔵助の寓居に、同志一同が集って、小平太の妹絹からの手紙が披かれた。

それは、十二月六日に吉良邸内において催される予定だった茶会が、十四日に延期になったという知らせであった。

一同評議の末、六日に決行の筈だった討入を、十四日夜に延ばすことに決めた。

夕刻、評議が終った。人目に立つのを惧れて、一同三人五人ずつ、戸外へ散っていった。

小平太は横川勘平とつれだって、内蔵助の寓居を出た。

出ると、間もなく、勘平が、「毛利、拙者はちょっと神田まで用達しにくから……」

と云った。

「ン、行って来るがよい」

右と左に袂を分った。

本所方面に向って、五六歩も行きかけたが、小平太はすぐ元来た道を引返した。足は湯島へ向っていた。

初会以来、ずっとそこに定めている津国屋から、藤之助を聘んだ。

「木原さま、わて困ったことになりました」

藤之助は来る忽々、こう云って、困惑した顔を小平太に寄せて来た。

木原とは小平太の匿し名である。

「どうしたのだ？」

小平太は訊ねた。

「わて、近くあるお馴染のお客さんから身請されることになったンどす」

「何、身請される？ 身請して親許へでも帰してくれるというのか」

「いいえ、それなら嬉しいンどすけど、そのお客さんは、身請して家を持たしてくれるというのどす」

「妾宅をもたしてくれるというのじゃナ。ソンなにそなたに執心しているお客というのは、もしや、上杉家の御家中の人ではないかナ？」

「そうどす。仙波さまと仰言る……木原さまご存じのお人どすか」

「イヤ、ちょっと他から聞いて知っているだけじゃが……」

——やはり、そうだった。しかも、こんどは藤之助を身請までして、ひとりじめでおもちゃにしようとしている。

小平太は、さっきからムラムラと胸底に燃え上って来る嫉妬の念いに堪えながら、

「それで、その身請をされることが、どうして困るのじゃ？」

「……でも、木原さまに悪うて……」

「何ンで、わしに悪いことがあるものか。わしにそれを引きとめる力などありはしない」
燃え熾る嫉妬の炎の中から、こんな自嘲の言葉が出る。

——ほんとうは、そんなことはやめろ！と呶鳴りたい。だが、やめさせたところで、無力の自分に、それ以上この少年を倖せにしてやれることなどできはしない。まして、討入を旬日の中に控えている自分に……。

藤之助はじつと袖口を噛んでいる。茶目気な子どもだけに、そんな姿がいつそ可憐らしくなるのだ。

「で、身請になる日はいつだナ？」



「来月十四日の夜どす」

——十四日、討入の日だ。

「では、それまでに又来るとしよう」

「十日まで見世に出ておりますから、たびたび来て……」

一ツ刻遊びで、小平

太は、藤之助と別れた。

安兵衛の浪宅に帰る

と、横川勘平はすでに

戻っていたが、小平太

の顔を見るより、

「毛利、小山田氏が逃げたゾ」

と云った。

「えっ、小山田氏が……」

……」

「そうだ、われわれの留守の間に、姿を晦ましたらしい。先きに帰られた堀部殿が気が付いて、いま大石殿まで

届けにまいられた」

勘平は、小平太の顔をじっと見据えながら、忿りに堪えぬような語気で云う。

「そうか、あの方までがナ……」

小平太はそれが他人事でないような気がする。自分とて、ここ半月程、始終心が動揺しているのだ。藤之助の身請のことをきいた今は、よけいそれがはげしい。

——この横川は、そうしたおれの心の底を見透かしているのではあるまいか。

勘平の鋭い眼の色を見てみると、そんな風にも思えるのだ。

小平太は座敷の隅にごろりと横になった。

(六) わぎもこ

ふと、何の関連もなしに、妻子のことがふーッと頭に浮んで来た。

主家の凶変以来、深川の借宅に残したまま行きもせず便りもしなかったわが家。好きこのんでそうしたわけではない、あれ以来、私事——特に妻子のことでも口にしようものなら、同志の者から侮蔑の眼で見られるので、おのずとそれを抑えるようになり、忘れがちになってしまった。誰でもがそうってしまったのだ。

——こんなところにも、おれが、衆道に心を惹かれた由縁があるのかも知れない。

そう思ったことがあった。

小平太とて女嫌いなのではない。妻のお民とは恋で結ばれた仲なのである。

まだ浅野内匠頭長矩が在世のころである。

春だった。国元から江戸詰になって間もない小平太には、江戸の繁華がめずらしくてたまらない。一日、勤めの際を見て、草履取一人を供に、浅草へ出掛けた。

おりしも丁度観音の開帳の日だったので、街は揉みあうような混雑、都に馴れない田舎者の小平太は、群衆に目を廻しながら、人を右へ除け左へ除けしているうちに、いつのまにか、供の男とはぐれてしまった。

どこへいったのだらうと四辺を見廻していると、いきなりドンと小平太にぶつかった男があった。

こっちで咎めるより速く、向うからいいがかりをつけて来た。年のころ四十がらみ、木綿のどてら羽織った五分月代の男。小犬を一匹、縄で引っぱっている。

男が呶鳴りちらすたびに、酒臭い息が小平太の鼻を衝いた。

見る見る二人の周りを群衆がとりまいた。

小平太は、相手から云いまくられるのみだ。というよりも、こちらで田舎弁の口を出す隙がない程、相手がペラペラとまくしたてる。犬までがむやみと吠えだてる。この奇妙なとりあわせの二人を、群衆がケラケラと笑った。

——都の真ン中でおれは見世物にされている。

小平太ははげしい羞恥をかんじた。いたたまれない気がした。斬って捨ててこの場を逃げ去りたいと思った。が、斬って捨てるのは易いが、もし誤って犬に傷付けでもしたら、生類憐みの令で、ふつうで斬罪、軽くても遠島は免れない。そのことを思うと、刀が抜けないのだ。

羞恥と怒りに、満面朱のようになって、堪えているとき、降ってわいたように、一人の町娘風の女が、二人の間にはいつて来た。

娘は五分月代の男に向って、ポンポンと弾むような啖呵をきりはじめた。

どんな文句の啖呵だったか、小平太は、すこしも憶えていない。ただ、娘が口をひらくたびに、朱唇の間から、チラチラ覗く、真ッ白な可愛らしい歯だけが、印象に残っている。

あつというまに、形勢は逆転していた。犬を連れた男は、娘の前に、そして小平太の前にも、ペコペコと頭を下げながら、逃げるようにして、群衆の中に姿を消してしまった。「こんな人中でご挨拶も……」

と云って、娘は、小平太をおのが家に伴った。伝法院の門内にその家はあった。

歯切れのよい啖呵をきり、無頼漢を懲しめたといいても、賭博打の娘でもなく女剣士でもなかった。手習師匠の娘であった。

小平太は、まるだしの田舎弁で、娘に礼をのべた。娘は年老いた父親共々、この若い勤番侍を歓待した。

これが縁となって、小平太は娘の家に出入りするようになり、恋が結ばれて、二人は夫婦になった。この娘がお民である。

お民の弾むような啖呵は、それきり聞かれなかった。小平太は、内心それを遺憾に感じた。あの歯切れのよい、美しい啖呵で、頭からポンポンと叩かれたら、さぞ快いだらうと想像する。

又、お民には、どこかキリリとした、少年のようなところがあった。少年のような、清潔なお民がいた。小平太は、お民のそんなところに、最も強く心惹かれた。

特集★裏窓忠臣藏

お民のこうした少年らしさは、女特有のお稽古事や百人一首に繋がるものではなく、能楽や茶の湯に繋がるものであり、そして弓矢の道に繋がるものであると、小平太は感じとった。

そのような、小平太のこよなくとしみ愛したお民の少年らしさも、一年二年と年を重ねるにつれて、お民の内からだんだんと影が薄れ、二十三歳のいまでは、全く消失したといってもよかった。小平太が失望落胆したことはいうまでもなかった。そして、お民に興味を失っている自分に気が付いたとき、主家の凶変に遭遇したのである。

あれ以来、貧乏世帯の中に、お民と嬰兒を残したまま、一文半銭の仕送りもしなかった自分。不実な夫だということは充分にわかっている。虫のいい男だとも知っている。

——節季だというに、さぞ困っていることだろう。行ってやらねば……イヤ、行ってやろう。同志から蔑まれ、罵られてもよい。きつと、行ってやる。

翌る日から、小平太は、その機会を覘った。だが、討入の日も真近く、周囲の同志の眼が鋭いため、なかなかその機を得ない。

極月という月は、なぜか日のたつのが速い。日はどんどんと駈足して、ついに討入を明日にした十三日。

その日の夜、小平太は、一同から留守を頼まれたのをさいわい、家をとびだした。

盟約から逃れる気ではなかった。ああもしたい、こうもしたいという心の責を、多少でも果たした後、遅くも明日の朝までには同志の許に戻れるだろうと思った。

小平太はまず妻のお民を訪うべく、深川へ向った。が、行ってみると、門前仲前の借宅は空家になっていた。近所の家をいちいち訊いて廻って、ようやく、お民の引越先が分った。柳島妙見町である。

植吉という植木屋の一ト間を借りていると、いうことを頼りに、わりあい早く探しあてることができた。小平太は、長い月日別れていたお民に逢える楽しさに、心ら弾まながら、生垣の内へはいっていった。

家はどこもピツタリと戸を閉てあった。出入口と覚しきあたりを、二三度、戸を叩いた。が、誰も立って来る気配がない。

仕方なく、庭先へ廻った。雨戸の外れに、一条明りが射しているのが見えた。小平太はそこにちかづいた。

一尺程も開いているその雨戸の間から、家内を覗いた。すぐ、こっちに背を見せて坐っている、どてら姿の男の肩が半分見えた。

声を掛けようと思って、小平太は、雨戸の中へ首をつっこんだ。瞬間、かれははッと息をとめた。どてら姿の男に寄添うようにして、酒の酌をしているお民の姿が、眼にはいったからだ。

小平太は、しずかに首をひっこめ、そこに植った沈丁花の葉かげに軀を隠しながら、なおもじーッと内のようすをみまもった。

お民の顔には、薄く白いものが刷かれているようだ。眼の色には、あのころよりは色っぽさが増したように思われる。そのかわり、少年らしさの感じは、カケラほども残っていない。にいと艶めいた微笑を含んだその顔や体つき格好は、明かに、情を睦みあっている男に見せるそれである。

——そうか……そうだったのか……

小平太はいくたびも心で頷いた。

ふしぎと嫉妬の感はわかなかった。むしろ、安心に似たようなものが心を占めた。

男は後姿なのでよくは分らぬが、鬚の格好、頸のあたりの肉付などから、年のころは四十格好と見えた。この家の主人だろうと小平太は推量した。何を話しているのやら、ハッキリとききとれないが、律気らしい声音である。

何よりも、お民が、その男の正妻——たとえ後添であつても——となつてゐるらしいようすが、小平太の心を安らさせた。

あと、気にかかるのは、二人の間にできた嬰兒の兼松のことだが、多分次の間にでも寝ているのだらうと、小平太は思った。

——いつまでもこんな所に隠れていて、もし見咎められでもしたら、お民のためによくない。速く退散するに如くはない。

こう考えて、小平太は、そつとその場を去つた。

(七) たちきりばら

小平太の次の目論見は、花村藤之助に一ト目会つておきたいことである。

かれは駕籠を拾つて、湯島へ向つた。

去月末、津国屋で逢つたきり、小平太は、藤之助と逢つていない。その後ふたたび行く約束をしておいたのだが、その機会がなかつたのだ。

たのだ。

——十日以後は見世には出ないと云つていたが、身請になる日が十四日だから、まだあの家にいることはいらう。

こう心易だてに考えながら、小平太の心は湯島へ湯島へと急ぐ。

湯島へ来た。藤之助のいる抱え屋「ちさもと」は、前に一二度訪ねたことがある。

小平太は「ちさもと」の見世にはいった。

内はガランとして、誰の姿も見えない。

「抱えの子どもたちは、皆出払つたのかナ。

よく繁昌する家だ」

見世先に佇つて、小平太は独言つた。

ふと、かれは二階で人の気配を聞いた。

——ええ、黙つて上つてやれ。

と小平太はズカズカと上にあがった。勝手知つた座敷から座敷を通つて階段口。どこにも誰もいなかった。

——誰も彼も二階へ行つてゐるとみえる。

藤之助の身請を明日にして、何かやつてでもいるのかナ。

小平太は梯子段を上つていった。上りきつて、細い廊下。そのトツツキに面した部屋の障子を開いた。

「あッ」

おもわず、かれは驚愕の声をあげた。

座敷の真ん中に、藤之助が素裸のまま、麻縄で縛られて、坐つてゐる。

その前に、一本の笞を手に突つ立っている五十がらみの侍。

「無礼者ッ、断わりもなく、他人の座敷にはいりおつて」

小平太を睨み据えながら、皺がれ声でさけんだ。

が、小平太は、そんなことは耳にもとまらず、藤之助の傍に駆けよつていた。

「どうしたのだ、そなた」

云いながら、その縄を解こうとしたとき、その手元へ、唸りをあげて笞が飛んで来た。

さつと小平太は手を放した。びしりッ、

笞は藤之助の腰のあたりに当った。

「うぬッ、もう容赦はせぬ」

小平太は老侍に向つて、突つ立ち上つた。

「上杉殿の家臣仙波氏とお見受けした。拙者は赤穂浪人毛利小平太。これなる藤之助の身請の事、拙者から堅くお断わり致す。もし、

たつてそのような折檻するとあれば、失礼ながらその分にはしておきませぬゾ」

「何、藤之助の身請を断わると？ たわごと吐かすナ。藤之助の体は疾うにそれがしが買

つてあるのじゃ。それを自由にするのが、なぜ悪い？」

「ならぬッ」

「ええッ、わけも分らず、いらざる口だてするナ。ただの折檻か折檻でないか、藤之助の顔をよく見ておれッ、それッ」

ひしりーッと藤之助の背に、笞が墜ちた。

うーむと呻きながら、齒を噛みしばって、何かを堪えるような藤之助の顔。そのさまを快げに見やる老侍。

瞬間、激しい嫉妬が、小平太の身内で沸騰した。

「たッ」

小平太の腰の物が鞘走ったと見えるや、抜打ちに老侍に斬りつけていた。

さっと体をかわした老侍。その右肩口から血潮が吹き上った。

利腕を傷つけられて、刀の束に手をかけたが抜きもやらず、老侍は、そのまま転がるように階段口に逃げていく。

追いつがって、小平太、

「けもの奴ッ」

喚くような懸声もろとも、老侍の背へ、袈裟がけの一刀を浴びせかけた。

大きな音をたてて、老侍の軀は、階段を転

がり落ちた。

血刀ひっさげたまま、小平太は、藤之助の傍にちかよった。

「藤之助、そなたの前にわしはなまじ現われぬ方がよかったナ」

呟くような細い声で云った。

「木原さま、早うお逃げください。あなたは大事なお身体です。……ほれ、もう、階下で気が付いて、あのように騒いどります。早う逃げて……」

「イヤ、逃げぬ」

と小平太は答えた。

「わしはもうどこにも望みのない身体じゃ。この座敷をかりて自害するゆえ、そなたも見てください。イヤ、そなたに見せたいのじゃ」

云うや、腹おしひろげ、取直した刀を左脇下に刺し貫き、右脇下まで一気に引廻した。

腹掻き破った刀を引抜くと、ミゾオチのあたり突き立て、臍の下まで切りさげた。

「よう見てくれ……、藤之助。……絹も、見てください、竹之丞も……」

絶え絶えに云いながら、刀を引抜き、腹の切口を拡げると、腸掴みだして、刀を腹中に差しこんだ。

「ええッ……業の深い……まだ、死ねぬ……」

まだ言葉たしかに、呻くようにそう云うと、こんどは小刀の鞘を払い、刀の切尖を口に含みながら俯伏しにどうと倒れた。切尖が後頭に突き出て、ようやくに息絶えた。

(終)

ハガキを下さい！

目録を無料で直送します

★冬の夜のつれづれをかこつひとときに「あまとりあ社」の書籍は如何でしょうか？

★あまとりあ社では、皆様にじゅうぶん楽しんでいただける、数多くの単行本を出版しております。

★出版目録を見るだけでも、結構タノシメます。ハガキに、あなたの御住所とお名前を、目録送れ”とだけお書きになって、スグお申し込みください！ 無料で目録を送ります。

★また、編集についての御希望等も、お知らせ戴ければ幸いです。

★申し込み先

東京都中野区江古田一の二三〇二

あまとりあ社

アブチツク・スリラー

狐

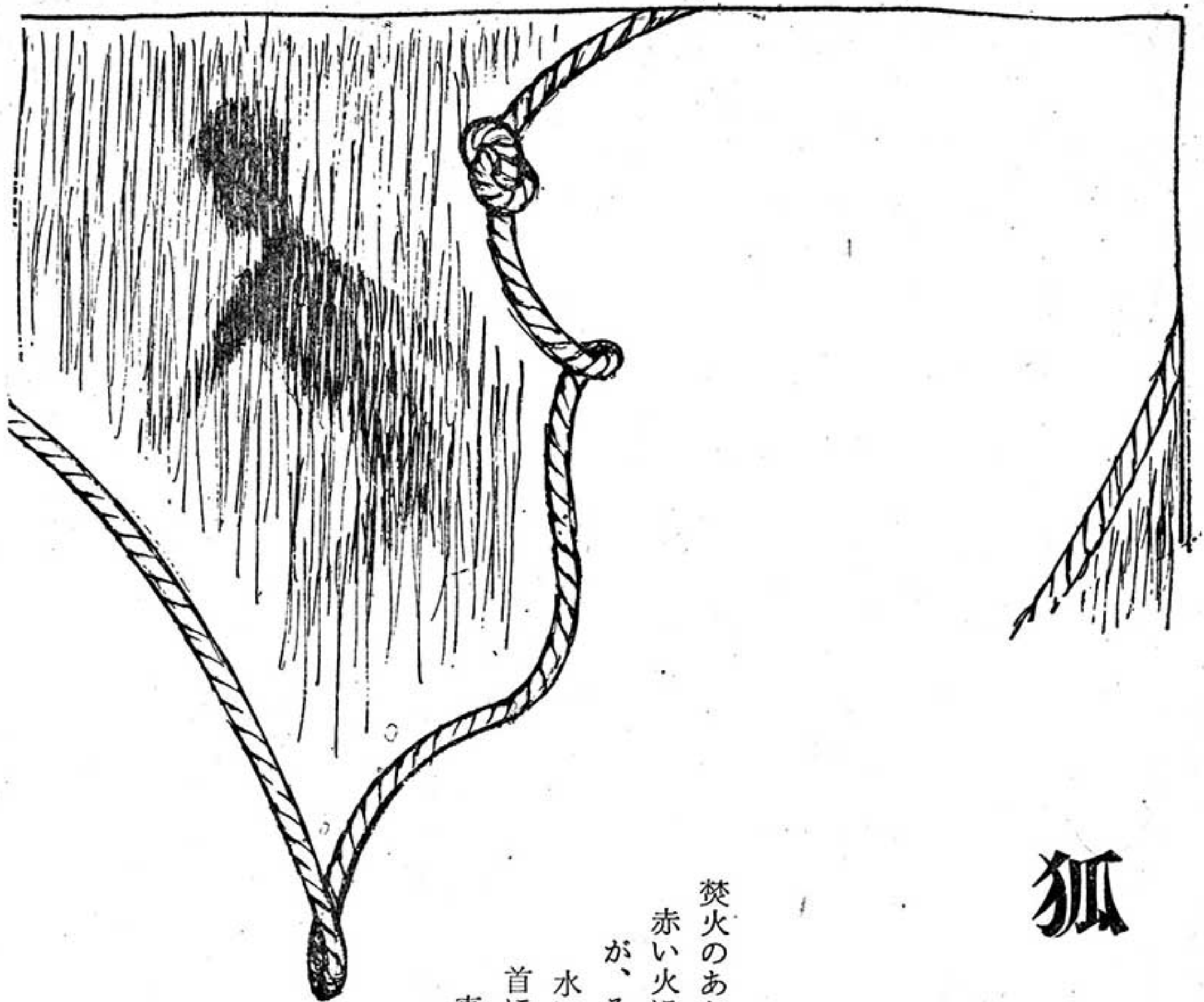
(きつねび)

火

(第二回)

松井 籟子

曾根三太郎・画



焚火のあかりがもう薄くなった。

赤い火に慣れた目が、一瞬、何もかも闇にのみこまれたように感じたが、それも僅かな間で、月光がきらきらと咲子の体をてらし出した。水に濡れた体が光っている。

首にかけて縄にたまった水が、滴りとなって胸を這う。

真珠のような光った玉が、乳房の谷間へ落ちてゆく。

咲子は死んだように動かない。

手と足と、首を縄に支えられて、手も足も一杯にひろげたま

ま大輪の芙蓉の花がしぼんでいるように、清楚でなまめかしい。いや、いたいたいというのだろう。

草野徹夫は見えてはいけないうものを見ているような気がした。

しかし、まだ、彼女を助け出すチャンスがあるかもしれないのに、見のがして帰るわけにはいか



た。

なかつ

木の下闇に身をひそめて、

ただなりゆきを見ていた。

「今夜はこの位にしておきまほう。さあ、縄をお

とき」

満枝は井口に命じた。

「咲子、気絶したふりせんかて、もうおしまいや、しっかりおしいな」

縄をとかれて、崩れるように地面へ坐ってしまった咲子を満枝は引き起した。

「しっかりせんと、しっかりするようにするで」

「あっ、お母様、かんにんして」

咲子とはぎれとぎれに哀願した

(気違いではない……)

そう草野徹夫は思った。

「フフフ。お前の好きな首飾をはめてあげるがな。厭がることあらへん。大きくて立派な首飾をお母ちゃんが作ってあげたよってに、はめておみい。腕輪もあるのやで……」

「お母さま」

「何で、そんな悲しそうな顔するのや。喜ばなあかんやないか。なあ、お前は鬼がくるのが恐いのやろ、鬼が来ても近よれんようにしておくのや。さあ、井口あれをはめておやり。ほんに気違いいうたら手のかかるこっちゃ」

「お母さま」

「お母さん、お母さんって、私の顔だけは解るのやな、気違いが……。お前は気がふれているんやないか。正気や思うたら違うで。お前は気違いや。夜になったらそこらへん歩きまわるのや、自分じゃ知らへん。そやよってお母ちゃんがその病気をなおしてやろう思うて苦心しているのや。さあ、おとなしく井口にお前の首飾をはめておもらい。それはめていたら鬼が近よれへん。部屋へ帰ったら、また、別のにしてやるよって……」

咲子の首に木のわくのような首枷がはめられた。

昔の罪人のような長い板ではないが、首のまわりを四角くとりまいて、咲子の首がさらし首にされているようになる。

「こうするとな、鬼は死人をきらうから、お前は死んでいるように見えるのや。ええやろ。さあ、立って歩いてごらん」

咲子は立ち上ると、乱れた長襦袢の前を合わせた。

長い黒髪を、四角い首枷の板の外へたらしめた咲子の姿は、生きている者の姿のようではない。死んで地獄の責苦をうけている亡者の姿に近い。

とろとろと燃えあがる狐灯のなかにあやしくゆらめく女の執念！ 簀子女史快心の連載スリラー！

思わず徹夫は一步ふみ出して、咲子を救おうとした。

木の葉がガサッと動いた。

咲子の視線が走った。

一瞬、咲子は徹夫をみとめたらしく、駆けようとした。

「何や？」

満枝にとがめられると、咲子は徹夫のいる所と反対の方へ走り出した。

「あっ、井口、つかまえて」

満枝は驚いて後を追う。

徹夫はそのすきに、見とがめられないようにかくれていた場所をかえた。

「つかまえたら縛っておしまい。油断したらあかん。あんな恰好で逃げようとするのやからな、そら、そこに縄があるやないか。もっとしつかり、しつかり縛ってしまわなあかん。そうや、そうして足へもかけて、歩かれへんかったら引きずっていけばええやないか、フッフ、そうや、ええ、恰好や……」

満枝ののしる声を後に聞きながら、徹夫はいったん引きあげるより仕方なかった。

明日大切な放送がある。

ここでことをおこして穴をあけるわけにはいかないのだ。

冷たいようだが大勢の人を相手にする商売だ。私事で乱すわけにはいかないと思った。

(そのうち、必ず救いに来ますよ)

徹夫は心で念じた。

まさか満枝が咲子を殺すようなことはしないだろう。

前号の梗概

ラジオ・プロデューサー草野徹夫は、新進作曲家青山道弥の許嫁貴美子に突然訪問を受け、道弥の失踪を告げられた。

彼女は道弥を父の別荘へ誘い、翌朝彼の母満枝を出迎えた後、父の弥一が自室で異様な惨死体となっているのを発見した。満枝が狂気の血を引く道弥

の犯行ときめて、ひそかに逃亡を進めるのを貴美子は立ち聞いたのである。

徹夫はそれとなく青山家を訪れた。

道弥の妹咲子は狂人として軟禁される身だったが、母の眼を盗んで徹夫に何

かを訴えようとする。その眼の色に救

いを求める必死なものを読んだ彼は、

その夜再び忍び込むと、満枝と書生と

が咲子を鳥居にくくって柵檻していた

しかし、どうしてああいうことをするのか。まますいじめとばかりも思えない。

とにかく、明日の放送がすんだらもう一度出直そう。

そう思いながら、後髪を引かれるような思いを立ち切って帰ってきたのだった。

二

徹夫は咲子をどうやって救い出そうかと、毎日のように考えていた。

しかし考えるだけで、放送局の仕事に追われ、青山家を訪れる時間さえなかった。

新聞さえ読む時間がないという、人はふしぎに思うだろうが、仕事がかたまる時は波が押しよせるように一度に重なって、眠る時間さえなくなってしまう。好きでなければ出来ない職業だった。

やっと今日は一日、少し体にすぎが出来そうなので、例のひとりの朝食をたのしんでいる所へ、再び橋場貴美子が訪れて来た。

「先生！」

云うなり貴美子はまたハンケチを目にあてる。

「どうしたんです？」

「ああ、また、新聞読んでほしませんのね。道弥さんが……」

「道弥さん、青山道弥がどうかしたんですか？」

「死んで……死んでしもうたんです」

「死んだ？」

「ええ」

徹夫は茫然とした。

咲子の兄の青山道弥の行方が、この間の事件以来杳として解らないままになっていた。

徹夫が頼んであった野心作が秋の芸術祭に間に合わないのは大きな痛手だったが、まだ来年もあることだと、功をあせらないでいた。道弥もまだ若い。一つヒットしてもあとがつかないよりは、錬磨する時間があつた方が、結局は彼にとっても、徹夫にとっても着実なのだ。その意味で今度の彼の失踪に、友人として心配はしても、仕事の上ではのんびりかまえていたのだが、死んだとなると、徹夫の夢も消えてしまうことになる。

いや、それよりも、若い道弥が死んだということは重大な事件だった。

「どこで、どうして、死んだんです」

徹夫はたたみかけて聞いた。

「それが裏日本の松江から少しはなれた海岸に死体が波で打ちあげら

れていて、道弥さんの遺書をポケットに入れていたのやそうです」

「海へとびこんで自殺したというんですか？」

「ええ、何やしらん、あの辺にすごい岩ばかりの海岸があるのやそうです。波は高いし、とびこんだら一ぺんにまきこまれてしもう所で、そこらとびこんだのやろということです」

「しかし、変だな、道弥君が海で死ぬなんて……」

「先生もそう思われますか？」

「あなたも……？」

「ええ。道弥さんは泳ぎが達者で、よく云うてはりました、僕は海では死ぬへんって」

「そうなんです。僕はこの夏、一緒に泳いだばかりですからね」

「でも、そこは荒海で、どんなに泳ぎが上手でも、岩へぶちつけられて一ぺんやそうですが……」

「そりゃあそうかもしれませんが、泳ぎが出来ると死ぬ為に海へとびこまないと思うんですよ。僕は山が好きだけれど、自殺しに山へ行こうとは思わない。そんなものです。それ、たしかに道弥君の死体なんですか？」

「ええ、背広も道弥さんのものやそうですし、ビニールの札入れに遺書を入れていたのであまり濡れていないのやそうです、ちゃんと内容も読めて、道弥さんの死骸としてお母様が引きとりにいきはりましたん」

「そうか、道弥君が死んだか……」

徹夫は鼻柱がキューツと痛くなるような気がした。

「でも、先生」

貴美子は云った。

「波にもまれて岩へぶつかっただけかいうて、顔はめっちゃめっちゃになっ
ていたのやそうです」

「え？ 顔が……？」

「ええ」

云いながらこらえかねたように貴美子は泣いた。

三

徹夫はもう一度正々堂々と玄関から青山家をおとずれるチャンスを得た。

放送局のプロデューサーとしても、友人としても、道弥の死を悼みに行くのは当然のことだった。

それに、母の満枝が松江へ死体引き取りに行っているというのはも
つけの幸いだった。

青山家の玄関で案内を乞うと、井口と呼ばれた男が出て来た。

徹夫が来意を告げると、

「まだ奥さんがお帰りやおまへんのので、折角おいで下さったのに、お
線香をあげて頂くところも出来てへんしまつで……」

と、玄関から中へ通そうとはしなかった。

「いや、もう、ここで失礼します」

徹夫はわざと一応はそう云って頭を下げた。

しかし、どうせはそんなことだろうと道々考えてきたのだ。

「誠に恐縮ですが、僕は今日、一寸腹工合を悪くしているので、手洗
いを拝借させてくれませんか」

随分礼儀知らずな云い方だが、こんな場合他の嘘よりは卒直で、厭

とはいえない口実だった。

井口は自分で便所まで案内した。

この家はこの前来た時もシーンとして、女中もいない様子だった
が、今日も無気味なほどに静まりかえっている。

徹夫は便所へ入って中から錠をおろした。

随分長いこと便所の中で立っていたが、井口が去っていったような
足音がしなかった。便所の前で出てくるのを待っているのだろうか。

ふと、殺氣が流れた。

誰もいないこの家で、徹夫の命が闇から闇に葬られても、誰も知る
ものがないだろう。

この広い家の、庭の一隅へ穴を掘って埋めてしまえば、草野徹夫も
また行衛不明とさわがれるだけだ。

徹夫が青山家を訪れたことは、徹夫と、井口の二人しか知らないこ
とだ。

貴美子がそれを察しても、何の証拠もない。

もし、道弥の死に何か秘密があり、道弥の妹の咲子の発狂が真実の
ものでなかったら、徹夫の疑惑は相手にも通じているだろう。

秘密をかき出そうとする徹夫の存在は邪魔になるばかりだ。

この間の晩、満枝と二人で咲子を虐げていた井口の血に、異常なも
のがありそうな気がする。

咲子を気遣いと信じ、ついたものをおとす為の虐待とは思えないの
である。

便所の一枚の戸を通して感じる殺氣のようなものは、徹夫の鋭いカ
ンといっている。決して、被害妄想とは思われないのだ。

徹夫は心にも体にも身構えて便所の戸をあけることにした。

案の定、便所の前の廊下に井口が立っていた。

二人の目に火花のようなものが散った。

と——思うよりさきに徹夫が井口の足を目がけてとびついていた。

徹夫にほんの少し分があった。

井口の方は徹夫の方からまさか先にとびついてくるとは思っていなかったのだろう。

不意をくらって思わず腰をついた。

そこへおいかぶさって、徹夫は井口の背広の衿をつかまえると、学生時分の柔道の腕をふるうはこの時とばかり、井口の衿をしめあげた。

何が役に立つかわからない。

普通の喧嘩となったら、井口も相当強いのだろうが、先をこされた上に、技でこられてはかなわない。

案外もろく落ちてしまった。

放っておけば息をふきかえす程度に落としたので、徹

夫もゆっくりはしていられない。

急いで咲子の部屋へ上って行った。

四

幸い、ドアの鍵はかかっていたいなかった。

徹夫が部屋へとびこむと、

「あっ！」

と、咲子が悲鳴をあげたが、徹夫の方でも思わず、

「あっ！」

と声をたてた。

咲子は不意にとびこんで来

た男にびっくりした悲鳴

だったが、それが徹

夫と知ると

「見ないで下

さい」

と云

った。



徹夫が声をたてたのも無理はない。

真赤な長襦袢姿で咲子は寝台に鎖でつながれていた。それも、鬨犬などの胸にまわす革のバンドで胸と胴をまかれているのだ。

やわらかい絹の長襦袢と、ゴツゴツした革と、それにつながっている金属の鎖は、不思議なとりあわせで、頭の狂っている感じが、それは、狂人が彼女をそんな目に合わせているのであって、彼女の頭が狂っているのではないと思えた。

徹夫は革のバンドをはずそうとした。

しかし、手でちぎれるような薄い革ではなかったし、後で南京錠を穴に通して締めてある。鍵がなければはずれなかった。

「お母様が御旅行なので、私が出歩くとあかん云うて、こんなことを……」

咲子はよどみなく云った。

「失礼ですが、あなたは御病氣だとお母さんが仰言っていますが、医者に見てもらったのですか？」

「いいえ、本まは、私、どこも悪くあらしまへん。無理やり氣違いにされてしまうて……」

「やっぱりそうですか。しかし、話はあとで出来るとして、とにかくこのバンドをとらなければ……」

「でもどうしようもありまへん。氣違いに刃物は危い云うて、この部屋にはナイフ一つあらしまへんもの」

「鍵は誰が持っているのです？」

「お母様か、井口が持っているやろ思います。でも、先生、どうしてここへこられました？ 井口がいてましたやろ？」

「僕を御存じですか？」

「ええ、兄からいつもおうわさを聞いておりましてん」

「お兄さんのこと御存じですか？」

「兄は……」

と、咲子はあらためて徹夫の顔を見ながら、

「兄が貴美子さんのお父様を殺したって、ほんまでっしやるか？」

「僕はそうは思いません」

「私も……。でも兄は私をほんまの氣違いや思うてました。そして、母は私に、兄の前でことさらに氣違いらしうみせるよう強いましたん。

決して兄と二人きりで話をする機会を与えてくれしまへんかったし、母の目をぬすんで、どうぞして兄に云いたい思うてましてんやけど、とてもあとの折檻が恐ろしうて……」

「道弥さんが死んだということ聞きましたか？」

「ええ、でも、私は信じません。私にさえ、無理やり氣違いを装わせた母ですもん。何をやるわからしまへん。今でも私をほんまに発狂させよう思うてまんねん。そのうち、ほんまに氣が違いそうな氣イします。だって、この姿、ごらんになっても解るやろ思いますの、動けるのは部屋の中だけ、御不浄へ行く時はベルをならすと、母か井口が来てはずしてくれますねん。そしてまた、獣のようにこうして鎖につながれて……」

「この家の財産の問題でもからんでいるんですか？」

「ええ、多分……。母は、わざと兄を自殺させようとしむけたんでっしやるか？ 氣違いの血すじや思いこませて、貴美子さんのお父さんを殺したのを兄やと兄自身にも思いこませて、そして、自殺させたとしたら……。兄は死んでいるかもしれません。兄は本当に死んでしまったのかもしれません……」

咲子は「ワァーッ」と泣き出した。

長襦袢一枚で髪を乱し、太い革のベルトで胸をしめつけられたまま泣いている咲子を、徹夫はいたいたしげに見守るばかりだった。

「話はあとでしましょう、とにかく、何とかして、そのバンドをとる工風をして、ここを逃げ出さなければ……」

「でも、私はあきらめています。たとえ殺されても、この家で死んだ方がましやと思います」

「そんなこと云っていては駄目じゃありませんか。どうしてもだめなら警察に知らせて救ってもらいましょう」

「いいえ、警察には云わんといて下さい。どんな母でも、私にとっては育ててもらう義理があります」

「こんなひどいめにあっていながら……」

「それに、ここで気違いのふりをしていれば、兄のことも耳に入ります。ほんまに兄が死んだのやったら、せめてなきがらに会いたいと思います」

「本当に道弥さんが死んだとは、僕には信じられない。しかし生きていれば必ず僕の所へ何とか云ってくるはずだし……。ともかく、あなたをどうやったら救い出せるのか、咲子さん。僕は、この間の晩、庭の奥の鳥居の前であなたがお母さん達にされたことを見ていたんですよ」

「まあ」

「しかし、とび出していくわけにかなかったんです。あんなことが続くと、あなたは死んでしまう。ねえ、どうしたらいいのか、僕と一緒に考えて下さい」

「すみません。先生が誰にも知れんように助けて下さるのやったら、

私かて、こんな生活……つづけたいとは思いません。こんな浅間しい……」

咲子はあらためて自分の姿を徹夫の目からかくすように、手でおおった。

徹夫はもうこのつながれた美しい獣を見るのにしのびなかった。

「ねえ、何とかしましょう、僕に出来ることを考えて下さい」

「じゃあ、先生、こうして下さい。明日か明後日、母が帰ってくれば、私はまた、庭につれ出されて、苛められるのにきまっています。この家の裏通りに畠があつて、畠の奥に崖のくずれたような所があります。それを這い上ると、この家の庭の奥へ出てくるのです。多分垣根がこわれていると思います。明日か明後日夜になったら来て下さい。おそい方がいいのです。一晩中立木にくくられていることが多いのですから……。でも、その時は麻縄ですから、刃物があれば切れるやろ思います。それと、先生、申しにくいことやけど……先生のレンコートでもなんでも結構です。着るものを持って来てくれはらしまへんか。どうせ、裸か、こんな、長襦袢一枚で、責められるんですよ……」

咲子はこらえかねたように泣き伏した。

鎖がにぶい音を立てて鳴った。

徹夫はそんな咲子をそこへおいて帰るのにしのびなかったが、井口が息を吹きかえす前に、今日は帰る方がいいと思った。

「では、咲子さん」

徹夫は云うと、あえてふりかえらずにその場を去って来たのだった。

なるべくおそくと咲子は云った。

しかし、深夜になつては車がなくなる。

警察へ知らせしてくれるなという咲子の言葉を

尊重すれば、その辺へ空車をとめておいて、あ

やしまれてもいけないと思った。

とにかく終電車は一時近くまで通るから、その前な

ら駅前でタクシーを拾える。

徹夫は時間をみはからつて、咲子に云われた通りに、

畠から崖をよじ登り、青山家の裏庭へ出て来た。

「ああっ！」

という悲鳴が聞えて来た。

ピシッピシッと何かを打つ音がする。

(ああ、また、咲子さんが……)

徹夫は思った。

見つからないように木の茂みで体をかくしながら、その物音のする

方へ近寄つて行った。

おそい月が昇つて、今日も木の葉が白く光つてみえた。

いつもの長襦袢の胸へ荒縄をかけられた咲子が、地面へ顔をつけそ

うにうずくまっていた。

袖がちぎれて、白い腕が出ているが、そこにも犂々と縄がまかれて

いた。

「あの放送局の男に何を云うたんや？」



片手に物さしを持って満枝が咲子を責めていた。

「お母ちゃんが前のお前の病気をなおしてあげよう思うのが、そんなに気

に入らんのか？　ここから逃げよう思うてるのやろ？　何を云うた

んかちゃんと云うてみい」

「何にもいわしまへん」

「云わんことがあるもんか。云うてみい。云わんと、こうするで」

咲子は物さしのさきで背中をこしこしとついた。

「あッ、痛ッ！」

「どうや、云うてみい」

満枝は背中をこづき、肩をこづく。

咲子が体をまげて、胸と膝が一つになりそうにうつむいて痛さをこらえると、満枝は胸の間へ物さしを入れて体を起させて、胸を突く。

咲子は体をそらせて

「ああ——ッ」

と、悲鳴をあげる。

後手に縛られた不自由な体を動かせるだけ動かしてもだえる咲子の目から、涙がキラキラと光って頬を伝った。

「お前はお母ちゃんが嘘いうてる思うて、誰にでも正気やいうて救うてもらおう思うてるんやろ。なんで井口にまでそないにみせるのや。井口にはお前が気がふれてるいうてあるんやで。気違いやいうてたら、井口もお前に手を出さへんやろ。そのお母ちゃんの親心も知らんと、ここを嫌うて逃げようとする。ほんまに腹の立つ……」

満枝は物さしをふりおろした。

ピシッピシッと、咲子の肌が鳴る。

咲子は地面に突っ伏すように体を崩すと、荒い息をついていた。しばらくののしりながら満枝は咲子を打ちすえていたが、

「今日はここにおいで。さわぐとしようちせえへんで」

と云いながら、自分のたもとからハンケチと手拭をとり出すと、咲子の口へハンケチを押しこんで、上から手拭で猿ぐつわをしっかりとめた。

そして、咲子の足首を一つにすると別の縄をかけて縛ってしまつた。

そのまま満枝は後を見せて去って行つた。

徹夫はすぐにとび出して咲子を救おうとしたが、

（いや、まてよ）

と思つた。

井口の姿が見えない。

（急^せいてはことをしそんじる）

それに、満枝が母屋の方へ帰らずに、懷中電燈で足もとをてらしながら、庭を横切っていくのも変だと思つた。

徹夫はあたりを見廻しながら、咲子の傍へより、急いで猿ぐつわをはずすと、用意したナイフで縄を切つた。

「先生」

と、すがりつくように云う咲子を、

「シー——ッ！」

と手で制して、

「向うの崖のあたりへかくれていて下さい。僕は一寸、あなたのお母さんの様子を見てすぐ行きます。さあ、早く……」

と、促した。

「はい」

と、咲子は立ち上ったが、よろよろとよろめいた。

「歩けませんか」

「いいえ、大丈夫です」

とはいふものの、歩こうとしても足もとがさだかでない。

「あッ、痛ッ……」

と、腰をついてしまった。

徹夫の来る前から打たれたり突かれたりしていたのだろう。暗いから解らないが、おそらく着ているものをついたら、体中、傷だらけかもしれない。今の今まで折檻されたあとなのだから、無理はなかった。

「さあ、じゃあ、僕につかまって、その植え込みまで行きましょう」

徹夫は咲子の手を肩に廻すようにとると、脇腹を支えた。

「すみません」

咲子は小さくいう。

咲子の歩みを助けながら、徹夫は心がせいていた。何となく、満枝の去って行った方角が気になるのだ。

新聞記者や刑事にはよくカンというものが働くが、徹夫も奇妙にカンの当ることが多い。

胸さわぎ……という大げさになるが、何かしら満枝のあとをつけてみたい気がしたのだ。

咲子を小暗い植込みのかげまで連れこんだのは、ほんの僅かな分秒だったのだろうが、心がせくので徹夫には大分長く思われた。

「今日は井口とかいう男がみえませんが、どうしたんですか？」

「さあ、さっきまでいたのですけど、誰か人が来たようで、母と何やらんこそ話し合っていました、いったん母が出て行って、又、井口と交替しましたん」

「あの向うに別の建物があるのですか？」

「お茶室がありますし、今は使っておりませんが、築山の下は防空壕になっています」

「じゃあ、僕は一寸行ってみてきます。すぐ引き返してきますから、

ここにかくれていて下さい」

「ここにいて見つかるにあかんさかいそろそろ歩いて行ってみます。行かれたら崖から畠へおりる木の影まで行っています」

「じゃあ、気をつけて、すぐ来ます」

徹夫は満枝の去った方へ、見当をつけて歩いて行った。

木立がいったん切れて洋風の芝生になり、その向うがまた植えこみの茂みになっている。

急ぎ足で芝生を横切ると、茂みの中に光が洩れていた。

それが茶室なのかもしれない。

竹が植わって露地になっていた。

徹夫はそっと茶室に近づいた。

中に満枝の他に誰かいるらしい。

人声が聞えた。

「あっ！」

と、徹夫は思わず聞き耳をたてた。

顔は見えないがその声に覚えがあったのだ。

(以下次号)

道弥の死の真相は？ 日毎の折檻に傷つきお

のく可憐な咲子の心身は鬼女の手から完全に逃れられるだろうか？ 徹夫の聞き当てた声

の主は何者？ 謎は謎を呼んで渦紋はひろがる！ 次号御期待ください！

夜シリーズ第五弾!

悪女夜色

または背徳の倫理

武野藤介著

平田茂子・装幀

美しい悪女と背徳に身を灼く夜々を重ねつつも、非情の眼で女の正体を見きわめずにはいられない情夫の日記——。

昨夜は、あれからすぐ、三人、枕を並べて寝たのである。夫婦は同衾。おれは、もちろん、別の寝床。その寝床に、まず、おれをさきに寝かせてから、須山が、トイレットへ行つた隙に、ナミ子が内緒話のような小声で、「それ、私の寝床よ……」



その掛布団の、ビロードのカバーに、彼女の肌の匂いが泌みていた。

枕もとの、スタンドのスイッチを切替えると、おれの寝床のほうに背中を向けた須山は、すぐ、扉をかきだした。彼女が真ん中に寝る。おれと、三尺と離れていないのだ。一

番しまいに、彼女が寝床に這入ったが、さつと、寝巻に着換えると、脱いだ着物の、肌の温味が残っているような移り香を、おれの、布団の上にふんわりと掛けて、

「先生は、寒がりやさんだから」

と、ひとり言のように云った。せめて、この移り香でも着て寝てくれという意味か。おれは、眼を闭じていた。

寝床が変わったせいばかりでなく、その移り香に悩まされるという、若い歳でもなかったが、ナミ子の云ったおおッびらなつきあいというのがこのことだろうか、そんなことを考えていると、つい、眼が冴えてきてしまつて、すっかり、おれは寝そびれていた。そうと、頸を捻じ向けてみると、手を伸ばせば引寄せたくなるほど、ちかちかと、彼女の白い顔が、こちらを向いていて、薄暗いシェードの翳から、じつと、おおきな眼をあけておれを見詰めている。濡れたようなその眼が慾情に燃えていた。

——朧月の章——

(女を描いて他に追隨を許さぬ武野藤介先生快心の書き下し「悪女夜色」が本社から発売されました。価二五〇円 千四〇円)



雪嵐お美代さんげ

伊能 孝

野崎 耕作・画

手負い女

元禄十四年三月、勅使饗応役浅野内匠頭が「数度の堪え難き恥辱を加えられたによつて」

指南役吉良上野介に刃傷に及んだが果さず翌十五年赤穂浪士が本所松坂町の吉良邸に討入り、主君の仇を報じて引揚げた。

浪士の引揚げたあとの吉良の邸内は、不意の闖入者に乱れに乱れ

長屋前の雪の中、台所、小玄関などに家老小林平八郎を始めとして用人須藤与一右衛門、鳥居利右衛門、中小姓清水逸角、大須賀次郎右衛門、斎藤靖左衛門、左右田源八郎、小塚源次郎、新貝弥七郎、祐筆役の鈴木六右衛門以下、足軽、茶坊主に至る都合十六箇の屍体が転々と横たわり、さらに二十数人の重軽傷者の、血なまぐさい呻き声がここかしこに満ち、凄惨な有様であった。

それらの重軽傷者や屍体は、赤穂浪士の義拳が漸く江戸市中に喧伝される頃、その花々しさとは別に、黙々と吉良、上杉両家の手の者によって引きとられて行った。

そして、引取手のあるそれらの屍体とは別に、深傷を負った一人の女が、省る者としてなく、息も絶え絶えに放置されていた。傷は袈



裳掛けに一刀、あたりの白雪を紅いに染めて
転がっていた。苦悶に歪む顔は菩薩のように
美しかった。その名は美代という。

美代の話

私はいまから十五年も前、赤穂に住んでい
たことがございます。父と二人だけの淋しい
暮しでしたが、しかし私たち父娘は貧しいな
がら、その日、その日の生活に心の張りを持
っていて結構倅せに暮していたのです。

朝早くから、私は父と一緒に塩浜へ出て、
一日中灼熱の太陽を浴び、額の汗を塩にして
塩田で働くのです。

御承知のように御領主浅野のお殿様は、表
高五万三千石ですが、新田の開発、塩田の拡

張などで収益八万石、
裕福なお大名と言われ
ておりますが、当時は
召抱えたお侍ばかり多
くて、おまけに物価が
うなぎ上りに上って、
私たち土百姓はもとよ

り、家中の方々さえ随分と困っていた人も多
いと聞いています。それでもよそほかの御領
地と較べて困窮が目立たなかったのは、やは
り、塩田の拡張工事が活潑だったからでしょ
う。この事業は赤穂藩にとって唯一の収入だ
ったことは間違いありません。

ガラガラと灼きつくようなある暑い夏の日
藩の御家老や御重役を従えてお殿様が突然
わたしたちの働いている塩田に御視察に見え
られました。ちょうど、お殿様のお通りにな
る砂丘の近くに屯していた私のところへ一人
の凜々しいお小姓が駆け降りて参り、一掴み
の塩を懐紙に載せるや、きびすを返してお殿
様の許へお運びになりました。それは、ほん
の一瞬の出来事のように思われましたが、そ

の時のお小姓の端正な貌だちを目近に見た私
は驚きと羞恥に気も動顫してしまいました。
思いなしか、いや、あの時たしかに前髪の美
少年は、私に目礼してくれました。清々しい
瞳の底に魅せられ、二つの視線が絡み合った
ように思えるのです。私はそれを確かめてみ
たかった。おずおずと顔を上げてみるとお殿
様は何やら御家老様の説明にうなずいておら
れ、一様にこちらの方に向いておられる。先
刻のお小姓がどこにおられたかを見極める余
裕もなく私はまた深く地に頭をつ
けるより他に術がありませんでし
た。

それから五日ほどした夕刻、父
の寝酒を買いに城下に出掛けた時、
私ははからずもそのお小姓と逢っ
たのです。五十年配の瘠せた武士
の後に従ってこちらに向ってやっ
てくるのです。何やら一人で声高
く談笑している年配の武士はお代
官菅谷半兵衛様であることがすぐ
わかりました。お代官は、いくら

白雪を赤く染めた女のかすかな意識に美少年の涼しい瞳が、愛欲流転のおのが姿が蘇る！

特集 裏窓忠臣蔵

か酔っているようで足許もふらついていて、その都度、うしろからお小姓が腕を支えながら微笑を湛えて上手な聞き役をつとめておりました。あちらも私の姿をすぐみつけてくれましたが、この老人がというような素振で弱に視線をすぐ泳がせてしまします。私はいつまでも立っていました。不思議とあの時の羞恥心はなく、お小姓が気弱であればあるほど積極的にこちらから立ち向って行けそうな気がしてくるのでした。お小姓が会釈とも思える伏目で私の傍を通り過ぎる時、お代官はゆらゆらとした足を地に踏んまえて立止るや横柄に私の顔をグッと見据えていましたが、「おい、こら、その娘、その方はどこの誰だみかけぬ女だが名は何という」

大声でわめくように聞くのです。

お小姓は、すっかり狼狽して、しきりとお代官をなだめ、その場を立去らせようと揉み合っているのです。私は、女として当然自分からその場を早々に立去らなければならなかったのに、お代官の言葉を渡りに舟とばかり私の名が美代であること、塩田で働いていること、百姓茂市の娘であること等を何のよどももなく答えていたのです。私より、二つ三つ齡下の美しいお小姓に、せめて自分の名だ

けでも聞かせて置きたいという願望が働きかけていたに違いありません。小鼓をうち、能を舞い、四書五経を読み、お殿様の護衛というよりお相手をするお小姓に、塩田人夫の娘等到底言葉すら交えられぬという悲しみが私をそうさせたのかも知れません。

私の思いがけない返答に、お代官もお小姓も、顔見合せて息をのんでいたようですが、お代官はやがて、

「活潑な女子じゃな、いくつになりおる」

「ハイ、十八でございます」

「好きな男でもあるのか」

「……………」

その時、お小姓は見かねたように傍から、「お父上、そのようなことを…。さ、参りましょう」

——そうであったのか。あのお小姓こそ菅谷半之丞様かと、その時初めて私は半之丞を知ったのです。

赤穂の一千人の御家来衆のうち、片岡源五右衛門、磯貝十郎左衛門、岡野金右衛門という美男のお方の中でも城下の娘たちの間に一際喧伝されていた菅谷半之丞の名を、私とて聞いてはおりましたものの、今さらのようにその美しさに魅せられてしまいました。

それ以来、私は半之丞をますます強い気持ちで慕うようになりました。毎日のように廻り道をしては菅谷の屋敷の中を窺いましたが、半之丞とは一度もあの日から逢えず、時たま屋敷の附近で所在ない思いで佇んでいるところを、お代官に声かけられる事がありました。が、その都度、あいまいに言葉を濁していましたが、噂にきけば半之丞はお殿様の御寵愛深く、御殿に宿ることもしばしばで一時もお側を離れぬということや、女子には一向に無関心な人であるということです。

いっそ、それなら男に扮装してでも半之丞に近づきたい。そう思うと自分の決心がいじらしくなって矢も楯もたまず、ひそかに男装を凝らしてみるのでした。

悪

夢

寝酒に酔い痴れる父をシリシリとしながら待ち焦がれ、ソツと家を脱け出し、いつものように、もしやという期待で城と菅谷の屋敷を何度も行き来していると、

「美代ではないか」

うしろからお代官に声かけられました。

「いつも所用あり気だが、どうだ、わしの屋敷はすぐそこだ。寄ってみる気はないか」

そう言われた時、私は一も二もなく、お代官について行ってしまったのです。半之丞の日々の生活の匂いを辿ってみられることも楽しかったし、もしかすると案外半之丞の最近の消息等聞き出させるかもしれない。そして半之丞の父半兵衛が第一印象の横柄な武士とはうって変って次第に親しみのあるまなざしになって、それは、ふと嫁に対する優しい舅の心づかいとも思えるのでした。

菅谷の屋敷の離れへ案内されるや、

「風呂へでも入って寛いでゆくがよい」

「でも、余り遅くなりますと」

「構わぬ、わしからいずれそなたの父親に挨拶を致そう」

「……？」

「そなたを貰い受けにな、アッハハハ」

「では、私ごときものを、——それは本当でございますか」

「いずれ、半之丞も戻ってくるであろう。よい機会じゃ」

夢ではあるまいか。——私は何度も自分を疑いました。そして、他愛もなく、弾む乳房を湯ぶねに沈めながら抱きしめてみるのです。私の躰は潮風に染って恥しいほどに浅黒く、意外なほど荒々しい血が身内に沸つてい

ることを始めて知ったような気がします。

「ほう……。これは美しい」

部屋へ戻ると、手酌で膳を囲んでいた半兵衛が、心から感嘆したように私の顔を注視して離さず、羞しい思いを致しましたが、進んで酌をする私の手首を不意に荒々しく引き据えられた時は、愕然として声も出なかったの
でございます。

「何をなさいます」

掴まれた手を振り切ろうとすればするほど、老人とは思えぬ力でますます強く引き据えられ、みるまに、あさましくも半兵衛の膝の上に抱きすくめられ、袖口から深く手を差し込まれていたのです。



私の激しい抵抗に、半兵衛は予期しなかった面持で、

「今さらのことでもあるまい、お前をきつとわしの後妻に貰い受けることを約束するぞ、棄てはせぬ、お前の父親にわしから話をつけると言ったではないか、さ、さ、そうじらすでない」

「では——？」

「では何じゃ、可愛がってやるのだ。気の済むようにしてやるのだ。初め、わしがお前に道で名を聞いた時、快よく返答してくれたではないか、それから、わしの屋敷の廻りをそれとなく尋ねようとしていたこともわしはとうに知っていた」

「お離してください、どうぞ離して」

「離さぬ、わしは若くして女房に死なれて、ほとんど男手一つで半之丞を育ててきた。女も寄せなかった。わしの苦労は終わったのだ。だからわしはこれから」

「いやです、いや……」

「どこがいやだ、ここか……。それとも」

私は無我夢中で足で空を蹴り、腕で振りほどき、熟柿のような口を逃れ、何とかこの場から逃れ去ろうと、あらん限りの力を振り絞って反抗を続けました。

それは、一体どこまでが反抗だったのか。

激しい闘争を続けながら、ふと、余りにも突然に、半之丞の視線とかち合ったのです。半兵衛の肩先越しに、私ははつきりと半之丞の姿をみつけたのです。

(あ——)

それも、ほんの一瞬でした。まるで半之丞は私の視線を見据えるのを待っていたようにパチンと障子を閉め、身を翻えしてしまったのです。

全身の血が、スーッと引いてゆく思いでした。

「どうした……？ いま、誰かこの部屋へ入ってきた奴でもいたのか」

半兵衛のいぶかしげな顔に、私はなぜか、

「い、いえ、ただ、蜘蛛が」

「どこだ。何もいへんではないか、可愛い奴めが……」

私は、放心したように、されるままになっていました。すべてが悪夢のような出来事でした。半之丞を愛しながら、その父親に身を許し、その場を半之丞にみられるとは、何という因果な女だろう。このままでは済まされない。

「どうした？ 美代」

「好きです、貴方を初めから大好きだったのです。本当に私を奥様にして下さるのでしようね」

「ああ、するとも、せぬで置かぬ、お前は素晴らしい奴じゃ。生涯可愛がってやるぞ、もしお前に好きな男でもあったら、その時は……」

「——その時は？」

「わしより頼りない男だったら、その男からお前を奪ってやる」

「うれしい、いまのお言葉、よもやざれごとでは……」

妖しい義母

それから二十日ほどして、私は菅谷半兵衛の後添いとして正式にお殿様の認可を得て嫁入ったのでございます。

その間、半之丞は私を避けていられたようございしました。半兵衛を通じて、それとなく半之丞の気持をきいてみると、別に賛成もせず、反対もせず、相談にも素っ気ないという。そう聞いて私は半之丞の嫉妬を小気味よく感じるのです。そして、一方官能に狂った自分の痴態を半之丞に見られたという恥辱と、そこから生れるさらに大きい半之丞の苦痛を思うと、私は、もっともっと大きな苦痛

を半之丞に与えてやりたかったのです。だから、私は菅谷家へ嫁いできたその日から、当然の事とは言え半之丞と呼び棄て、凜としたその音律のよさに酔っていたのです。

半之丞は、その都度きつとして私を見据え、荒々しく立去りましたが、それも日がたつにつれて弱しくなり、やがては私を母として仕えようとあきらめた如く「ハイ」「ハイ」と素直にいいつけをきくのでした。それを私はどんなにか快よく思った事でしょう。

また、私は私たち夫婦の寝所に理由をつけて半之丞の隣室に構えることを夫に説得させ、襖一枚へだてて、若い半之丞が寝苦しそうに転々とする気配を窺っては、ひそかな愉悦を味わっていたのです。それは、肉体の軋みの面白さとは全く別な、私と半之丞との、激しい心理的な闘いにあったからです。

夫の不在をみては一度、半之丞に肩を揉ませた事がございます。こういう事をさせるにも周到な準備があつて、私は二、三日の間風

特集★裏窓忠臣蔵

邪を装い半之丞が見舞にやってくるのを待ったのでした。躰の節ぶしが痛くて困る。少しの間揉みほぐしてくれぬかなどと申し、女のようなしなやかな半之丞の手が、おずおずと私の指図通り私の躰の隅々まで這い、ためらうのを、もそつと脇、そこ、それが重苦しうてならぬ。きつう揉み込んで下されと半之丞の顔色を窺えば、可憐にも目を閉じ、肩を慄わせて抗わず、いとおしさがムラムラと燃え上ってくるのでした。

「半之丞」

「——ハイ」

「……はじめてそなたと逢うた時のことを覚えていなさるか」

「……ハイ」

「やはり覚えていてくれたのかえ……私がこの家の廻りをうろついていたことも……？」

「……」

「そうでしたか……。半之丞、私は母としてそなたを好きです。いとしい」

「——？」

ハッと息をのむ半之丞の手を引き寄せようとするのを、半之丞はパッと飛びすさって、

「御免」

「お待ち！　お待ちというに——」

半之丞は、その日からお城に登って幾日も帰宅しなくなりました。

夫に聞いても、案外気にもかけず、「勤めが忙しくて、当分家へは帰れぬとお城で元気だったワ」

この菅谷家は、お馬廻り百石を頂戴し、いわばお殿様の護衛役の中堅どころに位しており、夫はこれという目立った働きもなければあやまちもなく、若くして先妻を失くしてからはただ一途に伴半之丞の行末に楽しみを注ぎ、半之丞もまたそれに応えて殿の信望も篤く、時折やってくる上役の近松勘六様など大そうな御ひいきでした。夫は半之丞が、殿の慈愛を一手にお引受けしていることが自慢でならないのです。かえって、家のことよりもお勤め第一じゃと半之丞を励ましてきた、と朗かそうに私に言っただけ聞かせるのでした。

半之丞は、時折帰宅しましたが、その目はいつになく陰しく、私を寄せつけずに、さっさと着換えをまとめると型の如くの挨拶をして、また出掛けてしまふのです。半之丞は、私から遠ざかろうとしている。逃げようとしている。逃がしてはいけない。でも、お城に寝泊りしている以上私にはどうにもならなかったのです。いっそ、私はもっと早く、半之

丞を絶対に私から離さない手段をとればよかったのだ、と今さらのように後悔してみるのでした。そして、もしかしたら半之丞ともこのままになつてしまふのではないかという不安に脅えてくるのでした。

私の不安は意外に早く決定づけられてきました。

半之丞が城へ寝泊りするようになってから一ヶ月ほどして、その年も暮れようという頃夫は泥酔して担ぎこまれてきて、私の顔をみるや、ボロボロと涙を流して

「馬鹿者奴……半之丞の大馬鹿者奴が、何ということを……」

「半之丞がどうかされましたか？」

「どうも、こうもないわ、追放だ、追放されおったのだ！ あ、不孝者が」

「追放———そ、それはまた」

「雪路とか申す腰元風情と乳くり合つたのじや、わしのいままでの苦労も水の泡だ」

「して、どこへ」

「それがわかる位なら、とうにこのわしが引き据えて腹をきらせてやるわ！ 小娘ぐるみ所払いとなつたのもせめてもの殿の御仁慈、それに甘えておめおめと生きさらばえているかと思えば、わしは世間へ顔向けが出来ぬ」

「では、その雪路という小娘と一緒に」「そうだ、恥しらずの親不孝者奴が」

「——」

これですべてが終つた。何という皮肉、苦澁、見事に半之丞は私の鼻を明かしてくれました。そして、恐らくもう二度と半之丞と逢えぬものと思うと、急に夫が憎くもあり、みすほらしくもあり、ただ人の善いだけの、そのくせ狂つたような情欲に身をすりへらしてゆく老いぼれが哀れにも見えるのでした。半之丞の去つたあととあつては夫は抜殻同様にしか映らないのです。

流 転

間もなく私は、このうとましい老残の夫を棄てて、若衆歌舞伎の囃子方にとり入って江戸に上りました。と、いうのは半之丞は江戸の近松勘六様の甥御のいる長興寺という寺を頼つていったのではないか。そんな噂をふと耳にしたからでございます。

玉城太夫一座という若衆歌舞伎と行を共にするうちに囃子方の音吉から太夫の容色に迷つたのも、太夫の面影が半之丞のそれとどこか似通つていたからでしょう。

太夫は、行く先々、大名、旋本の屋敷に手

踊りを懇望され、私たちも太夫に従つて屋敷茶店で馳走を受け、寝泊りを続けるうちに、太夫が私を愛するのと同様に殿方をも同じように愛することを知つたのです。そして、さらに驚いたことは、一座の者同志、そのほとんど誰もが、銀一枚で、男女のいずれにも容色を売るということでした。

「玉路、江戸へ着いたら、私は副業に深川あたりへ伽羅油の店でも開こうと思うのじや、その時は、お前を頼りにしていますぞ」

太夫は、これが男かと思うばかりのしなやかさで幾度か私を掻き口説き、息ぞかいまで香しく恍惚とさせてくれました。

私は太夫が半之丞の化身と思えて、江戸までまったく夢のような倖せに浸つて参りました。

玉城太夫は、両国広小路に小屋を掛け、江戸の人気を集めて最良客で楽屋はいつもこつた返し、太夫をめぐつて毎日、一つや二つ、争いが起きるといふ有様でした。

私は京橋小田原町へ太夫の囲い者として、伽羅油、鬘つけ油等の店を出し、いつの間にか私の名前まで世間の口に上り、男女の客で店は賑いました。しかし、そうなればなるほど、世間は太夫と私との仲を裂き、いつしか

太夫も一日が二日に、二日が三日に一度という具合に足が遠のいてくるのでした。そして店とは別に、さる蟲負筋からの口添えで弥宣町に若衆茶屋を設け、美少年たちの名を軒頭にかかげ、顔には脂粉を塗らせ、紅をほどこして、自らも愛翫し、客の求めにも応じさせて

ていました。

私はまた思い返したように半之丞の姿を求め、人を使って半之丞の身を寄せていたという長興寺という寺を探し当てましたが、もう半年ほど前に立去ったとの事で、皆目行方が知れません。もしや、築地、鉄砲洲のお屋敷

にでも出入りしてはいないかと探らせましたところ、旬日を経ずして、戸沢下野守様の御家来で兵藤丈太郎というお侍と親しい間柄であることを聞き及びました。
早速兵藤様にお越し願って、是非、半之丞に逢わせてくれるよう懇願しましたが、キツパリと断られました。

「拙者は、あなたのような恥知らずな女は嫌いです。菅谷も逢いますまい」

「私は母です。母が子に逢うというのが、なぜいけないのです」

私の取り乱した言葉を、笑殺して兵藤様は嘲りの眼で去ってゆかれました。

こうなつては、自分の力でどんなことをしても一目半之丞と逢いたいものと、いろいろと人を介して探させましたが杳として行方が知れず、そればかりか、店の方もちょっとした手違いから落ち目になった上に、悪い口入屋の手にかかって、太夫から預った家財道具までむしりとられてしまいました。

半之丞はきっと、私の目の届かない処で、雪路とかいう女との間に子を設けて、平穩に暮しているに違いありません。

時たま、浅野の家中の方々と逢うこともありましたが、白い眼で私を寄せつけず、刀の



束を叩いて「菅谷半兵衛殿は死んぞ、貴様が殺したようなものだ！」と毒婦呼ばわりされても、私には返す言葉もなかったのでございます。

そうこうするうち、ふとした縁から日本橋石町の呉服問屋の後妻に見込まれて入り、さらにお店の最負筋である呉服橋の吉良様に人身御供同様召出され、側妾となりました。

吉良様は、お齡に似合わぬ好色で、初々しい生娘を御寝所にはべらせて置いて、これ、このようにして泣くのじゃ、と、私を責め抜いてみせるのです。私には、そうされることが妙に快よく、ふっとそのような中で半之丞の父とのことを錯覚するのです。

雪

嵐

元禄十四年、年頭祝儀の慣わしとして勅使をお迎えし、その御馳走役を浅野内匠頭様伊達左京亮様が任命され、御指南役吉良様と浅野様との間に、陰悪な睨み合いがあったことは、理由はともかく私たちにも薄々感ぜられることでした。何ごともなければと念じていましたが、勅使御登城の三月十四日、内匠頭様が吉良様刃傷の報に、屋敷内はごった返し私は、ただうろたえるばかりでした。

そして、その年も九月を迎える頃に吉良様は御隠居が叶い、新築したばかりの呉服橋のお邸を出られ、本所松坂町の新邸にお移りになりました。それと前後して上杉家の千坂様やら沢山の付人たちが物々しく出入りし、その年の暮れには世上では赤穂浪士の討入が、きよう、あすにでも行われるとか、間者が吉良邸へ潜ったとか取汰沙されていました。翌年も秋寂びた頃、上杉家からの秘書が屋敷内から消え失せたという事件が起り、いろいろと詮議がございましたが、私は赤穂の者ということだけでお屋敷から出されてしまいました。しかも因果なことに、この齡になつてから吉良様の子を宿していたことを間もなく知ったのです。

私には帰る家ありませんでした。しよんほりと永代橋の橋のたもとで思案している、はからずも音吉に声かけられたのでございます。

音吉は、あれ以来一座にいたたまれず、それを機会に相生町三丁目、豆腐屋稼業を始め今では、ちよつとすべただが働き者の女房と子供が三人、近くもう一人生れるのだと、明るく笑って、私の手をとって、「よかったら寄ってくんねえ、俺アお前さん

を恨み抜いたことがあったが、あれがかえって励ましになって、今じゃどうにか店を出してやっているが、お天道様が嬉しくって仕様がねえんです。お前さんも随分とやつれなすった、いまだここに」そう言われて、すっかり忘れていた涙が一度にドツと溢れてきて困りました。

音さんの好意で、どこか働き口のあるまで店を手伝ってくれと親切に言われて、ついそれに甘えることにしました。

音さんの家から軒並みにしてほんの十軒ばかり先、米屋五兵衛と称した呉服屋があつて、その主人が前原伊助どのであること、そして氣をつけていると前だれ姿、医者、兵学者、職人等々に身をやつした人たちが、それとなく出入りし、私にはそれが赤穂で見覚えのある方々でした。一度は、倉橋どのが、そして、半之丞と仲のよかった兵藤丈太郎どのが、連れ立って米屋の店先へ入ってゆくのを見届けた時、私の胸は昂ぶりました。きっと半之丞もやってくる。こない筈がないと確信したのです。私は顔を

蔵臣忠容集特

見られぬよう、それとなく米屋の店先を見張りました。

しかし、半之丞は一向に姿をみせませんでした。それでも私は根気よく待ちました。何度か米屋へ飛び込んで半之丞の消息を訪ねてみたかったか知りません。でも、そんな事が半之丞にとっても、私にとってもとり返しのつかない事になる位の分別は私も知っていました。

その日も私は、二階の格子戸から、吹き込む雪にふるえながら、夢のような過ぎ去った日の数々を、とりとめもなく思い返しておりました。

急に私は激しい嘔吐に襲われ、その場に打ち伏してしまいました。こみあげてくる執拗な嘔吐に、私は初めてつわりの恐ろしさを知ったのです。吉良様との肉欲の戯れに泣き悶える私の姿が、くつきりと浮び、払えども、払えども、呪わしく私に迫ってくるのです。何という怖ろしさ、お腹の子の父親は吉良様——。吉良様の裏門は、すぐ目と鼻の先だ、話さねばならぬという不安が拡がってくるのでした。

「どうなさった、食当りでもしなさったかね」

音さんが二階に上ってきて、私の様子に驚いて、

「お竹、早く水を持ってこい、熊の胃か何かねえかい」

と、声をかけて置いて、

「大丈夫かい、苦しいかい、何だいこの夜中に雨戸なんか空けっ放して、風邪を引くぜ、しっかりしなよ、弱ったな」

「いえ、何でもないんです。もういいんです。

それより、私思い立った事があって、これからちょっと出掛けてきます」

「そんな事言たって、いま何ときだと思ってるネ、六つを廻ったんだぜ、それに外は四五寸も雪が積って、人っ子一人通りやしねえ、悪い事は言わねえ、何ならこの俺が一っ走りしてくらアな、ナーニ、手間はとらせねえよ」

「いいんです。それよりお内儀さんのお産はきょうだったねえ」

「あの分じゃ、明け方さ横ンなってなせえ」

「いえ、私は、どうしても私じゃなくちゃならない用事がありますので、心配しなくてもいいんです。ものの一丁ともかからぬところですよ、それよりお内儀さんを大切にしてください」

「……そうですかい、なら無理に引止めねえ

が、すぐ帰ってきなせえよ戸はあけときますぜ」

外へ出れば雪はやみ、一面の銀世界を、月が真昼のように明るく照し出し、しんとしてどこも寝鎮まっていました。

足跡一つない雪道を踏みしめながら、米屋の前を通る時、死んだように物音一つなく、かえって否吉な予感がしたようです。

そこから左へ折れると、すぐ吉良様の裏門へ出ます。お門番にも顔馴染がありますので何とか便宜を計って吉良様にお目にかかれるものと、飛び立つ思いで道を急ぐと、裏門へ差しかかるところで、突然、黒覆面の三人の武士の白刃に囲まれました。

ただならぬ殺気を感じ、

「何をなさるのです。吉良様へ用事のある者です、お通し下さい」

「ならぬ。騒ぐと斬る」

押し殺したような鋭い声で白刃をつきつけられ、身動きもできない私に、その中の一人が急に、

「何だ。思い出したぞ、おぬしは油屋の囲い者」

「え？ あなたは」

「お忘れか、兵藤丈太郎だ」

「おお、戸沢様の……」

「いまは浪人、故あって今宵はこの場は通されぬ」

「では、何か変事でも——」

「……」

「吉良様に何か？ 教えて下さい、お願いします」

「ええい、邪魔立て致すと斬るぞ」

「構いません、吉良様に一目逢いたいのでございます。どうぞ兵藤様」

「今度は吉良様か。菅谷半之丞に一目逢いたいと泣きおったのは、どこの誰じゃ、吉良殿にはいずれおぬしと別な赤穂の人々が見参するわ！」

「では——では今夜」

はっと、うしろを振返れば黒い風のような一団が殺到してくる。

先頭に吉田忠左衛門様と並んで大石様御子息、総勢二十四、五人、みればまぎれもない赤穂の浪士達！

「あ、赤穂の……」

倉橋どのの顔もみえる。磯貝、寺坂様もいる。そして半之丞は——と駈け寄る肩先へ、

「ええい、奸婦！」

次の瞬間、もうろうとした意識の底で、し

きりと半之丞の姿を求めていたのです。

「半之丞、半之丞……吉良さま……」

しかし、誰も私をかばってくれる者もなく何という暗い雪の夜なのだろう。

手さぐりで、あたりをさぐり、半之丞の名

を呼び、そして吉良様の名を呼びながら、死

んではいけないと、そう自分に言いきかせるのでした。

未亡人派出婦の手記

よろめきの夜

片桐しずえ著

定価二五〇円

★どの屋根の下にも、他人には窺い知れぬ秘密
★がある。愛欲、歓喜、微笑、悲哀、さまざま
★な夜の隙間から覗き見た男女達の生態。

△内 容▽

恐しい都会の罟・女の求めるもの・マダムとツバメ・真夏の夜の悪魔・共稼ぎチャッカリ夫婦・ヌードスタジオ裏のぞき・婦人科医の窓・かりそめの不倫・偽善者の家・恋ははかなし・雨に散る花・女の兵舎・三角関係の果てに・女の中の悪魔・上京まで

あまとりあ社の 夜シリーズ！ 第六弾発行！

あまとりあ社・発行

送料 40 円

転々と寝返えりを打ちながら、ユカリは何とかして眠ろうと努力していた。なかなか寝つけなかったし、しいてのんだ酒の酔に体はだるく、頭が痛かった。泥沼につかっているような気持の悪さを感じていたが、いつかところと浅く眠ったらしい。

ふと、どこかで呻く声が聞えるような気がして、はっと目が覚めた。覚めた瞬間、夢だったのかと思ったが、

「ううっ！ ああ、ううっ！」

と低い男の声が、地獄からでもひびくように聞えてくる。

ユカリは暗い中に目をすえて、その声がどこから聞えてくるのかたしかめようとした。

「さあ、どうだ。これでもか。これでも言わないか」

そう言っている女の声ときれときれに聞える。そして、その声の合間、合間に、

「ああーッ！ うう……ううっ！」
と、のどをふりしぼるような呻

き声なのだ。

ユカリは起き上ると、八千代に貸してもらった浴衣の前をあわせ直して、そっと廊下に出た。はじめての家で勝手はわからなかったが、家中真暗な中で、ほんやり明

夜 (ひそかよ) 密

松井 籟子 著



「違う、好きじゃない！」

のどをしめられているような男の声は、まぎれもない楠瀬久男だった。

ユカリははっとして、すべるように廊下をすすんだ。廊下は折れ

た部屋の窓をあけて、はだしのまま庭へおりた。そして浴室のあたりへ廻っていったのだ。

浴室の窓硝子を透して中の光景がやっとユカリの目に入った時、思わず、

「あっ！」

と、声を出すところだった。

そこには久男が素裸のまま後手に縛られて、立たせられているのだ。後手に縛った縄のはしは、高くシャワーにくくりつけられている。シャワーの管は久男の重さをささえるには細すぎる。足はタイルの床についていたが、つまさきを立って、やっと、手を吊り上げられる苦痛から、少しでも逃れようと努力をしているようだった。

(官能のひだにひそむ情熱に憑かれて、しびれるような耽美陶酔の密夜にあえぐ特異な男女の姿を、奔放な筆に調べ高く描き尽した閨秀作家松井籟子女史の傑作集！

絶賛重版発売中！ 定価二〇〇円 送料二四円 あまとりあ社

血まみれ観音像

飯田 豊吉

山本 秀史・画

木枯しと落葉

旧曆十一月はじめの寒さであった。
屋根の上に冬曇りの空が鉛色に凍り、江戸の町々に、木枯しが音をたてて走っていた。
本所柳島から、法然寺前を横川橋に抜ける
通りで、押上の鐘が子の刻を告げた。
鐘は静寂をふるわせて、このあたり一帯の
墓地の上に鳴りひびく。

「待たれい」

低く、力のこもった声が、根津新八郎の背後に迫った。

「なにか、ご用でござるか」

呼びとめられて、根津新八郎は、暗闇の中に迫る黒い影に構えた。その影には血の匂いと、無気味な殺気がある。

「いま、ご貴殿が懷中にしまわれたふくさ包み、当方にお渡し願えまいか」

言葉はていねいだが、強引に鋭い。





包み?……

「ふくさ

「ぜひ、頂きたい。当方にと

「ということは、つまり、貴公、さきほどから、ここに居たということでごさるな。……いや、もう少しハッキリ言えば、この武家を斬ったのは、貴公ではないのかな」

新八郎の口もとに、皮肉な微笑が浮んでいる。新八郎の足もとには、年令の頃二十二、三とも思われる若侍が、肩からドツプリと血を流して、うつ伏せに倒れていた。

ここを通りかかった新八郎に、ふくさ包みを渡し、たのむ、という一言と同時に息が絶えたのだ。無念の形相は、殺されてもまだ、眼をカッと見ひらき、それが夜眼に光ってす

た。

黒い影が、冷やかにわらっ

い。

さまじ

「貴殿にかかわりのないことだ。その包みを拙者に渡してくれれば、すべてことは済む。邪魔をすると、今度は貴公の命が危い」

まんざら脅しとも思えぬ言葉。黒い影は音もなく一步進んで新八郎の前に立ちふさがり。新八郎もまだ年は若く、負けぬ気的好奇心が少しづつ湧いてくる。

「この侍を斬った時に、拙者の足音が聞えたのであわててかくれ、そして、このふくさ包みを拙者が手にした時に、再び現われた……ふっむ、貴公、辻斬りか」

黒い影に殺気が燃えた。

新八郎は身構えて、静かに言った。

「武士と見込んでお頼み申す……と言って、こと切れたこの武家に、拙者なんのゆかりも恩義もないが、浪人こそしておれ拙者も武士の端くれ……見込まれた以上、この包みは貴

公に渡せぬ」

その言葉が終らぬうち、ビュツという太刀風が、新八郎の耳もとをかすった。

「斬れッ！」

黒い影は一人ではなかった。

バラバラッと新八郎を取り囲む数五、六。

音もなく刀を抜くと、ヒタヒタと新八郎に迫る。玄那寺の屋根に木枯しが鳴る。落葉が吹き寄せられて渦を巻く。

無言で斬りこんでくる白刃を、手きびしく

ハネ返す。紫色の火花が、ガツと散る。のけぞる黒衣の男を、

「ええいッ」

パシッと峯うち。肩を打たれて悶絶する一人。

「手ごわい、油断するな、必ず斬れ！」

叱咤がとぶ。

背後から突きでる敵の刀を右にかわして、ダダッと前へ泳ぐところを、ピシリッと背を打ちのめす。

★柔い素肌にグイグイ喰い込む荒縄！ 必死に身悶えながらも美乃は口を開かなかった。

特集 裏窓忠臣蔵

「ぎえッ！」

とわめいて、闇に沈むまた一人。

白刃の円陣は一瞬くずれて、その隙に新八郎、飛鳥のように身をひるがえすと、夜の町を突ッ走った。

「追えッ、逃がすな」

首領とおぼしき影が、悲痛な叱声をあげて部下を励ます。

背後に斬りかかる刀を打ち払い、長居は面倒、新八郎は業平橋を疾風のように駆け渡った。

木枯しは橋の下にも冷たく鳴り、川面にさざ波をおこし、新八郎の姿はもう見えない。玄那寺の門前に、悶絶している二、三の黒衣の男に、クルクルと落葉がまといついた。

美乃の恋

「困った奴だ」

三村次郎左衛門は、新八郎の話を聴くと、にがい顔をして腕をこまぬいた。

「すまぬ、次郎左。どうも拙者、自分ながら血気にはやり過ぎるようだ」

「なにしろ、大望のある身だ。志を遂げるまでは、お前の身体であってお前の身体ではない。そこを、よくわきまえてくれな

ければ困る」

三十間堀の日暮し長屋の一端、新八郎の浪宅を訪ねた三村次郎左衛門は、自分より三つ年若の新八郎に、親友だからこそその強意見である。

二人の間には、昨夜新八郎が死に際の若侍から渡された、ふくき包みが置いてある。紫のふくきを開くと、中から身長五寸余りの観音像がでてきた。

「意味ありげな観音像だな。つまらぬ事件に捲きこまれぬうちに、川へでも捨ててしまいがいい」

「しかし、おれも、死に際の侍から頼まれた以上、このまま放っておけぬ氣もするのだが……」

「おれ達には、もっと大きな仕事があるはずだ。新八郎、太夫がいよいよ江戸へ出てこられる。今日はそのことを知らせにやってきたのだ」

「えッ、ご家老が……」

「すでに十月七日、京都を出ておられる。同行は潮田又之丞、近松勘六、菅谷半之丞、早水藤左衛門、それに若党の室井左六。内蔵之助様は、日野家人垣見五郎兵衛と変名されておられる由……」

新八郎の眼が、急に生き生きと輝きます。

「そうか。いよいよ太夫の心も、決ったのだな。ずい分、待ち遠しかった。一年半の苦勞とも、これでいよいよお別れだ」

「いや、太夫が江戸へ来られるといっても、すぐ吉良殿を討つことを実行に移すというわけではない。太夫のことだ、十分に仕度を整えるまで、これからも日時を稼ぐことである。はやまるでない」

次郎左衛門は、はやり勝ちな新八郎をなだめながらも、心の中では、この一徹な若さを愛していた。

赤穂の城で、内蔵之助をはじめ、一同殉死を決心し、その血判に名を連ねた者のうち、すでに十幾人かが同志の中から脱落している。行方不明になった者も居る。吉良屋敷を探るため、町人に身を変え、そのまま町人の生活の気楽さに馴れて、仇討の志を捨ててしまったものも居る。

たとえ武士であっても、この太平の世に主君のために命を捨てるといふことは、大変なことなのだ。次郎左衛門は、純粹に復讐一途の新八郎の心を愛し、さらに自分自身の勇氣をふるい起すのであった。

特集 藏臣忠窓裏

次郎左衛門が帰ったあとになって、隣家の娘美乃が、茶をいれて持ってきた。

「あら、お客さまはもうお帰りになられたのでございますか」

新八郎は顔をあげて、

「おお、美乃どの。お茶をいれてきて下さったのか。いつもすみません」

「そのような、他人行儀なことをおっしゃられるものではありません」

美乃はちよっと、恨めしげな眼で、新八郎

を見上げた。浪人こそしておれ、

侍の娘だけに、さすがに気品を保った艶やかさである。

（美しい！）と、新八郎は思った。

十七歳の美乃の若さが、新八郎にはまぶしい。つつましく身を包んだ着物の内側に、若い女の肉体が、匂いこぼれるようである。

武骨者の新八郎にも、毎日の美乃の好意は感じられる。

「彦右衛門殿のご病気の工合は如何ですか」

「はい……」

と、答えたまま、美乃は美しい瞳を曇らせた。長い浪々の生活

に、薬餌とて満足に買うことができず、美乃の父の服部彦右衛門の身体は、衰弱していくばかりであった。

美乃としても、この広い江戸に、病体の父のほかには、新八郎だけしか頼りになる者として居なかった。

「美乃どの。あなたも苦勞されますなあ……」

ふと、新八郎の心に哀れさが増して、美乃の肩に手をかけた。

まるい、やわらかい肩、この肩を抱きしめて慰めてやりたい。

しかし、新八郎はハッとして手をひいた。

（この恋を受けてはならない。おれは、やがて、命を捨てる身だ……）

新八郎は胸苦しさをおぼえ、美乃から離れて言った。

「拙者、ちよっとその辺まで散歩に行きます」

「ご散歩でございますか」

（散歩なら、一緒に……）と、美乃の眼が訴えたが、新八郎は、わざと冷い顔で外へでた。さびし気な美乃の顔をみると、さすがに新八郎の心は痛んだ。

（拙者もはやり、美乃どのが好きなのだ……ゆるして下さい……）

玄那寺の秘密

どこといって、あてのない新八郎の足は、いつのまにか、昨夜の横川橋筋の玄那寺の方向に向いていた。

（血まみれの死体がみつかつて、今頃は大騒ぎをしている頃だな）

新八郎のふところには、例のふくき包みの観音像が入っている。三村次郎左衛門の忠告を守り、これから川へでも投げ捨てようと思っている。

（どんな大事なものは知らぬが、おれも大きな秘密をもつ人間なのだ。どこへといって届け先もわからぬ観音像を、いつまでも持つてはいられぬ。頼みがいのない男を、ゆるしてくれよ……）

昨夜の若侍に、心の中で謝った。かげながら、若侍の成仏を祈りたかった。

しかし、玄那寺の前は、いつもと変らぬ静けさであった。

「ハテ？……」

（町方の者が検証取り調べで大騒ぎをしていると思ったのに……）

新八郎は、昨夜死体のあった場所を探した。落葉を足でかきわけると、たしかにその辺

りの土は、どつぷりと血を吸って黒ずんでいく。新八郎は凝然として、その黒い土をみつめていた。

「もし、お侍さま。何か落しものでも？」

ふり返ると、玄那寺の寺僧とおぼしき坊主が、不審げな顔で新八郎をみていた。

「いや、べつに……。昨夜この辺りで、侍が殺されたといううわさを聞いてきたのだが、その方ご存じあるまいか」

「さあ……そのような物騒なお話は、拙僧少しも知りませんでしたか……」

「さようか……」

（怪しい！）と、新八郎は直感した。

知らぬはずがない。新八郎は突差に思いついて、袖口から手を内にひくと、ふところから例のふくさ包みを、何気なくチラッと寺僧にみせた。キラリと僧の眼が光る。それを新八郎の鋭い眼が、すかさずとらえた。

次の瞬間、くるりと僧に背を向けると、新八郎は、ゆっくりとした足どりで歩きだしていった。

（次郎左の言葉にそむくようだが、この観音像を水葬にするのは、まだちょっと早いようだ）

玄那寺の僧は、しばらく新八郎の後姿を見

送っていたが、ふと思いついて寺門の中に消えた。やがて今度は、別の男が小腰をかめながら門から現れ、馴れた足どりで新八郎の後を尾行しはじめた。

その玄那寺の中、奥深い一室に――

死人とも思えるほど、青白い顔の男を中心に、車座になって何事かを語りあっている。金泥を塗った須弥壇の前の大ローソクが、ゆらゆらとゆれ、首領とおぼしき青白い顔の男を照らしていた。

と、そこへ一人の僧がとびこんできた。

「笠寺さま。わかりました。昨夜観音像を奪った侍がわかりました」

「なに！」

と、一団の武士たちに、たちまち殺気が生ずる。

「吉念、騒々しい、落着いて話せ」

首領の笠寺重内が一同をたしなめる。

「あの浪人者に違いありません。昨夜、この辺りで侍が殺されたといううわさだが、などと私にたずねました。昨夜の一件は私どもしか知らず、うわさにのぼるはずがないではありませんか」

「して、その浪人はどうした」

笠寺重内の声が鋭くなる。吉念は得意気に唇をなめながら、

「私が知らない、と答えますと、そうが、と言ってそのまま歩きだしましたが、その時、その浪人のふところから、チラリと見えたのは、確かにふくさ包み……。私はすぐさま、寺男の仙次に後をつけさせました。あの男なら間違いなく、やつに住家をつきとめてくるに違いありません」

「吉念、でかした。よくやった。あとでほうびをやるぞ」

笠寺重内の青い顔が、ニヤリとわらう。

迫る白刃

夜になると、また、木枯しが吹いた。

新八郎は、薄い夜具の襟もとをかき合わせ浅い眠りのうちに、低い長屋の屋根の上を渡る、ものさびしい風の音をきいていた。

新八郎は夢をみていた。

郷里、赤穂の風景であった。城の本丸に立って眺める広く明るい光りの空間、内海沿岸特有の乾いた空気、そして、ひろびろとした塩田が、その下にひろがっている。白い帯のように、うねっている能見川の流れ。ずっと地平の、うすいもやの中につらなる山脈のす

がた。……

それは新八郎にとって、涙のでるほどの、なつかしい故郷の風景であった。

……と、その時、長屋の外に、ひたひたと迫ってくる足音を、新八郎の鋭い神経は敏感にとらえた。浅い夢から、眼は閉じたまま、新八郎の意識は急激に緊張する。

吉良の手の者！……の直感がある。切迫感を秘めた足音は、五、六、七……木枯しにまぎれて、表と裏を取り囲む。

八軒長屋の端、逃げるに路なく、防ぐに分が悪い。新八郎は床の中で手早く身仕度すると、刀をひき寄せ、表の様子をうかがいながら、隣の壁を押した。軒を連ねた朽ち長屋。壁はボロボロとわけもなくずれ、人一人通る穴がすぐにあく。隣家は彦右衛門親娘。新八郎は身軽にその穴をくぐりぬける。

「あれエッ」

めざめた美乃の驚きの声。

「しッ！ 美乃どの、拙者だ、新八郎だ。曲者が外を取り囲んでいる。拙者大望のある身、いまここで奴らの相手はできないのだ。迷惑ではあるが、ここから逃がしていただきたい」

小声で手早く言うと、美乃も緊迫した気配

を察し、二人は闇の中で自然に手を探りあった。

あり合せの衣類をかけて、今ぬけでた穴をふさぐ。父親の彦右衛門は病氣疲れで、こんなと眠っている。部屋の中がブーンと葉くさい。

「ダダッ！」

と、新八郎の家の戸が蹴破られる。

「かかれッ！」

表と裏から、いっせいに刀を抜いて、新八郎の

寝床をめがけて斬りかかる。手ごたえがない。布団をはねのける。

「居ない！」



「居ない！ 逃げたッ！」

一瞬、あわてふためく黒衣の刺客たち。

「そんなはずはない！ 拙者が先刻より確かに見張っていたのだ。このせまい家だ、もつと探せ！」

これらの声が、壁一重の隣で、抱き合っている様子がかう新八郎と美乃に聞える。恐怖に高鳴る美乃の小さな胸。

「美乃どの、さらばじゃ。縁があつたら、いつかまた逢おう！」

「新八郎さまッ！」

思わず、美乃の声が高くなる。耳ざとくそれを聞いた刺客の一人が、境にあげた穴をみつける。

「ここだッ、ここから逃げたのだッ」

勢いこんで穴をぐりぬける一人を、新八郎はこちら側から、ズブリと突き刺す。

「むむうッ！」

穴から半身のりだしたままで、刺客は身体を折り曲げて倒れる。ちょうど、それが穴をふさいだ。

「美乃どの、夜分さわがして申しわけない。では、さらばじゃ」

新八郎はすりつく美乃を突き放すと、畳を蹴って立ち上る。戸を蹴破ると外へ逃れで

た。

「新八郎さまッ！」

騒がしい様子に、彦右衛門も眼をさますと、枕もとの刀を杖に、布団の上に起きなおった。

「何事じゃ、美乃」

「父上さま、曲者がッ」

その時、襲撃者の一団が、ドドッと美乃の部屋に乱入する。

「理不尽な。他人の家へ夜ふけに乱入。何事じゃ」

病軀とはいえ、武士の威厳。娘を背後にかばうと、言葉鋭く詰問。次の瞬間、血気にはやった一人の黒衣が、物をも言わず白刃をふりかぶると、彦右衛門の肩さきをざっくり。

「ううむ……」

血しぶきをあげ、もろくもくずれ倒れる彦右衛門。

「父上さまッ」

と、美乃は仰天して彦右衛門を抱く。

「岡崎、いたずらに人を斬るでない。それよりも、貴公はこの娘をひっ捕えて寺へ戻れ。何やら役に立ちそうだ。あとの者は奴を追うのだ。必ず斬れ！ 像をうばい返せ！」
冷やかな声は笠寺重内。鼻までかくした

黒覆面に、眼だけがわずかに光る。

岡崎甚兵衛、美乃の襟がみをぐいとひっつかんで抱き起すと、その脾腹を拳で一突き。ひとたまりもなく、美乃は失神してくずれ折れる。す早くその身体を肩にかつぎ上げた甚兵衛。

「では……」覆面の奥の眼がニヤリと笑う。

外へ逃れてた新八郎は、襲ってくる敵を斬り払いながら、神田川べりを突っ走る。

今夜の襲撃者の正体を、まだ新八郎は知らない。その執拗さが無気味だった。吉良上野介方の刺客でないことは、新八郎にも臍ろ氣にわかっていた。

すると……例の観音像をねらう一味か？……ならば何ゆえに、このように執拗にねらうのか？

「ええいッ！」

背後から斬りつける敵を、身をひねってかわし、弱腰になるところを、タツと蹴りつける。

ドブーン……と水音たてて一人が消える。その観音像は、いまでも新八郎のふところにある。床を脱けでるとき、無意識のうちにつかんでふところにねじこんでいた。

(妙な因縁だな……)

若い新八郎の胸に、強烈な好奇心が湧く。すきをねらって斬りかかる敵の足をサッと払う。敵の身体は見事に一回転すると、はずみをくらって神田川に自ら飛び込む。水音と共に水しぶきが夜眼に白い。

美乃危難

玄那寺の中堂――

須弥壇上の大仏像が、数本の大ローソクの炎に、あかあかと照らしだされている。

「柳影組の恥だ。屈辱だ。なんたるさま。こんな失態を重ねて、柳沢様に対しても、なんとも申しひらきがたたぬ……」

笠寺重内が眼をつぶったまま、低い声で自嘲する。

「申しわけございません。案外に手強い奴で……」

恐縮しているのは岡崎甚兵衛。中堂の床の上には、新八郎襲撃に失敗した五、六人の手負いの者が、苦悶の声をあげて傷の手当を受けている。血の匂いが、清浄なるべき寺の中堂に、ふんぷんとしている。

「岡崎、それで奴の居ところは、まだ突きとめられぬのか」

「名前だけは、女の口から、根津新八郎、と吐かせましたが、何しろ素浪人のことゆえ、確たる立ち廻り先もない様子で……」

「根津新八郎……」

重内は眼を閉じたまま、咽喉の奥でボソリとつぶやいた。

「そうだ、女が居たな。昨夜の様子では、新八郎と、まんざら他人同志の間柄とも思えぬ……」

「あの女を責めてみたら、新八郎の立ち廻り先も、あるいは?……」

「女を責めて男の居ところを吐かせるか。あまり立派な侍のやることではないな……しかし、やらずばなるまい。ことは急を要するのだ……」

「ははッ」

甚兵衛は中堂をひき退ると、やがて奥の間から、やつれ果てた美乃を曳きだしてきた。

うしろ手に縛られ、よろよろ歩く足どりも昨夜からの恐怖と、父を殺された悲しみにうちひしがれている。どさりと、甚兵衛は、美乃の身体を荷物のように床の上に投げだした。うつ伏せに倒れる美乃の哀れな姿。胸乳を下に、背にくくりあげられた両の手首が、なおも空にもがいて最後の抵抗をみせて

いる。手首をギリギリと縛った縄が、二の腕から胸へとまわり、乳房のあたりにグイグイと喰いこんでいた。

鬘もガックリと根がぬけ、乱れに乱れた黒髪が、海草のように床にうねっている。帯もゆるみ、はだけた着物の蔭から、胸や裾の青白い肌の色がすけてみえるのが痛々しかった。

「なかなか強情な女です。実は、今までも責めてみたのですが、どうしても新八郎の行方知らないと言っています」

「ふうむ……」

重内は、必死に眼を閉じている美乃の顔を眺めていたが、やがて刀をとると、そのこじりを美乃の頬にのせた。

「これ女。これ以上痛い眼に合わぬうちに、知っていることを、みんな言ってしまったほうが、よくはないかな」

言葉はやさしいが、重内の刀のこじりは、美乃の頬を、ぐりぐりと突き刺している。

「私、新八郎さまの行方など、ほんとうに知りません。また、もし

特集+裏窓忠臣蔵

知っていたとしても、あなた方には申しあげません。父の仇のあなた方になど、口が裂けても……」

美乃は、かなわぬまでも必死に言い返す。

「フフフ……。そうか。おれたちはそちにとつては親の仇か。しかし、もとはといえば、新八郎がそちの家に逃げこんだから、あのような結果をまねいたのだ。むしろ、お前の仇は新八郎。どうだ、新八郎はいま、どの辺にかくれている？　言え。言わぬか」

美乃を縛ってある縄と縄の間に、重内は刀を鞘ごとぐいと差しこんだ。やわらかい美乃の肌の、ちょうど腋の下あたりである。さしこんだまま、えぐるように力を入れて一ねじりした。刀の先端が美乃の肋骨のあたりを、ぐりぐりぐりと、えぐりつける。

「ひッ！」

美乃は、鋭い笛のような悲鳴をあげて、一瞬のけぞってもだえた。

髪がとけ散って宙を舞い、はだけた裾から悶えあえぐ処女の青いほどに白く美しい脚。

「なるほど、強情な女だな」

と、重内は手を休めてニタリとわらった。

「裸にむいて責めるか……」

その言葉に、美乃はぎょっとして眼をカッ

とひらいた。

「そのようなことをなされば、わたくし、舌を噛み切って死にます」

「ホホウ、けなげなことを言う娘だ。舌を噛み切れるものなら、噛んでみるがいい」

甚兵衛は美乃の身体の上へのしかかると、ぐいと咽喉をしめあげた。

「むむッ！」

と、苦しさに口をあけると、素早く汚れた手拭を押しこみ、さらにその上を別の手拭で猿ぐつわを噛ませた。

「むむうウウ……」

と、うめくだけで、もう美乃の声は完全にふさがれた。

「フフフ……。さア、これでも噛み切れるか。それッ、この女の着物をはぎとれ」

二、三人の男がとびかかると、美乃を縛った縄をいったん解き、その身体をぐるぐると床の上に回転させて帯をほどき、美乃の身につけているものすべてをむしりはいだ。

観音像の謎

「ふうむ……。この観音像が、そんな事件を捲き起すほどの謎を秘めた品なのか……」

腕組みして考えているのは、三町次郎左衛

門。その前に根津新八郎。ここは神田和泉橋の次郎左衛門の仮住居。表向きの名は、西国浪人、神戸彦十郎。あの夜半の襲撃を逃れた新八郎が、この次郎左の浪宅に身を寄せてから二日目。

次郎左衛門は、つと手をのばして、謎の観音像を手にとった。かしら……胴……台座と、綿密に点検をしていくうちに、ふとしたはずみに、足もとの台座が、かすかに動いた。不審に思った次郎左、やや力をこめてねじってみる。と、観音体と台座の間がねじ溝になっていて、上下を逆に回転すると、かすかなきしみをみせて、像の台座がはずれた。と、その中から、細く巻いた一通の書状が現れた。次郎左衛門、早速ひろげて読みはじめる。

「これだッ。この文をめくつての争いだ」

書状の中味は、しかし、なんの変哲もない恋状。つまり、男から女へあてた恋文。これがなぜ、幾人かの人命を失くしていったのであろう。疑問を感じた次郎左衛門が、しかし最後に記された花押をみた時、思わず、

「むむウ……」

と、声をもらした。

「新八郎、たいへんなものを預ったな。これ



そしてさらに、播州赤穂五万三千石、浅野家を、殿中松の廊下の事変にこと寄せて取りつぶしにさせた、かげの人間こ

いる。

数のうしろ暗い彼の政略を暗示して

身から、わずかの間に十五万石

の大名になった異例の出世は、数

落さんばかり。百六十石の小

出羽守は若年寄の上席、

將軍の寵臣として、いま柳

營における勢力は飛ぶ鳥を

だといふのか」

新八郎も驚いた。柳沢

「なにッ。すると

柳沢出羽守の恋文

だ

そ、彼柳沢出羽守であることは、新八郎も知

っていた。

「いま権勢を欲しいままにしている柳沢に

は、隠れた反対派がいる。殺された若侍は、

おそらくその反対派の手の者で、柳沢の恋状

を盗みだし、追手の者に討たれたのだ」

「しかし、いくらいま権勢を誇る柳沢の恋文

にしたところで、たかが他愛のない恋文にす

ぎない。反対派が盗みだしたところで、いつ

たい何になるというのだ」

「そこだ。まず第一に怪しいのは、このよう

な観音像に秘めて渡さねばならぬという、常

識にないものものしい連絡法。そして、この

相手の女だ。えい殿……と、あて名にある

が、この女の身分を推測すると、柳沢の身分

手の者が必死になって探索する値打はいくらでもある……」

「すると、おれの命をねらい、この恋文を手に入れるために暗躍している刺客たちは……」

「おそろく、柳影組だ」

「柳影組？」

「そうだ。柳沢出羽守の命を受けた腕ききの者が集っている。首領を笠寺重内。神崎与五郎が調べたところによれば、柳沢の地位と名誉欲のためには、手足の如く動き、いかなる悪虐をもあえて行うという殺人者どもだ。もちろん、公然の結社でなく、あくまでも秘密のなかに存在する。しかも、柳沢の命をうけて、内々は吉良の屋敷を守り、浅野浪士の復讐に備えているという。われら討入る際に、もっとも面倒な相手になるかもしれぬ」

「それが、一昨日の夜、おれの家に夜討ちをかけた奴らだな」

「新八郎。くれぐれも言っておくが、われらの首領、内蔵之助様の命令のない限り、決して奴らに対して無謀な真似はしないでくれ。この観音像が柳沢失脚の武器になると知ったいま、捨ててしまうのも早計、一応太夫に相談して、太夫の指示を待とう」

柳影組に対して、絶対に手をだすなと次郎

左衛門に言われたとき、新八郎の胸に、ふつと美乃の顔が浮んだ。

新八郎は今朝、三十間堀のあの日暮し長屋へ様子を探りに行った。近所の者に様子を聞くと、あの夜の柳影組のために病気の彦右衛門は斬り殺され、娘の美乃も彼らのために、どこへか連れ去られたという。新八郎はがく然とした。(すべてはおれの責任だ、おれの罪なのだ……)

新八郎の胸に、黒雲のように罪悪感がひろがる。美乃の危難を思うと、新八郎は不安と焦慮にジリジリと苛まれる。

心の苦しみをまぎらわすかのように、新八郎は冷えた茶をガブリと飲んだ。

腕をこまぬいたままの姿勢で、鎌倉河岸をゆっくりとした足どりで歩を運ぶ新八郎。極月十二日。本所松阪町吉良邸に、一年有余の忍苦を晴らす討入りの日は、いよいよ間近にせまった。

しかし、あれほど待ちに待った仇討の知らせも、なぜか新八郎の心を浮き立たせない。(おれは武士の本懐のために死んでもいい。しかし、罪のない美乃どの命はどうなるのか……)

あの乱暴な柳影組のことだ。美乃はおそろ

くひどい罵られかたをしているに違いない。しかし、大義の前には、そんな小さなことは忘れてしまえ、と次郎左はいう。たしかに、新八郎もそう思う。その主張は正しい。しかし、理屈では割りきれぬなにかが、新八郎の心を責めつける。

(おれは、美乃どのが好きなのだ、愛しているのだ……)

新八郎は、よく晴れあがった江戸の冬空を仰いだ。思えば、新八郎にとって美乃は、はじめの女だった。

主君の仇を討つ大望の身で、そのような浮わついた心はゆるさないのは、知っている。だからこそ、今まで美乃の好意を、そ知らぬふりで避けてきたのだ。だが、直接手にかかなかったとはいえ、美乃の父親を殺したのは自分であり、美乃までが捕われる原因をつくったのは自分である。

思えば思うほど耐えられなくなり、新八郎は、ふと目についた、一軒の居酒屋ののれんをくぐった。汚れた床几に腰をおろし、熱くした酒を、あおるように咽喉に流しこんだ。長い浪々の身で、思えば久しぶりの酒であった。

「珍らしいな根津新八郎。貴公とこんなとこ

特集 藏臣忠窓裏

ろで逢うなんて……」

名前を呼ばれてふり向くと、後の席に、同志の一人、小山田庄左衛門が、すでもう赤く酔った顔で盃を傾けていた。

「小山田か。また酔い痴れているな」

だらしなく酒に酔い痴れている庄左衛門をみると、新八郎はムラムラと怒りがこみあげてきた。

「小山田。片岡源五右衛門様がおっしゃっていた。貴公は、同志の資金を、片岡様の留守

中に手箱の中から盗みだしたというではないか」

「盗んだのではない。頂戴したのだ」

ろれつも怪しいほど酔っている

庄左衛門だった。

「醜い言いわけはするな。貴公の盗みを知っても片岡様は、貴公

が、いざという節には必ず参加し

てくれればよい、と、情あるお言

葉で皆をなだめておられた」

「新八郎……吉良殿を、首尾よく

討ち取ることができて、また、

しくじって討ち洩らし、かえって

同志の者全部が斬り殺されても

だ、とにかく、おれたちはやがて死ぬ……確

かに死ぬ……それが武士の意地だ。生き方だ……だけどなア新八郎。おれはそんな意地よ

りも、おれという一人の人間の、小さなしあわせを大切にしたい。おれには、好きな女がいるのだ。この広い江戸中で、おれだ

けを頼りに生きている可哀想な孤独な女が、いるのだ……おれだって、みごと主君の仇を討って、天晴れ浅野の侍よ、武士の鑑よ、

と、世間にもてはやされたい……しかし、おれは、もう、おいぼれた上野介一人を殺すよ

り、若い美しい女と一緒に、つつましく生き延びたくなったのだ……わかるか新八郎。わ

からないだろうなア、武骨一点張りの貴公ではなア……」

庄左衛門は、これだけをブツブツと言いつ

えると、台の上に酔いつぶれた。その酔い痴れた庄左衛門の眼尻から、一筋の涙が頬を伝

わって流れていた。

新八郎は、ふと胸をつかれる思いがした。

「小山田。風邪をひくぞ、そんなところで眠ると……」

新八郎は台の上に金を置くと立ち上った。

その時、新八郎の背に何者かの眼が鋭く注が

れているのを、新八郎は感じた。

のれんをわけて外にでる。ピュッと冷たい

風が新八郎の横顔を吹く。……おそらく、もう小山田は仇討に参加しないだろう。また一人、同志が減った。しかし、庄左衛門の言葉

は、妙に新八郎の胸にひっかかっていた。鋭い眼は、外にでてからも、新八郎の背中を追って光っていた。

（酒屋の中からつけられている！）

新八郎は、急に足を速めた。鎌倉河岸の材木置場まできて、ふいに材木のかげに身をかくす。尾行の男は、あわてて急ぎ足になった。

前を通り過ぎようとした時、すかさず、新八郎の手が、男の襟がみをぐいととらえる。

「あっ！」

「何故、拙者のあとをつけるのだ」

男の手を背中にねじあげる。「いてて……お放しなさって下さい。あつしはただの玄那寺からの使いの者で……」

「なに、玄那寺……」

新八郎は知らなかったが、この男、玄那寺から新八郎の長屋まで尾行し、夜の襲撃の手引をした、寺男の仙次である。

「実は、お美乃さんという人の使いで、手紙を頼まれたんで……どこに居るかわからない

貴方様を探すのに、江戸八百八町駆けずりま

わかりましたぜ」

新八郎が手をゆるめると、仙次はいそいでふところから一通の手紙をだした。新八郎に渡すと、仙次は脱兎の如く身をひるがえして逃げていった。

封を切る手も、もどかしく中味を読む新八郎。

「……観音像をもってくれば、私を助けてくれるとのごさいます。もし、十四日までに、使いの方があなた様をみつけることができれば、私は、本所松阪町の吉良様というお屋敷に、側女として、連れていかれます。新八郎さま。玄那寺に居る美乃より」

乱れた美乃の筆蹟。哀れに訴える美乃の顔が眼に浮かぶ。

（次郎左、ゆるしてくれ。おれはやはり美乃どのを救う。美乃どのの安否を確めてから、おれは同志たちと吉良を討つ！）

新八郎は、ふところの中の観音像を、かたく、握りしめた。本所横川橋玄那寺あたりの空をきつと睨むと、小走りに駆けだした。早くもたそがれる冬の町を、冷たい風が吹きぬける。

血闘玄那寺

「来たな、新八郎」

青白い顔を一層青白くさせて、柳影組の首領、笠寺重内が、ニヤリとわらった。手下の侍たちが、ひしひしと新八郎を取り巻く、玄那寺の本堂。本堂の柱には、日夜の責めに血の気を失った美乃が、着物こそ着せられてはいるが、いまなおうしろ手に縛られ、猿ぐつわをされたままの無惨な姿でくくりつけられている。

「では、観音像を頂戴しようか」

「その前に、美乃どのの縄を切れ。美乃どのをこちらに頂いてから、観音像を手渡そう」

「それも、もっとも。岡崎、女の縄をといてやれ」

長い間のいましめと猿ぐつわを解かれた美乃が、よろめきながら転がるように新八郎にすがりつく。

「新八郎さま。……」

あとは声もせず、涙だけ……

「美乃どの、すまなかつた、おゆるし下さい……」

新八郎も、ぐっと美乃を抱きしめる。

「さア、約束どおり、観音像を渡せ」

「よし……」

新八郎は、無雑作にふところからふくさ包

みの観音像をだすと、重内に投げる。

「たしかに。……だが新八郎、おぬし、この像の秘密は、まさか知るまいな」

「そんなものはしらぬ」

「それで安心……といたいだが、念のために貴公の命を頂戴したい」

新八郎をとり囲む侍たちが、その時いっせいに白刃を抜き放った。

「貴公らのやり口をみて、このことは予期していた。東軍流免許、根津新八郎が、ことをひかえての腕馴らし、拙者も、今夜は貴公らを斬る！」

「なに、東軍流？……播州赤穂城の家老、大石内蔵之助もたしか東軍流……ウフフ……そうか、新八郎、おぬし浅野の浪士だったのか……おもしろい、いずれは吉良方に、味方して、浅野の浪人どもと一戦を交えねばならぬ柳影組、そのてはじめの血祭りだ。それッ、かかれッ！」

左右から一時に斬りかかる敵を、身をひいてひきはすしさま、肩口に一刀！　びゅっとうなりを生じて新八郎の剣がひらめく。

血がとぶ。剣が鳴る。死闘数刻。柳影組の手負いの者が、ゴロゴロと、倒れている本堂に、新八郎と重内の対決が展開する。

返り血を浴び、疲れの増してきた新八郎を重内はシリッシリッと押してくる。次第に追いつめられていく新八郎。

「ウフフ……。ずい分世話をかけたが、いよいよ最後の時がきたようだな、新八郎」

重内の剣が、ずいッと前にのびる。引き退った新八郎、足もとの死体につまづいて、体がくずれる。その瞬間、重内のふりかぶった一刀が、新八郎の肩を斬った。

「うむッ！」

のけぞりさま、必死の力をふりしほった新八郎の刀が、重内の脇腹をぐさッと払う。

「ああッ！」

うめきをあげて、どっと倒れる重内。

「美乃、美乃どのッ！」

肩口からふきでる血をおさえながら、新八郎は叫んだ。

「新八郎さまッ」

昏倒する新八郎を、美乃はけなげにも抱き起すと、よろめく足を踏みしめ、踏みしめ、死臭血臭ふんぶんたる玄那寺を逃れ去る。

その時、この乱闘で倒れた大ローソクの灯が、須弥壇を焦し、火はやがて次々に燃えひろがって、本堂を赤く染めた。

時、元禄十五年十二月十二日。夕刻から降

りはじめた雪は、またたく間に江戸の町々を銀世界にしていた。髪に肩に降りそそぐ雪を払いながら、新八郎と美乃はよろめきながら逃れていく。

いち早く玄那寺の火事を知った火の見が、勇ましい半鐘の音をあげる。

カン、カン、カン……。雪降りしきる江戸の夜に、甲高い鐘が静寂を破って鳴り渡る。

両国橋のたもとで

「お氣がつかれましたか」

その声に新八郎が眼をあけると、眼の前のつばいに美乃の憂いに満ちた顔があった。起き上ろうとすると、肩口の傷がひどく痛む。

「ご無理でございます。やっと血がおさまりましたのに」

美乃があわてて、新八郎の身体を抱きしずめる。

「ここは、どこですか」

痛みに顔をしかめながら、新八郎が聞く。まわりに炭や薪などが積まれている、汚なくせまい小屋である。

「両国の橋のたもとでございます。一昨日の夜、二人でようようここまで逃げてきて、新八郎さまはひどい出血のために、橋の上にお

倒れになり、そのまま気を失ってしまわれた。雪を避けて、私があなた様のおからだを、この何やら知らぬ掛小屋にお連れ致しました。それから丸二日、あなた様はこんこんとお眠りになられ……」

「しまった！　すると、今日、今日は幾日であらうか！」

「十五日の朝方でござ……」

「しまった！……」

新八郎の眼から、ハラハラと涙が落ちた。

ついに、同志を裏切ったのだ！……

その時、群衆の歓呼の声を浴びながら、吉良上野介の首級をあげた、赤穂浪士四十七人が、大石内蔵之助良雄を先頭に、しずしずと隊伍をととのえ、両国橋にさしかかった。

その隊列の中に、三村次郎左衛門の晴れやかな顔があった。江戸の町民たちが、どっと賞めそやす歓声の中に、手をふって応えながら、次郎左衛門の顔に、ふと蔭が湧いた。根津新八郎の裏切りがさびしかった。

次郎左衛門は、新八郎が一人で玄那寺の柳影組に斬りこんだことを知らなかった。そして、柳影組のことごとくを倒し、自分も傷ついたことを知らなかった。もし、昨夜の討入りに、吉良方の応援に柳影組が、駆けつけた

女遊體髑 書覺密隠 第十一話



次号予告

島本春雄

★かき消すように見えなくなる遊女！そしてその★
★あとには気味の悪いどくろが置かれている！遊★
★里の巷吉原にまき起る奇怪な事件！次号掲載！★

ら、或いは今朝のこの晴れやかな成果が、どんな変化をもつて違った結末になるやも知れなかった。

と、哀れになった。

その新八郎は、同志の者と十間と離れていない橋のたもとに掛小屋に居た。

次郎左衛門は、討入りの夜、ついに姿をみせなかった新八郎を憎んだ。憎しみを過ぎる

赤穂義士四十七人の去った両国橋に、やがて朝日が雪に照り映えて輝いた。キラキラと

雪に反射して、新八郎の寝ている掛小屋の中にも、明るい光りの筋が射しこんできた。

傷の痛みを耐えながら、新八郎は、ふと、

小山田庄左衛門の言った、小さなしあわせ、つつましいしあわせを考えていた。

（すべて、武士としての望みは消えた。この傷がなおったら、美乃と一緒につつましく暮そう。……）

新八郎は、袂の中から血にまみれた一通の書状をとりだした。笠寺重内に観音像を渡すとき、ひそかに抜きとった柳沢出羽守の恋文だった。新八郎は、その手紙を静かにひき裂いた。不審な顔で見守る美乃の前で、手紙は粉々に破られた。

（浅野浪士、根津新八郎はもう死んでしまったのだ。もう、吉良上野介もなければ、柳沢出羽守もない……）

「美乃どの、これを川の中へ捨てて下さい」美乃は不審な顔で受けとると、その紙片を小屋の窓から、外に投げた。隅田川の川面に幾人かの命をうばい、歴史に残る武士のほまれをうばった恋文は、軒からこぼれ落ちる雪のように、ひらひらと舞い落ちる。

新八郎の両眼から、またハラハラと涙がこぼれた。

アラビアン・ナイト裏窓版

美しき奴隷ジェリスナア

海部陽三

◇

月流れ、星うつり去りし昔に、コオランダの国に、アリラザマンと云う、若く美しい商人が居た。その秀れた顔立と、屈指の富は、人々の羨望の的であった。

ある日、いつものように市場に出掛けたアリラザマンは、多勢の人がまるく環になつてたかつて居るのを見て、ふと足を留め、一体何事が始まったのかと思つて、近づいて行つた。近づいて見ると、商人や、仲買人や、買物の人々の環の中に、一人の優雅で美しい、白人の女奴隷

が立っていた。背は高からず、低からず、肌は大理石のように白く、見事にふくらんだ胸や、悩ましくゆれる腰は、殊に素晴らしかった。その美しさは、詩人ならこのように云うだろう。

「肌は絹よりも柔らかく、声は清水より澄みて美しく。」

我が胸を攪き乱すその瞳その眼差し。唇の赤き薔薇のかんばせ、夜ふけて思えば心は乱る。」

アリラザマンはこの美しい娘を見て、吸い込まれるように人垣の中にまぎれ込

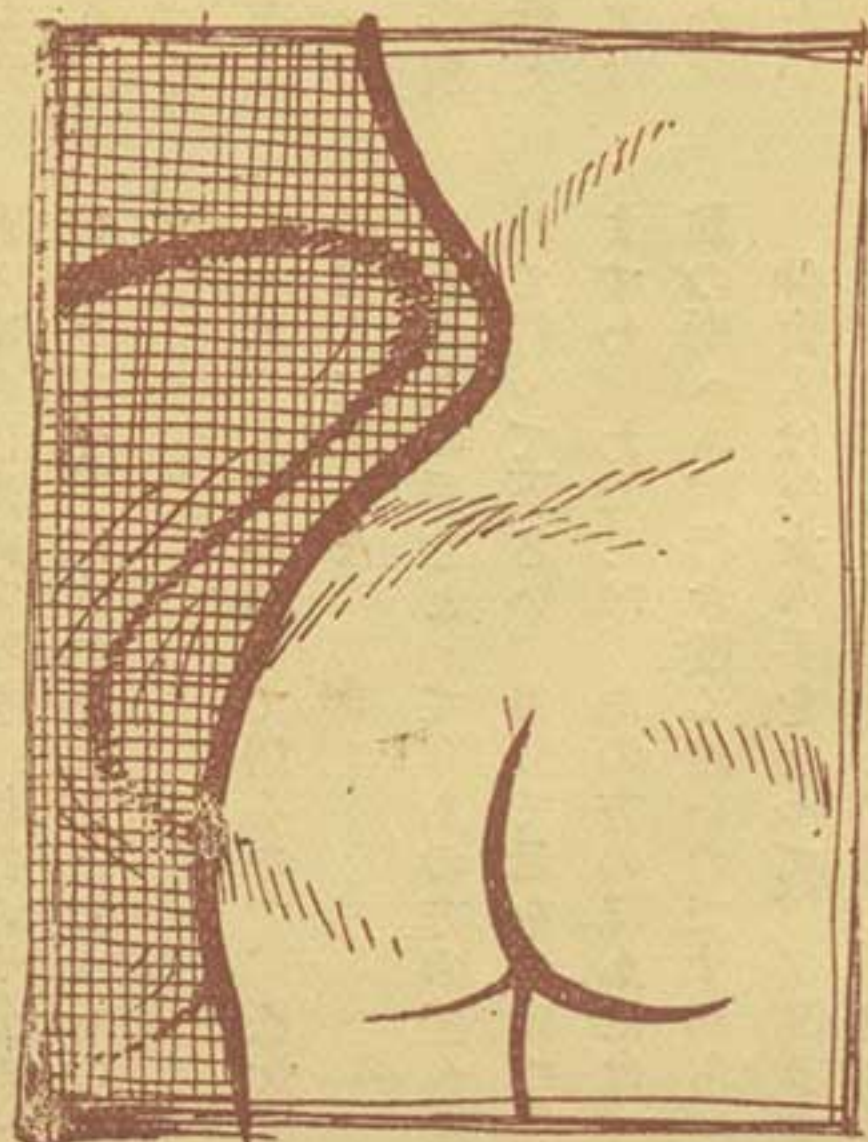
んで行つた。間もなく、仲買人がこの女奴隷の横にやって来て、声高に叫んだ。

「さあさあ、ここに御見せ致しまするは月の世の女王、宝石の中の宝石、花の中の花、純潔無垢の処女、ジェリスナア！さあ、競買はじめじゃ！」

たちまち、商人達の中から声が上る。「五百デイナー！」

又別の声が、「五百十！」

すると、醜く汚らしい、ガサリデインと云う老人が、



「六百デイナー！」

と、しわがれ声を張り上げた。すると又別な声が、

「六百十デイナー！」

汚い老人は目を剝いて一挙に値を釣り上げた。

「一千デイナー！」

すると人々は口をつぐんで、黙り込んでしまった。そこで仲買人は、奴隷の持主の処へ行って、それで良いかどうか尋ねた。持主は、

「わしは良いが、その前に、この奴隷にそれで良いかどうか確かめねばならん。と云うのは、彼女の氣に入った相手でないければ、売り渡さんと約束して居るのでな」

そこで仲買人は、美しいジェリスナアの傍に行つて訊ねた。

「おお、美しいジェリスナアよ、あなたは、このおやさしい長老、ガサリデインさんのものになりますか？」

彼女は、その老人にちらと目を走らせて、慌てて首を振つて云つた。

「わたしは、あんな御年寄は大嫌いです

の」

群集は喜んでドツとばかりに、ガサリデインを冷かしたので、老人は皺だらけの顔を赤黒く染めて、こそそこそと引き下つてしまった。そこで仲買人は買手の人垣に向つて、先の値で買う人が他に無いか、訊ねた。しかし、第二番、第三番の買手も、彼女の氣に入らず落第してしまひ、さてと名のりを上げる人が無くなつたので、仲買人は娘に云つた。

「さあ、それでは、ここに集まつた方々を御覧になり、氣に入つた方を捜して下さい。そうすれば、その方にあなたを売り渡すようにわたしが骨折りましょう。」

この言葉に、美しい乙女は顔を上げると、立会の人々を一人一人見渡し、遂にその視線が、若い商人、アリラザマンの上でぴたりと止つた。この若い男の容貌が、一目で彼女の肉体に、恋の焰を燃え上らせたのだつた。若いジェリスナアは急いで彼を指さして、仲買人に囁いた。

「あの方、ほらあの方に買って頂きたいわ、あの方となら楽しくやうて行けると思いますの、詩人がこんな風に云つて居

るのは、きつとあの方の事ですわ。

『ああ、愛しき若者よ！ わが心君に引かる。そのやさしき物腰こそ、情こまやかに、心すぐれたるしるし。』

君の瞳の甘く。その眼差しはわれを夢みさす。』

仲買人は娘の指差した、アリラザマンに近づき、深く一礼し、手に接吻して云つた。

「おお、若殿、あなたは実に素晴らしい機会に恵まれました。いくら欲しいと云う人が何万デイナー積んでも、手に入る事の出来ぬ宝物を、値打の十分の一の安さで御手に入れられると云うものです。」

それでも彼が黙つて居るので、乙女は仲買人に云つた。

「わたしの手をとつて、あの方の傍へ連れて行つて下さい。自分で話をつけて見ますわ。わたしは、あの方のほかには、誰の所へも、行き度く無いのですから。」

仲買人は彼女の手をとつて、アリラザマンの所へ連れて行つた。美しい娘は若者の前に立つて云つた。

「わたしの大好きな若殿、私のからだをこのように燃え上らせたお方、どうしてお買ひにならないのでしょうか、それにどうして、値をお付けにならないのです。値段などは、いくらでも構いません。わたしはあなたの奴隷になり度いのです。ええ、ただそれだけですわ。」

彼女は悩ましい眼差しでアリラザマンを見つめ、やさしい身振りで、若い商人の心を操ったので、とうとう彼は財布から一千ディナールを取り出し、彼女のお尻を軽く叩き、外被で美しい奴隷の身体を包み、片手でその腰を抱いた。これが手打のしるしで、市場は閉じられ、アリラザマンは月の世の女王、ジェリスナアを連れて、我が家に帰り、美しい部屋を彼女に与えた。

その夜、乙女は恋しい若殿を待ちあぐね、窓にはの白い朝日が差し込むまで、まんじりとしなかった。だがその若殿は何と、他の事に気を取られて、可哀想に彼女の中をすっかり忘れてしまつて居たのだった。

一方、ガサリデインのハレムでは、大

さわぎが持ち上つて居た、市場で恥をかかれた老人がブリブリしながら帰つて来ると、御氣に入りの女奴隷が御出迎に出で居なかった。丁度、ゆあみの最中だったのだが、これが老人の怒りに油をそいでしまったのだ。足音も荒々しくハレムに入つて行くと、怒鳴り散らした。「怪しからん奴じゃ、ここへ引ずつて参れ！」

湯上りの頬を美しく染めた女奴隷が、急いで部屋に帰つて来たが、ガサリデインの怒りは一向に納まりそうもなかった。

「この女を抑えつけろ！」

奴隷達がよつてたかつて、彼女を床に押倒して手足を抑えつけると、このいやらしい老人は、鞭を持って、女奴隷のカルソンを剝取り、まるく美しいお尻を、むごたらしく打ち出した。

「あつ、御主人様、御許しを……」

一撃毎に白いお尻の上に赤い筋を走らせながら、彼女は叫んだ。彼は腕が云う事をきかなくなるまで打ち続けた後で命じた。

「そんなにゆあみが好きなら、いやと云う程漬けてやれ！」

手取り足取り浴室に引きずられて行つた、憐れな女奴隷は大きな浴槽の中に頭からつっ込まれ、海豚のように、白いお腹を転々させて、身悶えた。必死になつて這い上ろうとする度に、頭ごと又水中につき戻され、又したたか水を飲まされるのだった。さんさん苦しんだあげく引きずり出された女奴隷の耳に、残酷な主人の声が聴えた。

「この女を地下室に連れて行け、食い物も、飲み物もやってはならぬ。」

今度は、何の罪もない年若い女奴隷を柱に縛りつけ、たくましい男奴隷に、血が流れる程、背中を打ち叩かせ、それに飽きると、又別の娘に、次ぎ次ぎと酷しい仕置を加えたので、彼女達の苦しげな呻き声や、悲しい泣き声が、いつまでも続いて居た。

◇

さて、それから幾日か経つた或る日の事、アリラザマンは、あの汚らしい老人ガサリデインの邸に、取引を兼ねて、招

待された。この日、忌わしい老人はいつになく上機嫌で若い商人、アリラザマンに、大へん有利な取引を申し出て、彼を喜ばせた。酒がまわり、宴席も終りに近づいた時、老人は切り出した。

「あなたは、実に素晴らしい宝物を手に入れた。本当に私は羨ましい。」

若い商人は首をかしげた。

「何の事でございましょう。宝石にしろ何にしろ、長老こそ、素晴らしいものをそれこそ私の何倍も、御持ちではございませんか。」

「いやいや、そのようなものは、金さえ出せば、いくらでも手に入ります。私が宝と申し上げたのは、金では手に入らぬもの、それ、いつぞや若殿が、市場で手に入れた、女奴隷の事ですじゃ。」

そう云われて、アリラザマンは先日 of 事を思い出した。

「そうそう、そう云われて、思い出しました。ジェリスナアの事でございますか。そう云えば、長老は、ひどく御熱心に値を附けて居られましたな。」

「それぞれ、その事です。年甲斐も無くお恥かしい次第。」

老人はそう云って、好色な目を光らせた。この若者は、ひどく気前が良く、又心も広い男だったので、老人を気の毒に思い、今日の取引が、何千デイナーも儲かる事を考え合せ、取引の謝礼に、あの奴隷を差し上げようと申し出た。

「いやいや、それは駄目ですじゃ。あの奴隷は、自分の気に入った相手が無ければ、持ち物にならんと、申して居りました。」

「あの時は、確か、そんな事も申して居りましたが、私が買いました時には、そんな約束は致しませんでした。それに、私は忙がしさにまぎれて、まだ手を付けてありません。帰り次第、早速御届け申し上げましょう。」

この若者の言葉に、老人は醜い顔を、喜びで尙醜く引きつらせ、もしそうして呉れたらば、今日の取引の三倍の品物を同じ値で売り渡すと約束をした。

アリラザマンは邸に帰ると、早速ジェリスナアの部屋をおとすれた。こんな事

とは露知らず、恋の焰に身を焼きながら毎夜、愛しいアリラザマンの面影を夢に描いて、悩んで居た美しい乙女は、その花のような顔をほころばせた。

「ああ、恋しいお方、どうして、私を御忘れになりましたの、あなたの可愛想な奴隷が、夜毎流した涙で、ほれ、あのように枕も色あせてしまいました。ああ、私を抱いて、この燃える焰を、早くあなたの御力で、しずめて下さい。ああ、早く……。」

そう云いながら、彼女は恋しい男の胸に身を投げかけた。心やさしいアリラザマンは、一寸言いよどんだが、約束を破る事も出来ず、柔らかな彼女の髪を静かに撫でながら、こう云い出した。

「おお、ジェリスナア、お前は私の願いを聴いて呉れるか？」

「どうして、そんな事を御訊ねになりますの。私はあなた様の奴隷、どんな事でも、御云いつけにはそむきませんわ。」

乙女はアリラザマンの胸に顔をうずめて、答えた。商人は言葉を続けた。

「それを聴いて、安心した。実はお前を

ある方に、差し上げる事にしたのだ。」

美しい奴隷は、はっと飛び下り、驚きの目を見張った。

「ああ、それは……。」

「ガサリデインと云う親切な御老人だ。」

彼女は過ぐる日、市場で見た、あの汚らしい老人を、まさまざと思い出し、見る見る大きな眼に涙を浮べた。

「いや、いやです。あんな汚らしい老人などと、どうか、それだけは勘忍して、どんな辛い、いやしい御仕事でも致しますから、あなたのお傍へ置いて下さい。どうぞ、あの毒蛇よりもいやらしい方に私を御渡しにならないで下さい。」

彼女の嘆願を、いささか迷惑そうに眺めて居たアリラザマンは云った。

「どうして、そのようにききわけの無い事を云う。わたしはお前を買う時、何の条件も附けなかったぞ。」

美しいジェリスナアはこの冷たい言葉に、ばったりと床に身を投げて、激しくすすり泣き出した。アリラザマンは、彼女の背が風に吹かれる木の葉のように慄えるのを眺めて居たが、

「バキアブ！」

と召使の名を呼んだ。たちまち、大きな、黒ん坊のバキアブがのっそりと顔を出した。

「御主人様、何か御用で御座居ますか」

「この女をガサリデイン長老の所へ連れて行け。」

この声にジェリスナアは、涙に濡れた顔を上げた。

「いやいや、どうしても嫌です。もしあの老人へ御渡しになっても、云う事なんか聴きません。私はいつまでも、あなた様のものですから……。」

このような言葉が、奴隷の口から出た事に若いアリラザマンは驚いた。

「何と云う事を……、バキアブ、さっさと連れて行け！」

バキアブは、床に倒れたジェリスナアを抱き起し、身をくねらせ、手足をばたつかせるのを、いとも軽々と小脇にかかえると、さっさと部屋から出て行った。だんだん小さく、遠ざかって行く泣き声を聴きながら、若い商人は、ふと、何か取り返しのかぬ事をしたような淋しさに襲われた。

◇

一方、ガサリデインは大喜びで、家の一番奥まった部屋に、ジェリスナアを連れて来させ、美しい乙女の手を取って云うのだった。

「おお、美しいジェリスナア、とうとうわしのものになったな。さあ、今日からわしの言う事を良く聴くのだぞ。夜になったら、わしの腕の中で、十分に楽しませて呉れるのだぞ。」

美しい娘は、満面に嫌悪の色をただよわせて、手を振り払った。

「おお、アラーにかけて、そんな事は出来ません。わたしはあなたなぞ大嫌いです。あなた程、嫌な奴では無いけれど、年寄の詩人がこんな云って居ります。『われ、娘に接吻を願いしに、たちまちその眼は嫌悪に満つ。』

わが富も、名声も、その心を動かす事無く、唇より次の言の葉洩れぬ。

白き毛は、われを喜ばす事無し。わが唇の間に湿りたる棉毛を入れるは悲し。これを聴いて高慢な老人は激怒した。

「何を云う。主人に向つて無礼な奴だ。」
汚らしい老人は、慄える骨ばった手で乙女のカルソンの紐を手荒く引き千切つた。彼女は、はっと身を固くしながら、それでも言葉を続けた。

「その紐は解けても、私の心の紐は解けません。暴力を振って、牡山羊が牝山羊にとびかかるように、私の身体は自由に出来ても、心まで従える事は、絶対に出来ません。」

老人は醜い顔をゆがめて、娘をそこへ突き倒し、カルソンを剥ぎ取ると、爪を長々と伸した指で、美しい乙女の肌をつねり始めるのだった。しかし、どのようなつねられても、捻じ上げられても、ジェリスナアの身体は氷のように冷たかった。いやらしい老人は、息を切らせて、憐れな女奴隷を睨みつけた。

「何と云う小娘だ。よし、お前こそ、その猫のような強情さを、叩き直してくれ。」

たくましい男の奴隷達が呼び込まれ、か弱いジェリスナアの胴に太い鎖が巻きつけられた。身体が二つに切れる程、締

め上げられても、娘は老人を罵り続けた。激しく裸身を鞭打たれても、逆吊りにされた身体を棒で突きまわされても、可哀想な乙女は苦しさに肌を慄わせ、哀れな泣き声を上げながらも、恋しいアリラザマンの名を口走って、益々老人を怒らせるのだった。何時間も息も絶え絶えに責め抜かれた娘は傷ついた身体を、今度は真暗な地下室の、ざらざらと荒い石の床の上に投げ出されたまま、夜を明かすのだった。憐れなジェリスナアは、恋しい若殿の名を呼びながら、再び彼のもとに帰れるように、心をこめて、アラアの神に祈り続けた。

丁度その時、その若い商人は寝台の上で、冷汗をびっしょりかいて、眼を覚ました。血まみれになったジェリスナアが援けを求めて、自分の名を呼び続ける恐ろしい夢を見たのだった。

「もしかしたら、あの娘はガサリデインの云う事を聴かないため、何か折檻でもされたのでは無かろうか……」

そう思うと、急に彼女が愛おしく、老人に呉れてしまったのが、大変残念にな

り出した。朝になるのを待ち兼ねて、若い商人は、奴隷の一人に命じて、ガサリデインの邸へ行つてジェリスナアの事を探らせた。

「それは恐ろしい事でござえます。」
帰つて来た奴隷は息を切らせて報告した。

「ジェリスナア様は長老様のおっしゃる事をお聴きにならねえので、ひどい御仕置をされたそうでござえます。何でも、今朝も奥の御部屋から、ジェリスナア様のひどくお泣きになる声が聴えるちゅうて、皆青い顔をして居りますだ。」

若い商人は自分の見た夢が正夢だったので、さっと美しい顔を曇らせた。ガサリデインが奴隷を乱暴に取扱うと云う話は知らないでも無かったが、まさか、あの美しいジェリスナア迄、手荒にすると思つても居なかつた。

「それは可哀想な事をした。何とか頼み込んで、返してもらうように話をして見よう。」

若いアリラザマンは取るものも取りあえずに、老人の邸に出掛けて行つた。

「何、あの奴隷を返せと云われるのか？」

汚らしい老人は、昨日とは打って変わった、恐ろしい顔で、噛みつくように云うのだった。

「そんな、そんな事は出来ません。若殿、一度頂戴したものは、どこまでもこの私のものですじや。」

「勿論、それはその通りで御座居ます。ですから、如何程でも結構です。御申附の値で、買い戻し度いと存じます。又、場合によっては、昨日の取引を解除致してもよろしゅうございます。」

アリラザマンは、老人の顔を伺った。

「いや、何万デイナー出されても、あの奴隷はお渡し出来ん。取引を破約されると云うなら尙結構じや、だが、絶対にあの奴隷はお返し出来ん。」

取り附く島も無い老人の言葉に、若者は諦めて、家に戻ると、頭をかかえ込んでしまった。そのほとほと困惑した主人の様子を見兼ねた、黒ん坊のバキアブがそつと耳元で囁いた。

「御主人様、そんなに御心配なさらない

でも、長老様の奴隷達に、少し金を呉れてやれば、ジェリスナア様を御連れするのを、見て見ぬ振りさせる事も出来ると思いますが、如何でしょう。」

それを聴いて、若いアリラザマンの顔に生氣が戻った。

「バキアブ、よい所に気が附いて呉れたし、すっかり計画を立てて、必ず成功して呉れ。頼むぞ。」

◇

ガサリデインの奥の部屋からは、美しいジェリスナアの悲鳴と歔泣が交互に引きも切らずに、痛々しく洩れて居た。早朝、両腕をかかえられて、連れ込まれてから、夕闇の色濃くただよう今の今まで老人が、来訪した客のため部屋から出て行ったその間も、責め続けられて居る様子だった。始めは、柔肌に鳴る恐ろしい鞭の音と、絹を裂くような悲鳴が交互して居たが、次ぎは、何処をどのように責められて居るのか、低い呻き声が、痛ましく長い事続いた。やがて激しく鎖の鳴る音と共に、今度は今にも死にそうな、凄まじい絶叫が、何度も何度も繰り返さ

れ、次ぎは、泣き声とも、笑い声ともつかぬ奇妙な声が延々と続いた。ぱったり悲鳴が止むと、今度は老人が何やらぼそぼそと呟く低い声が聞えるのだった。

「どうじゃ、ジェリスナア、もう性根が直ったか？」

豪華な寝台の上に、四肢を張られたジェリスナアは、美しい顔を涙で濡らし、その見事な胸でせわしく息づいて居た。老人は傍から小さな壺を取り上げると、その中のどろどろした黒い液を、娘のしつかり握った手首にぼたりと落した。

「うっ、うっ……」

彼女は顔をしかめて、息をつめた。どう云う薬なのか、すぐに娘の指がひくひくと逦々し、やがて、わなわたと全身に戦慄が走り、じつとりと浮いた脂汗が、たらりと白い肌を流れた。

「あつ、熱い、熱い。く、苦しい、た、助けて、……アリラザマン様……」

老人は醜く顔をゆがめて、今度はふくらんだお腹の上に、その忌むべき液をとりと流すのだった。可哀想なジェリスナアは、縛られた手足をふるわせ、悩ま

しく身体を波打たせて、恐ろしい悲鳴を細く白い喉の奥から絞り出した。

「どうじゃ、わしのものになるか？」

「だ、誰が、け、穢らわしい……」

次ぎにはもつと思わしい責具が、か弱い乙女の肌を虐んだ。娘は全身をふるわせ、ぎりぎり歯を噛み鳴らした。……

その頃、同じ床続きの台所では、黒ん坊のバキアブの手から、何枚かの金貨がガサリデインの奴隷達の手に渡されて居た。

「それじゃ承知だね、地下室に入れられたら教えて呉れ、いや、わしが一人で背負って行く。皆、見ぬ振りをして居て呉れれば良い。ただ帰りつく頃まで、爺に云うじゃないぞ。」

バキアブの声に、奴隷達は合点した。

すっかり日の暮れた空に燦めく星を見上げて、バキアブは大きな溜息をした。間もなく、一人の女奴隷が走り出て来ると小声でジェリスナアが、地下室に戻された事を告げた。

地下室の扉の処には老人が立ちほだか

って、床にくずれおれた娘を、憎々しげに見おろして居た。

「何と強情な娘じゃ、せいぜい恋しい男の夢でも見て置くが良い。明日は嫌でも応でも、わしのものにして呉れる。今夜一晩だけ、純潔無垢の処女の夢でも見て置け……。ふん、純潔無垢の処女、ジェリスナアか、とんだ手をやかせる牝山羊じゃ。」

そう云い捨てると、老人は荒々しく立去って行った。急に真暗になった床の上で、彼女の唇からこんな悲しい詩人の言葉が洩れるのだった。

「愁いは数々重なりて、愛は二つに裂かれたり。苦しみの荷は背に重く、眠り無き夜に涸れ果てし、心に重くのしかかる。」

主なる神、神にして未だわれを助くる手だて無きや？

急ぎ来りて、助け給え、衰え果てし身体より、命の息の絶えぬ間に……」

どの位経ったのか、打ちひしがれて、床に転がったジェリスナアの耳に、静かに静かに階段を降りて来る足音が聞こえ

やがて、扉がそろそろと軋んで開いた。「ジェリスナア様お迎えに上りました。バキアブでございます。」

よろよろと立ち上った娘は、力無く再び床に打ち倒れた。バキアブはそっと彼女を抱えて、音を立てぬように気を配りながら階段をのぼり、台所口から暗い表へ抜けると、夜道を一散に、走った。

美しきジェリスナアはその夜、恋しいアリラザマンの腕の中で、思わしい折檻の痛みも忘れて、歓喜に身を慄わせた。

「おお、若き処女の花咲く時、

我が魂を高鳴らす。

月の光と露に養われし薔薇咲き笑む時我が心を酔わす。

汝の唇よ、愛するものよ、

花咲く汝の美しさ、

我を狂わせ、万ずのものは消失す。」

月の世の女王をきつく抱きしめた、若いアリラザマンの横顔に月光が美しく映えていた。アラアの神よ、とこしえに二人の若者を守り給え！ 喜びと幸のすべてを与え給え！

未発表

原稿の

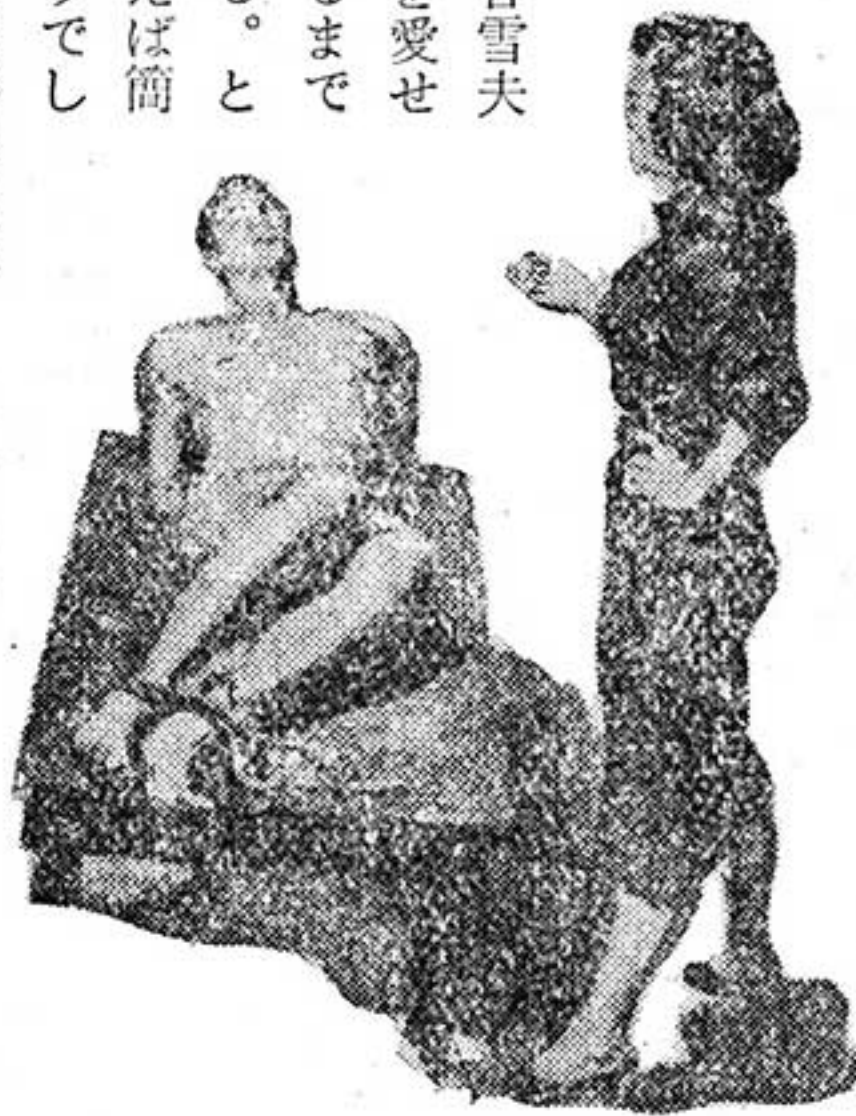
中から

○或る男の告白 水谷雪夫

逞ましい青年が男を愛せずには居られなくなるまでの過程が描かれている。と一言で片付けてしまえば簡単なもののように思うでしょうが、さにあらず。内容は小説的で面白いです。脂切った男に対する復讐のようなくだりもあって告白体のものにありがちな退屈さがないのがよろしい。しかし、随所に凄い場面が出て来て、ギョツとなる。例えばクロクロの場面など。題材は特異性がありますので惜しいのですが……。

○背徳の文学 島田 京

文学と云う程のものでもないでしょうが、尤も、内容に「黒い日本」と云う謎の雑誌が登場します



し、作家や編集者が活躍して、最後にその主人公の探偵小説家が記者に渡す原稿が背徳の文学第一号なので、作者はこんな題名をつけたのでしょう。スリラー仕立のミステリーで佳篇だと思います。閉じこめられた部屋の中で、主人公の見ている前で、街で逢ったばかりの美しい娘が裸にされ、ベッドの上に縛りつけられて、謎の女に責められるくだりがあります。そして、それが、写真となって「黒い日本」誌のグラビアを飾る

ことになるのです。ただ、残念なことに全般的に、枚数の割合にストオリイが混み入っていますのでもつと処理を簡単にして貰えると掲載出来たのですが……。

○モデルと女教師 潮 日出三

○待ち伏せした女学生 潮日出三
二篇とも軽妙な短篇です。洋裁学校のモデルが、裸にされるのを怒って、反対に教師を裸にしてしまふ話。教師と云っても女ですがこれが、よってたかつて羞しい姿にされるのです。女学生ものの方も、仲の悪い同志が古ぼけた炭小屋の中でもつれあい、闘う場面があります。内容は非常に面白いのですから、ストオリイをつけて、もう少し長くまとめて戴けますといいのですが……。

○妖しい蜃気楼 市川雪路

旅廻りの女形役者が、兵隊になつていろいろとナニかする話。

○アポロの少年 砧魔砂男

アポロと云うのは、青線街の中にある酒場の名前です。この店へ来る女嫌いの客達は、その度毎にある種のスリルを味わわねばならなかった——と云う書き出しで、ホモの愛慾描写が連なっています。陶然とした雰囲気。作者もたのしみながら書いている、と云った作品。

○白い炎 河野春雄

これはうまい。クライマックスシーンを、どうやって醜化すれば活字になるかと何度も読んで苦心してみました。こう云う作品は、その点がムツカシイのでしょう。内容も非常にキレイで、ホモをあつかった原稿の中での白眉です。そんな特集でもやるときは、これを第一に入れます。(アドレスを御連絡下さい)
○その他「正常という名の異常」「アパートの女達」等、二十数篇の佳作がありました。

逢魔娘

島本春雄

中島喜美・画



一、錢と守袋

下谷稻荷――

千鶴は手を合せて無心であった。

――もう二十日も続いている。貧しい十年浪人の父と娘であり、その父に病みつかれては、もちろん医薬の十分な手当など思いもよらず、頼むは、神仏の加護のみである。

で――

千鶴はこうして、近くの稻荷堂に、平癒祈願の朝詣りを続けているのだ。

寅の刻に起きる。

それから寅の下刻まで、一切の妄念を払い無心に祈る。

早朝ではあり、また昼間でも余り人気のない場所でもあって、この二十日間、真摯な千鶴の祈念

を妨げる者は一人もなかった。

が――

さて、この朝である。

辺りはまだ暗く、いつもと同じで、人の気配は更になかったし、千鶴も無心に祈念をこめていたのであったが……

「――!?」

フトその無心の鏡に、何やら異様な影がさした。

――運命変転の一瞬である。

「血？」

無心の心を乱したのは、血――の臭気であった。

千鶴は眉間を皺めた。

こんな所で血の匂いは不審であり、――はて、どこから来るのか、何の血であろう……われ知らず、自然にその正体を求める心になっていたのだ。

縞木綿の袴。間夫結びにした黒縹子の鯨帯――素足に日和下駄……

貧しくはあっても、汚れを見せぬ清潔さは、着衣ばかりでなく、紅も白粉もつけぬ、それでいて抜けるように色の白い肌の清浄さにも現れている。

千鶴は、そういう娘であった。

「――!」

わかった。血臭は、祠堂の中から来る。千鶴は歩み寄って、狐格子を開いた。

暗い。

――が、血臭はいよいよ強く、そして今は、明らかに人血の匂いとわかる。

「う――う……う」

足もとで、呻く者があった。

「あ!」

見ると、旅装束のヤクザ風で、しかし振り分け荷物は見当らず、縞の合羽が肩先から裂けて、べったり血に染んでいる。

深傷――

と千鶴は見た。浪人とはいえ、武士の娘である。しかも……

(風態は旅鳥でも、面擦れの跡が歴然とあるし、苦悶に突っ張った手に、竹刀胼胝が……)

だから、これは侍なのだ。――と見抜いてしまった。

「――む、娘御……」

手負男が、必死の声をふり絞って呼びかける。

「はい」

千鶴は、堂床に両膝ついて、男の口へ耳を寄せた。深傷で、もう瀕死、医者も手当も無駄とわかっている。――とすれば、辞世の一言……これをしかと聞き取ってやるほか、テはない訳である。

「――頼む」

唇がふるえ、声が咽喉に絡み、消えるような一言であった。

「え？」

男の足のうらをなめようとひしめく裸女の群! ゆらめく妖煙にのたうつ逆さ吊りの美女の生死は?

千鶴は狼狽した。——頼む、と言。そして、男は絶命してしまつたのだ。

(何を頼む——というのであろう?)

身分も姓名も手負いの原因も、そしてまた、どこから来てどこへ行くのか……千鶴は何一つ知らぬ。

フト千鶴の眼が、男の左手を見た。右手は苦悶に突っ張っているが左手は曲げて、旅合羽の下に隠れている。

息——が絶えたとき、躰がぐたりと傾いて合羽の下から拳だけが覗いた。ぐっと握りしめて、それは何かを拳のうちに隠しているかたちであった。

一本一本、指を抜けて拳をひらくと、握っていた物は、波銭に紅緒を通した錦の守袋とわかった。

——これを頼む、と言ったのであろうか?

守袋をひらいて見る。

中には、細かく畳んだ書附け……否、紙つきれが一枚きり。——そして、これが白紙であった。

「——?」

白紙一枚を入れた守袋……この謎は千鶴には解けなかった。

二、怪老婆

——鳥 猫

「ヒヒヒヒ……」

背後で、突然、不気味な笑い声である。千鶴はギョツとなって振り

返った。

狐格子の外。——奇怪な老婆が立っている。

ニャーオ

猫が啼いた。老婆の左肩に、総身黒漆を塗ったような烏猫が、七変化の瞳を爛々と光らせて載っている。

烏猫。

老婆。

老婆といつても、腰が曲ったり、齒が抜けたりしている訳ではなく、瘦身枯木のように五尺五寸はあろうか、年輪のように皺深く、雪白の髪を長くうしろに垂れている。

「死んだか?」

ぼつり、と老婆が言った。——一体、何者であらう……。その正体をいぶかりながら、千鶴は、われ知らずコクリとうなずいていた。

「そうか。よい——、それで、その者から、なんぞ頼まれたであらうがな?」

(——頼まれた……と言え、この守袋のほかにはないけれど……でも)

「いえ」

千鶴の唇から、キツパリと否定の言葉が飛び出した。

寛永通宝——波数二十二の四文銭に、紅紐を通してぶら下げた錦の守袋……中味は白紙一片。——しかし、これは死者が、瀕死の最後の声をふり絞って千鶴に托した物である。滅多な事で、明しも渡しもならぬもの、と思ったのだ。

「ヒヒヒヒ……」

老婆は笑いだした。

「気丈な女子じゃのう。じゃが、口では否定しても、そら、その眼が顔が、手が、足が——フフフ、確かに頼まれた、預かった物がある……と、正直に言うておじゃる。ささ、駄々をこねず、おとなしく渡してくりやれ」

（——では、見ていた訳ではないのだわ……）

千鶴は、守袋を握った右手を、そっと背後に廻した。本能的の所作であり、しかし老婆の蛇のような眼は、これを見逃さなかった。

「——ほう」

ニタリとして、枯葉のような掌を、ヌツと差しのべた。

「今、隠した物……それは何じゃな？」

「これは……」

どきりとした。

「預かった物じゃろう。さ、渡すのじゃ……よいか、あともう一度しか言わぬぞ。それで従わずば、可哀相じゃが地獄に追いやってくれ。——さあ、その預かり物を、ばばに渡してくりやれ」

千鶴は躊躇した。——白紙の入った守袋、足もとの死人が頼む、と言ったのは、果してこれだったのであろうか……このような何の変てつもない物を、渡さず拒否して、もしこの身に間違いが起ったら、病床の父上様が……不気味な老婆だ……何か怖ろしい怪奇な術を心得ているかも知れぬ……

しかし——

千鶴の顔は、静かに左右へ動いていた。——拒否したのである。

瘦人ではあっても侍の娘に変わりはない。頼んだ死人を眼の前にして、その信を裏切る事は出来なかった。

——千鶴はそういう娘であった。

「渡すは嫌——と」

老婆の眼に、激しい憎悪と怒りと殺気の色が走った。

同時に、ギャオーと異様に啼いて、肩の烏猫が千鶴に襲いかかった。

「——あ！」

思わず右手で顔をおおう。——と、音もなく身近にすり寄った老婆の手が、ヌツとのびて、千鶴の右手の守袋を引ったくった。

ビリッ。

錦の布が裂けて、守袋は老婆の手に、そして四文銭は千鶴の手に……

：

「ヒヒヒヒ……」

笑った声は、もう狐格子の外……まだ明けるに早い暁闇の夜気の中に消えて行った。

——傷と於蘭

千鶴は稻荷堂の床板に倒れ伏していた。——そして、呻いた。

飛鳥のように襲った烏猫が、その鋭い爪で千鶴の左頬に、ひと筋——えぐり傷を残して消えたのである。

血が吹き出ている。痺れるような激痛……

「——う……う……」

ギリギリ、齒を噛み締めて苦痛をこらえ縞木綿の袂で傷を押えた。

死人と美女と血と……外は闇。寒気に沈んで、そよとも動かぬ夜気が——

が——

この時、ヒタ、ヒタ、ヒタ……珍らしく足音が近づいて来た。左手の暁闇から、次第に近づいて、堂前をよぎり、右手の暁闇へ、速くも

なく、また遅くもない足取りである。

それが、フツ——と消えるように止った。瞬、二瞬……また動き出した。引返して来るのだ。

ぴたり、堂前に止った。

狐格子を開けて、——やっぱり——眩やいたのは女で、きりりと締った躰つきの、様子のいいやつである。

「——どうしたんだえ？」

と、突っ伏している千鶴を抱きあげた。

「おや、これアいけないよ。刀や剃刀傷じゃないね。爪……そうだ、相手は猫……しっかりおし。今、薬を塗ってあげる」

独りで喋って、懷から革の袋を抜き取ると拡げて何やらごそごそやっていたが、やがてベツタリ——千鶴の頬にべつくきず薬を塗りつけた。

手当を終ってさて今度は、ゆっくりと傍の死人に眼を向けている。落ちついた女——ただ者であるはずがなく、これは甲賀女の於蘭であつた。

「少しは落ちついたかえ？」

「はい」

「それじゃ、聞かせておくれな」

「はい」

一部始終を聞き終って、——フウンと唸ったが、於蘭にもこの小事件の謎は解けなかった。

「早く帰るがいいよ。係りあいになつては、病氣のお父上が難儀をなさる。——番所への届けは、あたしに任かせておくんだね」

「はい」

大分刻を過している。千鶴は急に病床の父の事が気になり出した。

……

「妙な事があればあるものさね」

千鶴が去ると、於蘭は、死人の懷を探った。——身元を明かす物は何もない。

「フン」

舌打ちして、この女もまた、稻荷堂から姿を消した。四半刻ばかり後のことである。

三、符牒同心

「——ほう、それは異な話だな。婆アと烏猫……面擦れのある旅鳥……白紙の入った錦の守袋か……へえん」

櫓炬燵にはまり込んで、独り感心している奴がある。

鳴子善四郎だ。

「あたしにや、あの死人の正体がわからなかったけどさ。善さんならピタリ——と当るかもしれない」

於蘭である。櫓炬燵の向う側に足を突っ込んで、頬杖つきながら、じつと善四郎の顔を見詰めている。

「馬鹿なッ。易者じゃあるまいし」

「フフ。でもさ、試しにちよつと出かけて見ておくれよ」

「けっ、張っ倒すぞ。朝の暗いうちから人を叩き起しおって……そんな話は八丁堀へ持って行けっ！」

「勘だよ」

「エ？」



「八丁堀じゃ扱い切れない死人……その背後にあるもの……何か、こ
う、大きなもの……そんな気がするのさ」

「へえん、於蘭姐御はいつから巫女になったんだ？」

「巫女？」

「地獄の閻魔大王からお告げでもあったような顔をしているぜ」

「馬鹿らしい……あっ！」

炬燵の中で、善四郎の足が妙な悪戯を仕掛けたと見える。於蘭は奇
声を発して飛び退いた。

「ハハハ……」

と善四郎の笑った声は、すでにもう次の間からであった。

手早く仕度をしたのであろう、次の声は、

「出かけるぜ」

と、もう冗談の翳もなかった。——その気になれば、神速——と言
ってよい。音もなく速い男である。

下谷稲荷。

「ふーむ」

堂床の死人を見て、ギロリと眼を光らせた。——唯の旅鳥でないこ
とは、ひと目で分る。

傷を、手を、足を、胸を……そして最後に衣類をあらためて、

「フーム」

と、もう一度唸った。顔色でわかる。何かを発見したのだ。

「妙な事になりそうだ」

遅れて、やっとこの時稲荷堂に着いた於蘭に、ニコリともせず言っ
て、

「これは、長崎同心だ」

と、死人の着物の襟裡を返して見せた。

「——？」

於蘭は不審顔である。

「わからぬか？」

善四郎の右手の人差指が、襟裡の一点を押さえた。

「あ！」

（——先刻は、どうしてこれを見逃したのだろうか？ 暗かったし、それに第一、着物の襟裡なんぞ気に留めやしないもの……）

襟裡——赤糸でナの字の縫取りがある。

ナ……は、長崎奉行所付を意味する。

赤糸。

黒糸。

赤糸は同心を意味し、黒糸は与力を指す。これは、遠国諸役人が、隠密に行動する場合の身分証であった。

「——すると、長崎で何か兇事が……？」

「ふむ」

と善四郎は腕を組んだ。

「斬られたのは、江戸に入ってから……と言う事は……」

「しッ！」

於蘭が何か言いかけるのを、腕組を解いて制止すると、善四郎の躰が、音もなく不意にフワリと堂前に飛んだ。

「あっ！」

驚いて叫んだのは、千鶴を襲った枯木の老婆——あの猫婆アであった。

何のためか、そっと稲荷堂に忍び寄ったのを鳴子善四郎の動物的な

鋭い知覚が見逃さなかったのである。

一瞬。

老婆と善四郎は、六尺を距てて、真ッ正面に対立した。

すさまじい殺気が、落ちくぼんだ老婆の眼から発散した。

つぎの一瞬——、それは変転の妙を尽した進退であり、甲賀女の於蘭ですらが、何がどうなったのやら、急には判断がつかぬうちに老婆の姿が視界から消え、善四郎が左手で顔を隠して、三間も離れた右手の屋敷の長塀の下に突っ伏していた。

つまり——

その一瞬に、老婆の口から、六本の含み針が飛んで善四郎の眼を襲い、善四郎の右手からは二つの十方手裏剣が流れて、一つは老婆の右肩の肉を裂き骨を削ると同時に、一つは左肩の烏猫を襲って、その跳躍を封じ——そして善四郎は長塀の下に難をさけ、老婆は横の露路へふわりと姿を消した……のである。

——と、於蘭に分ったのは、かなり刻がたってからの事であった。

「善さん、大丈夫かえ？」

心配そうに走り寄ると、

「驚いた婆アだ」

善四郎は、むっくり起き上って、この男が闘志を掻きたてられた時に、きまって見せる例の不気味な片頬笑いを、ニタリ——と浮かべた。

四、化物棒

千鶴は走り出た。

父、葉越頼母の病状が急変したのである。高貴薬や長崎仕込みの腕

を餌に、前々から露骨なそぶり——頼母の眼の届かぬ所で、千鶴の手を握ったり、尻を撫ぜたり、ひどい時には着物の上から胸を抑えたり……それが、いつの間にか頼母の知るところとなり、追い払われて、以来顔を見せなくなった町内の本道（内科医）——永井順庵ではあるが、病状の急変を見ては、千鶴も躊躇してはいられなかった。

頼母はすでに意識不明である。

「エへへ……」

千鶴の必死の訴えを聞くと、永井順庵は、分厚い唇をペロリと舐めて、淫らっぽく笑い出した。

「それ見た事か、——だから言わないこっちゃない。わしの手を離れては、助からぬ病人じゃて」

「順庵様、お願い……お願いでござります」

千鶴は手を合せた。

「本当に父御の命を救いたいのかの？」

「はい」

「ならば一つ、ここに道がある」

「え？」

「へへ、何でもない事じゃ。千鶴さん——お前が、わしの言うなりになりさえすればええんじゃよ。な……」

「でも」

「心配する事はない。和蘭陀渡りの秘薬——これは、大名か万両分限でなくば手の出せぬ高貴薬じゃが、お前さんの心次第で投薬して進ぜる。——すれば、平癒疑いなしじゃて」

言うなり、ぐいと引き寄せた。

「あつ！ でも……父が、父上様が……」

「慌てる事はない。半刻、一刻、それぐらいいは遅うなっても同じ事じや。近くは、將軍家の御前にも召されようという順庵が、胸を叩いて引受ける以上、天地が引っくり返っても頼母殿の命だけは救って見せる。急場を抜けるだけでなく、二十日もすれば、もとの身体にして見せるわい」

「あつ……ア……ア……」

と、まだ本能的な抵抗を見せるのを、構わず順庵は押さえつけて、引っぺがすように帯を解いた。——同時に、薬臭いその手が、蛇のようにな、ヌルヌルと胸にのびて、固く締った十八娘の清潔なふくらみを、淫らっぽく冒瀆し始めた。

嘘っぱち。

和蘭陀渡りの秘薬も、起死回生の手当法もすべてこれ口からの出まかせで、狙いをつけた美女一匹、この好機に弄んでくれようという魂胆だから、急には逃げ出せぬようにと、巧みに千鶴を裸に剝いてしまった。

フフフ。

ほくそえんで、さて、これからという時である。

「蛆虫め」

背後に声があり、ギョッとなって順庵が振り返ると、脳天へ一発檣の棒が叩きつけられた。

「げッ」

血へドを吐いて、千鶴の腹の上に崩れ伏すと、

「しまった。手加減を忘れて、モロにぶん殴ってしもうたわい」

声のぬしが、ぼそり呟いた。
裸の胸から腹にかけて、順庵の血へドを浴びた千鶴は、余りのイヤ

らしき、おぞましき不気味さ——に、一瞬失神しかけたが、必死の氣力で持ちこたえ、剥ぎ捨てられた縞木綿の袴を胸に抱いた。

そして、時ならぬ闖入者の顔を見た。

「——!？」

人三化七というのは、この男の事ではなからうか。

鼻筋から左半面、赤紫の肉塊がうねうねと盛り上って、左眼は潰れ、鼻は曲り、口は引ッ吊れ、あまつさえ、額から左頭部にかけては頭髮が一本もない……これは、ずるずる剥けの、怖ろしい火傷跡であった。

左袖は、ぶらんと垂れている。

右手に、鉄輪締め of 櫂棒を握って、今、人ひとり殴り殺したというのに、吐く息、吸う息、微塵の乱れもなく、その眼がじっと千鶴を見詰めていた。

やがて——

「女……、おぬし、猫婆アに渡し忘れたものがある。それをあらためて貰いに来た」

引ッ吊れた口で、いびつな声だった。

「——? そのようなもの……」

「無いと言わさぬ。稲荷堂の死人から預かった物は、守袋一つではあるまい。婆アの言うには、おぬし、右手を背後に隠したそう……その右手に、何を握っていた? 守袋だけではあるまいが」

「いえ、嘘ではありませんぬ」

「フム。おぬし、今、見たであろう。強情を張ると、このクソ医者 of 二の舞い、脳天を打たれて血ヘドを吐くぞ」

「嘘ではござりませぬ。決して……」

千鶴は、父頼母が氣にかかって、心も空であった。

「うぬっ」

男の引ッ吊れた口が、ヒクヒク痙攣した。同時に、右手の棒が音もなく飛んで、千鶴の胸を突いた。

五、足を舐める女

「哀れ」

ぼそり、と呟いたのは、鳴子善四郎である。

四畳半と三畳の二夕間、その四畳半に、継ぎはぎは一杯あるにしても、汚れない清潔な夜具を敷いて、骨と皮、瘦せさらばえた葉越頼母が病臥していた。

病臥——、否、すでに冷たくなっているのだ。

ふた間とも、部屋がとり散らかされている——それも、尋常の乱れようではなく、明らかに何者か、探し物があって、引ッ掻き廻したのだとわかる。

「へえ、人相のよくねえ野郎共が七八人押しかけて来やしてね、娘はどこへ行った?——と、こうなんで。千鶴さんは、町医者の順庵を呼びに行つたと答えやすと、一人、化け物みてえな面アした奴が、走り出し、残りの奴等は、この家に押し込んでバタバタ家探しを始めやがった。ヘン、こんな貧乏長屋に何があるもんですか……へえ、それが、長屋の連中は、みんな乱暴されてはたまらないんで、家の中に引ッ込んでおりやした。へへッ、触らぬ神に祟りなしでさあ」

長屋の連中の話を聞いて、善四郎が次に現れたのは、本道順庵の宅である。

「なるほど」

順庵が血へドを吐いて死んでいる。下女や下男や内弟子の若いのは台所で急所を突かれたらしく、眼を剝いて失神していた。

千鶴の姿は見当らなかった。

ペッ。

唾を吐いて、善四郎は苦い顔になっている。——悪い癖で、何か気に入らぬ事があると、所構わず唾を吐く男である。

（——フム。変形の長崎同心は、何か伝書を身につけて、長崎を出た途中どういう変転があったか、それはわからぬが、とにかく一応無事に江戸へ入った。ところが、江戸へ入ると襲われて肩を斬られた。——しかし、この男余程の利け者と見えて、斬られはしても、一旦は敵の目を逃れたんだな。そして、フム、あの稲荷堂……出血多量のために瀕死となる。折よく現れた千鶴という娘に守袋を托す。——はて、ここからが妙だ。守袋を奪った猫婆は、それが求むる物に非ずと知って、さて、どうするか……同心の死体をあらためようと思えるだろう。が、死体には何もなかった。娘が嘘を吐いたに違いない……誰しも考える所だ。で、娘が襲われる……しかし、於蘭の話では、娘の言葉に偽りはなかったと言うことだが……）

ペッ。

とまた唾を吐いて、善四郎は順庵邸をあとにした。

（——長崎に何かあったに違いない。そしてそれは、江戸と結ばれている……）

歩きながら、まだ考えている。

（遠国の支配所は頭痛のタネだて。殊に長崎はいけねえ。年中何かゴタゴタを起してやがる。——今の奉行は、戸川播磨守安清だったな……）

……フム、奉行になって五年か……）

考え考え歩きながら、ポーンと小石を蹴った。小石は弓なりに飛んで、向うの長堀の天水桶に当って、ころころと転げた。

「五島屋善左衛門……フン」

と、善四郎が呟いたのは、小石を蹴当てた天水桶の長堀……それが海産海漕問屋で近年めきめき頭角を現して来た五島屋善左衛門の広大な構えの長堀だったからである。

（千鶴と言ったな……さて、この娘はどこへ連れ去られたか。フム、こいつを突きとめるのは、これア一苦労だ……）

ボンとまた一つ小石を蹴ったが、これは善四郎の困惑を意味するしぐさであり、この時求める葉越千鶴は、四方が壁と板戸ばかりの隠し部屋に閉じ込められていたのである。

順庵の屋敷で失神し、ハッと正気に返った時には、すでにもう、この部屋にいたのだ。

そうだ。

もしこの時、善四郎が、そして千鶴が、千里眼というか——物を透して見る能力があったならば、お互いの姿を、かなりはっきり認め合う事が出来たであろう。

千鶴は——ほんの小半丁余り向うの道を、むずかしい顔で歩み去る善四郎の姿を……

善四郎は——同じく小半丁離れた屋敷の隠し部屋に、身に纏う何物もなく、身をちぢめ乳房を押えて打ちふるえている千鶴の裸形を……

しかし、二人にそのような、人間離れのした能力があるはずもなく善四郎は、知らず、一步一步——刻、一刻、離れ去って行ったのであった。

「これ、女……」

隠し戸の向うから、鈍い声が来た。ハッと千鶴が顔を上げる。猫婆の聲——と知ったからである。

ギイッ

隠し戸が開いた。——同時に、千鶴の眼が皿のようになった。

隠し戸をへてだた向うの部屋、そこに異様な物を見たのである。

まず、あの猫婆の姿……肩を白さらしで、ぎりぎり巻きつけている。それはいい。それはいいのだが、何とその部屋には、一匹、二匹、三匹……十匹……二十匹……

猫！

大きい、小さい、無数の、しかもまがましい鳥猫ばかりが、うじゃうじゃしているのだ。

ニャーオ

ニャーゴ

啼いたり、唸ったり、のどを鳴らしたり——そして、ふざけたり、寝そべったり、老婆の膝に這い上る奴、肩へ載る奴、そいつを押し落す奴、……薄暗い部屋に、無数の瞳が、七変化の怪奇な瞳が、ギラギラ、ギラギラ、八方、十方——否、部屋中に充滿して、光り輝き、点滅する。

千鶴は思わず頬の傷に手をやった。白蠟の頬に、ひと筋くつきりと赤い傷……それが返って千鶴の顔を、凄艶な美貌に変えているのだが——まざまざと想い出す。この傷をつけたのは、あの中の一匹、それがどの猫かわからぬが、きつとこの魔性のものは、一匹残らず猫婆の言うなりに、人を襲うのであろう。

「気がついたな。悪い事は言わぬで、稲荷堂の男から預った物……そ

れが何であるのか、どこにあるのか、素直に言うてしまうのじゃ」

「嘘は言いませぬ。預かった物は、あの守袋一つ。それだけでござります」

「それが嘘じゃ。女……お前、ヒヒヒ……素っ裸で、その白い柔肌を、この猫どものままにされてよいのか。そら、その頬つぺたの傷のように、胸も顔も腹も背も足も、所嫌わず爪を立てられて、ヒヒ、躰中爪傷の縞が出来るぞな。そうなくてもよいかの」

千鶴は答えなかった。答えるすべがなかったのである。本当の事を言っても受けつけてくれぬ。嘆願も無駄であろう。

（——ああ、父上様……）

父の死を知らず、しかし、危篤の病状であり、医者の手当がなくなれば絶望——死はまぬがれぬ、と覚悟し、今頃はもう、たった一人で淋しくお果てなされたのでは……と思うのだ。

そんな千鶴を、老婆は、不敵な強情女——と見た。

「ヒヒヒヒ」

笑うと、のそのそ部屋に入って来て、

「そうかい、猫は恐れぬとな。ならば、こういうのはどうじゃ」

隠し部屋の一隅にある嵌め板を、ポコリとはずした。

五寸四方。

「ヒヒ、この穴から覗いて見るがよい」

千鶴の乱れ髪を引う掴んで、ぐいと覗き穴に押しつける。

嫌応なしに、千鶴は覗き穴から向うを見た。

「——あ！」

そこは、一つの地獄図絵といってよかった。

男がいる。

女がいる。

全裸の女、湯文字一枚の女、長襦袢のしどけない女……青畳の上を蛇のように、くねくね這いずり廻り、畳に爪を立て、掻きむしり、口口に何やら言っている。

「お茶を……」

「お茶を……」

男は一人。五十年配の脂切ったのが、これは白綸子の寝間着一枚で三枚重ねの緋の襦袢の上にふんぞり返って、ニタニタ笑っているのだ。「フフフ、お茶が欲しいか。欲しい奴は、おれの足の裏を舐めろ」どたりと毛脛を突き出した。

と――

千鶴は現実にはつきりと眺めながら、すぐには信じられないような事態が起った。

女たちが、争って、男の汚ない足に殺到したのである。足は一本、女は数えて見ると、全部で十一人……醜い、奇妙な、おぞましい争いが始まった。

男の足を舐めようと争う女……これが信じられようか。

掴み合う者、ひっぱたく者、叫ぶ者、泣く者、一人が押しのけて、男の足の裏を、赤い舌でペロペロ舐めた。――と、たちまち、別の一人に、黒髪を掴まれて引きずりのけられる。

罵る声……これが女の声であろうか。汗と女の体臭が、ムンムンたちこめて、千鶴の鼻に迫る。

「今、舐めたのは、お浜――ふふ、あとで一杯くれてやる。あのお茶をな……ふふふ。次は……そうじゃ。カンカンノウを踊って見い。一番うまく踊れた者に、望みのお茶をくれてやるぞ」



男が言った。

すると、われがちに、立ち上って踊り出すのだ。全裸の女、湯文字一枚の女、長繻絆の女……手を振り腰を振り、足をあげ、拡げ……黒髪が、乳房が……統制も何もない、狂気の乱舞である。

浅間しい。余りにも浅間しい。——千鶴はヒシと眼を閉じた。
「ヒヒヒヒ」

背後で猫婆が笑う。

「見たか。あの女共も、もとは何々小町で通る美しい女子ばかり。男勝りの岡っ引の娘もいれば、乳母日傘の千両分限の娘もいるし、ヒヒ小太刀の一手も使える侍の娘もいるのじゃ。それが、今はあのザマじや。お前もあのようにになりたいかの。ヒヒヒ……わけはない。ちよつと細工をすれば、お前だって、すぐにあのようになってしまう。が……あんなってしもうたら、もう取り返しがつかぬぞな。どうじゃ、嫌か、怖ろしいか……なれば強情を張らずに稲荷堂の男から預かった物がどこにあるか、言うがよい」

「ああ」

千鶴は呻いた。

「預かった物は、あの守袋一つ、偽りは申しませぬ」
血を吐くような声であった。

「フム」

猫婆は眉をひそめた。じつと千鶴を見詰めている。

「フム」

何か思い当る事があるらしく、一つうなずいて、
「では聞くぞな。守袋、紅紐がちぎれておった。そうじゃ、紅紐の先に、何ぞついておったかも知れぬて。どうじゃ？」

と、期待をこめて問うた。

「はい。四文銭が」

「な、なんと。四文銭……ふうむ、四文銭……」

「寛永通宝でござりました」

「それを、どこへ、どこへやったのじゃ」

「……」

「どうした？」

「持っておりませぬ。稲荷堂の中で倒れて、その時は手に握っていたように思いますが、——あ！」

「え？」

「ひよっとしたら……」

「ひよっとしたら？」

「あの時、傷の手当をして下されたお方の袂の中に、転げ込んだかも……そんな気が、かすかに記憶が……」

死者への信義——一度は猫婆の強迫をはねつけた千鶴ではあったが肝心の守袋を奪われ、さらには続いて起った、おぞましい恐怖の重圧にひしがれて、反射的に何もかも答えてしまった。

六、四文銭

「——待てよ。あの婆アの含み針は、あれは確かに羽黒流だったか……」

鳴子善四郎、置炬燵に頬杖ついて、しきりに思索を練っている。

伊賀流、甲賀流、紀州流、そして羽黒流……

「羽黒流忍者は、金剛杖術三十六法の外に、含み針を得手とする。——」

「が、あの婆ア、櫂の棒は持たず、かわりに烏猫を連れておった……」
そのまま、ごろんと大の字に寝転がった。うーっ、とのびをすると
その右手が、異な物に触れた。乱れ籠の置いてある部屋の隅である。

「——？」

つまんで、拾い上げて見ると、これが波数二十二の真鍮錢——寛永
通宝の四文錢であつた。

「はてな……？」

こんな物を紛失した説憶はさらにないし、考えて見ると、この部屋
は、於蘭が早朝叩き起しに來た日以来掃除がしてなかつた。

「すると、於蘭の奴が、落して……」

と独言しかけて、急に、善四郎の眼が光り出した。

「フーム」

四文錢の周円に、一筋ぐるツと傷がある。

「読めた！」

善四郎は小柄の尖を、周円の筋傷に当ててぐいツとこじた。と、錢
が——パクリ、表裏別々に剝がれたのである。

中には、小さく疊んだ薄紙が一枚。

戸川播磨守安清——五島屋善左衛門不正。証拠。危険を感じ

左記に隠す。徳山、美乃屋、離れ梅の間、天井裏

長崎同心 加瀬幾馬記

——薄紙に書かれていた文字は、こうであつた。

「ちえッ。またしても長崎奉行の不正か。五島屋善左衛門と結ばれて
おる——という訳だな……そして、フン、正義の同心加瀬幾馬ここに
あり、と来やがったな。証拠の品を奪つて長崎の地を脱したが、追手
がかかり、途中、危険と見て、証拠の品を徳山城下、旅籠美乃屋の離

れ梅の間の天井裏に隠した——と。さて、徳山は毛利淡路守四万石、
江戸から二百五十三里もある。けつ、朝飯前に一ッ走りという訳にア
いけねえな……」

ぶつくさ独りごちて、やがて善四郎は立ち上つた。

夜。

善四郎の黒い影が、音もなく闇を飛んだ。

「おい。姐御！」

と、於蘭のねぐらに踏み込んだが、シンとして応えがない。灯も消
えている。

「於蘭——」

善四郎の声が急に緊張した。

於蘭は唯の女ではない。夜中出歩く事も多いが、しかし、投げやり
で無精な女ではなかつた。

それが——

夜具は敷きっぱなしだし、枕元の乱れ籠には、着物がくしゃくしゃ
になつて散乱しているし、衣桁が倒れ、枕が飛び、蓆盆が引っくり返
り、簪手裏剣が、グサリ、畳に突ツ立っている。

「——！」

左手の柱に、鈍く光るものが二本、白いトゲのようで、眼を近づけ
ると、針——とわかつた。

含み針。

「うーむ。婆アに襲われたか。羽黒流の劫を経た奴だ。——が、一対
一なら、於蘭とてむざむざ手ごめにはされまい。はて……もう一人、
術者がいたな。ははア——多分、そうだ順庵を襲つた奴。こやつ羽黒
流の棒、金剛杖術を使うと見てよい。それで於蘭は拐われにけり、と

いう段取りになる。なぜ、襲われたか、——四文銭……フフン」
べつ。

と唾を吐いて、善四郎は夜具の中に手を入れた。

「半刻！」

夜具に残るぬくみ——から、襲われたのは半刻前と断じた。

「五島屋善左衛門、味な真似をしやアがる。羽黒流忍者を抱えたりしているところを見ると、まず、抜け荷、海賊——そんなところだろうが、馬鹿め！ 甲賀侍の始末におえねエところをたっぷり見せてくれるぜ」
べつ。

とまた唾を吐いた。

七、茶と煙と女

「伝兵衛、どんな様子だ」

と尋ねたのは、五十年配の脂切った男——先頃、狂氣したかに見える女共に、足の裏を舐めさせた、あの男である。

「それが、あの女は、唯の女ではないので、尋常の手段では、どうも……」

と答えたのは、例の煙の棒——金剛杖のずる剥け男であった。

「だからさ、煙り部屋がいいよ」

と横から口を出したのが、猫婆アである。

五十男が、五島屋善左衛門。

金剛杖が、羽黒伝兵衛。

猫婆アが、伝兵衛の母お倉。

「——なるほど、於蘭は甲賀女、ちっとやそつとの事では泥を吐くまい。しかし、のんびりはしておれぬ。四文銭に秘めた、加瀬幾馬の伝書が洩れては身の破滅……よし、煙り部屋に入れろ！」
座を立ちながら善左衛門が言った。

「ヒヒヒヒ……」

「フフフフ……」

奇態な母子——羽黒忍者の母と子は不気味に笑って眼を合わせた。寝乱れた長襦袢一枚。

そんな姿で於蘭は後手に床柱へ繋がれていた。千鶴が最初に押しこめられた隠し部屋の隣り、つまり猫婆お倉の部屋である。相変らず、無数の烏猫が、うじゃうじゃ蠢めいていた。

「おばば、剝く方がよからうな」

のそり、入って来て、羽黒伝兵衛が言った。

「当り前じゃ。頭のとっぺんから足の爪先まで、剝き身の素っ裸にしなきゃ効果はないわえ」

と、後に続いて猫部屋に足を踏み入れたお倉が答えた。

「よしッ」

伝兵衛の右手が、於蘭の長襦袢を掴む。——ビリリと引き裂いて、ボロ屑でも捨てるように抛り投げた。

全裸の於蘭。

「ほう。見ろや、おばば。この女、乳に入墨してやがる。それも見事な紅彫り髑髏だ！」

「唯の刺青じゃないよ」

「え？」

「腋の下を見てみな。そこにも、きつと紅髑髏があるはずだ」

「……や、本当だ」

「それはな、黒沼闇斎の毒彫りじゃ。（五月号隠密覚書第二話「丹州鬼の巢城」参照）全身に及ぶと、狂気して悦虐の女になり果てる……ヒヒ、運のよい女子で、途中から逃げたと見える。——さ、何をぐずぐずしておるのじゃ。早いとこ煙り部屋へ引っ立てんかい」

「心得た」

於蘭は無抵抗だった。無駄な抵抗に精力を使うは愚である。出来る限り、精気を残して針小の隙に八方変幻の実をあげねばならぬ。

四方が板壁。

密閉出来る部屋の天井から、於蘭は逆さに吊り下げられた。

半刻。

部屋の一隅から、もくもく、モクモク、乳白色の煙りが吹き上って

来はじめた。

もくもく、モクモク。

モクモク、もくもく。

湿気を帯びた、刺激性の煙である。部屋一杯にたちこめて、次第に濃くなって来た。

煙が鼻に入ってくる。鼻粘膜を刺激して、ツーンと頭の芯に伝播する。刺すような痛み。

ゆらり。

逆さ身の於蘭の裸身が、一ゆれ揺れた。

思わず、どくりっと涙があふれる。苦しいので口を開くと、遠慮会釈なく、もくもく、モクモク、煙が押し寄せる。

「えへっ、えへっ、えへっ」

咳をする。

と、ぎゅちぎゅち、裸身がゆれ始める。汗が全身に泌み出て来た。

肌が、顔も胸も腹も背も足も、ピリピリ、むずがゆくなり痛み出す。

「於蘭、今のは松葉の煙りだ。次には南蛮渡りの毒煙を送るぞ。そうすりゃ、うふっ……俺の顔を見たであろう。そうよ、この通り、全身醜くずる剣けになるばかりか、赤紫に腫れ上って、化物地獄の横綱小町が出来るぜ。さあ、言っしまえ。守袋の四文銭、千鶴という娘から偶然手に入れたはずの四文銭をどこへやった……。おい、お前も甲賀女なら心得があろう。南蛮渡りの毒煙は嘘じゃねえぜ。言ってくれようか……ふっ。天竺で採れる鬼黒蛇草でえ奴よ」

隣りの部屋から、陰々と声が来た。引っ吊れた声、羽黒伝兵衛の声であった。

「えへん、エヘン、えへっ」

於蘭は苦悶にのたうって、すでに狂気寸前にあった。

と——

「火事——火事だア……火事」

微かに遠く、騒ぎが始まって、フーッと気を失なった於蘭が、何やら冷気を額に感じてハッとわれに返った時、まだ残煙のある部屋で、その裸身を鳴子善四郎に抱かれていた。

ニタリと笑っている。

「へっ。煙り責めか——。こっちは、同じ煙りでも、そいつを甲賀流に使って出火と見せかけ、手筈通り、五島屋一味を一網打尽よ」

「嬉しい」

思わず、首っ玉にかじりつくつと、

「止せやい。煙り女なんざア御免だよ」

邪慳にボンと突き放して、

「抱いてほしけりや、風呂にへえって、おめかしをして、やんわりシナシナと出直して来やアがれ」

言うなり、横を向いて、ペッと唾を吐いたから、

「わア汚ない。誰が、お前さんみたいな睡侍に抱かれないもんか！」

と、於蘭は、すっかりもう、いつもの喧嘩腰に戻ってしまった。

氣力を取り戻した証拠である。

翌朝。

一件の後片付けを済ませて、鳴子善四郎が於蘭の枕元に、ヌツと顔を出した。

「寐中かゆくってしようがねえ——てな顔をしているな。どれ、ちょっとかいて進ぜるか」

と、夜具の下へ手を突っ込んで、妙な所へぐつと伸ばす。

「馬鹿ッ！」

とその手をはねのけて、しかし於蘭は、珍しく誘うように、色っぽく笑って見せる。

ホホホ。

チエッ——舌打ちして善四郎は真顔になった。

「五島屋善左衛門。これア天人共に許すべからざる男だな。長崎奉行と結んで、抜荷はする、海賊は働く、それだけならまだしも、異国から麻薬を仕入れて、——つまり阿片だな……こいつを茶に混ぜて女共に服用させた。茶道、華道、踊り、——そういったものの宗匠、師匠連を子分にして、出入りの娘どもを、知らず知らずのうちに中毒させる。中毒させれば、もうしめたものだ。お茶が……阿片が欲しさに、善左衛門の思うがままになってしまふ。女どもばかりではない。商売敵の豪商連を茶の湯に誘って、次第に中毒させ、次々にぶっ潰して、

独り肥え太って行った。——こういう男だ。抜け荷の品も続々現れたし、いずれ磔獄門はまぬがれぬが、糺のタネは、長崎奉行と結んだ証拠の品が見当らねえ。面倒臭せえが、一番、徳山城下まで飛んで、長崎同心加瀬幾馬が隠した一件物を手に入れなきゃなるめえよ」

言うだけ言うと、プイッと表へ飛んで出た。

朝の寒風が頬を斬る。

——『埋れ草』の一節に次の如くある。

善左衛門、長崎の産。海産問屋井筒屋の手代となり、井筒屋娘、美代に懸想し拒絶放逐さる。恨みて悪に投じ海賊となり、頭角を現せり。産を成し、麻薬を用いて美貌の娘を苦しめ、積年の鬱を晴らす。市中引廻しの上、斬首、獄門、五十六年の生涯を閉じたり。善四郎覚の為一筆

(第十話 終)

探訪記者
ノート

地獄の指輪

神行京一

次号予告

MとSとを組み合わせた地獄の指輪！ 変態性慾の秘密結社の会員証がこれだ！ ふとしたことからその指輪を手に入れた敏腕記者が、縄と鞭と妖奇の渦中に巻きこまれて、危機にさらされる！ 次号掲載の佳篇、御期待下さい！



あぶちつく・さすぺんす

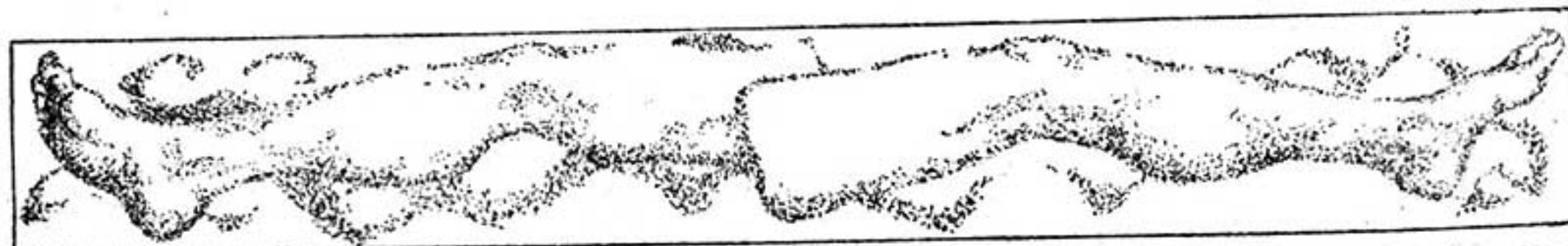
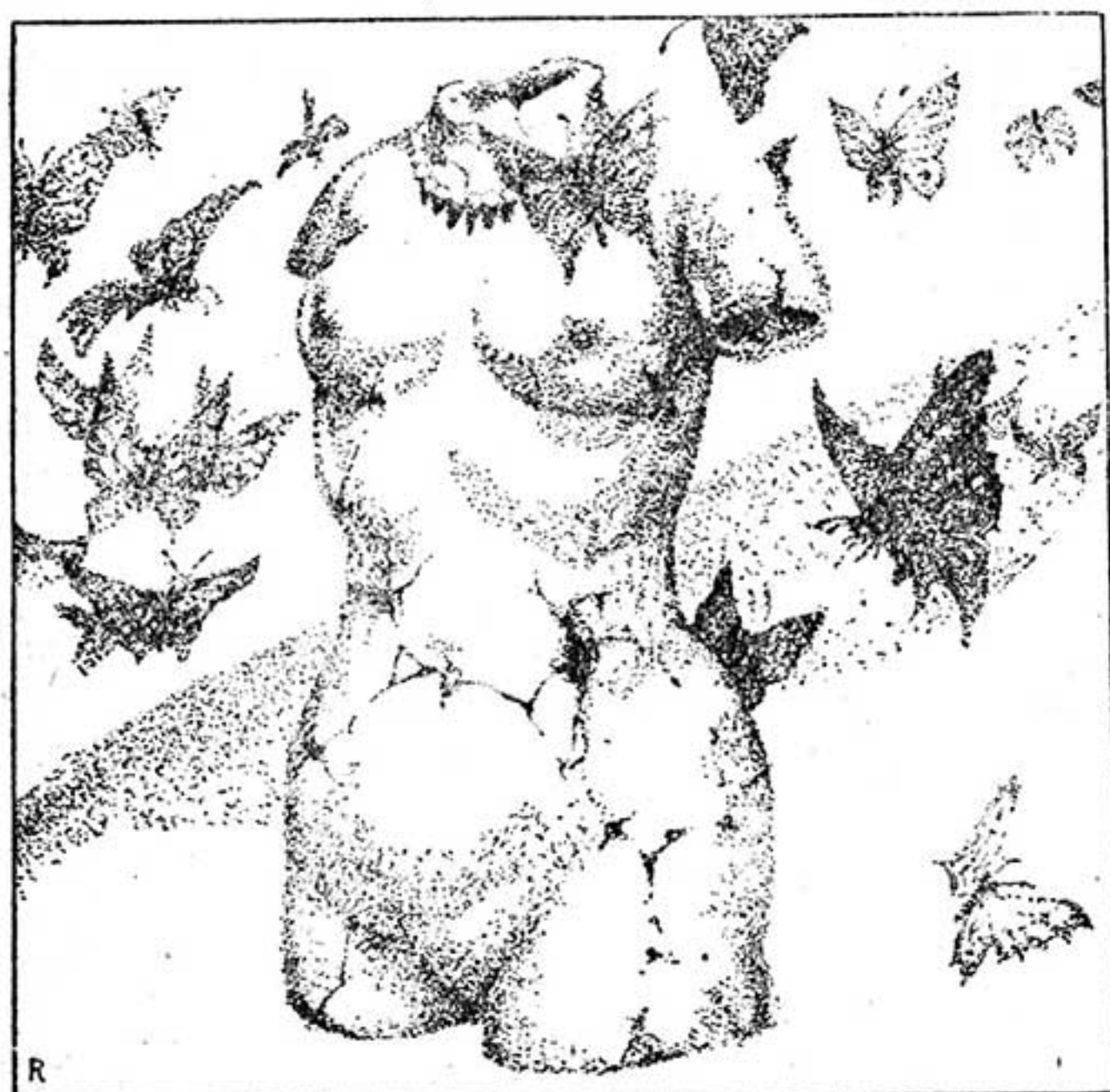
白い芋虫

手も足もない女の白い体が、くねくねとうごめきまつわる悪夢のような日々だった――

否 笠 一 郎

根 元 裕・画

ゆうぐれになると、わたしは家へかえるのがいやになってくる。たそがれがビル街にいつとはなしにしのびよって、たかいたかい建物のあいだの深い谷そこを蟻のようにいそがしくうごめいている車にはもう灯がともっているのに尖塔のてつぺんにはまだ夕陽のこっている。わたしは、そのいまはの際のかすかな陽が一日のさいごをとげるのを見とどける。すると、にわかにか空がみるみるうちに紫色にどすぐろくなり、谷間の闇がすうと上へたちあがってきて町と空をつつんでしまう。夜がいつさいのものを支配するのだ。社長、という声にわたしはがくぜんとして我にかえる、まだなにか？ いやも





う何もない、わたしには構わんで、帰ってください。わたしが帰らないと部長たちはいつまでも残っている。おい社長さんのおかえりだという運転手への電話がきこえ、わたしは何もかも秘書にまかせてふらふらとドアのほうへあるく。帰る。家にかえる。やりきれない。ぞおツとする。あれをかんがえると、ああ、わたしは死刑台へのぼるよりも足が重くなる。まっっているのだ。わたしの妻がまっっているのだ。えへへ、女房がまっっていますんと揉手をしながら販売課長め一年もまえに結婚したのにまだいそいと逃げをうって、わたしにつきあおうとしない。そうだろう、わたしとて五体がそろった妻がまっっているなら、たといおかめでも夜叉でもよろこんで帰宅するだろう。因果、ときどきわたしは、ひとりこうつぶやいてじいッと虚空をみつめたり壁に直面することがある。因果、いやそんな生やさしいものではない。因果や宿縁や応報をとりこした何とってよいか地獄、じぶんから好んでおちこんだこの世の地獄、しかもちゃちな道徳とよばれる感傷と物欲のために、がんじがらめに自分をしばりつけ、めっちゃめっちゃに乱れた網のなかでもがくみにくい悪臭をはなつ怪獣のように、はあはあと息をはずませ牙をむいて盲滅法に引っかきまわし、あまり苦しいので涎をながしながら眼やニや鼻汁をたらし、助けてくれえッ、たまらんだまらんと吠えているのと全くかわりはない。もとはといえば、べつに食べなくてもすんだ一片のエサにがつがつして飛びついたむくいだ。なるほどわたしはこの大きな会社の社長で、まいにち女中や書生が玄関でおくりだして、ていねいに頭をさげ、社へくれば一同かたくなっておじぎをし、札幌や仙台、名古屋大阪と全国に九つもある支店からのべつ誰かが上京してきて社長々々とおだてあげる。はたから見ると、いかにも幸わせな実業家、日本でも指折りの電気器具製造販売会社、その養子がわたくしで、いまは歴とした社長だが、かげ口をきく競争相手は、なんだあいつ、もとは桜山さんの書生だったくせに、ヘッあの化物をあずかって財産をものにしやがった悪党だ、いまに見ろ大きな罰があたるからといい、新聞や雑誌は戦後出世組の五人の男などと書きたて、二代目桜山氏は手足の不自由な夫人を世のいかなる良人よりも愛している一家円満な真面目一方の紳士であるとも評する。みんなであらめだ。わたしは、あの剛腹な桜山氏、山梨県の貧農の俸から身を起し、単身上





京して刻苦努力、一代であれだけの財と名をかちえた桜山電気商会の主、桜山家の書生だった。わたくしも甲府在の貧農の小倅、みなし児になったのを桜山氏にひろわれたのだった。もとより、当時は、桜山商会の主人になろうなどとは夢にも思わず、夜学にかよわせてもらうだけでも法外なよろこびで、ゆくゆくは主人の会社で使ってもらいたかったが、いふなれば、ただくそまじめな、はっきり将来などきめていない、どちらかというと少し頭のめぐりがわるいニキビだらけの田舎者だった。まるで夢。あのころのことを考えると、まったく夢としかおもえない。ひとり娘の芳江さんと仲よしになって、いろいろとたのしいこともあった。芳江さんは、わたしより七つ年下で、色の白い、わがままな、きかぬ気のお嬢さまだった。それは、両親があんな苦労して一代で財をきずいた反面、わるくいえば成りあがり者らしい見栄で一人むすめを甘やかし、ちやほやと、そだてあげたのだった。だから、桜山氏は、封筒一枚でもやかましいくせに娘にたいしてはどんな浪費でもゆるし、わたしなど彼女のまえでは犬ころ以下であった。人間の運命というものはおそろしいものである。戦争がはげしくなるにつれ、桜山商会はみずから製作にものりだし、軍から資材を得てますますふくれあがり他の小会社を合併、戦争が深刻化すればするほど財はふえていった。そして、あの空襲がはじまり、わすれもしない五月二十三日の大編隊の来襲のとき、一夜にして運命が決した。わたしたちは防空壕へかけこんだ。お嬢さんは黒い幕をはりめぐらした自分の部屋でピアノをひいておられた。ずしんと地軸をゆるがす爆弾の炸裂、文字どおり火の雨となって降ってくる焼夷弾、下町は火の海だ。まっくらな空をわがもの顔に低空でとぶ敵機の轟音、そのなかで、ひとり、なんだかわけのわからぬ曲を熱狂的に弾いている娘。思うに、あいつは生れつき気ちがいじみたところがあつたのだ！ わたしは何度もむかえに行った。お嬢さま、はやく、すぐいらっしやらないと危いです。おくさまが御心配です、わたしが叱られます。二どもせきたてて防空壕にもどった。しようがない子ねエ、憲兵隊にみつかったら大変です、と夫人が出かけようとした。よせよせ、あぶないぞ、もういっぺん斎藤をやんなさい、はい行ってきます。だめ、お前じゃ芳江ちゃんバカにしてだめ、あたしが連れてきます。夫人は、広い庭をよこぎって母家にとんで行か





れた。五分ばかりすると、玄関に二人の女の声がした。ああやっと、とわたしは安心した。しようがないやつだ、桜山氏は壕の奥で舌打したが、娘のただっ児ぶりが嬉しそうな口調だった。くっくつと笑う若い女の声といっしょに、た、たと芝生を駈けてくる二人の黒い影が見えた。と、つぎの瞬間、天が崩れ地が裂けた。なんにも聞えなくなり、どのくらいたったかわからぬ、わたしは、もぐらのように地中で眼をさました。息がくるしい。土にもぐっている。直撃弾をくらったのだ。無我夢中であたりを引っかいた。すると、すぐに頭がつめたい大気のなかに出て、あつい空気が鼻とノドにはいつてきた。一軒おいて隣の家が赤い焰をふいていて、あたりをはっきりと照らしだしていた。斎藤いるか？ はい、ここに。わたしは夢中で主人の声のほうに匂って行った。はやく手伝え。は、はい。あッ、おくさま！ おくさまは？ もうだめだ、それより早く芳江を。わたしたちは夫人の死骸は後まわしにして、お嬢さんをついで病院まで運んだ。あッ、手が、手が！ それに足が！ わたしのからだは、いままでは暗かったのと夢中だったのでわからなかったが、お嬢さんの血を一面にうけて、じぶんでも気絶するくらい紅にそまっていた。右手が付け根のところまでち切れかけてブランクとし、左手は完全になくなっていた。ふしぎなことに血が出ているのは右手のほうで、やはり肩のところですっこんでいる左手のほうからは一滴の血もでていない。これや助かる。奇蹟的に一番ひどく出血するはずの左手の切断面が、どうしたはずみか焼かれて血がとまっとる。軍医は希望にみちた顔で手術にとりかかった。戦場などで設備も器具も薬品もないとき、手や脚を切断したときは、たとえば軍刀とか包丁とか鉄板とかを焼いて、油のなかにじゅつと入れ、すかさず傷口にあてて止血と殺菌をするという。芳江さんの左手も、爆弾の破片がもぎとり、おなじく別の破片が焼いたのであるまいか。そんな話を軍医はしてくれた。しかし、ブラブラになっていた右手もやはり切断なくてはならなかった。ぐずぐずしてはおられなかったのだ。こうして彼女は空襲下の軍病院で完全に両腕のない女になってしまった。ところが、足のほうも怪しいと医者は言いだした。桜山氏は泣きさけんで軍医にすがりつき、どんな費用でもだす、なんなら会社の全財産を投じてでもよいから娘をたすけてと床にひれふしたが、ああ助かりますよ





お嬢さんは、脚さえ切断すれば、と若い医者は一ややかに宣言した。もうそうなれば戦時成金も大成功者もなかった。金のちからではどうにもならない場に桜山氏は追いつめられたのだ。怒った。死ぬかと思われるくらい怒って日本で外科の権威と言われている博士を三人もつれてきたが、かえって博士たちは若い医師に賛成した。時間の問題です。早く切斷しないと敗血症をおこしてしまう。大実業家は禿げかかった頭をかきむしって悶絶した。あたかも彼が手術を受けるかのように。ひとり冷やかにしていたのはわたしだけで、親戚縁者ことごとくどう転じていた。手術は行われた。すでに両腕のない二十二才の娘の両脚は、その腕と同じ運命になつて、あの生意気で勝気の、よく言えば利口でしっかり者、わるく言えばお高くとまった狡いお嬢さまはシヨオウインドのなかの手足のないマネキンのような胴体だけの若い女になつてしまった。たとい世界じゅうの富をつんでも、どんなに慈みぶかい神にいのつても、切りはなされた手足はもどつては来なかった。もう独りでは食べることゝ歩くこともできない。床の間の置物、生きている置物にすぎない。おそらくあるときベニシリンのようなものでもあつたなら脚のほうは助かつたかもしれないが、いまさらグチをいってではじまらない。なにしろ、腕も脚も、ほとんど付け根ちかくから先がすぽっとなので義肢義足をつけるたよりがないし、もし無理をしてそういう物をつけたところではビクビクとうごかせるにすぎない。これが桜山芳江の運命であり、わたしの宿命でもあつたのだ。というのは、戦後三年、事業のほうは放つておいてもしぜんに大きくなつたが、にわかに健康のおとろえを見せだした桜山氏は、涙ながらにわたしに芳江さんとの結婚をたのんだ。もちろんその代償として彼の全財産がわたしのものになるはずだった。わたしは断りきれなかった。両手両足のないナメクジのような女を妻とするかわりに日本有数の金持になれる。その誘惑は大きかった。それに、胴体だけになつてからは、急におとなしくつた彼女が、一にも斎藤、二にも斎藤と、わたしをつかまえてはなさない。かわいそうだなア、とわたしは心から同情した。とくべつ製の椅子によりかかつて自然に顔だけを美しく出している彼女は、十人並以上の美人で、その衣の下に手も足もない怪物だとは思えない。わたしが、いちばん先に覚えさせられたのはお化粧である。鏡にむかつて、



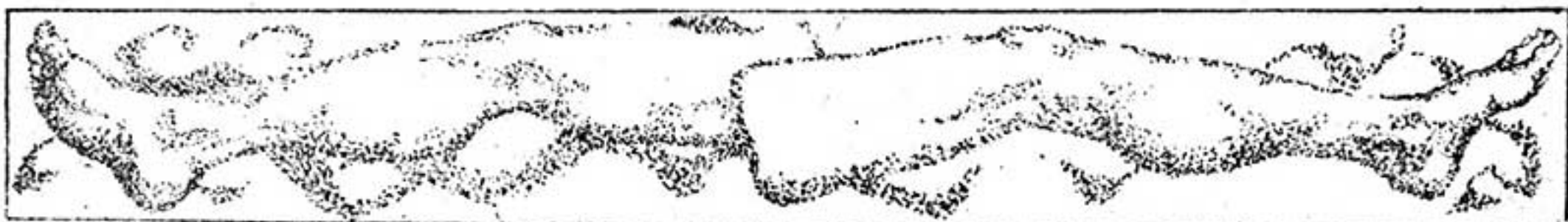


ああこうと命令する彼女にしたがって、白粉をはき口紅をつけてやる。もちろん専門の美容師がきて、髪をゆい、化粧もしたが、まい日のお化粧や髪をつくろいはわたしがやらせられた。そのうち便器のこととわたしがするようになった。斎藤、おまえだけね、ほんとにあたしをふびんに思ってた世話してくれるのは。ほかのひとは、かげでは笑っているのよ、わかってるわ、わかってるわ、と芳江さんは昂奮して泣きだすのであった。そんなことまでしてくれて、うれしい、うれしい、とも繰り返した。こうしてわたしは結婚した。世にも珍妙で奇怪な結婚式だった。もちろんお客は内輪だけにして、新婦は一人わたしを抱いて運んだりおろしたり持ちあげたりした。すべて特別あつらえの椅子やベッドでなくては彼女は一個の物体にひとしいのだ。非難蔭口、そねみや嘲笑をそれとなく八方にかんじたが、すぐにわたしは桜山姓を名乗って新社長に就任した。引退した旧主は、ありがとう、ありがとうと涙をながしてわたしに感謝し、あれほどのカチカチ親父が、なんなら二号をもったらい、芳江さえ妻として立てていてくれれば、とも言った。わたしは言下に否定した。心から生きているかぎり芳江を妻として尊び、誠心これ努めて大桜山会社をビクともさせまいと我心と義父にちかった。そして、あと半月もしたら相続手続が完了というとき、ふいに老人がぽっくりと死んでしまった。がっかりしたのだった。これもわたしの運命のしからしめるところで、無力な人間がどうともできることではなかったのだ。つまりわたしは単に胴体だけの白い芋虫のような女の良人で、故桜山氏の財産は何一つわたしのものにはならずじまいになったのだ。というのは、親族たちに入知恵された妻が、急に名義書替に反対しだし、向う五年間の留保を唱えだしたからだ。いいえ、財産などもったいないです。そんな事、これっぽっちも考えていません。ただお嬢さまがおいとおしくて、と父と娘のまえで殊勝らしく公言したわたくし、向う五年間のおあずけに一言の異議もだせなかった。わたしはただのロボット、しかもこのロボットはまいにち会社にかよい、まっすぐ家にかえる。運転手が護送するようなものだ。根が貧書生あがりの俄か社長、表面はぺこぺこされてはいるが、かげではくすくす笑われているにきまっている。しかもこのごろでは妻との肉体的なあそびにこの世ならぬよろこびさえ感じはじめ、そのまま、ず





るずると浅ましい情痴の渦のなかにまきこまれていく自分ではある。ああ、いやだいやだ、あの手も足もない一塊の肉のかたまり。怪しい歓喜に身をふるわす自分を想像すると、ぞおッと身の毛がよだって、いまにも発狂しそうになる。そっと、あのままに放っておくべきだったのだ。それを、なんというバカ者、もとめられるままに良人としてふるまったのだ。処女ではなかった。女あそび一つしなかったわたしだったが、そのくらいなことはわかった。おほほ、童貞、あなた童貞だったのね、おほほ。丸焼きの鶏のような胴体だけの妻が誇らしげに笑った。おそらく彼女の恋人は戦地に行ってしまったか、彼女の不幸を知って逃げだしたか、その名も所在もわからなかった。知ろうと思わなかった。知ろうとも思わなかった。知ったところで何になろう。はだかにした妻はうつくしかなかった。手足の栄養がそれだけ身体にまわるのか、肌はいよいよなめらかに胸はふくれ、じつと眼をとりなでていると、いやだめだ、すぐに見なれた畸形が頭に定着していて、ころころした肉のかたまり、ソーセイジかハムを輪切りしたような切断面が眼に映り、もぐもぐと虫のように蠕動し、そいつが、べったりと吸いつく。蜜柑の木にいる濃い緑色の蝶の幼虫のように、ほっておくと、そろそろと黄色い触角をのばし、ちょっと突くところりと青い汁をだす。切断面には薄い膜の皺が四方からびいんと張り、少々の打撃では痛くないらしいが、いつも消毒したガーゼをあてて、その上にちょうどはまる革製の蓋がしてある。机の脚にはめるゴムのキャップのようなものだ。ガーゼは三日に一度しか取りかえない。便器のほうは、昼間はもっぱら女中がやるが、わたしが在宅しているときは、ぜったいにわたしでなくては本人が承知しない。彼女は、だんだん元のお嬢さまに戻ってきた。はじめは生れかわったようにおとなしくしていたが、このごろでは手足がないことは忘れたように、わたしに命令し、わたしを自由にする。そのわがままも娘時代のは他愛のないものだったが、いまでは、すべてが陰にこもり、なにもしないで一日じゅう栄養よく健康でじつとしている関係上、いきおい遊びのことばかりに走り、わたしたちの夜は、どんな怪奇作家も奔放な画家も、とても想像もおよばない幻異妖態なものになった。わたしはその悪魔からのがれようとした。その結果、ある酒場の女、トミ子という二十の女だが、を二号的にアパートに



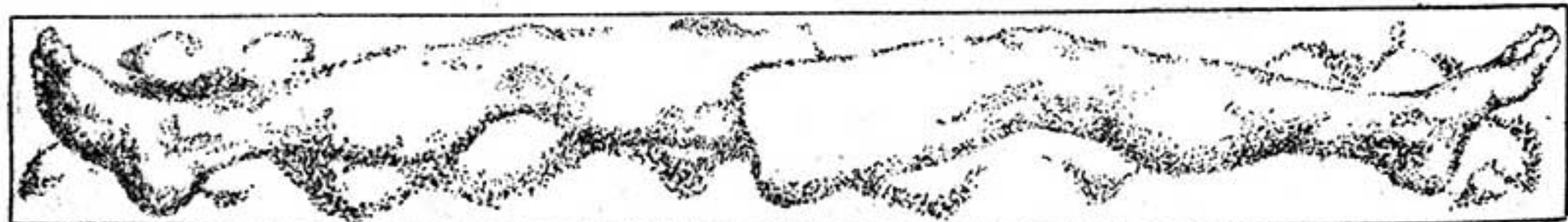


囲ってしまった。とたんに嫉妬のはげしい矢をあびた。ああした不具の女はふつうの者より百倍もカンがよい。嫉妬の度合も並たいていのことでなく、切られた尻ツ尾をピクンピクンふるわす犬のように、両腕の付け根をピクピクとうごかして、まッ蒼になって失神するのだ。しかし、いったん知った十人並の女の魅力をどうして忘れることができよう。おやじさん公認だ。お前と結婚するとき二号ぐらいもっていいと言われた事がある。なにもお前を見すてたり妻の座から追放しようというのじゃないし、ゆるしてくれよそのくらのこと。たのんだが、それは油に火をそそぐのと同じだった。妻は、わたしの留守中に女中に電話をかけさせて新聞記者たちを呼んだ。大新聞は、金持の、しかも不具の奥方のたわ言と引きさがったが、すぐに赤新聞やゴロツキ新聞はわたしのところへ来た。口止料をとられた上に、でかかるとトミ子の写真もそえて書きたてられ、妻は今度は新聞をふんがいたが後の祭だった。こんなことが次から次へと起り、このごろでは、晩になると、わたしは家へかえりたくないのだ。車の窓の外に夜の街の灯がながれ、たのしそうな男女がさざめきながらすぎていく。きみ、とめてくれ、ここで降りる。でも奥さまが。ばかっ、とめろと言ったら停めたまえ。わたしは気がむくままに銀座の方角に魂をうしなった者のように歩いていく。妻女殺し判決という新聞売子のビラが眼についた。わたしは夕刊を買う。とあるレストランに入つて独りで夕食をたべながら新聞を読む。その男は、あまり嫉妬ぶかい妻にやりきれなくなって逆上し、あやまって妻をころしたのだった。そうだ、おれだって、おれだって。わたしは、急に立ちあがってレストランを出ると、大いそぎでタクシーをひろってトミ子のところへ駆けつけた。あらめずらしい、もうお見限りかと思つてたわ。ちゃんと金はとどいているはずだが。それやもちろんよ。もし、ほんとに切れるんなら、すくなくとも五十万くらいいたただかなくちゃ、とても、ねえ。でも、ちよくちよく来ていただけるなら一文もいらないことよ。殺し文句をいってしなだれかかった。おいトミちゃん、わたしは気がくるいそうなんだ。たすけてくれ。あの女からわたしを引きむしってくれ。とってくれ、おまえだけのものに。ほほほ、うまいのね。さては、あたしの他に誰かいひとができた臭いわね。おどろいてはいけないよ、今夜わたしは、あれを殺





す。殺すとも。ころしてやるとも。そしたら、お前は正式に桜山夫人になるんだ。いけない、いけない。そんなことはだめよ。じいっと五年のあいだ我慢して、完全に財産を自分のものにするまで待つのはよ、あんたってバカねえ。奥さんを殺したら何もかもフイ。あんなもフイ、あたしもフイ。ばか言え、あいつは、たとい全財産を譲ったところで、わたしの主人であり同じように命令する。七十までも八十までも生きるだろう。ああ、あの化物が七十才になったときのことを考えてみる。殺す。わたしは殺す。まっ、という声を後にわたしはトミ子のアパートを駆けだした。そして、まっすぐに家にもどってきた。部屋に入った。ぎよろつとベッドのなかから両つの眼がわたしを見上げる。にっこりほえんだ。わたしは何気ないフリをして妻にキッスをあたえ、そつと両腕にだきあげた。おそかったのね、あら、どうしたの、そんな顔をして？ 芳江、びっくりしてはいけないよ、わたしは、これからお前を殺そうと思うんだ。もうやりきれないんだ。お前も財産も何もいらない。お前を殺してわたしも死ぬる。声をだしたら、いっぺんに口をふさぐよ。ね、わかったろう、死んでくれ。と言いなながら、階段の上まで彼女をはこんで、そこにそつと荷物をおろした。妻はまっ蒼な顔になっていたが、まばたき一つせず足元からわたしを見上げていた。いいか、ここで、ちよつとお前を蹴ころがすと、まず階段をころげ、あの曲り角から外れて下の床にまっすぐ落ちる。それでおしまいさ。それからすぐに大声をあげて、お前が勝手に床をころがって誤って落ちたと怒鳴ればいいのだ。わたしの眼は血走っていたかも知れないが、わたしの心はしずかなものだった。足元の肉塊は、もぐもぐとうごいて、なんとか階段の端から遠ざかろうとした。が、一センチも動いていなかった。わたしは足をあげた。そのとき階段を一足とびに駆けあがってきたトミ子が、いけない、やめて、それをやったらあたしが奥さんになれないじゃないのと叫びながらわたしの足にしがみついた。ああ、こやつがほんとの悪魔だ。ちくしょう、お前を殺してやると、いきなりトミ子の首に両手をかけ争った。そのはずみに妻を蹴とばして、ころころと下にころがったが、曲り角で手摺から空間へとび出さずに、まっすぐ壁にどすんと音をたててぶつかかった。彼女は、わたしがトミ子を完全に絞め殺すのを下から大きな瞳でじいっと見つめていた。



首の復讐

生史垣稲

画・齊良村中

玉の輿とはいえ相手は因業爺！ おぼこ娘が涙ながらに思いついたことは？

初枝の縁談

「初枝、初枝。ちよつと来なさい」と、奥の部屋で父親の声がした。

「はい。ただ今ア」

だが返辞だけで、初枝は楽しいお人形遊びをやめようとはしなかった。

小春日和の縁側は暖かくて気持ちがよかったし、それに……今、初枝は、千代紙で人形の綿帽子を作っているところだ。

早く人形のお嫁さんを仕立てて輿入れさせなくっちゃ……婿さん人形がぼかんとして待っているんだもの……友禪布れの夜具も手まわしよく、もうちゃんと敷いてある。一緒に並べて床入りさせるまでは、手が離せない。

「初枝。初枝ッたら……」

「待って、お父さま。今ゆくわ」

気にそまぬけど、いい加減な嫁入り支度で、直ぐ二つの人形を夫婦にした。

裸に剃いて布団の中へ並べて寝かせると……何かは知らぬが、甘ったるい幻想が湧いて、初枝はきゆうに顔がほてってきた。

幻想がさらに未知の世界へ伸びようとするところで、

「初枝、なん度呼ばせるのじゃ」と、奥の声はさすがに強い響きを持った。

やっと立った。

「なによオ。お父さまア」

廊下の端に父の居間がある。せいぜい甘ったれ声を出して、初枝はその障子をあげた。

「こっちへ入ってお坐りなさい。お前に少し話したいことがあります」

父の善兵衛は今年五十五。小間物問屋として日本橋でも屈指の丸持ちだが、世の中、なにも彼もうまくは揃わぬものと見え、長い間子宝に恵まれず、やっと、四十を過ぎてから初枝という一粒種を得たけれど、それと同時に大事な女房を失なった。

以来、初枝を舐めるようにして育て後妻も貰わずにすごすうちに何時か髪髪にはめっきり霜をおいてしまった。

藏臣忠容懷集特

顔の皺を一段と深くして、善兵衛は初枝を間近に招いた。

「お前、月のものはすんだかえ？」

「ええ、昨日……」

やっと二八の小娘は、耳のつけ根まで真っ赤にして呟やいた。女親が無いため肉体の驚異を父親に教わった初枝である。

今も今、その事への注意だろうと思っていると、

「初枝。実はな。お前を欲しいと言う人があるんだよ」

と、藪から棒の話である。

千代紙細工やお手玉が、素敵に面白いおぼこには、なんの事やらはつきりとはわからぬが、無闇に胸がときめくのである。

「でも、私……」

「わかってるよ」と善兵衛は、老いの眼を瞬かせた。

「わかってる、わかってる。まだ肩上げがとれたばかりのお前だもの。子供のような体で、男との添い寝は無理だとわかっておる。だがのう。そのお前を貰いたいというお方は、儼の口から、いやとは断れぬ大事なお方なのじゃ」

そして暗然と声をのむ。

男との添い寝……と

いう言葉が、初枝の胸に得も言われぬ妙音に聞えた。一人娘を手離すのは父親にとって悲しいことも知れぬが、案外、初枝には何でもない事であった。

今までの、人形相手の幻想が、いよいよ本物になって実現する……かえって何か期待めいたもので、心楽しかった。

だが、それは、ほんの束の間の事だった。

善兵衛が、

「かくしても詮ないこと、実は、その相手の方というのは……」

と言ひ殿み、すすつと鼻をすすり上げた時は、さすがに不安になり、

「本所松坂町の吉良上



野介さまなのじゃッ」

とうち明けられた時には、正直なところ眼の前がくらくらッとした。

「あの……吉良さま……殿中で斬りつけられた吉良さまですか」

余りにも思いがけない相手だった。あまりにも情けない相手だった。

吉良上野介と言えは一年前——元禄十四年三月に、殿中松の廊下で、浅野内匠頭に悪態をついて二太刀も斬りつけられたが、悪運強く命びろいをした男だ。その紛争の原因は、内匠頭から賄賂を取れなかった腹癒せに、さんざん意地悪をしたのだという。

喧嘩両成敗とは昔からきまりきった事なのに、身分が高家筆頭だというわけで、儲け物をし、相手の内匠頭が切腹を仰せつかったのに上野介の方はなんの御咎めもなしに、いけい、あしやあしと生きているのである。

世評は期せずして上野介に悪い。

まるで因業爺の見本か何かのように世間ではこき下して言う。本当にそうだわ、憎らしい……と初枝も日頃ではなしに、今が今でも、そう思っているのだ。

それが……なんと言うことであろう選りに選ってその因業爺——。父親善兵衛よりさら

に一まわりも老けた、そんな老いぼれに想いをかけられようなんて……。

隣のお久米ちゃんは、味噌屋の番頭と出来たし、向いのお八重ちゃんは、風呂屋の息子と一緒にになった。たとえ丁稚や三助でも、吉良の業つくよりはまだましだ。情けない。きつとお友達が笑うにちがいない。

どうしよう……思わずしらず大粒の涙をぼとりと膝へ落した。

「儂ものう」と善兵衛は塩辛声でつぶけた。

「世間への思惑もあり、なんとか御辞退申し上げたいのじゃが、なにしろ吉良様は、將軍家のお覚えも目出度い高家筆頭の御家柄、その御口添えで大奥女中衆の身の廻り品を一手に入れさせて頂いている、いわば商売上の大恩人なのじゃ。そのお方が、往来でふと、お前の姿を見染められて、どうしても夜伽の席にはべらせたい、ときつい御執心……もし断れば、儂の商売は成り立たぬ。どうか、老い先き短かいこの儂を助けると思うて得心してはくれまいか」

初枝のわつと泣きふす肩を、善兵衛は優しく撫でて言葉をついだ。

「だが、のう、初枝や。そう言う、如何にもお前を人身御供かなにかにするようじゃが

……考えようによつてはそれ程、悲しいことでもないようにも思われる。と言うのは、去年の松の廊下の一件では、多少評判も落しなすったが、なんと言つても吉良さまは、儂らなどとは桁違いの高い御身分の御方じゃ、大名さえも齒が立たぬと言うことは、内匠頭さまの御仕置でもようわかる。してみるとお前は大名以上の方の御内室になれる……数多の召仕えに囲まれて栄耀栄華も思いのままじゃ。それに吉良さまはもう相当のお年でもあり、夜伽の数だとして知れたものであろう。そしてたらお前はあの広い本所のお屋敷で、月よ、花よと気儘に暮していればよい事になる。見ようによつてはこれこそ玉の輿、それでこの儂に孝行が出来るとなりや、これほど好い話はまたとあるまいじゃないか。どうだな。日頃、利口なお前の事だ。その道理を考えて、うん、と縦に首を振ってはくれまいか」

と善兵衛はかき口説く。

栄耀栄華も思いのまま……この言葉にちよつと魅力を感じたが、でも初枝の涙は止まらなかった。

「いや、いや。私、いや。本所のお屋敷へ行けばまゝごとやお手玉遊びが出来なくなるも

特集 裏窓忠臣藏

の」
「出来るとも出来るとも。お殿様をお願いしてままたこの道具を、たとと買って貰えばいいよ」
と善兵衛はさとした。

行きがけの駄賃

幼い初枝にも自分の運命については心の中で観念している。

どう駄々をこねてみたところで力弱い町人が、無碍に貴人の望みをこぼみきれるものではない、「女大学」に教えられた、女の三従は絶対のものと思っている。

でも悲しい。やるせない。
居たたまらず初枝は裏庭の銀杏の樹蔭へ行って泣いた。葉が眼に痛いほどの黄色で散り敷いていた。

短かい秋の陽が火見櫓へ落ちかかって、西の空を真ッ赤に染めている。その茜色を反射しながら、くるくる舞い落ちた銀杏の葉が、彼女の肩にとまったのも知らずに、長い間泣いていた。

「お嬢さま。なにを泣いていなさる。お父さまに叱られましたかね」
優しい言葉と一緒に、肩をたたかれた。

若い男——。鼻筋がとおって眉が濃い。鳳眼隆準という形容詞をそのままに、袴でもつけさせたら立派な若侍だが、横丁で手狭な炭屋をやっている幸助。顔一ぱいに穢ならしく炭の粉をつけて、折角の美男子ぶりも台なしである。

だが、何時か夕涼みの時に、仕事着を脱いでさっぱりした幸助と、連れ立って花火を見に行つて以来、初枝の胸になんとなく甘い感情を湧かせる男なのである。夕陽と言ひ銀杏と言ひ、この上もなく揃った道具立ての中で、初枝は男の言葉を夢のように聞いた。
「叱られたんじゃないわ。炭屋さん、もっともっと悲しいことがあるの」

「へえ……お人形さんでも壊したの？」
と幸助は眼を丸くした。

「ちがう。ちがう。馬鹿ねえ、炭屋さん……。なにもわかつてくんないのねえ」
そこで又、可愛い肩を震わせて泣きじゃくった。泣いているうちに益々切なくなってきた。泣いているうちに益々切なくなってきた。

その切なさには幸助のせいみたいと思われ

た。そうだ。幸助がいけないのだ。こんな話になる前に、幸助が私をお嫁さんにしてくれればよかったんだ。男ッぶりさえよかったら、お友達はみな羨ましがるに違いない。もう言っても詮ないことだけれど……。

だが、そのうちに、初枝の心の中にむらむらッ一つの恐ろしい考えが浮んだ。

そんな事を、どうして急に考えたのだろうか。恐ろしい、思わしい事だと思ふのだけれど、泣きくたびれた頭には、そんな反抗がとても魅惑的な行為に考えられて仕方がない。

「炭屋さん、ちょっとおいでよ」

「何処へ？」

と幸助は怪訝な顔をした。

「あそこ……」

「お蔵？」

初枝の指さした銀杏の向うに、白壁の土蔵が一ぱいに夕やけを浴びて建っていた。

「そうよ。ちょっと来て」

初枝はこつくりとうなずいて、その方へ誘う。

「何か用？ 私はまだ炭を切つて物置へ入れなきや、また口やかましい女中頭に怒られますよ」



「いいのよ。そんな事……、早くきて……」
戸迷う男の顔を見て、初枝は今こそ本当に
叛逆の魅力に矢も楯もたまらなくなった。
幼い肉体の中に宿る悪魔の仕業であるかも
知れない——彼女は上野介に無理矢理に奪わ
れてしまう前に、一番好きな幸助に、処女の
初穂を摘ませようと決心したのである。それ
は、ただ、叛逆という事だけではなしに、過

去の素晴らしい思い出を完璧なものにして置き
たかったからでもある。
幸い、店の立て込む時刻なので、裏庭は落
葉の騒々音ばかり——。初枝は土蔵の網戸の
方へ男を誘った。
幸助の躊躇は、白い乙女の手招きには極
めて力強いものであった。初枝につづいて彼
の体も、妖しい期待に打ち震えつつ、扉をす

るりと抜けて入った。

「足元に気をつけてね。こっちよ……」

と、初枝がささやいた。

閉めきった蔵の中は暗く、微くさく、そし
てごたごたと色んな物が詰っていた。

「こんな事して、旦那に叱られないかい？」

「いいの、お父さまなんかいの。私の方で
お父さまの事、怒ってんの」

なぜというわけは話さなかった。口にする
さえ悲しかったし、その事実を好きな幸助に
知られたくはなかった。ただ、眼の色に、父
への激しい反抗をあらわした。

幸助は、明日からこの家への出入をさし止
められるかも知れない……という、最悪の場
合をちよつと頭に浮べてみた。

御得意が一軒減る……でもそんな事は、す
ぐに問題ではなくなってしまう。と言うの
は、甘酸っぱい匂いも鼻を酔わせたし、泣き
腫らした臉の膨みが、この上もない色っぽさ
を湛えていた。

和製揚貴妃の歎き

初枝の興入は日本橋から本所松坂町まで、
世間の手前もあるので、成るべく目立たない
ようにという吉良家の申出であつたけれど、

それでも行列は半町もつづいて、豪奢をきわめたものとなった。

内輪に、内輪に言いながら、それでいて当の吉良家でも、縁辺の者を招いて、盛大な宴を張った。

広い座敷に集った者は、筋骨逞ましい侍が多く、それは赤穂浪士の襲撃に対する用心棒……と言えは聞えは悪いが、つまり親戚の上杉家からさし廻された、上野介の附人であった。筋骨たくましい剣客達は、浴びるように酒を呑んだ。

その時も上野は、にこにこ笑いながら見ているだけだったが、それもこれも、如何に当夜の老いた花婿が、無上の幸福感に酔っていたかの証拠であった。

盛宴の半ばで花嫁は、中座を隔てて廊下づたいに離れ座敷へ導かれて行った。

「やっと二人になれたのう」

上野介は顔一杯に皺を作ってやに下った。

「……………」

初枝は敷居近くで顔を伏せてこの声を聞いていた。

「さ、こっちへ来やれ。もう楽にしてもよいのじゃよ」

処女の羞恥と恐怖からそんなに固くなって

るのであろうと上野は思った。初夜の床入りを眼の前にしては当然だ。それが魅力で金に糸目をつけずに、無理強いに連れて来た来なのだ。

「そなた怖いのか？」

返辞のかわりに微かにうなずいた。

「怖い事はない。女子は誰でも一生に一度は経験する男女和合の秘事じゃ」

爺いの癖になにを言っている……と初枝は可笑しかった。なにもかも土蔵の中で経験済みだ。怖いどころか男の手ののびて来るのを待っているほどだが、しおらしく見せないと恰好がつかないからだ。老人は気の利かないものだわ、こんな時……。で、そっと、上眼で上野介を見た。

貴人らしい細面の白い顔。髪もすっかり真っ白で……。ああ、あの傷だなと初枝は直ぐに気がついた。額の生え際わに、斜めに二寸ばかりの刀傷がある。言わずに知れた内匠頭の斬りつけた傷痕だ。

初枝が上眼をつかったのを、上野介は承知の合図とうけ取った。

やんわりとよって来て、肩へ手をかける。

「あら」

わざと恥かしげな声を立てて身を引くと、

白輪子の梅に鶯を織り出した裾襦が、さやさやと紅絹裏のすべる音をさせて畳へ流れた。

下は匹田鹿子で御簾絞り模様の小袖、練り白粉でくつきりと三ッ足を描いた襟首が白々とぬけ出して……。生毛を上から塗ったおした白粉は、絹行燈からくる橙色の光を思ふさま吸って、続のように光っていた。

さすがこの首筋の魅力に老いらくの情欲がむらむらと頭をもたげたものであろう。上野介はちゅッとその三ッ足の辺りを吸った。

老人の唇は冷かった。ぞっと体のすくむ思ひだったが、導かれるままに金屏風の蔭へ行った。

燃え立つばかりの緋の蒲団が一重ね……。初枝はしおらしく小袖を脱いで、襦袢一枚で床入りをした。

家を出る時、善兵衛が、あれこれと男親は男親なりの心配をしてくれて、「女粧います鏡」という黄表紙本を読み聞かせてくれたが、その中の一節に、初夜の床入りの心得として、「さてまたお心得の第一は、婿君も一所におしづまりのとき、婿殿よりは少し引下がって、横におなりなされて、向うから見おろし、手前よりは見あげるようになさる時は、鼻の孔が見えぬゆえ、お顔の恰好がよく

見えます」

と書かれてあった。

初枝はその文句どおり、鼻の孔が見えぬよう、少し引きさがって横になった。そのため頭がちやうど、上野の鼻の下あたりへきて、鬢付油にむせた老人は、思わず大きくくしやみをした。

お蔭で鼻の孔がまる見えだった。赤く長い鼻毛が顔を出していた。鼻毛の数が読まれるほど接近してみると、整った顔の造作だが、どこか間が抜けていた。

鼻毛を伸ばしている具合も、品がなくて安ッぽい。これが本当に五万三千石の大名を取り潰した男だろうか、怪しまれるくらいだ。枯木のようにごつごつした体や、年寄りくさい息でただ、埒もない口説だけなのである。おのれの物にした獲物を、眺めるだけだ。

六十の坂を越した老人では無理もない。ことに松の廊下の一件以来、ひどく命の惜しくなった上野介は、なるべく尊い精力を消耗したくないと思っていた。彼は初枝の若い体を愛したが、そのために己の命数を縮めるような過労は極度に避けた。

そんなわけで、初夜にも、次の夜にも、初

枝はただ、従らに体を熱くして満たされぬ欲情のために狂おしく過した事であった。

七日、十日とそんな日を空しく送った。

善兵衛が言ったように、吉良邸の生活は申し分のないものであった。召使たちは彼女一人をこの上なく大事にしてくれたし、美衣美食は文字通りの大名生活だった。

初枝には段々と上野介の意中が解って来た。上野が時々もらした言葉を煎じ詰めれば、

こういう事になる。つまり人間が長生きするためには若い異性と接すればよい。接すると言っても、肉体関係の度が過ぎて過労に落ちてはかえって寿命を縮めるが、ただ話をした

り眺めたりするだけなら、異性の精気が自然に移って来て若やく。

これは漢国で「採陰補陽の術」という回春術だ。相手の異性が若ければ若いほど、効き目がある。

唐の玄宗皇帝が、七十歳を越してもなお楊貴妃に恋したというのは、すなわちこの回春術を用いていたためである。

日本にも伝って高貴のお方はみな、若い女子を侍らせているのはそのためだ。そなたも年の違う儂の邸へ来るのは嫌だったろうが、

そんなわけだから体の苦勞はさせぬ。氣随氣儘に遊んでいてくれればいいのだ……という事であるらしかった。変な話だ。初枝は氣を紛らわそうと庭苑を歩いてみる。

彼女が築山を一巡りして、裏口の炭納屋の傍まで来た時だった。

「あら、幸助さん」

と思わず初枝は叫んでしまった。相変らず炭で顔こそ汚れているが、間違ひもなく炭屋の幸助が、今しも納屋から出て来たところだった。

炭小屋のささやき

「おお、初枝ちゃん」

と幸助も感極まった声を上げたが、直ぐに氣づいて言葉を改めた。

「これはこれは、飛んでもない無礼を申し上げました。どうぞお許しなすッて……奥方さま」

「何を言ってるんだね、幸助さん。奥方も糞もあるものかね。私はお前に会いとうて会いとうて……」

でも、さすがに人眼が氣になると見え油断なく周囲を見廻した。幸い人の氣配はないが、侍長屋の辺りで、

「ええッ」



良

「とうッ」

と勇ましい撃剣の懸声がする。恐らく武芸自慢の附人たちが稽古に励んでいるのである。きゆうに初枝の眼の色が妖しく輝きはじめた。

「早う、幸助さん、早う」

と初枝は炭小屋へ男を招いた。そこで何をしようというのか、眼の色ではっきり読みとることが出来た。よくよく埃臭い所で密会する運命だ……と幸助は思ったが、今度はこの前と大分事情が違う。見つければ御得意さまを一軒失うだけではすまなくて、悪くすると首が飛ぶ。

「だ、大丈夫ですか、奥方さま」

「大丈夫さ。なにをびくびくする事があるものかね」

「でも、あの撃剣のお侍たちは、とても怖い顔をした人たちばかり……」

「大丈夫よ。皆、私の家来だもの……」

でも、なお幸助は躊躇って、

「一体、何人ぐらい附人の方はおられるんで……？」

「そうね、百二、三十人はいるわ」

「腕の立つのは誰方さまで……？」

「さあね、小林平八郎、清水一角などというのが強そうだけど……あら！ 幸助さん、そんな事聞いて何にするの？」

と初枝はふと聞き咎めた。

というのは、かねて上野介から邸内の模様は、たとえ父親の善兵衛といえど決して漏らしてはならぬと言いふくめられていた。赤穂の浪人たちへの警戒からである。

世間では浅野家の家来どもが、復讐を企らんで邸内を狙っているという専らの評判だ。姿を変えた間諜が、大胆にも邸内へ潜入しているという噂すらある。油断が出来ぬ……とそこまで考えて来た時、初枝の頭に、ふと一つの重大な事柄が閃めいた。

——幸助こそその浅野の間諜ではあるまい

藏臣忠容裏集特

が。そう言えば、いつも顔に炭の粉をつけて人相を隠している。

その癖、夕涼みの日に見た幸助は、侍にして見たいようなきりつとした顔をしていた。言葉づかいにも町人らしくないところがあつた。これはてっきり浅野の廻し者だ。だが、諜者とすればなんという腕の立つ男であろう。奉公人よりもよりの事、出入の商人に至るまで一切の人間は、根掘り葉掘り詳しく身許を調べたあとでなければ門の内へは絶対に入れない。完全な外界との交渉を絶っている筈なのに、何処をどう胡麻化して入り込んだものであろう。恐らく赤穂浪人の中でも何の某と名のある侍に違いがたい——。それからそれへと迫る連想は、初枝にとってはこの上もなく楽しい、興味ぶかい事柄だった。

それもそうであろう。上野介の上べだけの妻では憎しみこそ持っておれ、なんの愛情も感じてはおらぬ。かえって世間並みの吉良への軽蔑と憎悪が、興入れ以後のじれったい肉体関係で、いよいよ油を差されたようなもの

だ。

その反射作用で赤穂の浪人には、人一倍の同情と憧れを持っている。誰も彼もが男らしく、素晴らしい美男子であるように思っている。今、それを、確かな自分の勘だけで探り出した。なんと言う頭の好き。そして、なんと言う芝居がかった嬉しい成り行き……初恋の男が、復讐に身をやつす赤穂浪士であろうとは……初枝はこの素晴らしい思いつきに酔った。

「ね、幸助さん、あんた隠しているでしょう。炭屋の幸助とは世を詐る仮りの名……実は赤穂の浪士……」

「と、飛んでもない」

と幸助は真ッ青になった。

「その、慌てて打ち消すところが何よりの証拠。でも、私に知られたからとて、なんの心配もいらぬことよ。私は忖からお前に惚れてるんだし、ここは裏庭の炭小屋だもの。誰が気づくものですか」

炭小屋の中は薄暗い。わずかに羽目板を漏れて来る糸のような光をうけて見違えるほど美しくなった初枝の顔が、あふれるような媚を含んで近づいて来た。

「奥方さま。なんで私がそのような……」

「いいのよ。わたし、何も彼もわかっているんだから……、その奥方だけはよしてね。わたし、今でもお前の初枝に変わりはしないわ」

濃い仙女香の匂いと、熟れた女体の香り……幸助はすぐ夢中になった。

久し振りに恋しい男と会った初枝は、それから何食わぬ顔で座敷へ戻った。少しも良心の痛みなど感じなかった。

憎い上野介。若い私の体を長生きの道具にした憎い爺。ざまあ見ろ、という感情しかなく、一つその間抜け顔を見てやれという気になって上野介の居間へ向った。

と、襖へ手を掛けたとたんハッとした。内から、

「そんな事では邸内のしめしがつかぬ。よく考えて貰いたいものです」

という声が聞えて来たからだ。それは意外にも上野介の声ではなくて、附人小林平八郎の声なのだ。確かに小林から主人上野へ苦言を呈している言葉……と気付いたが遅かった。襖がもう半分程開きかけて、内の二人は初枝の出現を見てしまった。

「おう、これはこれは奥方さま。秋色を賞でて、お庭の御散歩でござりましたか」

と小林平八郎は、今話をぶつつりやめ、

如才なく初枝の機嫌をとった。だがそれは口先だけの事で、眼の中の峻しい影は拭いようもなかった。

邸内のしめいがつかぬと言っていたが、誰か炭小屋の密通を覗いた者があるのではなからうか……ちよつと不安になったので、初枝はせいせい甘ったれて気を引いてみた。

「御前さま。築山の楓が真ッ赤に紅葉して、どこも綺麗でござりました」

「おうおう。そうであつたか」と上野介はやに下つたが、「大分樹の下を歩いたと見え、髪に蜘蛛の巣がかかっているの」

上野が手を伸してとろうとすると、初枝は彼の膝へぐつたりと身を凭せかけて行つた。

「では、拙者、失礼いたしまする」

それを見て小林平八郎は、慌てて逃げ出した。

「ほほほほ、御前さま。あんな武骨者でもあてられるものと見えますのね。時に、何ですの、何の話……鹿爪らしい顔をして……」

と探りを入れると上野介は、酷く情けない顔をした。

「いや、取るにも足らぬ諫言立てじゃ。何も心配するには及ばんよ」

と言いながらも、その顔は曇っていた。

思ひなしかその日以来、小林平八郎の初枝を見る眼が違って来た。何かしら一種、輕蔑に似た色が混っているのである。氣味が悪い。だからと言って幸助との逢引は諦められずたびたび、炭小屋であいびきを重ねた。

元禄十五年の秋もいつか足早やに過ぎて行つた。冷たい風が吹いて、炭小屋の逢う瀬を寒い味気ないものにした炬燵が欲しかった。温かい四疊半のしんねこに憧れた。或る日、初枝は幸助に言った。

「ねえ、私たちも何時までもこんな窮屈な思いで逢つていても仕しようがないわね。一層逃げてしまひましようか」

すると幸助はなんの躊躇もなしに、
「そうしましう。知らぬ他国へ駈落して、のんびりと、二人で暮しましうや」

仇討も何も忘れた顔が、案外であつた。男の氣の変らぬうちと、初枝は早速その夜、吉良邸を抜け出して、手に手をとつて駈落した。

色道仇討

道行はひどくだらしのないものであつた。江戸を發つてから一ヶ月、師走も半ばだと言ふのにやつと東海道を小田原の宿まで来た

に過ぎぬ。宿屋々々で乳くりあい、幾日も逗留するものだから、一向に行程が進まぬのである。

興入の時の持参金を、そのままそっくり持つて出たので、路銀の方の心配はなく、氣儘の旅であるし、街道筋の寒風がいつも初枝に駄々をこねさせるのである。

「少しくらい寒くても我慢して、なるべく先を急ぎましようや。追手がかかると面倒だから」

今日も今日とて小田原の旅籠屋の二階で幸助が言ふと、

「何を言ふのよ。こんな大雪に、一步も外へ出られるもんじゃない」

と初枝は炬燵に入つたまま動かない。なるほど前夜から降り積つた雪は、屋根も往来も真ッ白に埋めていた。近年にない大雪である。

「今年のうちに箱根を越えりやいいじゃないの。今日は一体、何日なの？」

日にちも忘れてる呑氣さに呆れながら、
「今日は十二月の十六日ですよ」

しようがねえなあ、とつけ加える。

「ほう、今年もあと僅かになったね。でも、やきもきしても始まらないわ。一杯飲みましようよ」

とそう言つて初枝は手をたたいて女中を呼ぶ。

ところが今日はどうしたのだろう。いくら呼んでも返辞がない。しよふことなしに初枝は立つて、廊下と境の障子を明けた。するとそこに丹前姿の合宿の客が二人立っていて、声高かに立話をしているのが耳に入った。

「え。どうも、大したものじゃありませんか大石内蔵助初め四十七人、昨夜吉良邸へ乱入して、目出度く上野介の首をとったというじやありませんか。もうどこへ行つてもその噂で持ち切りでさあ」

「あつしも今、下で聞きました。飛脚が通ることとその噂を聞こうと、帳場もがら空きにしてみな表へ出払つてしまふという騒ぎでさあ。実際、前代未聞の事件ですからねえ。かねて吉良邸へ間諜が入つていたとかで、間取りまでが、ちゃんと赤穂方に分つていたそうで……小林平八郎、清水一角などという附人が防いだけれど、難なく上野介は討取られたそうですね」

「いやいや、それが、情けないじゃありませんか。裏の炭小屋へ隠れていたところを、引きずり出されて首を刎ねられたとか……」
初枝はのけぞるほどに驚いた。

ああ、やつぱり赤穂浪士は吉良邸を狙つていたのだ。曾て密通を続けた炭小屋で上野介首を取られたと言う。ちよつと妙ちきりんな照れ臭い氣もしたけれど、さては幸助め、赤穂浪士ではなかったのか、とまず腹が立った。「助幸。聞いていたかえ、今の話……お前はよくも……」

聞き耳を立てていた幸助は、とたんに龜の子のように首を縮めた。

「私は何も、赤穂浪士だなんて言つた覚えは初めからねえんで……」

「そんならそうとはつきり言えばよかつたんだよ」

おどおどする男の醜い姿に、初枝の怒りはますます燃え上る。

「炭屋のくせに侍振つた顔をして、まんまと私を担いだんだね」

路銀を持たね幸助は、ここで見捨てられたらどうにもならぬと、米搗きばつたのように頭を下げて平ら謝り。

「私の顔が悪いんです。町人にしては強過ぎるんでこんな間違いが……お氣に触つたらどうぞ御勘弁なすつて下さいまし」

こうなつてみると、全く貧弱なつまらない男である。初枝はへども吐きかけてやりた

い氣持がした。

夢——そうだ、夢に違いなかつた。おんば日傘で育てられた世間知らずの小娘が、自分で勝手に描いた芝居染みた夢だったのだ。覚えてみればあつけない。

「あああ、むかむかするねえ。思い切り酒が飲みたくなつた」

呟くのを幸助が、忠義顔でうけて、

「私が女中を呼んで来ましょう」

と、すっかり、下僕になり切つてゐる。

「お黙り、お前の顔なんかもう見たくない」
初枝は廊下へ出ると無闇に手をたたいて女中を呼んだ。

と、この時である。初枝にとって又々驚天動地の事が起きた。と言うのは今着いたばかりらしい旅装束の爺さんが、うらぶれた顔でひよこひよこ階段を上つて来たが、顔が合つたとたんに思わず初枝は、

「あッ、御前さま！」と声を立ててしまった。紛れもしない死んだ筈の、上野介である。

「おお、初枝か」と上野も驚いた。

上野介が生きてゐるとは……これは一体どうした事なのだ。

「御前様。吉良の御前さんがどうしてここへ？」

すると上野は慌てて口を押え、部屋の中へ押し戻した。

「そ、それを言うな。初枝。人聞きが悪い」

「どうして、又、死んだ筈のあなたが……？」

「わけは今話す。落ちついてくれ」

「ごほんごほんと老人らしく咳込んで、

「実はの。儂は吉良上野介の替玉だったんじやよ」

「えッ！ 替玉ですって？」

「そうじゃ。上野介が赤穂浪士から狙われて

いるというので、本人に瓜二つの偽者を江戸

じゅう探して探し当てた。そして、ばた屋を

やっていた俺に白羽の矢が立てられたという

わけじゃ。転んで作った額の傷まで似ておる

というのだな……」

「まあ、あんたがばた屋？」

「そうなのじゃよ。そのばた屋が忽ち高家筆

頭の身分に出世した。いささか赤穂浪士の動

きは心配じゃったが、柔らかい着物に美味い

料理……極楽浄土とはこの事かと俺は思っ

た。したい放題、我儘の言いたい放題、そこ

で適度にやめておけばよかったが、日本橋で

お前という女を見染めてからは、矢も楯も耐

らず、無理を言うて連れて来た」

「まあ憎らしい。私、替玉の玩具にされたの

ね」初枝は眼の前が真ッ暗になった。その白髪頭をぶん撲ってやりたかった。「まあそう怒るなよ。本物の上野に嫁いだのなら、今ごろ大怪我をしているぜ」と替玉吉良は眼を笑わせた。「そう言えばこの俺だとて、お前のお蔭で、助かったようなものさ。というのは、我儘者の上野だから若い女を貰うということが、如何にも本物の上野に見えるので、附人どもも喜んでお前を迎えたが、どうも、お前がひどく贅沢と来ている。邸内のしめしがつかぬし大金がかかる。いい加減にしてくれよと再三小林平八郎が文句を言いに来た」

ああ、それであの時替玉が浮かぬ顔をしていたのだな、と思い出す。今となっては小気味がいい。あの時もうんとべったりくっついて、散々附人を悩ましてやったんだから……「そこへお前の馳落騒ぎだ。いくら何でも外聞が悪いと、俺は即刻クビになった。クビにはなったがこの事が世間へ知れてはならぬので、俺に江戸から姿を消してくれという。とほとほこここでやって来ると討入の評判だ。俺にこりて、あれから本物の吉良上野介が本所の邸に入っていたものらしい。お蔭で俺は助かったよ。先刻からほっとして首の周りを撫でているところさ。命あつての物種じゃからのう」

「まあ、呆れたわ！ この糞爺い！」

「どうもこいつも偽物ばかり。馬鹿々々しいやら口惜しいやらで初枝は涙も出ない。

「それはそうと初枝、いいところで会った、

お前、金を少し融通してくれる。今朝から何

も食っておらんのだ」

「何言ってるの、ずうずうしい」

初枝はもう居耐らなかった。女中が来ないので階下へ駆け降りて行って、琉球渡りとか

いう思い切り強い、焼酎を持って上つて来て

みると部屋の中は、どたんばたん大騒ぎが

始まっていた。

「初枝は俺の女だ」

「何をほざくか、この死に損いめ」

「賈上野介と賈赤穂浪士は掴み合い引ッ掻き

合い、血だらけになって争っている。

「ほほほほ」と初枝は焼酎を一杯ぐいすと

飲み干して、冷たい眼で笑い乍ら言った。

「これじゃまるで賈物同志の討入騒ぎだね

え」

その言葉の終らないうちに、組合ったまま

二つの体は欄干を越して下の往来へ、どつと

ばかりに落ちて行った。うーんと悶絶する呻

き声を聞きながら、初枝は焼酎をあおった。

仕掛銃

ワトスン・独田

冷たい銃口が、じつと彼を狙っている！ ちよつとでも動けば、轟然と身体を射ち貫かれるのだ！

相対

性原理

「お前たちは、相対性原理ということを知っているかね？」

若い保安官ホワー

ド・ウィルソンは、

にこにこしながら弟と妹をかわるがわるながめた。

「知ってるわ、アイシユタインが発明したのよ」

「発明？ でも、えらいな、スーシイは」

「その人は原子爆弾もつくったわ」

「へん、何も知らねえな。出鱈目だ。ほくのほうが知ってるア」

二人とも中学生である。休暇を利用して、はるばるデトロイトから、この田舎町、ヨルダンタウンにいるホワード兄さんのところに泊りにきた。

「相対性原理というのはね」中学三年の弟は得意になって乗りだした。「アイシユタインが発見したものだ

この原理で

原爆ができ

たんだ。日

本人のユ

カワも同

じことを

発見して

すんでのことでア

メリカより先に作

るところだった」

くすつと兄は笑い

「お前のも出鱈

目だ。ユカ

ったのはイタリヤ人のフェルミだ。まあいい、で、その相対性原理というのは何だい？」

「知ってるよ」弟は参らなかつた。

「ほくが停車場へ行くのではなくて、停車場が僕のところへ来るといふ理屈なんだ。平行線が交わったり、光が曲ったり、宇宙には涯があつて限りがなかったり、とにかくむずかしいんだ」

「なるほど、いろんなことを知ってるな。だがね、ここで一番よく相対性原理を知っているのは、ほら、あのおじいちゃんなんだよ」

「へえー、おじいちゃんが！」

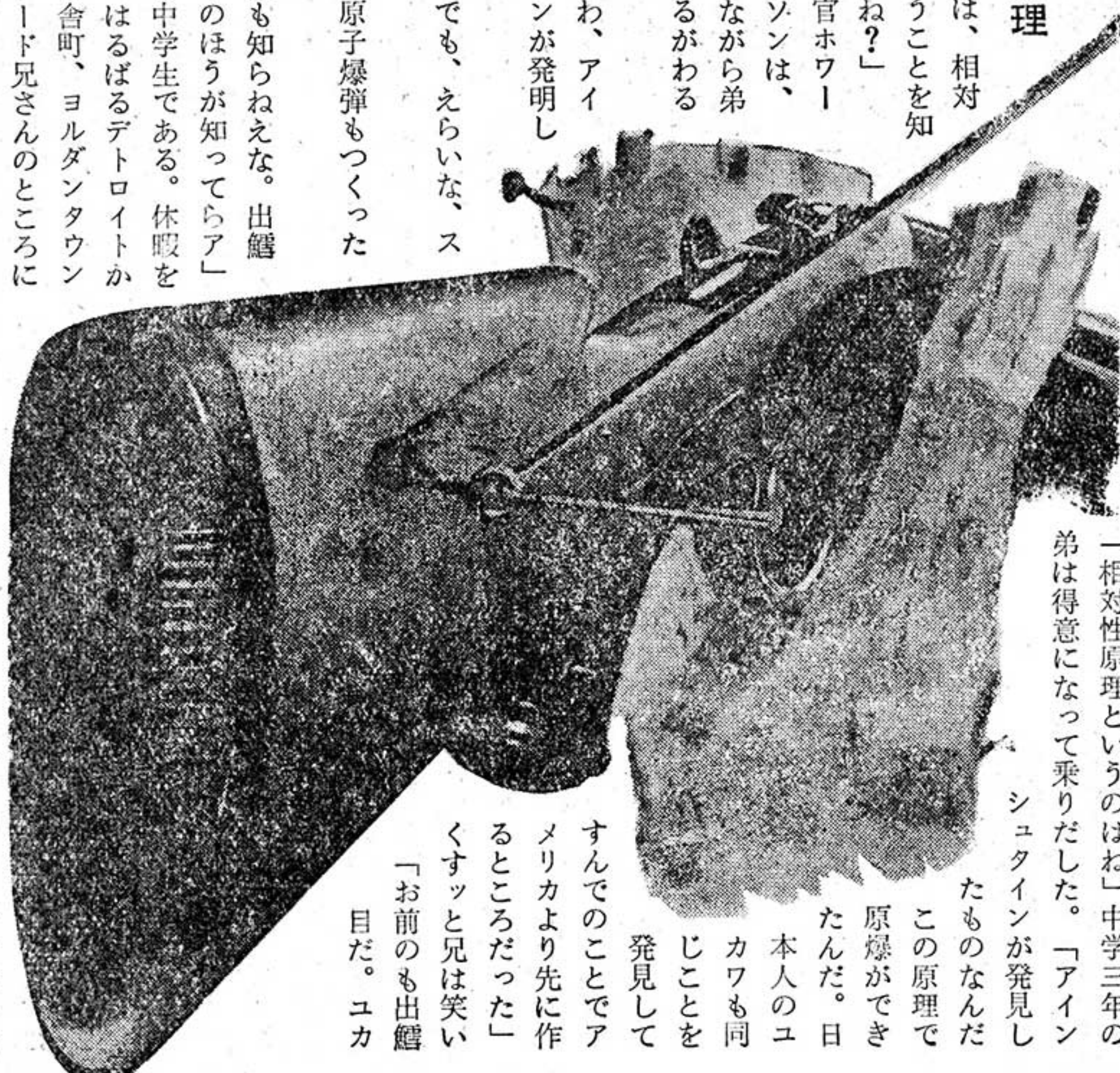
子供たちは同時に声をあげた。その声にだいたい御神酒がまわってとろんとしていた老人が、ふつと顔をあげた。

「わしが、どうしたというんだ？」

「おじいちゃん」スーシイちゃんが詰めよった。

「教えてよ、ほんとの相対性を。兄さんたち、あたしが知らないと思っていじめているの」

老人は、眼をパチクリさせたが、スーシイちゃんの金髪を乱暴になで、さて、みんなが発見したのは中性子理論だよ。原爆を作



なのほうに向きなおり、

「なんのこったか、さっぱりわからん」

両手をひろげ、肩をすぼめた。

「さアさ、どっさり食べて下さいよ」

そのとき、ホワードの新妻キャロルが、大きな鉢に湯気の立っている御馳走を山盛りにして部屋に入ってきた。

「けしからん！」

老人は、テーブルをたたいたが、口元は笑っていた。居眠りをしているあいだに悪口でも言われたと思ったらしい。

「あなた」若い保安官夫人は良人をにらんだ

「またお爺ちゃんをからかったのね？」

「ちがうよ」中学生は口いっぱいに何かを頬張りながら弁解した。

「ぼくたち、相対性原理の話をしていたんだ」

「何、その、相対なんとかいうのは？」

あつはつは、と保安官が笑って妻を見上げた。

「たとえばね、もしお前が、あの燃えているストーブの上に五分間くらい坐っていたら一時間も坐っていたような気がするし、俺がお前と一時間いっしょにいても、五分間くらいにしか感じられない」

ぷつと新妻は吹きだした。

「嘘よ、あんなこと言って。あたしと五分間いっしょにいたら、やはり、熱いストーブの上に坐っていると同じでしょう」

「兄さん、ごまかしちゃダメだよ」中学生が切りこんだ。

「はやく相対性原理を教えてくださいよ」

「だから、いま教えてるんだ。いちばん、よく知ってるのはお爺ちゃんなんだが」

「ああ、わかった」キャロルは大きくうなずいた。「あの話をさせようというのね、お爺ちゃんに。めったなことでは話さないわよ」

チラと老人のほうを眺めた。

「いや、話してやろう、子供たちに」

とつぜん、老人は、いきいきと眼をかがやかし、きつと顔をあげた。

「わしが、どうして一辺に年をとったか、あの和尚のジョンと渡りあった話をしなう、今夜は」

子供たちは、食べる手を休めて、いっせいに老人の顔を注視した。

「あらあら、焦げてしまうわ」

頓狂に叫ぶと、キャロルは台所に駆けこんだ。老人は、しずかに語りだした。

「わしはな、この町で三十年も狩猟監視員をやった」

ヨルダンタウンの主

フレッド・アトキンスは、二十三のときから狩猟監視員だった。ミシガン州ヨルダンタウンで生れ、そこで育ち、どこにも出かけたことがない。もっとも、その田舎町を中心とする猟場なら、どこの谷のどんな石でも知っている。いわば、この附近一帯の土地の生字引で、アメリカでも有名な狩猟地であるその地を訪れる天狗たちは、どうしても彼に挨拶をしておく必要があった。

フレッド監視員は善玉でも悪玉でもなかった。むしろ、かんしゃく玉だった。若いときは、かなり荒れたこともあったが、年と共にすっかりカドがとれたフレッドおじさんになった。町長も保安官も頭が上らない。保安官など、しょっちゅう交迭していて、さっぱり町の事情や猟区のことなどわからないので、いやでもフレッド監視員の助けをもとめねばならなかった。

かなり前に妻に死なれてずっとヤモメを通し、息子夫婦と一緒にくらしていたが、自動車事故であつさり二人を持って行かれ、以来たった一人の孫娘と、猟銃や大鹿の頭が飾つてある西部劇に出てくるような家で生きてき

た。この孫娘のキャロルが現在のホワード保安官の妻である。かわいい、おきやんな、利口な田舎娘で、フレッド爺さん、目の中に入っても痛くない天使だった。もともと、表面は、持前のカンシャク玉を破裂させて、しょっちゅうどなりちらしていたが、彼女は、ちっとも怖くないのだった。

和尚のジョンが、その町へ来たのはいつのころだったろう？ 誰もはっきり言えないがとにかく、その風変りな獵師は、いつの頃からヨルダントアウンの住人になっていた。もちろん、フレッドは、その男が、表面は法規を守っているふうを装ってはいるが、その実体は密獵者であることを見抜いていた。

ジョンは、ほんとの牧師ではない。しかし彼は、すぐに自分のまわりに人を集めて、面白おかしく説教をする才能をもっていた。聖書の文句を引き、よく群衆の心をつかんで興奮させた。

「いいか、みんな、銃は正しき者のためにあるんだ。地上より悪しきを追い払えよ。おめえたちや、十字軍ってのを知っちゃいめえが、銃をとったら、まさに十字軍たるべしだ。われらキリスト教徒に逆らうやつをたおすんだ。では、その敵とは何だ？ 熊だ！ 熊こ

そは、この地上の暗黒の王者なんだ。熊をたおせ！」

いつでも、こうだった。まことに変わりがな説教だった。しかし、和尚のジョンが、どうしてあままで熊を憎むのか、誰も知らなかった。子供のとき、熊にひどい目に会わされたんだ。いや、奴は、子供のとき、母親が熊に殺されるのを見たんだ。などと勝手に噂したが、ほんとうのことはわからなかった。

和尚のジョンは大池の北側に住んでいた。なかなかの腕前で、ワナと鉄砲で、相当の獲物をあげていた。鹿や鱒の季節になると、町は人出でにぎわった。ことに、夏のカーニバルのときは、たいへんなごった返しである。そういうとき、ジョンは、ギターをもって群衆の前や酒場にあらわれ、みんなを笑わせた歌ったりした。

たった一人だけ笑わない者がいた。フレッド狩獵監視員だった。

フレッドとジョンの睨みあい表面化したのは、ミシガン州が一定期間のあいだ黒熊の狩獵を禁止したときだった。春になると、フレッドは、冬のあいだにどのくらいの鹿がたおされたかを見廻りに森へ入るが、その春、六頭以上の熊の死骸を岩鼻や谷川のほとりに

発見した。

「熊を目の仇にしてるんだ、あいつは」フレッドは山の中で独りごとを言った。「禁止法が出てからは、以前に輪をかけてやりあがる」

だが、彼は、まだ一度も和尚のジョンが法規を犯している現場をつきとめたことがない。「畜生！ わしがいるのを百も承知で、こんなことをやりあがる。ナメてるんだ、わしを」

彼は、かんしゃく玉を破裂させた。すぐに家にとって返し、そのころ十四になったばかりのキャロルに弁当をつくらせ、山籠りの支度をした。

「おじいちゃん、どこ行くの？」

「うん、二三日、お山へ行く用ができた。ひとりで淋しかったら雜貨屋のオバさんに来てもらいな。だが、お爺ちゃんが山へ行ったなんて誰にも言うんじゃねえぞ、いいか」

こわい眼で少女をにらみ、次に抱きあげて頬つぺたに大きな音をたてた。

それから二時間後、彼は、半月が照らしている荒涼たる岩山をのぼっていた。それは、遠くから見ると、インデアンの横顔に見える岩の堆積で、鼻の中途に一頭の大熊が、みこ

とに脳天に一発くらって転がっていた。

まだ皮は剥いでなかった。彼が、これまで見た熊の死骸は、大半は皮をはがれて腐っていた。中には殺しっぱなしのものもあった。単に熊を憎んでやったのだ。だが、岩鼻の熊は、昨日か一昨日でも撃たれたらしいような新しいものだった。

きつと、皮をはぎにくる！　これが、フレッドの見込みだった。

彼は、顔の眼にあたるころの岩蔭に陣どって辛棒づく待った。夜気が、ひしひしと山や谷をつつみ、岩は、すっかり彼を冷やした。眼の下に、半びらきにしたり口を空にむけた熊の顔が異様に月にてらし出されていた。その月も、いつのまにか暗くなり、もう谷は黒一色になって何も見えない。

フレッドは、まっ暗になった地球上の唯一人の眼ざめている人間のように、じいッとあたりに耳をそばだてていた。

東の空が白んできた。

「ちッ！」

舌打ちをして、キャロルが作ってくれた弁当を開いた。何事もなく夜が明けかかっている。彼は、今頃はすやすやと眠っているであろう孫娘の姿を思いうかべた。かすかな微笑

が精悍な顔にあらわれては消えた。もう東の山は、まっ赤な朝やけを背景に杉のシルエツトがくつきりと黒い。

はッとして顔をあげた。なまじ、腹をこさえたばかりに、つい、うとうとしたらしい。誰かが岩をのぼってくる！

仇 敵

「とうとう見つけたな！」

皮剥ぎナイフを熊のノドにあてた瞬間、和尚のシヨンは、ぎよッとして後を仰いだ。

五メートルばかり上の岩から、フレッドが銃の狙いをつけていた。

「なんとか恰好つけたらどうだ？」

上からどなった。シヨンは、ちらと自分の銃に眼をやった。遠すぎる。

「早くしろ！」

和尚は、そろそろと両手をあげた。

「ナイフをすてろ！」

ぼろッとナイフが熊の上に落ちた。

フレッドは、狙いをつけたまま、すばやく岩をすべり降りた。

「さア行こう」

さッと斜めに和尚のからだ泳ぐと、ベースにタッチする野球選手のように銃に手がの

ったが、一瞬の差でフレッドの足がそれを蹴とばしていた。銃は谷へ落ちたが、同時に、フレッドが岩の上にひっくりかえっていた。銃をつかみそこないながら足をさらったのだ。

監視員は、たおれると同時に、あとにすぐろうとした。そのために、自分の力で大きく一転し、半身が岩から空間にはみだし、あっというまに両手で岩のフチにぶら下ってしまった。

和尚は、とっさに敵の銃をもぎとって、必死に匍い上ろうとしている相手の顔五センチくらいのところに銃口を突きつけた。

「ふふふ、神さまは、まっとうだ！」

フレッドは、自分の顔と胸のあいだから、はるか下の谷間を見た。まったく明けきった朝の澄んだ空間の底を、青い急流が岩を噛んでいた。

「やい、これでも俺を逮捕する気か？」

朝日をあびた和尚の顔はフレッドには見えなかった。銃口と足だけが見えた。

「どうすんだ？　俺ア、射ちやしねエよ。ものの五分もしねえうちに、どうせ、そのまま落っこちて一コロだア」

右手に渾身のちからを集め、ぐッとフレッ

ドの身体が持ちあがった。

「こいつめ！」

がッと右手が踏んずけられ、爪も通れよと
しがみついたのを、もういちど、したたか踏
まれて、あッ、左手だけが辛うじて岩にかか
っていた。

「降参か？」

返事はなかった。みるみるうちにブラ下っ
ている男の顔がひき吊ると、ずすと手がすべ
った。

「ばかやろう！」

和尚の手が二の腕にかかっていた。赤い顔
をして、やっとかさ敵を岩の上に引きずり上
げた。

「さア、これで取引しようぜ」

ぐにやッと坐ったフレッドの手に銃がさわ
った。ぱッと立ち上ったかと思うと、和尚の
胸に、びたッと銃があてられていた。密猟者
は、さッと蒼さめた。

「射てるもんならズドンとやんな、命の恩人
を」

「恩は恩、法は法だ」

「豚！」

和尚は、密猟者として告発された。しかし
フレッドは、熊を殺したのは彼ではなく、単

に皮泥棒ということにしようとして苦心し
た。

しかし、すべてはジョンに不利で、すこし
でも軽くと努力したフレッドの念願は達し
られなかった。和尚は、口ぎたなく法廷でわめ
き散らし、岩上の争いを述べて、フレッドを
恩知らずとののしったが、そういうことにな
ったのも、密猟と官憲に反抗したのが原因だ
と、判事は被告の言い分をとりあげなかつ
た。

若い保安官のホワード・ウィルスンが町に
やって来たのと、和尚のジョンが娑婆に戻っ
てきたのとほとんど同じころだった。

まもなく、フレッドが和尚に狙われている
という噂が町中にひろがった。ジョンは、あ
いかわらず陽気に歌ったり飲んだり、奇天烈
な説教をしていたが、フレッドは、山の中で
二度ばかり何者かに発砲され、さいわい、何
事もなくすんだ。そのことを、彼は、誰に
も話さなかった。

しかし、ふしぎなことに、町の者は、フレ
ッドが山の中で射たれたことを知った。田舎
町では、どんなことも隠しきれない。ウィル
スは、役目柄ほっておけぬと思ったので、
この町に一台しかない新車を監視員の家の前

に停めた。

いそいそとキャロルがとび出して迎えた。

いくぶん上気して美しい。

「引っこんでろ！」

大喝して、フレッドおじさんが、のっそり
入口に立った。

「おやじさん、仲直りしたらどうかね。いろ
いろ調べてみたら両方とも言い分がある。何
か起ったら、ぼくの立場がありません。それ
に、もし、あなたの身の上に万——」

「うるせえ、青二才のくせに。余計な心配す
るなってことよ。それから、キャロルのこと
も心配せんでくれ」

「おじいちゃん」

「ちえッ、色気づきあがって」

ホーイと呼ばれていた若い保安官は顔を赤
らめた。

「いいからホーイ、この町のことは十中九ま
で、わしの仕事だ。くちばしの黄色いうちは
おとなしくエサさえ食べてりゃいいんだ。一
人前にエサ漁りなんか出来ねえよ」

が、数日たつと、保安官は、なんと思っ
たか、しつこくフレッド親父につきまとい始め
た。どなっても嘲弄しても、いつも彼の身辺
を見張り、護衛しているらしかった。

「ホーイ、やめてくれ。男がさがる」

「あたしが頼んだのよ、おじいちゃん。町の噂、知ってる？」

「ちがいます。ほくは、その、ただ」

「消えてしまえッ、二人とも！」

雷が落ちて、二人は退散した。ひとり残った頑固爺さんは、ふと壁にある若いときの妻の肖像に眼をあげ、ぶッと含み笑いをしながら、
「そっくりだ。惚れてやあがる」

仕掛銃

その朝、フレッドは、キャロルに給仕させて朝飯をたべていた。そこへ、一台のガタ車が表にとまってランデイが入ってきた。子供のときからの悪友である。

キャロルが出したコーヒーを遠慮なくやりながら、ぶっきら棒に口をひらいた。

「岩山のはずれの檜林にホラ穴があるだろう？」

「それがどうした？」

「誰かが穴の奥に鉄砲を仕掛けてるぜ」

「熊か？」

「だろう。魚をつめた袋がブラ下ってる」

フレッドは、だまって考えていたが、ポケ

ットから大時代物の時計をとりだした。

「八時三十五分だ」大きな声をだすと、皿を押しやって、ぬッと立上った。「あの鰐口の気ちがいめ！ もう一辺ブチこんで説教させてやらなくちゃ」

ミシガン湖のように大きく見開いているキャロルの眼に向って、

「ウィルスンに知らせたら、帰って来てからケツをぶちのめすぞ。大きくなっていったって構うこっちゃねえぞ」

キャロルは、唇をかみ、ふんとふくれ、じいッと祖父を見つめていた。そして、彼の小型トラックの音が消えると、いきなり家からとび出して大通りを走った。

「ホーイはどこにいます？」

「知らんね」

乾物屋の親父は首をふった。

「あのひとを見たら、あたしが探してるって言うてちようだいね。たいへんなのよ」

ニヤリとした乾物屋には目もくれず、彼女は、牛乳屋へ駆けつけ、それから瀬戸物屋をのぞき、次にガソリンスタンドにとびこんだ。

「はい、奥さま」チャーリイという男がフザけて頭をさげた。「保安官どのは、車がふく

れるほど油を積みこんで、パイン町街道へパトロールにお出かけになりやした」

キャロルは日蔭のなかを街道へ向ったが、ふと、そのコカコーラの冷却器の上にのぼって脚を組んだ。

「ここで待ってよう。もうすぐ戻るわ」ひとり言をいって下手の街道のほうに眼をすえた。

十五分もすると、ぴかぴか光る黒い車が街道を上ってきた。

娘は、道路のまん中にとびだして手をふった。

「おじいちゃんが、和尚さんを捕まえに行ってたわよオ！」ホワードがブレーキを入れると大声でわめいた。「なんとかしてちようだい！」

「おじいちゃん、どう言ってた？」

「ちがうわよ。あのひと、気ちがいみたいなひとだから、なにするかわかんないわ」

ホーイは、だまって、しばらく彼女を見つめていた。キッと唇をかみ、何か心にきめ、当るべからざる勢だった。

ホーイは、やさしく笑い、合点々々した。

「オーライ！ 乗りたまえ」

そのころフレッドは、半マイルばかり河に

そつて上り、岩から岩をつたわつて向う側に渡つた。それから暫く泥柳やグミの繁みのなかをくぐり抜け、にわかに眼前に重なりあつてせりだしている露出した山肌を登つた。いつか、和尚のジョンと渡りあつた場所も、その尾根のつづきにあつたが、フレッドは、中腹から反対側にまわつて檜林に入つた。

そこにランデイが云々した洞穴があつた。

彼は、ながいこと洞穴の入口で聞耳をたてた。ややあつて、腰から電燈を抜くと、四つん匍いになつて、そろりと穴にもぐりこんだ。はじめの五十ヤードばかりは、同じように狭くて、大きく河寄りに曲つていた。と、そこ、もう陽の明りがとどかない突当りは、急に一つの部屋くらい広く大きく、そこで洞窟は終つていた。

仕掛銃が、ちゃんと、そこにあつた。一挺の単発銃が、岩と土のあいだに打ちこまれた丸太にしっかりと針金でくくりつけてあつた。それは、上部の枝股のあいだにデンと据えられ、一本の長い針金が引金から出発し、台尻の横腹に取りつけられた輪ネジの輪をくぐつて天井にのびていた。天井には、やはり一本の丸太が岩から岩へと渡してあり、それに取りつけてある別の輪ネジに針金を通し、

その先に魚を入れた粗い目の麻袋がブラさがつていた。ちょうど、銃口の方向、照準より少し上方に止まつてゐるように釣合せてあつた。夜中に、魚の匂いに誘われた熊が、ひよいと袋に掌をかけるか、それとも口にくわえて引くと、轟然一発、その頭がふっ飛ぶ仕掛けになつていた。

フレッドは、時計を出して照らしてみた。

「十二時十五分すぎか」

つぶやいて、ポケットにすべりこませた。

と、そのとき、ガンと後頭部が爆発した。

かたい岩の上にへいつくばつて、しばらくは動けなかった。やっと片腕をついて身をもたげたとき、ぱつと真向から電燈で照らされて眼がくらんだ。ずきんずきんと耳の奥が痛く、頭全体が重い鉛に変わったような気がした。

くっくつという笑い声が、闇のなかに聞えた。すばやく、フレッドは腰に手をやったがピストルのケースは空っぽだった。

「パチンコも電燈もこつちにあるぜ」

うつろな声がひびいた。

「和尚！」

監視員は呻いた。

「待つてたなア今度ア俺だつたな」

「和尚」フレッドは細い声しか出せなかった。

「鉄砲と電燈をよこせ。さもないと監獄行きだぞ」

「おつと、貴様にやすまねえが、このお兄さんは牢屋へなんか行かねえよ。後は野となれこちとらア、同じ野原でも神さまの緑の大地を大手をふつて歩くわい」

「とにかく銃をよこせ、ジョン」

とつぜん、フレッドは、足を突つぱつて立ち上ろうとした。とたんに、にぶい、重く、しい、砕くような一撃を額に感じて仰向けにたおれた。

意識を失つてしまつたのではなかったが、しばらくは動けなかった。かたい床の岩が頬につめたかった。とつぜん、両腕が後方へあげられて縛られるのを感じた。皮膚に切りこむように針金がまきついた。あいかわらず彼に電燈がそそがれ、その光のうしろから物悲しい歌が聞えてきた。

「な、なにしやがるんだ？」

耳が、ががんとした。しゃべると痛くてたまらない。

「きさまの友だちにあずけるんさ。きさまは人間より熊のほうが大事なんだろう。どっち

無限と瞬間

が正しいか、いまにわかるさ」

和尚のジョンは、フレッドの縛った手を動かし、なにか、しきりにもぞもぞした。

「俺ア、なげえ草鞋をはくぜ。だがな、いつかは戻ってくる。この子供、一軍団を率いて帰らん、だ」

「一軍団が、おめえの後を追っかけらア」

和尚のジョンは、乱暴にフレッドを立たせようとした。頭が、あまり痛いので、足がふらふらした。手や腕がしびれて、敵が何をしようとしているのかわからなかった。

「そうやって立ったまんまでいなくちゃいけねえぞ」

「なんだと？」

「針金の先に貴様をつないどいた。ちょっとでも引っぱると天国行きたア。俺の旅は長えんだ」

とつさに、フレッド・アトキンソンは、自分がどうなったかがわかった。和尚は、魚袋をはずして、フレッドの手首に縛りつけたのだ。

つめたい恐怖が、彼のからだに拡がった。全身の筋肉を上へ緊張させ、すこしでも針金をゆるめようと、凍りついた人間のように腕をのばし、足を爪だてた。恐怖にすくんで、

できるだけ顔を後方へ引いた。

「こ、こんなにして放っとく気か？」

相手は返事をしなかった。彼は、鼻歌を歌いながら、フレッドの頭のとっぺんから足の先まで入念に電燈で照らし、こんどは引金や針金の具合を調べた。フレッドは、立っているのがやりきれなくなっていた。

「和尚！ 後生だから——」

「きさまの仲間にとのめよ。ふん、これで胆に銘じたろう」

「殺人だ。まさに殺人だ」

「きさまの魂のために祈ってやらア。そんな身体や、そんな制服、そんなバッジなんか、神さまの眼から見れや三文の値打もありやしねえ」

和尚の声が、ひとしきり洞窟に反響し、すぐに穴の入口のほうに向った。また鼻歌が聞え、ふいに大きく歌いはじめた。

さびしい谷へ行ったとき

たった一人で行ったとき

「和尚！」

フレッドは、何度も何度も、その後から叫んだ。しかし、道が狭くなって曲っていると、灯がスッと消え、あたりは真の闇になってしまった。そして、すぐに歌声も聞え

なくなり、風のさやぎが聞えるばかり。

——気を強くもたなくちゃ。

フレッドは絶望的に自分に言いきかせた。

ともすれば、前へたおれそうな気がするの
で、たえず、そつと、そつと後へ身をひいて
いなくてはならなかった。前へかしく。針金
が引っぱられる。万事おしまいなのだ。それ
は、べつに自殺する理由のない人が、長い長
い貨物列車が踏切を通りすぎるのを待ってい
るときとか、高いビルデングの屋上から下を
見降すときとかに、理由もなく車輪のあいだ
や数百メートルの空間に誘われるのに似てい
た。髪に針金がさわり、じぶんの意志に反し
て、すうと前へのめりそうになる。手首には
何の感覚もない。せい一杯、上へさしあげて
いたので、どのくらいの力で針金が引っぱら
れているのかもわからない。からだのどこか
が、ちよつと動いても、そのたびに、轟然と
身体が打ち貫かれるのを予期した。

からだの揺れが止まると、フレッドは、仕
掛銃の引金のところを、じつと闇の中に見す
えた。からだを横にひねって火線を外せたら
手首を解くことができる？ だが、横にひね
ると同時に発射するかもしれない。まっ暗で
見当がつかない。ただ、その暗黒のなかに、



あざやかに冷たい銃口が、じつと彼を狙っているのが、さっき電燈の光の中で見たのと変らずに彼の網膜に焼きついていていた。

からだを横にかわすことは断念した。それからそ一か八かの際どい芸当である。やめた。彼は、魚袋の重さを考えてみた。あれで釣合っていたとすると、いま、わしの手首の力も袋と同じなのだろうか？ わからない。

ながいこと、何とか助かる方法はと、あれこれと思いめぐらした。すべては、ノオであ

った。

誰か助けに来てくれるだろうか？ ウイルスンに知らせたら、帰って来てからケツをぶちのめすぞ、とキャロルに言ったことを思いだした。すると、全身がすうっと寒くなっていまにもノドがつまりそうになった。そうだった、あれはプンとふくれていた。あれは、はじめっから心配していたんだ。おそかれ早かれ、あれはホーイを探しに出かける。だがそれまでに、どのくらい暇がとれる？

ふと、彼は、うるさくつきまとうホーイを叱りとばしたことを思いうかべた。よしとくれ、わしやまだお前みてえな小僧の世話になるほどモーロクしちゃいねえぞ。だが、いまあと一秒で五体がすっ飛びかねないという瀬戸際に——彼は来ない。たとえキャロルが知らせても、奴は来まい。たとえ来るとしても晩になって町へ戻ってからキャロルに話を聞き、よくよく考えた上でなくては御神輿をあげまい。これまでに、何度もとなりつけられてくるから。それに、娘の尻を追いかけてまわすのは止めてくれとも言った。

ランディはどうだろう？ あいつが、わしを、ここへよこしたのだ。あいつは、ここへ来て仕掛銃を見たんだだろうか？ いや、ちがう。誰かに聞いたんだ。あいつは、こんど、わしに会ったら、こないだの仕掛銃、ほんただったかい？ と聞く気でいるんだ。あいつは、わしのことなんか気にしちゃいない。あいつが助けに来る気づかいには千に一つもない。こんなふうを考えながら、心の別の面では、なんとか助かるすべはないものかとあせっていた。とどのつまり、もし救助に来てくれるとしても、早くて晩になろうと覚悟をきめた。まだ、お昼をいくらずきではいいまい。

どのくらい、そこに立っていただろうか？
もう、どのくらい待っただろうか？ 三十
分一時間？ すくなくとも一時間はたった。

しかし、これから八時間も、じいッと動かす
に引金に重みをかけないようにしていられる
だろうか？ これまで堪えてきた苦しみに幾
百倍する苦痛。だいいち、いつ晩になったか
どうか、それさえ知るすべがない。万事休す！
彼は、時間の経過をはっきり心に刻みつけ
ようと思った。一つ、二つ、と秒をかぞえた
が、二十五まで数えたら怖くなってしまった
一分数えるのが限りなく長く思えた。

もし生きて出られたら、和尚の奴をどうし
てくれよう？ あの長い鼻面を打って打って
ブチのめしてやる。そんな幻想をえがいたと
き、またも髪が針金にさわった。ぞおッとし
た。気をしずめ、なるたけ早く、おとなしく
なった。この際、怒ることは禁物だ。

どのくらいたったかな？ 二時間くらい？
無駄な望みをかけちゃいけない。二時間。
そう思ったほうが確かだ。それ以下というこ
とはない。だが、足の筋肉は、もう立ってい
るに堪えられない。背中じゅうに、するどい
痛みがひろがって、背中が痛いのか、痛いの
が背中か？

三時間。いまにも狂いそうになるまで、こ
らえにこらえ、待ちに待った。よし、時間の
ことは考えまい。

彼は、しいて他のことを考えた。これまで
の長い一生のうちにあった一切の楽しい事柄
を探しもとめた。だが、それは、どれも、幻
のようにチラッと浮ぶだけで、どうしても実
が入らぬものになった。はっきりしているの
は時の移りだけだった。時と針金と引金と実
弾がこめてある鉄砲。これだけが、はっきり
していた。

四時間たった、と彼は思った。もっとかな
？ そのくらいは十分すぎた。二度と思いた
くない。そろそろ晩になるぞ。

だが、永遠の長さに来たとき、そのとき八
時間は過ぎたと思ったが、たしかに外界も、
その洞穴とおなじように真ッ暗になっていた。
た。だのに、まだ、なんの救助の音もしない。
聞えるのは、かすかに伝わってくる夜の風の
音だけ。どうしよう？ あらんかぎりの声で
叫ぼうか。いけない。からだが動く。彼はた
たかった。秒を乗りこえ、分に勝った。八時
間。たぶん、もっとたっているだろう。誰も
来ない。もうダメなんだ。これまで待って来
ないなら、もう来るもんか。

全身がしびれて、こたえがなくなった。か
らだを立てなおそうとするのがむずかしかつ
た。どうやら、すこし身を退きすぎているら
しい。

夜中になった。はっきりと夜の十二時だと
知った。彼は、あきらめ始めた。いま来なけ
れば、もう来ない。どうしても、そう決めたか
を考えまい。そうだ。もう来ないことに決め
た。もう何十分かは延ばすことができるかも
しれないが、なぜ好き好んで苦痛をのぼすの
か？ ちょっと前へかがみさえすれば、すべ
てがケリがつくというのに。

だが、心があきらめても、身体は反抗して
いた。眼はとじられ、頭はフラついていたが
肩と足が彼をささえていた。が、とうとう足
も負けてきた。頭がうなだれ、ずずと足がす
べり、意識がかすれていった……

ダーンという銃声に、フレッドは眼をあけ
た。顔を照らされていた。しばらくは眼が見
えなかった。煙硝の匂いだけが鼻をついた。
「危機一髪でした」

自分を抱えているホワードの声が聞えた。
「早く手をほどきたまえ」
フレッドは、ホーイと孫娘が、自分をだき
あげて狭い通路を出て行くのを感じた。

「あわや、まさに、あわやというところだった。もう五秒おそかったら」

フレッドは洞穴の入口を見た。ぱつと明るく、陽の光が山々にあふれていて眼がくらんだ。

「鉄砲が鳴ったな？」

「あれは後で引金を引いたんです、危いから。いや驚きましたよ。ぱつと照らすと、ぐんにやりしている。とっさに抱きあげました。キヤロルさんが必死になって針金を切ったんです、ナイフで、そつとそつとゴシゴシやってね」

「なんだって昼なんだ？」

「もう大丈夫です、ミスター・アトキンソン」
「ホーイ」キヤロルが注意した。「はやく運びましょう。頭がどうかしてるんだから、ここですらべっているのはよくないわ」

かれらは、フレッドを櫟林のはずれにある平たい岩の上に寝かした。フレッドは、中天にある太陽が怖くてたまらなかった。時計を出してみた。十二時四十五分を示していた。

「ぼくたちは途中でジョンに会いました。すばやく身構えて、あなたのピストルをひけらかしたので、一発ぶっ放すと、ぼろつと落したので、下の松の木にしばらくつけておきました」

謹賀新年

毎度御愛読を賜りまことにありがたく
厚く御礼申し上げます。

新春に当りまして、本誌はさらに内容
充実に努め、新企画を盛り込み、一段
の発展を期して平素の御愛顧にこたえ
る所存でございます。何卒倍旧の御支
援・御鞭達のほどを御願ひ申し上げます。

久保書店

編集 部
営業 部
印刷 部
製本 部

昭和三十三年新春

た」

「なぜ昨日のうちに来てくれなかったんだ？」

若い男女は、あきれた顔をして老人を見まもった。老人！ フレッドは、いっぺんに年をとったように見えた。

「昨日？ おじいちゃん、それ何のこと？」

あたしたち、すぐに駆けつけたのよ。ホーイは気ちがいみたいに車をとばしたわ」

「な、なんだって？」

「いいから、まアおとなしくして。とにかくひどい目に会ったんですから」

頑固おやじは口をつぐんだ。

思うに、それは無限の苦しみ、底なしの虚しさであった。

しかし、現実には、たとえ彼は十二時間以上もたったと信じたとしても、ほんとうは三十分そこそこのあいだであったのだ。(了)

刻一 刻、義拳の機は熟して行つた! ☆

元祿乱れ小袖

黒木 忍

画・山中 弘二



ふるまい酒

「どうも今日の振舞酒は美味くないな。ちつとも酔えん」

そういいだしたのは大曲新兵衛だった。長軀瘦身、全身にいつも冷たい妖気を漂わせているのが、鋭い目をすわらして一座をぐいと睨んで吐き出すようにいったのだった。

酔うほどに青くなる顔は、長年の友である清水一学をも、一瞬ぎよっとさせるものがあつた。

「いうな、貴様のことだ。とりわけてこの頃は気に喰わぬことも多いだろう。しかしだ、我々が吉良家の者に粗略にされ始めたのは天下は無事だつてことだからな」

一学はとりなすようにいった。

「天下は無事か——なら俺達を上杉へ帰したらよかろう」

「それをいうなと申すのだ。まあそうやって貴様が腹が立つのも上杉家の大曲新兵衛は一刀流の腕が無気味に冴えているとこちらの殿のお耳に入つたればこそだ。泰平の世に名指しで他家に借りられた。

★目もあやにもつれ狂う小袖のかげに



そのことだけでも退屈しのぎというものだ」

「それが退屈極まるのだ。今日も無事、明日も無事、そこへいくと赤穂の浪人共はうらやましい。とにかくやる気があるのなら一騒動起せるのだから。こっちは来るのか来ないのかさっぱりわからないのを待っているのだ。それも他家の用心棒だ」

「新兵衛、少し言葉をつつしめ、この席にはご家老千坂兵部

殿も見えてる」

「いやだ、見ろ一学、年増女がこの座敷に入ってきた。用心棒共に振舞酒を恵めば自分達は女を呼んでいいと思っ

「あれはおらくという女だ。吉良家のご用金の用達をする富田屋の後家だ。茶の湯の嗜みが深いところからこちらの殿には格別のお気に入りということだ。おらくが来れば若い娘も顔を出さ

貴様の酒もいくらか美味くなるだろうよ」

一学はおらくを見つめたままいった。

おらくは上杉家の家老千坂兵部に会釈し、吉良家の家老松原多中に近づいて何やら話している。

新兵衛はそのおらくの膝をついて、立てたかか

の腰を見つめて、

「フン、金貸の色後家か」

と口の中で吐き捨てた。三十五六の大年増ぶりのおらくは、妙にそうしていると肉感的な美しさを

持っていた。隅田川沿いの料亭「楽水」の二階の広間だった。

吉良家では時々こうして上杉家から借りられた者達を慰労するのだった。

先年、松の廊下で浅野内匠頭が吉良上野介に刃傷し、内匠頭は即日切腹を命ぜられていた。意趣ありと小さな刀で切りつけておいて、幕府の取調べに対して吉良殿には別して意趣はござらぬと答えた内匠頭だった。直情の内匠頭には上野介に対する忿懣を大名の身として口には出せなかったの

だろう。そして浅野家はつぶされ、内匠頭の弟大学をしてお家再興の嘆願も空しく退けられると、吉良家は赤穂浪人の復讐を怖れ、家中の腕の立つものはもちろんのこと、上野介の長男が当主の上杉家からも腕の立つものをよりすぐって借り入れ、万

一に備えていたのだった。新兵衛も、一学も、そうして上杉家から吉良家に付人としてえらばれた一人だった。

二人とも腕に覚えはあり、年は二十二三の血氣盛りで、この付人にもえらばれたのを内心よしと思っていた。

それに上野介にはお構いなしと裁断しておきながら、幕府に上野介を赤穂の浪人共に討たせてやろうとしているのではないかと思われる節が出て来たのも、赤穂浪人何するものぞという客氣が新兵衛にも一学にも、吉良家付人として行くのに、闘志満々にさせていた。見事赤穂の浪人共が討ち入って来たならば蹴散らして、そういった幕府に一泡ふかせてやろうという氣持を持ったのだ。

「赤穂浪人に討てといわぬばかりのお公儀のなされかただ」

と世人に謂わせたのは、吉良家が本所に屋敷がえを申し渡されたことだった。表向きは吉良家から、非役でありながらお城近い呉服橋内の屋敷に居ることは恐れ多いとかねて上地を願ひ出ていたのが聞き届けられたというものであったが、呉服橋内では丸ノ内だから用心がきびしい。よし赤穂の浪人どもが討入ることが出来ても、付近の屋敷が城内を乱すものと傍觀はしないことだし、それに公儀をはばからぬ振舞と見なされるが、本所ではそうしたおそれはないのだった。

「まるで一片の肉を投ずる如く、上野介殿を赤穂浪人の前に、討てとばかりのなされかただ」

一学は新兵衛にその時そういった。

「面白いではないか」

新兵衛は、皮肉に笑った。

そして本所の松坂町に二人は上杉家からの付家老となった小林平八郎に伴なわれて来たのだった。

それが、いつ赤穂の浪人共が押し寄せるかと待っているうちは上杉家からの付人は丁重に扱われたが、こう日が立つと、とかく新兵衛達は居候のような目で吉良家の者に見られるようになった。

時折、今日のように慰勞の宴が催されてもそれで新兵衛達若い者達は、かえってその酒の宴が、不満の爆発にもなりかねないのだった。

新兵衛は、茶碗についだ冷えた酒をぐびりと喉に流し込んだ。

おらくは、ふと松原多中と話を止め、姿を消すと、すぐ若い娘をつれてまた姿を現わした。

「ご家老様、これが今お話申し上げたおけいさんです」

「けいと申します」

若い娘は多中に手をついて頭を下げた。

「フム、なかなかのお美しさだ。これなら殿もお喜びなさるだろう。しかしもちろんおらく殿のことだ、身元の方は大丈夫だろうな」
「殿様にはご恩を受けておりますらくです。身に代えまして……」

「フム、今のはわしの失言としておこう」

「ご家老様、ご家老様には別にそのうち……」

「なに？ フフ、その娘があまり美しいので見ているのだ。殿もご満足と思うてな」

多中は、おらくの言葉にてれたように笑った。

おらくは何事もわかっているというように微笑していた。おらくはこの頃鬱々としてそのくせからだの方は年寄と思われぬように元氣な上野介に側室を世話しようとしているのだった。

けいは、武士の娘でもあろうか、島田の下のきりっとしまった、美しい顔をひかえめに俯つ向けていた。

多中の目は、その娘の着物の下にかくされたやわらかい処女の裸身をなせるように、酒の酔いにまぎらした好色の淫らなものをちらちらと覗かせていた。

「では松原殿、わしはこの辺で失礼しよう」

多中は、いきなり千坂兵部にいわれて、

「ま、まあいいではないか」

と、とめたが、兵部が立ち上ったので、

「左様か、おい神倉、おけい殿に見とれてないで千坂殿をお見送り申せ」

と傍に居た若侍にいった。

「は」

神倉は、慌てて立ち上ると、もう広間を出ていた千坂兵部を追った。

裸身改め

多中の目は、どうやっても、おけいの姿からはなせない。男の目には美し過ぎるのだ。

そうだ、と多中は一つうなずくと、

「おらく殿、おけい殿はこの席から松坂町へ同伴してよろしいのかな？」

「はい、もしかするとそうなる聞かせて置きましたから——ね、それでもよろしいのですね？」

「はい」

おらくに見られて、おけいはうなずいた。

「そうか、では一寸別室でお心得など話して置きたい」

すっと、多中は座を立った。

おらくが先に立って、別室へ三人は入った。

「おけい殿といわれたな。おらく殿のこと故間違いは無いと存するが、薄々承知でござろうが松坂町の屋敷ではわざわざ渡り中間なども三州から呼び寄せた者達と入れかえた程じや。と申すのもいつそれらの者の口から屋敷のことが外部に洩れるかもしれないのでな。おわかりであろうその辺は。それでじゃ、おらく殿を疑うのではないが、何せそなたを殿の傍近く送るのじゃ、間違いはあってはならぬ。そなたが殿に害意があつて側近く召されたいというのではないことはおらく殿が保証しようかの」

「……………」

おけいは、顔を伏せている。

「で、ここからすぐ松坂町へお送りしようと思うのだが、その前に改めたいことがござるかような場合は屋敷の女共にさせるのが定法ではござるが、殿の側室にお召しの女という、改める女達は妬いての、ハハハハ、いつぞやも意地悪くされたのだろう、とうとう泣き出してしまった女があつたそうじゃ」

「ご家老様、おけいさんを改めたいとおっしゃるのは、あの、どういうこととございましょう？」

おらくが、不審そうに多中にいった。

「裸身改めじゃよ。気の毒だが、これはいくらおらく殿の手前でも省くわけにはいかぬでな」

「まあ、おけいさんを裸か身にしてでございますか？」

おらくは、多中の言葉に、びっくりと肩をふるわしたおけいを見て驚いたようにいった。

「左様、着物を着せて置く分には差支えない女でも、思わぬところに傷があつてはわしの手落になる。それに刃物でもかくし持たれて居ったら一大事じゃ」

「多中さま、ご存分にお改め下さいまし。らくが進めた娘だからと手加減をいただいては殿様のご寵愛に対してらくが身の程もわきまえぬ我がままとあとで笑われましよう。さ、おけいさん、立って帯を解いて多中さまに得心のいくまでお改めしていただくのです」

「は、はい」

娘は、目を伏せたまま立ちあがった。

そのうしろに廻ったおらくは、娘の帯を解き流した。肩先を這って、おけいは、ハッとそれを腰のあたりでおさえた。

「さあ、恥しがってはいけませんよ。あたしとこれからお世話になるご家老様だけです」

らね」

「おらくは、次々と細紐の類を解いていく。」

「さ、お脱ぎなさい」

「……………」

無言で、おけいはそれを迂らした。

湯文字一枚で、おけいは行灯の明りの中に立っている。

「それも」

おらくの言葉に、はらりとそれも捨てられて、美しく、清潔な、そして内に艶めいた色気を見せている白い全裸の処女の立姿だった。

「ご家老様、存分にお改め下さいまし」

「ウム」

おらくにいわれて、多中の目は、吸いつくように処女の裸身を見つめる。

しみ一つない玉のような肌を曝して、おけいは目を伏せ、ひざをわずかによじって、羞恥に堪えている。

「ご家老様、らくも始めておけいさんの肌を見ました。もうお美しくて女のあたしにもぞくっと、本当にうらやましい」

おらくの目は、そういって、チラと何かが動いた。

「さ、お手を上げて」

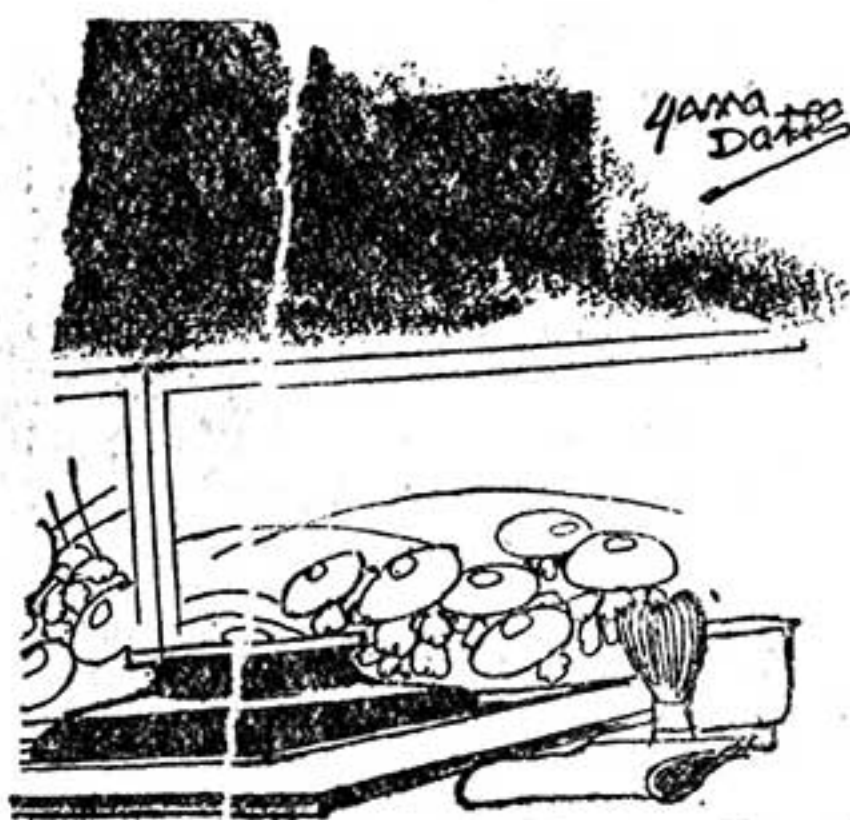
おらくは、おけいの右手を肩の高さに持ち上げて、腕のつけ根を覗いた。

「こちらもひろげてご覧なさい。釘など一本でもあったら大変です」

あるはずもないことを理由に、もう片っぱの腕も無理に上げさせた。

多中は、急におらくのやり方がひどくなったのに戸惑ったが、これも役得と思ったのかニンマリ笑って、おらくの手にあちこち触わられ、出そうになる悲鳴を、必死に憶えているおけいの裸身を喰い入るように見つめていた。

しばらくすると、おけいは脱ぎ捨てた着物の上に突っ伏していた。おらくはそれを上気した顔で呆けたように見下ろしていたし、多



中は余りのおらくの裸身攻めの異様さに、これも口の中をからからにして見つめていた。

恋 盲 い

「お玉のやつ、どこへ出ていったんだ」

政吉は、暗くなってから出かけたという娘のお玉を気づかって、寝酒を飲みながらつぶやいた。

「おあき、てめえはしらねえのか。この頃お玉の奴、小間物屋の手代と妙な素振りだと俺の耳にも入ってるが、まさかその男と逢いに行ったんじゃあるめえな」

「まさかね、それにしたってばかにおそいよ」
女房のおあきが、ちらと娘の寝間の方を見た。

政吉は吉良家出入の棟梁だった。今日吉良屋敷にこしらえた七個の落し穴が完成して、祝い酒を呼ばれてつい先刻帰宅したばかりだった。

しらずに踏み込むと、どんでん返しに下にしつらえた落し穴に落ち込む装置を、政吉は持前のこり性から精巧に造り上げてご家老からほめられて帰って来たのだ。それからいく

つかの地下道も完成して、そのところどころにも、政吉は

どんでん返しの落とし穴を造って完成させていた。

もしも、赤穂の浪人共に踏みこまれた時、上野介がその地下道を抜けて逃げさりながら垂れている紐を引いて置くと、あとから追いかけたものは落とし穴に落ち込む仕掛けで、いずれも上野介の寝間から通じていた。

「お玉の部屋でも見てくるか。まさか書置をして男と駈落したんじゃないやあるめえ」

政吉は、お玉を、自分が使用している腕のいい大工の留吉と一緒にさせるつもりを、お玉が承知しなかったのが気になってきた。

ふらりと立ち上って、お玉の部屋へ一歩入って、

「あっ！ これア……！」

政吉は、驚きの声を上げると、畳に落ちていた図面を拾い上げた。

「おあき！ これがお玉の部屋に落ちてたがまさか他のやつをお玉は持ち出したんじゃないやあるめえな！」

酔もいっぺんに消し飛んだ声を上げた。

「今日も吉良屋敷へ持っていくのを出がけに忘れて、ご家老に念を押されていた図面は、地下部の図、それにもうける落とし穴の位置が記されて、ほかにその構造の設計図と、屋敷

の廊下座敷にしつらえたどんでん返しの位置と構造図の四枚の図面だった。お玉の部屋に落ちていたのはその内の一枚だった。

政吉は、呼ばれて入って来たおあきを突き飛ばして自分の部屋に入り抽出しをあげた。

「無いぞ！ お玉の奴が持ち出したのだ！」
もう政吉の顔色は血の気がない。



藏臣忠容集特

もしも消えた三枚の図面が赤穂浪人の手にでも渡ったと、政吉は事の重大さに気づいて動転していた。

（お玉め、どこへ行ったのだ！）

そのお玉は、半年ばかり前から近所の小間物屋の手代になった男に夢中になっていた。

ふと男と逢っている内に、父が吉良家に出入しているそうだがと持ちかけられ、政吉の言葉の端々からこの頃の父の仕事の口に乗せその設計図でもあったら見せてくれないか、主人は小金を溜めて泥棒が入るのを怖れているから、泥

棒ふせぎに落とし穴もつくったかどうかと話しているからそれを見せたら喜ぶだろうといわれ、お玉は好きな男の為ならとそれとなく氣を使っていたが、今日何気なく父の居間へ入るとその図面らしきものが抽出しの上に乗せてあったのを持ち出したのだ。一枚部屋に落ちていたのは、お玉は男と逢うために支度をして氣もそぞろの出がけにふところへしまい落したものだ。

お玉は、男と約束の場所へ急ぎながら、家

を出た時からつけている武士の姿に気づかない。

「待った？ 善さん——」

恋しい男の姿を稲荷前で見つけてお玉は駆け寄った。

「すまない。図面を持って来てくれたのだらうね」

「これですよ」

お玉はふところから三枚の図面を出して男の手に渡した。

急いで、献灯の明りに照らし見入った男の顔をお玉はうっとりしたように見つめ込んだ。

「かたじけない」

「ご用に立ちますか」

お玉は、小間物屋の手代が、侍言葉を使ったのをそれと気づかなかった。ただ愛する男の喜ぶ顔が無性にうれしいのだ。

「ご用に立つどころか、主人がどんなに喜ぶことか」

「ほんとにそれ明日の朝には返してくださいね。なんだか父が大事なもののようについてる図面ですから。明日の朝六ツ半頃ここにあたし来ます」

お玉は、男が図面をふところへ入れるのを

見てそういった。

「じゃアお玉さん、今夜はこれで」

「もう帰るんですか」

お玉は、今夜はうれしい首尾がかなうと思っただけに男の言葉がうらめしかったが「なに、少しでも早く主人に見せたら喜んで貰えると思ってね。明日の晩はゆっくりお暇を貰って来ますよ」

そういわれて、お玉はがっかりしたがやはりうれしい。

「きつとじゃア明日の晩は」

「うん」

男は、始めて自分の方からお玉の手を固く握った。そしてはなすと、ぱつと駈け出した。

お玉は、それを見送って、ほっと溜息をつくと、

「お玉、拙者だ」

ぬつと目の前に立った影に、お玉は驚いて目を見ひらいた。

前からうるさくつきまとっている吉良家の家中神倉庄吾の顔が睨んでいた。

「お玉、拙者の願いを聞かぬのはあの男が居るからだな。何を渡した。艶書か」

「そんなもの……」

お玉は夢中で否定した。恥しさがそうする

のだ。厭な男に見られたとおどおどした。

その時、人影が近づいて来たので、お玉はこれ幸いと駆け出した。案の定、神倉は追っては来なかった。

低い声

「何！ あの凶面をしまい忘れたと！」

松原多中の声が高くなった。

「へい、しかし決して道に落したとか紛失したとか……」

「黙れ！ あれがもし赤穂の浪人共の手にも入って見ろ、そちだけではない、この多中も切腹もんじゃ」

「へ、へい」

頭を畳に摺りつけているのは政吉だった。

やっと帰ったお玉を責めても、そんな凶面はしらぬと言ひ張られ、ともかくも翌朝早々に吉良屋敷に凶面が紛失したことを告げに来た政吉だった。

その時、そっと廊下の障子からはなれた影があった。

その若侍は、ニヤリと破顔した。神倉庄吾ののっぺりした顔だった。

その夜おそく――

「お許しになって……」

「ならぬ！」

「ね、あたしが悪うございました。でも、あのこと神倉様が胸の内にしまってくださいればあたし……」

「来い！」

「あれッ！」

「くそッ、歩け！」

腰を蹴られて、

「お許しを……」

と、娘の声が哀願した。

どちらも、あたりを気がねしてか低い声だった。

そのまま、ずるすると男は娘を門内へ引摺り込み、娘の手首を掴んだまま引立てた。

娘はお玉だった。

約束の時刻に稲荷の前で善助にすっぽかされて、お玉は心配のあまり小間物屋に顔を出して聞くと、手代の善助は急用が出来てくへ帰ると昨夜のうちに暇を取ったと告げられた。途端に、お玉は父の言葉を恐ろしく思い出して身慄いした。

（もしや、あの善さんが赤穂の廻し者？）

そんなことはない。もしそんなことがあれば大変だ……

お玉は家へ戻るのがこわくなって、友達の

家を遊び歩いた。でも、どこでもお玉は落ちつかなかった。それでも出来るだけお玉は家へ戻る時間をのばした。

そして、おそくなつて家へ入ろうとすると神倉に呼びとめられたのだ。

「お玉、おぬし大事な凶面を昨夜の男に渡したな」

あつと、それでお玉は声が出ない。

「ついて来い。素直に致せば昨夜のことは拙者が胸の内にしまつて置いてやる」

それで近くの小料理屋の二階へ連れ込まれた。

だが、処女の本能がそうするのか。それとも、娘の気持は、いかなる窮地に追いつめられても厭な男には許せないのか。お玉は男を怒らしてしまつたのである。

「よし、屋敷に連れ帰つて詮議してやる」

そしてお玉は、神倉庄吾に手首をつかまれて吉良邸のくぐり門から引き摺りこまれたのだった。

だが、そうなつて始めてお玉は、自分の犯したことの重大さをした。そして許されるのならこの男に肌身を与えてもと哀願した。しかし、男の気持は変つていた。一度や二度お玉を愉しんでも、凶面が出ない限りやがて



はお玉は酷しく詮議されるのだ。その時に
なつて自分の名
が出てはか

えつてこちらが一大事だ。それなら女には触れずに、女を責めて図面を渡した男を白状させる。そうすれば手柄だ。

庄吾は、自分になびかなかった娘を、図面詮議の名を借りて、思うさま音を上げさせようと思ったのだ。それも出来るだけこつちが愉しみながら苛めて白状さ

せる。面

白いぞと庄吾は

妙にそのことに興奮した。お玉が、目の前で、身をもみながら悲鳴も上げるだろう、哀願もするだろうそれでも俺は許さぬ!

庄吾は、出来るだけ愉しむために、人にお玉を詮議するのを見られたくない。

(俺は、俺の思うさまお

玉を責めてやるのだ)

だから、庄吾の声は低い。

同じように、お玉は庄吾だけなら助かる

と心の内に思っていた。だれかにあのことをしられたら、もう駄目だ。この男だけなら……それがお玉の哀願の声を小さくした。

「歩け! 酷しく詮議してくれる」

「お許しを……」

ずるずるとお玉は引摺られながら声を出した。押し殺したその声が、庄吾にはなんともいえぬ快感さを覚えさせていた。

と、

暗い、誰も居ないと思われたその障子がすらりと開いた。

庄吾はハツとした。お玉はぎくりと身をすくめた。

そこは、上杉家からの付人が住んでいる長屋だった。

「おい、夜中に女と何を戯むれて居るのだ!」その声を聞いて、庄吾はしまったと思った付人の中でも、一番うるさそうな大曲新兵衛の声を聞いたからである。

「神倉だな」

相手は庄吾をそれと気づいていた。

「新兵衛殿ですか。詮議の筋があつて女を召しつれて参つたのです」

「詮議だと? フン、その女があ図面を持ち出したのか」

「そうです」

庄吾は、何で

もしっている、

妙に薄気味悪さを覚えて正

直に答えてしまった。

「面白い。この部屋に女を入れ

る。退屈してるところだ。女を

詮議するのを見物させろ」

新兵衛は、庄吾にとって有難くないこ

とをいいだした。

美女肌責め

「お許しを……」

「フン、女をその柱にくくれ」

新兵衛は、庄吾にそういって、自分は行灯

に灯を入れた。

「縄がありません」

「ほか、女を縛るのに縄がいるか。女が締め

ている紐を使え。女はこういう場合にはすぐ

間に合うように紐を何本も締めてるものだ」

庄吾は、お玉の扱帯を抜くと、お玉の両手

を後に廻して柱にくくりつけた。長さの都合

で胸には廻さない。そして、後手にくぐられ

て柱につながれたお玉を見て、庄吾はどうし

ようかと戸惑った。ああしてこうしてお玉に



音を上げさせてや

ると空想して

いたのは

と、お玉は悲鳴を上げた。

「無いのか？」

と新兵衛が、どうでもいい声を出した。

「いえ、もっと奥へかくし持っているかもしれ

れません」

「あッ、おゆるし……おゆるしを

……」

お玉が、押し殺した悲鳴を上げ

る。

「庄吾、貴様女と愉しんでいる

のか！」

「えっ？」

と、庄吾は新兵衛を見て、やっとお玉のふ

ところから手を抜いた。

「無いのか？」

「ございません」

「よし、図面を渡した男を白状させろ」

「いえ！ 図面を渡した相手は誰だ」

「こ、小間物屋の手代……」

「糞、小間物屋の手代があつた図面を必要とす

るか！」

「で、でも、主人が小金を溜めてその泥棒除

けに落とし穴をつくると……」

「おい、子供騙しをいって通ると思うか！

相手の素姓をいわぬと……」

そして、どうしてやろうとあたりを見た。その目が行灯の台に乗っているちびた使い残りの蠟燭にいくと、それに火を点じて、お玉の傍によった。

「おゆるし……」

短い蠟燭の火は、お玉の頬に熱気をつたえた。お玉は肌を灼かれる恐怖を感じた。

「ヒイッ……」

「いえ！ いわぬとこうして、だんだん熱くなるぞ！」

「あつ、つッ……ほんとに小間物屋の……あつ、おゆるし……」

「強情な女だ！ 女を裸に剝け！」

「しかし……」

「馬鹿、図面が赤穂の浪人共の手に入って見ろ！ こちらの殿の寿命はそれだけ縮むのだ剝け！ 蠟燭で責めるなぞは手ぬるい、素っ裸にして白状するまで責めるのだ！」

「はっ」

庄吾は、新兵衛の言葉に、大胆になった。

新兵衛は悩乱のお玉の前につっ立って、鞘ごと持ち出した刀のこじりでぐいと仰向かせた。

「おい、俺の取調べ方は庄吾のように手ぬるくはないぞ、いいか、いうなら今の内だ」

「あつ、おゆるし……あたしはそれ以上……」

お玉は、ヒイッと、全身で呻いた。

「ああッ、ふっ……」

大柄な白い娘の裸体が、悲鳴といっしょにくねりもがいた。

刀のこじりが、お玉の全身をぐいぐいさぐりつけるように残酷に突きまくる。

「容赦はせぬといったぞ」

「あつ、もう……ヒイッ……」

お玉は絶気しそうに、狂ったようにもがき苦しむ。

「それ、これでもかー」

冷酷に、新兵衛は、お玉を地獄の苦しみに追いつめて、少しも顔色を変えない。

お玉はぐたりとやわらかくのびた。

「おい、娘をつれていけ。責めても何も出ぬぞ。ただ図面は赤穂の浪人共の手に入ったということだ」

「……」

「庄吾、娘をくれてやるというのだ。責め足らぬというなら好きにするがいい」

「はっ」

神倉庄吾は、目の前で若い娘の地獄絵巻を見せつけられて、やっと我に返ると、お玉の縛めを解きながら、ごくりと生唾をのんだ。

新兵衛はごろりと畳に、そっちに背中を見せて寝転がった。

寄せる眉根

「吉良様へのご奉公、あの日はすぐでもお屋敷へおつれくださるようなお話でございましたが、いかがになったのでございましょうか」

あの日、松原多中に引き会わされて以来、おけいはおらくの家に厄介になっていた。

「お屋敷の方で少しご都合が出来たのです。それに」

「それに？」

おけいは、ハッとおらくを見た。

「ホッホホホ、おけいさんはそんなに吉良様に上るのが待ち遠しいのですか？」

「いえ、左様な……」

おけいは慌てて目を伏せた。

そのおけいを、おらくの目がじっと見つめた。

おらくは、あの日、おけいの裸身調べをしたときの妙な気持の昇ぶりを忘れられなかった。そして多中に、無理におけいを屋敷に上げる日を延期したのだった。

名目はもう少し吉良邸にご奉公した場合の

特集★裏窓忠臣藏

心得なぞきびしくしつけないということにして。

「おけいさん」

「……………」

おけいは、おらくの目が異様に光ったのに気がついた。

「お役目です。着物を脱いでください」

「はい……………」

「吉良様に上るお心得として、どのような場合でも針一本でも身につけて居てはならぬと申して置きました。さ、多中様も折を見てはおけいさんがそのお心得で居るかどうか調べるようにこのらくに固くいいつけているのです。さ、これよりおけいさまの裸身調べしかとおらくが勤めます」

おらくは、格式張っていった。

だしぬけに裸身調べをするのでなければ意味はない。そういわれて、おけいは、伏せていた目上げて、立ちあがる。自分の手で帯を解く。最後の湯文字も、じっと見つめているおらくに正面向いて解き捨てた。

「ご存分にお取調べを……………」

おけいの声がかすかにふるえた。いや、恥らいをふくんで、処女の裸身もふるえていた。その日から、おらくは、時折、おけいの裸身調べをした。

されているあいだ、おけいは必死に、素直におらくのするままにされていた。決しておらくにどのような恰好にされても、いやとひと言いわなかった。

おらくは、いつでもその気さえあれば、逃げ出すことが出来るのに、その素振りも見せないおけいに、だんだんに大胆になっていた。おけいを相手に茶を立てている間も、突然それは文字通り突然とほかいいようのない時にも、

「おけいさま、さあ！」

微笑して素晴らしい出した。

おけいに自分で裸体にならせたり、時にはおらくがおけいを裸か身にした。そしてそれをされている間中、おけいは悲し気に眉根をよせて堪えた。

（この娘は何をされても逃げないのだ。まるでこうされるのが嬉しいように……………」

おらくは、ふと、いとわしげな顔をするおけいに残酷なものを感じる。そして、「裸身改めです」の言葉がひんぱんにおらくの口か

ら出た。

そのうち、おらくはふと重大なことに気がついた。

（この娘は裸になれといえは時と場所をえらばず素直に裸になる。そのくせそのことをいっているのはわかっている。もしかするとどんなことでも堪え忍んで吉良様へご奉公したいと決意しているらしいのは……………？）

おらくは、ぶるつと身慄いした。今日は吉良屋敷にお茶に招かれて、屋敷に掘った抜け道を書いた図面が赤穂の浪人に渡ったらしいと耳に入れて来たおらくだった。

それに、

「おけい殿は、明日は是非ご奉公に差出すように」

とおらくは松原多中にいい渡されてきた。

もう、おけいを吉良様にはご奉公かなわずと断ることは出来ないのだ。

おらくは、フツと妖しく微笑した。

（お屋敷へ上げよう。そうすればまたあのおけいと秘密のときが持てる機会はある。それでないと、おけいはらくの前から消えてしまふ。よしおけいが赤穂の廻し者としても女の自分は知らぬことだ）

おらくは、その夜おけいを自分の部屋へ呼

んで、おけいの身にはおぞましいであろう裸身調べを念入りに行った。

女間者露見

さらりと襖が開いた。

「あっ！」

おけいは、慌てて書いていた筆と紙を膝の下へかくして振り返った。

おけいが吉良屋敷に入り、上野介の側室としての朝夕がもう一月近く過ぎていた。

「フフフ、おけいさまには何を文に認めておりました」

おけいが屋敷へ上ってから、上野介の寵愛が薄れて何か折あらばと狙っていたお綾は、意地悪い目をして、唇の端でうすく笑った。

「お文ですか、殿様の有難いご寵愛に飽きて他の男に手渡す」

「いえ、つれづれにお歌など書き散らして……」

「おや、それはご風流な、綾にも是非そのお歌をご披露して少しお教え願いたいものです」

お綾は、後手に襖を締めて、おけいに近づいた。



「いえ、お教えするなぞ……まだまだ拙なくて左様な大それたことは……」

「おけい殿、お見せください。まさか、お屋敷内の様子を認めていたのではございますまい。噂によれば赤穂の浪人ばらが殿様のお命を狙ってあらゆる手管を使用しているとやら……ホホホホ、お顔色を変えてどうなさいました。ご冗談を真に受けて、まさかおけい殿が赤穂の廻し者とはこの綾は夢にもお疑いしてはいませぬのに」

「お綾さま……」

「さ、三十一文字とやらを拝見させていただきます」

お綾は、血の気を失っているおけいを冷たく見て促した。

「で、ではお恥しいものでお目に入れる出来ではございませぬが」

「字あまりではございませんで

しょうね」

「字あまり？」

「和歌は三十一文字。ホホホ、おけいさまのお歌はその倍も、いや、十倍も長くはないかとお察しして……」

うっと、おけいは唇を噛んだ。

見破られたのだ。

おらくのいとわしい裸身調べにやっと堪えて望みを達し、吉良邸へ上って苦勞して屋敷の様子を探り出したというのに。

おけいは、女の嫉妬が、自分を監視していたのを忘れた不覺さを悟った。

「えいッ！」

「何をお戯れを！」

おけいは、かくし刀をお綾に突っかけたが余りの大事な露見に気も転倒していたのか、突き損じた腕をお綾に押さえられていた。

「お出合いくだされい！ 赤穂の女間者を綾が取り押えましたぞ！」

お綾は大声を上げた。

忽ち近づいてくる物音に、おけいは、まだ墨がかわいて間もない、吉良邸内の図や、探り出した様子をこまごまと書いた密書のひろがる中に無念の身をお綾の手で押さえつけられて目を閉じた。腕を折れんばかりに逆に締

め上げられ、

顔を畳にぐいぐいこすりつ

けられていた。苦痛は感じな

った。苦痛はそのままおけいの無念

さであった。

それから半刻ほどのち……。

おらくは、松原多中に呼ばれて吉良邸の奥まった部屋にいた。そこには、おけいをとらえたお綾が、憎々しい笑いを片頬に浮べて、おらくを待っている。

「おらく殿。わらわの責め問いには、おけい殿は赤穂の間者と口を割らぬ。おらく殿ならほかに責めようもござろうの」

お綾は、柱に後手に縛りつけたおけいを意地悪く見やっておらくにいった。

「はい、らくにはおけいさまの口を割らせる存じよりがございます」

「遠慮せず責めるがよい、そなたがお屋敷にいた女子じゃ、口を割らねばそなたの身にもひびこう」

お綾は、皮肉に微笑をうかべていった。おけいが上った為に、上野介の寵を失った復讐がこの女にはあった。

それから始まったものは、あの裸身調べにくらべようもない程残酷にはげしく手酷しか

った。

「さ、おい

いなさいませ。

お屋敷の様子を

何処の誰に書き送

るつもりだったの

です」

「うっ、あっ」

「おいしいなさいませぬか！」

「ゆる……ああ……もうおゆる

し……」

「ホホホホ、らくどのの責めようはまた変っ

て面白い見ものじゃ」

いっそう、おけいの呻く声が高くなった。

「綾、おけい殿は赤穂の廻し者と白状したかな？」

入って来た松原多中は、その場の光景を見



て、苦虫を噛みつぶしたような顔をした。

「しぶとい女子でござるぞ」

お綾が答えた。

「困ったことになった。殿がこの騒ぎを耳に入れてな、いかなることがあってもけい殿をはなさぬと仰せなのだ。そればかりか、すぐのおめしじゃ……」

おらくとお綾は顔を見合せた。

「よろしうございます。すぐおけいさまを殿様のご寢所に」

「何かおらく殿に名案がござるか」

「殿様を一時寢所からはなしててください。そうすればあとはらくがうまく……」

「む、そうか、頼む」

上野介は、おらくに促されて寢所に入るとおらくの手で蒲団を剝がれて呻いた。

華やかな色彩の夜具の上に、おけいが仰向けに横になっていた。夜具の下に青竹が通されて、おけいの両手首が、その両端に扱帯でくくりつけられていた。

乱 刃

ぱっと、新兵衛は撥ね起きた。

寅の一点、今の午前四時頃である。

新兵衛は雨戸をあけた。昨夜の雪は止んで

雪明りで部屋の中は薄明るくなった。新兵衛は寢床の傍に置いた徳利から、冷たく冷えた酒を喉に流しこんだ。そしてつつけて水を飲んだ。

「新兵衛、起きたか！」

障子を開けて、清水一学が顔を出した。

一学はちゃんと身支度をして、襷もかけていた。

「赤穂の浪人ばらの乱入か！」

「ム、すぐ来い、先へ行く」

一学は母屋の方へ駈け出した。

新兵衛は、そっと雪を踏んで庭へ出た。

母屋の方には、火事装束の武士が馳けつける者を寄せまいと立っていた。

「よし！」

新兵衛は、女の長襦袢を頭からかぶると、庭へ出ず廊下を母屋へ向って馳けた。緋の長襦袢はお玉から剝いだものだった。

廊下がつまって、新兵衛は庭へぱっと馳け出した。

ピュン！ ピュン！

矢がその新兵衛を狙って飛来した。

新兵衛はいつか大刀を抜いて片手に持っていた。

「浅野内匠頭が旧臣共、上野介殿の御首級を

申し受けて、亡主の鬱憤を散せんために推参致した。早々に我と思わん者は出会え！」

戸という戸を押倒し、所々に火を点けた蠟燭を立てて、明るい中に、新兵衛は一度に数人の相手をしている男を見てニヤリとした。

「一学だな」

一学は、両手にそれぞれ刀を持っていた。

「浅野の旧臣、間十次郎！」

「上杉の大曲新兵衛！」

片手双りに、新兵衛は大刀を振った。

十次郎は雪の中につんのめった。見向きもせず、無言で繰り込んでくる槍のけら首を斬って落した。

「片岡源五衛門！」

「推参！」

新兵衛は、母屋の廊下へ馳け上った。

「小野寺十内！」

新兵衛の一刀が、無言で夜明けの冷気を切る槍が向けられる。

いつか新兵衛はまた庭の雪を踏んでいた。

（死ぬな？）

新兵衛は、思った。常に相手は二人以上だった。新兵衛の妖刀は無気味に冴えた。しかし、倒れた者がむくりと起き上るのだ。帯に、鉢巻に、鎖をしこんでいるのだ。

新兵衛は、素給だった。袖が裂かれ、露出した腕からは血を噴いていた。

鎖を打ち、刃を受けて、新兵衛の刀は刃こぼれがはげしかった。

(用意の相違だ)

新兵衛は、また一人を雪の中に倒した。

(穴に落ちた馬鹿は居まい)

ふと、新兵衛は、大柄なお玉の裸体を思い浮かべた。お玉が着ていた緋の長襦袢は、遠くの雪の上に鮮かにひろがっている。

帯を切られ、前にはだかった裾が新兵衛の足をもつれさせた。

得たりと、白刃が左右から斬り込んだ。

新兵衛は、どきりと雪の中に半分埋まるように倒れた。倒した者は、ぱっと馳け出す。

「ウム」

新兵衛は、雪の中で呻いた。

「けいどの」

一膝乗り出して、新兵衛は死んだ。

そこから近い、泉水池に渡された太鼓橋の下には、一人の美女が後手に吊るされていた。

おけいだった。もう二晩も、水も飲まされず、極月の寒さに長襦袢一枚に剝がれて、赤穂の間者として、そこへ吊られていたのである。足の爪先が、僅かに身を切るような冷た

い水に漬かっていた。

おけいが、最後の努力で、舌を噛み切ったのは、新兵衛が死んでから間もなくの出来事だった。

おけいは、ついに、役に立たず終いで、同志の討入を迎えて、自責の念で自ら命を絶ったのだった。

だが、ここに不思議なことがある。おけいがお綾に見咎められた時書き終った文が、吉良家からその後紛失していたことだった。

それと、この日、本望を達した赤穂浪人の吉良邸の隅々までしっていたような働きであった。

落し穴にはまった者は無かったし、ついに時間をかけて間道伝いに逃げた上野介を首尾よく討ち取ったことである。笑止なのは、神倉庄吾がその後の公儀の取調べの折、どんでん返しの穴の中で死んでいたことだった。しかし、これも笑止といえるかどうか。庄吾は一人ではなかった。

お玉のからだをしつかと抱いて死んでいたから――

お玉は半死半生で、片手に血の染んだ庄吾の差料を抜いて持ったまま救われた。

第 楽 聚 誌 秘

次 秀 白 関 将 亂

光 堀 岩

画・進 尾 中

装 美 判 書 新

円 24 〒 円 120

淫虐非道の殺生関白と取沙汰され、果てしない肉慾の世界に耽溺しつつ絶望に心噛まれる秀次の暗い青春！ 次々に現れる嗜虐の描写は、岩堀光の独壇場！

世界各国の変った刑罰を調べると、馬裂き車裂き、煮殺、水漬け等の惨酷な死刑が行われていたことが判るが、姦通の私刑にこんな苛酷な死刑が行われたという例はあまり無いようだ。

中国、日本等のアジア諸国をはじめ、欧州でも行われていた私刑の一つに鼻削ぎがあるが、アイヌではこれがすべての重罪に課する刑罰だったらしい。

もともと、アイヌには死刑がなく、死刑に相当するものが鼻削ぎや耳切りだった。なかでも鼻削ぎは憎むべき重罪で、姦通した男女もこの刑を課されたのだから、不義がいかに憎まれていたかが判る。もっとも、アイヌの鼻削ぎは鼻の頭の軟い部分を削りとるに止めて、骨まで切るのではなかった。

このほか、姦夫のヒゲを剃り、姦婦の頭髪を剃ることもあったが、ヒゲを大事にするアイヌにとってはこれが生涯の恥辱だったのである。

姦通私刑考

—日本と中国—

青柳 淳郎

アイヌにとっては、ヒゲは社会の階級を示すもので、喧嘩するような時でも相手のヒゲに触れてはならなかったくらいに神聖視されていた。また女の髪も生命の次に大切なもので、日本でも姦婦を丸坊主にする公刑があったほどである。

しかし、なかには図々しい間男がいて、

て自白するというわけだ。

さらにこれは私刑ではないが、アイヌが日本の男からメノコを守るために毒矢を使ったという説がある。

シャモ（日本人）が来たらば

ブシ矢で殺せ

メノコ（娘）騙して

連れてゆく

ブシ矢というのは熊狩りに使うトリカブトの毒を塗った矢であるさしずめアメリカインディアンもどきの激突が行われたのかも知れない。

髪切り、耳切りはアイヌ同様だが、これがほんの序の口というのが台湾土人の私刑である。台湾風俗誌によると、尿汁を吞ませ或いは逆さにして尿壺に頭から突きこむとある。

これはどうも台湾独特の私刑らしく、姦通は文字通りクサイ仲ということになるが、コアヌサイ（屎食）屎突はまかり間違えば一命を落すことにもなりかねない。爆竹を肛門にさしこみ、これに点火して爆裂させるなどという乱暴な私刑もあったようだ。

あるとき、一人の盲人が田畑を詐取されたと台南法院に訴え出たことがある。

しかし、いろいろに訊ねて見ると話につじつまのあわぬところがあり、尙も調べると、「実は我が身の恥を申しますが——私は曾て人妻に懸想して道ならぬことを致しておりました」

と訴状の趣きとはかけはなれたことを言う法官は呆れて、

「盲目のくせに、よくもそのようなことが出来るな」

と言ったが、

「いえ、それはまだ盲目にならぬ頃のことですそれを女の亭主に見つけられてかくは両眼を抉りとられたのでございます」

「ふうむ。私通不義の私刑として眼をえぐりとられたのか。で、その男の名は——」

と問うて、法官は漸く納得したのである。

なぜなら、盲人の田畑を詐取したというのが、曾て彼に妻を奪われた男だったのだ。

自業自得とはいえ、彼は盲人にされたうえに父祖伝来の畑まで欺しとられたのだが、この事件がどう裁決されたかはともかくとして台湾で姦夫の眼を抉りとる私刑が明治初年ご

ろまで行われていたことは記録にも明らかである。

古来、刑罰の最も苛酷だったのは中国ではあるまいか。

堯舜時代から五刑の制度があり、刺青、鼻を切る、腓を切る、性器を取る、及び死の五つにわかれていたが、死はさらに斬、絞、磔、煮、火……その他数多の方法があった。

だから、姦通も時と場合によっては死を免がれ得なかったが、情状酌量して去勢のみで許すこともあったらしい。宮刑はその性質上ほとんど姦淫罪にのみ適用されたようだ。

しかし、私刑のうちで最もバカげているのは、中国の東北地方つまり新京から奉天あたりで行われた密通の鑑定である。

と言っても密通したと思われる男女を糺問するのではなく、姦通の現場を目撃した姦夫姦婦の夫か妻が、二人を殺害してその首を持って訴え出ることからはじまる。

そこで判官はまず大きなタライに満々と水を張り、これへ二つの首を入れると、首は浮き沈みして揺れているが、やがて静止する。

このとき、首と首とが向きあうと、「うむ、密通したに相違ないぞ」

と言うことになり、二つの首がそれぞれうしろ向きになったまま静止すると、

「こりや、偽りの訴えを致したな」と、訴人がたちまち首を刎ねられるという始末だ。

もっとも、首が向きあいもせず、うしろ向きでもないときは、その首の角度によって「これは姦夫の方がさきに手を出したのだ」とか「姦婦の方が淫奔であった」などと断定したのだそうだが、こういう鑑定法が明治中葉まで行われていたというから呆れ返った話である。

ハガキで申込みれば現本すぐ送る代金は本を受取ってからで結構

幸福な結婚は本書から



ヴァン・デ
グアン・デ
原 著
B6判 一冊
定価 二五〇円
送料 一〇〇円

いふ金とあ

世界で一番くわしい性学から性愛の技巧まで夫婦の奥を赤裸々に説明、結婚生活の円満と家庭の幸福をはかるオランダの名医ヴァン・デ・グエルの名著
株式会社 近代社 読小係
東京都渋谷区笹塚町一〇

SS 秘密クラブ

横山 正克

篠田 正一・画



(一)

新橋駅の高架線をはしり過ぎる電車が、この「ルリガン」と英文字のネオンの点った喫茶店を、間断をおいてはガーガーと揺るがしてゆく。とうてい落着いた話など、できそう

にない店だった。

コーヒーも香りがなく、煮つめたように味がわるい。僕はじりじりしながら、腕時計をみた——約束の時刻を一時間近くもこえていく。やはり衣笠透きぬがさとおるという奴は、だらしのない男だといつくづくおもった。

突然アパートに電話をくれて、ぜひ会いたいからと呼び出しておいて、こんなわかりにくい店までこさせてスッポカすとは、あまりに誠意のないやりかたではないか。

金持の不良息子で、親の経営している商事会社の専務取締役にはなっているが、およそ仕事もせずに、遊蕩三昧にくらしているロクでなしである。

「……ひどい野郎だ」

おもわずこう呟いた。もっともその反面に、きつと札びらをきって奢ってくれる、という期待が、裏切られかかっていることへの、怒りもあった。

せめてもの幸いは、手狭な店の隅に十七時のテレビがあつて、プロレスの実況放送をやっていることだった。そのためかボックスはおおかた客がついて、レジスターの女の子まで席を外して、画面に見とれている。

僕はアーツと大きくあくびをし、どっちが勝つてもよい気持で、マットの上にもつれる全日本チャンピオンと、白人選手の肉体を見

詰め

ていた。と

背中の方から

冷たい夜の風が、す

ーっと吹き込んで、頬を

なでた。

振り返ってみると、身近のドア

をあけて、まぶかにハンチングをかぶつ

た皮ジャンパーの襟をたてた男が、うかがう

ような瞳をなかに注いでいる。

「……はやくしめろい。寒いじゃないか」

胸の中で舌打ちをしたとき、その男はそろ

そろと猫のように背でドアをすって、女の

子のはなれた、レジスターのほうへしのびよ

り、また脅えた視線をあたりにおくった。

ドキリとした。売上げの金でも盗むのか

と、直感したのだ！ 顔をそむけ、手を頬に

あてて、気づかれぬように指のあいだから観

察していると、まんざらそうでもないらしい。

かえって奇怪なことに、ジャンパーのボ



ケットから何やらとり出し、そつと回転台の上におかれた電話を驚掴みにし、その下へ押しこんだではないか。

男はそうした妖しい動作をみせると、サツと身を伏せ、床を這うようにしてドアから表へ逃れ去った。

——一瞬のできごとだった。もちろんこれでは、犯行とは形容し難い。たちまち好奇心にかられて、僕は席をたって、その姿を追った。表での露地には、ふきとおしの風にゆられた軒並みの一杯飲屋やすし屋の燈火が、赤く両側に点っているだけだった。

「お帰りですの」

「いや、べつに。ちょっと、人をみたのさ」

かえってドアの音に気づいた店の女に、こう疑ぐるような声をかけられて、僕のほう

★秘密クラブの獵奇ショウにメンバー以外の人間がひとり居る！

★見つかったら最後、そいつは否応なしに抹殺されるのだ！

が戸惑いしてしまった。しかしなんとも、説明のつかぬことだ。

安心したらしくまたテレビを見だしたすきに、素早く電話を掴んで、探ってみた。

紙片の触感がして、堅い小さなものを入れた封筒がでてきた。この経過を知るものは誰もない。

なにくわぬ顔で勘定をすませ、あたふたと「ルリガン」をでた。あるいは衣笠への伝言でもたのもうとも考えたが、とてもこの調子では約束通りきそうにない。それにことのはずみでこんな真似までした以上、まさかこちらの名を知らすわけにもゆかぬ。

覚悟をきめて、僕まで逃げるように新橋駅の明るい構内に入った。あたりに先刻の男の影はない。ホームのすみによって、封を破ってみた。タイプ謄写した上質の紙に、「明金曜日、SSクラブ例会ハ、午後十一時半ヨリ、新宿歌舞伎町飲屋、みどり、前広場ヲ左ニ折レ、五十米先ノ大丸質店隣リノ黒塀ノ家ニテ行イマス……ナオオ待チカネノ会員章ガデキマシタカラ、オ屈ケ致シマス……SSクラブ役員」としたためてあり、封筒の底からそのバツジらしいものがでてきた。

赤と黒のハートと、金の矢でつらぬいたマ

ークで、銀に精巧な七宝を施した美しいメタルである。裏には「SS-27」と、ナンバーが小さく刻まれていた。

いったいなんのクラブなのだろう。この新橋駅のあたりには、客引きの女や密淫を斡旋する、あいまい屋が出没する。その一味の、さらに組織だったグループの手引きかともおもえる——しかしそれにしては、あまりに意匠をこらした豪華なバツジすぎる。

僕の好奇心は、その文面からして、次第に猟奇的な心地へと憑かれはじめた。

ゴーツと唸りながら、ホームに巨大な国鉄電車が、突風をまいて滑りこんできた。あわててポケットにねじ入れ、とり混んだまばゆいばかりに明るい車輛に乗った。

疾走しはじめた電車のスパークも、このあたりの高架線では、窓外の色とりどりのネオンの瞬きにうすれて、視覚に映じない。そうした燈火の海を見下しながら、僕はいつまでも謎めいた気持ちにひたっていた。

(二)

土地の相違はあっても、昨夜のあの新橋の巷とこの新宿歌舞伎町界限とは、なにか似かよった雰囲気漂っている。

安手な、陰鬱な、色情にかわいた一劃なのだ。暗い迷路のような乾くこともない露地に、厚化粧の夜の女たちがあふれて、酔客たちを呼んでいた。

「お兄さん……どこへ行くの。まちがっちゃ駄目よ。そっちはいいとこなくてよッ」

こう茶化し声を浴せられながら、僕は赤線街をはずれて、あの紙片にあった大丸質店の暖簾のまえに出ると、足をとめた。

もう質屋は閉店して明りを消しているが、倉や街燈のともった電柱の看板から、そうと知れた。その質屋に続いて、たしかに漆黒の板塀が長くのび、まっ四角な大きな建物が、中天をおおって、鎮まりかえっている。

夜目にはコンクリートともブロックともいかぬ、しかも廃墟のように疲れを見せた、得体の知れぬ建造物だった。

板塀は新規にかこつたものらしく、近づくとタール塗料の臭気が鼻をついた。入口をもとめて行ききしていると、

「もし、どなたです。なんの御用ですか」

まるで地底から滲みだしたように、小柄な黒い人影が、懐中電燈のまばゆい光芒をチカチカと点滅させながら迫ってきた。囁くような、警戒をこめた声なのだ。

「SSの会員です」

思い切って答えると、男はうなずいて、「あらかたお客様も揃っておいでで……」

と、反対側の闇を指さした。その客たちのものらしい高級車が、あわく夜霧にしずんで停車している。犬のくぐるほどの木戸をぬけて、建物にみちびきこまれた。

GI刈りのチンピラに案内されて、湿気の強い廊下を歩み、不意に地下に階段をつたわって、桃色のライトもなまめかしいホールへおりた。ライトは一段せりあがった踊り場へ向けられ、客席はたがい顔も見かわせぬほど、仄暗い。ざわめく気配、煙草の火、それから判断して、客はざっと三十人あまりか。

「グッドイーヴニング・エヴリボディ……今夜はショウと臨床医学の夕べです。十分御研究なすってください」

気障な口調で、黒外套を裾長に着た主催者らしい人物が、長身を前かがみに、肩をすぼめてウィンクしてみせた。黒眼鏡に黒手袋、鼻の下の細いコールマン髭も、なんとはなしに混血臭い。

テープレコーディングらしいリズムに合わせて、強烈なストリップ・ショウが展開された。黒人女の踊り子も一人まじっている。そ

れが「ルッキイね！ ルッキイね！」と、ほえみながら、生れたときと同じ状態の肉塊をブルンブルンゆすり、日本語まじりに鄙猥な叫びをあげるのだ。尻や内股を叩いてみせるコークス色の大きな手は、内側だけが妙に生ッ白い。紫がかった紅のマニキュアをした爪が、変に不気味な感じを与える。

紅い珊瑚をしまった戸棚——とフランスの詩人がしゃれた言葉で言い現わした、秘密の部分も、こうあからさまに見せつけられてはかなわない。猟奇の限界を越えた光景に、僕は嘔気をさえ催してきた。ショウはしだいにアパッシュー・ダンス風になってきて、黒人の女が、踊り狂って逃げまどう他のストリップに、皮の鞭を炸裂させたりする。白い肌に赤い蚯蚓の線が走り、顔に真ッ向からうけて、鼻血を両手に押さえる女もあった。

「ストリップ・ショウはこれでジ・エンドです」

ダンヒルらしいパイプを、大きな紫色のハンカチで拭いながら、主催者が進み出た。

「これから今夜の特別研究コースに入りましょう。みなさんは最近、封切された『情炎』という映画、御覧ですか。あの不貞の妻を演じた女優、日向八重子……あの女優がある事

情で某医院に入院したのです。今夜これから手術をします。どんな手術かはやがておわかりでしょう。その状況をみなさんに見ていたかったです。とにかく彼女はいま隣室の移動ベッドの上で、麻酔の夢を見ております。眠ったまま病院から運ばれたので、この光栄ある資料に出場したことも、記憶には残らないことになっております。例によりまして、もしみなさまのあいだに日向嬢と御縁のある方、異議のある方は、お申してください。御異議なければ……さっそく手術を開始いたします。では……」

一人として阻止する者はなかった。

主催者は手を振って、合図を送る。

ガラガラと地下のホールに反響させながら、白衣にマスクの医師が、患者を横たえた鋼鉄のベッドを押し、白色光の焦点に位置をととのえて、静止した。

患者の顔を被った白布が、やきつき重なる視線のもとで、パツと外される。

まさしく、日向八重子！ 僕は愕然として、夢見る心地だった。

それから一時間近く、そこにくりひろげられたものは、まさに悪鬼の戯れだった。僕は

いくども失神せんばかりの、眩暈に耐えねばならなかった。

「この前の時のショウのほうが、見応えがあったな」

「そうでもないさ。あんなのはメロドラマだ。そこへ行くとこっちは現実そのものだ」
「なあに、いずれ監督かなんかとの火遊びの後始末さ。さらにあるよ。そこへ行くと、三角関係の男と男の決闘なんてものは、滅多には見られやせんよ。この女優、素顔も裸もあんまりきれいなじゃないか」

「まあ、こないだの刺された男の顔は、ちょっとよかったな。しかし、これだってそう棄てたものじゃない」

凄惨な墮胎手術の実況を目のあたりにしながら、隣席の二人は平然とこんな会話を、取りかわしている。ああ、このSSクラブなる結社の目的は、いったい那边に存するのだろう……？

(三)

次のこのSS会の集いは、銀座の並木通りに面した、とあるビルの三階十三号室でおこなわれた。

やはり金曜日である――

僕は二度目の冒険をこころみるために、夜ふけの正一時に、ビルの裏口から手さぐりに暗い階段をのぼっていった。

あの新宿歌舞伎町の恐怖の集会の帰りに、「こんどのご連絡場所は、どちらに、いたしましうか」

と尋ねられ、僕は咄嗟に、「……渋谷のハチ公……」

と答えてしまったのだ。待ちあわせ場所として有名なその名が、つじつまをあわせる即答の言葉として、口から出たのだ。

「まさかあのような所では……では他の方にもご希望がございましたから、午後七時すこし前に、渋谷駅裏の改札口の伝言板でご案内しましょう。お忘れなく読んで下さい。時間におくると、ほかの会員の方が、消してしまいますよ」

こう注意した男は、皮ジャンパーをした、ハンチングこそしていなかったが、先日「ルリガン」に紙片をおいていった男らしかった。

おおかたクラブの、連絡係りといった役を担当しているチンピラなのだろう。

――約束通り伝言板にチョークしてあったSSとした走り書きにより、僕は銀座のこの

集会の場所と時刻を知ったのだ。と、その走り書きは、わざとそしらぬ顔で遠く離れて見詰めていると、五分とたたぬうちに現われた恰幅のよい初老の紳士が、立ちどまって読んだから、あわてて消し去っていった。

会員なのだろう。僕は雑沓にもまれるその紳士を追って、駅の表で口前ですばらしいキヤデラックの自家用車に乗り込むのは見とけたが、残念ながら番号まで確認できなかった。

こうした情勢よりみても、よほど上流の階級を、クラブ員としているらしい。

さてビルの階段をあがると、暗い踊場に佇んでいた男から、やはり先日のように声をかけられ、懐中電燈にみちびかれて、暗い事務室に通された。

席につくと、やはり三十人あまりの客の気配が周囲をつつんでいた。互に会員の身分をさとられぬよう、特にこうした配慮がめぐらされているのだろう――これが僕のようなイカサマのもぐり、会員にも、またおくめんもなく出向かせる、冒険をおかさせたのだ。

またいくら発見されて莫大な会費を請求されても、少しもくいないだけの、魔力はあった。



「こ
んばん
は、皆さ
ん……本日
の企画は、ま
たチョツと趣向
をかえてみまし
た。さあどうぞ、
この窓辺におよりく
ださい。この前のシヨ
ウ、おもしろかったです
か。ぜひ今夜もまた、深夜
のスリルをご満喫ください」
ふたたび姿をみせたあの主催者
の男が、ダンヒルのパイプを、胸
のハンカチーフをとって磨きながら
挨拶した。

「ユー、なぜこの前はあたしに見せな
かったのヨ……わけおしえてヨ。ネエッ
てば、ひどい人ねッ」
男のかたわらから、ルーシユの濃い羚羊の
ようにすらっとした肢体の女が立ちあがり、

主催者の男にこう甘ったるい声で、抗議を申しこんだ。

「おおリーズ京子さん……そんな無理いわないでください。ねえお客さまがた、この前の晩は、このリーズさんみたいなの、ご婦人の方には参考になりませんねえ。かえって、よくない勉強です」

おどけた言葉に、客の笑い声がざわざわとおこった。

「それじゃユーいやらしいこと、見たんでしよう。ユーはほんとに、スケベボーイで困ったわねエ」

「ネバーハブン。これもサービスです」

また客が笑った。どうやら主催者の情婦らしく、こうしてときおりコメディな冗談をいって、楽しませたりする馴染み役らしい。一さてすすめられたとおりにパツと明りを消した室内の隅によると、街頭にてらされた凍てついた表で通りが望め、ジープワゴンが一台、深夜の向い側のペープメントにそって、ひっそり駐車していた。

主催者の暗い影が、その車にむかってライトを四度点滅させた。するとそれに応じて、ジープワゴンが、赤い尾燈を四度パチパチともして答えた。

「いいですか……あの車のむかいの店が、宝石商の大きな商店です。ただいまから強盗の実況をお眼にかけ、相当の戦果をあげてご覧にいきます。しかし人は絶対に殺しません。罪のないひと、撃つたりしない。しかし万一の場合は、応戦はする用意があります。ここからかくしマイクが引いてあり、その実況をおきかせする、苦心の趣向ですよ……じゃ、はじめますよ！ OK レス・ゴー——」

たちまちガーガーとこの部屋のスピーカーに電流音がとおり、ふたたび送ったライトの合図にこたえ、バラバラと四名の黒い影が蜘蛛の子を散らすように車から飛びおり、ひよいとこちらの窓にむかって、拳銃をにぎっているらしい手をふってみせた。一名は背に、超短波発信の装置をせおっている。そしてその店と隣りの店の間の露路に、覗きたいにちよろちよろと姿をひそめ去った。

バリバリと、名状しがたい音が拡声器に伝わり、つづいてカチカチと間断をとった、鑿の金属音がひびいた。

「いま鉄の非常口をむしり取りましたね……きつとその音でしょう。じゃ、こちらから、激励してやりましょ……ヘイ！ボーイズ！首尾はどうだい」

こう言って中途から、マイクをとって呼びかけた。おどろくべきことに、忽ち応答がやや雑音まじりにあつて、

「……上々です。いま仲間が守衛の親子をつかまえやした」

と、報告してきた。

「そうか、手荒いことするな……おっとそれから、その店番にマイクにでももらいな。おどして小声で話させろ。お客さまが、おたのしみだぜ」

「承知しました、待ってください」

やがて恐怖にかわいた声が次第に拡大され、

「……は、はッ、か、鍵はこれです。えッ、金庫のですか、それはあずかっておりません。あッ、ほ、本当ですッ」

などと、守衛とのやりとりが緊迫した暗にながれた。

「しょうがねえ……このさまで。じゃ爆破しやしょう」

「そうしろ。グリセリンに注意しろよ……表ではまだ大丈夫、安心してやれ。それからな、ミーのリーズに、すげえダイヤを頼むよ」

こんな会話ののち、これはマイク以外にも

はつきりと、耳をつんざくような轟音がひびき、閃光が街路向きのショウウインドウを、パツと闇にうかべた。

「はやくしろ！ あわてずありったけ、掻きあつめろッ」

「……で、表ではッ」

「まだ心配ない、早くしろ……守衛は車の前までつれ出してはなせ！ わかったなッ」

賊をのせた車は、疾風のように通りを逃げ去っていった。

守衛であろうか、路上につきたおされた影が、やがてよろよろと立ち上がり、大声にわめいてかけ戻ってゆく——それからサイレンを鳴らしたパトロールカーが、群がるほどに集まるまでには、さして時間を要しなかった。

現場の前は、新聞車の車もひしめき、夜ふけとはいえ、騒然たる混乱を呈していた。

「ではみなさん……危険ですから、一人ずつ指示にしたがつて、裏から帰ってください。なに犯人は車でにげた。うたぐられることありませんがね。では、また来週をおたのしみ」

こう言って主催者は、不敵な笑みか浮かべ、白々と明るみはじめた窓の、日除をおろ

した。

(四)

私鉄の駅を降りて、教えられた通りに五分ほど歩くと、あたりが嘘のように淋しくなった。三度目の奇怪な経験をしに行くのだと思うと、足の運びも早くなる。林の中のひとすじ道は、ポクポク乾いた土の足もとも、危なっかしいほど、暗いのだ。左手に月の明りで、白っぽく見えるのが、八幡様の鳥居だろう。これも教えられた通りだった。

杉にかこまれた境内はいよいよ暗い。もうほとんど集っていた。あたりをはばかって話もしないのが、化物でも寄り集ったみたいで、不気味だった。

「オールメンバー、もうお集りのようですね。時間も迫ったことですから……そろそろ御案内ということに」

と、丈長の黒外套もお馴染みの主催者が、「第三の男」^{サードマン}気取りに進み出ると、懐中電燈を受けとって、いつものように先に立つのがリーズ——今夜は半外套の襟元に、セーターのタートルネックをのぞかして、スラックスという身軽な装いだ。

「どうぞこちらへ……足音は出来るだけ立て

ないでね。社務所の神主が目を覚まして、怪しみでもすると、あとが危い」

劇場の案内人みたいに、光りの輪を後へ振って行くあとを、ゾロゾロと二列になって、社殿を左に裏参道へ進むと、いつの間にか細い道が竹藪の中へ入った。僕は行列もしまいのほうにいたから、足もとがひどく暗い。木の根っこにつまずきかけて、思わず、

「こいつは八幡の藪知らずだ」

と、舌打ちした。殿^{しんが}りの主催者がまたダンヒルを例の紫の大ハンカチで磨いているのだろう、キシキシ音をさせながら、

「テイキリーシー、あいにく懐中電燈を、一つしか用意して来なかった……大丈夫ですか」

と、低く言った。

竹藪が夜更けの風にそよぐ中を、何分ぐらい歩いたろう。みんなこれから起ることへの異様な期待に、胸をワクワクさせているらしい。僕もそうなのだ。それにしても、なにを見に、どこへ連れて行かれることか？ 八幡の藪知らずが尽きると、雑木林に囲まれて、ちよつとした原っぱがある。向うが爪先あがりの土手になって、その上の空に冷く星あかりを受けているのが、電車の架線だった。さ

つき乗ってきた私鉄が、この土手の上を通っているものと見える。

「ここが今夜の会場です。いつものように、主催者の挨拶がありますから」

リーズの声に一同が原っぱの隅に円陣を作ると、主催者は黒手袋をはめたままの指先で、青白い顔の気障なコールマン髭を撫でながら、

「こんな遠方までおいで頂いて恐縮に思います。どうしてもこうした舞台装置が必要だったのです。お許しください。さて、今夜のシヨウは、死刑の執行。みなさんに法律の代行者として、ひとりの極悪人の死刑執行に立会って頂くわけです……先般、新聞紙上を賑わしましたモースト・センセイショナル・マードーケース、麻布の花屋一家五人殺しを、みなさん、御記憶でございましょう……あの事件の犯人を、警察に先んじて私どもは捕えしました。僅か一、二万の金を盗むために、三歳の幼児の喉首までも掻き切って、血の花をぶちまけた、憎みても憎みてもあきたりぬ人非人です……法律が死刑を宣するであろうことは、火を見るより明かです」

「その死刑を今夜われわれが代行しようというのであります。あの土手の上には、鉄道線

路がレイジャス三〇〇アールの急カーブを描

いて走っております。唯今より十分後に電車が、フルスピードで通過することになってい
る……その線路上に麻酔薬をもって眠らした
死刑囚を横たえます。みなさんは雑木林のお
好みの位置に身を隠して、正義の轍が邪悪の
肉体を寸断する、神の摂理をトックリと御覧
ください……早速、死刑囚を引出させます」

主催者はパイプを握った右手をあげた。雑
木林の中から、いつものチンピラのジャンパ
ー姿が、一人の男を抱えるようにして現われ
た。それに続いて、GI刈りのチンピラがア
タフタと出てくると、主催者のそばに走り寄
って、小声でなにか話しかけた。

黒眼鏡の上に太い眉をひそめてうなずく
と、主催者は死刑囚の右腕に、麻酔の注射針
を刺そうとしているリーズの手を制して、
「みなさん、困った問題が起きました。今夜
の会に不法参加した者があるようです。定員
よりあなた方の人数が一人多い。その一人が
何者か？ 私ばかりでなく、あなた方にとつ
ても、デインジャラスな問題です。調べさせ
て頂きます。お一人ずつあちらへ来てくださ
い。アーム・ソウソウリイ」

主催者はリーズを促して、大股に林の中に

入って行った。

GI刈りの合図で、一人また一人と会員た
ちは闇に消えては、また出てきた。僕はだん
だん不安になってきた。内ポケットにバッジ
は持っているものの、不法参加の一人という
のは取りも直さずばくなのだ！ ずっと休ん
でいた会員の一人が、今夜に限って出てきた
のかも知れない！ それで僕が定員外にはみ
だしたのか——なんと不運な金曜日だ。僕は
足の震えを、どうにも止めようがなかった。

遠雷のような響きがたちまちに近づいて、
土手の上を電車が、青みどろの中に光る深海
魚みたいに走り去った。次の電車まで少くも
も二十分はあるだろう。そのあいだ死刑を延
期された目の前の男の気持が、痛いほど僕に
はわかった。僕の気持とどちらが辛い……
「どうぞ」

ああ、いよいよ僕の番だ。震える足を踏み
しめて、林の中へ入って行く目の前に、懐中
電燈の光りがさしつけられた。それが飛びか
かってくる猛獣の目のようだった。

(五)

主催者の顔は、鋼鉄のマスクをかぶったみ
たいに緊張していた。リーズの唇にも、艶め

いた微笑はもはやない。

「会員章を見せてください」

懐中電燈の光りの中に、黒手袋が浮かぶ。
僕は指の震えを見せまいと、すばやく合外套
の胸に手を差しこんで、上衣の内ポケットか
らバッジを取りだした。主催者は黒眼鏡を光
らして、赤と黒のハートを貫く金の矢を見つ
めた。

「会員番号は？」

どう答えたらよいのだろう。バッジの裏の
記号を咄嗟に思い出して、一か八かとはかり
に、

「SS-27」

と、答える。相手は銀地七宝の裏を返して、
「この会の性格を単的に現わす“シックレッ
ト・アンド・サスペンス”の頭文字。あなた
はその二十七号会員ですな。いや、わかりま
した。サックス。ところで、この前のショウ
の内容を御記憶ですね。ドウ・ユウ？」
「強盗現場の見学でした。面白かったです
な」

「喜んで頂けて、私も嬉しい。その前は？」

「エロ・ショウと墮胎手術でしたね」

「くだいようですが、その前の回は？」

いよいよボロの出るときが来た。あの時以

来、会員になりすましている僕だ。その前の
ショウがなんであつたか、知るよしもない。

「ええと、あれは……」

僕はふつと思ひ出した——あの最初の冒険
の夜の席上、会員二人が話しあっていたこと
を。ああ、助かった！

「女一人を男二人が争つて、三角関係の果の
決闘沙汰……しかし、正直なところ、あれは
予想したほどの興奮がなかつたですよ」

「御批判は有難うかがいます……訊問みた
いで不愉快でしたでしょう。もう結構です。

ブリーズ・フォーギヴ・ミー」

リーズがバツジを返してくれる。僕は冷汗
に身ふるいしながら、フラフラともとの原っ
ぱへ戻つた。人びとが二、三人ずつ塊つて、
なにか囁きかわしているのも、不安げだ。も
う闇に目が馴れてもよさそうなものののに、
相変らず光源の悪い影絵を見ているようなの
は、いま林の中で懐中電燈を鼻ッ先へ差しつ
けられたせいか——それとも空に薄雲がひろ
がったのか……。

残り四、五人の調べが終ると、懐中電燈を
持ったリーズを先に、主催者が林から出てき
た。腕の夜光時計に目をやると、唇からダン
ヒルを離して、

「意外の邪魔が入つて、予定した電車を逃し

てしまいました。もう十五分すると、

ラストの廻送車が通過します。それ

によつて、死刑を執行するこ

とにいたしましたよう……

ただその厳正なる裁

きを五体に受

けるもの

は、

花家一

家殺しの

犯人ではあり

ません。この男

は……」

と、言葉を切つて、黒

い外套のポケットに入つて

いた右手を抜いたかと思うと、

ピストルが青白い火を吐いて、死

刑囚はジャクツ・ナイフを畳むように

腹を押さえて大地に倒れた。主催者はそ

れに一瞥も与えず、

「……警察が捕える日まで、この世の空気を



自由に吸わせておいてやろうかとも、いったんは思ったのですが、わが会のシークレットを吹聴されては迷惑。会員諸君の安全のために、かくは処置した次第。代って死刑囚はこの人物であります」

チンピラ二人に左右から押さえられて、人影が一つ、林からよろめき出した。

「この男が定員外の一人でした。この男は前回のショウの内容にも、言不確かでありましたし、なによりも会員章を持っておりません……もしや警察のスパイでもあったら、一大事。死刑囚の役割を強制することにした訳であります、いかがでしょうか……異議はございませんか？ どなたかお連れになった、入会希望者でもありませんか？」

誰も異議を申し立てる者はなかった。

「では、決定いたします。ヘイユウ……」

と主催者は長い顎をチンピラのほうにしゃくって、

「そいつに麻酔薬を注射しろ。ミイはリーズと一緒に林の向うを見廻ってくる……そいつが刑事で、あすこらへんへポリスカーなんぞが待機してたりしたひにやア、目もあてられねえからな」

リーズを促がすと、ピストル片手に黒外套

の裾をさばいて、闇に消える。その背に向って、犠牲の男が甲高く喚いた。

「俺は本当に会員だ。二十七号。ルリガン」で連絡をうけてる……」

「ええ、ほざくねえ」

GI刈りが男の頬をひっぱたく。僕は目をつぶった。この男は僕の代りに殺されるのだ！ 明日の空を仰ぐためには、この男を見殺しにしなければならぬ僕なのだ……。

どうやって自分の部屋へ辿りついたものか、僕はなんとしても思い出せない。死刑執行を見るだけの勇氣はなく、みんなが林の中に身をひそめて、軽合金の死神が通過するのを待つあいだ、僕は夢中で遠くへ遠くへ、足音殺して、小走りに逃げていたのだ！ とにかく人心地がついたのは、アベートへ戻って、電気のスイッチを入れ、畳にヘタヘタと尻をついてからだだった。ふと入口に午後の配達郵便が落ちていたのに、視線がいった。洋封筒をとりあげてみると、衣笠透からのものだった。急いで中を読みはじめる。

「ついつい御無沙汰してしまった。いつぞやの金曜日には君を、とびきり目新しい秘密クラブの会合へ招待しようと思ったのだが、僕に余儀ない用ができて……」

ここまで読んで、僕は夜の明けそめた町へ再び飛び出した！ 空中を飛んで行きたい思いで、昨夜の処刑場へ駆けつけると、線路ぎわに薙をかぶせたものが転がしてあって、巡查が一人、朝日に目を細めながら張り番に立っていた。

「事件ですか？」

と、近づく、巡查はまだ新米らしく、こつちを新聞記者かなんかと勘違いでもしたのだろう。ちよつと得意げに、

「さすがに、情報が早いすな。轢殺体です」

「ちよつと拝見」

薙をまくって、はっとした。もしやが当たって、血に濡れた衣笠透の顔が、シュウマイみたいな色をして、そこにあったのだ！

衣笠は会員章が出来たことを、知らなかったのだ——それは今、僕のポケットにある。それが彼を殺したのだ。

SSクラブのその後は知らない。また、ついに得體もつかめずじまつた——次の連絡日を聞かずに逃げたので、縁のつなぎようがなかったのだ。これからは町で狂ったような事がらを見たら、僕はこの奇妙なクラブのことを、恐怖とともに思い出すに違いないのだ！

(おわり)

(らくがきのページ)

みなさまのおこのみのえをおかきください



パチンコ地獄

あいびきを装ってパチンコ台
に執着するモテヌ亭主の哀話

大河内常平

八木 静 男・画

パチンコ屋なんて、釘をゆるめ過ぎれば損がゆく。しめ過ぎれば客がつかぬ。こんな苦労はもう真平です。お客さん方もこす辛くて、雇った女の子に渡りをつけて、パチッ、パチ、パチッ、とSOSのカラ打であいずして玉を出させたりします。全くたまりません。

機械だって新型が出れば、義理にも二、三台は据えねばなりませんまい……でも我慢して、十年からやってきました。だが例の一件いらい、もう金輪際嫌になりました……おや、旦那まだお話ししませんでしたかね。ほら、あの隅の方の台……あの台

で連日気狂いのようになってやっていたあるお客が、パチンコの為に魂なくして、自殺してしまっただけはなしですがね。

ルミ子の不満^{ふまん}

「こんな味気ない毎日には、もう厭きたワ……貴方といっしょになってから、何一つ買えたことなんかない。お金のやりくりと掃除ばかり、これじゃアまるで女中よ。こんなことしているうちに、年をとって、綺麗な洋服なんか着られなくなるんだワ」
派手好きなルミ子にこういわれて、返す言葉もない荻野だった。良平という名からして善良小心な彼は、魅惑的でわがままな妻のルミ子に、何といわれようとも反撥する勇気を持ち合わせなかった。己のサラリーの乏しさ

から、散々愚痴をこねられても、申しわけない心地に囚われて、黙りこくってしまえばかりだった。こうした天性の気弱さが、ますます腑甲斐ないものとなって、彼女に映じてならぬのだった。

「もっと男らしい人が好き。浮気ぐらいしたって構わないの……不自由のないくらしを、させてくれるのが一番よ、こんなアパート住いで一生埋れるなんて、不幸だと思うわ。まだ若いのに……ああ嫌になっちゃう」

疲れきって役所の残業から帰ってくる良平に、いいたい放題なことをあびせかけて、鏡台に向い、誰に見せるともない濃い口紅を引いたりするルミ子だった。

「——今日聞いたんだけど、今度、いくらか給料が上がるかも知れないぜ」

「ふーん、せいぜい五百円ぐらいネ。別に出世するんでもないし、あんまり喜ぶことないワ。……ね、信子さんが素敵な生地を持って来たの……アメリカのですって。あたし羨しいわ。なんにもないんですもの」

「出世するわけでもないし」との口癖の言葉が、日頃雀に毛のはえたぐらいの地位に甘んじている、勤人の身に切実に感ぜられているだけに、こんな妻の態度が、不慍な思いを伴

なつて、良平の心を衝くのだった。憧れの多い彼女の性格を、完全に満たしてくれる理想の夫とは、はるかに隔りのある存在だった。

「さあ、早く脱ぎなさい。こんな汚れたワイシャツをしてると笑われる。どんどん洗濯しなくちゃ駄目。身ぎれいにしてネ……あなたは地味を通り越して不潔よ。信子さんが遊びにきたって、恥しいじゃあないの」

同じ喫茶店に勤めていた信子へ、貧しい夫の形を見せたりすることは、耐えがたいことだった。まして信子は、ある新興会社の社長の妾同様の秘書になつてるので、しばしばやつてきてみせつける生活の豊かさ、放縦さがルミ子の満たされぬ慾望を駆り立ててならなかった。

「……うちの人つたらね。こないだルミちゃんが出来てから、お酒を飲むたんびに、……あんな女の面倒がみてみたいもんだ。よろしく言つときな……なんて露骨なことって嫉かしたりするのよ」

などと笑つてみせる友達の言葉は、でっぴと太った如才ない、あの男の姿を思い出させて、信子と境遇をとつて変えた場合の、とめどもない空想の世界にルミ子を耽らせたりした。

こうした反面、部屋のすみずみまで、まことゆきとどいた気を配つて、きちんと整頓し、塵一つおろそかにせぬルミ子でもあった。壁にはマリアを描いた、複製の名画が、窓には自分で刺繍をほどこしたカーテンが、かかつていた。机の上の一輪挿のカットグラスの花瓶には、常にみずみずしい花がさしてあった。また貧しい調度品のすべてが、最大限の効果をはなつように、配置され、磨かれていた。

一日の勤めから解放され、風呂から帰って燈下の下に浮びあがった、この部屋の雰囲気なかで、洗いの通った白いシーツの寝具に身を横たえるとき、良平は何物にも換えがたい喜びに浸るのだった。

「……ルミ子、すまないなあ」

「……あらッ、なにが」

「なにがって、君は本当に僕につくしてくれ。感謝の言葉もない……」

「馬鹿ねエ！ あたしそんな人だいッ嫌い。あなたは御主人様でしょう……威張っていなければ駄目。ねうちがおちるワ……そう、うんと気を強くしなければ。女なんて世の中にあり余るほどのよ。もっと綺麗で、もっとしとやかな人が、いくらでもいるのよ。そ

う思わなくって」

豊かな肢体をぐつとよじらして、ニコリ微笑みかけてくるのだった。

こんな時のルミ子は、激しい情慾を駆りたてる蠱惑的な魅力にみちみちていた。良平はもうポツと顔を赤らめて、返事に窮したまま照れ臭そうに煙草をゆらゆらと、吹きあげるばかりだった。

旧陸軍の練兵場に建築された、この都営アパートが建ち並んだ住宅区画には、数百世帯の人々が、都心と思えぬ閑静な環境にめぐまれて、平和な生活を楽しんでいる。ここはなかでも丘陵の上になっている。三階なのでその窓は見晴しもよく、夜ともなれば、ほど近いS町のとりどりのネオンを、美しく映じる。「……あなた！ ほんとうにわたしは幸福だワ……わがままばかり言ってご免なさいね」甘く囁くルミ子のゆらぐ姿が、明りを消してもなお、仄かに闇に浮ぶのだった。

破れ去った期待

「荻野君。御苦労だけど、三週間ばかりぼくと一緒に、北海道に出張してくれないか。経理のできる人をつけてくれっていうんでね」出勤そうそうに呼びつけられ、緊張して席

を外した良平は、こう机越しに言った課長の言葉に、思わず身の引き締まるのを覚えた。

彼の属している役所は、〇〇省工業技術庁の××課である。重要産業への助成金下付願に對し、その可否、査定等をおこなう目的の部門だった。

業者側から饗応されることが多いと云われる出張も、課内の幹部によってしめられがちで、こつこつ帳簿づけをしている彼などには到底その機会はあり得なかったのだ。

「あとで打ち合せておき給え。札幌だから面白だろう。あんまり羽目を外さんように、特に固い君をつれてくんだから、よろしく頼むぜ」

良平はうれしかった。まして課長の口ぶりが、自分に信頼をおいてのことであるらしいことが、さらに喜びを高めるのだった。

「……留守は頼んだぜ。出張手当稼ぎにもなるんだ。手紙を毎日出すから。おれのことは安心していてくれ」

「安心出来ないくらいがいいの。せいぜい会社に着てもらってらっしゃい。芸者さんにももててくれば、かえって貴方の為になるし、それに今どき旅行なんて素晴らしいこと。……あら、何だかわたしもついて行きたくな

った！」

幾分誇張した夫の話に、ルミ子までがうきうきとして、身の廻りのものをトランクにつめてくれる。必ず人前に出るときは、持ってゆくようにと言って、真新しいハンカチーフを何枚も入れたりした。新婚旅行さえできなかった彼等にとって、良平のこのたびの出張はまるで外国にでもゆくような騒ぎだった。

——それから二十日ばかり、あわただしい日程のうちに視察をおわった彼は、約束通りに節約して残した小金と、業者側から色々とおしつけてきた土産などをもって、凱旋將軍のようにアパートの階段を駆け上った。

「……お帰んなさい。なぜ電報でもくれなかったの……ルミ子とっても寂しかった」戸を閉めるや否や、飛びつくようにしてすがりついてくるのだった。

見渡す部屋はいつも通りきちんと整頓され机の花瓶には水々しい水仙がさしてあった。

「さあ、座った、座った。色々あげるものがあるんだぜ」

「あら！ 熊の置物、まあ可愛らしい。どこに飾りましょう。鈴蘭香水、それに、ナイロンの靴下……そう、そんな工場が北海道にあるの……」

子供のようにトランクの前に座ったルミ子は、次々に取り出す土産の一つ一つに、何やかやと、喊声をあげるのだった。

「……で、旅行は面白くて？」

「うん、毎日宴会づくめさ。芸者がわいわいきて、課長さんとおれを攻撃するだろう……困っちゃったよ」

「ホ……あんたの顔が見えるようだワ。で気に入った女もあった？ 泊ったりお風呂で流してもらったりしなかったの。あっちの女は肌がとっても白いんですッテ」

「馬鹿、冗談じゃない。僕はちゃんと旅館に帰ったさ。もっとも一度だけ函館で飲みすぎて、もどしちやったから寝てきたことがあったけど」

「まあ、いやだ。お座敷で……皆んなに笑われなかった？ 注意しなけりゃあ駄目ね」

こう言ってトランクの中味を片づけていたルミ子が、フト手をとめて、驚いたように顔を向けた。

「まあ……ちっとも下着が使ってないッ。あなたは！ 一たい着換もしない垢だらけな恰好で、よくも人の前や宴会に出られたわネ！ あれほども言ってるのに……あんたはまだ、わたしの気持がわからないのかしら！

……わたしまでもが侮辱されるのがわからないの！」

今にも泣き出しそうな声だった。

「嫌ッ。嫌だわッ！ なんて情けない人なんでしょう。ほ、本当にきらいだわッ！」

ヒステリックにどなって、投げ出したアイロンのかかったままの下着の間から、重ねも

そのままのハンカチーフが飛び出してきた。それはますますルミ子の興奮を昂ぶらせた。

楽しかるべき期待に弾んだ、出張後の生活は、その第一日から破れ去ってしまったのだった。

妖しき誘い

——それからのルミ子は、恐ろしいばかりに冷淡なものになっていった。良平にとっては理解に苦しむばかりのあの小さな原因が、彼女にとっては、想像

も及ばぬほど大きな動機となって、作用したらしい。それは日頃から潜在し、内燃していた夫への不満を、決定的な段階に押しやってしまったのだった。

「うるさいわネ！ このままにして頂戴……わたしの気持が変るまでは、放っておいてヨ！」



抑制を余儀なくされた官能の昂りに泳えかねて、思わずさしのべる良平の手が、夜毎にこっぴどくはねのけられるのだった。

だがこの刹那にも、今一つ強引にルミ子を屈伏せしめようとしないう夫の遠慮がちな態度が、その決断の欠如が、さらに彼女の悔蔑感に拍車を加えるのだった。

無言のまま突きだす、金盥と石鹸を持って途方にくれた思いで、風呂屋に向ったある晩のことだった。行きつけの所が公休で、止むなくS町の市街に近い銭湯に歩いてゆくと、右に折れる露路の角に、打チドメナシと貼紙したパチンコ屋が、新装の粧いも鮮かに開業していた。ガラス越しに賑かな人影が望める。

その真剣な表情の群れが、まだやったことのない良平の好奇心を、なぜか激しくとらえてくるのだった。

「おい、いくらなんだい」

「へえ、こぜになら、20円で十一発。一発はおまけでさあ」

新店の客寄せサービスのため釘のゆるめがきいてか、童心にかえって弾く良平の玉が、みるみる当り穴をくぐってザラ、ザラッ！と音を立てて多くの戻りを招いた。当る毎に

台の中央に透けて見えるポケットに満たされた、20発の玉が崩れ落ちる快感が、そして握りしめた煌めく十一耗の鉄球の冷やかな触感が、たわいなしと知りつつも、彼の興味をそそって、時のたつのを忘れさせた。たった三つの十円玉が三個のピースとなって、袂をふくらませた頃には、もう終電車近くなった。ひややかな夜霧が、大通りのベーフメントをぬらしていた。

「……どこに行っていていらしたの！」

「うん、風呂屋で人に会ってね」

「嘘おっしゃい。手拭が乾いたままだワ！」

「そうか、すまんすまん。ちよっと散歩しすぎたんだ。久しぶりで町へ出たもんでね」

ルミ子の手前、まさかパチンコとも云えぬ。毒舌を浴びせられるだけ、野暮だったからだ。なんとか言い繕ってごろりと背を向けて床についたものの仲々寝つかれない。ルミ子もまた容易に寝つかれぬらしい気配がまさまざと感ぜられた。

「ねえ、あなた、まだ起きてるんでしょう……」

「一体どこに寄ってきたのよ」

「……散歩したただけだ」

「……言訳は止して、何でも嘘をいわずに白状しなさいナ。ルミ子はね、あんたが浮気で

もしてくれた方が、本当に望ましいとおもっているの……安心してどんどん憂さ晴らしをして頂戴ね。嫉けて、口惜しくなって、追いつがってゆくような人になってよ。わたし近頃、そんな目に会ってみたい、とっても変な気持になっているの。ただ可愛がられる生活には、もうとうにあきがきちやったワ」

「……い、いずれ話すよ」

「かくすことないでしょう……誰かに会ったのネ」

「うん」

「それ女の人？」

「……」

「そう、やっぱり女の人ね。いいワ、わかったワ。きっと北海道で知り合った芸者さんかなんかじゃあなくて、どう？ いい勘でしょう。又会う約束もしてきたのね。どんな人会いたくなった。ねエ、紹介してヨ」

「も、もう黙ってくれ。そ、そんな馬鹿なッ」
思わず放った叱責の声。良平にとって、こんなことは正に初めての経験だった。

「怒ったわネ！ 豪い、凄いわッ！ そうなのよ。女なんてそんなものだワ！ 生意気いったらどんどんなりつけてやるのよッ」
こう云って背後から、夫の頸筋に肢体をゆ

らめかしてふざけかかってくる。

「もう疲れてるんだ。早く寝ちまえよ」

「心配しなくても大丈夫。もう少しお話して」

忽ち二人は、ルミ子にとっても、良平にとっても、解釈のつかない不思議な興奮に酔っていた。それはともに経験したことのない、怪奇にも甘美な感情だった。この危険な心理の弄びが、やがて恐るべき悲劇を到来させようとは、夢想だにし得ぬ二人だった。

——その翌日。ことさらに背広姿のままの良平が、金盥を抱えてパチンコの玉を弾いていた。

輝くばかりの燈光の下。赤、青、緑、色とりどりのパチンコ台を前に、憑かれたように打ちつづける。まず当たった時のハンドルの手答えを、努めて維持する技法を習得した。まれには当たったとき、中央のポケットの当り玉を送り出す天秤装置が狂って、流れとなって思わぬ多量の玉が儲かることもあった。また台によって、明瞭に当りの起伏があることも知れた。こうした機械の性能を吟味し、氣をまぎらわしつつ、再び昨夜のごとき驚異的な効果を、ルミ子に求めるために、時の過ぎるのを待ちあぐむ良平ではあった。

パチンコ狂の群れ

かくて荻野の日常は、役所の勤めとパチンコ屋と、その後にくる火遊びにも似た不自然な家庭生活とによって、妖しい煩惱にゆがめられてゆくのだった。

これはある日、突然ルミ子が、体の変調からくる疑惑をうつたえるまで、つづいたのだった。

「もしそうだったら……わたし絶対に産まない。これだけは承知してよ。今、そんなことになったら、とってもやってゆけない。苦しくなるばかりだワ。今度だけはあきらめてネ……簡単ですって。信子さんだって昨年手術したばかりよ」

「ば、馬鹿を吐かせッ！ 飛んでもないことだ！」

「そう怒らないで。考えてもみなさいな。ここで子供が出来たりしたら、お隣りにも迷惑だし、だいたいまだルミ子、お母さんになるの早いと思うの。許して。この頃わたし、一生懸命貴方につくしているじゃアないの。ねッ、頼むわ」

「お前は愚劣な奴だ。もう信子なんぞとつき会っちゃあいかなぞ！ ろくな事を教えられ

ない。まったく世話をかける奴だ」

言葉だけは鷹揚にかまえたけれど、結局妥協してしまうのだった。早いほうが良いといつて、近くの町医で手術を受けたのは、それからすぐだった。案じたより手軽なもので、二、三日床を敷き放すと、もうきかないで、ほうきを持ったりした。

さすがにつつしんでいた良平も、ルミ子が回復するにつれて、再びパチンコ屋にかよい始めた。近頃はもう東京中の店を渡り歩くほどに、常識では考えられぬ熱の入れかただった。

パチンコの常連にとっては、玉は通貨にもひとしい。服の物入れでは足らなくて、隠にピースの空き缶を持ち歩くようになった。俗に「予備隊」と称するやつで、これさえあれば現金はいらない。少し古くなると、玉の油がきれてサビがかかり、釘の首で弾まなくなるから、なお都合がよかった。それも温めた玉のほうが良いとあって、ルミ子が先に入浴に出た晩などは、鑊のままガス火で炙っておいたりする凝りようだった。

「……どうですか、この台は」

などと、場を外す客に尋ねたり、慎重に店内を見廻って、穴の上の左右の釘が、外向き

にその二本の三角形の頂点にあたる釘が、上向きに打ってあるのを探したりして、狙うことを覚えた。また当たった時の手加減を崩さぬために、ガラスの上にペロリとなめた指先で曇りをつけ、そのあたりでストーンと玉が落ちるように、弾道を修正してゆくことも覚えた。――こうした体験よりあみだした正攻法は、まさに称讃すべきものだ。なかにはいろいろな奸才を弄し、指にかくしてもった剃刀の刃であらかじめハンドルの向いの板に、こまかい目盛を刻んでおき、当たった場合のハンドルの位置を、正しく水平に読みとってしまう、悪質な客もあった。

良平はもうパチンコの魔力にとり憑かれていた。アパートの天井板が一枚外れるのを幸い、ルミ子の目をぬすんでは椅子をよせて、鑑を出し入れした。

「どうしたの？」

「いや、その、なんだ……ちよつと電線の工合が悪いんでね」

不意に表から帰られて、埃っぽい天井に首を突込んだまま、しどろもどろに弁解をしたことさえあった。

「……私はね、硫酸に玉をひたしてサビらかしてますがね」

「ほう、それはいいことを聞いた。わたしは布海苔の湯につけてみました……ローソクをなすつてもいいそうですよ」

「磁石を手拭でまいて、ガラスの上から吸いつけた話があるそうですぜ」

「……まさかねえ」

こんな呆れ返った苦心談に、聞耳を立てている時の彼の眸には、もはや救いがたいものを感じさせる妖しさがあった。

こうした創意にとんだ客のうちには、まず店中の台に相当する数の玉を買って、一台ごとで一発ずつ入れ、ハンドルを極限まで押してガチャリン！と強くはじき、偶然に命中した台を選び出して、集中攻撃を試みる者もあった。

まれには界限の与太公達がぐるになって、「やいッ、出ねえぞ！早くしろいッ！」

と、故障だ！玉無しだ！と番号も呼ばずに各所でわめきたてることがある。

店員が転手古舞をしているすきに、機械の上部の留釘をぬき、ガラスを押し上げて、穴のまわりの釘をまげてしまったり、もっとすごいのは、機械そのものを前に倒して、裏側の玉を全部シッケイする奴さえあらわれた――そんなあの頃にあつて、良平の正しき努力

は、徐々刻々と入神の技に迫ってゆくのだ。儲かった玉は色々な品物にかえ、役所関係の業者から贈られたと云つて、ルミ子の心をよぶことになった。

狙い違わず玉が入れば、或いは明りを点滅し、或いはブザーを鳴らして、ザ、ザ、ザーッと、ポケットの玉が崩れおちる。その度に良平の魂は、昼間の勤めからくる疲労も倦怠も、さらには奇怪にもルミ子への烈しい煩惱も、それらすべてを忘却した刹那の歓喜に喘ぐのだった。

「お帰んなさい……あらッ。もう寝てしまうの。まッてよ、ちよつと話があるの……あたし随分卑怯だと思ふわ。考えてもご覧なさいヨ。いつあんたが浮気してはいけないうって云つて？むしろ喜んでるって云ってるでしょう。

それなのに、どんな女なんだか、さっぱり紹介しないなんて、あんまりだワ」

「えらそうなことを……、もし会わせたりしたら大変だろうが」

「止してよ！ふン、わかつたわ……やっぱりそうなんだワ」

「ど、どうなんだ」

「きつと、会わせられないようなみツともない人なんでしょう。地味で、お洒落気のない

まるであんたみたいな人なんだワ！ さぞ趣味があうことでしょうネ」

「ふざけるな！ 綺麗な女だぞッ」

「そう、そんなお方が、よく不潔な男をボーイフレンドにしたものね、とっても信じられない。口惜しかったら会わせて頂戴。どう、あたしや信子さんと、どっちがましなの……その人にも、この頃もってきだしたプレゼントを上げてるの」

良平は、まだ隠す

きがなく、脱いでまるめた着物の袂にある、ずっしりと重いピースの缶を気にしながら、返す言葉に窮していた。

ルミ子の気性はよくのみ込めている。もし夫の浮気の実体を知ったならば、如何なる反撃に出るやも計り知れぬ。侮蔑、嘲笑、そしてそれは、なんとも形容のつかない、激しい



失望をさえも、彼女に与えることだろう。

純白の洗いの通ったシーツに身を横たえて妻の視線を外したまま良平は、途方にくれた思いに沈んでゆくのだった。

新たな作為

S町の大通りに、ビルの屋上をかすめた朝

日が照りはじめている。道路の中央に設けられたグリーンベルトの植込みの葉は、まだ露に濡れていた。両側の商店はまだ大戸がおろされ、その前を、慌しげな通勤者の人影がつづく。

その内に交って、やや猫背な良平が、古びた折鞆を抱えて急いでいた。S駅から省線で出勤するのだ。中央線のホームでも、混雑する東京行急行の車輛の中でも、良平は同じことについて考え、悩んでいた。それは久しく偽りつつけてきたルミ子への作為が、そろそろ化の皮をはがされそうな状態となってきたことだった。

もともと心にもない動機から始めたパチンコであった。ただルミ子への効果を求めて、時間潰しにやっていたことだった。それが今では憑かれたように、止められぬ恐るべき遊戯となってしまった彼だった。

パチンコに耽りたければ、浮気の相手なる女の存在を、ルミ子に信じつけさせる為の方法を講ぜねばならぬ。しきりに紹介しろとせまられたのでは、やがては実在を怪しまれるに到るだろう。

何かの都合で別れたとでも言えば、パチンコ屋通いは中絶を余儀なくされる。それは近

頃では、相当の収入の減少ともなつて、他の逼迫をも招くだろう——さりとて真実をぶちまけることは、断じて避けねばならぬ。良平は思案にくれるばかりだった。

周囲の人々が、ガヤガヤと動き始める。柵にいくつもの腕がのびて、荷物や鞆をとりだした。もう東京駅だった。勤め先の役所は、赤坂溜池の特許局のところにある。良平はここで乗り換えて、新橋から歩くことにしていた。

反対側のドアのあたりにいたので、終点だから一斉に降り始める乗客の、最後になった。その時、眼前の青いシートの上に、何か落ちてるのが見えた。近よって手にしてみると、赤く縁どったセルロイドの定期入れだった。

「……もしもしッ、どなたか忘れましたッ」
もう降り終りそうな人々に向つて、大声で呼びかけた。だが四、五人の者が振向いただけで、忙がしげにホームを流れて行ってしまふ。今一度振り返つて呼んだ時には、もう新たな乗客に押し戻されそうになっていた。

表を見ると『中野——東京』吉田麻里子23歳としてある。会社の事務員かな、などと考へながら何気なく裏返した瞬間、おやつと視

線を凝らさざるを得ないことになった。

そこには女の写真が入っていた。瞳のきれいな、大人しそうな顔立ちだった。楽しそうに微笑みかけている。さぞ勤め先の人気者だろうと考えている良平の心に、みるみるある計画が浮び始めたのだった。

——その夕方。勤めから帰った彼は着換えた洋服から紙入を取出して、ルミ子が台所に食事の用意にたったすきに、椅子を引いて高い棚の上に置いた。ルミ子が戻つてくると、明らかにあわてた様子で、どんと畳に飛びおりて、

「さあ、腹がへった。おやつ、カレーライスかい」

と、とぼけた声をあげた。がつ、がつと食べて二、三杯お代りをし、

「……一寸、散歩してくる」

と言ひ残してふらりと階段を踏んだ。煌めく星空の下を、窓々に平和な明りを点して建ち並ぶアパート住宅の間をぬけてから、暗い旧練兵場の原っぱの路をたどり、S町に走る通りへでた。

このS町の一劃には、キャバレーや商店のネオンが交又する中に、「ばちんこ」「パチン

コ」と、色とりどりの看板が見受けられる。

煙草、キャラメル、ガム、石鹼などの外に30個で手拭、味ノ素、ミシン糸、茹小豆や蜜柑の缶詰等。75個も出せばポケットウイスキーともなつて、およそ子供に主婦にその亭主に、あますところなく慾張らせる品々をならべ、さあお取りなさいとそそりたてる。

「旦那、もうお止めになつて……また明日にして下さいよ」

こう痺れをきらした、パチンコ屋の主人に云われた時には、もう疲れ切った顔の店員が二人床に降り、

「おういッ、そら振るぞおッ」

と麻袋につめた玉を、袋の両端を掴んで、ザラザラッ、とゆすりかわしていた。

しぶしぶ表へ出ると、さらに数を増した星が、ネオンの消えたS町の夜空一面に、砂をまいたように煌めいていた。

煩惱の悲劇

全くこの萩野良平というお客ほど哀れな男を存じません。今しがた「旦那、もうお止めになつて……また明日にして下さいよ」と、申したとお話したパチンコ屋の主人が、かく言うあつしなんでございます。

帰って行く姿が、何とはなしに惨めに見えましたのもやはり虫が知らせたのでしよう。さて、あのお客さんが、アパートに帰ってみると布団も敷いてなく、よめさんのルミ子が居りません。驚いて部屋を見渡すと、机の真中に、きちんと置手紙がしてありました。

そのかたわらには、棚の上にのせておいた紙入れから出した、電車で拾った例の写真がズタズタに破かれてありました。そうした効果を狙ったこととはいえ、余りにきき過ぎた様子です。忽ち不吉な予感に囚われて手紙を手にとると、興奮のほどを示すルミ子の走り書で、

「あんまり人を馬鹿にしないで下さい。夕方私は、すべてを知りました。どこでお楽しみかと思って、後をつけたのです。すると、どうでしょう。パチンコ屋なんぞに真直ぐ行つて、背中をまげて、ガチャンガチャンやり始めるじゃアないの。これがルミ子の夫かと呆れ果てました……それでも半信半疑で帰ってくると、椅子なんぞ出して、あわてた振りをして棚に隠したから、何だと思って見たら、この写真が入っていました。ああ、あんなんそには、やっぱり女なんて出来なかったのね！ 私が会いたがるので、一生懸命綺麗な

女の写真なんぞ探してきて、私に見せつけたのね。私が後で気にして見るのを承知の上のことだね……頼りなしのろくでなしだわ！

いったいこの女を誰だと思っているの！ 芦川いずみという有名なニューフェースの映画女優さんよ。こんなことも知らない世間知らず！ 私はほんと愛想がつきたわ。もう絶対にこのアパートには帰らない覚悟。あんななんて見るのも嫌い。虫酔^{むしず}がはしるわ。さっぱり忘れて頂戴！ みれんがましく追われても気色が悪いから、ルミ子がしていた本当のことを打ち明けるわ……実は私、もうとうから、信子さんの例の人と、悪いとは悩みながらもできていたのよ。お金があつて、女の扱い方を心得て、とっても味のある人だわ。

この前おろした子供も、実はあなたが北海道へ出張していた留守に、あの人と熱海へいった時のらしい、疑問があつたからなの。これだけ知ってもらえば、もういつこくこないで諦めてくれるでしょう。いい女の人でもつくりなさいな。私はあの人世話になりだすんだから。そうすれば信子さんと、手を切ってくれる約束なの。そっくり荷物は上げます。どうせろくなものもないし、思い出の種になるのも嫌ですからね」

と認めてあつたのでした。定期の持主の女の子は、そのプロマイドのファンだったわけです。

警察の方に伺うと、ちょうどその頃ルミ子は、信子の妾宅で一部始終を話し、転げまわつて、笑い合っていたのだそうです。そして信子に、

「可哀そうにねえ、良平さんはほんとうに善人だワ……あんまり芝居がひどすぎる。明日早く帰って、安心させて上げなさいな」

などと言われたりもしたそうです。勿論彼女も気になって、朝食もそこそこによばれて帰ってみると、あの始末でした。えッ旦那、どうだったのかとおっしゃるのですか。哀れなことに、ガス栓をひねりッ放して、自殺していたのです。何事かと驚いて、アパート中の人が集ったときには、充滿したガスの臭気の中で、ルミ子が良平の屍体をひしと抱いて狂気のように泣き伏していたそうです。死体の枕元に、パチンコの玉がぎっしり詰ったピースの缶があつたと聞いたあつしの胸中を察して下さい……それに色々と気苦労も多い。もうこの稼業は、金輪際嫌になりやした。月末にでも新聞広告をして、売り払う覚悟でございやす。



新

二人の内藏助

小山竜太郎

中島喜美・画

屋形船

三日後に中秋の名月を控えた八月十二日、宵から月があり、金龍山浅草寺の薨がクッキリと浮ぶ。

竹屋の渡し近く舟宿『清遊』から借りうけた二艘の屋形船に浪士たちが続々と集まった。

江戸在府の急進派長江長左衛門と変名していた堀部安兵衛、西村清右衛門の奥田孫太夫、町人姿に身をやつしている前原伊助に神崎与五郎、頭を丸めて町医者と自称している御小姓組の田中貞四郎も顔を見せていたし、最後には一党の参謀兼副将格をつとめる軍学指南作州浪人田口一真こと吉田忠左衛門が、気儘頭巾に面体をかくした立派な武士とともに、無言のまま舟に乗った。

鈴田重八は、オヤッ、と思った。

気品、恰幅からして、家老の大石内蔵之助とも思われたが、その内蔵助はまだ江戸へは出府していないわけだったからである。

内蔵助は山科に居を定め、祇園、島原、伏見の撞木町と遊蕩の限りをつくし、『里げしき』などという小唄をつくり敵の目をこまかしていた。

重八は江戸急進派の命をうけ山科へ行ってきたばかりである。まだ腰をあげる気配はなかった。とすれば、気儘頭巾の武士は一体誰なのだろう……？

そうした疑問をよそに、屋形船は隅田の流れに棹さし、流れに任せ下っていった。行き交う舟の影さえ稀であった。

まず吉田忠左衛門から、浅野大学が左遷になったことが報告された。知行三千石をお召し上げになった上、本家広島浅野家へお預けというのである。これで、大学によって主家再興を願っていた希望は完全に粉碎されてしまった。

「こうなることは初めからわかっていたのだ。復讐断行あるのみ」

急進派の堀部安兵衛は気儘頭巾にギロリと鋭い一べつを与えながら怒鳴った。

「左様、堀部の言うとおりで」

奥田孫太夫が続いた。

「これ、孫太夫どの、お歳にも似合わぬ！ 舟の中とはいえ、ちと、声が高かろう」

忠左衛門が三白眼でたしなめた。

「お首領も、事ここに至っては、むろんそのつもりでおられると思う……せっかく、ここまで労苦を重ねたのだから、軽はずみなことがあってはならないと思う」

鶴のような瘦軀なのだが、忠左衛門にそう言われると、さすが血気の浪士たちも、黙ってしまった。

そして、一様に気儘頭巾の武士に視線を集中していった。

田中貞四郎までがそうなのである。

重八は、貞四郎の袖を引っ張った。そしてちよつと頬を赧らめながら、

「貞四郎、あの御仁は……まさか、大石どのでは」

この場の雰囲気から肯定しながらも、そうした聞きかたをした。

「むろん、御家老さ……大石殿だ」

「……」

重八は小首をかしげた。

「すると、山科に居られる大石殿は」

貞四郎の瞳がキラリと光った。ほとんど怒っているような眼だったが、重八の余りにも純真な顔を見て、ようやく頬をほころばせた。

「あれは、大石殿の影武者なのだ」

「えッ、では、大石殿が二人」

★折れ弓を投げ捨てた内蔵助は女隠密を抱き上げた。陰気な瞳が妖しい執着に輝いて……

忠臣蔵窓裏集特

「そうだ。敵をあさむく為、あのように放蕩させてある。本当の大石殿はとうから出府なされているのだ」

「……………」

重八は啞然とした。

そうした策を弄することを別に悪いこととは思わなかったし、むしろ大石の慎重さに頭のさがる思いがしたが、これまで、そのことを自分だけに知らされなかったことが不満だった。

貞四郎は百石で御小姓頭をしたこともある。重八は三十石である。

碌高の違いで軽んぜられたのだろうか……いや、それなら、神崎などは、ほんの軽輩、五両三人扶持ではないか、すると、やっぱり、妹るいのことを根に持っていていられるのかも知れない……。

「おい重八、頭をあげんかい」

貞四郎に叱りつけられ、ハッと我に返った。

その重八の眼の前で、家老大石がゆっくり、気儘頭巾をとって素顔を皆の前に見せた。

でっぷりとして色の白い、しかし瞳の鋭い眼つきをしていた。右頬の上に小さなホクロのあるところまで、それは山科の大石とそっくりだった。

内蔵助は多くを言わず、

「万事はこの内蔵助に任せて欲しい」

それだけ言って、浪士の一人々々を睨み据えた。

ゾツとするような瞳の色だった。

誰かが扇子を持って立ち上った。

「つはものの交り

たのみあるなかの

酒宴かな

富士のみ狩のをりを得て

年来の敵

本望を達せん

躍り上るように舞いはじめたのは、よろこびもあったろうが、内蔵助の陰気な瞳を避ける為だったかも知れない。

「わあーッ」

期せずして、浪士達の間から歓声が湧き上がったが、

「皆の者、静かに」

忠左衛門がしわがれた声を出した。

忠左衛門は大分前から、屋形船につかず離れず、見張っているらしい一艘の船を認めていた。

その船が、舳先を通して、擦れ違おうとしていた。

歓声はピタリとやんだ。

ジ、ジ……何かの焦げるような匂いが川面を渡ってきた。

忠左衛門は突嗟に内蔵助をかばうようにして座った。

ダーン！

銃声一発、

浪士たちは一せいに舟板に身を伏せた。

人 魚

さいわいにして、弾丸は忠左衛門の小鬘をかすただけだった。

「曲者ッ」

誰かが叫んだ。

特集 裏窓忠臣藏

ドボーン、ドボーン、向うの舟から川面へ身を投ずる音が二つした。「うぬ、逃がしてはならぬ、重八、とらえるのだ」

忠左衛門の落着いた声だった。

剣をとってはあるいは堀部安兵衛のほうをやや上だったかも知れなかったが、いかんせん安兵衛は水練には達していなかった。

重八の佐伯流水練は、藩で誰一人知らぬ者のない、名誉なものだった。

突嗟の間にも忠左衛門はそうした技倆の得失を見きわめていた。

重八は言われるまでもなく、素早く衣服を脱り、屋形船を蹴った。

月灯りはさしているが、キラキラしてかえって重八の視野をまごつかせた。

一つは船頭、そしてあと一つが種力島を撃った曲者であることに違いはなかった。

流れにしたがい、下流へ下流へと抜手を切っていく曲者を重八は追った。相手も自信があるのか、かなりの水練達者だった。

重八はようやく曲者に追いついた。

捉えようとして猿轡をのぼしたが、曲者はそのまま、水中にもぐった。重八も足を蹴って水中に沈み、曲者の腰をつかんだ。

「あっ」

というような声がしたが、むろん水の中で声にはならなかった。

曲者は意外に柔軟な腰をしていた。重八は逃がれようとする曲者の足に自分の足をからませたが、次の瞬間、今度

は重八の方が、アッ、と声をあげ、たじろいだ。

からんだ曲者の足のすべすべした肌ざわりもそうだったが、羽がい締めにした重八の眼の前に、丈なす黒髪が女の香りをプーンとただよわせたからだだった。

「女」

重八は驚きと恥かしさのため、からんだ手足の力をゆるめた。

女はそのわずかの隙に、手足をほどき、必死に掻手を切った。女もひどく狼狽している様子だった。

再び女との間に一間の距離が出来たが、重八はようやく我に返った。

——逃がしてはならぬ、重八、

と叱咤した吉田忠左衛門のしわがれ声を思い返したからである。そして——あの妙に陰気な鋭い内蔵助の瞳が、いつまでも重八の背に注がれているように思われた。

重八は襲いかかるようにして女の胸に手をまわして、水中深く沈んだ。ふつくと盛り上ったふくらみが、妖しいときめきを覚えさせた。女は必死にのがれようとしたが、重八の腕に一そう力が加わり、やがてしたたかに水を飲んでしまった。

女は重八の腕の中で、グッタリとなった。目鼻立ちの整った美しい容貌の女である。

重八は女を抱きながら、抜手を切って屋形船へ引返した。

荒れ寺

内蔵助は新麴町五丁目行真寺という荒れ寺に隠れ住んでいた。石町

三丁目小山屋弥兵衛裏座敷に住むようになったのは後のことである。曲者が女であったことは、浪士たちをびっくりさせたようだが、内蔵助は容赦なく女を行真寺に引立てた。

忠左衛門は、

「窮命役はこの老人が引受けましょうか」

しわがれた声で内蔵助にささやいたが、

「いや、万事はこの内蔵助に任せて欲しい」

屋形船での時と同じように無表情な顔で答えた。

緋の襦袢一枚きりになっている女を荒縄で縛りつけ、寺の本堂わきの小部屋に投げこんだ。

続いて、折れ弓を手にした内蔵助がはいっていき、内側からガチャリと錠前をおろした。

内蔵助はビューンビューン折れ弓を空で鳴らしながら鋭い瞳を女にそそいだ。

「女、名は何と言うのか」

「……」

「いずれ吉良家の密偵か、上杉家よりの間者と思うが、……屋形船でのわれらが会議、聞いたであろう」

「……」

女は白蠟のような美しい顔に朱唇をキッと結び、答えようとはしなかった。

「答えられぬか……いや、どうしても口を割らせねばならぬ。事は我等の生死にかかわる問題、……答えぬとあれば、きつと窮命せねばならぬ。名は何と申す」

内蔵助の陰気な瞳がキラリと光りを帯び、折れ弓がふりあげられた

ピシリ、ピシリ……

身をよじりながら、女は齒を喰いしばってこらえた、それくらいのことで容易に口を割ろうとも思えなかった。

「うぬ」

内蔵助は、今度は女の背後にまわり、後手にゆわえられた結び目に折れ弓を差し通し、縄目をグリツとしぼった。

「う、う……」

女は胸乳に喰い込む荒縄の激痛に呻いた。すでに女の肩先から襦袢はすべり落ち、雪のような肌があらわになっていた。しかも、身をよじってこらえようとするたびに、襦袢の前がはだけ、ふくよかな白い脛がのぞく。

内蔵助はゴクリと生唾をのみこみ、陰気な瞳が妖しい輝やきを帯びているのだ。

「名前も申さぬのか……それにしても、殺してしまうには惜しい女よのう」

呟やくように言った。

女には無論、聞えぬのだろう、すでに前のめりになり肩先だけで息をしていた。

内蔵助は折れ弓を投げ捨て、女を抱いた。

切れ長の閉じた瞳から長い睫毛がのぞき、朱唇は僅かにひらかれていた。

内蔵助は荒縄の喰い込んだ二つの隆起を力強くひきつけた。皺の深い顔にフツと笑みを浮べ、唇を押しつけるようにしていったが、その時、

「お首領、忠左衛門めにございます」

戸の外でしわがれた声がした。

「うむ、……」

内蔵助は苦い顔をして、女を胸から離し錠前には手をかけた。

「忠左衛門、何か用か」

「瑤泉院さまの用人落合仁左衛門殿が参られています」

「また例の金銀請払帳を提出してく

れというのだろう。瑤泉院さまはわ

しがお化粧料を横領して、遊蕩に使

っていると思っっているらしい」

「女は口を割りましたかな」

「いや」

「老人が窮命いたしてくれましよう

かな」

「いや、万事、この内蔵助に任して

もらいたい。落合はどこかへ引っ張

って行って、ごまかしてこよう。今

夜はここへは帰らぬかも知れぬ。鈴

田でも見張りにつけ、女を逃がさぬ

ようにして貰いたい」

内蔵助は小部屋の錠前をおろし、

不気嫌そうな顔つきで、ゆっくり出

ていった。

花 簪



見張りといっても、外側からガッシリした錠前がおろされ、女が逃げ切れるとも思えなかった。

女はようやく我に返ったようだが、もはや観念したものか、カタリとも音を立てなかった。

しかし、どこから洩れてくるのだろう、微かな女の香りを鼻先に感

じて、重八は戸惑った。

隅田川でのことが、まざまざとよみがえって網膜から離れないのだった。

切れ長の瞳、締った朱唇……それよりも水の中でこんもり盛り上った双つの隆起、まつわりついたすべっこい四肢の感触が、女を知らない若い重八の官能をゆさぶった。

亡君内匠頭の復讐のことを思い、妄念として払いのけようとしたがどうしても女のことを忘れることが出来なかった。

覗き見たわけではなかったが、内蔵助のあの陰気な眼つき、妹るいへの執念のことを思えば、女がどのようににされるかわかるような気がした。

——いっそ、問者として殺されてしまえばよいのだ……

しかし、内蔵助は窮命はしても、殺しはしなかった。そして、忠左衛門と瞬間交わした時のあの瞳の色は淫らなそれではなかったか……？

内蔵助に対する憤りのようなものを感じると一しよに、女が哀れにおもわれた。

——いっそ、逃がしてやろうか……

フツと思ったが、その後のことを考えると、到底、自分の命は助かるとは思えなかった。密告——漏洩——窮命——自決（あるいは斬死）コースは余りにも歴然としていた。

急進派の堀部、奥田等はそれぞれの寓居へ帰ってしまったていたし、忠左衛門も姿を見せなかった。荒れ寺には内蔵助の若党左六と菅谷半之丞。近松勘六、勘六の家来甚三郎の四人ぐらしいしかなかったし、見張りは鈴田重八に任せきりで、寝についていた。

とつくに子の刻（十二時）は廻っており、地虫が秋夜を鳴きすだいでいる夜ふけである。

重八は本堂須弥壇に背をもたせかけ、襲いかかる睡魔につい、ウトウトとしていた。隅田川での疲れが出たものに違いない。

一つ大きく舟を槽いだ後、薄眼をあけた重八の眼の前を、スーッと黒い影が通り魔のようによぎっていった。

ハッ、としたが、重八は五体がいかにもけだるく、そのまま瞳だけで黒い影を追った。

鈍色の忍装束、頭巾をかぶって、小刀よりはやや長い脇差を一本さしている。その影はカタリとも音を立てないで、女が閉じこめられている小部屋の前にここんだ。

——忍者。……吉良家か上杉家の者かいずれ女の仲間に違いない——

ハッキリそう知ったが、重八は声を立てることをしなかった。

曲者は、懷中からの忍者特有のくなくを取り出し、錠前をわけなくあけて、小部屋に入った。

絶好の機会だったが、重八は立ち上らなかった。

寸秒の後には女を抱いた曲者の影が小部屋を出て、重八の前をよぎろうとした。さすがに、気になるものか、立ちどまって、重八のうたた寝姿に鋭い瞳を頭巾の中から投げかけた。右手を脇差の柄にかけ、いざの時の用意を怠たらない。

重八は最後の機会だと思ったが、うたたねの首を上げようとしなかった。

曲者は抱いていた女を一揺りした。

コトリ、何かが床に落ちたようだった。

曲者はハッ、としたらしかった。それでもなお重八が手向いして来ないとなると、

「恭けない……八重、お前からも礼言うがよい」

呟やくように言つて、本堂を横切り、庭先へ跳んだ。

——八重、あの女は八重どのなのか、曲者は八重どのの兄者でもあろうか……。

瞳をあけた重八は、そこに女の髪から落ちたらしい花簪を見つけた。

かぐわしい髪油の匂いが、重八の鼻先をまさぐった。フツと、八重の白い姿態が浮んできた。われにもなく花簪を抱いた。が、すでに、曲者が庭先を離れたと思われる頃合をはかり、

「曲者、曲者でござる、近松殿、菅谷殿、曲者でござる」

二人の浪士を起すことを忘れなかった。

犠 牲

「何という馬鹿な奴じゃ、疲れが出て、ウトウトしていた。その隙に奪われたなどと、平野半平から、一刀流皆伝を得た使い手にも似わぬ……。曲者が逃げたら、どのような破目になるのか、それを知らぬそなたでもあるまいに……馬鹿な奴じゃ、……うぬ、どうしてくれたらよいものか……うぬ」

内蔵助は齒ぎしりかんで口惜しがり、陰気な瞳を怒りで燃やしていた。

「御家老、まことに申しわけございませぬ。近松殿、菅谷殿と三人して津輕殿の下屋敷の辺りまでは追ったのでございますが……」

「うーぬ、言い訳は聞かぬ……あつたら掌中の珠を失ってしまった」

「掌中の珠と申されますと」

「きまつているわな。あの女のことじゃ。……隅田川での会議のこと密告されたとしてたいしたことはない。仇討のことは吉良方とて覚悟はしている。荒れ寺は早急に越せばよい。だが、あのように美しい女は生涯に二度と手に入るものではない」

「……」

重八は馬鹿々々しくなってきた。亡君内匠頭の無念を内蔵助は心から考えたことがあるだろうか、武士としての義のことを、……内蔵助はただ仇討というスリルに酔っている惨酷な御家老に過ぎないのではなからうか……？

「馬鹿な奴じゃ、本来ならば敵を逃がしたそちは手討ちにしなければならんところだか……どうじゃ、そちの妹のいのちをわしの伽にあげてくれぬか……初めての願いではないはず。今度はそちの生命と引換えにるいをわしが貰い受けよう……ウ、フ、フ、……」

重八は内蔵助が初めて笑うのを耳にした。陰気な瞳以上に、それは汚らわしく、淫蕩で惨忍な響きを持っていた。

重八は背筋の寒くなるような嫌悪を覚えたが、

「それだけはお断わり申し上げます」

「なに、断わると」

内蔵助の手が小刀の柄頭にかかった。

「御家老、それがしの生命は、私だけのものでもなく、御家老に預けたものでもない、御一統さまのものです。御家老はともかくとして、

亡君の恨みをはらす為に結盟した正義の方たちのものです。……その為だったら、私は今ここですぐ腹を切ることも致します。個人の欲望のために、私も、私の妹も犠牲になることは御免こうむります」

重八は皮肉に笑って、キッパリ言った。

「うーぬ、ぬかしおったな」

内蔵助は口惜しがったが、よほどズバリ、心の虚を衝かれたらしく狼狽し、やがて、ガックリ前ここみになって、首を両手でかかえこんでしまった。

「御家老、御一統さまのおわびの印に、私もるいも密偵となって吉良邸へ忍びこみ、間者の役目、見事に果してみせます」

重八は、くると踵を返し、スタ、スタと歩き去っていった。

湯 殿

松の廊下で忍傷後の吉良上野介は役儀御免を願い出ではじめ呉服橋内の本邸に隠居していたが、やがて、本所松坂町に移った。もと旗本松平登之助の屋敷で坪数二千五百五十坪、隣家が旗本土屋主税邸である。

養子の左衛門義周は中央居間の辺りに住んでいたが、上野介義央は裏門に近い隠居部屋である。

南側が泉水、その前方と東、西に武家の長屋が続く、北側は長廊下が中央居間に続いて台所、湯殿、料理の間などがあった。しかし、スワツ、という時には秘密の部屋があつて上野介を隠すようになっていた。地下の隠し部屋に違いないのだが、どこをどう通っていくのか、誰も知らなかった。

しかし、吉良邸の小間使に上っていた鈴田重八の妹るいは、フトしたことからその秘密を知ったのだ。

茶を立てて上野介の隠居部屋へ持っていき、いつもの通り、あれこれと無人の部屋をさぐった。

上野介の布団部屋の南側に三畳ばかりの小部屋があつた。小さな床の間があつて、雪舟の掛軸がさがっている。それが、風もないのに、かすかに揺れていた。

るいはハッと胸を衝かれ、掛軸を動かしてみた。突端にスーッ、とするような陰気な風がるいの顔に吹きこんできた。いや、吹き込んだというよりも、吸い込んだと言った方が適切であるかも知れない。そこにちょうど一人一人がここんで這入れる程の空洞があき、地下部屋につながっていた。

誰かの足音が聞えてきた。

るいは急いで、掛軸をもとのままにし、廊下に出た。上杉家からの附人らしい武士の後影が見えたが、さいわい、るいには気づかない様子で、長廊下を隠居部屋へと曲って行った。

るいは小部屋の位置を確かめ、胸に畳みこんだ。吉良邸は上杉家からの附人も交せて三十余人、交替で邸を固めていたが、邸の者は午後十時になると、もう寝静まってしまう。

るいは一番しまいに湯殿にはいつていった。もうもうたる湯気の中に、るいのしまった軀が押しこめられた。美人というのではないかも知れなかったが、愛くるしい瞳、小さな唇、二つの隆起が円錐形に飛び出し、処女の清純さと成熟を物語っていた。

るいはやや小麦色をした、すべすべした肌をゆっくりこすっていった。フト、隠密として忍びこんだことのわびしさが胸を衝いてきたが



それを拭い去るように、湯水を浴び、ニコリと笑った。片笑くぼが無類に可愛ゆく花をひらいている。

と、湯殿の天井の辺りで、黒い影がうごめいた。

「るい」

るいはハッとして乳房を両手で抱えたが、声をあげるようなことはしなかった。

身体をちぢこませながら、るいはゆっくり天井を向いた。

「あら、兄さんたら…」

るいは小さく言って、頬を赧らめた。実の兄とは言え、裸身を見られることは何にも増して恥かしかったのだろう。

黒ずくめの忍装束に身を固め、天井の格子に張りついているのは鈴田重八だった。一刀流の免許皆伝ながら裏芸の忍法もかなりに心得がある。

「どうだ、……わかったか」

「はい」

「えッ、わかったと」

「兄さん、声が高いわ……わたし、ここへ、お白粉で絵図面を書きます。心の中へ畳みこんでおいて下さい」

るいは、お白粉の中に指先を突っ込み、鏡板に向かって、秘密部屋の位置を示した。

「うむ、布団部屋の南側、三疊の間の雪舟の掛軸の裏……よし、ご苦労だった。山科の大石どのは来村大藏殿が影武者だった。一統に加わりたいといって江戸へ出府なさったそうだが、あの御家老が許すかどうか、わしはあの来村殿が本当の御家老であつたら、どんなによいかと思っている」

特集★裏窓忠臣藏

「あつ、兄さん、誰やらが来ます、早く逃げて」

るいの声に、ハッとした重八は煙窓から外へ出た。るいは重八の危機ばかりを思つて鏡板のお白粉を消すのを忘れてしまった。

と、ガラガラ、湯殿の戸があいて、御女中の菊という上役が大急ぎで這入ってきた。

「おう、寒む……るいさんかえ……えらく冷えてならぬので、二度はいることにきめたが……おや、鏡板に……これはなんだえ、そなた、もしや、赤穂の間者では」

「……………」

るいは失敗った、と思った。弁解などつかない。るいは突風のように湯殿をとび出し、駆け出しながら湯文字をまとった。細紐もどうにか締めたが、

「曲者、……曲者でございます」

菊の叫び声が長廊下に響き渡っていた。

やがて、廊下を駆け出す宿直の侍たちの足音――

――兄さん

心の中でるいは叫んだ。泉水はむしろ危険である。北側は土屋主税邸、裏門から抜け出すより方法はないと思つて、台所口から庭へ跳んだ。

漆黒の闇の中で、さいわいに姿を発見されることはなかったが、警戒厳重な吉良邸を果して逃げ出すことが出来るだろうか？

――兄さんは、どうしたろう？

その兄にバツタリ逢ってしまった。

「しまった。……こう嚴重では抜け出すことは無理だろう、といって

ひそむところはどこにもない。裏門を斬り破るより仕方がない。……るい、覚悟はいいだろうな」

「はい」

重八から渡された脇差をシッカリ握りしめ、隠居屋敷を曲った。と、前方に黒い影が動き、龕燈が真正面に差し向けられた。

万事休す！ そのまぶしさの中で重八は観念の眼を閉じたが、

「おう、いつぞやのお浪士だったのう」

意外にも武士の馴れ馴れしい声がかかり、無言のまま、踵を返して裏門の勝手口を差し照した。

逃げろ、という合図なのである。

八重を救い出した兄者らしい忍装束の男に違いなかった。あの時、あの男は自分が、眠っていないことを知っていたのだ。八重を救い出させてくれた返礼に違いない。

重八は今も懷ろにしている花簪を無意識にまさぐった。

「恭けない……御姓名は」

「いや……お互い、申し述べぬがよからう。八重から、よろしく言うてくれいとのことじゃ」

武士はそれだけ言うと、促がすように龕燈を動かした。

脱 盟

鈴田重八兄妹は吉良邸隠し部屋の絵図面をこしらえ、新麴町五丁目の荒れ寺行真寺に伺おうとしたが、途中で気が変ってしまった。

絵図面を一党に役立てる心に変りはなかったが、フト、山科の大石来村大蔵のことを思い起したからである。来村に絵図面を与えたら、

その功によって一党に加わることが出来る――

来村大蔵は、田中貞四郎の話によると、東湊町橋本稻荷のそばの裏店に住んでいるはずだった。

御組屋敷を左手に亀沢町の川岸つづちを南へ行くと、亀島橋があり渡り切ると川口町、その裏手に橋本稻荷があった。

重八兄妹が、ようやく裏店を尋ね当て、大蔵の浪宅に足を一步踏み入れた途端、ブーンと鼻を衝く血なまぐさいにおいを嗅いだ。しかも地を曳くような断末魔の呻き声である。

「来村殿……」

ひそとして薄暗いあばら屋で、重八は大声を出した。

だが、それには答えがなかった。

兄妹は、構わず上り框を跨いだ。

と、大蔵が畳の上に血まみれの姿で這いまわっていた。

「来村どの、いかがなされた」

肩口が大きく割れて、鮮血はなおとどまろうとはしていなかった。

「るい、腕を縛ってくれ」

言われるまでもなく、るいは扱帯を素早く裂いて、大蔵の上膊部を結わえた。

ようやくにして重八兄妹に気がついた大蔵は、苦しい息の中で、

「う、う、……鈴田か、……無念だ」

歯ぎしり噛んだ。

「相手は誰だ」

「うむ、よくはわからぬ……宗十郎頭巾で面体をかくしていたので……」

……

「しかし、心当りは」

「それは……」

「なぜ言わないのです」

「う、……藩中の者、……今、引揚げたばかりだ」

「よし、仇は拙者が必ず……るい、来村どのの手当を頼んだぞ」

大刀の柄頭をしっかりと握りしめ、重八は戸外へ飛び出した。

――藩中の者……はて、誰だろう。

妙な想念に取り憑かれてギョツとしたが、重八は走った。

どこへ抜けるにしても、かなり広大な稻荷の杜を通らねばならない。

町屋にはいられてしまえば、姿を失ってしまうにきまっている。

本堂を過ぎ、二の鳥居にさしかかった辺りで、重八は宗十郎頭巾に

面体をかくした四人の浪士風の姿を認めた。

「待てい」

呼びかけるのももどかしげに、重八は一気に追いついた。

ギョツ、としたらしい宗十郎頭巾は、一ようにふり返り、嗟突に迎

撃の態勢をとった。面体を剝がなくとも、重八には四人が誰々である

かはわかった。

首領らしい小柄で陰気な瞳をしているのが家老大石内蔵助であり、

あとの三人は潮田又之丞、菅谷半之丞、ガツシリした体軀の侍が堀部

安兵衛だった。

重八はあえて名を聞こうとしなかったが、すでに容易ならぬ相手、

しかも一人は自分の御家老であり、他は同僚である。とてもものに

斬り死にせねばならぬと覚悟した。

「何故あって、来村どのを斬られたのか理由をお聞かせ願いたい」

「うむ、それを聞いて何とする」

堀部であった。

「尽忠の浪士を一人失うことは、それだけ一党にとっての損失ではございませぬか」

「齒に衣着せずに申して仕わそう。来村が生きておれば、瑤泉院どのへの金銭請払帖に支障をきたすのじゃ」

内蔵助が、頭巾の下で薄ら笑いを浮べた。

「と、申されますと。御家老の使い込みが、バレるというわけですか」

「ウ、フ、フ、」

「卑怯な……亡君の仇を討とうとなさる御家老にも似合わぬこと」
重八は大刀の鯉口を切った。

「なに、貴様、我等に手向いしようとするのか、ものには裏もあるということをおきまえぬ青二歳ッ」

安兵衛が自慢の来国次の鞘を払った。

「脱盟いたします」

「ほざいたな。重八、いくぞッ」

銀蛇が空に躍った。

一間を飛んで、安兵衛の斬風をかわしたが、ズ、ズ……間合は忽ちにしてつまった。

ガッ、

刃と刃の擦れ合う音、火花が激しく散って幾合、重八は次第に追いつめられて、額からは早くも、タラタラと脂汗が流れ落ちた。

「おう、るいどのも現われたな」

その時、兄を気づかって駆けつけてきたるいの姿を認めて、内蔵助がニヤリと笑った。

「潮田、菅谷……るいを行真寺に引っ立ててくれい」

まだ刃を抜こうとしない二人にうながした。

しかし、さすがに、二人は躊躇した。いかに好色の御家老とはいえ同志の妹を手籠めにするこの不条理をうけいれることが出来なかったに違いない。

「馬鹿な奴め、許しは得てあるのじゃ」

二人が頼りにならぬと知って、内蔵助は自から、大手を拡げてるいに迫った。

「うぬ、御家老、もはや容赦は致しませぬ」

敗勢にあった重八が、烈火の如く瞳を燃やし、安兵衛の白刃をくぐって内蔵助に殺到した。

「えいつ、馬鹿めッ」

来国次が片手拝みに空をはしった。

「あッ」

肩筋を薄く斬られて、重八がよろめく、安兵衛の二の太刀が横に払われようとした瞬間、

ビューン

どこからともなく手裏剣が空を切って安兵衛の手元へ飛んだ。

「うッ」

腰をひねり、かろうじて鰐元に受けとめた安兵衛だったが、面上はさすがに蒼白に変っていた。

「御家老、敵でござりまするぞ」

「うむ、引揚げるといたそう」

機を見るに敏な内蔵助は、新たな加勢が現われたと知ると、るいをあきらめ、早くも脱兎の如く逃げ出していた。

「お兄さま」

るいは乱れた裾前を繕おうともせず、負傷に喘ぐ重八の傍に駆け寄った。るいの可愛らしい顔が口惜しさと怒りのため、歪んで、瞳には白いものさえ光らせていた。

「馬鹿だった、るい許してくれ。亡君の仇を報じようという志に交りはないが、あの御家老の許では拙者は嫌だ」

そうした兄妹の前へ、大榎の影から、ゆっくり一人の武士が近寄ってきた。

るいは涙の顔で振り返った。

「あつ、いつぞやのお武家さま」

なぜとはなしに頬を赧らめた。

武士は、吉良邸で二人を救った上杉家の附人だった。

重八も面をあげた。

「すでに危ういところ、二度までもお生命をお助け下さってありがとうございます。今日こそは姓名の儀、おあかし願います」

「和久半太夫……ハ、ハ、ハ、一藩の城代家老ともあろうお方が、あれでは困る。吉良邸では正々堂々と迎え撃つつもりでいる。それが武士道の意気地というものではなからうか」

「八重どのはいかがなされましたか」

そう言って重八は懷に手を入れた。花簪が肌のぬくみを帯びて、重八の掌に懷かしく触れた。

「八重は間者の役を断念いたしました。つくづく武家の暮しというものが嫌になったのだらう……それとも恋する男と敵味方に分れるのがつらくなったのかも知れぬ」

「……………」

「八重はうい奴じゃ。……落した花簪を届けて貰えることをいつまで

も夢見ている」

そのまま半太夫は踵を返し、スタスタと落葉を踏んでいった。
——八重どの！

重八は心の中で叫び、花簪を一層なつかしくまさぐった。
鈴田重八は、この時、まったく同士ではなくなっていた。

(終)

裏窓臨時増刊号

鋭意
編集
中

~~~~十二月下旬全国一斉発売予定~~~~



◎A5判292頁予価120円◎

★エロチシズム、サスペンス、ミステリーの味が渾然一★  
★体となつてかもし出す耽美派必読の裏窓臨時増刊号！★





## 悲しい会話

「ほう……、貴女がケンリイ殿の妹御さんで……？」

大帆船の上甲板です。少ない乗客の一人でいかにも貿易商らしい、太い猪首に黒いビロードの襟を立てている四十がらみの男が、このパワ号に乗ってから九日目のこと、南風に吹かれていた私に向かって、興味深い口ぶりで話しかけてきたのでした。

「……………」

「そうだと知っていれば、もっと早く御挨拶しなければいけませんでしたよ」

ロナールと名乗るその人は、広い額をポイと叩いて、片眼をつぶって見せながら、バカ丁寧なお辞儀といっしょに、

「ちょっと似てはいなさるわい……と、気づかないでもなかったんですが……、しかし……、あまりに」

そうです。そこでロナール氏がチラッと顔をしばたたいのも無理ではありません。兄のケンリイは、みるからに肉のしまった、高背のすらりとした好男子。それに比べて、この私は、まるで屠殺場の人夫のような太い腰と

## 藤 琴 也

画・谷 夏 夫

脂肪ぶくれしたブヨブヨな二本の腕。まアこれで脚が見えないからいいようなものの、これがまた、全身の脂肪を、下で受けてとめたような太ももなんですよ。

みるみる羞恥の色で、頬を染めた私でしたが、そこが世なれたロナール氏らしく、大きく胸を反らして、頭上の太陽に手をかざしながら、

「それにしても、まったく奇縁。ケンリイ殿は、私めにとって金の主でしてな。今度もインドの帰りに、是非とも寄らせていただきまして、いろいろと変った毛皮なり、宝石なりを……」

と、ちよつと道化た口ぶりを聞かせてからそこでハハアといった首を大きく振りながら「貴女さまは、御忙しいケンリイ殿のお手伝いといったところで……？」

と、眼を細くして見せました。  
「いいえ……」





と、首を横にいたしますと、

「そうでしょうとも、御婦人には、少しばかり不向きなお仕事。なにしろ、ちょっと北へのほれば猛獣の群れ。ちよつと油断をすれば人食い土人……」

大仰に肩をちぢめたロナール氏は、今度はそれ以上の身振りで、両手を拡げながら、「わかった。わかりましたぞ。兄上からのプレゼント。つまり、数万ポンドのお小遣いと貴女の襟に飾る色美しきダイヤの花、腕と申せば太い金輪の刺繡のかざり……」

ああ、私はなぜか、胸がつまってまいりましたの。なんて悲しいことをおっしゃる方なんでしょう。二ヶ月も前でしたら、そんな言葉、どれほど嬉しく聞いたことか。

でも、いまの私には、ただ惨酷な責め言葉としか聞こえません。このぶよぶよした腰まわり、片輪もののように、大きく膨らんだこのお腹、ともかく、私は十九なんですよ。

——こんなからだの私が、思い切ってアフ

リカの南端、ズールランドまで行こうというのですもの。そりゃ、もちろん、ロナール氏などには思いも及ばぬ、大きな理由がありますわ。

「ごしようだから、なんにも云わないで……」  
つい知らず、涙声になってしまつて、私はくるりと背をまわしました。

ちようと、いま向いた眼の先が、なつかしい、ロンドンなのですわ。

もう、あれから九月经つ。あと何日、この船に乗ったら、兄のところにつくものやら……途中イスパニヤの軍艦や、ポルトガルの海賊につかまったらどうでしょう……？

不安な動悸と、なつかしい思出が入り混つた涙のまま、ロンドン波止場の別れのひとときが、また私の胸に甦ってきました。

### イスパニヤの残虐

「リンネ。ズールから帰ったら、きつともこのようになつてよ」

蛮地へ旅立つ十九娘の胸はおののいた。行く先の危険もさりながら海賊横行する魔の海を果して無事に渡れるかどうか？



「そうネ。それだけでなく疲労と汗で、少しは目方が減るでしょうよ」

リッキー、サリー、フェールと、みな同じ眼の色で、私のからだをじろじろと見つめているのを感じながらこみあげる悲しさを、ようやく咽喉もとで噛みしめますと、わざとらしいはしゃぎようで、こんな冗談をやたらにまき散らしました。

そして、一時間ののち、胸に秘めた一種の期待にすべてを賭けた私は、大帆船パワ号の甲板で、船長のお話を聞いていたのです。

「みなさん、御承知かも知れませんが、わが名誉あるイギリスの海賊ヘンリー・モーガンによって、イスパニヤ軍艦がすでに十数隻沈没、または拿捕されています。そのたびに奪われた財宝は、金銀宝石とも数百万ポンド：イスパニヤがこれを黙ってみるはずがありません」

「モーガンは十七世紀の超人だ！」

乗客の一人が片手を上げて、船長のお話をさえぎりましたが、三十人近い乗客のほとんどは、緊張した面差で聞いていましたから、その男の片手を見るものは、一人もおりません。

果せるかな。船長のお話は、思うも恐ろし

い言葉を、つぎつぎと並べたてたのです。

「報復の手段として、イスパニヤ艦隊はわれわれを狙っています。これからアフリカを巡ってインドまで行くのに、一ヵ月かかるか、三ヵ月かかるか、いや、あるいは永久に……」  
深い疵を受けたみたい、みないっせいに肩をすくめて、船長を仰ぎみましたが、しかし壇上では、そんな人たちを嘲笑するかのよう

に、長い頬髭をなびかせながら、  
「しかし、皆さんの生命と、持っていていらつしやる荷物を安全に運ぶのが、われわれの義務。そのために高い料金を頂いている。こんなによいお得意様を失ったら大変な損害です……」  
不安を吹き飛ばすようなドツという笑い、しかしその笑いも、やがては白々しい表情へと、とって変わりました。イスパニヤ人の惨虐さを聞いたからです。

二ヵ月前に、イギリスの大帆船がビスケー湾で襲われたときのこと。男の人は全部帆柱に縛りつけられると、御婦人たちは素裸にされた上、小板を背中にしよわされてぐるぐる巻き、それからお船に火をつけたんだそうです。そりやまるで生地獄。焰をくぐって、ようやく海に飛びこんだものの、潮の流れで船の近くに浮いてしまった御婦人たちは、じり

じりと体中の毛という毛が焼けるまま、「熱いッ」と叫ぶものの、「助けてッ」とわめくもの……、イスパニヤ人はそれを眺めて、  
「亭主持ちの女は首を振れ！」と、いったらしんですよ。

応えて、二、三人の御婦人が首を振りますと、その傍に小船を漕いでまいりまして、  
「今度は、おれを亭主に持つか。それなら助けてやろう……」

こう云ったそうです。もし返事をしないものなら、剣の先でお腹の上をさわったり、鉄砲の台尻で、咽喉もとを押さえたり、仕方なしに首をタテに振りますと、板ごと小舟にあげてから、腰から下の縄だけ切って……。

これは、つい一ト月ほど前、捕虜にしたイスパニヤ人の海賊が口を割ったため判ったことですが、その御婦人たちは、あげくに足首に鉄の輪をはめられて、四千米もあるビスケー湾の海底に沈められたとのこと……。

「こうならないよう、船員も乗客も協力して夜警を厳重にし、鉄砲の打ち方を知らない方は、船員から習って下さい……」

という、こんなお話でしたの。

私、イスパニヤ人の暴虐に大いに腹を立てながらも、すっかり狼狽してしまいました。



だって、鉄砲の打ち方はおろか、生れてから一度も手にしたことがないでしょう。

おろおろしながら、泣いてしまいましたわ  
「こんな思いまでして、なぜ、兄を訪ねようなど思いたったのか？」

さぞや、御不審にもお思いでしょうネ。

理由は、たったひとつ。このからだなんです。このからだをなおしたいばかりに、大帆船に乗ったんです。

と、やがて、生気の抜けたような私の眼が後悔と不安をそのままにして、そっと人知れずに、腰のまわりへ落ちていました。

……ああ、どうして、こんなからだになってしまったのかしら。

同じ言葉をまた心に繰り返しながら。

## 異状なからだ

二ヵ月ほど前でしたわ。私のからだは、異状に太りはじめたのです。

「むくんだのかしら……？きつと病気のネ」  
何度も同じ言葉を繰り返しては、自分の不安をまぎらわしていましたが、牛のように首根ツ子が大きくなり、お乳までみるみる膨れて、下に垂れてまいりますと、どうしてもジツとしていられなくなりました。

五番街の有名な医師、ユンゲート先生のところへ、ぶよぶよと太くなって、すっかり形の悪くなった腰まわりまで下着を下げながら私は両手で顔を蔽って、いやいやしてみせました。

「食物と環境が原因ですネ。今までの習慣を何もかもすっかり変えてしまうことです。薬よりもなによりも、それが一番いいのですよ」

「……でも、これはやっぱり病気なんでしょう。だったら、お薬を……」

「そうですね。病気と云えば云えましょうがこれは貴女の異状な体質のせいですよ。普通でしたら、四十過ぎた御婦人方が……」

終りまで聞かずに、私は立上りました。

なぜって、先生のお言葉の中には、どこか絶望的な、しかもみせかけの同情心といった口ぶりが覗かれたからですわ。ともかく十九になったばかりの私にとって、この病状は大打撃でした。

お友達が夜会服に着かえて、この頃ようやく流行りだした幌付の四輪馬車に乗っては、やれお誕生日、やれオペラとお呼ばれして行きますのに、私ったら着れなくなった綾織絹の夜会服を片手に、窓越しにじっとそれを眺

めているだけ。世間は濃いみどりだというのに、私はまるで山小屋の中に閉じこめられたみたい。そこで、思い余って母に相談してみました。

「ねエ……。母さま。アフリカへ行ってみようかしら……？」

「えッ!? ケンリイのところへですって」

驚くのも無理ではありません。兄はいま、開拓者気どりで、南アフリカのナタール川ズールランドへ行っているのです。それもインドと違って、イギリス人などほとんどおりませんし、まだまだ原始時代さながらの生活を続けている土人が棲んでいて、うっかり一人歩きでもしたら、「行方不明人名簿」とやらへ、自分の名前が記されるのは時間の問題だというんですもの。でも私は、金繻の縁取りをした、薄紗の襟飾をしっかと両手で掴みながら、

「母さま。リンネはこんな気持で毎日暮すよ、お友達もだれもないアフリカへでも行ってた方がよっぽどいいの……。それに……」

その時、ユンゲート先生の高い頬骨が、チラッと眼の前をかすめました。

「五番街の先生だっておっしゃったわ。食物と環境をすっかり変えた方がいいって……」



「でもネ。リンネや……」

母の声は、胸の動悸をそのままに、微かな震えを残して、顔は醜く歪んだようです。

それもそのはず、母の甥のリデルが、新婚間もないサアデを連れて、一儲けをたくらんだのが、つい一年ほど前。まもなく宝石とか毛皮の買い付けに、兄のところへ旅に出たのでしたが、途中海賊にも会わず、無事についたと知らせがあつて三月も経たないのに、早や行方不明という噂が伝わってきたのでした。

ほどなく、不幸にもその噂は、事実となつて現われたのです。

兄たちの必死の捜策で、ようやく見つかったときには、リデルは木の上で逆さに吊られ、サアデもまた衣裳を全部剝がされた揚句同じ木の下に逆さで縛りつけられていたのです。しかもサアデの息の根を止めたのは、右のお乳に射さっていた吹矢だったということですわ。

それでも、私はこう思いましたの。もし、このからだか、もとのようにならないのだつたら、いつそのこと殺された方がいい。

荷馬車の車輪のように大きな腰、まるで自分のものでないみたいに、大きく膨らんだお

乳から下腹へかけての白い肉。

ホントですわ。もしこの体が、もとのようにならないんだったら、サアデのように逆さに縛られて、殺されたって後悔などしまい。

奇妙な昂奮に襲われて、とたんに私は、別人のような意気込みで、母へ向つて強い口調を放つていたのでした。

「母さま……。ねえ一年でいいわ。サアデを殺したズールランドってどんなところか。ネ……面白いお話を、たくさん持つて帰ってきますわ」

## 野良犬海賊

それこそ、今なら互いのお国で、やれ協定だの、やれ条約だのとお約束がありますからいいようなものの、私が十九といえば半世紀も前のこと。なにしろ大西洋では、イギリスとイスパニヤ王国とが、まるで犬と狼との勢力あらし。われこそは海の王国なりとばかり、イスパニヤが何十隻という艦隊を組んでそれこそ手あたり次第に、他国の土地や船を略奪して行くでしょう。すると、ヘンリー・モーガンというアングロ海賊が、がい骨の旗をなびかせて、そのまたイスパニヤの艦隊を襲うんですもの。

まったく、朝も夜も、海の上では追いつ追われつの血の争い。そんな時、ベエネズエラのマラカイボとかいう湖上で、イスパニヤの軍艦六隻が、モーガンに沈められたんだそうです。積んでいた財貨が、数百万ポンドというのですから、向う様だって腹も立とうし、日頃の面目も丸つぶれでしょうよ。その損害を取りもどせという国王の命令だって無理もありませんわ。

さア、それからというものは、前にも増してイスパニヤの海軍が荒れ狂ってしまったんですよ。イギリス船と見れば、なんの容赦も致しませんわ。まったく狂犬といおうか、野良犬といおうか。実に猛々しい盗ッ人ぶりを発揮したんです。

カーゲル伯爵の御夫人と息子のチャーリイさんが、ロンドン港から少し離れて舟遊びをしていた時ですよ。ホンに真昼間だというのに、頭からすっぽり黒い毛皮をかぶった船頭が近づいてきて、いきなり艦鉤をその小舟にひっかけてたんですネ。そしたら「あッ！」という間もない素早さで、ぐいぐいと沖まで漕ぎ出していつて、やがてお二方ともぐるぐる巻き、その時カーゲル夫人は柄の長い日傘にフランネルの薄紗の襟飾をした長衣を召して



いらっしやって、その長衣はダイヤモンドを縫留めた素晴らしいものだったと聞いていますの。

息子さんは、まだ十三というんですから、ようやく小舟の漕ぎ遊びになれたばかり、お嬢さまのように、紅玉の留金のついた半靴をはいて、支那人が宮廷に献上してから流行りだしたという白麻の運動着を着こみますと、ようやく覚えた小舟遊びに夢中になっていたんでしょうから、それでなくとも母君に似て綺麗な白面の貴公子ですもの、きっと額に小汗でも催して、湯上りのように、ほんのりしたういういしさだったと想像もできようもの野蛮で獰猛なあの子スパニヤ人が、なぜにだまって見ているのですか。

果せるかな。御子息チャーリーは御夫人の眼の前で下着一枚に剥がされたあげく、両手を上にあげたまま、帆柱の下に縛りつけられてしまったんですよ。男の子とは云え、蝶よ花よで育てられた御曹子だけに、手荒なことには慣れていません。そのまま、白いクレオンのように、一本棒でぶら下がってしまったのを眺めたカーゲル夫人は、

「あッ！」と首をよじりました。

「後生ですから、縄をといてあげて……。その子は体が弱いのですから、死んでしまいます……！」

「……」

答えずに、ニヤニヤと眉を下げながら、数人のイスパニヤ人はチャーリーの首、のど、胸と次々にさすっては、下顎を突出して見せ

るのです。

そのずる賢いやり方に、御夫人は耐えられないしほり声を放って胴をよじりました。

「ああ……。なにが欲しいのでしょうか。どんなお望みでもおっしゃって下さい！」

と、突然、相手の眼が異様な明るさで、真





昼の光を吸いこみました。

「御夫人、おれたちの欲しいのは、お前さんのダイヤの黒いお召物と、そのなかみのさ……」

その日、ロンドン港の夜霧がしっとり、波止場のガスライトを濡らしはじめた時、カーゲル家の小者たちが、裸足のまま、呆然と舟着場にたたずんでいる御子息を見つけたしただんそうです。

わが社交界の花形、カーゲル夫人はといいますと……、あら、御存知ありませんの。ついこの前、ドイツのイスパニヤ大使と決闘したフランスのベルツシュ子爵の話。あの原因となったのは有名な夜の女王……、いうならばカーゲル夫人だった、その人なんですよ。

おしゃべりがちよつと長すぎたようですがともあれ、ポルトガル、オランダ、イスパニヤと、大西洋をわがもの顔に振舞っている、そんな時でしたから、たしかにアフリカの南端まで女一人で出かけるなど、とても想像できない大冒険だったに違いありませんわ。

でも、女だてらにとお笑いかも知れませんが、私は広い土甲板の上で、鉄砲を習うのに必死でした。これで人を殺すんだというよりイスパニヤ人から身を護ろうという一途な思

いだけで……

## オランダのこそ泥

「ほう、リンネ嬢は泳ぎを知らないの？」  
相も変らぬロナール氏の冗談めいた口ぶりに、私はくすつと頬笑いをつくりながら、上眼づかいをして見せました。

「それは天下の一大事……」

まあ憎らしい。こんな云い方をして、肩を上げたりするんですよ。

「だって、私女ですもの……」

少しは反撥の色をみせて、こう云いましたの。まったくですわ。女が人前で手や足をあらわにして見せるなんて、およそ考えてもみないこと。でもロナール氏は顔色一つ変えません。

……まあ、この方紳士じゃないのかしら？  
と、こう思った矢先、

「それは、ごもつとも。しかし船に乗って旅行なさる方が、万が一の場合、いかがなされます……？」

「……」

口ごもってはしまいましたが、そこが性来の気の強さで、

「お船といっしょに沈みますわ……」

「いや、あたらしいお生命を……、いけませんぞ。お習いなさい」

と、それは今まで見なかったような、いかめしいお顔で、じつと私を見つめました。あとで判ったことですが、ロナール氏がこうおっしゃったのも、実は無理からぬわけがあったのです。海賊が襲ってくるというのは、必ずしも金銀ばかりを狙ってくるのではないということ。その時、女は全部海へ飛びこんでもぐればいいというのです。しかし、やがて、これが皮肉な結果になろうとは……。

ともかく、パワ号がカリアナ諸島を越えて北回歸線に入りますと、赤道に近づいたせいもあって、風さえ波さえ皮膚にしみこむようなあつさです。用意してきた麻着の長衣に着かえて、胸を大きくひろげた私が、後の甲板に腰を降ろして、幾分なりとも風に吹かれて涼んでおりますと、突然、マストの上から、高らかにラッパが鳴って響いたのです。

「あッ!!」私はあまりの緊張した、その音に圧されて、よろめくように立上りました。

もしや、もしやといった日頃の不安が、とうとう異状な物音といっしょに、不意に襲ってきたんですもの。

「ロナールさん。イスパニヤの海豚が……」



憎悪と狼狽が、こんな下司っぽい言葉を吐かせました。

「海豚……？」案の定、体全体で大きく笑いしましたわ。

「リンネ嬢。残念ながらその海豚でない。どうやら、オランダのこそ泥らしい……」

オランダと聞いて、少しの安心が湧きましたが、でも海賊に間違いありません。日頃いわれていたとおり、上甲板のチャールズ船長のもとに集まりました。

「予期したとおり、海賊船がこちらにやってきます。どうやらオランダ船らしい。どうか私が合図するまで発砲しないで貰いたい……」

どうやらチャールズ船長に、なにかの目算でもあるらしい様子です。

と、そうしている間にも、海賊船は目と鼻の先まで近づいてまいりました。

私をはじめ、六人の他の御婦人たちは奥まった船室のなかから、交る交る円窓に額をつけては、溜息をつくばかり。

「ああ、どうなるのでしょうか。殺されてしまうのかしら……」

金切声で頭を抱えたのは、支那へ行くという外交官夫人でした。

「もし、あちらの船に連れて行かれたら」

青白い顔で、ひとりごとのように呟いたのは、インドにいる御主人を訪ねて行くというヘンリー夫人でした。きめの細かいスコットランドの美人でしたわ。

異様な気分で、一瞬、静寂な空気が流れましたが、そのうちだれがはじめるともなく、下着にふくらみを持たせた竹のヒダをとりはじめたのです。これは腰の形をよくするため、いまロンドンの社交界で流行っているフランスの宮廷服を真似たものなのですが、とても風通しがよいので、いつとはなしに、こうして細い竹のヒダを下着にまわしていたものでした。

でも、所詮はムダだったんです。こんなちよつとの警戒心など、あらくれた男の暴力の前には、なんの役目も果たさぬばかりか、かえって陰惨な目つきを煽るばかりだったのですわ。

この悲しい事実は、女たちがせつせと竹のヒダを、その下着からひき抜いて間もなく、血が引くようにはじまりました。

## ヘンリー夫人の最期

チャールズ船長の言葉が正しかったと見たのは、上甲板にどやどやと乗りこんできたオ

ランダ海賊の人数が、五十人近くもいたことからです。もちろん、パワ号の右舷すれすれに近づいたオランダ船にも、その位の海賊が手に手に長剣やら鉄砲やら持つて構えていました。とうてい、これではかなうべくもありません。せいぜい船が沈められて、全員皆殺しに会うのが関の山だったでしょうよ。

やがて首領らしいのが、チャールズ船長の前に出てまいりますと、

「われわれは、船を沈めたり、人を殺したりするのが目的ではない。この船に積んでいる金銀と、お前たちが持っている武器をそっくり渡せばそれでよい……」

と、これはいつでも聞いている、この手合のきまり文句を突き出しました。

「金銀はそっくり進呈しよう。しかし武装はこまる。われわれはこれから支那まで行かなければならないのだ。いつ、どこで海賊と会うかも知れない。われわれがいま戦わなかったのは、君たちの船がオランダだったからだ」

なるほど、うまいことを云ったものだと思います。その頃、オランダとイギリスとは同盟国で、イスパニヤの横暴に対して、同じように腹を立てていた間柄だったのです。



すると、その首領は、真赤な口髭でフフンと笑ったようでした。

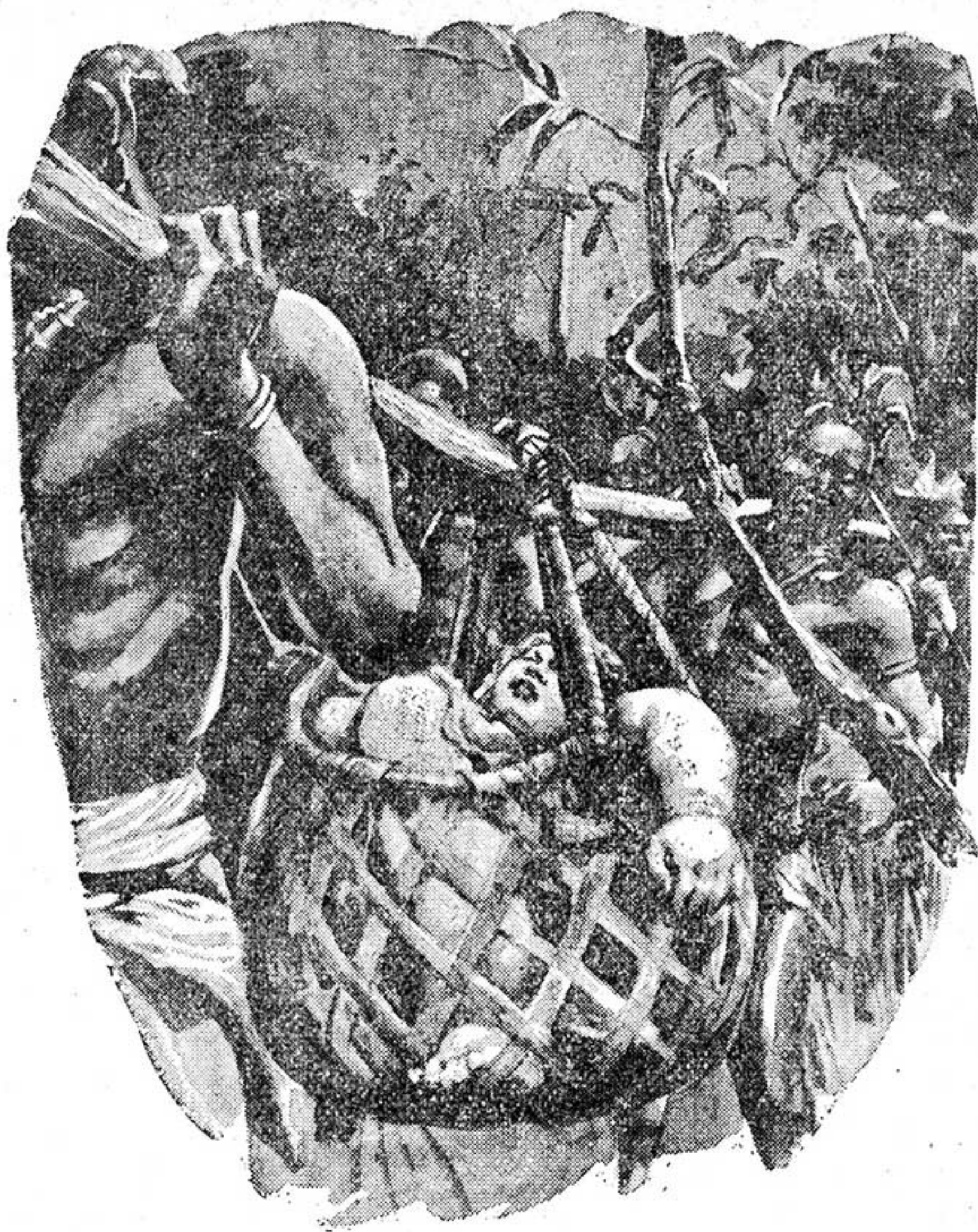
「おい君、おれたちは海賊なんだぜ。海賊には同盟国のよしみなんで、ありやしないさ。」

同じ国の船だって、よい獲物とみれば……」

それから、ぐるっと回りを見廻して、

「女も欲しいのさ……」と、野良犬のような舌なめずりをするんです。

私は円窓から、憎悪の視線をその首領にぶ



つけながら神に祈らずにはいられませんでした。そして、立ってヘンリー夫人が、上甲板を覗いた時でしたわ。

「あッ！ 女だ！」

と、だれかが叫んだのです。同時に、すばやい足音でドアの戸が開けられると、どやどやと海賊どもが入りこんでまいりました。

が、その叫びをいち早く耳にした私は、なんとこの幸せだったでしょう。とっさの勢で頭からカーテンをかぶっていたんですもの。変にごつごつとして肥っている私のからだはきつと女に見えなかったに違いありません。

果せるかな、私一人をおいて船室のドアは外から足蹴にされて閉じられたのです。

ああ、なんという恐ろしさ。

「いやッ！ 助けて……」

「許して！ 痛いッ！」

という叫び声がけい機となって、突然、鉄砲の音が鳴り響きました。私はカチカチと歯を噛みならして、往ったり来たりするままです。続いて撃ち合う鉄砲の音、切り結ぶ長剣の響き、私はただもう恐ろしいというばかり両の耳を押さえて、凍りつくような心臓の音にじっと耳を澄まして、ペタリと腰を降ろしたんです。



―と、私の眼の前に、大きな箱が忘れ物のように転がっているではありませんか。斜めに読んだ字は「火薬」という二字です。

もののけにつかれたように、突然その蓋をはがした私は、ふるえる手で中の一つをとり出してみたものの、これをどうすればいいとも、どうしようとも考えません。ただ、やたらに右舷から狙い撃ってくるオランダ人が憎くかっただけですわ。もう夢中、一種別人のようなすごんだ眼つきで、両手に抱えられるだけ火薬を抱えますと、トッサの勢で火をつけたが、矢継ぎやに、向うの船へと投げつけたのです。

それが勝利のきっかけとなったとは、これからあとに知ったことですわ。だって私、真ッ赤な大きな火柱をみたたん、気を失ってしまったんですもの。

―その夜は、生涯味わうことのない悲しい夜でした。下着を剥がされたあげくに、太ももを斬られた外交官夫人。首を絞められて、あえない最後をとげた二人の御婦人、なかになによりもおかわいそうだったのはヘンリー夫人でした。

両手足を縛られて、海賊どもにかつがれたのです。でも、余りに暴れるものですから、

みんなのいる前で首に縄をかけられ、ちょうど人質にされた格好で、帆柱に押さえつけられたんだそうです。

猛り狂った首領が、まずヘンリー夫人のお洋服と下着を、剣で引き裂きました。それだけでなく、キメの細かい柔肌が、真ん中から思わぬ真昼の明るさを身に受けて、きつとまばゆいほど白かったに違いありません。

「傍に寄ってくると、この女をさし殺すぞ……」首領は烈しい昂奮で、憑かれたような身振りを、大きく振りまきますと、こう叫んでヘンリー夫人のお腹を突きさしたのでした。

## 十字のハリツケ

九死に一生を得ただけに、迎えられてパワー号から上陸したときは、それこそ兄にすがって大っぴらに泣きましたわ。

とたん、口も利けないほどのひどい疲労感が、胸にも頭にも重く押しかぶさってきて、その日からすっかり寝こんでしまったんです。すると、いやらしいいったらありやしない。入れかわり立ちかわり、土人が覗きにくるんです。そりゃ白人の女って私一人、珍らしいが、気持はよく判りますが、竹のような灌木で編んでつくった小屋とはいえ、婦人の寝室を

無断で覗きにくるなんて、なんて失礼な人たちなのでしょう。兄のケンリイでさえ、

「リンネ入るよ」と断ってからじゃありませんか。薄気味が悪いというより、やたらに腹が立つばかりですわ。兄にいくら訴えても、「それは無理だ。土人の礼儀は白人と違うのさ」と、こうなんですもの。

もう、そろそろあきらめかけてきたある日の夜のこと……

お土産のつもりで持ってきた振子時計の音に混って、ひたひたという足音を身近に感じたのです。それも一つ二つじゃありません。

足音の様子では、二人か三人のものなんです。びくつと全身を固くしたのと、両手足や頭を押さえられたのが、ほとんどいっしょでした。

「あッ!」と、叫ぼうとしたものの、その口の上にも大きな掌でフタをされてしまったのです。力まかせにからだをよじってはみましたが、そうすればするほど、今度はお腹、腰と別の手が押さえつけてくるのです。

「いけないッ!どこかへ連れて行かれる……」不吉な予感が、頭を掠めたたん、からだの方がすでに観念したのでしょうか。私は気を失ったように、眼をつぶっていたのです。



それから間もなく、まるでもぎたての果物のように、私のからだは小さな籠のなかに、すっぽり入れられていたのです。

御承知のように、ぶよぶよと太ってしまったこの体ですから、肉に食いこむような籠の痛さです。思わず、

「痛いッ!! 痛いッ!!」

といいますと、私のあと先では、まるでそんな叫びを楽しむかのように、

「くっ、くっ」と笑い合っているではありませんか。

どこまで運ぶつもりなのか。ともかく、夜が明けきらないうちに、今度こそ完全に気を失ってしまった私でした。

―と、それは何分も過ぎていないと思うのですが、チクリとした小針の痛さで、私は思わず腰をひきました。

まア、なんということ。いつの間にやら私は両手を上に、両足はまたその手といっしょに、八の字に広げられて、それも御丁寧に、ちょうど十の字を斜めにしたような棒の上に、まるでフランスの死刑人のように、一つ一つしっかと縛りつけられているではありませんか。

「あッ! なぜ…!」

と、叫ぼうとしたのも束の間、眼の前に立ちはだかっている何十人という土人の眼の光りを眺めて、私はまた失心状態に落ちて行きました。その時でしたわ。

「白人の女よ。お前のかくしているものをだせば、かえしてやろう…」

私はびっくりとして大きく眼を開きました。

確かにそう聞いたんです。いったい、だれの声でしょう。土人のなかに、お国の言葉を喋べる人がいる…。なつかしい…というより助けて貰おう…。ホント葉をも掴む気持で、私はかすれた声を出しましたの。

「かくしているものなんて、なんにもありませんわ。ネ…、ネ…、助けて下さい」

「いや、あるのだ。その体のどこかにあるに違いない…」

「まア、体のどこかだな。この体の中は骨と肉ばかりよ。あなた方のいう、かくしているものって、何なのですか?」

「ほう…。白人がずる賢いことは知っていたが、この女もなかなかじゃ…」

人情もない冷酷な声でしたわ。もう、真ッ黒な絶望感だけしか残りません。みるみる蒼白な顔へ、脂汗が浮いてまいりますと、私は破れかぶれの表情で、その声へ向って大声を

ぶつけました。

「信用しないのでしたら、どうぞ、好きなようにして下さい…」

「お好きなように…? では神の名に誓って後悔しないな…?」

「後悔するのは、あなた方です。かくしたただなんて、そんな…そんな…」

いくら気が強いって、まだ十九の私ですもの。生れてから一度だってさらしたことはない、体への羞恥と、今聞いた言葉の中へぐんぐんと引きこまれていく恐怖が折り重なり、突然、耐えられない淋しさに襲われてしまったんです。そこまですると、もうダメ。動かないとは知りながら、手と足を懸命によじりながら、それこそ赤ン坊のように泣きだしてしまいましたの。

「ほう、泣きだした。泣きだしたぞ」

と、これはまた、思わず息の根を止めるような声でしたわ。しかもそれが女の声でしたから、なおさら私は仰天したんです。無理にも顔をよじりますと、そこにはあやしく眼をかがやかし、絵で画いた妖女のような恐ろしさで、私に迫ってくる瘦せた影があるので



## ランチャの女神

舌でも噛みたいような恐ろしさと、全身を刺すような恐ろしさが、同じ速度で私の心臓を止めたようです。

私はあらゆる抗議をこめて、

「いやです！ 助けてッ」と叫びましたが、眼の前の何十人という土人たちは、そよとも動きません。ただ、じっとして私を見つめているだけです。ああ、いったい、私をどうしようというのでしょうか。

「しろおんな」と、こういいましたわ。

「あの猿の骨は、リュカ大王の宝の地図じゃ……。白人に渡すわけにはいかないのじゃ」

妖女の眼はいきりたって、その口ぶりにははつきりと怒りが感じられました。

「知りません。猿の骨も、リュカ大王もなんにも私は知らない……」

だって本当なんでもの。しかし妖女は、そんな私の言葉を吹き消すように、ひっひっと笑いたてて、

「お前の右足のももはバカに太い……。そこじゃ、その中にかくしているのじゃ」

「えッ!？」

思ってもみませんでしたわ。だって正直な

話、自分の体のすみずみまで、まだ一度だって見たこともない私ですもの。まして、この頃は、鏡に映すのさえはずかしくて、薄い下着のまま、お湯をかぶっていたンでしょう。「ここを切れればわかる。必ず、この中に入っているのじゃ……。で、なければ、こんなに太いわけがない……」

妖女は声は声を低く押さえて、私の右ももを押さえました。

とたん、私の脳裏に浮かんだのは、アフリカで死んだサアデのことでした。私もここで殺される。なんという運命の皮肉……。

しかし、血を見る前に、土人は神に祈らないければならぬのでした。たちまち、何十人という土人が、私の囲りに円形をつくりました。そして妖女の不思議な呪文に合わせますと、手に持った槍を振りかざしながら、頭を上げしく上下に揺すぶっては、

「ウオ、ランチャ！ ウオ、ランチャ！」

と叫んで廻りだしたのです。私の眼の前には薄い灰色の膜が張られたようです。なんと、逃げて術とてありません。

私しみじみと、自分の体を眺めたのは、この時だけです。大きく突き出たお腹の肉、その下の二つのももは、事実、右の方がずっと

太いようです。そして、この乳の膨らみといったら。よくこの乳の中にかくしたと云わなかったものですわ。

こうしているうちにも、時は悲しく過ぎて行きます。なまなましい儀式は最高頂に達したらしく、輪はだんだんとせばまりました。

今度は交る交る私のからだを、どときめずに、一人一人さすって過ぎるのです。いいえ、さするというより、つねるといった方が当たっていましたわ。もし私が、

「痛ッ!!」という、土人は誇らしげに、隣りの仲間に笑ってみせます。

「痛い！ 痛い！」

何十回、いや何百回と繰り返して、しまいは声が出なくなりました。もう痛いというより、そうされるのが当り前のような気分になったからです。むしろ、私の眼は張りのあるように、いきいきと輝いていたかも知れません。まったく不思議な酔いしびれでした。「もっと、強く……」と、かえって呼びとめてやりたい位。

全身真っ赤に染まりながら、先刻とは打って変った私の表情に、妖女の眼には、なぜか困惑を思わせる光りが漂ったように見えました。すると、一層、体をしほするような大声を



響かせて、今とはまた違った呪文をとえはじめたのです。土人の輪はますます縮まって「ウオ、ランチャ……！ ウオ、ランチャ！」

と、これは気違いのように手足を振りまわすと、今度は槍の柄で、順に私を小突いて行くのです。私はまるで獣がお仕置にされるみたいで、「うッ！ うッ！」と、うなつて、体をよじりました。

と、その時です。

「ギャッ！」と、叫んで一人の土人がのけぞったのです。と、続いてまた、

「ギャッ！」という叫び声……

それは立ち直る余裕を与えないほど素早い矢の勢いでした。やがて、散り散りになった土人に怒り声をあげせながら、妖女の手がピカリと私の頭上で光ったときです。

「ダダーン」

というピストルの音が、すぐの後で響きました。

「ギャッ！」

と右肩を押さえながら、妖女の眼には陰惨な影がかすったと思うと、激しい憤怒で、臍を裂きました。

「しろおんな。必ず猿の骨はとり返して見せるぞ。ウオ……！ ランチャ……！」

ランチャとは、この土人たちの女神の名前だとは、助けにきた兄のケンリイから聞いたことですが、猿の骨については、全然、兄も知らないとのことでした。

それにしても、お国の言葉で話しかけてきた妖女と、もう一人の男は何者なのでしょうか。

そして、リュカ大王の宝の地図とは……？

最後に叫んだ、あの妖女のしわがれただみ声と、両手を烈しく振って灌木の中へ走っていった奇怪な後姿を思い出しながら、その晩傷の痛みも忘れて、私は憑かれたように、ケンリイと話し合っていました。

海に近い空が、一面に濃い緑に染まって、地も山も見境いがつかないぐらい、それが一瞬の間にオレンジ色に燃えはじめ、周囲が

神秘的な世界の涯てのように静まりかえってまいりますと、ズールの空にようやく夜がくるのです。

やがて、どこから湧いてくるのか、薄い霧が山から森から林から、順を追って迫るよう

に包んでくると、「チョラチョラ」というあわただしい土人の呼び声に混って、牛や羊の物哀しい鳴き声が聞こえるのも、この時です。

こうして、南アフリカの夜が、大地も人も獣も、なにもかも圧さえつけるように黒く染まって行くのでした。

——そんなひととき、どこから投げこまれたのか、私の小屋を狙って飛んできたのが、矢の先に白と赤の漆を毒々しく塗りこんだ鷲の羽根だったのでした！

(以下次号)

★飛んで来た紅白の矢は何を意味するのだろう！ リュカ大王

★の宝とは何か？ 相次ぐ危難を越えた安堵も束の間、 狂熱

★の蛮地にまき起る風雲！ 次号を御期待ください！





死

体

解

剖

室

あたら麗人の玉の肌も、死んでしまえば  
ただの物質——非情なメスをふるって切  
り刻む死体料理人の話。

## 村山正太郎

淡い秋の陽差しを浴びて、縁側いっ  
ぱいに小ささまざまな、ガラスの水槽  
がひしめきあっている。緑の藻のあい  
だを縫って、生きた宝石が群遊してい  
る。御自慢の熱帯魚の飼育である……  
と書きだすと、いったいどなたのお宅  
かと、思うだろう。

ところがこれが、日本でも有名な屍  
体の料理人。いわく裁判医——藤井安  
雄博士の桜木町駅から、ほど近い自宅

——つまり横浜犯罪科学研究所の一室  
なのだから、驚きいるのである。

——あれ、熱帯魚と殺人事件とは、  
いったいどんな関係があるのかな。な  
どと、さっそくヤボな推理を、働かせ  
ていると、あっさり先手を打たれて、  
「ああ、これでシュか。これは私の廿  
年来の趣味なんでシュよ。三越にも出  
品しましてね。ずいぶん気をつかいま  
したよ」

博士は瘦身飄々、ガンジーの如き好  
好爺。——どう見てもこれが過去に、  
千四百体以上の仏さまを解剖！という  
オツカない経歴の持主とは思えない。  
なんでも有名な牧逸馬や、大磯心中の  
さいの検死も、博士がされたものだ  
というが、意気こんでいただけに、やん  
わりと肩すかしを食わされて、肝心の  
質問のきっかけにも、とまどう始末。  
すると博士は、

「しかしでシュね……」

と、かたわらの夫人の方に微笑みか  
けられた。夫人は女性の身で、長年博  
士の助手をつとめて来られたんだそう  
である。

「何といっても、やはり一番打ちこめ  
るのは殺しでシュよ」

そういつて、私を案内されたのは、  
玄関脇の解剖室——これはいけなかつ  
た。

サンダルをはいて、漆喰の床に降り  
立ってまず眼についたのが、広い甘畳  
敷きほどの室内の端におかれた、鉄製  
の解剖台、それと向い合って、臓器の  
異常を筆記する黒板がある。それだけ





なら別に何でもなかったのだが、何の気なしに薄暗い隅の棚に、視線をうつしたとたん、ギョツとした。

大型の火鉢ほどもある、ガラスの容器の中に、何と人間の切断された胴体が、ねむっているではないか。

病院などによく置いてある、フオルマリン漬というような、生やさしい代物ではない。

皮膚はもうカサカサの茶褐色に干からびて、ミイラ化した女の胴なのだ。

安達ヶ原の鬼婆のそれのように、とがり細った指が、むなしく虚空をつかんでいる。そして横の別な容器に、べつとりと黒髪のまつわった頭蓋骨が、怨めしげに、くぼんだ眼をすえている。

日頃小説の上では、幾度となく残酷な死体をみている私も、こればかりは、もういけません。

思わず眼をおおいたくなるのに、博士ときたら、落ちついたものである。

「こいつはでシュね」

と、それこそ骨と皮ばかりの腕を、ブラブラさせて、

「十年ほど前の、バラバラ事件の死体

なんでシュよ。ここからつい一駅ほど先のお寺の藪の中で発見されたんですが、ながいあいだ迷宮入りになっていた事件でしてね。……その犯人がやつと最近、挙ったんで、再鑑定をやるために、置いてあるんでシュよ……。ほら見てごらんなさい。鋸で引いてあるでしょ」

なるほど、頸骨も手の関節も、見事にスッパリと、断ち斬られている。

博士は、その胴体をよいしょと持ち上げると、裏返しにして見せてくださる。

内臓はすっかり腐り落ちて、骨のほかは、筒抜けのがらんどろ、至るところを野鼠や、虫に食い荒されている。

さぞや生前は玉の肌——こんなみじめな姿になっては浮かばれまい。とそぞろ哀れをもよおしたが、聞けば殺されるまで、横浜のほうの酒場の女給だった女だそうだ。

犯人がその肉の一部を食ったとか、食わないとかいう、曰くつきの事件なのである。

これでは頼まれたって、抱くなんて気は起らないなどと、けしからんことを考えながら、それでも話は生々しいリアリズムの本筋にとびこんで、私もここぞと用意した質問をぶつつける。

「こんなに次から次へと、無惨な死体を解剖されて、恐怖なんてものは、起らないもんですかね？」

愚問とは思ったが、内心なによりも聞きたかったことである。

「それでシュね、どんなにひどい仏さ







までも、メスをふるっているときに、怖いなんて思ったことはありません。

物体と同じですから。……それに私は、解剖というもんを、お茶のお点前と、おなじ精神だと思っとるんです。

神聖なものでシュよ。……だから私は自分の解剖のさい、血を一滴も外へこぼさない。というのが自慢でしてね。

前にも殺しのあった現場の、四畳半でやったことがありますが、見事なものでした。ただ、ね……」

ちよっと口もとが、ほころびる。

「夜なんかではかの仕事忙しいと、つい死体が、解剖室の台の上ののっているのを、忘れてしまうことがあるんですよ。……そんなとき何かの用で、

真暗な解剖室にもどって、何の気なしにひょいと、台の上の電燈を点けたし

ゆんかん、思わずギクッとする事があるありますね。……単の音もふだん家の中なら、なんでもないんでシュが、

解剖室でガタリとやられると怖い……」

もっともである。恐怖の意識は、予期せぬときが一番強いのは当然であるそのいい例に、博士がよく学生に講

義されるのが、生きていた死体なるエピソード。

——就寝中の夫婦が、強盗にめった打ちにされて、血まみれになって眼球まで、とび出しているものだから、てっきり殺されたものと、早合点した警察のものが、いざ現場写真を撮ろうと布団をはいだところ、死体がくるつとあおむきになって、カメラマンがギャツといったという話である。その夫婦は死んだものではなく、虫の息でいたのを誤認されたので、すぐに病院へかつぎこんだお蔭で、二人とも生命は助かったのだ。

「こんなのはごくめずらしい話でしょうね」

「そうですね。……まだまだ意外な話がありますシュよ。三、四年ほど前に、おじいさんの人で、やはり犯人に棍棒で殴り殺された、強盗殺人がありましたね。そのとき検死した地元の医者が、どう間違えたのか、服毒死と診断したんです。なぜそうなったかという、面白いことに、ヤジウマの中からあいつは（その老人のこと）癲病だ、とい

う声がしたんでシュね。……あいにくその医者は駈けだしたもんだから気味悪がつてロクに、見もしないで決めちゃったんでしよう。無理はないんでシュな。死体の顔は、殴られて紫色に腫れあがっているんだから。……ところが後からきた警察医も、まへの医者がそういったというんで、それをそのままウノミにして、死亡診断書は服毒死ということにした。被害者の身元の方も、警察で調べたところが、京都の方から家出していることがわかったということなんでシュ。それなら自殺じゃないかというわけで、その死体は火葬場に送られて、灰になってしまったんだが、後で犯人がつかまってからはじめてあれが殺人だったと知れ、大騒ぎになりましたよ。仏さまはさぞ情なかつただろうと思いまシュね」

訥々とした話ぶりだけに、よけいに効果的である。

豊富な話題は、いつ尽きるともわからない。——そうこうするうちに、あんまり横の死体がこわくなくなってきたのは妙である。（おわり）



# 放浪の記

伏見 和夫

★眉の濃い美少年に惹かれた幼い日から僕はその想いが

★初恋だということを知った。そこから僕の遍歴が始まった



彼の報告を一時おいて、筆者は彼との最初の結びつきへとペンを返してみたいと思う。そうすれば読者の方にも今までの事情などがよく理解していただけるであろう。彼と初めて知り合ったのは昨年の秋、彼から受取った一通の手紙からである。

三十×年十月二十六日 実話××文通欄より。禁色ファンということは同性愛に興味を持たれると考え、お手紙を差上げる気になりました。私も同じ性向を持っているから何となく親しみを感じたのです。三島由紀夫の小説や、いろいろの雑誌で私は自らの抱いている不満や、物足りなさがすべてこのことに起因していることを知り得ました。たしかに私はいわゆるホモに違いない、女性というものには余り関心を持たない私です。しかしこのことを知ってからかえって私は苦しくなりま

した。想像の世界では愛し愛され遊びながら現実に禁色フレンドを得られないのですから。親友は沢山あります。けれども世間一般の親友以上に進み得られないことは苦しみでした。胸を開き合える友達であっても、愛の対象としての欲望を打ち明けることは不可能でした。貴方は若い弟を求めてお出でなのですが、僕はすでに二十歳を過ぎた青年です。御希望にはそえません、もしや僕の苦しみの一端でも御理解下さればと思います、こうしてペンをとった次第です。

僕は今大阪に居ます。時々の日には繁華街へ出掛けますが、町を歩いても電車に乗っても、目にうつるのは美しく着飾った女性ではなく、美しい少年であり可愛い少年ばかりなのです。しかもその美少年と行を共にする想像の中には、必ず互いに求め合った幸福



の絶頂がなければならぬのです。お互いの要求を理解しつつ、ドライな交際が出来ればどれほどうれしか分りません。或いは僕の早合点ではなかったか？と不安に思いつつペンを運んでいます。貴方のお返事を期待しています。恐ろしさとそのくせ希望との思いで待っています。

(第一信)

× × ×

これが彼との今日を運命づけた第一信であった。雑誌の文通欄に自らの同性愛者であることを書くには、仲々大変な勇気を要するものである。でも孤独の重圧に耐えかねて筆者は思い切って投書したのである。徐々にではあるが反響はあった。この彼もそうであるが人に知られたくない性向ゆえに、手紙をくれる人は不安らしい文章だ。その代り二通目、三通目となると驚くばかりに大胆な文章になる。露骨で積極的なものと変わってくるのだが、これは安心した反動というか抑制されていた苦悩が、理解者を得た歓びで一時に吐き出されるのであろうか。それに反して最初から赤裸々な文章は少い。これは考えてみると無思慮とさえいえようからだ。しかし筆者はそのような手紙も受取った。いずれこれらも

すべて紹介したいと考えている。

× × ×

三十×年十月二十九日 お返事うれしく拝見致しました。貴方は僕の兄さんです！長い間待ちあぐね、さがし求めて来た恋人です。今までの僕の半生はみじめでした。正常な恋愛や、正常な欲望を持ちたいと何度か努力しました。そしていつも劣等感がつきまといました。誰とも変らない平気な顔で笑い興じつつ、そのくせたまらなく孤独でいつも胸をかきむしられるようでした。しかし、今の僕は喜びの絶頂にあります。色々な文献や書物は同性愛は決して珍しくないとは書いてあります。けれどもこの性向の持つ隠密性の故に、みな苦しみ悩んでいるのです。ひとりひとりが孤独の殻に閉じこもってしまっているのです。だからそれぞれ求め合いながらも友を得る事はむずかしい。この広い世界に自分の性向を知らさずして、どうしてその人に逢うことができるでしょう。正直僕はもうあきらめてしまいました、生涯僕の情熱は空転しつづけ、愛情の炎は空しく空中に放射されて、孤独の中に一切の苦悩を秘めて僕の人生は終ると思っていました。僕のうわ言のよう

な文章は御迷惑かも知れませんが、これもうれしさをどうしても抑えることができないのです。どうかよき恋人？として交際して下さい。早くお逢いしてみたいと思います。僕は仕事は忙しく毎日追われているようで、休日には暇な時ということになっていて、いつになるかは分りません。けれどもとにかくお逢いしたい気持でいっぱいです。

僕は水商売の家に生まれました。母親は忙しいので僕を放置しました。乳房を求めて泣きわめく僕の欠乏感は、唇のきわに今だに残っています。僕のくちびるは今だに母の乳房を求めています。しかもそれは現実の母のそれではなく、同性の姿に幻影が移ってしまっているのです。

男兄弟もなく姉妹や女中等の中に育ったので、僕は女の子の遊びしか知りませんでした、学校へ行くまで自分のことをうちと呼んでいたのです。人形遊びやママごとやマリツキをして遊ぶ僕は、男友達から嘲られるようになり、初めて自分が男であり、男ならこうしてはならないということを知り始めたのです。気持の上での一種の性転換ともいえましようか。小学校三年ごろからは自分でも意識



して、男らしくなろうと努力しました。いつもなぶられ泣かされ、そしてまた喧嘩して泣かされて、シクシク学校からトボトボ帰った僕も、少しずつ男らしくなりつつありました。

六年生の時に僕は級長をしていた男の子が好きになりました。彼は眉の濃い男らしい子でした。何となく好きで好きでたまらないのです。そして子供心にこれが初恋？だと思いました。恋とは男性と女性との間のものといったそんなことは知らなかったのです。級長も僕と親友になってくれました。自分の恋心？がその心中深く芽生えている欲望が、異常なものとは少しも自覚しなかった。いや知らなかった僕でした。ただ級長と言葉を交わし一緒に並んで座り、共に歌を歌うだけでも有頂天な世界がそこにはあっただけなのです。それが中学二年ともなり、少しは男女関係などのことも知るころ、剣道部の乱暴者に恋心を抱いた時には、はっきり自分の異常さを知り同性愛だということを自覚したのです。

僕の文学好きがこのころから始まります。森鷗外の「キタセクスアリス」そしてヘルマンヘッセ、ジイド、堀辰雄、三島由紀夫などの作品の中で、初めて同性愛らしきものに行

き当り、僅かに心を慰めていたものです。そうしたものを読むことで、僕の異常な愛情は成長への一過程であると理解し得たのです。二十歳も過ぎるころには正常な異性愛へと変わるものと思っていました。しかしその期待はものの見事に裏切られてしまったのです。プラトニックに似た同性への思慕はいつしかそれで満足できなくなり、性愛となり肉体への欲望と発展し、その尽きるところも知れないのです。僕は相手を探し求めました、どうしたらよいのだろうかともがき苦しみました。そうしたある時新聞紙上に、同性愛の悩みを訴えているのを見ました。よくある人生相談でしたが、その解答者は文学者の安西冬衛という人で、僕はその解答記事を読み、よいことを思いつきました。それは同じ悩みの人を探し求めていた僕には妙案で、直接安西氏に手紙を出しその投書者を紹介してくれるように依頼したのです。でも投書者は匿名とのことでした。僕の希望のきずなはそれです。断ち切られて、相変らずの苦悩が続いたのです。

僕も二十歳前の青年というより、むしろ少年が好きです。高校生が歩いているのを見る

と、自然に目がその方に行ってしまう。いつか京都の市電で中学生と向い合ってしまった事があります、混んでいるので押されている内に、ふと僕の手が少年に触れてしまったのです。車の動揺で何度か触れている内に少年の生理的現象が起ってきたのです。紅潮している少年の頬、でも少年は顔を赤くしたまま声は出しません。あの時の胸の高鳴りを僕は今でも忘れることが出来ません。もしかしたらという僕の期待は空しく、運は僕に幸いしませんでした。僕にも連れがありました、し、中学生の方にも姉らしい連れがいたからです。そして中学生はズボンのあたりを気にしながら、ちらっと僕の方にはかみを見せ、三条河原町で降りて行きました。あの時とちらにも連れがなかったら、恐らく僕は少年を誘ったでしょうし、彼も黙ってそれに従ったに違いありません。何故？降りる時僕の方を見た視線は決して怒りのそれではなく、むしろ親しみさえ見せていたからなのです。だから僕は満員の電車が好きです、高校生などの前にいつも頑張ります。でも彼等の多くは僕の挙動の怪しいのに気がつく、背中を向けてしまいか逃げてしまいます。僕は哀しい



思いを幾度味わったことでしょう。なぜ逃げるんだ！僕は君が好きなんだ——と心の中で泣きながら叫ぶんです。でもふと一瞬我に帰ると、空恐ろしい自分の行動を反省しているのです。僕のこの怪しい行動がもし公衆の面前で、痴漢という名のもとにバレないと、どうして保証出来るでしょう。世間に僕の異常ぶりが曝露されるとする。僕の社会的立場も家族たちも、一瞬にして暗黒の世界に突き落されるに違いありません。そのくせ恐ろしい破壊と知りつつ、僕はその奇矯な行動を止めることが出来ないのです。空いた電車をやり過しては、ぎゅうぎゅう混み合った電車に乗ってしまうのです。大阪の街は広いし面白い所も沢山あります、それを遊び廻ってみても僕の心は満足しない、満たされるものも見当らない僕の心、飲めもしない酒も飲んでみました、しかしアルコールは僕の心を凶暴なもので掻き乱しながらも、かえって悲しみを深めるだけのことでした。アルコールも映画も、踊り場の赤いライトも、僕のこの満たされぬものを満し得る何物も持っていないのです。所詮は正常な性格と感覚の持主にのみ享楽を許すだけの世界、僕たちの苦悶は海底の

泥土のように深く沈澱してしまつて、陽の目を見ることがないのです。こうして歩み続けて来て、まだこれからも何かを探し求めて歩き続ける、傷だらけの僕に今やっと一筋の光が差し入った思いです。心のより所を探し得ることが出来たからなのです、安心に似た落着きを取り戻しているのです、そしてこれは今までの人生で感じた始めての安心感かも知れません。

どうか貴方の話を聞かせて下さい。サドもマゾの世界もちろん知りません、そんなことは考えてもいませんでしたから、ただ恐ろしい感じです。僕は気の弱い意志の弱い大人しい女のような性質です。貴兄は僕をどう想像していらっしゃるのでしょうか、それを考えると何となく身の竦むような気もしてくるのです。それにしても貴方はよく大胆に、雑誌にそれと分るような投書をされましたね、とても僕にはその決断がつきそうにもありませんもの。きっと数外くのお便りが寄せられていることでしょうね、その中には僕や貴方が理想にしている、可愛い高校生でもみつかったのではないですか？もしそうだとすると僕のような者なんかわずらわしく思われ

るのと違うでしょうか。もうこんなことを書いておかしいですが気になるのです、これも一種のジェラシーであるかも知れませんか。

療養されているのだそうですが、どうか大切になさって一日も早くお元気な体になつて下さい。貴兄と二人きりで思う存分に、青春をたたえる日を夢見るように楽しみにしているのです。そしてそれは今では僕の生甲斐ですらあるのです。兄さんとお呼びすることを許していただけるでしょうか？兄さんのお便り何度も繰返して読みました、これから僕はお返事を書くまでは何度でも、よく読み返し咀嚼するつもりです。兄さんの体験がそのまま僕の血と肉になるようにと。一日も早くお便りを下さいね。

(第二信)

彼のこの手紙を読まれて、読者はどう感じられるか知らないが、筆者は彼の性格が母親に放任されて育つて来た、その幼時の生活によつてアブ・ノーマルなものを芽生えさせたことを指摘したい。また姉妹ばかりの中で幼時を過したという環境も見逃すことの出来ぬ要素だと思う。私自身を振り返ってみてもあ



る程度は肯けるからである。私も幼い時から母がありながら、母の腕に抱かれることなく祖父の手で育てられている、こうした正常でない生活環境が、一番性格形成に重要な時期に与えられているとすれば、こうした結果になりやすいのではないかと思われる。

彼の場合、人と変っていると思えるのは、小学校六年の時に級長の男性？に初恋をはっきりと感じていることだろう、もちろん単に好きというのならよく経験することであるけれど、彼の場合はこの好きということをはっきりと「初恋」として意識していることは珍しいのではないだろうか。私も小学校時代に眉目秀麗な同級生や上級生に好感を抱いたことはある。しかしそれに「恋」としての意識はなかったようだ。でもよく考えてみるとその子と話をしたり、一緒に何かしているだけでとても楽しかったものだ。また何となくその子のきげんを取ろうとしていたような気もするのだが、これを分析してみると単なる好き嫌いの感情だけが百パーセントとはいいい切れそうもないのだ。これも考えてみると「恋心」の変型であったのではないだろうか。だからいわゆる同性愛者にも色々の型があっ

て、単に同性愛者として片づける訳にはいかないのだと思う。先天的な人は少いのではないか、先天的な同性愛者はその体質や機能に欠陥か異常があるのであろうと思われる。大部分の人は後天的なもので、それはその人の生活状態なり、置かれた環境なりがそうした性格をいつの間にか作り上げていくものなのだ。いずれにせよ私は同性愛者と公然と名乗れぬだけに、それだけ同じ恋でも言語に絶する苦悩を味わうのが宿命なのである。そしてこれは古代から見られるにもかかわらず、いつまでも世に容れられない異端の道なのである。

三十×年十一月二日 お兄さん。僕の願いをきいて下さってありがとう、これで僕は安心してお兄さんと呼びますよ。兄さんが書かれたという文章、たしかに読んだ記憶があります。あの内容にあふれている雰囲気から僕は鋭敏に、何かをたしかに嗅ぎつけていたのですね、あの中の同性愛的なところをむさぼるように読んだのです。作者に逢いたくて編集部へ手紙を出してみようかとさえ思ったのです。早くお逢いしたいナア、お便りだつて僕は首を長くして待っていたのですよ。僕の

仕事はとても忙しいのですけれど、十一月の十日までにはきつと一回休みます。その時には僕がお訪ねしますから、地図と電話番号をお願いします。

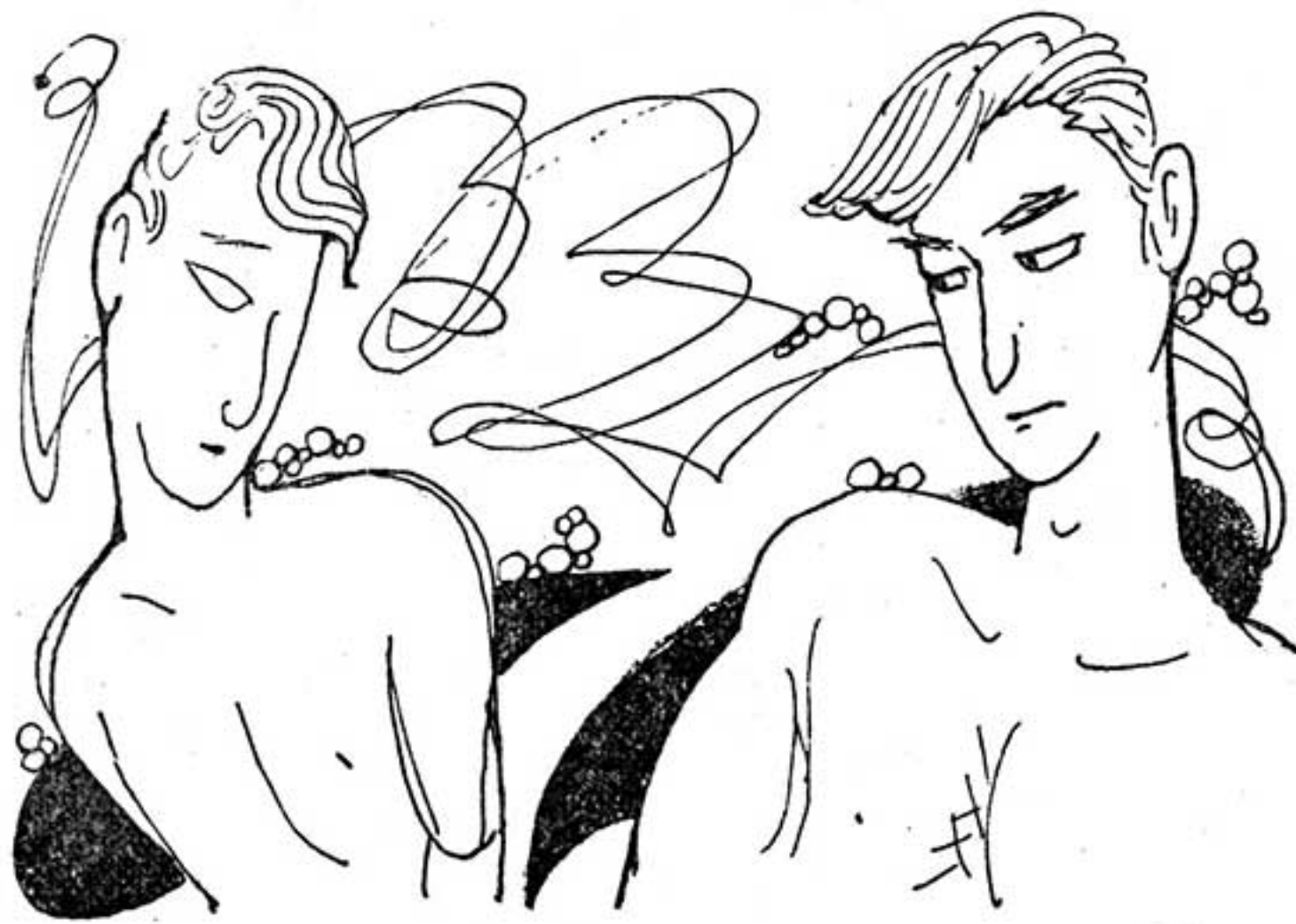
僕の仕事についてお知らせすることになります。僕は料理人です、朝七時半から夜は九時ごろまで、立ちづめで働らいているのです。それはすごく忙しいですよ、仕事はいやではないのですが、時々どうしてこんなに辛いのだろうと思うことがあります。兄さんの手紙いつもポケットに入れていて、そんな時にはそっと上から押さえてみるのです。それで兄さんの肌の温かみに触れたような気がしてくるのです。今の僕は兄さんを知る前の僕と、まるで別人のように幸福です。底知れぬ悩みの世界から、張り切った歓びの世界へと僕の人生は変わってきたからです。秋に入って結婚シーズン、僕の働くO会館でも毎日婚礼があります。その前夜は鯛を焼くのですが、多い時には百三十、百五十枚も焼くのです。その鯛を水で洗うのが辛いのです、鯛の骨は硬いので指先を突くのです。その傷だらけの手で塩をつかんで鯛にふりかけのですが、これがとても痛くて思わず大声で叫び出したくな



るほど。いつもそんな時は夜中の一時、二時にもなっていました。

同僚が一人います。まだ二十一ですが、それは美男子で、歌舞伎の岩井半四郎タイプです。ところが不思議に彼に対してはセックスを感じないのです、体も筋肉が隆々とした男性美で逞しい、一緒に風呂にも入るし一つ部屋で寝る。それなのに彼に対して何の欲望も感じないのです、結局一点の非の打ち所がないのが不満なのでしょう。仕事では彼の方が先輩なので僕が教えてもらうのです、それで僕の心にブレーキが掛けられるのかも知れません。困るのは同室なので兄さんの便りを見られはしないか？ 僕の書いているのをのぞかれないだろうかという心配です。兄さんを知る機縁となった雑誌は、彼が買って来たので、その点は出雲の神様で感謝しています。あの雑誌の文通欄の兄さんの箇所は破っておきました。ちょっと神経質過ぎるでしょうか？。彼には年上の恋人がいるのでよく外出します、一人きりになった夜が一番恐ろしい、さびしさや欲望や幻影が、一度に押寄せて来るからです。このごろになってやっと一人でも落着けるようになって来たのです。も

ちろん兄さんを知ることが心に安らぎをもたらしたのです。僕は兄さんとお逢いするまでどうしても純潔でいたいと思うのです。荒れ



狂う欲情も兄さんとの一夜の歓びのために、押さえつけ大切にしたいと思っているのです。兄さんとは写真でお目に掛っているだ

け。でもいつも写真の兄さんの、腕にも胸にも頬にも熱い唇を触れています。深々と兄さんの胸の中に抱かれて、今まで可哀想だった僕の心も慰さめられ、夢の世界、天国へと運ばれて行くのです。その時の歓喜を思うだけで、悲しみ？ 欲び？ どちらともはつきり分らないけれど、僕の長い間の胸のつかえはほとばしるように溢れ出るでしょう。

O 会館はY川のほとりにあります。仕事が終わってから、川のほとりをよく散歩します。行き交う人たちはほとんどアベックで歩いています。でも一人で歩いている僕は心の中で「僕だって二人連れなんだぞ」と叫んでいるのです。誰もが知らない得がたい恋人と二人ですものね。異性同志のアベックより、遙かに清潔で気高い……僕はいつもそう思っているのですが……。

神様は男と女というものをお作りになり、二人が力を合わせて正常な人間になれるようにとされた、始めは一つであったものを、無理に二つにされたために、互いに探し求めるのだともいわれます。僕もそうあるべく生れ出た人間です。昔一身であったはずの片方を必死に探し求め探しあぐねました。誰に話す



こともできず、いつも一人ぼっちでした。よくある孤独を楽しむというのは根本的に違います。僕には心を許し合える分身が必要であつたのですから。だから僕は兄さんを得て己の分身を今ここに見出した思いで、兄さんにお逢いする日のことを思うと泣けそうで泣けそうで、胸が一ぱいになるのです。きっと十日までに逢えます、面倒かも知れませんがきっと返事を下さい。女の泣言みたいでいやですが、返事がくるまで不安で不安でたまらないのです。もしかしたら？という捨てられないかも知れないという不安、初めからいたずらだったという不安、笑い者になったという自嘲。でも僕が女姉妹の中で育つたからといって、決して女性的な心身の持主というばかりではありません。むしろ男らしいあつきりではあります。余りもの事にくよくよしない性質です。ただセックスだけはとことんまで追究し、自分でもそれをコントロール出来ない、全くどうにもならない性質だと思うのです。

兄さん！ どうして病気になんかなつたのです。それにこうして手紙を書きながら、激しい刺激は兄さんの体に悪いのではないかと気にしています。ほんとうに早く元気になつて下さい。写真にもう一度接吻します、この便り途中で同僚に邪魔され三度も中断しました、もっと書きたいのですが、何だかずいぶん長く書いたように思えます。仕事をしながらでも、今度の兄さんの便りをどんなのだろうと想像し、またどんな返事を書こうかと考えながらしています。だからといって仕事をおろそかにしているわけではありませんから。兄さんの出現で、僕の才能があらゆる時に躍動するような気がします。足音がきこえると文章の波が急にせき止められたようになります。又すぐ手紙を書きます。では写真にさよならをして――

追伸、手紙を書き終えた途端に、ふとまた他人になつてしまふような不安に襲われます。不安なのはやはり一度も逢っていないからですね、じかに手に触れ、耳にきいてみて互いを確かめあつていないからですね。休みになつてお訪ねしたら、どんな一日が送れますか？ プランがあつたら知らせて下さい。

兄さんのするように、僕はどんなことでもついでに行きます。その代り次には僕のするように兄さん自由になつて欲しいです。では何度でもさようなら！

(第三信)

彼は何か魅かれたようだった。今までの抑圧されていたものが、吐け口をみつけてどつと吐き出されてくる。私はその凄じさに圧倒される思いですらあつた。今の彼の目には私以外はまるで存在しないかのように、次々と粘りつくように胸の底のものを噴出する。彼から手紙が来る、私が返事を出す、又すぐに追つ掛けるように次の手紙が来るのだ。このことは、日附で読者もお気付であろうと思う。しかもその一便々々が、相当の長いもので内容も注目すべきものである。考えてみると彼の心中には、実に二十余年もの間の苦悩が押し詰められていたのに違いない。理性と教養が彼の内部に沸るこの妖しい血を、ここまで粘らせ凝結させていたのだ。ぎらぎらと油濃いような欲望が、内攻しどろどろに発酵したが如く、彼の醸し出す雰囲気は私を酔わせるのだった。

三十×年十一月三日 兄さん写真の返送を忘れしました。急いで急いで投函してしまつたからです、兄さんの返事が早く欲しいばかりに。いや正直なことをいうと、投函するま



でに気がついていたので、少しでも長く兄さんの写真を手許に置いていたかったのです。兄さん！僕は兄さんのすべて、すみからすみまでを愛します。兄さんにいわれることは何でもします、死ぬといわれれば死ぬかも知れません。セックスの欲びは死に値します。どれだけの犠牲を払おうと、兄さんを愛し抜きたいのです。今まで体は生きていても、心は死屍にひとしかった僕ですから。兄さんの出現がその僕の心に生命の息吹きを吹きこんでくれたのです。だから僕は兄さんのためなら何でもする決心です。

今日は仕事をしながら庖丁を落したり、順序を間違えたりして、同僚から今日は変だよといわれました。もちろん変なはずです、仕事の大失敗をしてもかまわない。一分でも一瞬でも、兄さんのことばかり考えているからです。兄さんのことが僕の頭から離れようとしな、僕の心がまだ見ぬ兄さんにこびりついたかのように、寸時も兄さんを忘れさせようとしなのです。兄さんの声を想像し、兄さんの肌を幻想していると、こうして仕事をしているのがたまらなく嫌になってきたのです。兄さんと逢ったなら、もう二日でも三日

でも離れないでいようと思います。

三日の休みを楽しみにしていたのに、とても忙しくて駄目らしいです、十日までにはちよっと休めそうにもありません。仕事の終わるのが大体九時、その九時過ぎからだったら翌朝の七時半までは僕の時間です。深夜お訪ねしてはいけないうか？もしそれでもよかったら明日にでも行きたいのですが。

僕はううと昔から日記を書き続けています。或る時期には毎日々々、同性に対する愛情の苦しみを繰返し書き綴ってきました。頁の隅から隅までが同性への思慕とその哀しみで満ちあふれていました。しかし一年程前から決心して、同性愛のことには一文字も触れないことにしました。独りだけで悶々としている僕を、そうした文字によって終世刻みつけているのが苦しかったのです。それはその書き連ねてある文字を見るだけで、僕の苦しみは更に倍になり三倍になることに気がついたからです。だから今持っている日記には一言も、この悩みには触れず書いていないのです。しかしこの誓いも兄さんを知ってから脆くも崩れ去ってしまいました、今は毎日日記を兄さんへの愛の言葉で埋め尽くしている

のです、いや兄さんのこと以外は書く気がしないのです。だから日記帳は兄さんの名が書き連ねてあるか、でなければ一文字も書かれぬ空白の頁です。何度でも何度でも兄さんへの便りを書く。日記の中でも、現実にも兄さんへの呼び掛けか、愛の告白ばかりなのです。

今日は到頭指の先をちよっと切ってしまつて、ペンがつかえると痛いので親指と中指に挟んで書いています。字が汚ないでしょうが我慢して下さいね、明日はきつと兄さんの便りが来ますね。待ち切れないほどの思いでいます。

(第四信)

お互いにまだ相手の姿を現実には見ていない。そのまだ見ぬということが更に思慕の情をかき立てるのである。彼の便りは一便ごとに熱烈になって来る。もちろん私も丁寧に返事を書く。彼は私としきりと逢いたがった。夜おそくでも大阪からやってくるというのである。だが九時半消灯という病院の規則、私は深夜は逢えないことを彼に連絡した。そして……私と彼は或る日逢うことになった。



# 心 仏 情 痴 者 恨 法 無 多

一生一度の恋だったが、無頼渡世の荒くれ男には  
清純な娘を傷つけることしかできなかった！



山田重義

古正英生・画

(一)

まあお聞きなすってくださいやし。あっし  
ほど身の因果に悩みに悩んだ男も、またこ  
の世にありますまい。

——それは忘れもしねえ、終戦直後のとあ  
る日のことでございやした——背には軍毛布  
に雨外套。それにわずかの米。ご他聞にもれ  
ぬ復員姿のあつしが、ゆくあてもなく、S 駅  
正面玄関の前の雑沓に、放心したように佇ん  
でおりやした。

あかじみた戦闘帽に巻脚絆。上等兵の階級  
章と、腰にゴボウ剣がねえほかは、まるで兵  
隊そのままの、着のみ着のままのカーキ色姿  
でございました。

「いく多の夫、弟、父を戦場にのたれ死にさ  
せ……いまだにその責任の元兇たるかの大元



帥天皇一家は、ぬくぬくと人民の餓死をよそに、たらふく米を食っておるのだ！」

赤い旗をおつ立てて、こんなぶったまげるような演説を、若い男が眼の色をかえて、どなっておりやす。しかしまだ拳銃もゆきとどいてねえポリ公たちは、これをこそそこそとさけて、てんで取り締ろうともいたしません。言論の自由、デモクラシイってえ、趣向でございましょう。

「……いまさら朕は人間だとほけ、さらに我々人民への弾圧をくわだてようとする。ここにおいて、我々人民は、働かせろ！ 食わせろ！ 家をくれッ！ と叫ばずして……」などとすげえ気合が入っておりやす。あつしは背の包みを地べたにおろし、しばしは憑かれたように、聞きはれていやした。と、次の刹那、あつしはハッとして、その場によるめき、色を失って、とまどいやした。荷物を盗まれたのです。

「へエ——注意が肝心だねえ……」  
「ここいらは、物騒だなあ……見事なもんだ」  
てなことを、弥次馬どもがもうしやす。かえってコソ泥棒の手際に感服しておりやす。これでは頼りになりません。

途方にくれてふらふらと歩きだし、ガード

の下あたりまで、あてもなくさまよっていったときでした。後を追ってきたらしい人の気配が、突然ボンと肩をたたいてきて、

「お兄さん……気の毒だったなあ。どうだ、なに、これといった身寄りもねえ。それは可哀そうだ。えッ、本所の友達をだつて……冗談じゃアねえ。あそこはまるまる焼け野原だ。金輪際さがしても無駄だ。まアついてきな。悪いようにはしねえさ……なにか頼みごとはあるかよ」

とやわらかい言葉を、かけてくれやした。こういう時ですから、人の情はぐっと身に泌みてきやす。見ればジャンパーにハンチング、当時としては、どえらくなりふりのととのつた野郎が、アメリカ煙草をポケットから出し、ぴんと底をはじいて、一本すすめてくれやす。ボツと一寸も焰のあがる、ジュポというライターで火をくれるなど——すべてがあつしの肝をうばいやした。

「……へえありがとうございやす……まずはなにか食いてえです。それから働く口がほしい……住む家もねえ始末で……へエ」

あつしも欲です。みえ外聞もなく、いま赤旗の野郎のどなっていた、そのままのことを申しやした。

「ふふふッ……まアまかせておきな。まかせて話にさええのれば、その上に打つも抱くもしてえほうだいに、させてやらあ」

「えッ、ほ、本当ですか。お願いですッ！ たのみやす……ほれ、こ、この通りでさあ」

あつしは地獄で仏に会ったように、手を合せて拝みやした。

この妙にやさしい親切な男が「雨降の秀公」ではございやすした。

## (二)

「……遠慮は無用だ。……どんどんやってくれ。ばかに暑そうだぜ……服をぬいだらどうだ。ぞんぶん、くつろいでくん」

U 駅から A 町のほうにいった、とある焼け跡のトントン木端葺の小屋で、こうせいなすき焼のご馳走にあずかりやした。醤油も牛肉もふんだんです。当時としては、まさに夢心地の食い物です。封瓶を出してきて、ザラザラと結晶になったモンサントのサッカリンを手の平にあけ、汁の甘味をつけてくれやす。あつしは寒い晩なのに、鼻のあたりに汗をかいて、ガツガツと食いつきやした。まるで飢えた野良犬です。



「……少ねえが、当座の小遣いにとつとき」

こういって、まだ例の新円五百円生活時代にもならねえ頃だったのに、百円札でバラバラッと、数えもしねえで握らせてきやす。あつしの手が、ぶるツと震えやした。

「案ずることはねえ。今夜はほんのちょいと手伝ってくればいい……おめえさんは、軍隊のほうは、長かったのかね。そうかい、じやあこれの使い方は、教えずともわかるだろうな」

ぐつと油紙にくるんだまま、投げ出してみせたのは、スピンドル油の香も強い、真新しい拾四年式拳銃でした。

「憲兵隊の流れ品だ。弾はふんだんにある……相手はどさくさに儲けやがった、隠匿物資の闇野郎だ。察にとどけ出られる、話じゃねえ……心配しないで、ひいては国のためとやってくんな」

「……へエ今後ともよろしく……ご指導ください」

妙な挨拶の通しようですが、いやおうなしです。すぐその夜半から、飛行ジャンパーもまじえた、強盗一家「雨降」の凄みのきいた連中と、人気のと絶えた、夜中の町々をトラックですつ飛ばしました。目標は深川の菊川

町の木場に近い、焼ッ原の廃墟のような、黒黒と聳えたった倉庫でした。生ゴム、ケーブル線などが、ねらいでした。その夜の合言葉は「御意見……」「……無用」と決りやした。「静かにしやがれッ！」

まずはガタガタ震えている守衛を、銅の電線でゆわきやした。いま一人に、日本刀をつきつけて案内させ、扉をぶち破って、物資をトラックに積み込みやす。と、その時でした！ 守衛の奴が非常ベルをおしたらしく、闇の中にガヤガヤと人声がし、応援の人手がライトを点して、足速にかけてきやした。

「やッ！ズラかれッ！は、はやくしろいッ」

秀がこう叫んで、トラックにエンジンをかけさせやした。あつしは恐怖のあまり、「どけどけッ！、あぶねえぞッ」

と叫びざま、仁王立ちになって、矢庭に先頭の人影に一発——拾四年式をぶッ放しやした。うまく太股を貫通し、相手はどうと地に倒れやした。

——かくてその夜半から、人目を避け、めいめい別に、ほとぼりのさめるまでズラカリやした。あつしはおもに、A町の遊廓で泊り

やした。軍隊以来、女に飢えていたからです。遊廓といっても、終戦直後のそれは、今日では、想像もつかぬ無惨なありさまでした。

米軍指定の「赤十字」のマーク看板の下った接收区域と、ジャパンボーイ相手の区域が完全に分離してありました。A町のは、ジャパンボーイオンリーなので、まだ復興直後だったので、トントンバラックの十数畳敷の小屋が、軒を並べて建っている、荒涼たるものでした。

「さアこっちよ！踏まないように、注意しきなさいナ！」

こんなことを言って、女郎が客の手を引き真っ暗やみの中を案内し、女の床へつれてゆきやす。女も、一軒に二人は、まだモンペ姿の衰れなのもいました——すさまじいしはなしですが、当時は、仕切りもない十数畳の部屋の、まるで莫座みたいな畳の上に、いくつも布団が敷きつ放してあったものです。

うっかり立って歩こうものなら、他人様ご両人を、もろに踏んづけてしまう始末でした——まれには最中に、MPがなかば好奇心から闖入してきて、

「ヘイ、スケベボーイサン……タクサン関係ナイスネ！」



などとただたどしい日本語でどなって、強い懐中電燈の光芒で、布団ごとに丹念に照しつけていったります。頭をかくすと、ことさらに掛け布団をめくろうとします。止むを得ぬので、二つ頭をならべて、へへへッと照れかくしの愛想笑いを浮べたり、

「サンキュー、ベリーマツチ」

なんぞと、けったいな札をのべたりしたものです。すると散々なぶってから、

「ノーアメリカンG Iネ！ OK」

といって、ジープで帰ってゆきやす。

衛生上、米兵が泊り込む違反を取り締まっているわけなのですが、ずい分と日本人を、馬鹿にしきった話ではございやした——あっしは金ばなれがよかったので、相手のチヨ子という女郎は、芋あんと玉蜀黍粉のふかし饅頭を、そっと手探りに食わせてくれたりしました。

こうした所は、当時日本の警官は、人権尊重とやらで寄りつきにくかったので、身をひそめるには、恰好の場所でした。

### (三)

——あの頃の強盗は、徒党をくんだ大がかりなのが多く「アリラン一家」「流れ星一家」

などと、三国人をもまじえ、猖獗をきわめたものでした。ままだ進駐軍MPのお助けをたのまぬと、強盗団のほうで、日本の警察より火力がまさっている勢いでした。

あっし等「雨降一家」は、次第に栃木、群

馬、茨城などと、近県に手をのばし始めやした。

なにしろ農家は、一尺祭りといい、野菜や米の闇ブームで、札が一尺たまることに祝をやる俄景気でした。





しかも大百姓の土蔵には、いまだに頼まれた大手筋の疎開荷物、隠匿物資などが、つまっている。俗に「土蔵破」というやつです。トラックで日本刀にピストル——拳銃などはこれを上野の地下道なんぞで、賃貸する稼業さえあったほどでした。一襲いして、夜ふけまでに県外へ逃かる。まだ国警と自治警察に分離したばかりで、てんで連絡が悪く、検挙（あけ）られずの大仕事が、したいほうだいに来たものです。

あつしはあの夜以来、なにかというとおどし役にまわされがちでした。実は気の小さいあつしなのですが、こうなると小心者の無茶が、人こそ殺めませんが、たいした貫録となつて、仲間をおさえはじめやした。ついには「ほれッ！もたもたすると、命がねえぞッ」などといって、のっけから一発、ズバン威嚇の銃を、ぶち込むようにさえなりやした——こうしているうちに、伝公が伝次、つぎには伝さん、ついには伝兄貴、伝親分と、いつしか年功序列があがり、いままで親分格だった秀公までが、

「……伝さん、新橋に待合ができたつてよ。ひとつ遊びにいつてみよう。みんな行きたがつて……どうだろうね、大丈夫かね」

なんぞと、あつしの意見を先にたてるようになってきやした。その頃、日本犯罪史空前といわれた三国系の「アリラン一家」が、どこかで芸者をあげ、座布団の下に三寸も札束を積み重ね、

「ほれ、金あるヨ……どんどん酒もてこい！ボク等はC I D極東情報部よナ……金なんぞ億万タントあるヨ……いい芸者あれば内地ツマラン！アメリカ旅行つれテテやるよナ」

などと彼等独特の、誇大得意の絶頂となり座敷の天井にドンとブローニングをぶち込んだりして、馬鹿な景気をつけたことから、ついに一斉検挙となつたばかりだったので、こんな遊び場所を心配したわけです。

こうした儲（もろ）であつしは米軍相手の土産店を横浜ではじめ、絹の振り袖やハンカチーフさては富士山の刺繍の入った寝巻なんぞを、真珠の首飾などと売（ばい）しはじめました。

また立川の空軍部隊の近くに、パン助をおいたキャバレーをおいて、アキ子という深川の芸者あがりの女をマダムにし、G Iの軍票をかせいでP Xで物資を入れ、二倍に近い値で、横流ししたりしやした。

こうして金はある、一応は事業もはじめる

で、我が生涯、空前のときを迎えやした——ところが、不思議と、人間こうなつてくると妙に素人の娘（むすめ）などに、えらい惚れ込みを覚えたりするものです。

「なあ伝さん！ おめえさん、あの駅前（えきまえ）の煙草屋の娘にきつい惚れっぶりらしいな……かくしても駄目だぞ。もうこれで三度も、おめえさんがあの店の娘に、ボーッとして見とれているのを、ちゃんとこの眼でみたからね」

「じよ、冗談じゃねえ。あんな小娘に、なんでこの俺が惚れるかよ……笑わさないでくん」

こう秀公に答えながらも、内心ギクツとしたあつしでした。事実、そのボツテリ頬の赤い、まるでその頃はやり出した歌の文句のようにな小娘に——ぞっこんの恋心を抱いておりやした。名はナミ子と申しやした。

「あんた……本当なの……あんなうぶにあたしをさしおいて、乳くりたがるなんて、ほんとに浮気もんだよッ」

大年増のアキ子が、ブンブンいつてつむじをまげやす。

「ふん、いい加減にしろい。そんな若気がありやア……もうとうに、てめえなんぞとは別



れてらい」

てなことをいいながら、とうとう立川からさして遠くない府中の、暗闇祭の夜に、散々のんだスチンリイという、アメ公のウィスキイの酒酔<sup>キスブル</sup>がたたって、そのナミ子のあとを、執拗につけてゆき、府中街道ぞいの芋畠のさ中で呼びとめやした。

「やいナミちゃん！　じ、じたばたするねえ……うんと可愛がってやらあ！」

といいさま、畠に無理やりに引きずりこみました。

「キヤーツ」

とわめいて逃げてゆく後ろ姿に、あっしはハッと我に返り、激しい悔を覚えやした。

街道には、近くの村の若い衆らしい、黒い人影もありましたが、さいわい恐れてか、助けにはきませんでした。

——しかしながら、ああこれが、あっしの因果な生涯の、呪わしき宿命の刹那となってしまうたのでした。

#### (四)

——その後十日ばかりして、さすがのあっしも気がとがめるので、そしらぬ顔でナミ子の煙草屋をのぞいてみると、意外や店内がが

らんとしており、てんで人影ありません。

隣りの外食券食堂で聞いてみると、引越したとのことでした。あっしはハッとしやした。年老いた母親と、たった二人ぐらしのよし。すると近くの中華料理屋の好意で、安く借りていた店を、ろくに行方も知らせず夜逃げ同様に引越して行ったとあっては、まことに意味あり気な話です。当時はまだ配給判だった店の、せっかくの煙草の登録実績さえすてて、商売まで止めてしまったわけです。

おそらくは、娘が土地の何者かにわるさをされた恐怖から、もしもの笑い者になるのを慮かって、知らぬ他国にのがれ去ったものでしょう——酔の上とは申せ、さぞ生涯の苦悩を娘に与えたらうと、鬼ならぬ身のアっしは胸がはり裂ける思いでした。

ああ何十万の金を積んでも、この償いはしてえものと、神妙な考えを抱きやした。だがこうなつては後の祭。可愛いいうぶな娘と、年甲斐もなく惚れていただけに、このあと味の悪さはひとしおでした。

「なあ伝さん……だいぶ元気がねえな。ははア、さてはあの煙草屋の娘がどっかへ消えたんでしょげているな」

「ふ、ふさけるねえ！　そ、そんなことを二

度とぬかすと、いくらおめえでも、ただではおかねえぞッ」

ニヤ笑いをうかべ、こう囁いてきた秀の言葉に、カッとして胸ぐらを掴み、いまにも殴りそうな剣幕を示したりしやした。秀はあまりのあっしの興奮ぶりにたまげてか、再びあの娘のことは言わなくなりやした。

——あっしはやけになり、酒をやり始めやした。てあたり次第にのむので、メチルウィスキイのにせ物「アイデアル」をやり、危うく眼が潰れかかったことさえありやす。

その挙句に、ある晩しがねえ駅前マーケットを、建てるつくらねえの地上権にからんだ争がこじれ、日本刀で土地の与太公に、瀕死の重傷を負わす、喧嘩をしてしまいやした。

しかもぐてぐてに酔って、大声に、  
「畜生ッ！　この俺のつらに泥を塗りやがったな……ぶった切ってやるんだ！」

と大通りでわめいて、拔身の尺六寸三分の脇差をきらめかし、相手の家に飛び込んだことなどから、十分殺意あつてのことと、判定され、たちまち嚴重な身柄送検となつてしまいやした。

しかも運の悪いことに、あっしの店を家宅捜査され、米軍の軍票や衣類、毛布、さては



GIにそつと土産に売りつけるための、無許可証明の日本刀が、あの脇差のほかに、四本も発見されてしまひやした。

「……なんというこつた。連合軍より銃砲刀剣類不法所持は、ボツダム宣言受諾ニヨリテ生ズル政令、によりとくに取り締られている違反行為だッ……貴様、どうしてこんなものを、隠しやがったんだッ」

と、警察の旦那の心証を、こつびどく悪化してしまひやした——かくて、その与太公の経過がおもわしくなく、とうとう病院で死んだことから、殺人罪の刑務所送りとなつてしまひやした。

——それは重犯の入る、千葉市はずれの刑務所でした。戦後の混雑に、四人ぎゅうぎゅうづめの独房で、久しく娑婆との連絡を、完全に遮断されてしまひやした。

こうなると人間なんて、薄情なものです。昔の仲間はずんで面会にもやってきやせんもつともあつしが手荒くやった強盗のほうでは、奇蹟的にも容疑をうけなかったので、下手に会いにきたりして、もしものかわりになることを、恐れた意味もあつたようです。ここで意外に真面目にやり、あつしのまわされた「木工作业」の能率もよかつたので、

すぐ二級囚になることができやした。

——かくて四年目の春のある夕刻、囚人達のせめてもの楽しみである入浴時間に、看守に引率されて浴場に入ったあつしは、前列に並んでいる、ひよろつとした男の姿に、おもわずおお！ と、驚愕の声をあげかかりやした。

相手もまた、疑ぐるような視線をむけてから、パチッとあわてて眼くばせし、看守に気づかれぬかと、あたりをうかがいもとの姿勢に、もどりやした——その男が、なんと「雨降一家」時代の、まぎれもない秀の姿では、あつたのです。

これ以来——奴の西舎とあつしの東舎の囚人の、合同使役のあるときには、つとめて志願して、しのび話しの機会をつくりやした。

奴はその後の倉庫荒しで、とうとう検挙られてしまったのでした。もちろん以前の犯罪についてはお互にその仲を極秘にしやした。「……なあ伝さん。おどろいちゃいけねえぜ。おめえさんは、いつか煙草屋の娘に、関係をかけたことがあつたなア……」

「え、ど、どうして知ってるんだッ」  
「へへへッ……そう大声をたてなさんな。ちやんと知ってらあな。じつはたしか暗闇祭の

晩に、酒酔したおめえさんが、あの娘のあとを蛇みてえに、執念ぶかくついてゆくのにでつくわしたんだ……こりゃあ面白い見物と思つてついてゆくと、暗い街道の両側畠のところで、うまくチョイで楽しみやがったね」

「そ、そうか、おめえ見ていたのか」

「だがよ、あんまりあの娘のことをいうと、おめえの勘気にふれるんで、あの頃は遠慮して黙っていたサ……まあ驚くのはまだ早いぜなんでも噂じゃあ、あの娘はどこかに引越してから、すぐ餓鬼を生みやがったとき。月足らずの難産で……でも育っているそうだ。おい、そう驚くない……どうやら日の頃から考えておめえさんの餓鬼らしい様子なんだぜ」  
「ほ、ほんとうかッ？ でどうしてそんな子を……あ、あの娘は生みやがった！」

「おいおい気にさわったかい。こりゃア罪なことを言った……だが金輪際嘘いつわりはねえ……なんでもあの娘の婆アが、えらい信心をしていて、なにはともあれ、仏様のさずかりものだといって、墮胎手術なんぞは、させなんだそうだ」

聞いているうちに、あつしの瞳に、はらはらと熱い涙が湧いてきやした。相手の反応の激しさに驚いて、秀がなにか言い加えようと





したとき、  
「やいやいなにをさぼっとるッ……作業をやらんかッ……おッ……十九号、なにを泣いてるんだ。えッ」

と看守が近寄ってきて、尋ねやした。

「いや、ご、ごみが入りやしてね。こいつに  
とってもらおうと、していたところで……」  
なんとか弁解し、あっしはよろよろと立ち  
上り、手の平で頬を拭いやした。

ああなんという、因果な宿命でございやし

よう！ あっしを親とも知らぬ、あっしの伴  
が、しかもあのナミ子という母に育てられて  
この世のどこかにいるというのです。さぞあ  
の女も子供も、肩身がせまかろうと——その  
日から夜ごと夜ごとに、己の咎の深さに、転  
転悶える日がつづきやした。

### (五)

——いかに殺人犯とは申せ、どだいが喧嘩  
の上のあやまち。それに初犯でもあり、意外  
に成績もよかったので、恩赦その他で次第に  
減刑され、どうやら娑婆の空気を、吸うこと  
ができました。

保釈の手続のために、保証人としてあの土  
産店や、立川のキャバレーに連絡をつけて頂  
きやすと、あのアキ子は、もしもの場合の為  
に店の名儀が女にしてあったを幸い、とうに  
売り払って、逃げておりやした。ひどい女も  
あったものです。

もうこの世には、まるで一文無しのオケラ  
になって、しまいやした。

拇印をおして戒護課長から僅かな金と、入  
獄当時の季節はずれの服を受け取り、出迎え  
人もないままに、カッと晴れ渡った娑婆の通  
りに、あてもなく、出てゆきやした。



まるで世間が変貌しているのには、驚くばかりでした。

まずは千葉駅前の飲み屋で、おでんで一杯きゅーツと出獄祝の焼酎を手酌いたしやした。腸にしみ渡るようで、たちまちいい心地に酔がまわりやす。

「やい姐さん。エゲツねえ尋ねですまねえが……どっかここいらに、お安くコレのできることは、ないかよ」

あつしは店の女に、手で恰好をしてみせてあつちのほうのある場所を聞きました。

酔うにつけ、久しい抑制からくる、激しいうずきを覚えたからです。

「まアいや……知らないわッ！」

ぽつと赤くなって視線を向けて困ったように、親爺にすけ太刀をもとめやした。

「……へへへッ……そうですね。省線で船橋までゆくと、ずっと海岸よりに『三田浜遊廓』ってえのがあります……モロに安いですぜ。

もっと遠くじゃア『パレス』がいいでしょう変ってて面白い……まあごゆっくりお楽しみください。二百円だせば、ホールでダンスもできます。そのダンサーの誰とでもいい趣向でしてね。そうですね『パレス』にしないさい……」

「ダンスなんてえ、洒落たものはできねえがね」

「そんなことかまいせんよ……店の方から当番の女がホールに出向いているだけです……まあ実際見学して、ご覧なさい。そりゃア女の粒がそろっていまさア」

「ほう……親爺さん、だいぶ学だね」

「あらいやッ！ お父さん本当なのッ」  
娘がキツト睨みやした。親爺は頭をかいてさもこまり顔になりやした。

——その夜あつしは「パレス」へ教えられたとおりに出て、戦時中工場の寮を改造したおなじ細長い棟が七ツ並んだ、「第一棟」とよぶ建物の廊下をギシギシと歩み、その廊下づたいの一軒の店で、すごく太った女を買うことに決めやした。これぐらいのでない、何年越の鬱憤晴らしは、できないと思ったからです。

「……そうね、もう遅いから、お泊りで千二百円でいいワ……サービスするわよッ」

「げッ、千、二百だとッ」  
あつしは驚きやした。あつし等一級囚の、三月分ぐれえの料金ではありませんか。物価のうつり変りに、肝を潰したのです。

——相手が呆れるほど、しつこく遊んでか

ら、一棟ずつ共同になっている。完備した洗淨室に、店のサンダルを借りて入ったあつしは、前でジャージャーかがんで洗ってから、すつくと立ち上った一人の女と、視線を合わせ、

「おやッ！」

「あらッ……なつかしい人ねえッ」

と、互に妙な場所で、またまた妙なところでの妖しい再会に、あきれやした——なんとその女が、かつて「雨降一家」に入ったとき、しばしばA町のトントン葺の遊廓で泊った、あの玉蜀黍粉と芋あんの饅頭を食わせてくれた、昔馴染のあのチヨ子だったのです。

「あたしも年になって、さっぱり駄目なの……まあお客さんが帰ったから、もう遅いし、お金はいらないから、いらっしやいな」

こういわれて、奇遇をよろこんでその女の部屋へ、一晚やつかいになって、語り明かしやした。

「そう……ずい分苦労したのね。どこの世界にも、いいことなんてないのね……あたしもずい分つらかったのヨ、お互に幸福になりましたヨ……じゃア、まず家を探さなくては……そうだワ、まだ明いてるかしら……一昨日みたけど、あたしの両国のおばさんの家の



近くに、貸間の貼り紙がしてあったワ」

こうして不思議な縁で、チヨ子に地図を書いてもらいました。翌日両国へ省線で出て、隅田川ぞいのごみごみした露路をゆき、その小さな二階建の、しもた家の玄関で、ガラリ戸を引いたあっしは、

「どなたですか……」  
といって出てきた、エプロン姿の女を見て愕然とその場に、身を屈めました。

ああなんたること！ その女が、ここいく年の獄舎の中で夢に見つ現に詫びつづけて苦悶し、悩みになやんだ、あのナミ子——その人ではありませんか！ あっしは重ね重ねの奇蹟におののいて、よろよろッとその玄関に戸も開け放しのまま、かがみ込んでしまいやした。

## (六)

——お聞きなさって、くださいやし。こうした意外なナミ子との再会に、さいわいにもナミ子はあっしに気づかず、  
「ど、どうなさいましたッ……苦しいんですかッ」

と三和土に飛びおりてきて、介抱しようとしやした。

「あ、ありがとうございます……なあに、ちよっと乗物にいいやしてね」

「そうですか……少し横におなりになってはいかがです……お医者さんを、呼びましょうか」

心配して、コップの水をくれたり、濡れ手拭をつくったりしやした。やや落ちつきをとり戻し、それでも視線を合わせられぬままに訪れた理由に困って、貸間を見にきたことを申しやした。

「さあどうぞ……お上り下さい。もう主人も帰りますから」

「いや、ま、またあらためて……」

あわてて出ようとする、ちよとがらと戸を明け、ナミ子の亭主が入ってきた。もう駄目です。あっしは胸の動悸をおさえて、その地味な紺の背広姿の、小柄な人のやさそうな人物に挨拶しやした。

「……二階をお貸ししたいのです。日当りはよいと思いますが、なにしろ畳がひどくて……子供が穢してしまったんで」

近くの小学校の先生だというその人が、こう言って笑ったとき、

「お父ちゃん。紙芝居がきたヨ！」

と叫びざま、二坪もない庭のほうから、元

気のいい男の子が、犬の子のように走り上つてきやした。あっしはスーッと、血の気の引く想いでした。ナミ子の主人は、それを抱きとめて、

「大きな声しちゃ駄目。赤ン坊が起きるよ」といいきかせやした。ウンと黙りこくったその瞳に、あっしは俺の子だッ！という激しい確信と、万感胸にせまるものを、覚えやした。もうどうしてよいか、気が狂いたちそうな刹那でした。

「……どこの小父さん」

不思議そうに見つめてきやす。腸をしぼられる想いでした。

「この小父さんはね、山田伝次さんといって……今日からお二階にくる方だよ。よく遊んでいただきなよ。嫌がられないようにしなさい」

——人の運命は、わからぬものです。この言葉が、あっしを静めさせ、この家にどうしても世話になろうという、切な願いを湧きたせました。人さまなみに、姓も名も正直に告げたとおり、呼んでもらうのも久しぶりです。いい心地なものでした。

ナミ子の主人は、まったくの好人物でした人を疑ぐることを知らぬ、家庭大事な、学



校の教員には、うってつけの人柄でした。

婆さんは二年前に、死んだそうです。そして、どんな事情あつて結ばれたかわかりませんが、また聞くよしもありませんが、完全にあの子を、自分の伴として可愛がり、育ててい

ました。

「あなた……山田さんがきょう、英雄を寝るまで、抱いて下さったんですの」  
内職にしている、家庭教師をして、夜おそく帰ってきた主人に、ナミ子がこうあつしのことを、告げているのが聞えたりしやす——  
こうしている内に、あつしの魂は、洗われたようになつてゆきやした。新聞広告でみて、刑務所で覚えた木工の工員の職をえらび、水天宮近くの工場に、勤めだすことにも、なりやした。

「ほら英雄ちゃん……おみやげだぞッ」

こういつて、工場の余り材料で電車などの玩具をつくり、持って帰ってやったりします。またナミ子、いや奥さんには、焚きつけの束を運んで上げたりしやした。

家人の一員のように、お金だけはきめて、食事をともにし、弁当もつくってもらいやした——もう嫉妬といった、やましい気持などは毛頭ない、ただ幸福な、安心しきった生活

でした。こうしてこの家に厄介になつて、英雄からいい小父ちゃん、好きな小父ちゃんて生涯をおわれれば、もう本望だと思つていやした。

——然し人間の幸福は、そう限りなくは続くものではございやせん。とうとう呪わしい宿命のあの日が、あつしの前に、悪魔のように、しのび寄つてきやした。

それはちやうど、勤め先の工場の給料日でした。なにか菓子でも土産にとおもひ、それに吊しの服でも見ようかと思つて、浅草行の都電に乗ろうとした時でした。

「おい伝さん……久しぶりだなア」

と、ボンと肩をたたく者がありやす。振向いてみると、おおあの秀の野郎が、うす笑いを浮べて、佇んでいやした！ しかもその後ろには顔見知りの「雨降一家」の一味だった奴等が、三人までも立っていやした。あつしは古傷にさわられたように、ギクリとしやした。

「ずい分と探したぜ……へへッ……伝さんあいかわらず、ご執心じゃアねえか。あの娘の家に下宿たア……呆れたり、うらやんだりさ」

「な、なにをッ」

「おっと、待ってくんねえ……まアゆっくり話そう……時間はとらさねえさ」

隅田川にそつた、暗い空地に引き込んで、誘いかけたその話は——どうだひとつ、また昔の仲間で、手荒い儲ぎをやろうじゃないか。それにはどうしても伝さんの力がある。仲間の頭にたつてはくれまいか——との内容のものでした。あつしは断固として、つっぱねやした。

「いやだ……もうおめえらとは、一生縁を切つてくらす覚悟だ」

「おうそうかい……ふふッ、どこかの木工所の職工をしてな。まあいいさ……それでおめえはすむだろう。だがな！ よくも俺達の顔にひでえ泥をぬりやがったなッ……よしッ覚えていろよッ。いいか、貴様の家の近所きんぺんに、あの餓鬼の素性を、散々いいふらしで、住めなくしてやらあナ」

「な、なにッ！」

あつしは忽ち逆上し、抱えていた荷物から木工用の大鑿を出して握りしめやした。

「……ふッ、あの小学校の先生の子は、飛んだ前科者の落し種だとな」

「や、野郎、吐かしたなッ」



あつしは火の玉のようになって、闇の秀の姿に、猛然と襲いかかりやした！ 次の刹那ぶすり秀の脾腹をついて——あつい血のしたたりがあつしの袖口に、つたってきやした。「うッ、で、伝公ッ」

うめき、喘ぎ、どうと地に崩れやした。あとの連中は、もう肝を奪われ、

「た、たすけてくれッ」

などともわめいて、手を合わせている奴さえいやした。かつてのあつしの無鉄砲さを知っているだけに、すごい凄みがきいたわけだ。

「いいか、てめえらも早くズラかれッ……二度とこの俺に、迷惑をかけるなよッ。もしふざけやがると、この伝公たとえ死んでも……その怨みだけは、晴らしてやるぞ！」

こうとなりつけ、上衣と兇器を黒い隅田川の面に投げ、無我夢中でこの土地をあとにしやした。その途中、よほどたった一目でも、英雄や、あのご夫婦に、別れの挨拶をしたいと思いやしたが、かなわぬことです——もし万が一にでも、あの大恩ある家の名にかかわってとは思ったからでした。

お客さんがた。こうしてあつしは、ご存知

二月号は

——十二月二十三日発売予定——

### 裏窓遊俠伝特集号

です。御期待ください！



の今の堀切弥五郎親分の盃をいただき、身内の数に加えさしていただきやした。どうか今

夜の身の上話は、全部お忘れになって、花札なぞお遊びになって下さいやし。



# あしのうら源内



## 岬 洋之助

秋 吉 巒・画

私は本名を太郎林源内というのだが、世間では私のことを「あしのうら源内」というあだ名で呼んでいる。そのあだ名の由来については、後で説明するが、そんなあだ名が巷間に流布しているのを知った時、私は思わず苦笑してしまった。

「あしのうら——か。俺もえらく、さがってしまったものだな」と思った。

あだ名だけではない。ある日、私が盛り場をあるいていると、辻のところに人だかりがしている。何か高札が立っていて、人々はそれに見入りながらさかんに何か噂し合っているのだ。

「何だろう」

と、思っでちかづき、人々の肩越しにその高札を見上げて私はおどろいた。なんと、それは私の絵姿だったのである。

「おやおや、何時のまにか、俺も有名になったものだな」

私は、なんだかくすぐったいような気持ちになった。さて、その絵姿はと見ると、おさだまりの覆面黒装束で、背中に大刀をしょって、



# 特集 藏臣忠容懷特

忍者のような

恰好をしている。さし

あたり人相書というわけだが、

これでは人相書にはなっていない。しかし、

その風態は、ある程度「ほんもの」に似てい

る。私は押入った先で、めったに人に見られ

ることはないのだが、たまには「仕事」の途

中を目をさまされて、相手を縛り

あげたりすることもあるし、また

武家屋敷に入って発見され、宿直

の武士と斬りむすんだあげくに逃

げてきたりしたこともあるので、

この絵姿はそうした目撃者の印象

をもとにしてつくられたものだろ

う。

「人相書なんて、あてにならんも

んだな」

私はそう思った。第一、絵姿の

私は、ひどく男前で、まるで芝居



恋鬼

の中にでてくる色男の盗賊みたいだ。事実、

私のすぐ前に立って、その絵姿を見上げてい

る二人づれの町家のおんなが、

「あら、ちょっといい男じゃないの」

などと話し合っている。その女たちは、ま

さかその絵姿の本人が、すぐうしろに立って

いるとは知らないだろう。私は、そのおんな

たちの肩をぽんと叩いて、

「おねえさん私があしのうら源内ですよ」

と言ってやりたいような誘惑にかられた。

それほど、高札の前にむらがる人々のあい

だにはなんとなく和やかな気分が流れている

のだ。まるで芝居の絵看板でも眺めているい

ろと評定し合っているようなぐあいである。

どうやら私は、自分が英雄とまではいかない

までも、一種の人気者みたいな存在になって

いるのに気がついた。それを物語るような例

が、ほかにもあった。ある時街をあるいてい

ると、子供が二人、棒切れをもって斬り合い

の真似をしていたが、その中の一人が、

「おれはあしのうら源内だぞ」

と言って、見得を切っている。これには苦

笑させられたものだ。私のやっていることな

ど、子供の領分にはないものだが、子供はそ

んなことはおかまいなしに「あしのうら源内」

という有名？な名前をひきあいだすことで

へんな満足をおぼえるのだろう。とにかく、

賊などというものは、襲われた本人には、迷

惑千万な存在にちがいないが、関係のない人

たちは、一種の興味をもってそれを眺めるの

だろう。さしあたり、芝居の観客といったと

ころだ。

私が世間でへんに有名になり、絵姿にまで

なつて大勢の人の目にさらされ、しかもへん

な人気みたいなものでまで生じかけているのを

知ると、私の心には、もしまえのいたずらッ

気が、むくむくと起ってきた。前よりもいっ

寝乱れた女のまっ白い足の裏に、妖しくも墨くろくぐとへのへのもへじが踊っていた！



そう自分を絵姿に似せ、そして、いかにもそれらしくふるまいたいと思うようになった。人気というものに対する、一種の迎合である。その人気というものが、ただちに首の座につながっていることを思うと、それ恐ろしい気がしないでもないが、どのみち、私はもう踏切ってしまったのだ。

「畳の上で往生できる身ではないのだ。いずれは三尺高い木の空で、あかんべえをしてやろう」

そう、達観していると言ってはウソになる。

もつとなまなましく、生に執着があつて、さいげんもない野望に心をやかれている私なのだが、心の片隅のどこかに「三尺高い木の空」を、意識していないとは言えない。まわりくどい言い方だが、首の座におもむく心の準備が、何時でもひきだせるような——そうした心づもりだけは、腹にかまえているつもりだった。私だって、好んで盗賊になったわけではない。世が世なら——つまり、武芸一本で出世を夢みることが可能であるような時代に生れ合せていたとしたら、私だって、せいぜい、主君に忠義をはげんだか知れない。しかし、ながいながい泰平の世では、そんな出世の機会など、千に一つもなかったし、ことに

私のような吹けばとぶような身分の者など、一生あくせくと下積みで終る以外はなかっただろう。それでも、もし「あのこと」が、なかったら、私は一生のあいだ田舎侍として平凡に終わったかも知れない。しかし、私は、将来を契った最愛の女性に、身分ひくきゆえにそむき去られたのだった。ிரை、私は、はげしい劣等感のとりことなつた。そして、その救いのない宿命から脱け出そうと、サイコロでもふる気で江戸へ出てきたのだ。もう、あれから七年にもなる。

江戸に出てきた当座は西も東もわからなかつた田舎侍の私が、いまでは「あしのうら源内」などと源氏名で呼ばれる大泥棒になつて、高いところに絵姿まで掲げられようというのだから、人間なんてわからない。

「どうせ、こうなれば……」

とことんまでやるだけだ、何喰わぬ顔で群衆にまじつて高札を見上げている私の心の中には、一種の空恐ろしさと、怪奇な満足感としびれるような野望の入りまじつた、複雑な渦がまいてゐるのだった。

## 2

さて、いよいよ「あしのうら源内」という

あだ名の由来を語らねばならない破目になつたようだ。あれはたしか、根岸にある、ある豪商の妾の家に押入つた時のことだと思ふ。

私は盗るのが目的だから、できるだけ事を隠密にはこんで、人に危害を加えたりするとはさけるようにしていた。その時も、一仕事終つて、

「これでよし」

引あげにかかつた。はじめ侵入してきた箇所に戻るためには、どうしてももう一度、寢室を通らなければならなかつた。その晩はちやうど旦那の来ている晩で、宵の疲れもあつてか、うすぐらい灯りをともしたまま、二人のねむりは深かつた。

入つてきた時は、

「さあ、これからいよいよ仕事だ」

という緊張があつたので、ぬき足さし足、ふたりの寝息を窺いながら、その部屋を通りぬけるのがやつとだったが、帰る時は、もう九分通り仕事が成就しているという安心で、いくらか、心にゆとりがあつた。私は用心ぶかく、足音を忍ばせながら、その寢室にさしかかる。

聞というのは、なまめかしいものだ。女の



と、男のと——寝息が高く、ひくく、もつれあうように交互にきこえている。その寝息のぐあいから推しても、ねむりは依然として深いのだ。烈しく愛し合つて、みちたりて、そうしてねむっているふたりの寝顔は、神々しいほどやすらかだった。

その気持よさそうな寝息にさそわれるように、私は部屋のなかほどで、ふと足をとめて女の寝顔を見下した。女は、黒いうるし塗りに金蒔絵を散らした高い箱枕にかかる頭をのせ、形のいい唇を心もちひらくようにして、微動もせず寝息を立てている。囲われの身とよく訓練され、たしなみが深いので、寝姿を乱すというようなことは、絶えてあるまいと思われた。そうした女の寝顔をじっと見下しながら、われしらず、あわれふかいものをおぼえるのである。私はなおも、時のたつのをわすれて、女の寝顔をむさぼりつづけた。ふたりのしずかな寝息のほかは、時おり、じじーと燈芯が燃える音がするだけで、夜はしずかにしずかにふけていく。

私は用心ぶかく——すこし、からだを動かした。女の寝顔に、このままは立去りがたい風趣をおぼえ、もっとよく観察したいと思つたのだ。観察してどうするというのはない。

いわば、そのうつくしいものをよく見きわめ、心のどこかにやきつけておきたいというほどの、あわい願ひからだった。

よくみると、女は思ったより若くて、まだ十八か十九ぐらいと思われた。血のおさまつた寝顔のひたいのあたりが、青白いまでに透き通っている。まつ毛が、深い嚙をおとしていた。すこしひらいた唇から、きれいな歯のぞけて見えてチカリと光っているのが、高貴な玉のように見える。鼻腔のあたりも、彫つたようにあざやかなのだ。そこから、匂うような、かわいいいちいさな寝息がもれているのだった。なにか、ちいさい魔法の袋でもあって、その寝息を採集してもちかえることができたらいいだろうな、と思う。おそらく、このとき、私の目からは、一種の恍惚とした光りの条がはなたれ、女の唇のあたりにむすばれていたにちがいない。そして、なんの恐れもはじらいもなく、しずかに寝息を立てている美女と、その枕元に塑像のように突っ立って見下している兎々（まがまが）しい黒装束の男の対象は、世にも不思議なものではなかったか。

へんな話だが、私はこうした場合、黒装束で突っ立っている自分をもふくめ、この聞ぜ

んたいのけしきを一つの絵図と按じて、自分の頭の中で眺めて見るようなクセがあった。この時もそうだった。すると、得体のしれないよろこびが、足もとのほうから全身を逆につきあげていった。美女の祭壇を私は人知れず、その当の相手にさえ知られず、土足で踏みにじって立っているのだ。そうすることでおんなは私に恥かしめられていたのだ。これにまさるはずかしめがあろうか。私は恍惚となり、よろめきかける足を踏みしめて立っていた。そしてそのきわまりで思わずしゃがみこむと、じっと息を殺して女の顔をのぞきこんだ。私は甘い女の呼吸を嗅ぎ、そして、ひとすじ、ふたすじ乱れている女の髪の毛が、私の頬をくすぐる感触を、いとおしいもののようにたのしんだ。その時、私の手は無意識のあいだに女の髪挿しはのび、それを抜きとっていた。

女は、相変らず微動もしないし、その寝息を乱すことさえなかった。

「さらばよ」

抜きとった髪挿しを口に咥え、女の顔にもう一度、限らない哀別の視線を投げた後、私は立上って、また、そろそろと部屋の出口のほうへちかづきかけたのである。



部屋を出ようとする時、私はもう一度ふりかえった。見残した、うつくしい景色をもう一度ゆっくりと眺めなおそうとするように――。夜着の襟に、なかば埋れた、女のちいさな瓜ざね顔がみえる。何度見ても、いとしなものだった。が、その時、私はもうひとつの別なものを発見して、思わずはっと目をみはった。

その夜の空気が、あまりあたたかすぎたせいであろうか。たしなみふかい女にも似合わず、夜着の裾がすこしまくれて、そこから白いちいさな、女の片足がのぞいていたのだった。もえるような紅絹うらの夜着からのぞいているその足の、妖しいまでの白さは、私をくらくらするような眩惑のなかに誘いこんでしまった。それは、世にも珍奇な宝物のようであり、まったくべつな、独立した、ひとつのいきものようだった。私はふらふらとちかづくと、その足のところにひざまづいた。それはまったく、跪拝したくなるほど、気だかいかがやきを放っているように見えたのである。

私は啞えていた髪挿しを、右手で短刀のようには逆手にもつと、上体をかがめて顔をちかづけ、おそるおそる女の足のうらに、唇をふ

れた。女は相変らず、身動きもしない。それが私をだんだん大胆にした。唇をふれているだけでは満足できなくなって、舌を出すと、その踵のあたりを少しねぶってみた。女の足のうらに、一種のえもいわれぬ味と香りがあることを、私ははじめて発見した。もっと大胆に、ねぶってねぶって、ねぶりつくしてやりたかった。しかし、そう荒々しくもならぬので、細心の注意で、ゆっくり舌を土踏まずのあたりに移動させてゆく。

びっくりと女の足の指が動いたようだ。私ははっと首をすくめ、女の寝息を窺った。寝息はちょっとしたあいだ途ぎれたが、すぐもとの調子に復した。つづいて、足の指が二三回びくびくと同じようなけいれんを反覆した。舌にくすぐられて、その皮膚だけが目さましているのだ。

「なんという、おもしろいものだ。これは！」私は、わくわくする衝動をおさえることができない。それが私を大胆にした。ちよつとねぶっては亀の子のように首をひっこめて様子を見すましてはまたねぶりにかった。犬のように大きく舌をだし、のったりのったりねぶりあげる動作をくりかえしているうちに、舌のつけ根は酔い痴れたように

しびれ、下あごのあたりは、みずからの唾液でぬらぬらとぬめってきいていた。最後に、やや思いきって、やわらかい土踏まずのあたりをひとねぶりしたとき女の足が、ゆびを烈しくそらせたり曲げたりする動きを二三回くり返したかと思うと、スルリと音もなく夜着の奥へひっこんでしまったのである。

私はまだ酔い痴れたように、舌に残る感覚を味っていたが、ふと、その美しい足を、もっともつと潰し、辱かしめてやりたいような残忍な衝動がむらむらとこみあげてきたのである。人間は、衝動のしもべとなった時とんでもないことを思いつくものだ。かたわらの机の上に、硯と筆がおいであるのを見た時、「そうだ！」

一つのことを思いついて、私はほとんどよろこびのこえをあげるところだった。筆をとった私は、それに墨汁をたっぶりふくませ、細心の注意で、夜着の裾をまくった。足は、夜着のなかのおくふかいところに、脅えたようにちいさくなってかくれていた。

「見つけたぞ。こいつめ！」

頬のあたりが、ひとりでにゆるんでくるのをこらえながら、私は、夜着の裾から忍びこむ空気が女のねむりをさまたさないように気を



# 特集 裏窓忠臣藏

つけながら、仕事にとりかかった。

とっさの思いつきで、女の足のうらに、へのへのもへじをかきつけたのである。へのへのもへじが、こつちを向いて笑っているように見えた。まっしろい女の足のうらにかかれたへのへのもへじ。それは世にも珍奇な眺めだった。美は損なわれ、潰されたのだ。私はつきあげるよろこびの衝動をこらえながら、夜着の裾に平ぐものようにうずくまって、くつくつくとの奥をならしつづけた。それ

れが、やみつきだった。それからというもの、私は、どこかの家に忍びこむ時は、必ず腰に矢立を携行した。

「千人のおんなの足のうらに、千のへのへのもへじをかいてやるのだ」

それが私の誓いだった。「あしのうら源内」の名前のいわれは、これでわかっていただけると思う。

## 3

私のもう一つのたのしみは、闇に忍び入った時は必ず何かひとつ

その闇を思いだすよすがとなるものを盗んで帰ってくるということだった。女の髪挿しでもいい。また少し大きなものでは、香炉のよななものもよかったが、やはり持ち運びの便から言って、髪挿しのような、ちいさなものが好ましかった。それを、自分の覆面の頭のところに刺しいたっていると、なんとも言えないなまめかしい気分になる。盗賊としては、これでもずいぶん風流気のあるほうかも知れない。

そうした所業をかさねるうちに、私はだんだん病いが昂じてきて、一風変わったところに忍びこむのをよしとするようになっていた。遊びにあきた通人たちが、かげまや比丘尼に極道を見出だすような心理が、盗人にもはたらくものだ。

いつかなぞ、男子禁制の尼院に忍びこんだことがある。そこでの戦利品が、例の張型だったから笑わせる。剃髪し、行いすました顔をしている墨染の尼僧たちが、張型に用があるとは！ いや、そうした墨染の身であるからこそ、かえって張型に用がある。と言えるかもしれない。

そこでも、例によって「へのへのもへじ」を書きつけて帰ってきたことはもちろんだ。

これは、

「あしのうら源内、ここにまかり通ったぞ」という旗じるしだ。あとで、それと気がついた当の尼僧が、さらに張型の失せていることも知って、青くなつてうろたえる様子が目に見えるようだ。私はいつまでも、笑いがとまらなかった。

また、私は殺生はきらいな方だが、うかうかとやってしまったことが、後でとんだ罪つくりになった、こんな例もある。

やはり、ある商家のおかみなのだが、常日頃、貞淑のはまれたかい女だった。それが亭主が商用で上方に旅をしているあいだ、若い番頭と不義をした。その当の現場に私が踏みこんでしまったのだから、皮肉なものだ。

私は、その女が貞節で評判のたかい女だということを聞き知っていたし、亭主が旅に出て不在であることも知っていた。それだものだから、不義の現場を見て、

「なあんだ」

と思つてしまった。これが、噂にたかい貞女の中味かと思ひ、あいた口がふさがらない。おまけに、夫婦気取りで、いけしやあしやあと闇を共にするとは！

「よし、それなら考えがある」



私はいつもとはいくらか趣向を変え、妻女のあしのうらに、例の「へのへのもへじ」をかいたほかに、いい気でねむっている番頭の眼のまわりに、メガネのようなまるい輪をかき、さらに鼻の下にヒゲをかいてやった。

そして、

「不義する者にいましめあらん。なんじの足のうらを見よ。源内」

墨くろくろと半紙にしたため、壁にはりつけておいたものだ。あくる朝、目をさました二人が、あれを見、これを発見してあわてふためくありさまが、目に見えるようだ。だがこれはどうもクスリがききすぎたらしい。どこから洩れたか、一件が瓦版にまでなつて江戸市中につたわり、番頭はどことなく姿をくらましてしまふし、妻女は毒をあおいで自決するという騒ぎになった。不義はにくいがそういう結末になると、

「少し、やりすぎたかなあ」

さすがに、後味のわるいものがあつた。

そんなことがあつたり何かして、私は町家荒しにいくらかいや気がさしていた。もっと刺戟のつよいことが欲しくなつていたのであるかも知れない。そこで、將軍様のお城となるとちよつと手が出ないが、大名屋敷くらいを荒し

てやろうと考へた。いろいろ、その内部のフハイ墮落している話をきいていたので、そんなところなら、やりがいがあると思つた。

五代將軍綱吉の治下で、ながい泰平がつづいて、人心の頽廢はその極に達している。老中の柳沢出羽守あたりが、奢侈禁令を出したりして、人心のひきしめに躍起となつてゐるのだが、なかなか成果は上らない。むろん、きびしい罰則を以つてのぞんでゐるので、表むきには、そう派手なことをする者もいなくなつたが、いわゆる面従服背で、一步、公儀の目の及ばないところでは、それこそ輪をかけて頽廢がほしいままにされてゐるのだ。お膝元の柳營だつて例外ではない。大名屋敷なども御多聞にもれずである。三味線が武士の膝にのつてゐるほうが似つかわしいという御時世だ。

「よし、こいつをひとつ、ひっくりかえしてやろう」

と私は思つた。

#### 4

少し大きな邸に忍び込もうとする前には、私はその家の間取りや、家人の動静などをあらかじめ偵察することにしていた。ここでは

じめて「もう一人の私」が登場するわけなのだが、じつは私は余五市という名前で、流しの按摩をやつてゐる。だから、余五市以外の人物、つまりあしのうら源内である時でも、頭はクリクリ坊主なのだが、覆面をしてゐるので、誰もその頭を見た者はない。あしのうら源内が坊主頭なのを知つてゐる者は、本人以外にこの地上に一人もないわけである。むろん、めくらの按摩として、正体を見破られずに行動するためには、少なからぬ訓練がある。私はこのために、三年ちかい日子をついやしてゐる。

「江戸一番の、いや日本一の大泥棒になつてやろう」

と決意した瞬間から、その構想は私の中に巣喰つてゐた。だから、三年ちかい日子をついやして、按摩の修業をしたのは、泥棒を開業するための準備だつたのだ。私には、こうした、ちよつと人に真似のできない辛抱づよいところがある。そして、

「これで、よし」

というところまで、漕ぎつけた。ほんものの按摩で通るためには、揉み療治だけではダメだ。ほんもののメクラであることが必要だつた。実をいうと、このほうが骨が折れた。





めあきのくせに、めくらの真似をするのはな  
みたいでないことではない。いや、私のはめ  
くらの真似ではなくて、余五市であるあいだ  
は、ほんもののめくらになり切ることであった。  
はじめのうちは、ずいぶん失敗した。物にぶ  
つかって傷だらけになったり、冬のさい中に  
河へおちたりした。しかし、おそろしいもの  
で、そんな苦勞をしているうちに、だんだん

盲人としての勘が発達してきたのである。  
そこで、杖をついて、盛り場に出てみる。  
たどたどしい足どりでゆくものだから、  
「ああ、盲人だな」  
と、人かよけてくれる。しかし、ひ  
どい人ごみになると、そうばかりはいかない。  
つい、人かぶつかる。  
「やい、氣をつけろ！」

と怒鳴られる。が、怒鳴った相手も、私が  
盲人だと氣がついて、  
「なんだ。めくらか」  
ですむ。困るのは、まだ勘のはたらきが十  
分でないで、何か物をよけようと思うと、  
その方に氣を取られて、他への注意が留守  
になることだった。いつかなど、そのでんで  
茶店の中に踏みこんでしまい、二三人の人が  
床几で茶をのんでいるまん中に、のめりこん  
でしまった。

湯のみがひっくりかえって茶がこぼれた。  
子供づれだったと見えて子供が泣き出した。  
相手の人は、こっちが盲いた人だと氣がつい  
て、怒りもならず、  
「かんの悪い按摩さんだなあ」

と、苦りきっている。こんな場合、度を失  
ってつい目をあいてしまいうるようになるのだ  
があいてしまったら百年目だ。そこを、目をあ  
かないで、盲人の感覚でやり通す。ここいら  
が、偽めくら修業の、いちばんむずかしいと  
ころだろう。しかし、私はとうとうそれをや  
り通したのだ。これは、我ながら大したこと  
だと思っている。こうしてやしなった勘とい  
うものは、本職である泥棒の方にも、大いに  
役に立った。暗がりで行動する上に、大いに



都合のいいことは、言うまでもないが、どうかすると、視力のたすけを借りるよりも盲人の勘をはたらかせた方が、対象をはつきりつかめることがある。目にも見えないような、かすかな現象とか、迷路のようなところをぐるぐる迂回して、まったく方位の感覚がなくなった場合、じつと眼を閉じていると、心眼に映ずるように、おのずとそれがわかつてくるのだ。風の動きとか物の匂い、音、声——そうしたものに對する感覚は、針先のようにするどくなっていた。

むろん、按摩になり切ることが目的ではなくて、目的は偵察というところにあるのだから、かんじんなところでは、人知れずうす目をひらいて、たしかめてみる。が、いよいよとならなければ、それをやらない。どこかの家の座敷に呼ばれて入ったとする。その時、はじめから目を使うと、

「ははあ、あすこに長火鉢があるな」

ということが判ってしまうから、今度は目をつぶっていても、自然とそれをよける方向へ足が動いて、盲人としての行動がウソになるし、また勘もにぶってくるのだった。

こう説明すると、いかにもたいへんな修業のようだが、大変であることは事実であると

しても、盲人をよそおうことの底に、何かに言えない、妖しいたのしみがあることは否めなかった。

若い女など、あまり按摩には用がないのだが、年増の後家などになると、気うつを散じためだろうか、あながいに揉み療治を好むものが多い。

「あんまさん」

と呼びこまれてから、いよいよ座敷に通されて療治にかかるまでのあいだ、

「この女は、どんな顔をしているのだろう。」

この家の中の様子は、どんな風なのだろう」と

ということ、盲人の勘で、いろいろと考

えてみる。からだつきは、手を触れてみれば

これはいちばんよくわかる。肉づきのぐあい

など、目あきが着物を距てて眺めたよりはる

かによくわかる。臓器のおさまりぐあいから

からだの調子、年令——熟練した盲人の指先

をごま化せるものはひとつもない。その、か

らだの欲するものまで、敏感に指先は感じと

ってしまうのだ。声だとか、言葉つきなどで

ある程度、容貌、性格などもわかった。しか

し、その感覚には、やっぱり限りがあった。

もうすこしというところで、ハッキリした見

象のつかめないもどかしさがあった。ハッキ

リつかんだと思っても、それは妄想が描き出すまぼろしのようなもので、実体ではないのだ。中年からの盲人なら、声質とか言葉つきそれから肉づきのぐあいなど、盲人の感覚でとらえることのできる肉体的な特長を、いろいろと組合せて、

「この女は、きつとこんな顔をしているんだな」

その時、頭の中に浮んでくる像というものは、かつて、目あきの時に見たことのあるどの女かの像にかぎられている。それが、限界なのだ。ところが、私にはもうひとつ、「見える世界」があたえられているのだ。

盲人として推しはかたいろいろなことをいざ、そーっと目をひらいてたしかめて見る瞬間の、胸がドキドキするようなたのしさ。

うすく、目をひらいたその瞬のあいだから、光やいろんな色彩や、そして物音までもがに

わかにいっきとしてなだれこんできた。そしていままで、あれこれと推測した当の女

が、ハッキリと鮮やかな映像をもってそこに横たわっているのだった。その時の、全身の

血がいつべんにあたらしくなるような感じはこの世のものとも思われなくらいだった。

しかも、相手は、こちらがほんとうの盲人



# 藏臣忠容集

と思いきっているのだ。盲人という仮面の下から、自由に相手を観察する。あざむいてやるよろこびだ。その甘美さに、私は溺れはじめていた。

## 5

ある晩、それはもうその年も終りにちかい十二月はじめの、あるさむい晩のことだった。私は本所松坂町の、吉良上野介の邸のちかくをあるいていた。夜はふかく、凍ったような

月が枯木の梢にかかっている。あたりは人っ子一人通る気配はない。しんと霜の下りる気配で、私の吹き鳴らす笛の音さえ、凍りつくようなさむさだ。私は吉良のやしきの長い堀が、月光に黒々とした影を落してつづいている淋しい道を、とほとほとあるいていた。

そのころ、町には、ひとつの噂さが、ながれていた。主家をうしなつた浅野家の浪人たちが、江戸に潜入して、亡君の仇を報ずるべく、吉良のやしきを窺っていると

いうのだ。  
按摩などという商売は、人の寝

しずまった深い深い夜のしじまの中に稼ぎ場をもとめるようなものだから、ずいぶんと、人の知らない秘密の一端に触れることもあるし、時には思いもかけぬ出来ごとにあうこともある。

「吉良さまのやしきは、伏魔殿のようなものだ。ちかごろ目つきのよくない、腕のたちそうな浪人者が大勢入りこんでいるようだし、昼でも夜でもバクチが開帳されていて、ずいぶんいかかわしい人間が、いろいろと出入りしているらしい」

という話を、私はすこし前からきいていた。明日を知らない命の、あらくれた浪人たちを飼っているの、風儀も乱れに乱れているらかった。それらは、赤穂の浪士たちにそなえて、狩りあつめられたもので、上杉家からの付人もまじっているのだという。一方出入の商人とか職人などの身上にも、きびしい詮索の目が光っていて、かりにも怪しいと思われるふしのある者は、その門を一步も入れないのだといわれていた。

しかし、この種の警戒には、えてして、当事者の思いもうけぬ、大きな隙間のあるのが常である。

「浅野の瘦浪人に何が出来る。一朝有事の際

にこそ、われわれの腕が、ものをいうのだ」  
狩りあつめられた浪人たちは、そう放言してはばからなかったというし、いわば用心棒という境涯にふさわしく、刹那的な気分が濃くながれていて、吉良側でも、かえって手をやくような事態が瀕発していたらしい。

「ふん。おもしろいな」  
そうした噂をきくにつけて、私は豁然と好奇心が湧いてきて、ひどく挑戦的な気分になっていた。赤穂の浪士など、どうでもいい。吉良邸に一度押入って、一泡ふかしてやりたかった。泰平の武士たちは腰ぬけぞろいだ。強いて危地をもとめるとすれば、現在の吉良邸のようところしかない。私は刺戟に飢えていた。もうひとつは、そうしたきびしい警戒の吉良邸を侵犯すること、あつと大向うをわかつてみたい気持もあったのだ。

例によって、私は偵察にかかっていた。くる夜もくる夜も、根気よくそのやしきの附近を、笛を鳴らして、流してあるいていた。その夜も、同じ目的をもって、その邸の長い堀の下を、笛を吹き鳴らしながら歩いていたのだ。

私は、盲人の触角をふりまわしながら、ゆつくりゆつくりした足どりで、吉良邸の長い



長い塀の、その一つの角にさしかかっていた。疑われてはならないのだ。どこに目があるかわからない。かりそめにも、キヨロキヨロしたりはしなかった。

その時である。私をつつむ方六尺ほどの空気が、急に濃くゆれ動いたかと思うと、

「おっ」

というような、ひくい気合の音がきこえ、黒装束に身をかためた一個の影が、弾丸のよう、吉良邸の塀をこえて、道路の上にとび下りたのは――。

ほんのしばらくのあいだ、私は笛を鳴らす息を休めていたので、曲者は、塀の外に通行する者があることを、気がつかなかったらしい。

よほど慌てていたのでもあろうか。地面にとび下りるより早く、黒々とした塀の影に沿って、私のすすむ方向とは逆に、塀の角を折れ曲って走りかける。

「あ！」

と、思う間もなく、私はその黒い影と、まともにもぶつかって、どうと尻餅をついていた。曲者もおどろいたらしい。

「しまった！」

というように、無言で刀の柄に手をかける

と、ひくく腰をかがめて、闇をすかすようにこちらの様子を窺うようだったが、

「あ、これは粗忽を……」

尻餅をついたまま、うろたえている私を見て取ると、

「なあんだ！ めくらか」

というように、すうつと殺気の引く気配がこちらにも伝わってきた。そのまま、その黒い影は、一瞬、鋭い凝視を私に浴びせると踵をかえして、隼のように闇の彼方に走り去ってしまった。

私の心の中には、どす黒い疑惑の影がひろがった。

私の他に、――

吉良邸



歩先んじて、吉良邸を窺う奴がある。そやつは、いったい誰なのだ。

6

私はある夜、ついに吉良邸に侵入した。度の流し歩きも効がなく、呼び込まれることがなかったので、意を決して、直接偵察に赴いたのだ。

およその様子をつきとめるだけで他日の再来を期してもよし、利あらば、そのまま虎穴をきわめる決心でいた。



やはり、月のあかるい晩だった。あたりに  
人気のないのを見すました私は、かるく吉良  
邸の塀をのりこえた。音もなく邸内に下り立  
つと、黒々としめった夜気を、胸いっぱい  
吸いこむ。そうしておいて、

「さて」

と、四囲の見当をつけるのだ。だいたい、  
はじめて押入った邸でも、家の建て方という  
ものには、一定の法則があるので、およその  
見当はつく。私は、呼吸をはかって、そろり  
そろりと歩き出した。どのくらい時間が経っ  
たろう。私は侵入路をもとめて建物のまわり  
をいまわりすると、月のあかるい中庭に出た。  
それから、用心深く、茂みに身をひそめる。  
二十以上も間数があるらしい。なかなかの大  
邸宅である。そして、

「よし、あすこだ」

目星をつけて、侵入すべきところにちかづ  
く。その時だ。さっと空気が揺曳したかと思  
うと、建物の蔭から、黒い一つの影がとびだ  
してきた。

「あっ」

と思った。いつかの男だ。いつか、私が按  
摩姿で流している時、塀の上からとび下りて  
私につき当っていった男だ。よくよく縁があ



相手はそのまま、地  
面を蹴るようにして

「残念！」

と、うめいて、

「お主は——だ、誰だ」

「賊だ」

私は、ひややかに答えた。出会頭にぶつか  
ってから、この間、ほんの一瞬のでき事であ  
る。

母家のほうで、けたたましい足音と、人声  
がきこえた。

「方々、出会え！ 賊だ。庭へにげたらしい」  
と、さけんでいる。

その黒装束は、すでに誰かに発見され、度  
を失って逃げてくるところを、私にぶつかっ  
たらしい。うーん、と唸っていたが、死力を  
しほって呼吸をととのえると、夜目をすかし  
て、両目の玉がとび出るほど私を凝視してい  
たが、

「た、たのみがあるのだ。龍泉寺、はりぬき  
小路、源助店に、一国屋庄兵衛というものが  
おる。その男に、伝言をたのみたい！」

「龍泉寺、はりぬき小路、源助店、一国屋庄

「やっ」  
と虎跳しながら、抜打ちに一刀くれる。手  
応えがあった。われながら、驚くべき腕の冴  
えだ。  
「うーむ」  
と唸って、相手は倒れた。したかに、急所  
をなぎあげたらしい。



兵衛だな」

「そうだ。伝言は、乾の十六、それだけだ」

「乾の十六？」

「そうだ。それから、あしのうら源内。吉良邸で相果てたと……」

「なんだと？」

これはおどろいた。ここにもう一人、あしのうら源内がいる。これは、いったいどうしたわけだ。だが、それを詮索している暇はない。追手の声は、庭の隅々をたずねながら次第に近づいてくるのだ。男は、

「頼む。武士の情だ。早くにげてくれ。追手がくる！」

自らは、もう助からないと観念しているのだ。

私は、狐につままれたような気持のまま、その男に心を残しながらも、身をひるがえすと、ふたたび塀に向って駆け出した。

「あ、いたぞ。倒れている！」

背後で、追手の声がきこえた。

その次の日、私は黒装束の男に頼まれたように、一国屋庄兵衛なる男に、その伝言をとおけた。

私も、庄兵衛も、ごくかんたんに、要件だ

けを交したただけで、よけいな言葉は一つも話さなかった。ただ、その瞬間、強い光をはなつた庄兵衛の目の色だけが、深く私の印象に残った。そして、おどろいた事には、あの晩の黒装束が、ほんとうにあしのうら源内として、さらし首になったことだ。息のあるうちに捕われ、そこで、

「おれはあしのうらだ」

と、ことあげしたにちがいない。なんのため、私の名を騙ったか、それは一切謎だった。

私は、さらし首を見にいった。形相は変っているが、あの晩の男にちがいない。

「あしのうら源内が、さらし首になった」

人々は、さまざまな感慨をこめて、口々にささやき合っていた。まさに、あしのうら源内は、この地上から消えたのだ。

「ここに俺が死んでいる！」

私は、不思議な気持で、いつまでもその首を見上げていた。

それから七日ほどして、赤穂の浪士が、吉良邸に討入って、亡君の怨みを晴らした。泰平情弱の世を震撼させる大事件だった。江戸中はその噂でもちぎり、あしのうち源内の死を語る人はなくなった。それはもう完全に過

去の事件であり、過去の人物だった。そして偽源内の死と、討入事件を結びつけて考える者は、誰一人いなかった。

それからさらに三月ちかかった。こえて元禄十六年二月四日、水野、毛利、細川、松平の各家にお預けになっていた四十六人の赤穂浪士たちは、一斉に仕置された。年月のたつのは早かった。あれ以来、私は源内としての活動を、一斉停止していた。源内は抹殺されたのだ。その偶然の配合に順応して私は残る人生を、平凡な市民としてくらす気になっていたのだ。

早春のある日、私は自分の墓を詣りにいった。赤穂浪士の墓前に香華のたえるまがないのに比べると、源内の墓はひっそりしている。刑場のかたわらに、墓とは名ばかりに、ひっそりと立っている一基の木柱にすぎなかった。

私は、奇妙な感慨をもって、自分の墓、正確に言えば、自分の身代りに死んでいった男の墓にちかづいていった。意外にも一人の男が、墓標の前にぬかづいていた。

私のちかづく気配に、その男はふりむいた。二人の視線があった。

「やあ」



# 特集 蔵臣忠窓裏

「やあ、あなたは！」

それは一国屋庄兵衛だった。ちょうどいい機会だ。私は、庄兵衛に会ったのをいい機会に、混沌として解くべきすべもない謎の解明を、庄兵衛に求めようとした。庄兵衛は、じつと私の顔を見ていたが、

「もう話してもいい時期でしょう。それに、あなたには、あの晩、大切なお使いを果していただいたのですからね」

驚くべき事実が、庄兵衛の口からあきらかにされた。あの晩、あしのうら源内を名乗り、私の身代りにさらし首になった男は、やはり義士にっらなる、外廊の男の一人だったのだ。一国屋庄兵衛も、その一人であつたことは言うまでもない。

おそらく、あの男は、大石以下の浪士群に対する情報提供の任務をもつていく度か、吉良邸に潜入して内部の様子を偵察していたにちがいない。はじめて、扉からとび下りた晩もそうだ。そして、あの最後の晩は、情報の足りなかつた分を補足し、完全を期するため吉良邸に潜入してあしした結果

になったのだ。あしのうら源内の名を騙ったのは、赤穂浪士に連累があるのをくらすため、偽装だったのだろう。乾の十六、とは何か。だが、もうそれをきく必要はない。すべては過去のことだ。

話し終った一国屋庄兵衛は、しずかに私にたずねた。

「そうして、あなたはどなたですか。おさしつかえなかつたらきかして下さい」

「そうですね」

私はながいながい沈黙のすえ、庄兵衛の目を強く見つめながら言った。

「私は、あしのうら源内です。しかし、源内はもうこの世にいません。この通りです」

そう言って、かたわらの墓標を指した。

庄兵衛は、それで一切を了解したらしかった。

多くを語り合わなくても、二人の胸には、しみじみと通い合うものがあつた。それは、おたがいにも秘密をもつものの共感だった。

二人は、今後、おたがいに遠く好意を感じ合いながら、まったくゆかりのない路傍の人として生きてゆくだろう。

「墓でも掃除していつてやりましょう。詣る人もなくて、この男も可哀そうですね」

庄兵衛は、愛情にみちた調子で言った。

「どうぞ。お先に御引取り下さい」

「それでは！」

と私はかるく会釈して、

「お先に失礼させていただきます。どうか、お達者で！」

「あなたもお達者で……」

道には、早春の日ざしがいっばいに揺れていた。

少し行つたところでふりかえると、庄兵衛が私を見おくつていて、大きく手をふつた。

私もそれに答え、同じように手をふると思をかえしてまたあるきだした。

春のようにあたたかく、ひろやかな庄兵衛の視線を背中に感じながら。

(完)

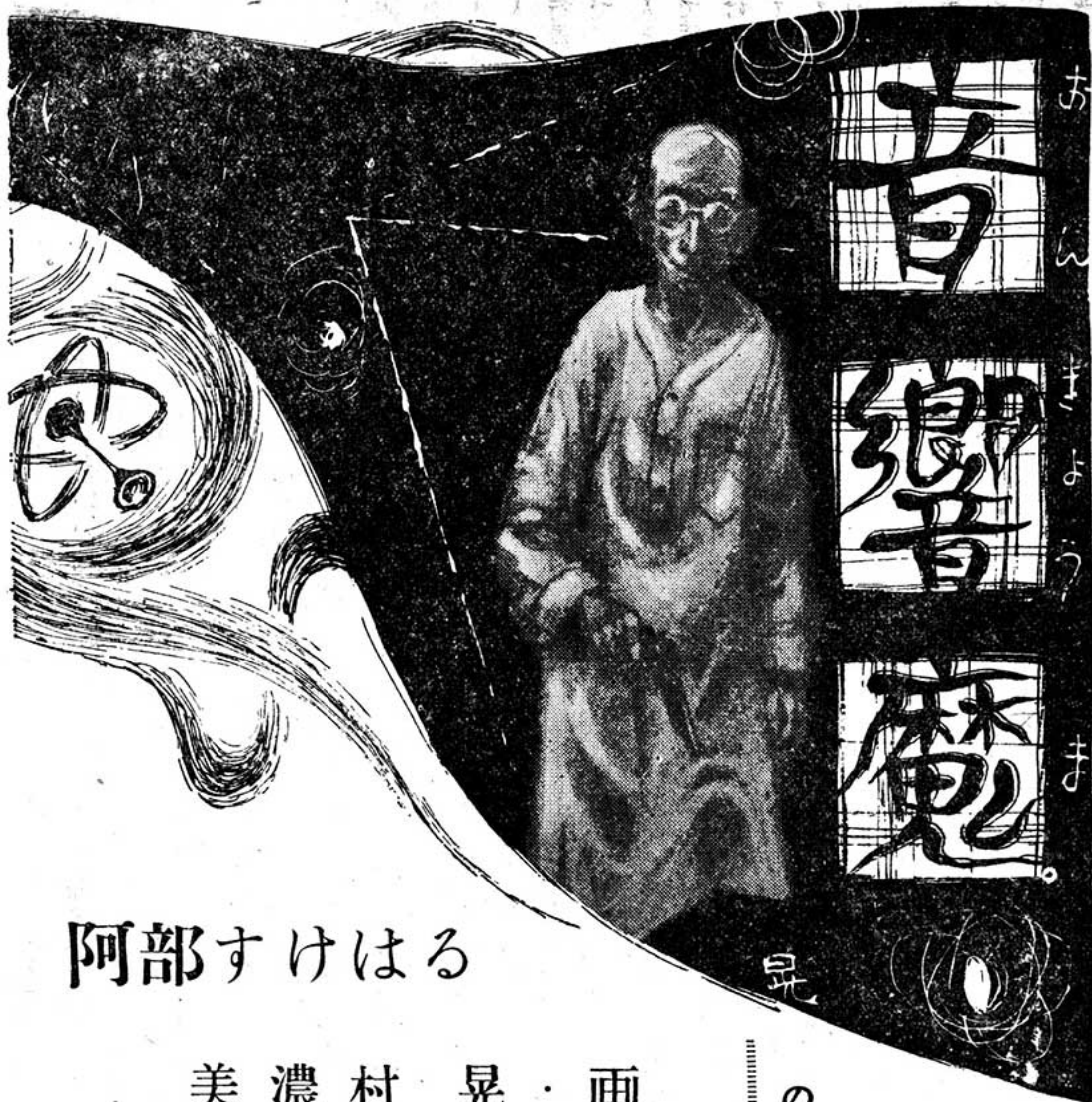
## 男性の悩みに

## 最新の福音

男性器発育不全に悩む方は郵券封入御手紙下さい。自宅に、居乍ら解消の良法スグ御知らせ致します。

兵庫県前ノ庄局区内本条・元祖井上





阿部すけはる

美濃村 晃・画

★あらゆる人間の脳細胞を狂  
わせる音子の奇妙な作用！  
不気味な波長にあやつられて、  
哀れな囚人は気が狂って行く  
のだ!! 音響魔の正体とは何か！

一月一日午前十三分

たった孤りぼっちになってしまった。そのくせ、わたくしのまわりには、ますます人がふえていく。いや、私のほうから、だんだん人ごみの中へ中へと歩いているのだ。もう新年になっていた。一九五七年をまわり終った地球が、あたらしい軌道を十三分だけ公転していた。

新宿という光のなかへ無数の蛾が吸いよせられては散って行く。今夜は、一晩じゅう電車がうごいているので、蛾どもは何となく落着いて、インバイ屋のまわりをうろついたり油じみた酒場の片隅にかたまって気焔をあげていた。

わたくしも、その蛾の一匹でしかなかった





が、

これでも、

じぶんでは、一

人前の男、勤勉な銀

行員、善良な都民のつもり

で、おなじような境遇の友だち五

人と銀座をふりだしに元旦の朝まで飲ん

で明かそうと、さつき十一時ごろ、そのとき

はまだ去年だったが、新宿まで北上して、さ

てどこに陣取ろうかと総勢六人、ふらふらし

ているうちに、ふっと、わたくしだけが一同

とはぐれてしまった。

ええい、どうでもいいや。俺は俺で勝手に

やるさ。豚の臓物を焼く煙と安焼酎の匂いが

むかつくように立ちこめている狭いマーケッ

トのあいだを通りぬけ、なんととはなしに駅の

改札の前へきて時計を見上げた。

「ほッ、もうお正月か」

ぞろぞろと蟻や蛾が出てくる、

入って行く。グロテスクな日本

髪のスメが、つめたい空気に顔

を赤くしてうれしそうに小走りに

駈ける。黒いオーバーや赤いマフラ

ー、青いズボンの米つきバツタのよ

うな若者、まるで酔っぱらった蝗のよ

うな学生の一団。わたくしのまわりに

人間どもが流れ、渦をまく。ただ、わた

くし一人だけが、数万羽の海猫のなかの

たった一羽の啞の鳥のように、ぼつんと酔

眼を都会の灯に、酔耳を騒音にさらしてい

た。

「あ、そうだ。あいづら、あの角の台湾料理

へ入ったんだ。引っ返してみよう」

ひとりごとを言った私は、いま通り抜けて

きた狭い通路、こったがえしの横町に戻って

いった。たしか、そのマーケットの奥のほう

で友だちを見失ったのだから、きつと、どこ

かの飲屋に入ったにちがいがなかった。どしん

と肥った女にぶつかった。白い割烹着のオバ

サンだった。

「あぶないわねエ、このひと」

よろよろとパチンコ屋の店先によろけた

「煙草あるかい？」

派手なジャンパーのポケットに両手をつッ

こんだ与太もんが顔をのぞきこんだ。

——どうも、だいぶ酔ってるらしいぞ。じぶ

んでは、しっかりしているつもりだが、われ

ながら正気のほどは怪しいわい。

わたくしの心のなかで、こう囁く声があっ

た。そこで、こんどは、誰にもぶつからない

ように、行儀よく一歩々々をしつかり踏みし

めてすすんだ。十字路へきた。ええと、さっ

きはどっちから来たっけ？ たしか、まッす

ぐ向うからだった。そのへんは焼とり屋やオ

デン屋など、いわゆる一杯屋がずらりと軒を

ならべている薄暗い露路だったが、そこを更

に奥へ奥へと歩いた。また十字路へ出た。こ

んどの十字路は、いやに暗くて狭い。足元に

ドブ板があってじめじめしている。

——おかしいな？

わたくしは、そんなところへは初めて来た

ので、首をかしげながら右へ曲った。突当っ

た。さかんに、女どもが呼びこむ。赤いセー

ターの胸が美事に盛りあがっている口の大き

な大根足の女が、しっかと私の腕をおさえて

彼女の店へ寄って行けという。

「ねえ、もう元旦じゃないの。飲みなおしま



しようよ。ね、一杯やって、いっしょに成田さんかどこかへ初詣りに行かない？」

「あ、いけない」

「なにがいけないのさ。さ、はやく」

「こうしちやいられないんだ」

いきなり女を突きとばして、わたくしは、もと来たほうへ駆けだした。

「ばかやろう！」

うしろで女が怒鳴ったのが聞えたが、そんなことはどうでもよい。栄子さんが待っている筈だ。暮の二十七日の御用納めの日に約束した。元旦の零時、つまり大晦日の十二時に明治神宮の第一鳥居の左の柱の下で会いましょう。それから二人いっしょに初詣をして、そのあとは貴方にまかせるわ。なんというロマンチックな逢曳だろう。それを、すっかり忘れてしまっていた。

わたしは懸命に駅の方角へ走った。そこらあたりの男や女にぶかった。白い矢を襟にさしている者もいた。しまった。遅れた。さぞかし彼女は怒っていることだろう。行ってしまったかな。こいつあ新年早々どえらいヘマをやらかした！

行けども、行けども、駅もなければ、自動車拾えるはずの大通にも出ない。

あいかわらずの狭い露路、小さな飲屋がどこまでも並び、女どもの呼びこみと客たちの騒ぎ声ばかり。

わたくしは慌てた。まるで八幡の簀知らずに迷いこんだように、あっちへ曲り、こっちへ走った。そのうち、ふと妙な一角に出て、思わずそこに立ちどまってしまった。

やけに森閑としている。いつのまにか、あのドブ板から汚水が飛ぶ横町はなくなつて、広くて清潔な道の両側に、まるで外国の町のような煉瓦造りの小じんまりした洒落れた建物が庭園を前に立ちならび、ガス燈らしい街燈が、ほんやりと、やわらかい光であたりを照らしていた。

——夢かな？

わたくしは、じぶんで拳固を一つ頭にくらわしてみた。

と、すぐ眼の前の家の入口に立っている一人の若い女が眼についた。

「あ、栄子さん」

わたくしは、思わず駆けよって、まず遅れたことを謝まろうとしたが、彼女は、いつものとおりにこにこと笑っていて、

「待ってたわ。でも、いいの。さ、はやくお入りなさいな」

手をとって階段を上り、厚い玄関の扉を肩で押して引っぱりこんだ。

わたくしは、狐につままれたように眼をパチクリさせながら部屋に一步はいった。

どこからともなくオルゴールの音がきこえ規則たたくカッ、カッというメトロノームが耳をうった。

一人の男が、正面の脇掛椅子に埋まっていた。

## 音と光と味

「おめでとう。よく来てくれましたね」

年のころ、わたくしより五つ六つ上らしいでっぶり肥った男が椅子から立ちあがって挨拶した。

「こ、これは失礼しました。おめでとうございます。ほく——」

まごついたが、相手がさえぎった。

「いいですよ、妹から聞いていますから。まどうぞ」

わたくしは、栄子さんの兄さんの前にふらふらと腰をおろし、きよろきよろとあたりを見まわした。

「さ、どうぞ、どっちからでも、あなたの好きなように」



見ると、いつのまにか眼の前のテーブルの上には、およそ二、三十個の小さきさまざまなグラスが並べられ、その一つ一つへ、男は小器用に色々な形の壺から各種の色の液体をついだ。

「カクテルになさるのなら御自分でどうぞ。」

わたしは雑音は嫌いなもんですから」

「栄子さん」わたくしは、さらに多くのグラスや酒壺をテーブルに運んでいる彼女にたずねた。「あなたは第一鳥居へ行かなかったんですか？ ぼく、遅れちゃって、その」

「いいの、そんなこと。あなたを待っていたらこの人に会ったの。それなら家へ来てもらったらいいだろうということになって来てもらったのよ」

「ここが、あなたのおうちですか？ するとたしか目黒でしたね？ おかしいな」

「ここは、わたしの家ですよ」

兄さんが説明した。

「すると、やはり新宿の裏で？」

とたんに、あははと男が笑いだした。その声が、いかにも大きかったので、わたくしは何だか怖くなってきた。

「どこだっていいじゃありませんか。さア、みんなで合奏といきましょう」

「あたしもいただくわ。トリオね」

栄子さんも盃をとりあげた。それに釣られて、わたくしは、赤いブドウ酒が入った小さなグラスを口にもってきしたが、一口のんで驚いてしまった。

それは酒であつたが、酒ではなかった。一口のむと、わたくしの全身が快よくしびれたようにふるえて、耳の奥というより、からだ全体が、ある一つの音にひびくのを感じた。

「そのポルト酒はハ調のレです。あなたは初歩だから易しいのにしました。その隣のウイスキーをやつてごらんさい。たしか、あなたはミ音を感じしますよ」

わたくしはウイスキーをなめた。なるほどこんどは別の音を『私』は奏でた。

「そこに三オクターブだけ作っておきました。てきとうに色々なグラスをとりあげて味と音のシムホニイをたのしんで下さい。わたしは変調のサンタルチアを味わいます」

こう言つて、その男は、うっとり眼を半眼にし、あっちのグラス、こっちのグラスを、ゆつくりと交互に口へもっていき、まるで放心したようにテーブルに両肘をついて、しばらくは一言も口をきかなかった。

あつけにとられた私は、かたわらの栄子さ

んを見ると、彼女も、ひとりだまって、青い黄色い酒を、しずかに交々とりあげて飲んでいる。陶然として白痴のように美しい。

「栄子さん」

「しッ、いまウエーバーの『魔弾の射手』の『静けき森』を味わっているところだから」

さては、栄子さん、私をからかつてやろうと兄さんと一芝居うつっているんだな。こう思つて強いて酔眼を見ひらいて二人の様子を観察したが、その陶酔のさまが、あまりにも真に迫っていたので、いよいよ何だかわからなくなつた。一方、わたくしの舌には、さっきのブドウ酒とウイスキーの味がのこり、わたくしの身体には、あのとときの振動の快感の余韻があつた。わたくしは、一つの大きなシャペンングラスをとりあげた。ぐつと一口のどに流すと、たちまち、この世ならぬ妙なる楽の音の世界に我身があそぶのを感じた。次には、きゃしゃな薄いグラスに満たされていた緑色のペパーミントに口をつけた。すると、こんどはクラリオネットの音のような、まる味をおびた柔かい楽音に全身がひたされ、音と味覚が至妙に混つて、ほとんど性的な情緒に似た感興にひたることができた。

もともと、わたくしは音痴であり、おたま



じやくしなど何一つわからない、そのときどきの流行歌を酔っぱらって我鳴りたてる芸術を解さない青年にすぎないが、そのときばかりは音というものがそんなにも人間を感激陶酔させるものだということを体験した。わたしは、おほろげながら、小学校で教わった『兎と亀』を想いだし、ガラスの順序を見当つけて『もしもし亀よ』を味わいはじめた。「どうです、味の音楽は？ それとも音楽の味は？」

いささか酔がまわったらしい栄子さんの兄さんの声に、わたくしは、手にしていたコニヤックを下においた。

「この世は音ではじまり音で終るんです。はじめに言葉ありき、と聖書にあります、言葉すなわち神、つまり音ですよ。原子科学が進歩して、すべての物体が電子で成っておりその電子は量子からでき、さらに中間子なるものが飛びだしたりし、原爆だとか水爆だとかと騒ぎだし、ミサイルや人工衛星まで作りだしていますが、その根本は音です。振動です。あなたの身体を構成している無数の電子のあつまりが、それぞれ見えざる振動をして、全体として一つの調和音を、だしています。各人その顔がちがうように、その振動数、調

和音がちがいます。これは、人間の耳には聞えない音ですが、レーダーで飛行機をつかまえるように、ある和音を放射すると共鳴して捉えることができます。今夜、あなたをここへ導いたのはこれですよ」

肥った男は、にやにや笑いながら彼の横の台の上の小さな箱を指した。携帯ラジオとそっくりのものであった。

「宇宙は音と色で満ちています。色というのは光のことですが、これは眼に感じる音の変形です。人間に見える光は紫から赤までの波長をもったもので、その外側は紫外線や赤外線となり、無限に見えない色がある。これを電波にかえると、やはり人間の耳に聞える音の範囲は限定され、この空間には我々が聞えない音が満ち満ちているのです。わたしは、ながいこと、この音の秘密を研究し、とうとうあらゆるものを、音に還元できるようになつた。これらの一つ一つの酒に磁気をもたせ、それが一つの音を発生するようにするこゝとができた。わかり易く言うと、まだ誰も発見していない音素とでもいうべき電子構成をつきとめ、それをとらえることに成功したのです」

小学校三年生くらいの科学知識しかなかつ

た私は、その男が何を言っているのか見当もつかなかったが、さも解つたように大きくうなずいた。

「わたしは音素を使ったピストルを作ってみました。これです」彼は机の抽斗から、鞍馬天狗が持っているような銃身が長いピストルをとりだした。「これは、ふつうのピストルの五百倍もの力があり、音素を利用すると火薬は不要で、ロケットも誘導弾も玩具化してしまふ。人工衛星を打ちあげることなど朝飯前で、かんたんに月に行く宇宙船を発射することができます。ま、あまり難しいことを言つてもはじまらない。あなたは妹の恋人らしいから、お年玉に良いものをあげる。これは、わたしの音素研究の余技ですが、わたしは音と匂いの関係をとらえ、いま味と音とがハーモナイズしたように、匂いと音を同時感応させることに成功しました。色と音、ボードレールが互いに相まじろうと言つたり、ランボオが赤はAとか言つたなどは幼稚な感覚で、わたしのはそれを可能ならしめ、さらに匂いを自由に調和できるのです。むかし、ユイスマンという男は、風呂につかつていて、さまざまな酒をのんだり御馳走を食べながら、その味覚を音感



に変えてベートヴェンの第五シンホニイをたのしんだとか書いていますが、わたしは、男が女のからだから得る感覚を音に変えて、その感覚と同時に交響楽をたのしむ方法をつくりだしました。お年玉というのはこのことです。さ、案内してやれ」

男は、しまいの言葉を乱暴に言いきると、栄子さんに命令して自分もさっさと立ち上った。わたくしは彼女に腕をとられてよろよろと隣室のドアのほうへ連れて行かれた。チラとふりかえると、すぐ背中に男の眼があった。

「ぼく、もう、けっこうです」

おそろしい眼に、思わず総毛だって吃ったが、男は、どんと私の背について怒鳴った。

「いいから行けッ！」

### 理学博士加須鳥造

せまい部屋にこたごたと器具がちらばり、一人の女が、つくねんと正面の椅子に腰をかけていた。いかにも蒼ざめた蠟人形のような感じをあたえる。やたらに電線が天井を匍いコイルや硝子管がぶら下っていた。壁には大きな大理石の配電盤があつて、大小のスイッチや計器が乱雑に取りつけられていた。テレビのような器械やテーブルコーダーらしいも

のが三つも四つも置いてあつた。

「これが、わたしの実験室です。あそこにいるのは、わたしの妻です。妻は盲で啞です」

わたくしは、もういちど正面の彫像のような婦人を見た。なるほど、そういえば、わたしたちが部屋に入つても、あらぬ方角に顔をむけてボカンとしていた。

「わたしが音にとりつかれたのは、じつを言うにあの妻のためです。妻を愛する一念から

音素、それとも音子ともいうべき

ものを発

見

したの

です。こ

の実験室で

いろいろな奇

蹟をこらんに入れ

てもいいのですが、

どうやらあなたは科学

より酒、酒より女、いや

これは失礼、若いときは誰

でもそうですよ、らしいですから、一足とび

に結果だけ、

つまりお

年玉

鳥





を差上げましょう。さア、そのオッシログ  
ラフ機の上のボタンを押すと地下へ降りられ  
ますから」

わたくしは、彼が指し示すテレビ受信器を  
平たくしたような器械の上にある壁のボタン  
を押した。すると、まるでスリラー映画で見  
るように右側の壁の羽目板がすうと開いた。  
ぎよツとして栄子さんは私と顔を見合せた。

彼女も初めて見たらしい。

「こわがることはありません。べつに怪しい  
仕掛というようなものじゃないんです。とか  
く世間というやつがうるさいのと、地下を完  
全防音にするためなんです。さ、いっしょに  
来てください」

そう言いながら、彼は、羽目板の奥にある  
フェルトを張った厚い戸を押して先に立っ  
た。

「ここはね」降りきると、私たちをふりかえ  
った。「わたしと妻の別天地です。昭和二十  
年三月十七日の大空襲のとき、爆風と熱風で  
妻が一挙に眼と耳をうばわれ、発声器官も害  
われてしまった。以来、愛する妻のために亡  
父がのこした全財産をつぎこんで研究するこ  
と十年、やっと目的を達したのです。ここへ  
降り、スイッチを幾つか押してダイヤルをま

わすと、妻は五官健全な女以上に失った感覚  
をとりもどし、まったく普通の女になれます  
それどころか、まだどんな女も味わったこと  
のない別の感覚にひたることさえできます。  
妹がいるのに、こんなことを言っただけです  
が、この隣りの私たちの寝室を見てください」

彼について私たちは一つの部屋に入った。  
なるほど、高級温泉ホテルの一室と同じであ  
る。立派なベッドやソファ、重たい壁掛、厚  
い敷物。部屋の半分は浴室で、小じんまりし  
たタイルの浴槽には、かすかに湯気が昇って  
いる。大きな鏡がついた化粧台や若干の酒壺  
や果物などが入れている戸棚もある。ただ、  
ふつうの寝室とちがっていることは、地下だ  
から窓がないことと、ここにも何だかわけの  
わからない器械や道具が並んでいて、壁の中  
に鏡や螢光燈や大小のランプなどが仕込んで  
あった。

「お年玉というのはこの部屋です。これは、  
これまで妹には秘密にしておいたが、今日  
は一九五八年の一月一日、あなたがたに開放  
しますから何日でもゆっくり使ってください。  
そこにある電話を使えば、ちゃんと食事でも  
何でも女中がはこびます」

わたくしたちはまた顔を見合せた。それに

しても何という粹な兄さんであろう。元旦を  
記念して、誰にも内緒にしていた夢のような  
ベッドルームを妹と恋人に提供する。

「ぼくたちは——」

「いや心配無用、こんなところより何処か温  
泉へでも出かけたほうがいいと思うんでしょ  
う？　ここが単なる寝室ならね。ま、くだく  
だしい説明をしても始まらない。ひとつ、ここ  
で二人で数時間をすごしてごらん。勝手にそ  
このスイッチを押したり器械をいじったり  
したらいい。ちっとも生命の危険などなくて  
さっき言った人類未経験の法悦が得られるか  
ら」

そう言って、彼が、壁に手をやると、天井  
の四隅に赤い灯がつき、じいじいという音と  
共に明かに電気アンマをかけられているよう  
に身体がしびれてきた。

「さア、これで、お前たちは完全に私の手に  
おちた。もし暴れるなら、このダイヤルを一  
すうごかすと身体が自由がきかなくなるくら  
い痺れさせてやる。わたしはゴム板の上に立  
っているから平気なんだ。いいか、これから  
私の実験をはじめますが、その前に、もう少し  
講義をしておいてやる」

その口調に、わたくしは男にたいして身構



えたが、じつさいは電池にふれているように  
身体の自由がきかず、わずかに彼のほうへ首  
をねじ曲げたにすぎなかった。

「ふふふ、女も男もよく聞け。反抗しても無  
駄だ。まんまと欺かれたなサラリーマン君。  
そこにいるのは、わたしの妹でも何でもない  
お前が約束を忘れて呑んだくれていたからこ  
んなことになったんだ。わたしは明治神宮の  
鳥居のところでその女に会った。お前のこと  
を知ったので、女をだましてここへ連れてき  
たのだ。それから特別のレーダーを使って貴  
様を誘きよせたんだ。女は、このポケットに  
ある送波器で絶えず電波を受け、俺のいいな  
りになっている。だがな、心配はいらん、わ  
たしは映画や小説にあるような兇悪な殺人鬼  
でもなんでもない。わたしの名は加須鳥造、  
戦時中、軍部に殺人電波の発生装置を作れと  
強制され、ノオと言ったので親も妻も子も憲  
兵隊に殺された男だ。わたしは世界的な学者  
といわれていた。アメリカは日本進駐と共に  
私を探したが、とうとう解らなかった。ここ  
らが出て行かなかったからだ。なぜか？ 人  
間がイヤになったからだ。二十四才の若さで  
博士号をもった私は、じつは五十才くらいの  
精神年齢に達していたのだ。わたしには日本

もアメリカもない。政治、戦争、みんなイヤ  
だ。日本は私の肉親を無残にも殺したが、わ  
たしは日本だけを恨んではいない。人類全体  
を恨み、人類全体に復讐を誓ったのだ。わた  
しは、そう決心した瞬間から人間ではなくな  
ったのだ」

### 生きているロボット

「わたしを人間だと思ってはいけない。人間  
の形はしているが、ある別種の生物なんだ。  
この生物は、おどろいてはいけない、人類を  
地球上から絶滅しようと考えているのだ。そ  
の理由は実に簡単、人間という動物は、あま  
りにも悲惨になったからだ。金銭や道徳や爆  
弾を作って、おたがいに殺しあい、他の動物  
を食べ、文化という名のもとに自分自身を苦  
しめ、他の生物を奴隷化してきた。この辺で  
人類は地表から消えたほうがよい。このまま  
でいくと、人間は、ますます殖え、いよいよ  
飢え、苦しみが大きくなるばかりだ」  
世を呪い人を呪う加須博士の声は、しだい  
に激してきた。わたくしは、一辺に酔がさめ  
どうしてよいかわからず、怪しい磁気に身体  
をしびらせたまま口もきけなかった。

「わたしは人類絶滅の任を負う選ばれた生物

だ。そのために専門の音響学的立場から原子  
物理学と取り組み、生物学や生化学も研鑽し  
た。そして、宇宙を構成しているのは電子や  
量子ではなくて音子だということを知った。  
音と光、それから派生する色と味、匂いはそ  
の変形である。それは形似下的にも形似上の  
にも同じことで、たとえば、ある花が赤いと  
感じ美しいと思うことと、ある観念が善であ  
り素晴らしいと思うこととの間には、大脳細  
胞の働きかたは全く同じでその帯電量と感覚  
発生を促す振動が十のマイナス八乗くらいし  
か違わない。人間は芸術と自称する幾つかの  
作りものを持っているが、音楽に優る芸術は  
あり得ない。なぜなら、音楽は、他の一切の  
芸術を総合しているからだ。わかり易く言う  
と、音楽によって、人間は、各人勝手に色や  
物語や形を感覚的にとらえることができる。  
音こそ最高の統一現象で、かつ森羅万象の原  
因である。あの星空の星辰を仰いで見たまえ  
秩序ある天体の運動と調和を眺めていると、  
宇宙の荘厳な大交響楽が聞えるではないか。  
人間は、そこに神を発明した。つまり神とは  
音である。天球の均衡を保ち、生物を発育さ  
せるエネルギー、牡と牝が引きあい、花に色  
をつけ果物をつくりだす魔不可思議なちか



ら」

「先生」わたくしは渾身の力をしぼって、口をうごかした。「逃げません。さからいません。その電気を止めてください」

博士は壁から手をはなした。わたくしは椅子に、栄子さんはベッドによろけ崩れて、しばらくは身動きもならなかった。

「ははは、だいぶ参ったようだな。わたしは約束は守る。お前たちは、これから三日間、人間として好き勝手なことをしたらよい。あの酒でわかったと思うが、音と匂いが瞬間的に代替することを味わせてやろう」

博士は、壁の中に仕掛けてある大小の豆電球をつけ、しきりに黒い器械をいじっていたが、どこからともなく楽の音が聞えだした。と同時に、わたくしの鼻は、やわらかいスミレの匂いを感じ、ついで甘いクチナシの香りがただよい、やがて強い沈丁花の匂いがしてきた。

「この音楽は？」

「ドビュッシーの『牧神の午後』だわ」

いつか、わたくしはベッドの栄子さんを抱きよせて

いた。曲はすすみ、いろいろな香りが部屋じゅうに立ちこめ、まるで花園のただ中にいるような気分になった。

「ほんとに、あの人が、有名な加須博士かな？　これから、いったい、どうする気だろうか？」

「ひよつとしたら気違いよ、あのひと」

「気持ちが？」ふいに、博士は手を引っこめて私たちに近づいてきた。「そうだ、わたしは狂人だよ。ただし統一ある思考を有する狂人だ。だから、お前たちをロボットにする前に、たとえ三日間でも人間的な喜びをもたせてやろうと思うのだ？」

「ロボット？」

「生きているロボットを作るんだ。金属製の無神経な玩具ではなく、ちゃんと生きている人間の牡と牝のロボット、ただし思考をしないで、わたしの音波操縦に従うだけのロボットを作るのだ」

「すると、ぼくたちを？」

「まず最初お前たち二人をロボット化し、お前たちに音波器をもたせて他の人間をロボット化させる。新しく出来たロボットにも同じく働かせ、幾何級数的に地上の全人類をロボットにするのだ。おそらく、ロボット化した

い人間がお前たちを攻撃して殺されるだろうが、心配することはない痛くも痒くもない。いっさいの感覚はなくなり、わたしの操縦によつて食べたり動いたりするだけだから。なに、五分間も、大脳皮質に特別の音波をあてればすむのだ。運動神経と、食べたり吸収したり排泄する機能だけは残しておく。それから、性欲中枢と性感機能も残す。動物実験では成功したが、人間ロボットの生態はまだやっていない。つまり、わたくしの計算によると、あと半月もすると、全人類は、わたしを除いて、無感覚で無感動、善悪や美醜の意識も感覚もない、食べて疲れて眠り、実のらない、生殖行為だけする動物になってしまうのだ。喜びもしなければ悲しみもしない、犬猫に劣ったロボットになり、生産をやめ消費だけするから、すぐに絶滅してしまう。そのあとで、わたしは、無人の地球を照らす朝の太陽をあびながら歓呼の叫びをあげて潔く自決する」

すうと部屋が薄暗くなつた。また何かやつたのだ。音楽が聞え、さまざまな匂いが立ちこめ、オーロラのように室内が五彩にかがやきはじめた。それらは、一つが他に溶けこみ重なり、消え、また現われたりした。





「さア

この辺で上の部屋に帰って妻と語ろう。妻といっても、あれは人形なんだ。わたしが特別に作った人形。エネルギーをあたえると、ほとんどの人間のように肌があたたかくなり

生きている女のように振舞う。も

ちろん空襲云々は出まかせに

言ったのだ。妻は日本軍

部に殺された。ああ

殺されたのだ！」

こう叫ぶ

と、

彼は、部屋をとび出してドアを閉めた。

「だめだよ。開かないよ。いいから、わたしの命令どおりやるんだ」

どこからともなく声が聞えてきた。

「助けてください。何でもする」

「ふふふ、わたしの命令どおり実験したら助

けんこともないが。いや嘘だ、嘘だ」

「どんなことでもします」

「ははは、哀れなサラリーマンめ。そんなら

今すぐその娘を裸にしてしまえ。ここから、

ちゃんと見えているんだ。お前たちの姿はテ

レビに映っているし、一人々々の呼吸や鼓動

感情曲線も記録されている。はやく二人

とも裸になれッ！」

楽の音はつづき、芳香はたかまり

あたりはプリズムのようにかがやい

た。

## この世の外

どのくらい時間が経ったか、どんなことが起きたかは判つきりとは覚えていない。

ただ、甘美な悪夢ともいえる束の間の

妖しい印象がチラとすぎたテクニカラーの幻

のように、きれぎれに顕現するにすぎない。

もしそれを首尾一貫した現実にできたら、な



るほど、あの男がいったように、わたくしたちが経験したことは先人未踏の一大シンホニイ、音と色と官能と匂いの融合した四次元の法悦だったかもしれない。

「いま、お前たちが感得している境地こそ、切利支丹のハラデイソ、吠陀、インドの涅槃だ」

と見えざる声が告げ、

「お前たちを構成している原子、八大要素は完全に宇宙と調和した。お前たちは空であり色であり、有であって無になった。それが魂の融和というものだ。形体は音に昇華し、刹那の時空にあって無限の虚無に生きる」

とも聞え、

「あッはッは、ばかな人間どもだ。単なるエネルギーの代替を神聖だと思っとる。呪われろ、永遠にその地獄のなかであがけ」

と嘲けた。

なんでもよい。わたくしは死んでもいいと感じた。いや、そう感じたのは正気にもどった後のことで、栄子さんと抱きあっていた短くて永いあときは、どこに自分の肉体があるのか意識さえしなかった。そのとおり、たしかに人間であることを忘れ『無』になっていた。全宇宙は一つのシンホニイでしかなか

った。狭い地下の一室という観念は消えて、しずかに星座が弧をえがいている無辺たる虚空にうかんでいた。その無限の空間に彼女がひろがっていた。その唇は甘く、その乳房は固かった。すべてこれ歎びにふるえる旋律と虹の交叉、あるいはバラ、あるいはヒヤシンスの香りにみちた共鳴世界で、とろけるような美味に感動する上昇であった。

そういう断絶した過去のなかで、おそらく私の記憶が極くわずかに大脳細胞に痕跡をとどめているのだろうが、わたくしは、はげしく彼女を鞭うっていた。女の巨大な尻が私に挑んできて、たたかわないと、こちらが押しつぶされてしまう。わたくしは無限に小さくなったような気がした。大人国のガリバーか五行山の下に圧しへしがれている斉天大聖と同じだった。わたくしは、必死に女の尻の下でもがいている猿になっていた。じつとしていたら潰されてしまう。こいつ、こいつ、たえず相手を打っていかなくてはならない。ああ血がながれる。勝ったのだ。おれはメスに勝った。

そうかと思うと、わたくしは彼女をむごたらしく縛りあげ、ひいひいと泣き叫ぶ声を天上の楽の音のように聞きながら苦痛が歓喜に

変る限界をもとめ、ありとあらゆる気まぐれな責苦をあたえるのであった。そのうち、彼女のからだは、しだいに空間を占領し、ゴム風船のようにふくれあがって、みるみるうちに部屋いっぱいになり、地妖のように、巨大な単細胞動物になって、突いても切っても手ごたえがなく、そろそろとその粘っこい膜で私をつつんでしまう。

ああ、もうダメだ。わたくしは頭でっかちの魚のようなものになり、水硝子のような透明で重たい液体のなかを泳ぐ。あたりはだんだん暗くなり、はては何も見えない暗黒のなかにとじこめられる。それこそ絶対の闇、もはや視覚や味覚は不必要で、しまいには触覚さえ退化してしまう。残っているのは聴覚だけで、まっ暗な虚無の底にかすかに妙なる楽の音がひびいてくる。

わたくしたちは苦痛を失った。ふつう、人間は、あまりにも多い苦しみの感覚のなかで、いつも快感を得ようと努めている。眼に見えないくらい棘が刺さっても飛び上るほど痛い。一日も食べないと苦しい。法律を犯すと恐怖と良心に苦しむ。苦しみばかりだ。だから札束をもったり女の肌にくれたり、芸術に接したり学問を究めたり、そのほか、いろ



いろいろな快楽を得ようとして暮らしている。ところが、もしこの苦と快の感覚が交替するか、あるいは快感しか感じなかったらどうであらうか？

大地の底からひびいてくるような博士の声は、だいたいこんなふうに伝わってきた。わたしたちは、その実験に供されていた。というのは、いつしか苦感がなくなつて快感ばかりになると、栄子さんは、はげしく苦痛をもとめて訴えだしたからである。

「痛いほうがいい、痛いほうがいい！」

まさに快楽は苦痛の変形にすぎなかった。ことに人間の肉体的な苦楽は、単なる神経作用でしかない。その快感もなくなつて、一個の中和状態になつたとき、はじめて私たちは自分を自分でながめることができた。つまり第二人称の『私』が、しずかに我身から遊離して、第一の私の肉体と魂をながめたのであった。

わたくしたちの形骸はベッドの上で抱きあい、からみあっている。しかし、わたくしたちは、それをじつと見ている。

「はははは、ここらで、そろそろお前たちを人間ロボットにしなくちやなるまい。うむ、なにかから何まで予期したとおりの現象であり

結果だった」

ジーとひびく空気の振動がはじまり、水晶燈の光のような緑色の光が部屋に充満した。眼がくらめき、意識がうすれていった。と、

そのとき博士の狼狽した声が伝わってきた。

「や、これやいかん。誰だ、邪魔するやつは？ あ、お前、ううう」

緑色の光が消え、空気のヴァイブレイションがおさまった。

「栄子さん」あやうく我にかえって私は、彼女をせきたてた。「上の部屋で何か起つたらいい。この間に早く逃げよう。ぐずぐずしていると生きながらロボットにされてしまう」はげしく扉にぶつかつてみたがビクともしない。浴槽のまわりや上をしらべてみたが逃げ口はなかった。空気を送りこんでいる穴ではベンチレーターが回っていた。どこかに排気口があるはずだ。あつた。ベッドの上の垂れ幕のうしろに、やっとうぐり抜けられそうな通風口をみつけた。

わたくしを踏台にして栄子さんがその穴に身体を入れた。そのまま身体を起して、どうやら穴にもぐりこませた。

二分三分、わたくしは、いらいらして待った。と、ひよいと音もなく扉が外から開いて

彼女の顔がのぞいた。

「鍵は挿しっぱなしになっていたわ」

わたしたちは階段の上を見上げたが、しんとして物音ひとつしない。

「はやく、あたしたち裸じゃないの」

大急ぎで身支度をし、そつと忍び足で階段を上って行つた。フェルトを張った戸を押して羽目板の穴から実験室に戻つた。

「……………」

栄子さんは、声もだせず私にとりすがつた。メトロノームが単調に時を刻み、オッシログラフが青白い線を鏡面にふるわせていた。

一つのダイヤルに手をかけたまま、肥った博士がテーブルの上に半身をねじつて俯つ伏せになっていた。その上に、れいの女の人形が打ち重なり、片腕をしっかりと博士の首にまきつけていた。蠟面を、さもなつかしうに人間の顔にすりつけて……。

「人形が絞め殺したんだ」

わたくしは、そばへ寄つて確かめてみたがまるで本当の人間がやったように強く締めつけ、とうてい解けそうにもなく捲きついていった。

「これをごらん」

わたくしは、彼らの下半身を栄子さんに指



した。

「博士は、わたしたちをテレビで眺めながら人形に活力をあたえて同じようなことをしていたのだ」

「ね、ね、あたし、もう一刻もがまんできないわ。怖くて怖くて。はやく逃げましょう」

わたくしたちは、すぐ最初の部屋へ出た。

テーブルの上の例のピストルを取りあげてみると、そこらで売っている玩具であり、音波を放射して私を呼びよせたという器械はただの携帯ラジオであった。

わたくしたちは、一散に家の外へ駆けだした。もう夜が明けきって、元旦の朝日が高い屋根のてっぺんを明るく照らしていた。夢中で走った。屋根の上に異様なアンテナをつけたタクシーが走ってきた。あわてて手をあげ、栄子さんを押しこんで乗りこんだ。

「どちらへ？」

ふり向いた運転手の顔を見たきり、ううと呻いたのを覚えているが、それっきり一切がわからなくなった。それは加須博士だった！気がつく、三四人の男や女の友だちの顔が見えた。みんな酔っぱらっているらしく、わたくしを覗きこんでいる顔々の息が酒臭い。

「栄子さん、ここはどこです？」

「あなたのアパートよ」

「博士は？」

「あ、あのひとね、あのひとは、さアどうだか？」

「助けてくれえッ！」

わたくしは、がばと起き上った。

「ばか野郎」一人の友人が怒鳴った。「さんざ世話やかしやがって。なーんだ、まだ玩具のピストルを握ってやがらあ」

「あたしね、あなたが来ないもんだから、一人でお詣りして帰ろうと思っていたら敏子さんと渡辺さんが来たの。あなたは新宿の西口にいるからって言うんで探しに行ったのよ。そしたら、ひょっこり途中で会ったの」

「違う、きみは、あの家の前で待っていて、ぼくを引っ張りこんだ」

「あなたが、どんだんあの家に入って行ったんじゃないの」

「ちがうんだ。みんな、聞いてくれ。こうなんだ」

わたくしは、これまでの奇怪な出来事を一同に語ったが、みんな、くすくす笑うばかりで相手にしなかった。

「たいへんだったのよ、このひと。その家の

人をさんざ困らせてね、音だとか宇宙だとか講義したのはあなたじゃないの」

(了)

## 次号予告

高木龍二

## 法剣俠遊

伝俠遊窓裏





それは全体が細い革紐で編んだようになっている。華やかな表情を持った赤い靴だった。このような靴は、普通の日本人の女性では到底似合う人はいないのだが、大柄で肉付のいい彼女には、きつとピッタリすると思われた。彼女の白く豊かな足が、赤い靴によって、一層魅惑的に見えると思つたし、又、それは紐を組むようになっていゝから履かせるのに非常に手間がとれることも、私には有難かつたのだ。

彼女はまだ寝ていたが、私の顔を見ると、

「お前、なにしに來たの？」

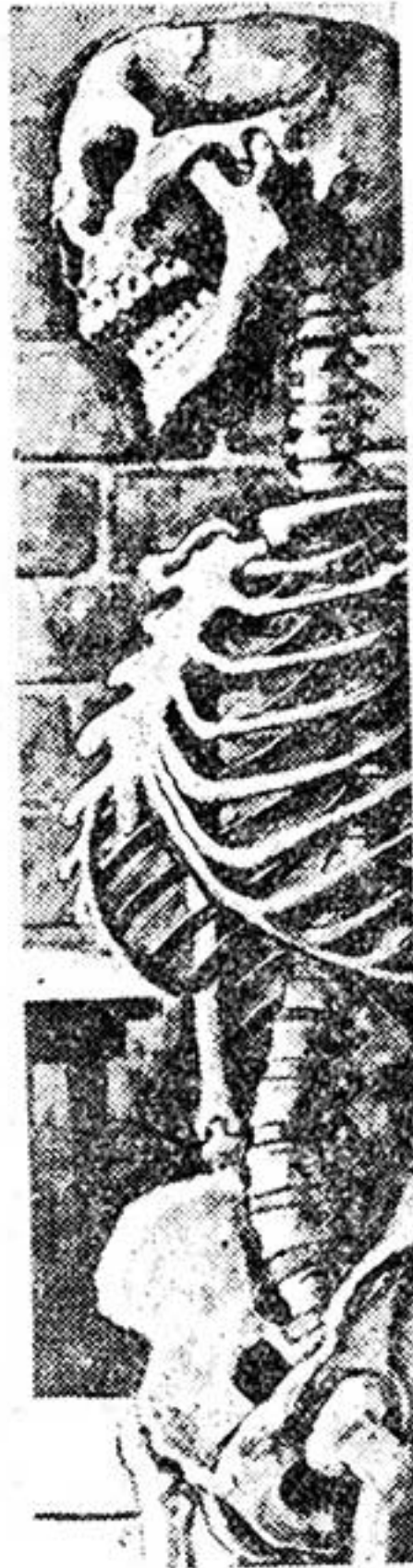
マゴマゴしてると承知しないよ」と、無愛想に言つた。私はその声を聞くと身震いを感じる程だった。

恐る恐るベッドの傍に近づいても、彼女は起きようともせず寝

ていた。薄い紗のような、ノースリーブの寝衣を着て、薄い布団をかけていたが、寝返りを打つと、私の目の前に、その美しい足がベッドから落ちそうにブラブラとゆれた。

汗をビッシヨリかいたが、念入りに履かせた。そして、それは思った通り、素晴らしい効果だった。私は苦しいほどの嬉しさに、思わず、

「ハハハハハハハ」  
と、笑うのだ。  
その時私は彼女を最も美しいと思った。『讚嘆』と言う言葉が一番その時の私の氣持に近いように思う。蹴られた瞬間の、赤い靴と、白い足の動きの美しさ――。



## 倒錯の夜

鳥羽瑛子 著

私はあまりの素晴らしさに我を忘れて、彼女の足に接吻しようといざりよると、今度はその唇のあたりを蹴られて、横倒しになった。そして、今度は私の首すじに靴を乗せてグイと踏みつける。

.....

私は馬鹿のように、暫くその素晴らしい宝物のような足をみつめていたが、たまらなくなつて、持つて來た靴を履かせにかかった。彼女は動いたりして、故意に履かせにくいポーズをとつたので、私は

と呻きながら、両手の上に捧げるように乗せた。その時、その赤い靴が、ガツと私の顔を蹴った。私はみじめに仰向きにひっくりかえつたが、八千代は面白くてたまらぬと言つた顔で小気味よさそ

（めくるめく華麗な旋律とやるせない恍惚に包まれてトロトロと燃える鬼火のような執着の世界を描いて、凄美きわまる絶品集！好評につき重版発売中！定価二〇〇円・送料四〇円 あまとりあ社）



裏窓

# 既刊号目次

(お申し込みについては81頁御参照)



(裏窓臨時増刊 第四集) ムード

グラビア・甘ったれの小猫……本誌 特写  
 女 雪肌武者(巴御前)……村松呂久良  
 人 妖夢御殿(千姫)……稲垣 史生  
 五 もどかしい夜(おはん)……狭山 温  
 炎 蒼い天井(奥村五百子)……笹本 寅  
 情 身を灼く女(山田順子)……原 比露志  
 避妊に失敗しない法……青木 尚雄  
 座談会・裏話カッラ漫談―その名は夜の華  
 ▲出席者 谷村六介・平井利市・岡田甫  
 ハレムは実在している……柳生 亘  
 セマリ派女優を裸にすれば……編集部・編  
 丸の内ガールの秘密……五島 勉  
 うらおもて・下着案内……うらべ・まこと

性の健康相談室……〔男性科・宇佐美正夫  
 性科・婦人科・神田 駿一  
 わが「性」に迫られる少女達……高橋 鉄  
 ロマ・グレ養生訓……椿 八郎  
 四〇代の青信号……橋爪横子  
 男性不感症……神田 駿一  
 おそれと羞恥(めざめ・第三回)……杵築 富雄  
 夜のため息……志波 葉子  
 濡れた仇花……武野 藤介  
 私はこうして美人をつくる……梅沢 文雄  
 誘惑化粧術……四谷 一  
 (臨時増刊・定価百三十円・送料八円)  
 (十二月号) あぶちっく・すりらあ特集号  
 ○色頁・倒錯のよろめき……高月 大三  
 “”・お嫁に行つた或る鳩の話……志摩久子  
 ○口絵・女を探せ!……秋吉 鬱  
 ○グラビア・罌に陥ちた暴漢……編集部・編  
 隠密覚書・怪異蠟人形……島本 春雄  
 鱗肌異聞……南屋 彦六  
 地獄島……美作 賢  
 雌花のいたずら……京極 美岐  
 死人駕籠……黒木 忍  
 盗賊煙丸の最期……藤 琴也  
 妄(もうしゅう)執……大河内常平  
 輪(りんね)廻……三谷 春樹  
 殺(さつ)意……岬 洋之助  
 夢(むえん)魘……岩堀 光  
 死体工場……大町 三郎  
 妖夢呪薬譚……窪村 弘

青い顔の男……飯田 豊吉  
 歪んだ眼……真野 麗  
 偽装殺人……三宅 一朗  
 狐(きつねび)灯……松井 籟子  
 死を弄ぶ女……花町 右門  
 紅燈夢……横山 正克  
 血の蜜月旅行……陶山 密  
 刺青弁天……中林 節三  
 (定価百二十円・送料十二円)  
 (十一月号) あぶちっく・みすてりい特集  
 ○口絵・廃屋の妖精……秋吉 鬱  
 人差指の妬み……朝山 蜻一  
 闇(やみ)……大河内常平  
 悪魔の祈禱師……神行 京一  
 闇入者……三宅 一朗  
 地獄から殺しに来る男……真野 麗  
 金曜日の戦慄……鳥羽 瑛子  
 殺意の黒白……宇治川 龍  
 窓(まど)……岬 洋之助  
 傷痕だらけの人魚……松井 籟子  
 なめくじ幻想曲……坂 みのる  
 宝石呪縛……黒木 忍  
 連載伝奇・刺青弁天……中林 節三  
 隠密覚書・鬼姫変化……島本 春雄  
 恋人 人形……鳴海 玄吉  
 罌にあえぐ女……波戸 容  
 手裏 剣……狭山 温  
 死体買います……柳生 亘  
 妖 虫……京極 美岐



女炎脂地獄……………岩堀 光  
 コレラの正体……………田井 良栄  
 黒いマニキュアの女……………木原 康夫  
 スターリンを狙った男……………陶山 密  
 偶奇談義……………川口 映治  
 放浪の記……………伏見 和夫  
 (十一月号) 定価百二十円・送料十二円  
 (裏窓臨時増刊・第三集) ムード  
 グラビア・素肌の絵本……………本誌特写  
 特集リポート・熱すぎる妻……………編集部・編  
 特集・危険な悪戯者―痴漢を斬る  
 痴漢はこうして発生する……………佐伯 茂雄  
 痴漢の心理について……………藤原 豪  
 座談会・闇にうごめくY虫を駆え……………諸 家  
 痴話閑談……………岡田 甫  
 “ヘンタイ女性”今昔物語……………高橋 鉄  
 ツカマツリ顛末記……………木綿 敏夫  
 千人斬り女豪列伝……………谷 作蔵  
 性的傾向テスト……………編集部・編  
 性的秘薬はどこにある……………阿那茂利男  
 性的健康相談室……………{婦人科・竹内 茂代  
 {男性科・宇佐美正夫  
 オナニーは無害か?……………松岡 克衛  
 “漂よい夫婦”見本帖……………日夏由起夫  
 夫婦のムード20代―50代……………原 比露志  
 ペッティングの功罪と結婚十戒……………大場 正史  
 女であることの悩み……………杉靖三郎・山本杉  
 昼さがりの倦怠……………志波 葉子  
 愛と悔蔑(めさめ・第二回)……………杵築 富雄

新・枕草子・実らぬ葡萄……………武野 藤介  
 実話特集・愛欲のアウトサイド……………諸 家  
 カラーセクシオン……………実用放蕩学  
 (十月特大号) 時代伝奇小説特集号  
 ○口絵・妖異羽子板呪法……………秋吉 轡  
 海外グラマア写真集……………編集部・編  
 書き下し長編・猿鰐伝奇……………島本 春雄  
 悲曲梟雄伝……………岩堀 光  
 女犯秘録……………円城寺 達  
 笄 呪文……………松井 籟子  
 隠密覚書・地獄大名……………島本 春雄  
 播磨灘の裸女……………稲垣 史生  
 紅毛記秘録……………鳴山 能平  
 続肌邪宗門……………杉 良平  
 甲斐の舞面乱……………宇治川 龍  
 耽奇亭秘舌……………真野 麗  
 人肌菩薩……………橋爪 彦七  
 犬は見ていた……………竹谷 十三  
 放浪の記……………伏見 和夫  
 悪魔と情婦……………否笠 一郎  
 女妖の檻……………京極 美岐  
 (十月特大号、定価百二十円・送料十二円)  
 (九月号) 耽奇小説特集号  
 ○口絵・日光浴  
 ○“殺された七人の裸女”  
 植民地の二重スパイ……………大町 三郎  
 悪のホザナ……………絵口 浩  
 女足の賦……………真野 麗  
 女犯秘録……………円城寺 達

毛……………夢野 蓉古  
 黄金の処女帯……………柳生 亘  
 チーズ臭い三人の女……………花町 右門  
 紫(しどく)毒……………薔薇蒼太郎  
 ヒーイズ・マイ・ギャッグ・マン……………鳴山 能平  
 虹の雫……………早川小夜子  
 マヒトの告白……………岬 洋之助  
 花吹雪天保女地獄……………須崎 竜平  
 悪魔に呪われた三人の男……………神行 京一  
 おもとの亡霊……………三谷 祥介  
 放浪の記……………伏見 和夫  
 ヒットラーの財宝を探しあてた男……………陶山 密  
 扉をたたいた女……………広尾麻津夫  
 隠密覚書・十人小町……………島本 春雄  
 ウェストニッパの棚……………竹谷 十三  
 殺された七人の裸女……………北小路一郎  
 偶奇坊主……………岩堀 光  
 民衆の敵を仆せ……………今井 直  
 鐘ヶ淵因果絵巻……………稲垣 史生  
 (裏窓臨時増刊・第二集) よるとひる  
 グラビア・グラマアの季節……………吉野銀之助  
 夫婦の感覚を解剖する……………編集部・編  
 ある不感症の妻との対話……………西島 実  
 クリトリリス不感症はある……………神田 駿一  
 完全なるCOTTAGE……………篠崎 信男  
 性的傾向観破法……………高橋 鉄  
 性と妊娠のイタチごっこ……………青木 尚雄  
 安心して性生活を営むために……………太田 典礼  
 現代女のナキどころ……………うらべ・まこと



実伝・千人斬り紳士録……………谷 作蔵

男と女とそして私……………志波 葉子

メンゼスと夫婦生活……………羽田 正文

性の健康相談室……………〔男性科・金子栄寿  
女性科・太田典礼〕

エレガントな娼婦たち……………原 比露志

「不倫な情事」と「女の市場」……………大場 正史

めざめ(白い乳首・人形の下着)……………杵築 富雄

男が女に求めるものは?……………瀬田 五郎

匂いぞいずる……………かびや・かずひこ

パリの空の下、赤線は消えず……………莊原 朱雄

新・枕草子・木蓮夜色……………武野 藤介

(臨時増刊・定価百三十円・送料八円)

(八月号)異色読物特集号

○口絵・裏窓裸天国

贅の花……………松井 籟子

狂恋懲罰監房……………村岡 良平

貞女お道……………竹谷 十三

いぬ……………麻布 義朗

放浪の記……………伏見 和夫

夜の緋縮緬……………鳴山 能平

蝦蟇物語・肉ごたつの群……………佐々木 力

隠密覚書・首吊り中蔵……………島本 春雄

最大の逃亡者……………陶山 密

日本ムスメを売買した男……………ワトスン・独田

黒髪さんげ……………真野 麗

仇情お浜船……………加藤 晋三

峡谷の血闘……………柳生 亘

道化地獄図絵……………夢野 蓉古

山西の黒い嵐……………大町 三郎

単男と猫女……………神行 京一

あ(蛇)ぶ……………三宅 一朗

女形地獄……………稲垣 史生

楽園の香り……………柏木 雛子

生人形の夢……………阿部 佐治

吹雪とお花……………佐木 勤

胡蝶秘文……………岩堀 光

(七月号)倒錯の手記特集号

○口絵・映画緊縛場面集

蝦蟇物語・むしだんご……………佐々木 力

あべじの足……………新津 勉

金色に魅せられる女……………西条恵美子

草雙紙の世界……………鳴山 能平

放浪の記……………伏見 和夫

あ(蛇)ぶ……………三宅 一朗

娼妓媚哀史……………片岡 省吾

悦唐濡れ肌地獄……………岩堀 光

乳房を蒐める男……………神行 京一

死に誘う天使……………花町 右門

生きている竹槍……………ワトスン・独田

ノーマン氏の不思議な実験……………柳生 亘

情炎白肌双紙……………稲垣 史生

弄(ろうじゅう)獣……………雪俊 遥

青(あおせん)線……………杉山 晴詩

魔(ま)窟……………梅崎 登志

妬(とけい)刑……………松井 籟子

脱(だつこく)獄……………大町 三郎

隠密覚書・女人駕籠……………島本 春雄

耽美小説・紫夫人……………竹谷 十三

旅芝居見てある記……………境 幸彦

(六月号)女隠密・女スパイ特集号

○口絵・ケツ圧が高いのヨ

○「憲兵と女スパイ」

マタハリ二世の悲劇……………大町 三郎

観世流蜘蛛の秘曲……………小山龍太郎

黒水仙の女……………竹谷 十三

喰人館炎上始末記……………真野 麗

赤いX二十七号……………花町 右門

隠密太平記……………橋爪 彦七

紅毛玻璃玉地獄……………加藤 晋三

逆スパイ青木菊子の最後……………柳生 亘

仮面の女体……………宮下 文作

真珠湾の女間諜……………木村 文平

鳶色の眼をした女……………宮本 潔

プロセス・5と女……………陶山 密

特高秘話・赤い花々……………高月 一三

悩乱破れ葛籠……………岩堀 光

柔肌ごよみ……………稲垣 史生

福清の蟻地陶……………鳥飼 ゆき

愛怨人斬り船……………川越 八郎

カザレス公爵夫人の秘密……………否笠 一郎

女工哀史・春岡村事件……………雪俊 遥

隠密覚書・白珊瑚地獄……………島本 春雄

Fの世界……………佐瀬利五郎

女装礼子行状記……………藤 琴也

悦唐女体讃……………高月 大三

風流裏窓艶色夜話……………恋塚 四郎



(裏窓臨時増刊第一集) よるもひるも

グラビア・悩殺準備完了

〃〃・ドライはウエットのはじまり!

東京の秘密クラブ……………五島 力

東京のヘソの穴には……………(猟奇録音)

ヨーロッパ女を攻めるには……………野高 一作

P術指南(特殊女性の告白)……………井上 章子

マダム商売(マダムの手記)……………志波 葉子

耽美する女体の流れ……………神保 朋世

男女・色豪コンクール……………原 比露志

テストされるあなたのSEX……………高橋 鉄

女人多淫のメカニズム……………神田 駿一

女性にはたして不感症か?……………竹内 兵衛

短小に悩む青年達に……………西島 実

インポテンツの治療法……………金子 栄寿

早漏はここから起る……………寺田文次郎

性 自宅で行なえる性力増強……………橋爪檳榔子

三十男はここを狙え……………高橋 晋

中年夫婦の痴戯を描く……………武野 藤介

現代女性の欲望を描く……………大野 千秋

告白と相談……………解説・神戸佐一郎

夫は醜い女を愛していた……………

夜ごと街に立つ未亡人……………

夫を嫌い同性愛に耽る妻……………

婚約者では満足できないオールド・ミス……………

女の見本帳……………日夏由起夫

エロチックお洒落術入門……………うらべ・まこと

風流随筆・四疊半おとこの楽書……………今官一 他

(臨時増刊・定価百三十円・送料八円)

(五月号) 女の隠謀・お家騒動特集号

〇口絵・裏窓はだか天国

〇〃〃・内外映画緊縛場面

児小姓を犯した浅岡の局……………加藤 晋二

雌雄まんじ……………真野 麗

染血の百物語……………戸山 一彦

大奥狸囃子……………稲垣 史生

癲狂院の相馬子爵……………瀬戸口寅雄

天保素走り小僧……………西尾 富岳

うわなり火事……………橋爪 彦七

なでしこ地獄……………広尾麻津夫

ボルシア家罪悪史……………三宅 一朗

曠野をさまよう死体……………陶山 密

ドイツ皇太子の陰謀……………大町 三郎

ブレンヴァリエ家没落始末記……………花町 右門

仇(あだばな)花……………松井 籟子

カザレス公爵夫人の秘密……………否笠 一郎

カルカッタの生地獄……………ワトスン・独田

聖アガートの乳房……………竹谷 十三

悦虐の女にせ聖女……………雪俊 遥

一家を狙う復讐鬼……………柳生 亘

隠密覚書・丹州鬼の巢城……………島本 春雄

あぶのうまる広告紹介……………高月 大三

祖国を売った女スパイ……………戸山凡太郎

監獄十字路……………藤 琴也

秘録・暴帝略譜……………桜井 純二

(四月号) 妖奇犯罪実話特集号

〇表紙裏・囚われの女三題……………外誌より

〇口絵・外誌に現れた(危機に立つ女達)

〇口絵・泥靴にけがされる小羊……………秋吉 密

男装の淫婦モーパン嬢……………花町 右門

邪恋京人形師……………若尾 鋭介

囁かれる女体……………瀬木 敏郎

女性憎悪者(ウーマン・ヘータ)……………柳生 亘

カザレス公爵夫人の秘密……………否笠 一郎

女囚を奪う怪盗団……………瀬戸口寅雄

ロックン・ロールの鳴る間に……………大宮敬一郎

アミアン街道女教師殺害事件……………大町 一郎

夫は満足していない……………宮下 潔

地獄塔の脱獄者……………陶山 密

見捨てられた男の復讐……………立石 梅雄

ちりめんの赤い紐と女……………堺 幸雄

花嵐遊女の達引……………稲垣 史生

煮られた女達……………雪俊 遥

呪いの小盒……………香山風太郎

淫草(みだらぐさ)……………川越 八郎

モイ族の媚薬……………柏倉 欣造

秘境女人国……………稲垣 史生

死棺屋敷(隠密覚書第一話)……………島本 春雄

姉妹奴隷……………神谷 欣二

若妻地獄……………竹谷 十三

呪われた神々の地獄……………三上 綾子

(本誌九月号まで定価百円・送料八円)

(二、三月合併号) 妖艶毒婦姦婦特集号

(一月号) 凄艶妖奇読物特集号

(十二月号) 名刑事特異犯罪捜査特集号

(十一月号) 戦慄犯罪特集号

(三月号まで売り切れしました)



連載時代  
伝奇小説

# 刺青母奔天

(第三回)



## 折れた煙管

「旦那、娘達は全部運び込みましたよ」  
寄って来て云う伝吉に、唐津屋は軽く肯いた。

その唐津屋に、舟板を踏んで近寄って来たのは、新シ橋の際で、背中の皮を剝がれていた娘の死体の傍で、お園を失神させた老婆だった。

「ヒヒヒヒ、旦那様、これで江戸で刺青をしている娘達は、どうやら、この婆アが探し出しましたよ」

「礼は渡してある筈だ」

「ヒヒ、ヒヒヒ、お礼のお金はちゃんと伝吉さんからいただいで居りますよ。ただ、婆アは、これから旦那様のお役に立ちたいと願いますのじゃ」

「そうか、よかろう。では先へ河岸へ上っていて貰いたい。わしは伝吉に話があ





るでな」

「ヒヒヒヒ、そうしますよ、旦那、ヒヒヒ」

老婆は、危っかしい腰つきで舟板を渡って河岸へ戻って行った。

唐津屋は、何やら伝吉に耳打ちすると、河岸へ上り、待っていた老婆にいった。

「伝吉に話がしてある。船に乗るがいい」

「ヒヒヒヒ、ヒヒ」

喜ばしげに老婆は舟板を渡っていく。

唐津屋はもう姿を消している。

老婆は、もう二歩で船に足がかかろうとした時、あッと舟板の上で

立竦んだ。目の前に伝吉が七首を抜いて立っていたのだ。

「こ、これは一体どういうことだい！」

そう叫んだ老婆は、その時、舟板がずるりと足許でずれたのに悲鳴をあげた。

「ワッ！……伝さん……アッ！」



老婆のからだを支えていた舟板は、船からはずれて、悲鳴と一緒に暗い水面に老婆を沁り落していた。

「ハハハハ、。婆アに用が無くなったのだよ。これ以上親切にされるのは迷惑というものだ……」

船は、下流へ静かに沁り出しているのだった――。

お柳は、お絹の味方になるといった。お絹を長崎屋に戻してやろうといった。不思議な女心の変化である。

さわやかな微風が庭から縁をすべって座敷へ吹いてくる。

お柳もお絹も、湯上りの浴衣姿だった。二人はいっしょに湯へ入ったのだった。

初めて、お柳がお絹を湯殿へ誘ったとき、お絹はお柳に見られたまま裸になった。

「さ、遠慮なくおはいりよ」

先に、湯の中に首のところまでとっぶりつかってふり向いたお柳は、羞いに顔も上げられぬお絹の裸体を眩しそうに見つめたのだった。

首筋から肩、両腕、胸から腰への線、どこを見ても清浄な処女でなければ見られない張りが感じられるのだ。そして柔軟さとまる味。その裸体の処女はひかえ目に湯を浴びた。湯がはじかれて湯玉がほろ

三 節 林 中  
画 弘 彬 田 山

★白肌にうねる蛇身をめぐって黄金に憑かれた亡者の妄執！ 妖婦お柳の女心は變転する！



ほろと肌を這って落ちた。

湯こもりと檜の匂い。そこにはのかな娘の肌の匂いがまぎっている。ふと、お絹はそのままで躊躇した。昨夜からの、いや、ここ数日中のつづいた出来事を思い出したのだった。

「そうだ、お前さんは湯へはいると背中の傷がしみるだろう」

お柳は、お絹が湯舟に入るのをためらった理由をそう見ていった。

「いえ」

お絹は、湯舟のふちを跨いで、湯舟の隅にとぼりと身を沈めた。綺麗な湯が音を立てて溢れた。

じいんと、背中の青竹で打たれたあとに湯がしみた。呻きたい程のまるで焼いた鉄箸を押し当てられるようだった。雨月弦之丞に長襦袢の上から打ち据えられたのだ。無論、弦之丞は加減して打ったのだった。それでなければお絹は失神してしまっただろう。

それから、死のうと、舌を噛もうと思ったほどのお柳の折檻は、生娘の身に堪えられぬものだったが、お絹が舌を噛もうとしたのを見てお柳は気を変えたのだった。

お絹は自分を羞恥地獄の果てに追いつめたお柳に、乱れた髪を梳いてもらった。そして湯殿へ案内されたのだ。

お絹はお柳を怖れている。足首の縄を解いてくれてからのお柳は親切だった。が、お絹はそれはお柳が気嫌がいいのだと解釈した。

納戸で弦之丞の青竹による折檻、そしてそこへ入って来たお柳のそれからの死よりも辛かった苦しい責め方は、お柳を気の変る激しい気性の女だとお絹に思いこませたのだった。

そのお柳の言葉に、お絹は逆らうことの怖ろしさを感じていた。言葉に逆らって、御気嫌を損じたら、このひとは怒鳴りつけるだろう。

また足首を縄で括られてその縄を引かれるかわからない。引つ叩くかわからぬ。縛って蹴るかもしれぬ。

お絹はだから歯を喰いしばって、湯のしみるのを堪えた。

「しみる、ね、そうだろうか？」

お柳は、目を閉じてじっと湯につかっているお絹の顔を見ていった。

「出よう」

ザブリと、お柳は先に湯舟のふちを跨ぐ。それから湯の音もひかえ目に湯舟から上ったお絹の裸体を、お柳は、青竹のあとをよけていたわるように洗ってやったのだった。お絹はその時は遠慮することがお柳を怒らせることだと思って、羞しさに堪えてお柳のなすままにからだをまかせていた。お柳は絶えず微笑をうかべていた。あれほど処女を呪う蛇となったのに、忘れたようにその処女のお絹のなめらかな肌を流してやったのだった。

そして、お絹の耳許に口を寄せて、

「大丈夫心配することはない。あたしがちゃんとお前さんを長崎屋へ送り返してあげますから」

と、囁いたりしたのだ。

それが、今日まで果されていない。弦之丞の言いつけで、わざわざ音吉という岡っ引がそれ以来目を光らしている。で、お柳はその道灌山下の屋敷から、お絹を一步も外へ出せないでいるのだ。

お柳はいらいらしている。

今も、自分の貸してやった浴衣を身につけて、じっと俯つ向いているお絹を見ると、お柳のいらいらは別な方へ向くのだ。お柳は朱羅宇の長煙管で莨を吸いつけてスバリと煙を吐いていい出した。

「お前さん、退屈だろう」



「いえ」

「あたしは、お前さんを長崎屋へ戻してやるといった、おぼえているだろう」

「はい」

お絹はうなだれたまま返事した。

「だが、駄目なのさ。弦之丞のやつがお前さんを一步も屋敷から出すなと家の者にいいつけているんだ」

「はい」

「はいかい、また……。お前さんはあたしが嘘をいっただと思ってるのだろう」

「いえ」

お絹はあわてた。お柳の言葉が昂くなって来たのだ。それに、お絹はお柳のいった言葉をすっかり信用していたのではなかった。

お柳と弦之丞の関係を、お絹は正しい目で見つめてしまったのだ。自分をあれほど仮借なく責めたお柳が、長崎屋へ戻してやるというても、それはお柳の気まぐれだとお絹は思っていたのだった。

「お前さん！ お前さんはあたしのいうことなんか、あばずれのたわごとぐらいにしか聞いていないんだろう」

お柳は、そのお絹にからまる。

「いえ、そんな……」

「フン、お前さんはあたしをそんな目をして

蔑すんでいるんだ。身も心もくされきった女が何をいうのだと思って  
いる。そうだろう」

「決してそんなことを……」

「じゃア喚いたらいいじゃアないか。長崎屋へ戻すといったが、いつ  
戻してくれるんだとあの日から十日もたつにお前さんはひと言でも  
それを口にすることがあるかい。ないだろう。最初からお前さんはお  
柳を馬鹿にしてるのさ」

「……………」「ね、清浄無垢な娘のお前さんから見たらお

### 前号までのあらすじ

十二代将軍家慶の治世。改革政治が行われ幕政乱れ政権争奪に町奉行が動いた天保十三年のある夜——江戸橋質両替商長崎屋の娘お絹の寢室に忍び込んだ二人の曲者は長崎屋先代が遺した「刺青小町番付」を奪い合つて逃れた。刺青小町番付とは先代長崎屋が抜荷で儲けた百万両の隠し場所を解くものだった。両国の軽業師蜘蛛七は江戸の怪商唐津屋に頼まれて半分手に入れた刺青小町番付を帰途女掏摸のお柳に拘り取られ、怪盗風太郎に邪魔されて取戻しに失敗し唐津屋の為に面前で恋女房のお京を驕り殺しにされた。一方、刺青小町番付の前半を手にした女忍者は千世といい勘定吟味役の元公儀隠密を勤めた川村清兵衛の娘だった。千世は番付一位のお絹とよく似ていた。千世は翌晩また長崎屋に赴いたが一足早くお絹を攫い出した黒装束の投げた八方手裏剣に傷ついた。黒装束は南町奉行鳥居甲斐守の復心雨月弦之丞だった。千世は舟に逃れて失心した。その千世を手当したのは

怪盗風太郎だった。そこへ捕方に追われた蜘蛛七が逃げ込んだ。風太郎は蜘蛛七の話を聞き百万両を手に入れ江戸中の貧乏に撒くといひ、唐津屋復讐に蜘蛛七に手を貸すと約した翌日、長崎屋に岡っ引庄五郎を訪ねたやくざ姿の北町奉行遠山左衛門尉はお絹の妹の志保と父の密語からお絹が先代の拾い子であるのを知った。雨月弦之丞に攫い出されたお絹は刺青小町番付の行方を白状せよと責められ、弦之丞に無理に妾にされたお柳は処女のお絹を呪って苛酷な折檻を加えるがお絹が舌を嚙もうとしたので心を変えた。その間にお柳の拘り取った刺青小町番付は風太郎に奪われていた。そんな或る日神田川に背中刺青をした生皮を剥がれた娘の死体が揚つた。見物していた刺青を刺していた娘は何者かに攫われた。これは刺青小町番付を手に入れることに失敗した唐津屋の仕業で唐津屋は他にも刺青をしている娘達を攫いだしてその夜娘達を廻船問屋淡路屋の船に乗せて何処へか運び出したのだった。



柳は心の底まで泥水で汚れた女と見えるだろう。だがさ、今の内こそ男も知らない白無垢の清いお嬢さまでございと済ましていてもやがては汚されてしまうのさ。例えばさ、お柳がその気になればその清浄無垢の生娘を喰い荒したいと願っている狝々野郎はこの屋敷にも一匹や二匹は飼ってある。その狝々野郎を一匹この部屋に呼び入れて、さあ存分に好きなだけ喰いしゃぶったらいとお前さんを投げてやる。逃げようたって逃げられないさ。それでお前さんは泣き叫ぶ。さぞ面白い見世物だろうよ」

「……………」

「どうだい、あたしはやっぱりお前さんが憎いんだよ。あの日は死のうとしたお前さんをいじらしいと思った。それから可愛いと思った。」



ね、お柳にも妹が一人ある。その妹に事情があつて姉でございと会えないのさ。そこでお前さんを妹の身代りといっちゃアなんだけど、そのつもりで可愛いと思つて見ていたのさ。それがどうだい、お前さんはお柳を少しも信用してないんだ。そればかりか心で蔑すんでいる。汚れた女にも汚れた女の意地があるのをお前さんはお知りでない」

お柳はそういつて蔑をすいつける。フーッと煙をうなだれているお絹に吹きかけるように吐いた。

「もうしわけありませんね」

「フン、生娘はなんでも詫びればそれで済むと思つてゐるんだ。詫びられたつてあたしは自分を蔑すまれていたという情ない気持は癒えやあしない。あばずれ女だ、汚れきつてゐる女だもの口先をどうでもする

女だと思われていたとわかったら口惜しいのさ。それも清浄無垢なおほこでございと男知らずを鼻にかけて蔑すまれていたんではなおさらさ」

「いえ、何もそんな……………」

きちんと両膝を揃えて、手をついているお絹から、片膝立ちの恰好のお柳は目をはなして長煙管をボンと強く吐月峯に叩きつけた。

ピクリと、お絹の肩がふるえた。

お柳はすつと立ち上った。

ハッとお絹は顔を上げる。



「お前さん、両手をうしろへお廻しよ」

「えッ？」

「両手を背中に廻せといってるんだ」

お絹はきっぱりといった。

愛と憎悪——お柳はその二つしか持てない女であった。愛するか憎むか。それだけしかないのである。可愛いと思えば矢も楯も堪らぬほどに好いて可愛がる。憎らしいと思えばこれも矢も楯も堪らぬほどに憎んで憎んで憎み通して呪いつくさねば承知出来ない女だった。火と氷——その二つしかお柳の心には同居していない。

いじらしいと思い、可愛いと思っていたお絹に、疑られていたと知ったお柳は、お絹の清浄無垢なのが今は憎悪の対象として置かれたのだった。尋常のことではその心は癒えないのだ。

今、お柳がお絹を見つめる目は氷であった。

「それとも、狒々野郎を呼び入れて面白い目を見せようか」

お柳は、もう衣桁の扱帯を手につかんでいる。そしてうなだれて自分の言葉にふるえて両手を背に廻したお絹を冷たく見つめた。

お柳は、お絹の両手を背中で括り縛った。

そして、お絹の膝に膝を乗り上げるようにお絹の横に片膝立ちに坐った。

「フン、綺麗な肌をしている。男知らずの肌だと威張りたいんだろう」

「あッ」

お絹はお柳の言葉で顔を上げた。途端に、ピシリ！と、裸の膝を煙管で強く打据えられていた。

（うっ！）

お絹は、そのままの姿勢でその痛さに堪えた。

「音をおあげでない」

ピシリ、ピシリ！

お柳の振るう長煙管は、つづけさまにお絹の肩に鳴って、ポキリと折れた。

お絹は突っ伏してしまった。

お柳は折れた煙管を畳に投げ捨てると、

「たあいな」

と、ひとり言のようにそういった。

## 消えたお絹

「顔をおあげよ、話が見えやあしない」

「いえ、お許しを……」

「もう打ちやアしない。煙管は折れちゃったんだ」

お柳は、突っ伏しているお絹の背中を見ていった。そして、この娘の背中には見事な蛇身の刺青があるのを思い出した。

「お前さん、じっとしておいでよ」

お柳は立って、ふるえているお絹の浴衣の襟をつかんだ。

お絹が、あっと叫んだときには、お柳の手はぐいと浴衣を腰のあたりまで押し脱がしてしまっていた。

「フン、この蛇が百万両を呑んでるのかい」

お絹の肌の蛇身は、お絹が苦しそうに呼吸するたびに、生きてるように息づきながら、今にもぞろりとそこから這い出しそうであった。

「あッ」



叫んだのはお絹だった。

そのお絹を、屹と背中にかばって振り向いたお柳は、廊下に立った男の影を睨んだ。

弦之丞の手下の岡っ引の音吉だった。この屋敷につめていて、お柳の部屋の異様な雰囲気を感じて覗いたものらしい。

「何だい、狒々野郎は消えておしまい」

お柳は音吉の音から浴せた。

「へへへへ、あんまり仲がいいもんだから、つい覗いちまって」

「馬鹿！」

お柳は、ついさっき、お絹の肩を打った折れた煙管を拾うとパツとその音吉に投げつけた。

音吉はひょいとそれを躲して、へへへと下卑た笑い声を残して姿を消した。

「フン、下司野郎！」

お柳の口から、そんな言葉が追いかける。

「お柳」

去っていく音吉の足音と入れ違いに、別な足音がして、声から先に姿を現したのは弦之丞だった。

お絹はすでに後手の縛し目を解かれて浴衣を着ていた。が、一目で、何事が行われていたのか見て取ったらしい弦之丞だ。

「お柳、長崎屋から奪い去られた刺青番付はわからぬが、唐津屋はその秘密を知ったらしい。この頃江戸で刺青をしている娘が攫われたのは唐津屋の仕業とわかった」

「で、どうする気だいお前さんは」

「ウム、相手が唐津屋とするとちと敵に廻しては工合が悪いな。とに

かく悪智慧の働く男だ。俺が鳥居甲斐守の手の内だとわかるだろうかな」

ジロリと、お絹を見詰めて弦之丞はそういった。

「まさか、お前さんが手を引くわけはないだろう」

「もちろんだ、こっちはこの娘がつかまえてあるからな」

「つかまえてあるか、しかし、生きてるんだ、逃げ出すかわかりやアしないさ」

「フン、逃げられないな。誰かが逃がせば別だが」

弦之丞は、そういってお柳の顔を見る。

お柳は折れた煙管の、それも片っぽは音吉に投げつけてしまったから吸口の残ったほうを手にとってあそんでいる。

お絹だけが無言でうなだれていた。

「どれ、雨月流の兵法を練るとするか」

そういって、もう弦之丞は廊下へ立っている。

それを見て

（そうだ！）

と、お柳は老えていた。

（なんだ、あたしってことがこんなことに今迄気がつかないなんて）

お柳は、お絹と一緒にこの屋敷を出ようとするから見張りに邪魔されるのだと思ったのだ。

（風太郎に頼めばいい）

そう思いついたのだ。

しかし、お柳は、風太郎のことを思い出すまいと思いついたのだった。風太郎のことを思い出すのは苦痛なのである。が、弦之丞の言葉から推すと、事は急を要するのだ。



(風太郎ならいくら見張りがついているからってこの娘を何とかこの屋敷から連れ出すだろう)

そう思うと、お柳は、ほっとする。風太郎に会いに行く口実が見つかったのが嬉しいのだった。

(惚れてるんだ。あたしは……)

「お絹さん」

お柳はお絹に呼びかけた。

その言葉の調子は、ヘンに優しく響いた。

「はい」

「出掛けるんだ、手伝っておくれ」

お絹を長崎屋へ戻すことは女の意地なのだ。

お柳はお絹に手伝わせて着更えると、裏口から道灌山下の弦之丞の屋敷から出た。

「お柳さんは出掛けましたが、といつても一人ですがね」

弦之丞の、臥転がっている姿を驚いたように見て、入って来た音吉はそう告げた。

「そうか」

くると、弦之丞はそれで起き上っている。

「駕籠を呼んでくれ」

「へエ、お出掛けで」

「ウム」

弦之丞は伸びをしている。

音吉は廊下へ出ていった。

「さて、唐津屋か」

弦之丞は伸びをしながらひとり言をいった。

長崎屋のかくし金では、一步も二歩も出遅れたのを承知している弦之丞だった。さてどう出る。と、弦之丞は先程から臥転んで老えていたのだ。

そして老えていたのは、お絹を唐津屋へ連れ込むことだった。唐津屋もお絹の攫い出しを画したと情報が入っている。お絹の攫い出しには唐津屋に一步先んじた弦之丞だ。

(刺青小町番付は唐津屋の手には入ってないことは確かだ)

弦之丞は、刺青小町番付の半分が、十日程前長崎屋からお絹を攫い出したときに己れに十方手裏剣を投げた千世の手に入っていたのを知らないのだ。それに、もう半分をお柳が蜘蛛七の懷から拘り取り、この屋敷に持ち帰ったのも知らなかった。

お柳が何もいわないからだ。そして今はお柳の昔の思い人である怪盗風太郎の手に渡ったことは更に知らぬ。

(誰だ、いったいその刺青番付を取り上げた奴は——)

弦之丞は、それが皆目わからないとすれば唐津屋に当る他はないと思うのだ。

(まさか遠山左衛門尉の手に入ったんじゃないかな?)

名奉行として近頃めきめきと売出した北町奉行の遠山左衛門尉の手に長崎屋先代が遺した刺青小町番付が渡ったとしたら厄介だと、それでも弦之丞は屈托ない顔でお柳の部屋に入っていた。

お絹は、弦之丞の姿を見るとぎくりとからだを固くした。

「おい、退屈だろう」

弦之丞はお柳と同じことをいう。

「いえ」

と、お絹もお柳に答えたと同じような返事をした。



「駕籠が来たら出掛けるぜ。支度をするがいい」

「はい」

「お鳥を呼ぼう」

もう弦之丞は部屋から出ている。

入れ違いに屋敷で使っている四十を過ぎたお鳥が入って来た。

「さ、お支度のお手伝いをしましょう」

でもお絹は長襦袢姿のまま弦之丞に長崎屋から攫われて来たのだった。そういわれても着る着物はなかった。今着ている浴衣もお柳のものを借りているのだった。

お鳥はその簞笥に手をかけている。そしてお鳥は迷った。

(お内儀さんがあとで叱らないかしら)

が、弦之丞にいいつけられたのだ。お柳の気嫌を損じるのも恐いが、弦之丞を怒らせるのはなお恐い。

「お召更えなさいまし」

お鳥は簞笥からお柳の一揃いを出して畳に置くといった。どうせ一度も袖を通さない着物がいっぱいあるのだ。一枚位この娘に着せたってわかりやあしない。そう思ってお鳥は始めてお絹の顔をしみじみと見るのだ。

お絹が弦之丞に攫って来られて以来、ほんとうにお鳥はお絹の顔をちゃんと見たことはない。お柳がお前なんか台所へ引っこんでおいでといったからだ。

お鳥はお絹を見て、なんて美しい娘さんなのだろうと思った。年寄り、若い娘にすぐ同情するか反撥するかどっちかである。お鳥は同情した。そうしてそれからお絹がお柳の着物を着るのを手伝った。

「出来たか」

弦之丞がその着替えの部屋を覗く。

「はい」

答えたお絹は、お鳥に帯を締めてもらっている。

「旦那、駕籠が来ましたが」

「よし、すぐいく」

弦之丞は、知らせに来た音吉がお絹の支度した美しい姿に見とれているのに振向きもしないで返事をした。

お鳥はゆっくりとお絹の帯を結び終った。

「さあ、出かける」

弦之丞は先に立って玄関へ出ていった。

お絹はそのあとを俯つ向き加減についていく。

お鳥はそれを見送って、

(何処へつれていかれるのか……美しい娘さんなのに……どうぞあの娘さんの身の上に辛いことがありませんように……)

お鳥は自分が着更えさせてやったお絹を何か長年仕えたもののように、そう心の中で祈っているのだった。

お絹を乗せた駕籠は、弦之丞と音吉に付添われて、庭から塀のくぐり戸にぶつかりながら往来へ担ぎ出された。お絹は庭先へ廻された駕籠へ乗せられたのだった。

お鳥はお柳の部屋で、お絹の脱ぎ捨てたまだお絹の肌のぬくもりを持った浴衣を畳んでいた。

その耳に、廊下を踏んでくる足音がして、

「お鳥、お絹さんは？」

お柳である。

「はい、一足違いで——お会いになりませんでしたか？」



「見ない、どうしたのさ？」

「はい、旦那様が何処かへつれていくと、つい今しがた着更えをお鳥が手伝って出してあげたところでございます」

「馬鹿——」

「はい」

とお鳥はからだをすくめる。

しかし、お柳は、馬鹿とお鳥にいった様子ではない。

「何処へつれていったんだい」

「さあ、いっこうにお鳥はしり

ません」

「フン、気がきかない」

「もうしわけございません」

お鳥は逆らわない。逆らって

お柳を怒らしたら大変なのを知

っているからだ。

「ドジだねえ」

「はい」

「いいよ、台所へいっておくれ

ドジなのはあたしなのさ。こん

なことがあるとちっとも気がつ

かなかったんだ」

「はい」

お鳥は早々にお柳の前を退っ

ていった。

お柳は坐りもしないで考えて



いる。風太郎に会って、お絹をこの屋敷からつれ出してもらおうと思  
ったのだ。それが途中で昔の仲間会った。風太郎ともよく知ってい  
る男なのだ。その男にお柳は風太郎への言づけを頼んだのだ。そして  
ふと残して来たお絹のことが気になって風太郎の隠れ家へも行かない  
でお柳は駕籠を拾って戻って来たのだった。そうしたらお絹は消えて  
いた。もう風太郎への言づけは何もならない。

「お鳥——」

YAMBA



「唐津屋は居るか」

弦之丞は高圧的だ。

「へい、誰方様でございましょう」

「雨月弦之丞と伝えてもらおうか」

「へい、少々お待ちを」

いくばくもなく弦之丞の前に唐津屋は白髪頭を見せていた。

「これはどうもわざわざ御足労願いまして、私がお尋ねの唐津屋でございます。ご用と仰せ付け下さいますとこちらから何時でもお伺い申しますよ、雨月様」

唐津屋はさすが愛想がいい。江戸の分限者で五本の指に数えられようという質両替商の唐津屋だ。土井、真田という老中に取り入って小判の改鋳を一手に握ろうと画策している怪商なのだ。それに弦之丞の身分を知っている態度だった。で、

「まさか俺が来るのを待っていたのではあるまいな」

「まあ、いずれにしても近ぢかの内にお目にかかりたいものだと思つて居りました」

どうやら、長崎屋のかくし金の件で来たのを読んでいるらしいと、弦之丞は、唐津屋の顔をぐいと睨んだが、それに動ずる唐津屋ではないのだ、弦之丞はニヤリと破顔すると、

「それは恰度よい折に参った。上げて貰おうか」

「はい、どうぞお上り下さいまし」

立って、弦之丞に背中を見せる迄、唐津屋はとうとう店先に据えられた駕籠をそれと見ようとしなかった。

(フン、成程怪物らしい)

と弦之丞は、

「音吉、駕籠を番しておれ」

そう言い残して唐津屋につづいて上り込んだ。

店を抜けて長い廊下を渡っていくと、途中に手燭を持って手をついていた女中が先に立って案内した。

「で、雨月様、この唐津屋をわざわざお訪ね下さいましたご用と仰言るのは何でございましょうな」

唐津屋は向い合つて坐つた弦之丞にいい出した。

「大体の想像はついてるだろう」

「長崎屋のかくし金の一件でございましょうな」

「ウム、手土産は持参したつもりだ」

「成程、それで雨月様は私に何をせよと仰言るので」

「江戸で刺青をしている娘を総浚いにしたのはおぬしだろうな」

「さあ、総浚いかどうか——いや、かんじんの娘を一人浚い残しましたよ」

じつと、唐津屋は弦之丞の顔を見凝めた。

「ム、で長崎屋が書遣したという刺青小町番付はおぬし手に入れたか」

「それがですよ。私は蜘蛛七という両国の掛小屋で軽業をやっていた男に頼んで見事に失敗しました」

「俺ではないぞ」

「ハハハハ、左様でございしますか」

そこへ先刻案内した女中が酒を運んで来た。それで弦之丞もハハハと笑うのだった。

「まあ一つおあけ下さいまし」

「ウム、もらおう」

弦之丞はそのまま坐つた女中に酌をさせて美味そうに盃をあける。